仙台市文化財調査報告書第266集

国分寺東遺跡他

発掘調査報告書

平成15年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第266集

国分寺東遺跡他

発掘調査報告書

平成15年3月

仙台市教育委員会

序　文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なるご協力を賜り、まことに感謝にたえません。仙台市内には、現在約800ヶ所の遺跡が確認されております。当教育委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、貴重な文化財を保存し、後世に伝えるように努めているところであります。

本報告書には、開発に先立ち、平成13年度に発掘調査を実施した国分寺東遺跡と、平成14年度に発掘調査をした八木山緑町遺跡、庚申前窯跡、下ノ内遺跡、山田条里遺跡、富沢遺跡、南小泉遺跡、大野田古墳群、高田Ａ遺跡、養種園遺跡の調査成果を収録しております。国分寺東遺跡は、聖和学園高等学校の校舎移転計画によって新に発見された遺跡ですが、調査によって、これまで知られていなかった陸奥国分寺跡周辺の実態を知る上で貴重な資料を得ることが出来ました。

本書に掲載した調査成果が、地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のためお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行まで多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。今後とも文化財保護行政につきましてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年３月

仙台市教育委員会

教育長　阿部　芳吉

例　言

1　本書は、仙台市教育委員会による国分寺東遺跡、八木山緑町遺跡、庚申前窯跡、下ノ内遺跡、山田条里遺跡第７次、富沢遺跡第122・123・124・125次、南小泉遺跡第37・38・39次、大野田古墳群、高田Ａ遺跡、養種園遺跡の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査報告書のうち、富沢遺跡第123次・南小泉遺跡第39次・大野田古墳群・高田Ａ遺跡・養種園遺跡の調査は個人住宅建設に伴う事前調査として実施したものであり、他は民間の開発事業に伴って行なわれた発掘調査である。

3　民間の開発事業に伴い実施された発掘調査及びその報告書の刊行にあたっては、地権者である学校法人聖和学園・学校法人仙台こひつじ学園・庄子末吉氏・㈱ヨークベニマル・㈲アビテール嶋田・菅井幸子氏・㈱住友不動産・㈲ヤマニの各位に絶大なご理解とご協力をいただいた。また、個人住宅建設に伴う調査にあたっても、建築主の多大なる理解をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

4　本書の作成は、仙台市教育委員会文化財課調査係が行い、次のとおり分担した。

国分寺東遺跡	豊村幸宏	富沢遺跡第122次	工藤哲司	南小泉遺跡第38次	工藤哲司
八木山緑町遺跡（第３次）	佐藤　淳	富沢遺跡第123次	豊村幸宏	南小泉遺跡第39次	豊村幸宏
庚申前窯跡	工藤哲司	富沢遺跡第124次	加藤徳明	大野田古墳群	工藤哲司
下ノ内遺跡	加藤徳明	富沢遺跡第125次	豊村幸宏	高田Ａ遺跡	豊村幸宏
山田条里遺跡第７次	大倉秀之	南小泉遺跡第37次	渡部弘美	養種園遺跡	豊村幸宏

5　本調査にかかわる資料の全ては、仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1　調査地点は地図中に★または■の印で示した。

2　本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠している。

3　本書に係わる遺構の実測は、平面座標系Xを基準点としたものと、任意の点を基準点としたものがある。任意の基準点からの測量では、周辺の境界杭等を計測することにより調査区の位置を定めた。

4　平面座標系の座標値の単位はkmである。

5　標高値は、海抜高度を示している。

6　遺構名の略号として、次の略号を使用した。

SA：柱列・塀跡　　SB：掘立柱建物跡　　SD：溝跡　　SE：井戸跡

SI：竪穴住居跡及び竪穴遺構　　SK：土坑跡　　P：ピット　　SX：その他の遺構

7　報告書中の全体図および遺構平面図においては、撹乱と新しい重複遺構は、省略または簡略化している。

8　竪穴住居跡床面の濃いスクリーントーン（網）は焼け面を示している。

9　柱穴内のスクリーントーン（網）は柱痕跡の位置を示している。

10　遺物の登録には、以下の分類と略号を使用した。

A：縄文土器　　B：弥生土器　　C：土師器（非ロクロ）　　D：土師器（ロクロ）

E：須恵器　　F：丸瓦　　G：平瓦　　I：陶器・土師質土器

J：磁器　　K：石器・石製品　　L：木製品類　　N：金属製品

P：土製品

11　土師器実測図内面のスクリーントーン（網）は黒色処理されていることを示している。

12　礫石器実測図の細かなスクリーントーン（網）は磨面を示している。

13　遺物観察表の（　）内の法量は、残存値を示している。

14　本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、「十和田ａ（To－a）」と考えられ、十和田ａの降下年代は、現在西暦915年初夏とされている。（町田：1981・1996）

15　「擬似畦畔Ｂ」という用語は、水田の畦畔直下の自然堆積層において認められる畦畔状の高まりをさす（斎野ほか1987：「富沢―富沢遺跡第15次発掘調査報告書―」仙台市文化財調査報告書第98集）が、本書では自然堆積層の高まりだけでなく、畦畔直下における下層の水田耕作土層に認められる畦畔状の高まりについてもこの用語を用いた。

本文目次

序　文
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　国分寺東遺跡発掘調査報告書

1　調査要項 …… 1
2　遺跡の位置と環境 …… 1
1）地理的環境 …… 1　2）歴史的環境 …… 1
3　調査に至る経過と調査方法 …… 4
4　基本層序 …… 4
1）Ⅰ区の基本層序 …… 4　2）Ⅱ区の基本層序 …… 6
5　Ⅰ区の発見遺構と出土遺物 …… 7
1）柱列 …… 7　4）井戸跡 …… 8
2）掘立柱建物跡 …… 7　5）土坑 …… 10
3）溝跡 …… 8　6）ピット …… 17
6　Ⅱ区の発見遺構と出土遺物 …… 17
1）竪穴住居跡 …… 17　4）ピット …… 31
2）溝跡 …… 28　5）その他の出土遺物 …… 31
3）土坑 …… 28
7　まとめと考察 …… 33
1）SI 1・2 竪穴住居跡出土土器群について … 33　3）まとめ …… 35
2）遺構の年代について …… 34

Ⅱ　八木山緑町遺跡（第３次）発掘調査報告書

1　調査要項 …… 47
2　遺跡の位置と環境 …… 47
3　調査に至る経緯と調査方法 …… 48
4　基本層序 …… 49
5　発見遺構と出土遺物 …… 50
1）竪穴住居跡 …… 50　4）基本層ほかの出土遺物 …… 56
2）土坑 …… 54　5）下層調査 …… 62
3）ピット …… 55
6　まとめ …… 63

Ⅲ　庚申前窯跡発掘調査報告書

1　調査要項 …… 71
2　遺跡の位置と環境 …… 71
3　調査に至る経過と調査方法 …… 72
4　基本層序 …… 72
5　発見遺構と出土遺物 …… 72
1）1トレンチ …… 72
2）2トレンチ …… 75
3）3・4トレンチ …… 75
6　まとめ …… 75

Ⅳ　下ノ内遺跡発掘調査報告書

1　調査要項 …… 79
2　遺跡の位置と環境 …… 79
3　調査に至る経過と調査方法 …… 80
4　基本層序 …… 81
5 a 層発見遺構と出土遺物 …… 84
1）掘立柱建物跡 …… 84
2）溝跡 …… 84
3）ピット …… 86
6　5 b 層発見遺構と出土遺物 …… 86
1）掘立柱建物跡 …… 86
2）溝跡 …… 88
3）土坑 …… 90
4）小溝状遺構群 …… 91
5）ピット …… 93
7　深掘り区 …… 93
8　基本層中の出土遺物 …… 93
9　まとめ …… 93

Ⅴ　山田条里遺跡（第7次）発掘調査報告書

1　調査要項 …… 107
2　遺跡の位置と環境 …… 107
3　調査に至る経過と調査方法 …… 107
4　基本層序 …… 109
1）1区の基本層序 …… 109
2）2区の基本層序 …… 110
5　1区の発見遺構と出土遺物 …… 111
1）3層の調査 …… 111
2）4層水田跡 …… 111
3）土坑 …… 113
6　2区の発見遺構と出土遺物 …… 113
1）3～5層の調査 …… 113
2）6・7層水田跡 …… 113
3）土坑 …… 113
7　まとめ …… 118

Ⅵ　富沢遺跡（第122次）発掘調査報告書

1　調査要項 …… 129
2　遺跡の位置と環境 …… 129
3　調査に至る経過と調査方法 …… 129
4　基本層序 …… 129
5　発見遺構と出土遺物 …… 131
6　まとめ …… 132
7　富沢遺跡第122次調査におけるプラント・オパール分析（株式会社　古環境研究所） …… 137
1）はじめに …… 137
2）試料 …… 137
3）分析法 …… 137
4）結果 …… 137
5）富沢遺跡第122次調査における稲作跡 …… 139

Ⅶ　富沢遺跡（第123次）発掘調査報告書

1　調査要項 …… 141
2　遺跡の位置と環境 …… 141
3　調査に至る経過と調査方法 …… 141
4　基本層序 …… 142
5　まとめ …… 143
1）水田耕作土 …… 143
2）まとめ …… 143

Ⅷ　富沢遺跡（第124次）発掘調査報告書

1　調査要項 …… 145
2　遺跡の位置と環境 …… 145
3　調査に至る経過と調査方法 …… 145
4　基本層序 …… 145
5　まとめ …… 147

Ⅸ　富沢遺跡（第125次）発掘調査報告書

1　調査要項 …… 149
2　遺跡の位置と環境 …… 149
3　調査に至る経過と調査方法 …… 149
4　基本層序 …… 150
5　発見遺構と出土遺物 …… 150
水田跡 …… 150
6　まとめ …… 151
1）水田耕作土 …… 151
2）まとめ …… 152

X　南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書

1　調査要項 …… 157
2　遺跡の位置と環境 …… 157
3　調査方法 …… 157
4　発見遺構と出土遺物 …… 157
1）土坑 …… 159
2）溝跡 …… 160
3）円形周溝遺構 …… 160
4）竪穴住居跡 …… 162
5）柱穴・ピット …… 168
6）出土遺物について …… 168
5　まとめ …… 168

XI　南小泉遺跡（第38次）発掘調査報告書

1　調査要項 …… 173
2　遺跡の位置と環境 …… 173
3　調査に至る経過と調査方法 …… 174
4　基本層序 …… 175
5　発見遺構と出土遺物 …… 176
1）各区の概要 …… 176
2）溝跡 …… 176
3）竪穴住居跡 …… 176
4）その他の遺構 …… 186
6　まとめ …… 187

XII　南小泉遺跡（第39次）発掘調査報告書

1　調査要項 …… 197
2　遺跡の位置と環境 …… 197
3　調査に至る経過と調査方法 …… 197
4　基本層序 …… 197
5　発見遺構と出土遺物 …… 198
1）溝跡 …… 198
2）井戸跡 …… 198
3）土坑 …… 199
6　まとめ …… 200

XIII　大野田古墳群発掘調査報告書

1　調査要項 …… 203
2　遺跡の位置と環境 …… 203
3　基本層序 …… 204
4　調査に至る経過と調査方法 …… 205
5　発見遺構と出土遺物 …… 205
1）掘立柱建物跡 …… 205
2）溝跡 …… 205
3）土坑 …… 206
4）その他の遺構 …… 207
5）下層遺構の状況 …… 207
6　まとめ …… 207

XIV　高田A遺跡発掘調査報告書

1　調査要項 …… 213
2　遺跡の位置と環境 …… 213
3　調査に至る経過と調査方法 …… 213
4　基本層序 …… 214
5　発見遺構と出土遺物 …… 214
1）溝跡 …… 214　3）ピット …… 216
2）土坑 …… 215　4）その他の出土遺物 …… 216
6　まとめ …… 216

XV　養種園遺跡発掘調査報告書

1　調査要項 …… 219
2　遺跡の位置と環境 …… 219
3　調査に至る経過と調査方法 …… 219
4　基本層序 …… 220
5　発見遺構と出土遺物 …… 220
1）竪穴住居跡 …… 220　2）溝跡 …… 222
6　まとめ …… 223

図目次

Ⅰ　国分寺東遺跡発掘調査報告書

第１図　国分寺東遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第２図　調査地点位置図 …… 5
第３図　調査区位置図 …… 5
第４図　基本層序 …… 6
第５図　Ⅰ区SA１柱列 …… 7
第６図　Ⅰ区遺構配置図 …… 8
第７図　Ⅰ区SB１掘立柱建物跡 …… 9
第８図　Ⅰ区SB２掘立柱建物跡 …… 9
第９図　Ⅰ区SD１溝跡 …… 10
第10図　Ⅰ区SE１井戸跡 …… 10
第11図　Ⅰ区SE１井戸跡出土遺物 …… 11
第12図　Ⅰ区土坑（１） …… 13
第13図　Ⅰ区土坑（２） …… 15
第14図　Ⅰ区土坑・ピット出土遺物 …… 16
第15図　Ⅱ区遺構配置図 …… 18
第16図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡（１） …… 19
第17図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡（２） …… 20
第18図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡カマド …… 21
第19図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡出土遺物（１） …… 22
第20図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡出土遺物（２） …… 23
第21図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡出土遺物（３） …… 24
第22図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡出土遺物（４） …… 25
第23図　Ⅱ区SI２竪穴住居跡 …… 26
第24図　Ⅱ区SI２竪穴住居跡出土遺物 …… 27
第25図　Ⅱ区SD１溝跡 …… 28
第26図　Ⅱ区土坑（１） …… 30
第27図　Ⅱ区土坑（２） …… 31
第28図　Ⅱ区土坑・ピット出土遺物 …… 32
第29図　その他の出土遺物 …… 33

Ⅱ　八木山緑町遺跡発掘調査報告書

第30図　周辺の遺跡 …… 47
第31図　遺跡の位置 …… 48
第32図　調査区の位置 …… 49
第33図　基本層序 …… 50
第34図　遺構の配置 …… 51
第35図　１号竪穴住居跡 …… 52
第36図　１号竪穴住居跡出土遺物 …… 53
第37図　土坑 …… 54
第38図　ピット出土遺物 …… 56
第39図　基本層ほかの出土遺物（１） …… 57
第40図　基本層ほかの出土遺物（２） …… 58
第41図　基本層ほかの出土遺物（３） …… 59
第42図　基本層ほかの出土遺物（４） …… 60
第43図　基本層ほかの出土遺物（５） …… 61
第44図　基本層ほかの出土遺物（６） …… 62

Ⅲ　庚申前窯跡発掘調査報告書

第45図　庚申前遺跡と周辺の遺跡 …… 71
第46図　開発区域と調査区配置 …… 72
第47図　遺構配置図 …… 72
第48図　遺構実測図 …… 73
第49図　出土遺物実測図 …… 74

Ⅳ　下ノ内遺跡発掘調査報告書

第50図　調査地点の位置と周辺の遺跡 …… 79
第51図　調査区配置図 …… 80
第52図　５ａ層検出遺構 …… 81
第53図　調査区土層断面図 …… 82
第54図　基本層出土遺物 …… 83
第55図　５ａ層検出SB－１掘立柱建物跡 …… 85
第56図　５ａ層検出溝跡断面図 …… 86
第57図　遺構出土遺物 …… 87

第58図　５ｂ層検出遺構…… 88
第59図　５ｂ層検出SB－２・３掘立柱建物跡…… 89
第60図　５ｂ層検出溝跡断面図…… 90
第61図　５ｂ層検出土坑実測図…… 91
第62図　５ｂ層検出小溝状遺構断面図…… 91
第63図　小溝状遺構群方向別分布図…… 92
第64図　深堀区平面図…… 94
第65図　深堀区西壁土層断面図…… 94

Ⅴ　山田条里遺跡（第７次発掘）調査報告書

第66図　山田条里遺跡の位置と周辺の遺跡……108
第67図　調査区位置図……109
第68図　調査区配置図……110
第69図　１区東壁土層断面図……112
第70図　１区４層水田跡……113
第71図　SK－３土坑実測図……113
第72図　２区北壁土層断面図……114
第73図　６層水田跡畦畔断面図……115
第74図　２区６層・７層水田跡……115
第75図　７層水田跡畦畔断面図……116
第76図　SK－１・２土坑実測図……117
第77図　出土遺物実測図……118

Ⅵ　富沢遺跡（第122次）発掘調査報告書

第78図　富沢遺跡の調査地点と周辺の遺跡……130
第79図　第122調査区配置図……130
第80図　第122調査区実測図……131
第81図　第122調査区東壁断面図……132

Ⅶ　富沢遺跡（第123次）発掘調査報告書

第82図　調査区配置図……141
第83図　調査区北壁断面図……142

Ⅷ　富沢遺跡（第124次）発掘調査報告書

第84図　調査区配置図……145
第85図　調査区南壁・西壁断面図……146

Ⅸ　富沢遺跡（第125次）発掘調査報告書

第86図　調査区配置図……149
第87図　調査区北壁・西壁断面図……150
第88図　６層水田跡……151
第89図　９ａ層擬似畦畔……151
第90図　９ａ層出土遺物……152

Ⅹ　南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書

第91図　調査地点と調査区配置……157
第92図　検出遺構全体図……158
第93図　土坑……159
第94図　SK２土坑出土遺物……160
第95図　溝跡断面図……160
第96図　溝跡・円形周溝遺構平面図……161
第97図　円形周溝遺構断面図……162
第98図　SI１住居跡……163
第99図　SI１住居跡出土遺物１……164
第100図　SI１住居跡出土遺物２……165
第101図　SI２住居跡……166
第102図　SI２住居跡出土遺物……167
第103図　SA１①掘立柱……168

XI　南小泉遺跡（第38次）発掘調査報告書

第104図　第38次調査区の位置……173
第105図　第38次調査区の配置と周辺の調査区…174
第106図　遺構配置図……174
第107図　溝跡実測図……175
第108図　溝跡出土遺物……176
第109図　SI－1竪穴住居跡実測図……177
第110図　SI－1竪穴住居跡出土遺物……177
第111図　SI－2竪穴住居跡実測図……178
第112図　SI－2竪穴住居跡出土遺物……179
第113図　SI－3竪穴住居跡実測図……180
第114図　SI－3竪穴住居跡出土遺物1……181
第115図　SI－3竪穴住居跡出土遺物2……182
第116図　SI－3竪穴住居跡出土遺物3……183
第117図　SI－4竪穴住居跡・SX－1遺構実測図…185
第118図　SI－4竪穴住居跡・SX－1遺構出土遺物…186

XII　南小泉遺跡（第39次）発掘調査報告書

第119図　調査地点と周辺の地形……197
第120図　調査区配置図……198
第121図　遺構配置図……199
第122図　調査区北壁・遺構断面図……199
第123図　出土遺物……200

XIII　大野田古墳群発掘調査報告書

第124図　大野田古墳群と周辺の遺跡……203
第125図　遺構配置図……204
第126図　掘立柱建物跡実測図……204
第127図　基本層断面及び遺構実測図……206
第128図　Ⅲ層出土遺物……207

XIV　高田A遺跡発掘調査報告書

第129図　調査地点と周辺の地形……213
第130図　調査区配置図……214
第131図　遺構配置図……214
第132図　調査区西壁・北壁・遺構断面図……215
第133図　出土遺物……215

XV　養種園遺跡発掘調査報告書

第134図　調査地点と周辺の地形……219
第135図　調査区配置図……220
第136図　SI1竪穴住居跡・SD1溝跡実測図…221
第137図　出土遺物……222

写真目次

Ⅰ　国分寺東遺跡発掘調査報告書

図版１　国分寺東遺跡周辺の航空写真 …… 36
図版２　Ⅰ区調査状況・柱列・井戸跡・土坑 …… 37
図版３　Ⅰ区調査状況・土坑 …… 38
図版４　Ⅰ区調査状況・Ⅱ区調査状況・竪穴住居跡 …… 39
図版５　Ⅱ区調査状況・竪穴住居跡・土坑 …… 40
図版６　Ⅱ区調査状況・土坑 …… 41
図版７　出土遺物１ …… 42
図版８　出土遺物２ …… 43
図版９　出土遺物３ …… 44
図版10　出土遺物４ …… 45

Ⅱ　八木山緑町遺跡発掘調査報告書

図版11　調査区・１号住居跡 …… 64
図版12　１号住居跡・土坑 …… 65
図版13　土坑・下層調査 …… 66
図版14　縄文土器 …… 67
図版15　縄文土器・弥生土器・土製品・剥片石器 … 68
図版16　剥片石器 …… 69
図版17　礫石器・石製品 …… 70

Ⅲ　庚申前窯跡発掘調査報告書

図版18　１・２トレンチの状況と溝跡 …… 76
図版19　２トレンチの遺構 …… 77
図版20　２・３・４トレンチと出土遺物 …… 78

Ⅳ　下ノ内遺跡調発掘査報告書

図版21　５ａ層全景 …… 96
図版22　５ａ層検出遺構 …… 97
図版23　５ａ層SD－３と５ｂ層検出遺構 …… 98
図版24　５ｂ層検出の溝跡と土坑 …… 99
図版25　小溝状遺構群の検出と調査状況 …… 100
図版26　小溝状遺構群の状況 …… 101
図版27　調査区の土層断面１ …… 102
図版28　調査区の土層断面２ …… 103
図版29　深掘り調査区の状況 …… 104
図版30　出土遺物 …… 105

Ⅴ　山田条里遺跡（第７次）発掘調査報告書

図版31　１区４層水田跡 …… 120
図版32　１区調査状況 …… 121
図版33　１区土坑断面・土層断面 …… 122
図版34　２区の状況と土坑断面 …… 123
図版35　２区６層・７a層調査状況 …… 124
図版36　２区７ｂ層調査状況 …… 125
図版37　２区７ｂ層～９層調査状況 …… 126
図版38　２区土層断面・出土遺物 …… 127

Ⅵ　富沢遺跡（第122次）発掘調査報告書

図版39　調査区全景と４～６層調査状況 …… 134
図版40　６～９層調査状況 …… 135
図版41　10～12層調査状況 …… 136

Ⅶ　富沢遺跡（第123次）発掘調査報告書

図版42　調査状況・土層断面 …… 144

Ⅷ　富沢遺跡（第124次）発掘調査報告書

図版43　調査状況・土層断面 …… 148

Ⅸ　富沢遺跡（第125次）発掘調査報告書

図版44　調査状況・土層断面 …… 154
図版45　土層断面・出土遺物 …… 155

Ⅹ　南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書

図版46　検出遺構 1 …… 169
図版47　検出遺構 2 …… 170
図版48　出土遺物 1 …… 171
図版49　出土遺物 2 …… 172

Ⅺ　南小泉遺跡（第38次）発掘調査報告書

図版50　2 区遠景・SI 1 竪穴住居跡 …… 188
図版51　SI 2 竪穴住居跡 …… 189
図版52　SI 3 竪穴住居跡 …… 190
図版53　SI 4 竪穴住居跡・SX 1 遺構 …… 191
図版54　出土遺物 1 …… 192
図版55　出土遺物 2 …… 193
図版56　出土遺物 3 …… 194
図版57　出土遺物 4 …… 195

Ⅻ　南小泉遺跡（第39次）発掘調査報告書

図版58　調査状況・溝跡・井戸跡 …… 201
図版59　土坑・出土遺物 …… 202

ⅩⅢ　大野田古墳群発掘調査報告書

図版60　大野田古墳群の状況と土層断面 …… 209
図版61　掘立柱建物跡・溝跡・土坑 …… 210
図版62　土坑・その他の遺構と出土遺物 …… 211

ⅩⅣ　高田Ａ遺跡発掘調査報告書

図版63　調査状況 …… 217
図版64　溝跡・出土遺物 …… 218

ⅩⅤ　養種園遺跡発掘調査報告書

図版65　調査状況・竪穴住居跡 …… 224
図版66　溝跡・出土遺物 …… 225

Ⅰ　国分寺東遺跡発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　国分寺東遺跡（宮城県遺跡番号01557）
調 査 地 点　　仙台市若林区木ノ下三丁目２－15他
調 査 期 間　　（試掘調査）平成13年９月10日～９月13日
　　（本調査）　平成13年12月３日～平成14年１月18日
調査対象面積　　7,965㎡
調 査 面 積　　Ⅰ区　209㎡
　　Ⅱ区　150㎡
調 査 原 因　　学校校舎建設
調 査 主 体　　仙台市教育委員会（文化財課）
担 当 職 員　　（試掘調査）調査係長　結城慎一　　主査　吉岡恭平　　教諭　豊村幸宏
　　文化財教諭　吉田和正
　　（本調査）　主査　吉岡恭平　　教諭　豊村幸宏　　文化財教諭　吉田和正・村上秀樹
調 査 協 力　　鹿島建設株式会社東北支店

2　遺跡の位置と環境

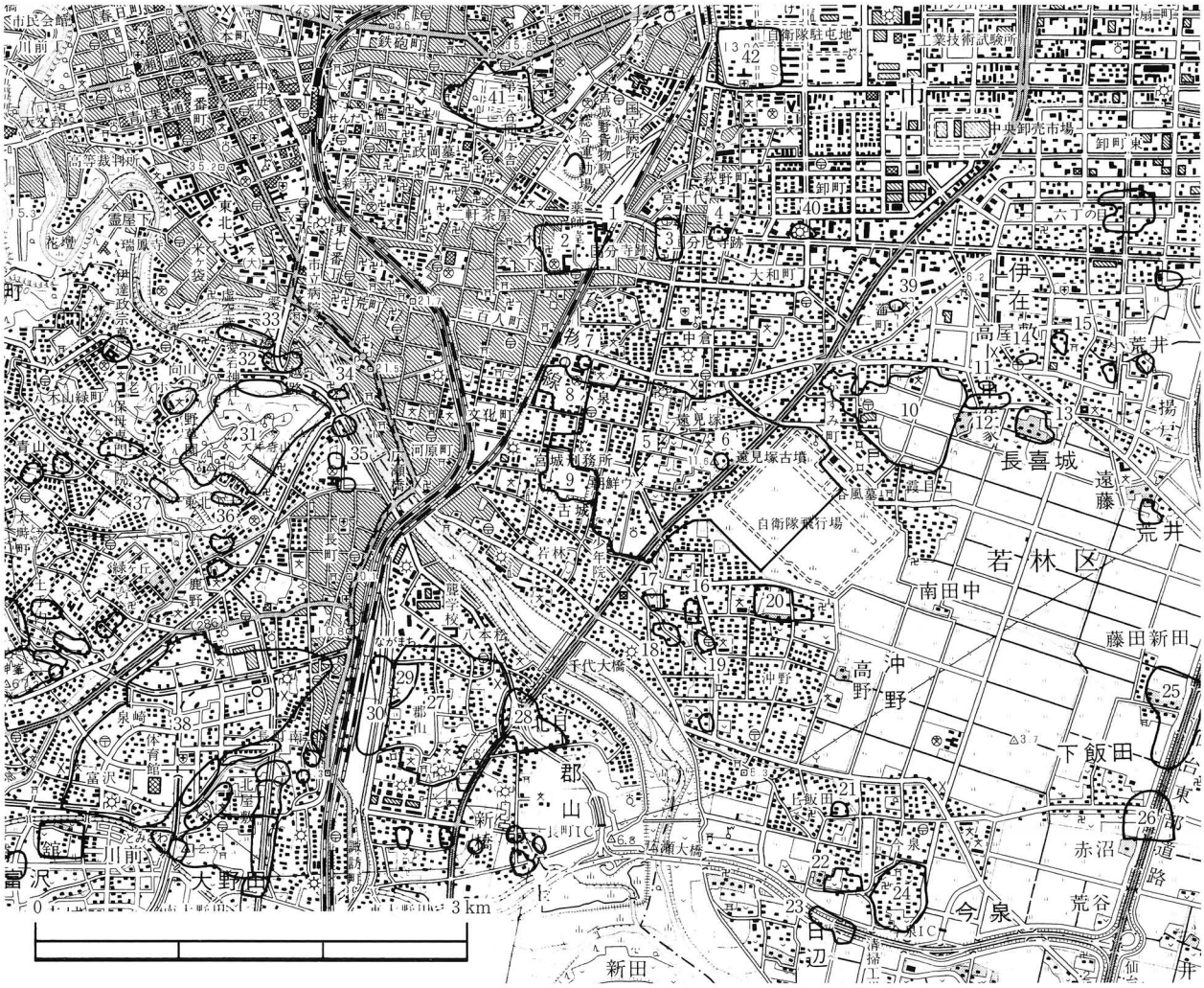
1）地理的環境

国分寺東遺跡は、JR仙台駅の東南東約２㎞付近の仙台市若林区木ノ下三丁目に所在する遺跡である。仙台市の地形は西半部と東半部とに大きく二分される。西半部は奥羽山脈から派生する七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵と、名取川の支流広瀬川がその中流域に形成した段丘地形からなる。この段丘は古期から青葉山段丘・台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と命名され、伊達政宗の仙台開府以来、現在に至るまでの仙台の中心市街地はこれらの段丘地帯に形成されている。これに対し東半部には、幅約10㎞に及ぶ「宮城野海岸平野」が、北は宮城郡七ヶ浜町から南は亘理郡山元町まで40㎞に渡って三日月形に広がっている。この沖積平野は、奥羽山脈に水源を発する七北田川・名取川・阿武隈川の運搬物によって形成され、流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道など沖積地特有の地形を形成している。また沿岸部には幅２㎞に渡って４列の浜堤が形成されている。本遺跡は、仙台市街地の東半部、「宮城野海岸平野」の標高15ｍの自然堤防上に立地している。遺跡の西方には台地（段丘）と低地（沖積地）の地形境界がみられ、この境界は「長町―利府線」と呼ばれる断層で、その主断層は沖積層下に伏在しているといわれている。平野はこのラインの東側に展開する。また、第四紀の地質層序は深沼層・荒浜層・霞ノ目層・福田町層・岩切層となっており、本遺跡は平野最奥部の最上位を占める霞ノ目層にのっている。この層は氾濫原の堆積物で、礫混じり粗粒砂層・ローム層からなっており、遺跡のいわゆる「地山層」である。現在では遺跡の北側には県道荒浜・原町線（通称産業道路）が東西に延び、東側にはJR東北本線貨物線が南北に走っている。周辺地域一帯はかつては閑静な文教地区であったが、現在は開発の進展に伴って住宅・商業地区へと変貌を遂げている。

2）歴史的環境

本遺跡の所在する広瀬川左岸には数多くの遺跡が存在する。時代別に概観すると、旧石器時代の遺跡はないが、続く縄文時代には今泉遺跡から後期前葉の土器が出土している。また南小泉遺跡でも、中期末～後期初頭、晩期の

土器が発見された。高田Ｂ遺跡では後・晩期の土器が出土し、後期の住居跡が１軒発見されている。弥生時代には南小泉遺跡、今泉遺跡、藤田新田遺跡、中在家南遺跡、高田B遺跡の各遺跡が知られ、南小泉遺跡では昭和14年から16年にかけての霞ノ目飛行場拡張工事の際に、15基以上の合口土器棺をはじめとして多量の土器・石器が見つかっている。また、中在家南遺跡では、この時代の墓壙や多数の木製品が発見され注目されている。高田B遺跡からは、遺物包含層が確認されたほか、河川跡から多量の土器・石器・木製品が出土している。古墳時代に入ると、南小泉遺跡、藤田新田遺跡、下飯田遺跡の各遺跡で集落跡が見つかっている。中在家南遺跡では、前時代に引き続いてこの時代の木製品も多数出土している。この他、砂押Ⅰ遺跡、砂押Ⅱ遺跡、今泉遺跡も集落跡の可能性がある。広瀬川左岸には幾つかの古墳が知られているが、このうち最古・最大のものは、国指定史跡の遠見塚古墳である。二段築成で主軸長110mの規模を持ち、主体部は２基の粘土郭から成る。前期末頃の年代が考えられており、被葬者は初期大和政権と関係をもったこの地域の有力首長と見なされている。中期には埴輪を有する若林城内古墳、後期には市内最大の横穴式石室を持つ法領塚古墳が見られ、これ以外にも猫塚古墳、蛇塚古墳、梅塚古墳、曽利松明神古墳、下飯田薬師堂古墳などが散見される。飛鳥時代になるとこの地も律令政府の直接的支配を受けるようになる。広瀬川対岸の郡山低地には多賀城跡以前の陸奥国府と考えられる郡山遺跡が造営される。７世紀後半頃から末頃までのⅠ期官衙と７世紀末頃から８世紀初頭にかけてのⅡ期官衙からなり、Ⅱ期官衙には寺院が付属する。南小泉遺跡や下飯田遺跡では該期の関東系土器が一定量出土していることから当地で関東からの移民による集落が営まれていた可能性が示唆されている。奈良時代には本遺跡の西側100mに奈良時代中葉頃に創建された陸奥国分寺跡が位置している。陸奥国分寺跡は、大正11年（1922）に国の史跡指定を受け、昭和30年から34年にかけて行われた学術調査で伽藍の概要が明らかとなっている。それによると規模は、東西800尺（242m）、南北800尺以上の築地塀及び掘立柱列で囲まれた大規模な寺院である。伽藍配置は、中軸線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧房が並び、中門と金堂は回廊で結ばれている。金堂と講堂の間には、東に鐘楼、西に経楼があり、金堂の東には回廊の巡る七重塔を配し、東辺築地塀には東門が取り付いている。伽藍を構成する建物は全て礎石建物である。創建期の瓦は、重弁蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦で、多賀城跡のⅡ期段階や天平産金遺跡出土の瓦と同じ特徴を有している。本遺跡の東方400mには国指定史跡陸奥国分尼寺跡が位置している。推定400尺（121m）四方と思われる区画溝の巡らされた寺域の中に推定金堂、尼房等の伽藍が配されている。推定金堂跡については、昭和39年の発掘調査により５間×４間の基壇建物跡であることが確認され、尼房については、平成13年度実施の第10次調査の結果、東西45mに及ぶ長大な掘立柱建物であることが確認された。さらに本遺跡の東方800mにある志波遺跡からも古瓦が出土しており興味深い。神柵遺跡では円面硯、鉄滓、へら書きのある須恵器が出土しており、郡・郷等の地方末端行政に関連した施設と考えられる掘立柱建物跡が検出されている。なお本遺跡の東南方には、仙台東郊条里跡が広がっているが、これは律令期に整備された表層の条里地割である。町名変更前には「二ノ坪」・「三ノ坪」・「尼坪」などの地名も残っていた。この時代の集落跡としては、南小泉遺跡、養種園遺跡、保春院前遺跡で調査がなされている。平安時代には、南小泉遺跡で、ほぼ９世紀代を中心とする集落跡が出現する。周辺には、神柵遺跡、中柵西遺跡、砂押Ⅰ遺跡、砂押Ⅱ遺跡、中在家遺跡、押口遺跡などが散在する。鎌倉時代以後は、南小泉遺跡、今泉遺跡、沖野城跡、長喜城跡、荒井館跡、谷地館跡、南目城跡、若林城跡など沖積地の城館、段丘上の国分鞭館跡、丘陵上の茂ヶ崎城跡が点在する。これ以外にも本遺跡の南方1.1kmには戦国期の遺構群と江戸時代の伊達家別荘跡で知られる養種園遺跡がある。また、江戸時代初頭に若林城が築城されると、南小泉遺跡の西半部は、同城の城下町としての性格を帯びるようになる。ただし、寛永16年に若林城が廃城となると城下町も廃止されたものと見られている。これ以後明治に至るまでは、伊達家別荘地や藩の御薬園などが造営されたほか鋳造に関わる鍛冶職工人の居住がなされていたものと考えられている。



No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	国分寺東遺跡	集落跡	自然堤防	古代・中世・近世
2	陸奥国分寺跡	寺院跡	自然堤防	古代・中世
3	陸奥国分尼寺跡	寺院跡	自然堤防	古代
4	志波遺跡	散布地	自然堤防	古代
5	南小泉遺跡	集落跡他	自然堤防	縄文～近世
6	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
7	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
8	養種園遺跡	集落跡他	自然堤防	弥生・古墳・中世・近世
9	若林城跡	円墳・城館跡	自然堤防	古墳～近世
10	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	古代
11	中在家遺跡	包含地	自然堤防	古代
12	中在家南遺跡	河川跡・水田跡他	後背湿地	弥生～近世
13	長喜城館跡	城館跡	自然堤防	中世
14	高屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
15	押口遺跡	河川跡・水田跡	後背湿地	弥生～近世
16	神柵遺跡	官衙跡？	自然堤防	古代
17	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
18	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
19	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代
20	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
21	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代

No.	遺跡名	種別	立地	年代
22	高田Ａ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
23	高田Ｂ遺跡	河川跡・水田跡他	後背湿地	縄文～近世
24	今泉遺跡	集落跡・城館跡	自然堤防	縄文～近世
25	藤田新田遺跡	集落跡・水田跡他	浜堤	弥生・古墳・古代
26	下飯田遺跡	集落跡・屋敷跡	浜堤	古墳～中世
27	郡山遺跡	官衙跡・寺院跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
28	北目城跡	城館跡	自然堤防	縄文～近世
29	西台畑遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
30	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
31	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世
32	大年寺山横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳～古代
33	愛宕山横穴墓群	横穴墓	段丘・丘陵	古墳～古代
34	宗禅寺横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳～古代
35	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
36	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳～古代
37	二ツ沢横穴墓群	横穴墓	段丘	古墳～古代
38	富沢遺跡	水田跡地	自然堤防後背湿地	旧石器～近世
39	曽利松明神古墳	円墳	自然堤防	古墳
40	谷地館跡	城館跡	自然堤防	中世
41	国分鞭館跡	城館跡	段丘	中世
42	南目城跡	城館跡	自然堤防	中世

第１図　国分寺東遺跡と周辺の遺跡

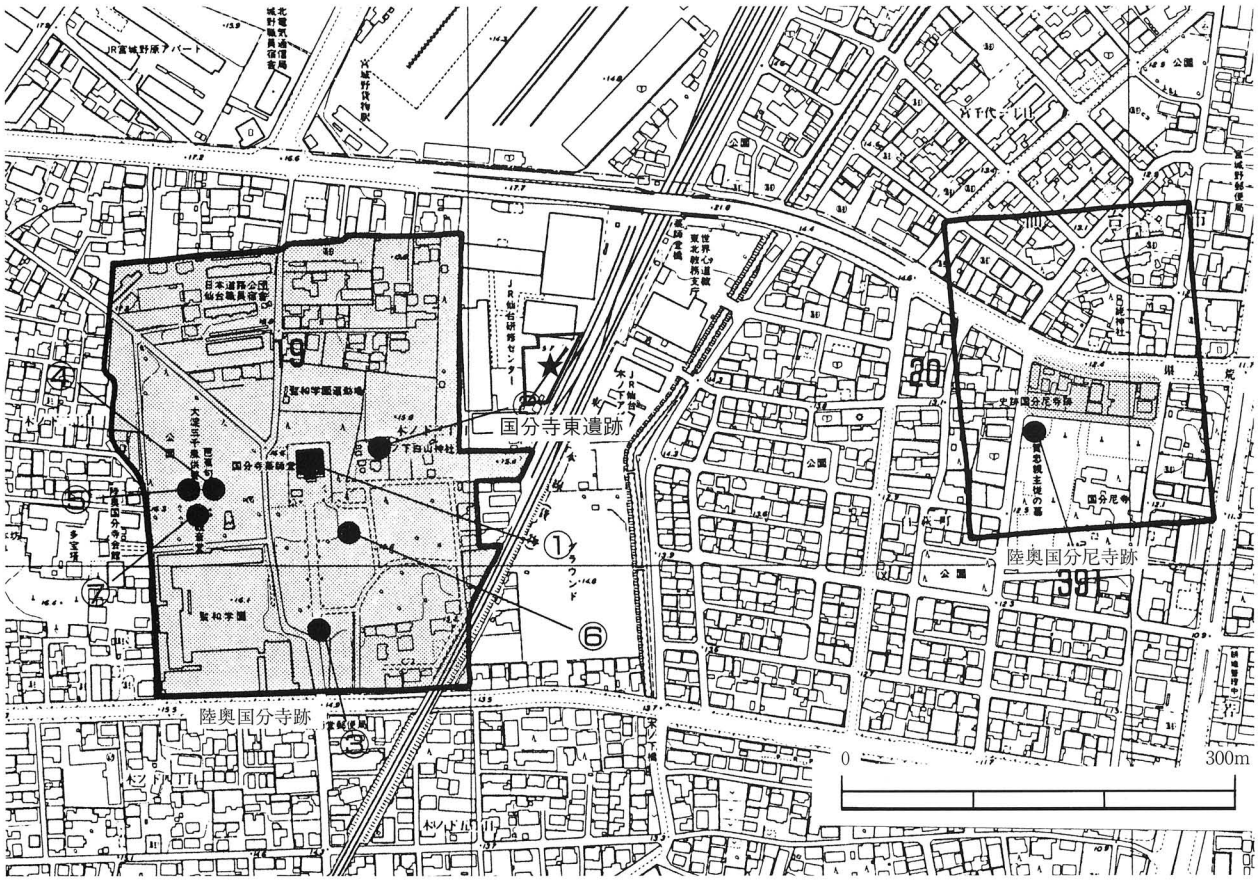
3　調査に至る経過と調査方法

平成13年５月25日付けで学校法人聖和学園理事長松田紹典氏より仙台市若林区木ノ下三丁目２地内の陸奥国分寺跡隣接地に係わる学校校舎建設工事の協議書が提出された。当該地は、陸奥国分寺跡の東辺北半部から東に100mの地点に位置し、従来遺跡登録はなされていなかった場所である。ただし、陸奥国分寺跡の隣接地域については国分寺の周辺の様相を確認し得ると共に国分寺に付随する諸施設や関連する遺構の存在が予想される場所でもあることから事前協議の一環として、平成13年９月10日～13日試掘調査を実施した。調査対象地一帯は、かつてJR東日本仙台研修センター（旧国鉄鉄道学園）の敷地内であったため、遺構の遺存状況は良くないものと思われた。そこで研修センター建物配置図と建設予定校舎の配置図に基づき、試掘トレンチを５箇所設定し、それぞれの調査トレンチで遺構の分布状況を見極めることとした。第１、第５トレンチでは撹乱のため遺構面はほぼ全域で削平されており、第４トレンチでも、倒木痕と思われる不整形の落ち込みの他、若干のピットや小柱穴、焼け面の検出にとどまった。しかしながら、第２、第３トレンチで、竪穴住居跡、竪穴遺構、焼土遺構、溝跡、土坑、柱穴、ピット等の遺構が多数検出され、土師器、須恵器、赤焼土器、軒丸瓦、鉄製品、石製品等の遺物が比較的まとまって出土した。以上の試掘調査結果から陸奥国分寺跡の東側隣接地における新たな遺跡の存在が確認されたため、陸奥国分寺跡との地理的な位置関係から「国分寺東遺跡」と命名し遺跡登録を行った（宮城県遺跡番号01557）。併せて、関係者と再度協議を重ね、計画建物の建設工事によって遺構の損なわれる部分については、記録保存の為に事前調査を実施することとし、発掘届の提出を受けた（教生文13－191号で回答）。調査箇所は、南北２箇所に調査区を設定し南側をⅠ区、北側をⅡ区とした。調査は、平成13年12月３日より開始した。重機により、研修センター解体造成時の山砂盛土と旧表土Ⅰ層、旧耕作土Ⅱ層を排除し、基盤層であるⅢ層上面で遺構検出作業を行った。Ⅰ区では、柱列１列、掘立柱建物跡２棟、溝跡１条、井戸跡１基、土坑23基、ピット267基、Ⅱ区では、竪穴住居跡２軒、溝跡１条、土坑16基、ピット67基を検出した。また、Ⅱ区では竪穴住居跡の検出された部分で調査区を一部北側に拡張した。なおⅠ区では、調査区北壁で一部下層調査を実施した。遺構の測量については、任意の基準杭Ａ、Ｂを設置し、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、正確な位置を把握している。（杭Ａ：Ｘ＝－194,376m　Ｙ＝6,558m　杭Ｂ：Ｘ＝－194,332m　Ｙ＝6,552m）遺構の平面図は基準杭を利用して簡易遣り方を組み1/20あるいは1/10で作成した。断面図も1/20あるいは1/10で作成した。写真は35㎜モノクロ・リバーサルフィルムで撮影した。野外調査が終了したのは平成14年１月18日である。

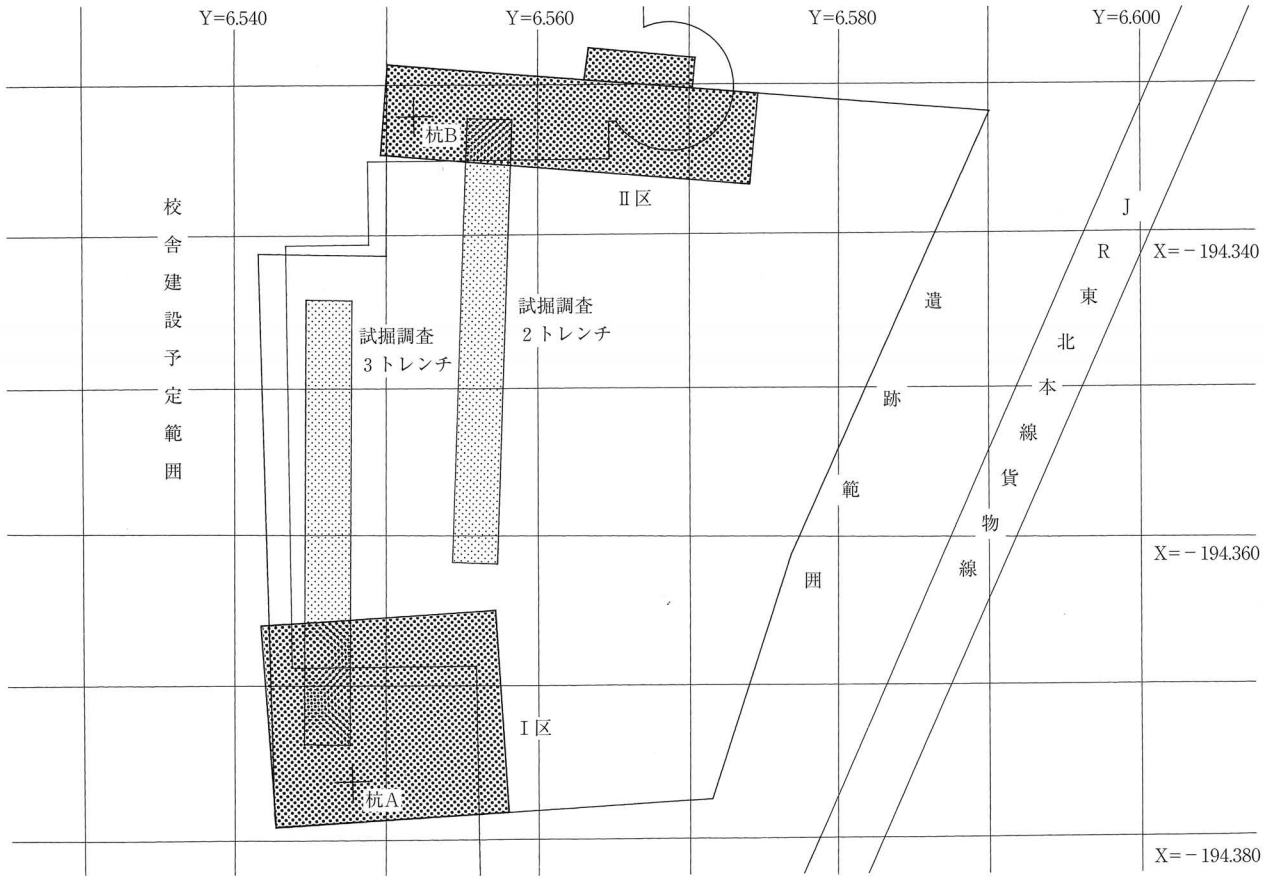
4　基本層序

１）Ⅰ区の基本層序

Ⅰ区で確認された基本層序は、山砂整地層下の大別６層である。各層の傾斜は南北方向ではほぼ水平であるが、東西方向では東から西にむかって緩やかに傾斜している。Ⅰ層は、褐灰色シルト層で、層厚は10～20cmあり整地前の旧表土と考えられる。Ⅱ層は、黒褐色シルト層で、層厚は10～30cmあり一部の遺構はこの層の上面から掘り込まれている。下面は起伏が著しい。層中に土師器片、須恵器片、瓦片などを含む。Ⅲ層は、黄褐色シルト層で、層厚は20～40cm、下面には緩やかな起伏がある。この層の上面で遺構検出作業を行った。Ⅲ層以下は、北壁沿いに下層調査を実施して確認した。Ⅳ層は、にぶい黄褐色砂で小礫をごく少量含む。層厚は10～20cmである。Ⅴ層は、Ⅲ層よりも明るい黄褐色シルト層で、層厚は10～15cmである。Ⅵ層は、にぶい黄褐色細砂で層厚は10cm程度あり、この層より下層からは礫層に漸移する。Ⅲ層からⅥ層については、この地域の基盤となる自然堆積層と考えられる。



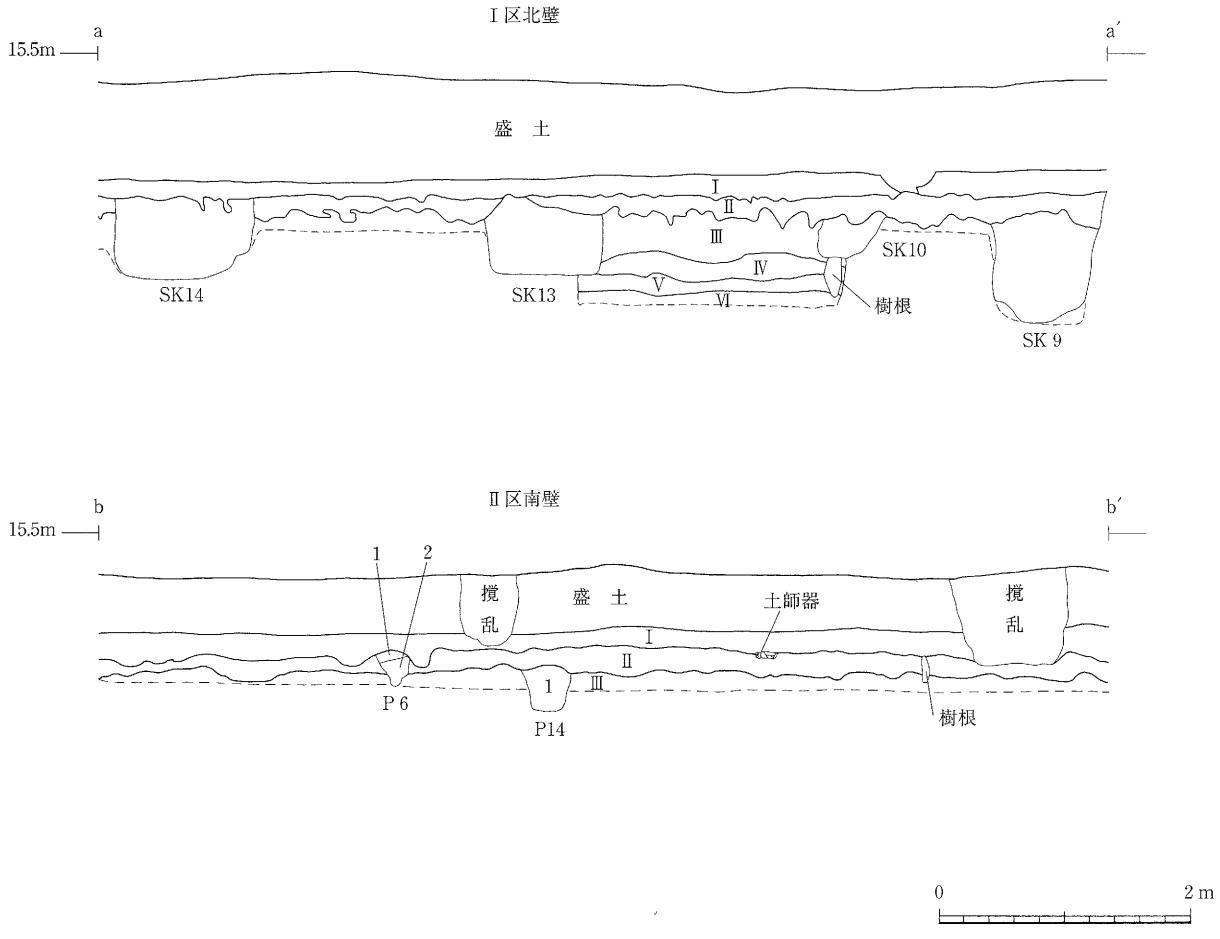
第２図　調査地点位置図



第３図　調査区位置図（1/500）

2） Ⅱ区の基本層序

Ⅱ区では、山砂整地層下で大別３層の基本層を検出した。各層の傾斜は、Ⅰ区と同様に南北方向では水平に、東西方向では東から西にむかって緩やかに傾斜している。Ⅰ層は、黒褐色シルト層で全体に木炭粒、焼土粒を少量含む。層厚は８～30cmあり整地前の旧表土と考えられる。下面はほぼ平坦である。Ⅱ層は、黒褐色粘土質シルト層で全体に黄褐色粘土ブロック、木炭粒、焼土粒を少量含む。層厚は５～30cmである。一部の遺構はこの層の上面から掘り込まれている。下面は北壁側で起伏が著しい。層中に土師器片、須恵器片、瓦片などを含む。Ⅲ層は、にぶい黄褐色粘土質シルト層で層厚は30cm以上である。この層の上面が遺構検出面となっている。



	層位	土　色	土　性	備　考
Ⅰ区	Ⅰ	10YR4/1　褐灰色	シルト	整地前の旧表土
	Ⅱ	10YR2/2　黒褐色	シルト	
	Ⅲ	10YR6/4　黄褐色	シルト	
	Ⅳ	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂	小礫をごく少量含む。
	Ⅴ	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト	Ⅲ層よりも明るい。
	Ⅵ	10YR5/4　にぶい黄褐色	細砂	

	層位	土　色	土　性	備　考
Ⅱ区	Ⅰ	10YR2/2　黒褐色	シルト	全体に木炭粒、焼土粒を少量含む。
	Ⅱ	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	Ⅲ層小ブロック、木炭粒、焼土粒を少量含む。
	Ⅲ	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
	P6　1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	木炭粒、焼土粒を微量に含む。
	2	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土小ブロックを少量含む。
	P14　1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	木炭粒、焼土粒を微量に含む。

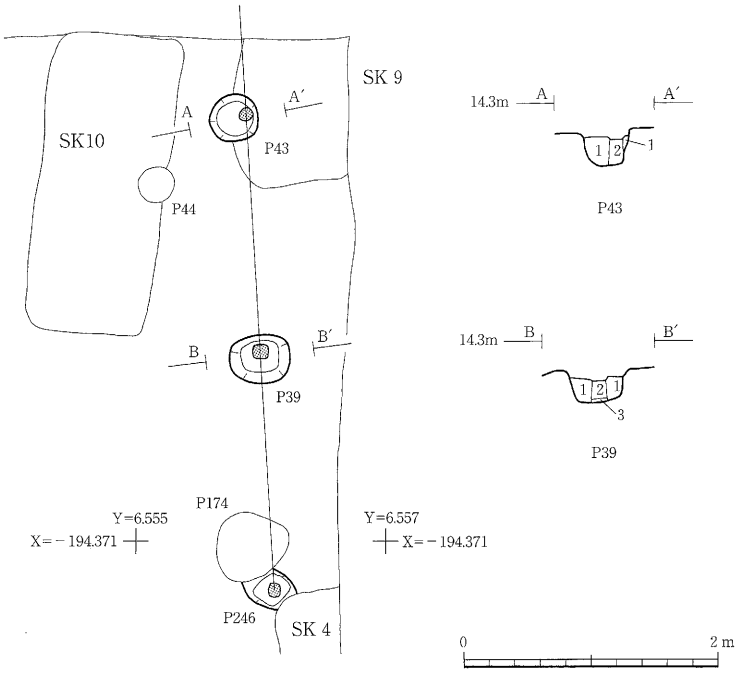
第４図　基本層序

5　Ⅰ区の発見遺構と出土遺物

国分寺東遺跡では、Ⅰ区で、柱列１列、掘立柱建物跡２棟、溝跡１条、井戸跡１基、土坑23基、ピット267基、Ⅱ区で、竪穴住居跡２軒、溝跡１条、土坑16基、ピット67基が検出された。以下、これらの順にそれぞれの遺構の事実記載を行う。また、これらの遺構から出土した図示対象の遺物については、各遺構のところで全て一括して図示および記載を行った。その他、遺構検出作業中に基本層及び検出面から出土した遺物並びに平成13年９月に実施した試掘調査の際に２トレンチ、３トレンチから出土した遺物ついては後に一括して図示し、記載を行っている。

１）柱列

SA１柱列　【位置】調査区の北西コーナー部で検出された。【重複】SK４、SK９、P174と重複し、SK４、P174より古く、SK９より新しい。【規模・方向】長さ２間以上で総長は3.8m以上、柱間寸法は1.9mの等間である。方向はN－4.5°－Wである。掘立柱建物跡の南西隅部分になる可能性も考えられる。【柱穴・柱痕跡】柱穴の掘り方は、P43、P246が円形、P39が隅丸方形を呈する。規模は径38～48cmで、深さは22～31cmである。柱痕跡は径10～12cmの円形、隅丸方形である。【出土遺物】掘り方から土師器片、赤焼土器片、土師質土器片、平瓦片が出土した。



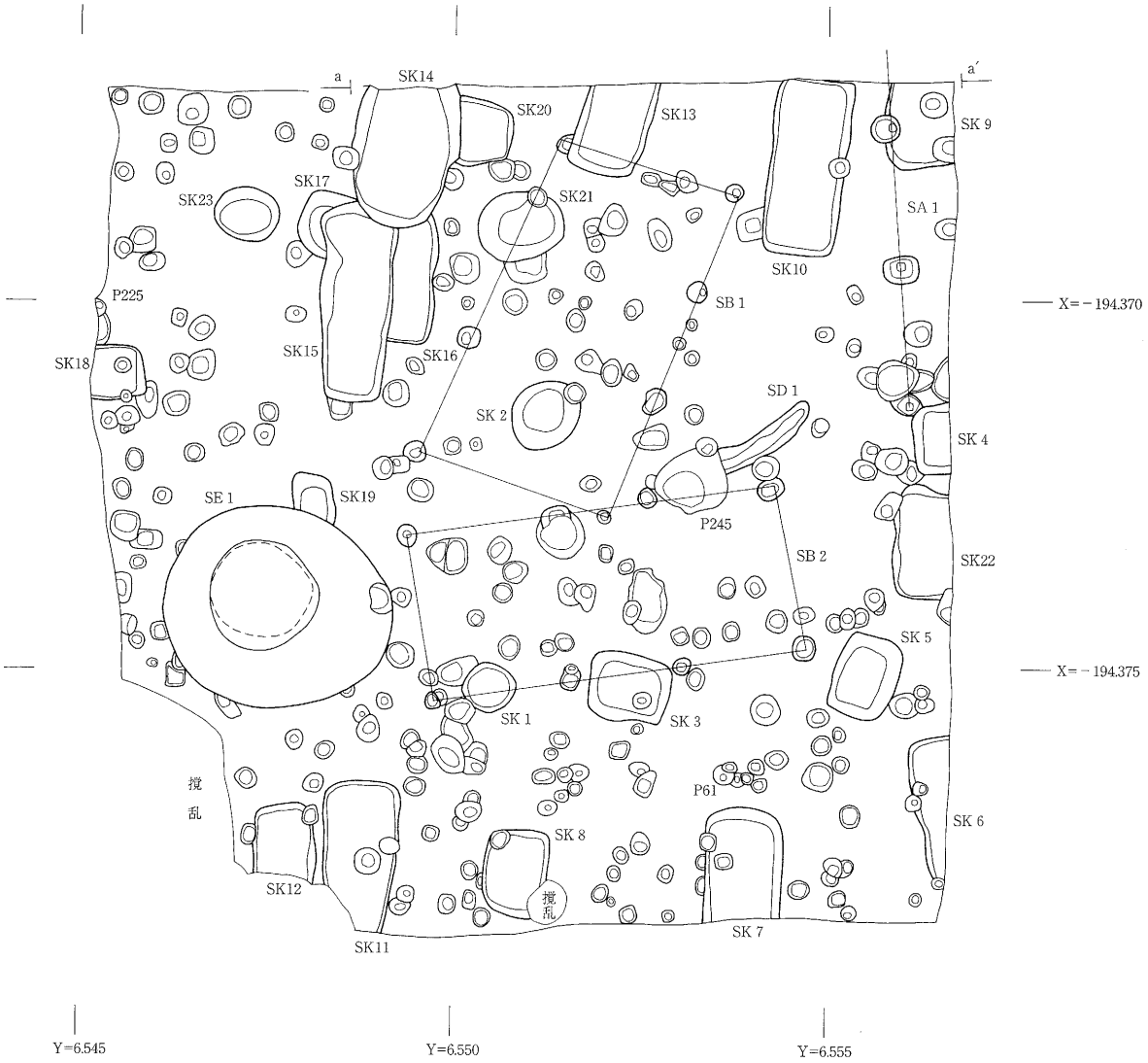
遺　構	層　位	土　　色	土　性	備　　考
SA1 P39	1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4シルト小ブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
	2	10YR2/1　黒色	シルト	φ10～30mmの木炭を含む。（柱痕跡）
	3	2.5Y6/3　にぶい黄色	シルト	底面に酸化鉄の集積層を含む。
P43	1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4シルトブロックを多量に含む。
	2	10YR2/1　黒色	シルト	焼土粒、木炭粒を含む。（柱痕跡）
P246	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを微量に含む。

第５図　Ⅰ区SA１柱列

２）掘立柱建物跡

SB１掘立柱建物跡　【位置】調査区の中央部から北半部で検出された。【重複】SK13、SK21、P127と重複し、これらより古い。なおSB２、SK２、その他のピット群とも重複関係にあるが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。【規模・方向】桁行３間、梁行１間の南北棟の建物跡と考えられる。桁行は、東側柱列では総長4.74m、柱間寸法は北から1.50m、1.63m、1.61mである。西側柱列では総長4.68m、計測できる柱間寸法は1.64mである。梁行は、北側柱列で2.46m、南側柱列で2.73mである。建物の方向は、東側柱列でN－21.5°－Eである。【柱穴・柱痕跡】柱穴の掘り方は、径20～37cmの円形、長円形を呈し、深さは９～25cmである。柱痕跡は7～14cmの円形である。【出土遺物】P83より赤焼土器片、須恵器片が、P202より土師器片が出土した。

SB２掘立柱建物跡　【位置】調査区の中央部やや南よりで検出された。【重複】P33、P71、P179、P243と重複し、P33、P71、P243より古く、P179より新しい。なおSB１、SK１、SK３、その他のピット群とも重複関係にあるが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。【規模・方向】桁行３間、梁行１間の東西棟の建物跡と考えられる。桁行は、北側柱列では総長4.90m、柱間寸法は東から1.68m、1.30m、1.92mである。南側柱列では総長5.04m、柱間寸法は東から1.68m、1.45m、1.92mである。梁行は、東側柱列で2.20m、西側柱列で2.26mである。建物の方向は、北側柱列でE－7.5°－Nである。【柱穴・柱痕跡】柱穴の掘り方は、いずれも径24～36cmの円形、長円形を呈し、深さは17～27cmである。柱痕跡は、径９～13cmの円形、隅丸方形である。【出土遺物】P32より須



第６図　Ⅰ区遺構配置図（1/100）

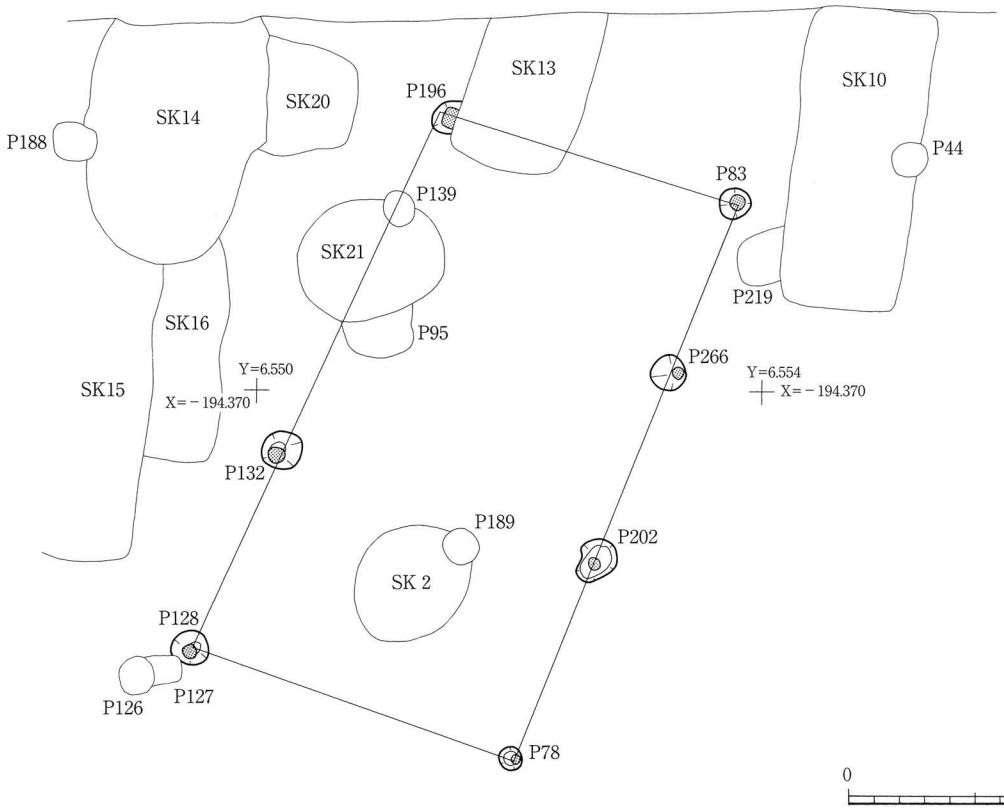
恵器片が、P80より土師器片が出土した。

３）溝跡

SD１溝跡　【位置】調査区の東側で検出された。【重複】P33、P181、P245と重複し、これらすべてより古い。【方向・規模】緩やかに湾曲しながら北東から西に延びている。方向はN－42°－Eである。確認された長さは1.4mで、上幅は30cm、下幅は13cm、深さは17cmである。【断面形・壁・底面】断面形は半円形で、壁は底面から丸みをおびて外傾して立ち上がる。底面は、凹凸が著しく、西半部では径８～12cmのピット状のくぼみが４箇所みられる。【堆積土】２層確認された。いずれも自然堆積層である。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

４）井戸跡

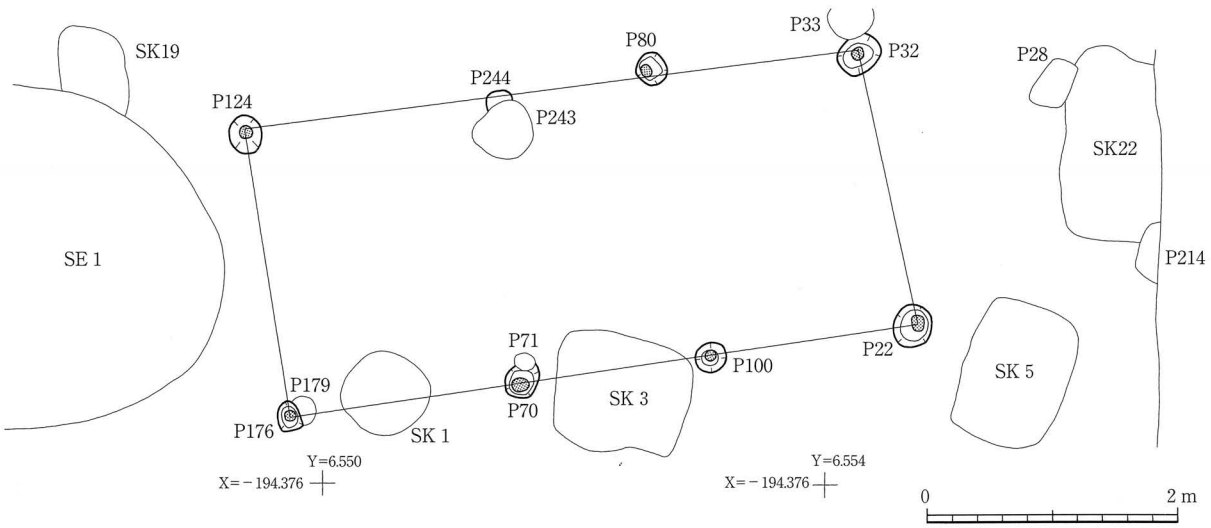
SE１井戸跡　【位置】調査区西半部で検出された。【重複】SK19、P220、P221、P228、P247、P260、P263と重複し、これらすべてより新しい。【平面形・規模】素掘りの井戸である。平面形は東西にやや長い円形で、規模は長さが東西3.06m、南北2.73m、深さが2.5m以上である。【断面形・壁・底面】上半部は外に向かって大きく開いている。下半部は方形を呈しており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。安全面を考慮して底面の検出は行わなかった。【堆積土】７層まで確認された。１・２層は礫を含む人為堆積層である。３・４・６層は壁の崩落土を混入した自然堆積層、５層は



遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SB1 P78	掘り方	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	10YR2/1シルトブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。
P83	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	
P128	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。
P132	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。

遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
P132	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。
P196	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	
P202	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。
P266	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR6/4　黄褐色	シルト	

第７図　Ⅰ区SB１掘立柱建物跡

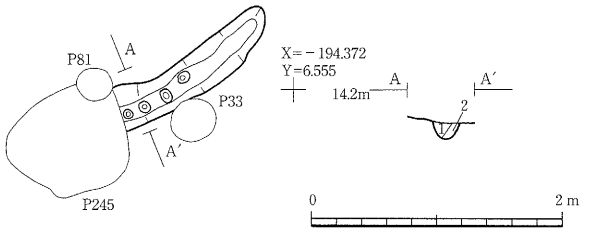


遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SB2 P22	掘り方	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	10YR2/1シルトブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを微量に含む。
P32	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを微量に含む。
P70	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。
P80	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを少量含む。

遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
P100	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを微量に含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	
P124	掘り方	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	10YR2/1シルトブロックを少量含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを微量に含む。
P176	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを微量に含む。
	柱痕跡	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロック、焼土粒を含む。
P244	掘り方	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを微量に含む。

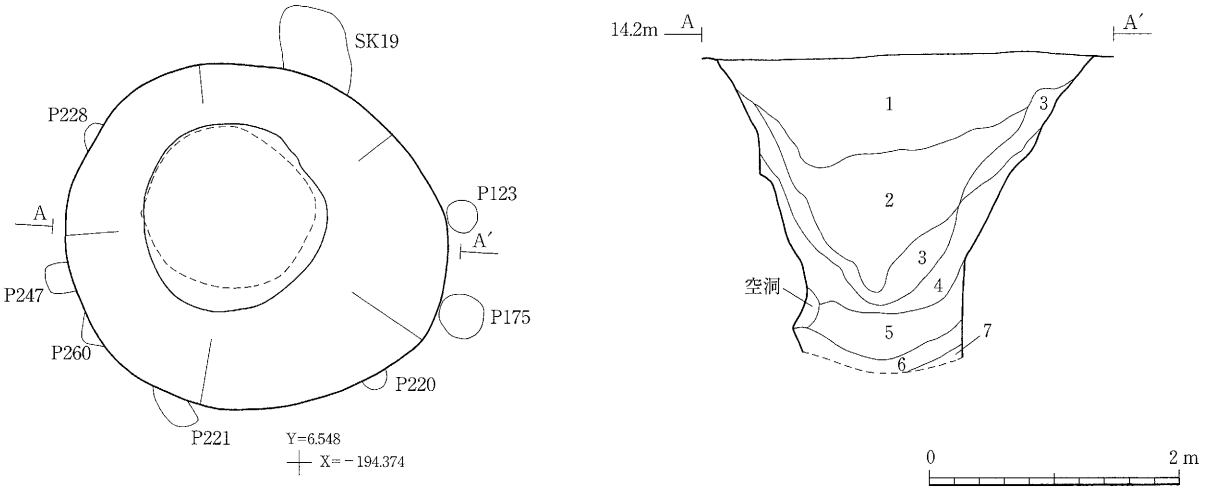
第８図　Ⅰ区SB２掘立柱建物跡

粘土を縞状に含む自然堆積層である。【出土遺物】堆積土中から土師器片、赤焼土器片、土師質土器片、須恵器片、重弁蓮華文軒丸瓦、丸瓦片、平瓦片、中世陶器甕口縁部片(I－1、I－2)擂鉢片、碗片、石臼(K－2)、板碑(K－3)、鉄製品が出土した。このうちI－1は、口縁が外反して受口状を示し、口縁帯が丸みを持つ。白石窯系と考えられ、13世紀後半から14世紀前半に位置付けられる。I－2は、胎土に白色砂粒を多く含み口縁帯が平坦で端部が鋭い。常滑産と考えられ、13世紀中葉のものと思われる。K－2は



層位	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR3/3シルト粒、木炭粒を含む。
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR6/4シルトブロックを含む。

第９図　Ⅰ区SD１溝跡



層位	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	小礫、焼土粒、木炭粒を含む。
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	φ10～20cmの礫を多量に含む。
3	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR5/4シルト小ブロックを含む。
4	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR3/2粘土を縞状に含む。

層位	土色	土性	備考
5	10YR3/4 暗褐色	粘土	10YR2/2粘土を縞状に含む。10YR5/4粘土ブロックを含む。
6	10YR5/6 黄褐色	砂質粘土	礫を含む。
7	10YR2/3 黒褐色	粘土	10YR5/4粘土粒を含む。

第10図　Ⅰ区SE１井戸跡

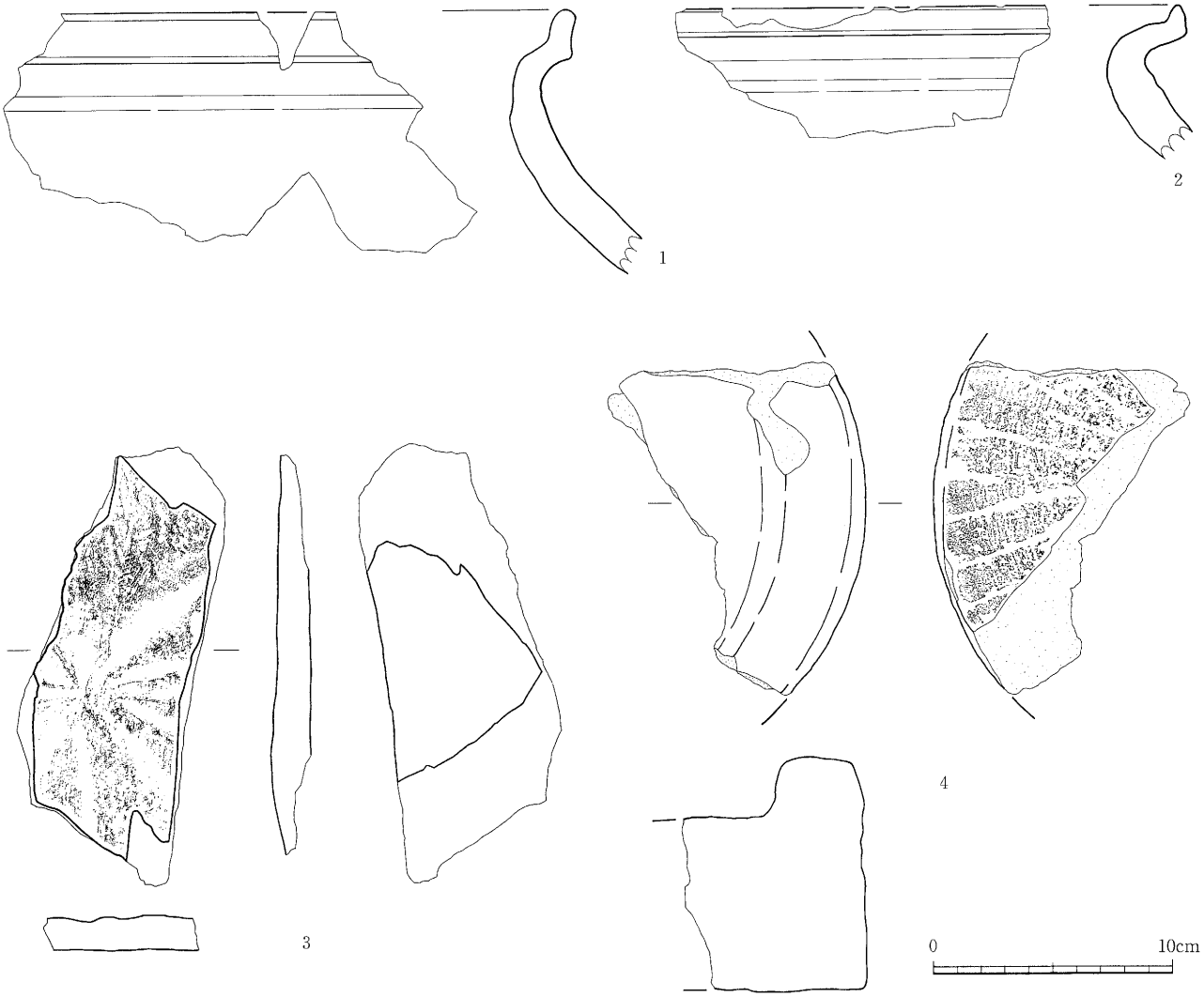
石臼の上臼で底面に放射状の刻み目が入る。K－3は、蓮座部分の板碑片であるが、粘板岩製のごく薄い作りのものである。

５）土坑

SK１土坑　【位置】調査区の中央部やや南側で検出された。【重複】P178、P180と重複し、P178より新しく、P180より古い。【平面形・規模】平面形は東西にやや長い円形を呈する。規模は長さが長軸73cm、短軸66cmで、深さは15cmである。方向は長軸方向でE－13°－Nである。【断面形・壁・底面】断面形は皿状で、壁は底面から丸みをおびて外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK２土坑　【位置】調査区のほぼ中央部で検出された。【重複】P189と重複し、これより古い。【平面形・規模】やや東西に長い円形を呈する。規模は長軸1.0m、短軸87cmで、深さは36cmである。方向は長軸方向でN－44°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は擂鉢形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。【堆積土】２層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土した。

SK３土坑　【位置】調査区の中央部よりやや南側で検出された。【重複】P195と重複し、これより古い。【平面形・規模】東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.08m、短軸95cmで、深さは30cmである。方向は長軸方向



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	Ⅰ－1	中世陶器　甕	Ⅰ区		SE1　1層		(11.2)				内外面ヨコナデ　白石窯系	7－1
2	Ⅰ－2	中世陶器　甕	Ⅰ区		SE1　3層		(6.6)				内外面ヨコナデ　常滑産	7－2
3	K－3	板碑	Ⅰ区		SE1　2層		(18.8)	(7.1)	(1.7)	257.3	蓮座部分　粘板岩製	7－5
4	K－2	石製品　石臼	Ⅰ区		SE1　2層		(15.0)	(10.0)	(10.0)		上臼	7－4

第11図　Ⅰ区SE1井戸跡出土遺物

でE－16°－Sである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈し、壁は底面より丸みをおびてほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】赤焼土器片、丸瓦片が出土した。

SK4土坑　【位置】調査区東壁沿いで検出された。【重複】SA1、P192と重複し、これらより新しい。【平面形・規模】平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は南北96cm、東西49cm以上で、深さは71cmである。方向はN－6°－Wである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形で、壁は底面との境が明瞭で、やや直立気味に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。【堆積土】2層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】堆積土中及び底面直上から白石窯系の中世陶器甕（Ⅰ－3）が出土したほか、堆積土中より重弧文軒平瓦（G－6）、土師器片、赤焼土器片、土師質土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。

SK5土坑　【位置】調査区東半部で検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】平面形は長方形を呈する。規模は長軸1.15m、短軸84cmで、深さは28cmである。方向は長軸方向でN－17°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面より外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】2層

確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、丸瓦片が出土した。

SK６土坑　【位置】調査区南東コーナー部で検出された。【重複】Ｐ２、Ｐ３、P258と重複し、P258よりも新しく、Ｐ２、Ｐ３より古い。【平面形・規模】遺構の西半部分を一部検出したのみで全体の形状は不明である。規模は南北２ｍ以上、東西50cm以上、深さ12cmである。【断面形・壁・底面】断面形は皿状で、壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが南半部で一段低くなっている。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK７土坑　【位置】調査区南壁沿いで検出された。【重複】P216、P217、P218、P250と重複し、Ｐ217、Ｐ218より新しく、Ｐ216、Ｐ250より古い。【平面形・規模】南北に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は、南北1.52m以上、東西1.05m、深さ17cmである。方向は長軸方向でN－3°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は舟底形で、壁は底面より緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土した。

SK８土坑　【位置】調査区南壁沿いで検出された。【重複】P251、P252と重複し、P251より新しく、P252より古い。【平面形・規模】平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸1.18m、短軸86cm、深さ26cmである。方向は長軸方向でN－7°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は、南壁と西壁ではやや直立して、それ以外は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、平瓦片が出土した。

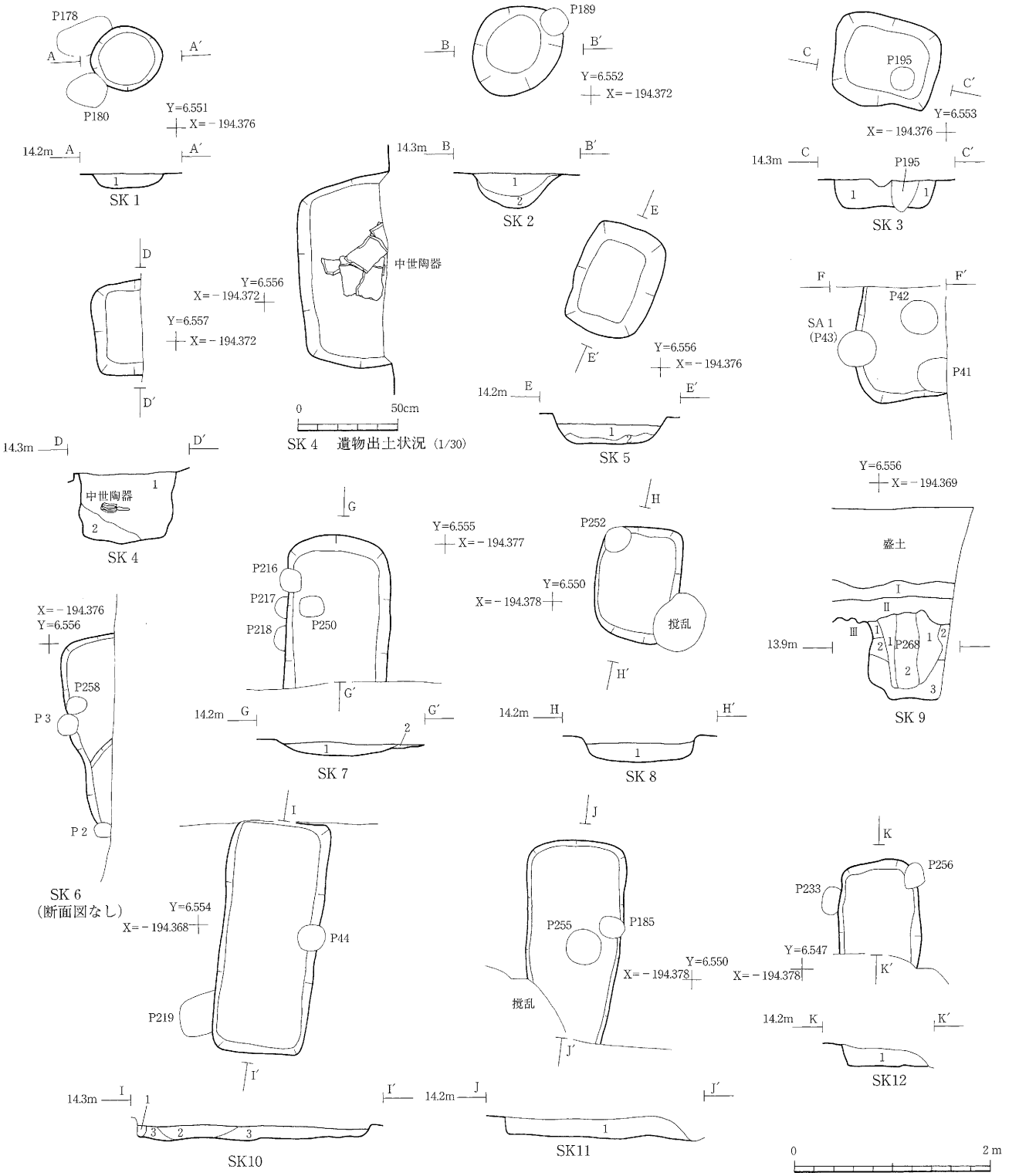
SK９土坑　【位置】調査区の北東コーナー部で検出された。【重複】SA１、P41、P42、P268と重複しこれらより古い。【平面形・規模】遺構の北半部と東半部が調査区外に延びているため全体の規模や形状は不明であるが、平面形は方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、南北1.2m以上、東西93cm以上、深さ92cmである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈する。壁は底面から垂直に立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】３層確認された。いずれも人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、陶器片が出土した。

SK10土坑　【位置】調査区の北東部で検出された。【重複】P44、P219と重複し、P219より新しく、P44より古い。【平面形・規模】平面形は、南北に長い長方形を呈する。規模は南北2.41m、東西1.03m、深さ24cmである。方向は長軸方向でN－7°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は皿状で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】３層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、平瓦片が出土した。

SK11土坑　【位置】調査区の南西コーナー部で検出された。【重複】P185、P255と重複し、これらより古い。【平面形・規模】平面形は、遺構の南端部が調査区外へ延びているが、南北に長い長方形を呈するものと思われる。規模は南北2.03m以上、東西97cm、深さ21cmである。方向は長軸方向でN－8°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形で、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、陶器片が出土した。

SK12土坑　【位置】調査区の南西コーナー部で検出された。【重複】P233、P256と重複し、P233より新しく、P256より古い。【平面形・規模】平面形は、遺構の南半部が調査区外へ延びているが、南北に長い長方形を呈するものと思われる。規模は南北１ｍ以上、東西84cm、深さ23cmである。方向は長軸方向でN－0°－Wである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、丸瓦片が出土した。

SK13土坑　【位置】調査区の北壁沿いで検出された。【重複】SB1と重複し、これより新しい。【平面形・規模】平面形は、遺構の北半部が調査区外へ延びているが、南北に長い隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は長軸1.34m以上、短軸93cm、深さ28cmである。方向は長軸方向でN－16°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆



遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SK 1	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/6シルトブロックを含む。
SK 2	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	焼土粒、木炭粒を多量に含む。
	2	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを多量に含む。
SK 3	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/4シルト小ブロックを多量に含む。
P195	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/4シルト小ブロックを含む。
SK 4	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/4シルト粒、木炭粒を含む。
	2	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/6シルトブロックを多量に含む。
SK 5	1	10YR2/3　黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロックを含む。
	2	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロックを含む。
SK 7	1	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	10YR2/1シルトブロックを含む。

遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SK 8	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR2/1シルト粒を多量に含む。
SK 9	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR4/6シルトブロックを含む。
	2	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/6シルトブロックを含む。
	3	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	φ10～50mmの10YR5/6粘土質シルトブロックを含む。
P268	1	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/6シルト粒を含む。
	2	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/6シルト粒を少量含む。
SK10	1	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/6シルト粒を含む。
	2	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/6シルトブロックを含む。
	3	10YR5/6　黄褐色	シルト	10YR2/1シルトブロックを含む。
SK11	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4、10YR2/1シルト小ブロックを多量に含む。
SK12	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4、10YR2/1シルト小ブロックを多量に含む。

第12図　Ⅰ区土坑（1）

台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】３層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】ロクロ調整され内面に油煙状の付着物のある土師質土器小皿（Ⅰ－4）が出土したほか、土師器片、須恵器片、丸瓦片が出土した。

SK14土坑　【位置】調査区の北壁沿いで検出された。【重複】SK15、SK16、SK17、SK20、P188、P199と重複している。P188より古く、これ以外の総ての遺構より新しい。【平面形・規模】遺構の北半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明であるが、南北に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は南北1.94m以上、東西1.4m、深さ49cmである。方向は長軸方向でN－9°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から直立気味に外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】４層確認された。いずれも人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、丸瓦片、石製品が出土した。

SK15土坑　【位置】調査区の北西部で検出された。【重複】SK14、SK16、SK17、P259と重複している。SK16、SK17、P259より新しく、SK14より古い。【平面形・規模】平面形は、南北に長いやや不整な隅丸長方形を呈する。規模は南北2.75m、東西1.04m、深さ31cmである。方向は長軸方向でN－4°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈する。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦であるが南半部で一段低くなっている。【堆積土】４層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片が出土した。

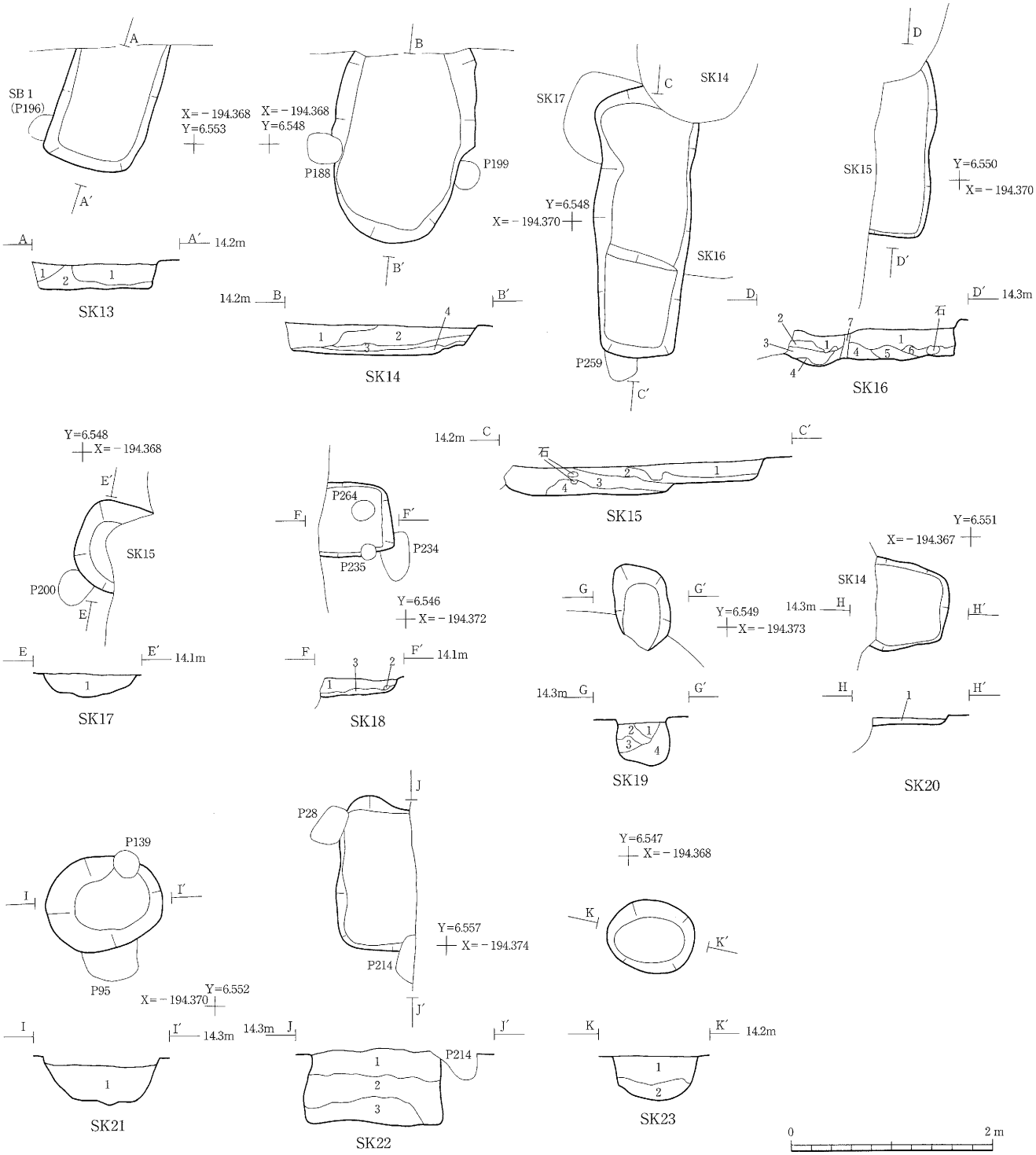
SK16土坑　【位置】調査区の北西部で検出された。【重複】SK14、SK15、と重複し、これらより古い。【平面形・規模】SK14、SK15に切られているため全体の形状は不明であるが、方形を呈するものと思われる。規模は南北1.8m、東西55cm以上、深さ41cmである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈し、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面はやや起伏がある。【堆積土】７層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。

SK17土坑　【位置】調査区の北西部で検出された。【重複】SK14、SK15、P200と重複し、SK14、SK15より古く、P200より新しい。【平面形・規模】SK14、SK15に切られているため全体の形状は不明であるが、隅丸方形もしくは不整な円形を呈するものと思われる。規模は南北88cm、東西60cm以上、深さ24cmである。【断面形・壁・底面】断面形は椀形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびる。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片、陶器片、平瓦片、鉄製品が出土した。

SK18土坑　【位置】調査区の西壁沿いで検出された。【重複】P224、P234、P235、P264と重複しP224、P234より新しく、P235、P264より古い。【平面形・規模】平面形は、遺構の西半部が調査区外へ延びているため、全体の形状は不明であるが、方形もしくは東西に長い長方形を呈するものと思われる。規模は南北75cm、東西75cm以上、深さ20cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】３層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土した。

SK19土坑　【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】SE１と重複しこれより古い。【平面形・規模】SE１に遺構の南半部を切られているため全体の形状は不明であるが、不整な方形を呈するものと思われる。規模は南北86cm以上、東西54cm、深さ48cmである。【断面形・壁・底面】断面形は袋状を呈し壁は底面から丸みをおびてほぼ垂直に立ち上がる。底面は半球状である。【堆積土】４層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】石製品が出土した。

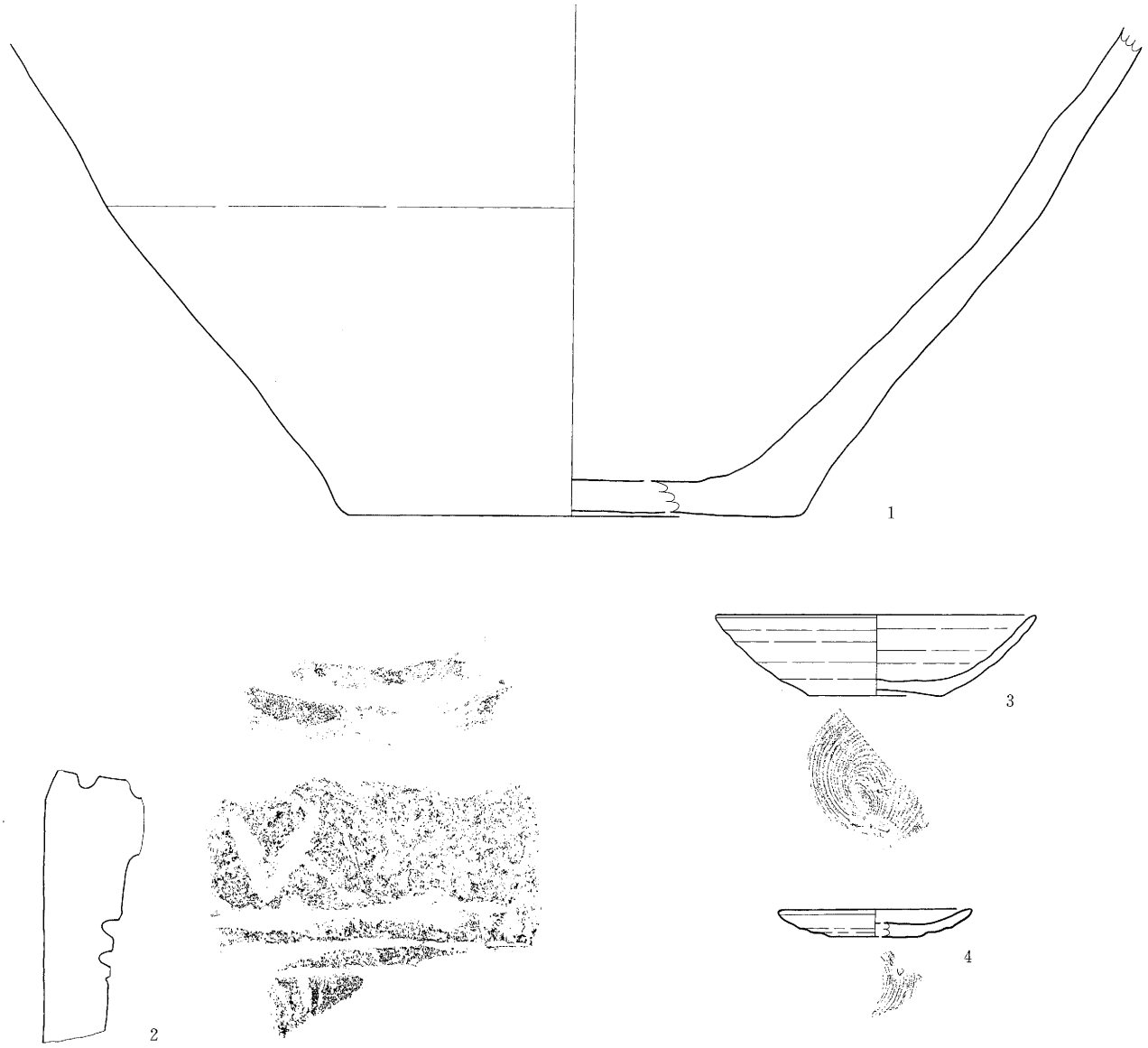
SK20土坑　【位置】調査区の北壁沿いで検出された。【重複】SK14、P198と重複し、P198より新しく、SK14より古い。【平面形・規模】SK14に遺構の東半部を切られているため、全体の形状は不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。規模は、南北94cm、東西72cm以上、深さ10cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられ



遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SK13	1	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを多く含む。
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	10YR5/4粘土ブロックを多く含む。
SK14	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR6/6シルト粒、焼土粒、木炭粒を含む。
	2	10YR2/1　黒色	シルト	10YR5/4シルトブロックを含む。
	3	10YR2/1　黒色	粘土質シルト	10YR2/3粘土質シルト、10YR5/4シルトブロックを含む。
	4	10YR5/6　黄褐色	シルト	10YR3/2、10YR2/2粘土質シルトブロックを含む。
SK15	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR3/4、10YR5/4シルトブロックを含む。
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト	10YR5/4、10YR2/2シルトブロックを含む。
	3	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR3/4、10YR5/4シルト粒を含む。
	4	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	10YR2/2シルトブロックを含む。
SK16	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR6/4、10YR3/3シルト粒、焼土粒、木炭粒を含む。
	2	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR6/4シルトブロック（φ3～5cm）を含む。
	3	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト	10YR2/2シルト小ブロックを含む。
	4	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR6/4シルト粒、焼土粒、木炭粒を含む。
	5	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト	10YR2/2シルト小ブロックを含む。
	6	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR6/4シルトブロック（φ3～5cm）を含む。

遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SK16	7	10YR2/1　黒色	シルト	焼土粒、木炭粒を少量含む。
SK17	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR6/4、10YR3/3シルトブロックを含む。
SK18	1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR6/4、10YR5/4シルト粒、焼土粒、木炭粒を含む。
	2	10YR2/1　黒色	シルト	
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR3/3、10YR2/2粘土質シルトブロックを含む。
SK19	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR6/4、10YR3/3シルトブロックを含む。
	2	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/4、10YR3/3シルトブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
	3	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR6/4、10YR3/3シルトブロックを含む。
	4	10YR3/3　暗褐色	シルト	10YR2/2シルトブロック、10YR6/4シルト粒、木炭粒を含む。
SK20	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/6、10YR2/1シルトブロックを含む。
SK21	1	10YR2/1　黒色	シルト	焼土粒、木炭粒を多く含む。
SK22	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロック、木炭粒を含む。
	2	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロックを多量に含む。
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	10YR3/2シルトブロックを含む。
SK23	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/6、10YR4/6、10YR2/1シルト粒、木炭粒を含む。
	2	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/6、10YR4/6シルトブロックを含む。

第13図　Ⅰ区土坑（2）



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	I－3	中世陶器　甕	I区		SK4　1・2層		(21.6)		19.6		内外面回転台によるナデ　白石窯系	7－3
2	G－6	軒平瓦	I区		SK4　1層		(11.2)	(11.8)	4.4		瓦当　重弧文　顆面鋸歯文　凹面　布目　凸面縦位縄叩きナデ	7－6
3	E－25	須恵器　坏	I区		P245		4.6	13.9	5.8		内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	7－8
4	I－4	土師質土器　小皿	I区		SK13		1.2	8.4	4.0		内外面ロクロナデ　底部回転糸切り　灯明皿	

第14図　Ⅰ区土坑・ピット出土遺物

る。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK21土坑　【位置】調査区の北側で検出された。【重複】P95、P139と重複し、P95より新しく、P139より古い。【平面形・規模】東西に長い円形を呈する。規模は長軸1.14m、短軸95cm、深さ49cmである。方向は長軸方向でE－28°－Nである。【断面形・壁・底面】断面形は丸みをおびた逆台形を呈し、壁は、底面から丸みをおびて外傾しながら立ち上がる。底面には凹凸がある。【堆積土】1層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、鉄滓が出土した。

SK22土坑　【位置】調査区の東壁沿いで検出された。【重複】P28、P214と重複し、これらより古い。【平面形・規模】遺構の東半部が調査区外へ延びているため、全体の形状は不明であるが隅丸方形を呈するものと思われる。規模は南北1.54m、東西82cm以上、深さ76cmである。方向はN－3°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は

長方形を呈し、壁は底面からほぼ直立して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】３層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、平瓦片が出土した。

SK23土坑　【位置】調査区の北西部で検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】平面形は東西に長い楕円形を呈する。規模は長軸88cm、短軸74cm、深さ45cmである。方向はE－7°－Sである。【断面形・壁・底面】断面形は半円形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびている。【堆積土】２層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片が出土した。

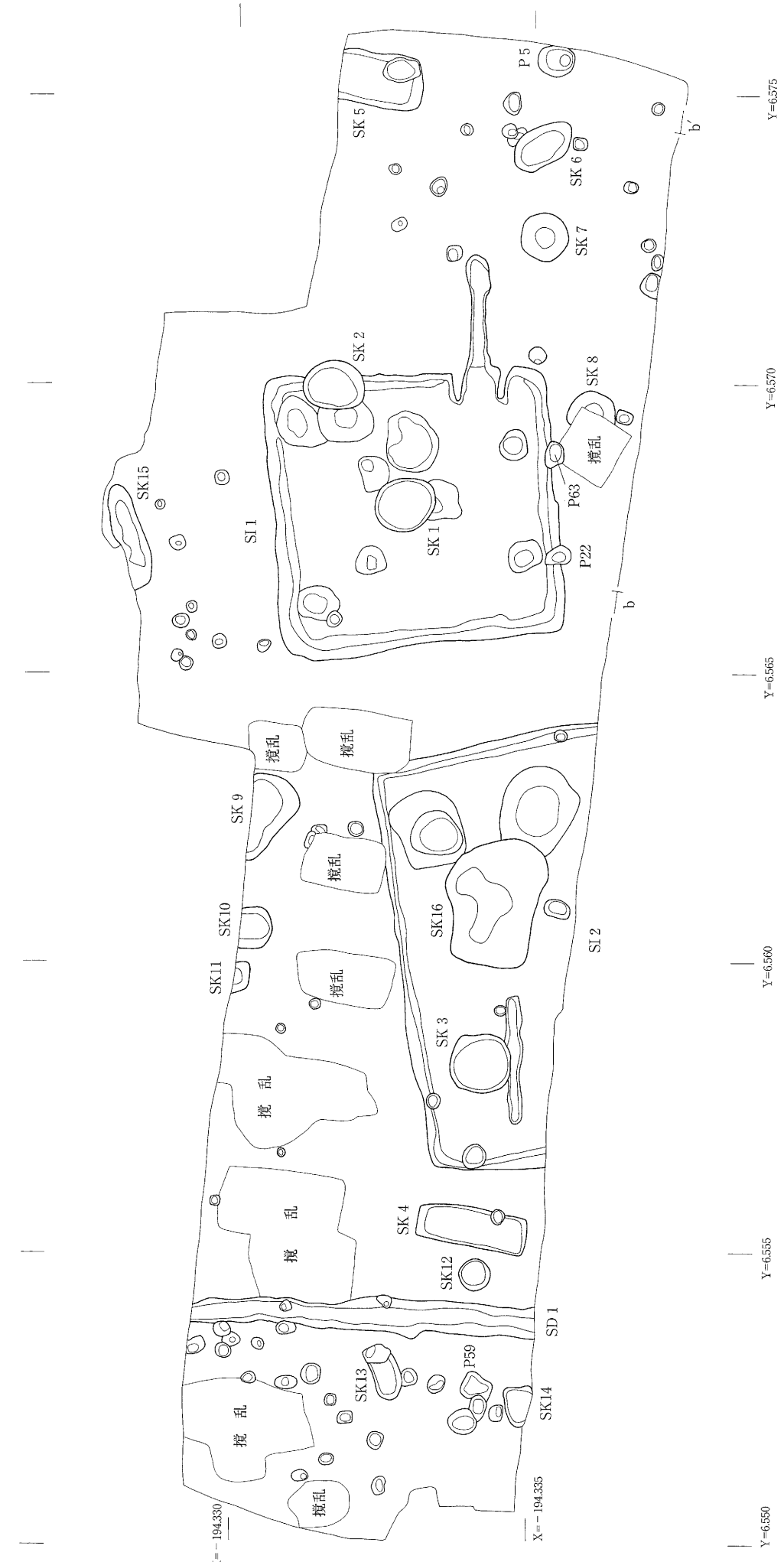
６）ピット

Ⅰ区では、267基のピットが検出された。このうち柱列、掘立柱建物跡を構成するものを除くと249基となる。大半のものは、径20～30cmの円形を呈する。柱痕跡を持つものもほぼ半数近く存在している。堆積土は黒褐色ないしにぶい黄褐色シルトである。調査区の南半に集中し、何箇所かに重複する傾向を示していることから、この場所で建物の建て替えが行われていた可能性が考えられる。間尺の不揃いな比較的小規模の建物になるものと思われ、野外調査中及び整理作業でも建物跡の想定はできなかった。出土遺物は、P245から回転糸切り無調整の須恵器坏（E－25）が出土している。また、P61、P225からは龍泉窯系の青磁碗片が出土したが、いずれも細片であるため図示し得なかった。その他のピットからは、ロクロ土師器片、赤焼土器片、土師質土器片、須恵器片、古瀬戸片、陶磁器片、瓦片、鉄滓などが出土している。

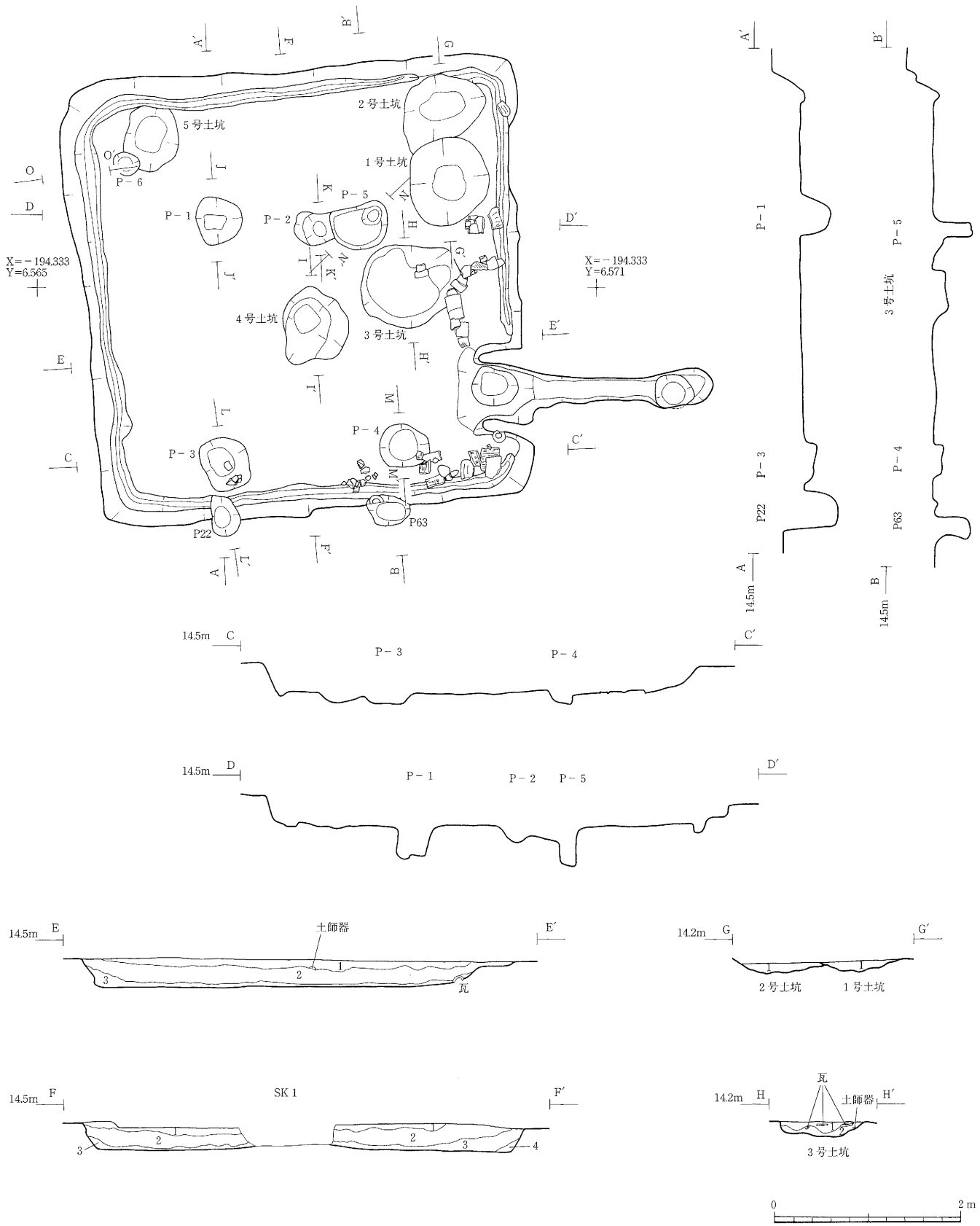
６　Ⅱ区の発見遺構と出土遺物

１）竪穴住居跡

SI１竪穴住居跡　【位置】調査区中央部やや東側で検出された。【遺存状況】南壁部分が一部撹乱により切られている以外遺在状況は比較的良好である。【重複】SK１、SK２、P64と重複し、これらより古い。【平面形・方向】平面形は方形を基調とする。方向は、西辺を基準としてN－6°－Wである。【規模】規模は南北4.9m、東西4.93mである。床面積は24.2㎡である。【堆積土】４層認められた。いずれもⅢ層ブロックを含むことから人為堆積層と考えられる。カマド・煙道部の堆積土は９層に分かれその中の３～７・９層には焼土・炭化物が多量に含まれている。【壁の状況】Ⅲ層を壁としており、周溝底面から直立気味に立ち上がっている。残存壁高は31cmである。【床面の状況】床面はほぼ平坦でしまっている。住居中央部はⅢ層を、その周辺部は掘方埋土を床面としている。床面上に土坑を５基検出した。平面形は円形もしくは不整な円形を呈する。規模は径70～110cm、深さ12～17cmである。このうち４号土坑については、壁面が被熱により赤色硬化していること、堆積土に多量の焼土塊、木炭粒を含むことから炉の可能性がある。また、１号土坑と２号土坑には重複があることから、時間差があったものと思われる。【カマド】東辺部南よりで検出された。燃焼部は天井部が失われ、袖部が残存しており、規模は幅が１m、奥行きは底面の窪みの状況から64cmとみられる。袖部はⅢ層のシルトブロックを多量に含む暗褐色及び黒褐色シルトを積み上げて構築されている。煙道部は長さ1.92m、幅27cmで先端には径42cmの煙出しピットが掘り込まれている。カマド左袖先端よりカマド側壁と住居東壁を囲むようにＬ字状に丸瓦、平瓦が並べられている。その中に木炭粒、焼土ブロックを多量に含む埋土が見られることから、カマドの灰、消し炭、木炭を廃棄するための区画の可能性が考えられる。【柱穴】住居の床面から６基のピットが検出された。その中で位置や規模などからP－1、P－3、P－4、P－5が主柱穴と考えられる。これらのピットはいずれも円形を基調とし、規模は径50～60cm、深さ12～47cmである。このうちP－１とP－５には径15～20cmの柱痕跡が認められる。また東壁で２基のピット（P22、P63）が検出された。配置関係や規模から住居南側出入り口の施設に伴う柱穴と考えられる。【周溝】カマド部分を除く大部分において、壁際直下で検出された。断面形はほぼU字形もしくは扁平な逆台形を呈し、規模は幅６～27cm、深さ４～７cmである。【出土遺物】堆積土、床面、カマド、煙道、土坑、ピット、周溝からロクロ土師器坏（D－1～6、8）、



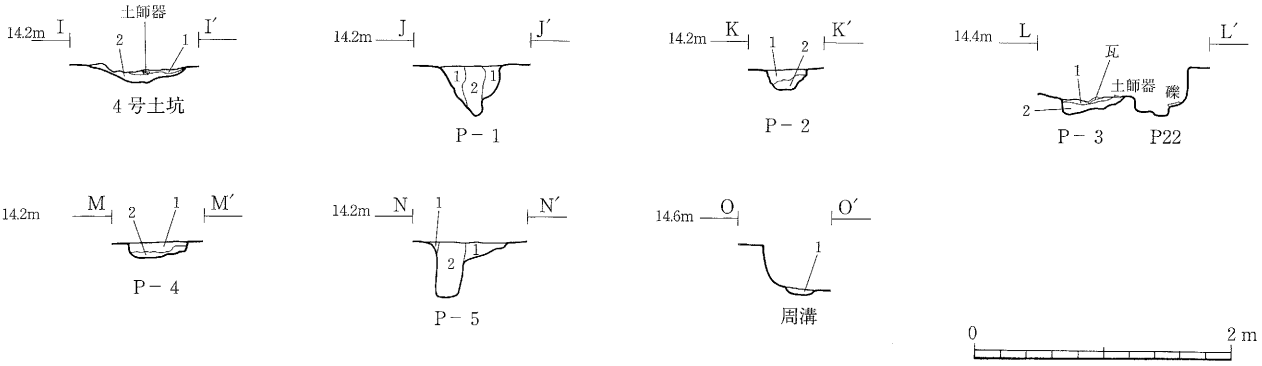
第15図　Ⅱ区遺構配置図（1/100）



層　位	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	Ⅲ層土小ブロック、木炭粒、焼土粒を含む。
2	10YR3/3　暗褐色	シルト	Ⅲ層土小ブロックを多量に含む。木炭粒を含む。
3	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層土小ブロック、木炭粒、焼土塊を含む。
4	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	Ⅲ層土小ブロック、木炭粒を含む。

層　位	土　　色	土　性	備　　考
1号土坑 1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト小ブロックを含む。
2号土坑 1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	
3号土坑 1	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土ブロック、木炭粒、砂礫を含む。
2	7.5YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土粒、木炭粒、砂礫を含む。

第16図　Ⅱ区SI 1 竪穴住居跡（1）



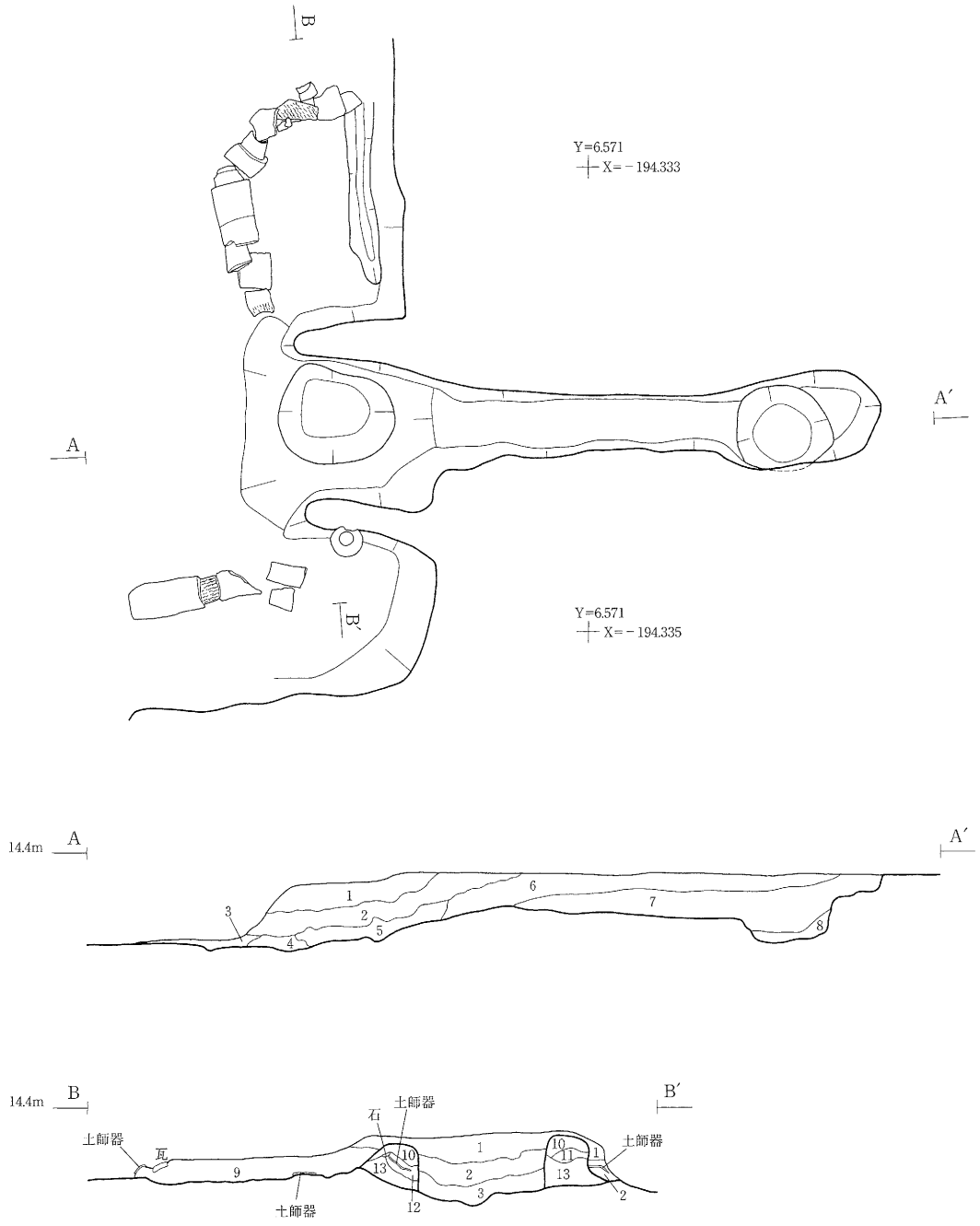
層位	土色	土性	備考
4号土坑 1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土塊、木炭粒を含む。
2	5YR2/3 極暗赤褐色	粘土質シルト	焼土粒、木炭粒を含む。
P－1 1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	φ5～50mmの小礫、黒褐色シルトブロックを含む。
2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト粒、木炭粒を含む。(柱痕跡)
P－2 1	10YR3/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色シルト粒を含む。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
P－3 1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト粒を含む。

層位	土色	土性	備考
P－3 2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルトブロックを多量に含む。
P－4 1	5YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	φ50mmの焼土ブロック、木炭粒を含む。
2	5YR3/2 極暗赤褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルトブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
P－5 1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	黒褐色シルトブロックを含む。
2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト粒、木炭粒を含む。(柱痕跡)
周溝 1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト粒、木炭粒を含む。

第17図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡（２）

椀（D－7）、甕（D－10、11、14、15）、須恵器坏（E－1、3～6、8、11、12、17、18、26）、蓋（E－13）、重弁蓮華文軒丸瓦（F－1、2）、細弁蓮華文軒丸瓦（F－3）、丸瓦（F－4～8）、平瓦（G－1～5）が出土したほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。このうち、土師器坏の内面は、ヘラミガキ、黒色処理されている。底部は回転ヘラ切りによる切り離し後ヘラケズリされるものと切り離し後無調整のものとがある。D－1には底面に「講院」ヵの、D－4には「東」ヵの墨書がある。甕はロクロ調整された後、内面をヘラナデ、ヘラミガキされている。須恵器坏は、いずれも底部の切り離しが回転ヘラ切りである。底面に「西」（E－1）、「佛」（E－3）、体部外面に「東」（E－4）の墨書のあるものと内面に朱痕のあるもの（E－26）とが見られる。また、E－5にも底面に判読不能の墨書が認められ、内面に墨痕がある。

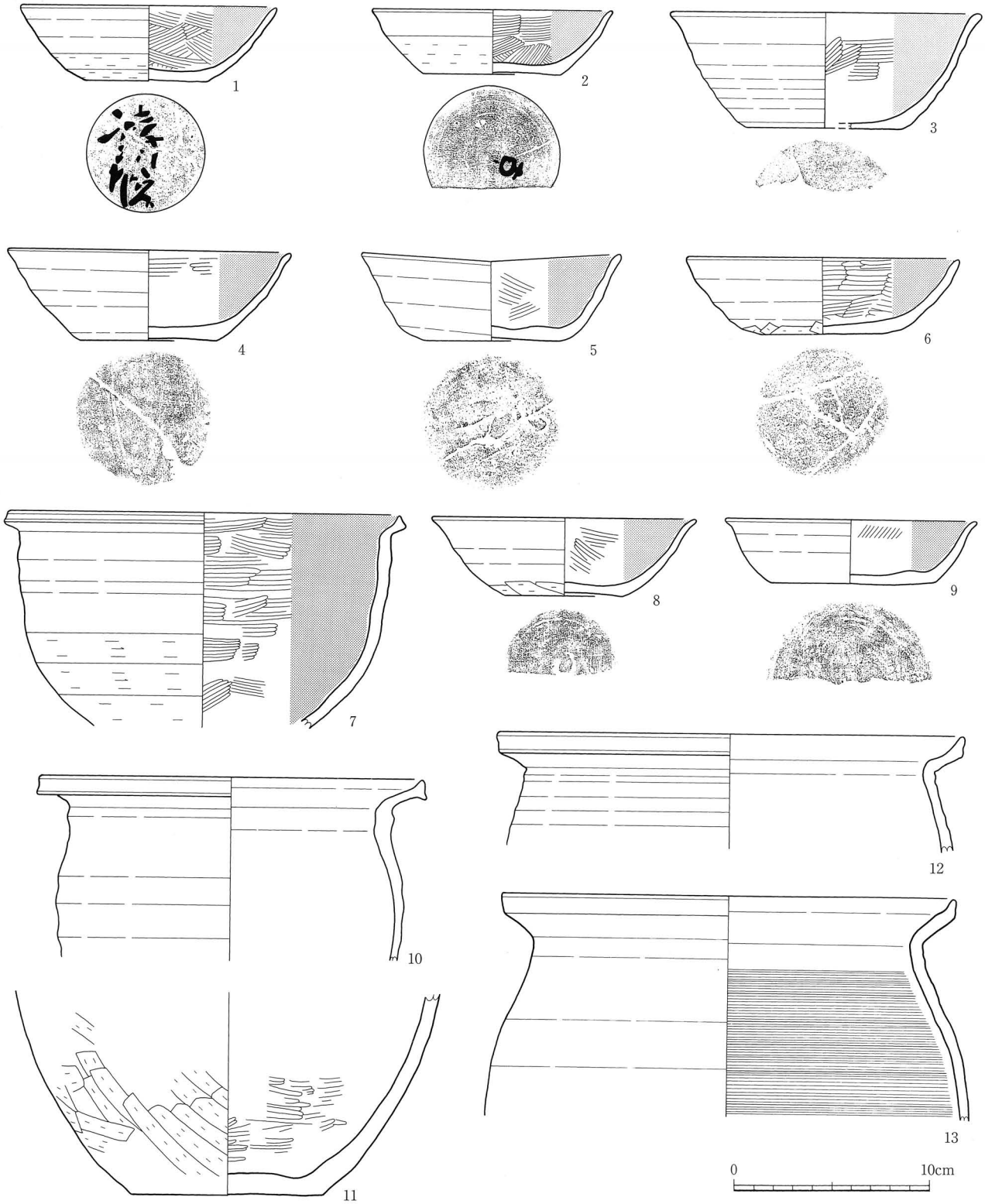
SI２竪穴住居跡　【位置】調査区の中央部から西側にかけて検出された。【遺存状況】遺構の南半部が調査区外へ延びているため、北半部のみの検出となっている。【重複】SK３、SK16と重複し、これらより古い。【平面形・方向】方形もしくは長方形を呈するものと思われる。方向は、北辺を基準としてE－8°－Nである。【規模】規模は東西6.88m、南北3.93m以上である。確認された床面積は27.04㎡である。【堆積土】１層確認された。層中にⅢ層小ブロックを含むことから人為堆積層と考えられる。【壁の状況】Ⅲ層を壁としており、床面からやや開き気味に立ち上がっている。残存壁高は平均すると20cmである。【床面の状況】ほぼ平坦でⅢ層を床面としている。床面上に土坑２基、溝状遺構１条を検出した。１号土坑は不整な円形を呈し、規模は長軸1.34m、短軸1.04m、深さ22cmである。西端をSK16に切られている。２号土坑は不整形を呈し、規模は、南北1.3m、東西1.4m、深さ36cmである。溝状遺構は住居の北西コーナー部で東西方向に検出された。規模は長さ2.2m、幅17～27cm、深さ４～７cmである。【柱穴】住居の床面から５基のピットが検出された。その中でP－1、P－2、P－5は壁沿いに周溝を切って検出されていることから壁柱穴と考えられる。【周溝】壁際を全周して確認された。断面形はV字形で、規模は幅７～16cm、深さ６～21cmである。【出土遺物】堆積土、床面、土坑、ピット、周溝からロクロ土師器坏（D－20）、須恵器坏（E－7、9、10、14、15、21、22、27）、甕（E－23）が出土したほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。土師器坏は、内面をヘラミガキ、黒色処理されており、底部は回転ヘラ切り、無調整である。須恵器坏は、底部の切り離し技法が回転ヘラ切りによるもの（E－14、21、27）と回転糸切りによるもの（E－7、9、10、15）に分かれる。このうちE－27は、切り離し後底面と底部周縁をヘラケズリしている。底面に「乙」ヵ



層　位	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4、シルトブロック、木炭粒を含む。
2	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4、シルトブロックを多量に含む。
3	7.5YR2/1　黒色	粘土質シルト	木炭塊、焼土粒を多量に含む。
4	7.5YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土小ブロック、木炭粒を多量に含む。
5	7.5YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	焼土小ブロック、木炭粒、10YR5/4シルト小ブロックを含む。
6	7.5YR3/2　黒褐色	シルト	焼土粒、木炭粒、10YR5/4シルト粒を含む。
7	10YR3/2　黒褐色	シルト	焼土粒小ブロック、木炭粒、10YR5/4シルト粒を含む。

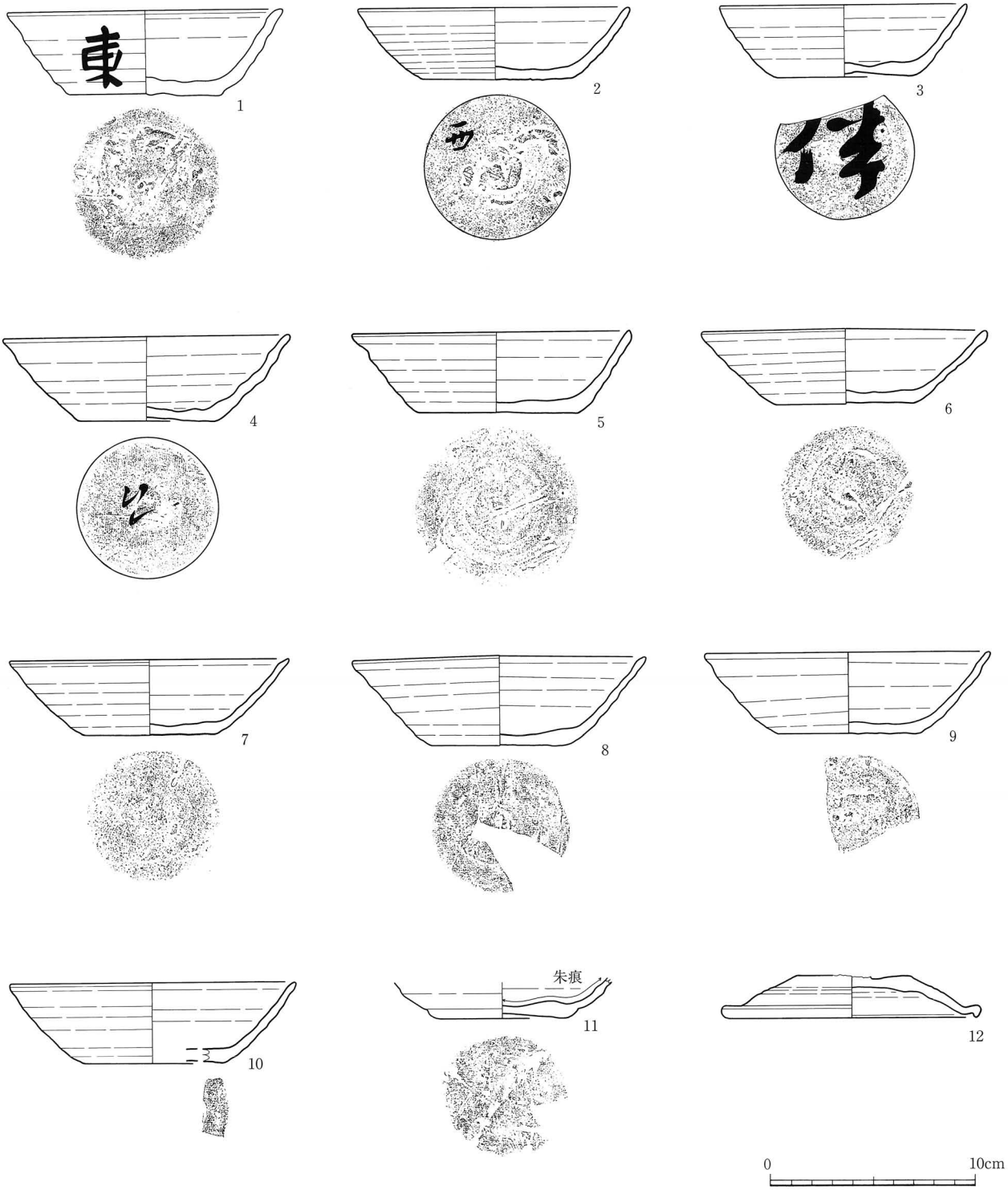
層　位	土　　色	土　性	備　　考
8	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	木炭塊、10YR5/4シルト小ブロックを含む。
9	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	7.5YR3/2シルト小ブロック、焼土ブロック、木炭粒を含む。
10′	10YR3/3　暗褐色	シルト	10YR5/4シルト粒を含む。（カマド構築土）
11	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4シルト粒を含む。（カマド構築土）
12	5YR4/6　赤褐色	シルト	被熱による赤変。（カマド構築土）
13	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	（カマド構築土）

第18図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡　カマド



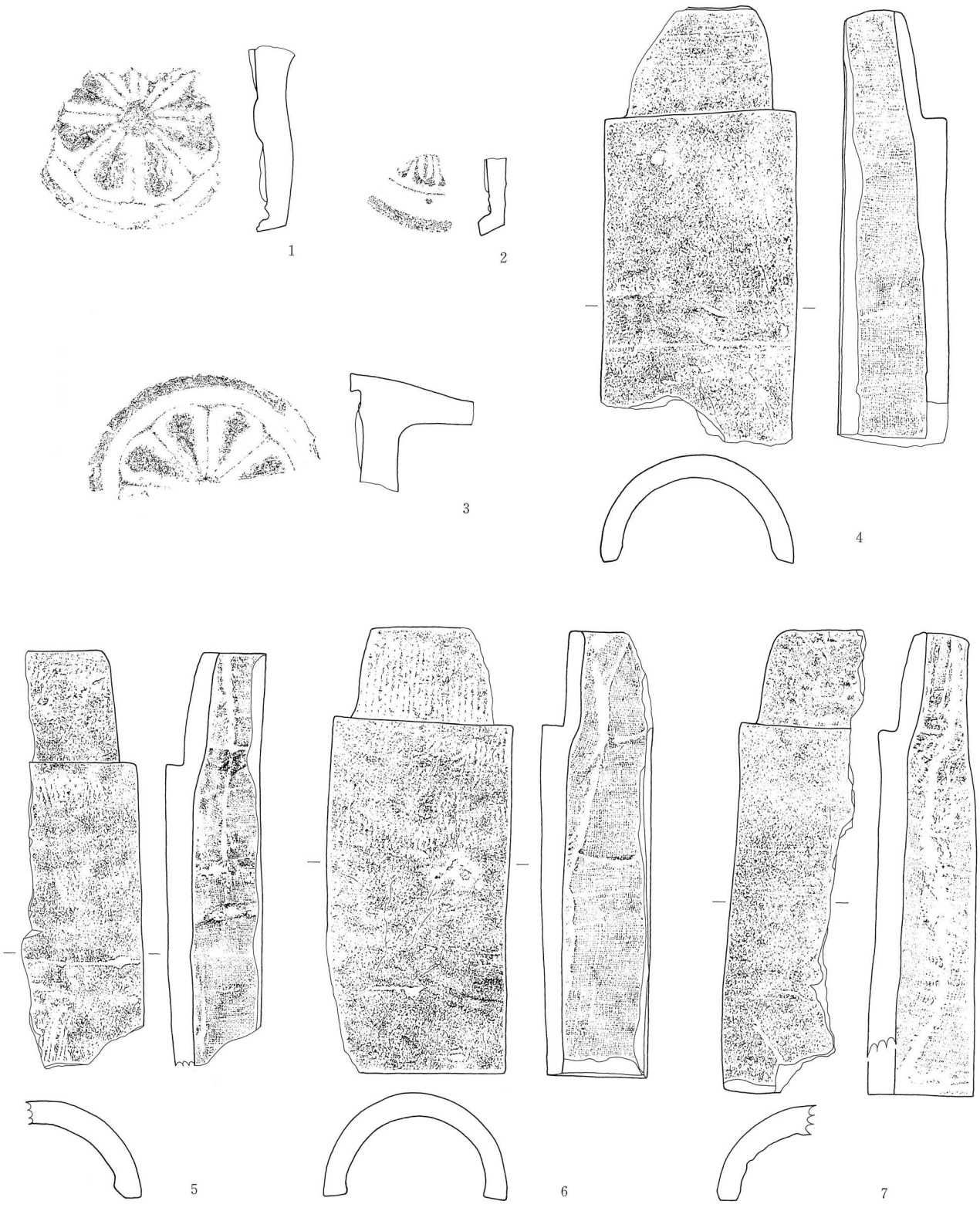
図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	D－1	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SI 1　カマド		3.9	13.1	6.3	外面ロクロナデ　回転ヘラケズリ　内面ヘラミガキ黒色処理　底部墨書「講院」カ	8－1
2	D－4	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SI 1　3層		3.3	12.3	7.0	外面ロクロナデ　回転ヘラケズリ　内面ヘラミガキ黒色処理　底部回転ヘラ切り、墨書「東」カ	8－5
3	D－2	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SI 1　床面直上		5.9	16.0	8.0	外面ロクロナデ　内面ヘラミガキ黒色処理　底部回転ヘラ切り、ヘラケズリ	8－2
4	D－3	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SI 1　床面直上		4.7	14.6	7.1	外面ロクロナデ　内面ヘラミガキ黒色処理　底部回転ヘラ切り、ヘラケズリ	8－3
5	D－5	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SI 1　カマド		4.5	13.4	7.5	外面ロクロナデ　内面ヘラミガキ黒色処理　底部回転ヘラ切り	8－4
6	D－8	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SI 1　3層		4.1	14.0	6.5	外面ロクロナデ、ヘラケズリ　内面ヘラミガキ黒色処理　底分回転ヘラ切り	8－6
7	D－7	ロクロ土師器　椀	Ⅱ区		SI 1　P－3		(11.0)	20.6		外面ロクロナデ、回転ヘラケズリ　内面ヘラミガキ黒色処理	
8	D－6	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SI 1　周溝		4.0	13.6	6.0	外面ロクロナデ　内面ヘラミガキ黒色処理　底部回転ヘラ切り、ヘラケズリ	8－7
9	D－21	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SI 1　3層		3.3	12.9	8.4	外面ロクロナデ　内面ヘラミガキ黒色処理　底部回転ヘラ切り、ヘラケズリ	
10	D－10	ロクロ土師器　甕	Ⅱ区		SI 1　カマド		(9.2)	20.6		外面ロクロナデ　内面ロクロナデ、ヘラナデ	8－9
11	D－14	ロクロ土師器　甕	Ⅱ区		SI 1　3号土坑		(10.4)		9.9	外面ロクロナデ、ヘラケズリ　内面ロクロナデ、ヘラミガキ	
12	D－11	ロクロ土師器　甕	Ⅱ区		SI 1　カマド		(5.9)	24.0		外面ロクロナデ　内面ロクロナデ	8－10
13	D－15	ロクロ土師器　甕	Ⅱ区		SI 1　床面直上		(11.4)	23.2		外面ロクロナデ　内面ロクロナデ、回転ヘラナデ	8－8

第19図　Ⅱ区SI 1 竪穴住居跡出土遺物（1）



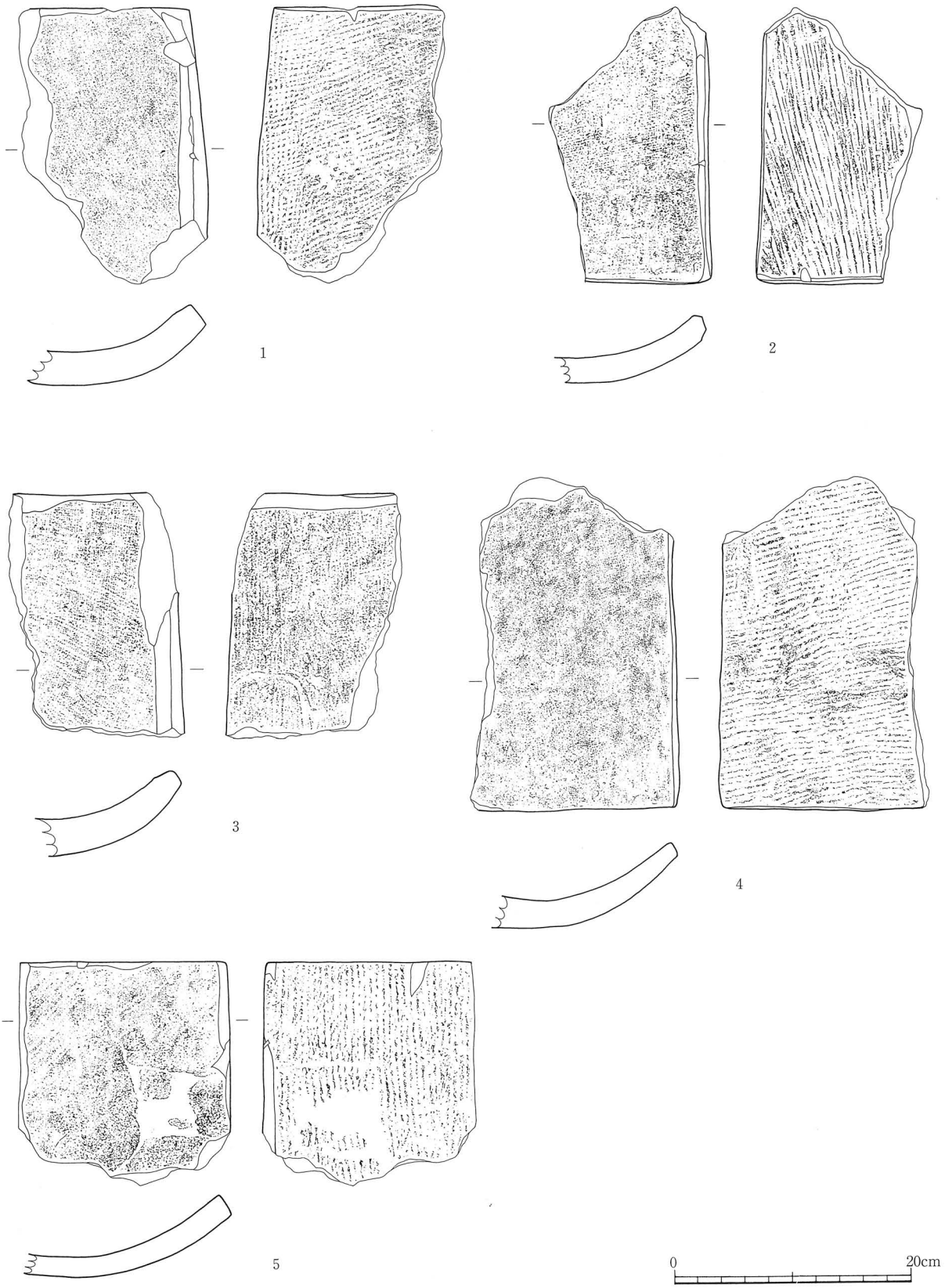
図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	E－4	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　床面直上		4.2	13.3	7.6	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り　体部外面墨書「東」	8－13
2	E－1	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　床面直上		3.6	13.3	7.4	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り、ナデ　墨書「西」	8－11
3	E－3	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　3層		3.6	12.0	6.8	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り　墨書「佛」	8－12
4	E－5	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　P63		4.3	14.0	7.0	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り、ナデ　墨書	8－17
5	E－6	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　床面直上		4.1	13.7	8.1	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	8－14
6	E－8	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　2層		3.8	13.9	6.7	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	9－1
7	E－11	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　カマド		3.8	13.7	6.6	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	8－16
8	E－12	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　3号土坑		4.5	14.4	6.9	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	9－2
9	E－18	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　3層		4.0	14.0	6.8	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り、ナデ	8－15
10	E－17	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　2層		4.0	14.1	6.8	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	
11	E－26	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 1　3号土坑		(1.8)		6.5	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り、ヘラケズリ　内面に朱痕	
12	E－13	須恵器　甕	Ⅱ区		SI 1　P63		(2.1)	12.6	5.7	外面ロクロナデ、回転ヘラケズリ　内面ロクロナデ	8－18

第20図　Ⅱ区SI 1 竪穴住居跡出土遺物（2）



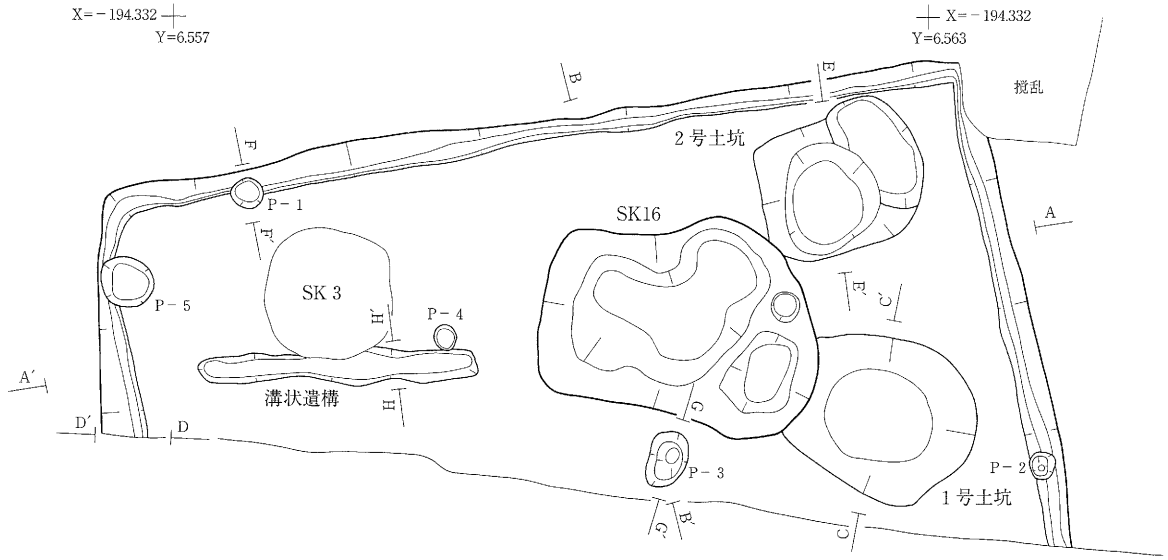
図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	F－1	軒丸瓦	Ⅱ区		SI 1　2層		(10.6)	19.0	(3.8)	瓦当　8葉重弁蓮華文	10－1
2	F－3	軒丸瓦	Ⅱ区		SI 1　床面直上			15.0	(1.8)	瓦当　20葉細弁蓮華文	10－3
3	F－2	軒丸瓦	Ⅱ区		SI 1　床面直上			20.0	(3.4)	瓦当　8葉重弁蓮華文	10－2
4	F－6	丸瓦	Ⅱ区		SI 1　カマド		(37.8)	16.4	3.1	凸面縦位縄叩き、ロクロナデ　凹面粘土紐痕、布目　側面ヘラケズリ	10－5
5	F－4	丸瓦	Ⅱ区		SI 1　カマド		(35.8)	(9.8)	2.0	凸面縦位縄叩き、スリケシ　凹面粘土紐痕、布目、布綴じ痕　側面ヘラケズリ	10－4
6	F－7	丸瓦	Ⅱ区		SI 1　カマド		38.2	15.6	3.0	凸面縦位縄叩き、スリケシ　凹面粘土紐痕、布目、布綴じ痕　側面ヘラケズリ	10－6
7	F－8	丸瓦	Ⅱ区		SI 1　3号土坑		39.9	(8.2)	2.3	凸面縦位縄叩き、ロクロナデ　凹面粘土紐痕、布目、布綴じ痕　側面ヘラケズリ	10－7

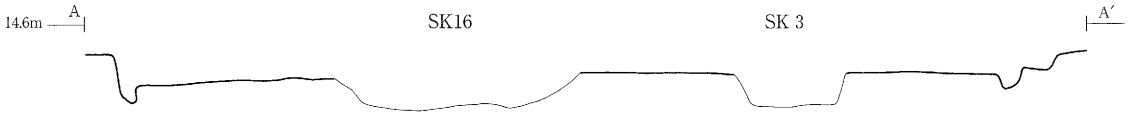
第21図　Ⅱ区SI 1 竪穴住居跡出土遺物（3）

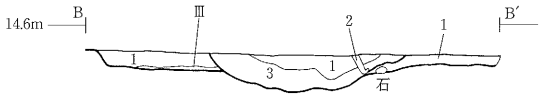


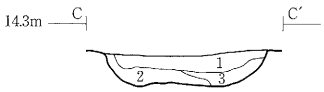
図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	G－1	平瓦	Ⅱ区		SI 1　床面直上		(23.4)	(15.4)	2.8	凸面縦位縄叩き→横位縄叩き　凹面布目、糸切り痕　側面ヘラケズリ	10－8
2	G－2	平瓦	Ⅱ区		SI 1　床面直上		(23.5)	(13.5)	2.2	凸面縦位平行叩き　凹面布目、糸切り痕　側面ヘラケズリ	10－9
3	G－5	平瓦	Ⅱ区		SI 1　床面直上		(20.8)	(14.0)	3.2	凸面縦位縄叩き、スリケシ　凹面布目、糸切り痕　側面ヘラケズリ	10－11
4	G－3	平瓦	Ⅱ区		SI 1　床面直上		(28.2)	(17.6)	2.7	凸面横位縄叩き　凹面布目、スリケシ　側面ヘラケズリ	10－10
5	G－4	平瓦	Ⅱ区		SI 1　床面直上		(19.0)	(17.9)	2.1	凸面縦位縄叩き　凹面布目、糸切り痕　側面ヘラケズリ	

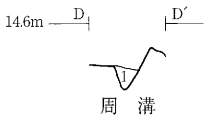
第22図　Ⅱ区SI１竪穴住居跡出土遺物（４）

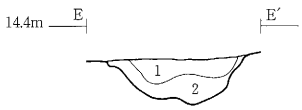


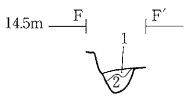


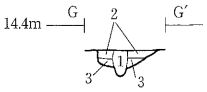


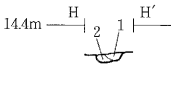


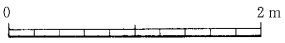








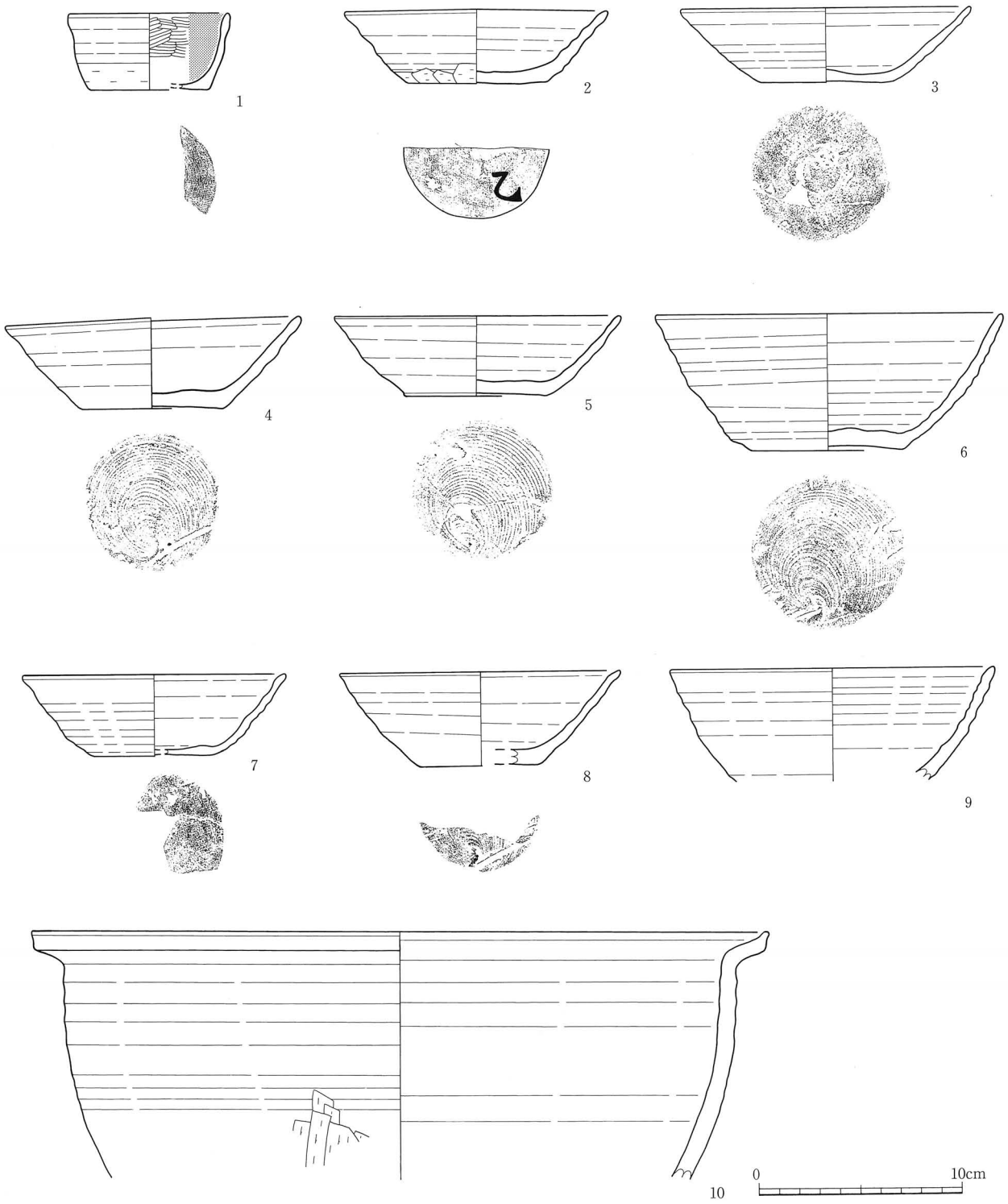




層位	土色	土性	備考
SI 2 1	10YR3/2 黒褐色	シルト	10YR5/4シルト小ブロック、酸化鉄集積層、木炭粒を含む。
SK16 1	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR5/4シルト粒、マンガン粒、木炭粒を含む。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4シルト小ブロック、マンガン粒、木炭粒を含む。
1号土坑 1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	10YR3/2粘土質シルト小ブロックを含む。
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
2号土坑 1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
2	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	10YR5/4粘土小ブロックを含む。

層位	土色	土性	備考
溝状遺構 1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2粘土質シルト小ブロックを含む。
P－1 1	10YR3/2 黒褐色	粘土	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
2	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	10YR3/2粘土小ブロックを含む。
P－3 1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	木炭粒を含む。
2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4シルト粒を含む。
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4シルトブロックを含む。
周溝 1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4シルト粒、木炭粒を含む。

第23図　Ⅱ区SI 2 竪穴住居跡



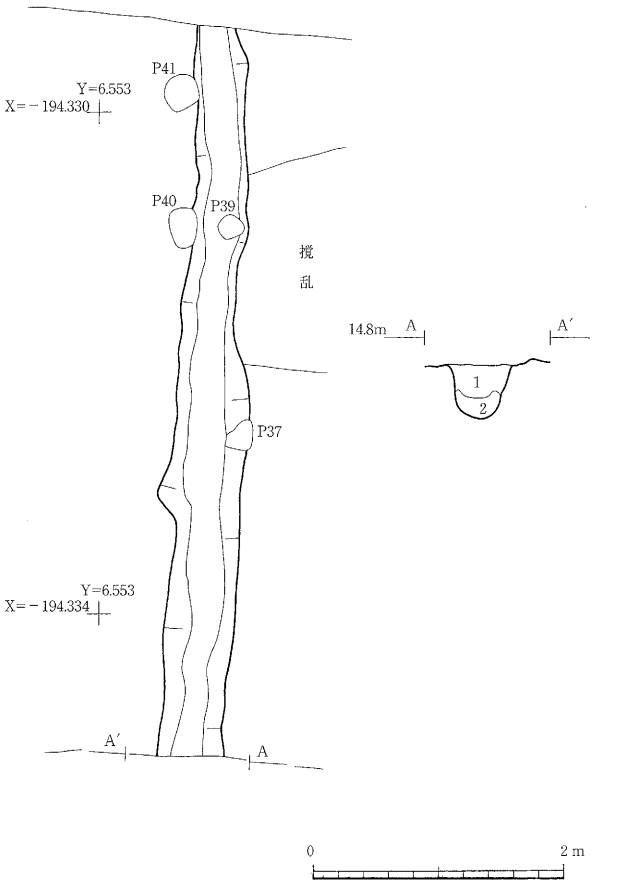
図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	D－20	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SI 2　2号土坑		3.8	8.0	5.9	外面ロクロナデ、回転ヘラケズリ　内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転ヘラ切り	9－10
2	E－27	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 2　床面直上		3.7	13.0	7.0	外面ロクロナデ、ヘラケズリ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り、ヘラケズリ　墨書「乙」カ	9－5
3	E－14	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 2　1層		3.7	14.4	6.6	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り、ナデ	9－8
4	E－10	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 2　床面直上		4.5	14.6	7.0	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転糸切り	9－4
5	E－7	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 2　床面直上		4.0	14.2	7.1	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転糸切り	9－7
6	E－15	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 2　床面直上		6.8	17.2	7.5	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転糸切り	9－3
7	E－21	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 2　1層		4.0	13.0	6.0	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	9－9
8	E－9	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 2　床面直上		4.7	12.8	6.0	外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転糸切り	9－6
9	E－22	須恵器　坏	Ⅱ区		SI 2　床面直上		(5.5)	16.0		外面ロクロナデ　内面ロクロナデ	9－11
10	E－23	須恵器　甕	Ⅱ区		SI 2　床面直上		(12.2)	32.6		外面ロクロナデ、ヘラケズリ　内面ロクロナデ	9－12

第24図　Ⅱ区SI 2 竪穴住居跡出土遺物

の墨書がある。なおE－27は、色調が淡い橙色を呈し内外面に黒斑が見られるなど一般的な須恵器とは異なった特徴を有している。

2）溝跡

SD１溝跡　【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】P37、P39、P40、P41と重複し、これらより古い。【方向・規模】ほぼ直線的に南北に延びている。方向はN－3°－Eである。検出した長さは5.8m、上幅30～66cm、下幅18～33cm、深さ43cmである。【断面形・壁・底面】断面形はU字形を呈し、壁は底面から丸みをおびて直立して立ち上がる。底面は凹凸がある。【堆積土】２層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、丸瓦片、平瓦片、鉄製品が出土した。



層位	土色	土性	備考
1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	小礫を含む。
2	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロックを含む。

第25図　Ⅱ区SD１溝跡

3）土坑

SK１土坑　【位置】調査区の中央部東側で検出された。【重複】SI１と重複し、これより新しい。【平面形・規模】南北にやや長い円形を呈する。規模は南北93cm、東西1.07m、深さ16cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、平瓦片が出土した。

SK２土坑　【位置】調査区の東半部で検出された。【重複】SI１と重複し、これより新しい。【平面形・規模】南北に長い隅丸長方形を呈する。規模は南北1.03m、東西87cm、深さ22cmである。方向はN－0°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈し、壁は西壁ではほぼ垂直に、東壁では底面から丸みをおびて立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】３層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。

SK３土坑　【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】SI２と重複し、これより新しい。【平面形・規模】ほぼ正円形を呈する。規模は南北1.07m、東西1.03m、深さ45cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】２層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】須恵器長頸壺（E－16）のほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。

SK４土坑　【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】P62と重複し、これより古い。【平面形・規模】南北に長い長方形を呈する。規模は長軸1.88m、短軸69cm、深さ38cmである。方向はN－10°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形を呈し、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。【堆積土】８層確認された。黄褐色粘土、黒褐色シルトブロックを多量に含む。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片、鉄製品が出土した。

SK５土坑　【位置】調査区の北東コーナーで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】

遺構の一部が調査区外に延びているため全体の形状は不明であるが、南北に長い長方形を呈するものと思われる。規模は長軸1.45m以上、短軸93cm、深さ24cmである。方向はN－11°－Eである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦であるが、南東コーナー部に径60cm、深さ10cm程の窪みが見られる。【堆積土】２層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、須恵器片、平瓦片が出土した。

SK６土坑　【位置】調査区の東半部で検出された。【重複】Ｐ８と重複し、これより新しい。【平面形・規模】南北に長い不整な楕円形を呈する。規模は長径1.15m、短径63cm、深さ23cmである。方向は長軸方向でN－32°－Wである。【断面形・壁・底面】断面形は舟底状を呈し、壁は底面から丸みをおびて緩やかに立ち上がる。底面は起伏がある。【堆積土】２層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK７土坑　【位置】調査区の東半部で検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】円形を呈する。規模は、径83cm、深さ32cmである。【断面形・壁・底面】断面形は半円形を呈し、壁は底面から丸みをおびて緩やかに立ち上がる。底面は半球状である。【堆積土】２層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】ロクロ土師器坏（D－22）のほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、平瓦片が出土した。

SK８土坑　【位置】調査区の中央部東側南壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の西半部が撹乱により切られているが、円形を呈するものと考えられる。規模は径82cm、深さ20cmである。【断面形・壁・底面】断面形は椀形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびる。【堆積土】２層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

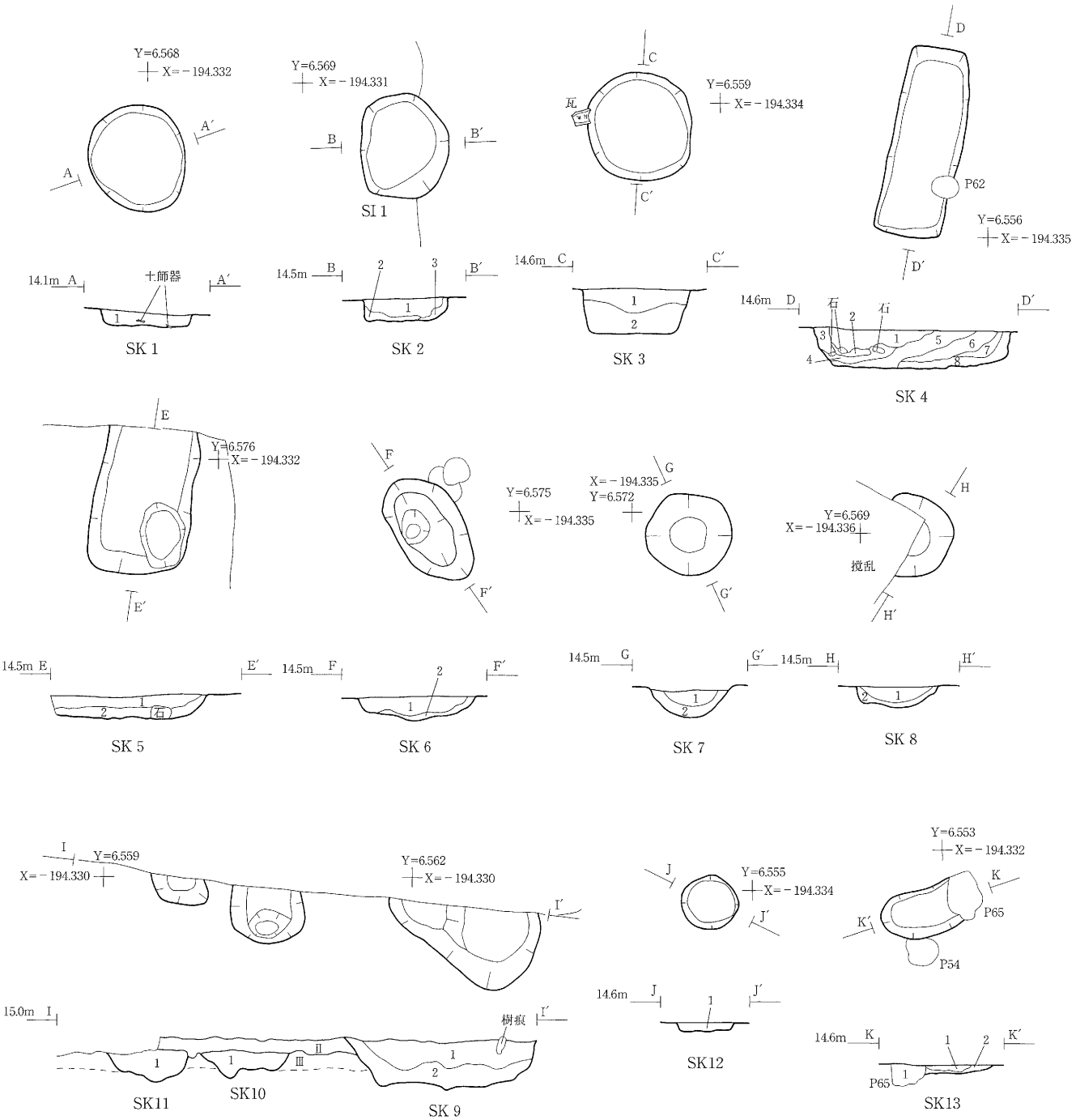
SK９土坑　【位置】調査区中央部北壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の北半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明である。規模は東西1.47m以上、南北78cm以上、深さ46cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はやや起伏がある。【堆積土】２層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、赤焼土器片、平瓦片が出土した。

SK10土坑　【位置】調査区中央部北壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の北半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明であるが、不整な方形を呈するものと思われる。規模は東西73cm、南北55cm以上、深さ27cmである。【断面形・壁・底面】断面形は逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は起伏がある。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK11土坑　【位置】調査区中央部北壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の北半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明であるが、方形もしくは南北に長い長方形を呈するものと思われる。規模は東西53cm、南北26cm以上、深さ31cmである。【断面形・壁・底面】断面形は椀形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびる。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。

SK12土坑　【位置】調査区の西半部で検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】円形を呈し、規模は径55cm、深さ８cmである。【断面形・壁・底面】断面形は扁平な逆台形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は平坦である。【堆積土】１層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】赤焼土器片、須恵器片、平瓦片が出土した。

SK13土坑　【位置】調査区西半部で検出された。【重複】P65と重複し、これより古い。【平面形・規模】遺構の東端をピットに切られているが、東西に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は長径67cm以上、短径46cm、深さ９cmである。【断面形・壁・底面】断面形は舟底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸みをおびる。



遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SK 1	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	焼土粒、木炭粒、10YR5/4シルト粒を含む。
SK 2	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR2/2シルトブロックを含む。
	2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	
	3	10YR4/4　褐色	シルト	
SK 3	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR4/4シルトブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
	2	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR4/4シルトブロックを多量に含む。
SK 4	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロックを多量に含む。
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	10YR3/2粘土質シルトブロックを含む。
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2粘土質シルトブロック、小礫を含む。
	4	10YR3/1　黒褐色	シルト	木炭粒を含む。
	5	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	φ4mmの10YR5/4粘土ブロック、木炭粒を含む。
	6	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	10YR3/2シルトブロックを多量に含む。
	7	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
	8	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	10YR3/2粘土質シルトブロック、小礫を含む。
SK 5	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4粘土小ブロック、焼土粒、木炭粒を含む。

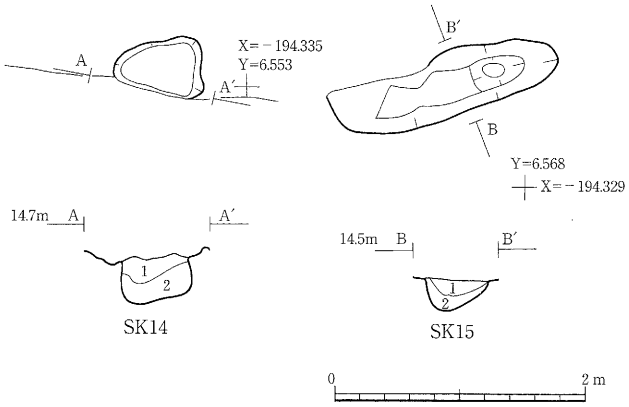
遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SK 5	2	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4粘土小ブロック、木炭粒を含む。
SK 6	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土ブロック、10YR4/4シルトブロックを含む。
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	10YR4/4シルトブロックを含む。
SK 7	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/4シルトブロック、木炭粒を含む。
	2	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/4シルト小ブロック、木炭粒を含む。
SK 8	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	10YR5/4シルト粒、焼土粒、灰を含む。
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	10YR5/4シルトブロックを多量に含む。
SK 9	1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
	2	10YR3/2　黒褐色	粘土	10YR5/4粘土ブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
SK10	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
SK11	1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土ブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
SK12	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土ブロック、木炭粒を含む。
SK13	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
	2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土ブロック、木炭粒を含む。
P65	1	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土	10YR4/2粘土質シルト小ブロックを含む。

第26図　Ⅱ区土坑（1）

【堆積土】２層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】磨石（K－1）が出土した。

SK14土坑　【位置】調査区西半部南壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】調査区の南半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明である。規模は東西68cm、南北50cm以上、深さ38cmである。【断面形・壁・底面】断面形は長方形で、壁は底面から直立して立ち上がる。底面は東側に傾斜している。【堆積土】２層確認された。人為堆積層と考えられる。【出土遺物】土師器片、須恵器片が出土した。

SK15土坑　【位置】調査区中央部北壁沿いで検出された。【重複】他の遺構との重複はない。【平面形・規模】遺構の西半部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明である。規模は東西1.84m、南北50cmである。【断面形・壁・底面】断面形はＶ字形を呈し、壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は壁との境が明瞭ではない。【堆積土】２層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】遺物は出土しなかった。



遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
SK14	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロックを含む。
	2	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4粘土小ブロック、φ30mmの礫を含む。
SK15	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2粘土質シルト小ブロックを含む。

第27図　Ⅱ区土坑（２）

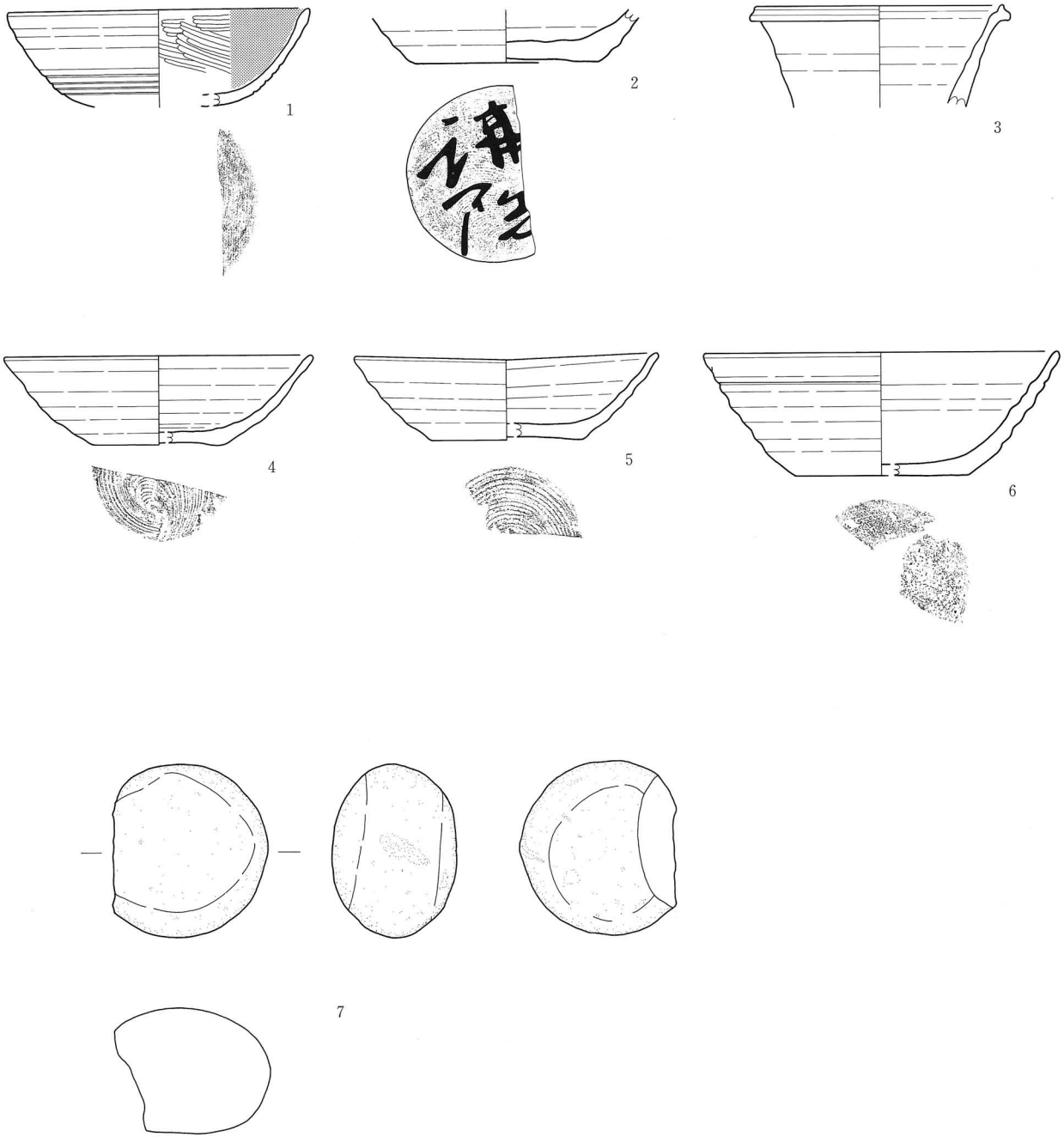
SK16土坑　【位置】調査区西半部南壁沿いで検出された。【重複】SI２と重複し、これより新しい。【平面形・規模】不整方形を呈する。規模は東西2.23m、南北1.73m、深さ30cmである。【断面形・壁・底面】断面形は椀形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は起伏がある。【堆積土】３層確認された。自然堆積層と考えられる。【出土遺物】須恵器坏（E－19、20、28）が出土したほか、土師器片、赤焼土器片、須恵器片、陶器片、丸瓦片、平瓦片が出土した。E－19、20は回転糸切り無調整で、E－28は回転ヘラ切り後に底面を手持ちヘラケズリされている。

４）ピット

Ⅱ区で検出されたピットは67基である。P22とP63はSI１の壁柱穴となるものである。Ⅰ区と比較するとピットの分布はやや疎らとなっており、西半に集中するが調査区内で建物として組めるものは見つからなかった。大半のピットは直径20cm前後の円形を呈し柱痕跡を持つものは僅かである。調査区東壁際で検出されたP5は、径60cm、深さ52cmの円形の掘り方に径20cmの柱痕跡を伴う柱穴であるが、同規模のピットは調査区内には存在しないことから、調査区外へ延びる建物の隅柱となる可能性も考えられる。出土遺物は、P59から底面に「講院」の墨書のある須恵器坏底部片が出土している。その他のピットからは、ロクロ土師器片、赤焼土器片、須恵器片、瓦片などが出土した。

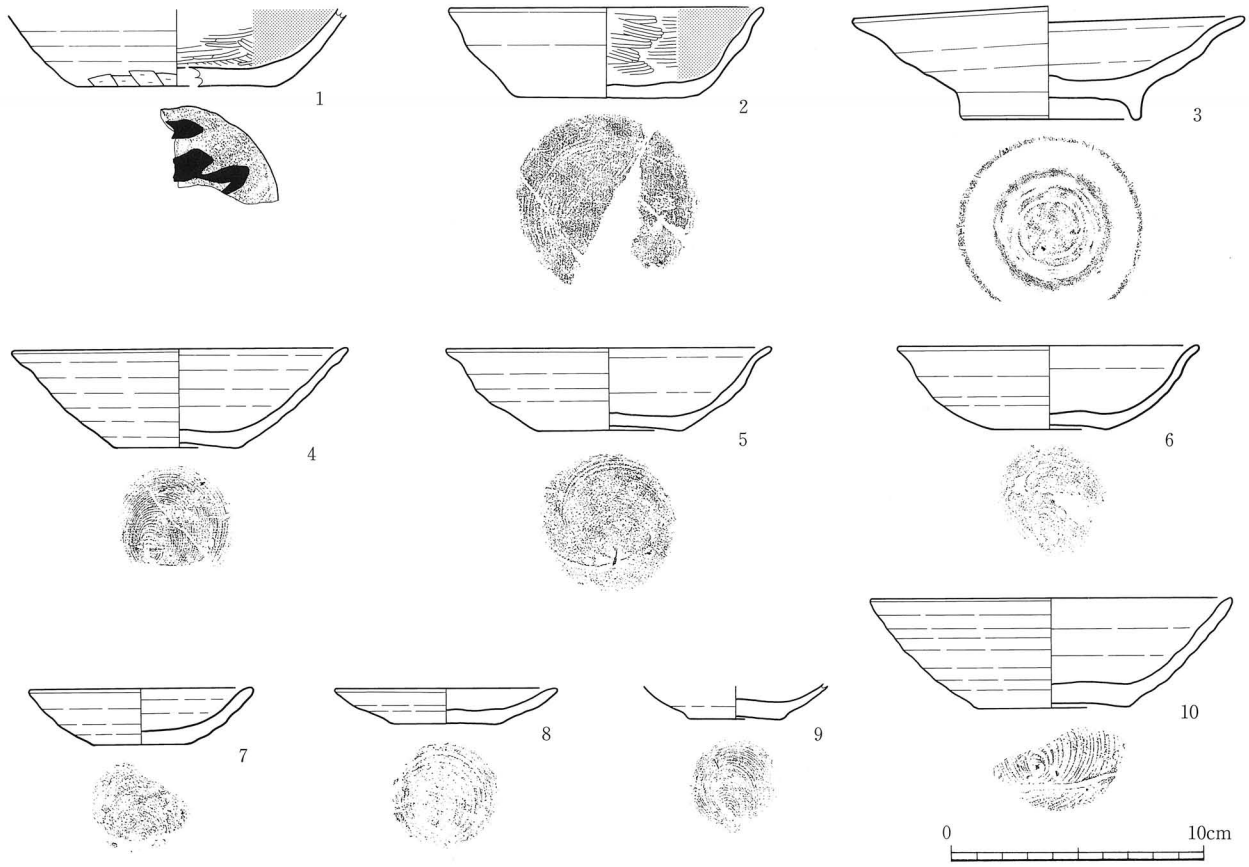
５）その他の出土遺物

Ⅰ区、Ⅱ区の遺構検出作業と試掘調査の２トレンチ、３トレンチから、ロクロ土師器、赤焼土器、土師質土器、須恵器、陶磁器、瓦、石製品などが出土している。土師器のうち調整技法が分かるものの大部分は内面をヘラミガキ黒色処理されたものである。図示した遺物は、ロクロ土師器坏（D－19、24）、赤焼土器坏（D－16、17、18）、高台付坏（D－12）、小皿（D－13、25、26）、須恵器坏（E－24）である。D－19は、回転ヘラ切り後底面を入念にヘラケズリされている。底面に判読不能の墨書がある。赤焼土器については、多賀城跡出土土器群中のE、F群に該当し、年代として凡そ10世紀代に収まるものと考えられる。



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	D－22	ロクロ土師器　坏	Ⅱ区		SK 7		(4.5)	14.0	(5.5)		外面ロクロナデ、平行沈線　内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転ヘラ切り	9 －13
2	E－ 2	須恵器　坏	Ⅱ区		P 59		(2.4)		8.7		外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転糸切り、ヘラケズリ　墨書「講院」	9 －18
3	E－16	須恵器　長頸壺	Ⅱ区		SK 3		(4.7)	12.0〃			外面ロクロナデ　内面ロクロナデ	9 －17
4	E－19	須恵器　坏	Ⅱ区		SK 16		4.1	14.4	6.2		外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転糸切り	9 －16
5	E－20	須恵器　坏	Ⅱ区		SK 16		4.0	14.1	7.0		外面ロクロナデ　内面ロクロナデ　底部回転糸切り	9 －14
6	E－28	須恵器　坏	Ⅱ区		SK 16		5.7	16.5	8.0		外面ロクロナデ、平行沈線　内面ロクロナデ　底部回転ヘラ切り、ヘラケズリ	9 －15
7	K－ 1	礫石器　磨石	Ⅱ区		SK 13		8.1	(7.2)	5.8	460.3		9 －19

第28図　Ⅱ区土坑・ピット出土遺物



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	特　　徴	写真図版
1	D－19	ロクロ土師器　坏	試掘調査		2トレンチ		(3.0)		7.8	外面ロクロナデ、ヘラケズリ　内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転ヘラ切り、ヘラケズリ　墨書	7－14
2	D－24	ロクロ土師器　坏	試掘調査		2トレンチ		3.6	12.6	7.4	外面ロクロナデ　内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転糸切り、ヘラケズリ	7－15
3	D－12	赤焼土器　高台付坏	Ⅱ区	Ⅱ層			4.1	15.6	7.2	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り　付高台	7－12
4	D－17	赤焼土器　坏	Ⅰ区	Ⅱ層			4.0	13.4	5.0	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	7－10
5	D－18	赤焼土器　坏	Ⅰ区	Ⅱ層			3.3	13.0	5.6	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	7－7
6	D－16	赤焼土器　坏	Ⅰ区	Ⅱ層			3.3	12.0	4.4	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	7－9
7	D－13	赤焼土器　小皿	Ⅱ区	Ⅱ層			2.2	8.9	3.9	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	7－11
8	D－25	赤焼土器　小皿	試掘調査		3トレンチ		1.4	8.8	4.3	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	7－16
9	D－26	赤焼土器　小皿	試掘調査		3トレンチ		(1.9)		3.8	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	7－17
10	E－24	須恵器　坏	Ⅰ区	Ⅰ層			4.4	14.4	6.2	内外面ロクロナデ　底部回転糸切り	7－13

第29図　その他の出土遺物

7　まとめと考察

1）SI1・2竪穴住居跡出土土器群について

今回の調査により図示し得た登録遺物のうち、半数以上がⅡ区のSI1・2竪穴住居跡（以下、SI1・2と略す。）出土のものである。ここでは遺構の全容が明らかとなっているSI1出土土器群の年代の検討を中心に若干の考察を加えていきたい。SI1出土土器群は、ロクロ土師器坏（D－1～6、8、9）、椀（D－7）、甕（D－10、11、14、15）、須恵器坏（E－1、3～6、8、11～13、17、18、26）、蓋（E－13）より構成されている。土師器の坏は、切り離し技法の明らかなものは総て回転ヘラ切りされ、D－5以外は、底部周縁を手持ちヘラケズリされるか回転ヘラケズリによる再調整を受けている。内面のヘラミガキは横方向から斜め方向で放射状のものは含まれない。器形は内弯して立ち上がり口縁が外反するものと直線的に立ち上がるものとがある。口径は12.3～16.0cm、底口比（口径に対する底径の比率）は0.46～0.57で平均すると0.52となる。椀は底部を欠損している。口径20.6cmで体部下半を回転ヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。須恵器坏は、回転ヘラ切りによる切り離し後無調整のものと軽くナデるものがある。器形は直線的に外傾して立ち上がり、ロクロ目が顕著なものとそうでない

ものが含まれる。口径は12.0～14.1cm、底口比は0.48～0.59で平均すると0.52となる。蓋はつまみ部を欠損している。頂部をヘラケズリされており口径12.6cmでカエリはない。内面が平滑で摩滅していることから転用硯と思われる。SI１から出土した土師器は、東北地方南部の土師器編年型式の表杉ノ入式に該当するものである。表杉ノ入式の土師器坏については、須恵器、赤焼土器との共伴関係、底口比、切り離し技法と再調整の有無によりその変遷が論じられている。その成果を総合したのが下の第１表である。これによって坏全体の中に占める須恵器、赤焼土器の比率の増減、底口比の減少化、再調整の簡略化などが指摘できる。SI１から出土した坏類の特徴を挙げると次のようになる。第１に赤焼土器を含まず、土師器、須恵器から構成されていること。第２に須恵器の比率が57%を占めること。第３に底口比が0.46～0.59の範囲に分布し0.52前後に集中すること。第４に回転ヘラ切り後、底部周縁を手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリにより再調整しているものが含まれることである。以上の特徴を第１表の変遷に当てはめると、底口比と須恵器含有率から台ノ山遺跡SI８の傾向に近いことが窺える。このことからSI１出土土器群の年代については９世紀前半を中心とした年代が与えられる。更にSI１からは多賀城跡Ⅲ期の重弁蓮華文軒丸瓦と同様の特徴を持った重弁蓮華文軒丸瓦（F－２）が出土している。この瓦については上限が780年、下限が869年と捉えられており上述の年代観とは矛盾しない。SI２出土土器群については、遺構の一部分を調査したに留まり組成の点から有効な資料とは言い難い。出土したものにはロクロ土師器坏（D－20)、須恵器坏（E－７、９、10、14、15、21、22、27）甕（E－23）がある。土師器坏は切り離しが回転ヘラ切り、外面体部下半が回転ヘラケズリ、内面では横方向にヘラミガキ、黒色処理されている。この坏は底口比が0.74と底径が大きく一般的な坏とは異なった器形を呈している。須恵器坏は切り離し技法に回転ヘラ切りと回転糸切りの両方を含む。底口比は0.44～0.54の範囲に分布し、平均すると0.48でSI１のものに比べ底口比が小さくなる傾向を示す。須恵器坏の中には内弯気味に立ち上がり口径17.2cmのやや大型のもの（E－15）が見られる。SI２出土土器群の年代については概ね９世紀代と捉えておきたい。なお、SI１出土土器群中、坏類に比較的多くの墨書が見つかっている（19点中６点)。これらは一般の集落跡で見つかっている墨書と異なり、「講院」ヵ、「佛」、「東」、「西」など本来は西側に隣接する国分寺内のある部所で使われていたことを窺わせる文字が記されており、この住居の住人が、国分寺と何らかの係わりを持っていたか、墨書土器を手にすることが出来る立場にいた可能性を想定し得る。

遺跡名 出土遺構名	宮前 SI20ⅣA群	青木 SI21	台ノ山 SI８	東山 土器溜	家老内 SI２	宮前 SI54ⅣB群	安久東 SI２	清水 SD９内SK１	鹿島 SK１・SK４	植田前 SD１・SD２
赤焼き土器出土率	０%	０%	０%	０%	０%	０%	45%	42%	63%	98%
須恵器出土率	28%	18%	53%	31%	０%	０%	11%	６%	０%	０%
底口比	0.6	0.52	0.52	0.46	0.44	0.43	0.36	0.38	0.39	0.4
外面調整	ロクロナデ 回転ケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ 手持ちケズリ	ロクロナデ 手持ちケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
切り離し技法	ヘラ切り	ヘラ切り 糸切り	ヘラ切り 糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り
年代	８C末～９C初			９C中葉			10C前半		10C中葉	

第１表　表杉ノ入式期における土師器坏の変遷

２）遺構の年代について

今回の調査で検出された遺構は、古代から近世までのものと考えられるが、個々の遺構の年代について若干の補足をしておきたい。Ⅱ区で検出されたSI１については、出土土器群の検討から９世紀の前半に、SI２についても同様に９世紀代に位置付けられる。前後関係については明らかにし得なかったが、両者の位置関係から時期差があったものと考えられる。Ⅱ区のP５についても古代の柱穴の可能性がある。Ⅰ区のSE１井戸跡は、伴出した常滑産、白石窯系の甕や板碑などから中世段階に所属するものと思われ、上限は13世紀の後半とされる。Ⅰ区のSK４土坑も白石窯系の甕を伴っていることから13世紀後半～14世紀前半頃のものと思われる。Ⅰ区のピット群の中で堆積土に13世紀代の龍泉窯系の青磁片や古瀬戸片を含むものがあることから、この時期の掘立柱建物跡が存在していた可

能性も認められる。SA１柱列やSB１、２掘立柱建物跡については遺物から正確な年代を言及しがたい。他の遺構との重複関係から、SA１は中世、SB１、２は中世から近世までのものと捉えておきたい。Ⅰ区のSK13土坑からは近世の土師質土器小皿が出土している。内面に煤が付着していることから灯明皿と考えられるものである。同様の遺構は、昭和55年の陸奥国分寺東門跡調査の際にも検出されており、近世の墓壙と報告されている。Ⅰ区のSK７、10、11、12土坑やⅡ区のSK４、５土坑のように類似した長方形の土坑が南北に長軸方向を合わせて見つかっていることから、これらについては近世段階の墓壙の可能性がある。藩政時代の仙台城下絵図（正保２、３年、寛文８、９年、元禄４、５年、延宝６年、安政３～６年製作）によると、この場所に寺屋敷、学頭隠居屋敷といった記載がなされており、古代から近世に至るまで周辺一帯が人々の宗教的な活動の拠点として意識され続けていたものと推察される。

３）まとめ

①　国分寺東遺跡は仙台市若林区木ノ下三丁目、陸奥国分寺跡の東側に隣接して所在し、広瀬川によって形成された標高約15mの自然堤防上に立地している。遺跡は、平成13年の試掘調査によって発見され新規に登録されたものである。

②　発見された遺構は平安時代の竪穴住居跡、中世の井戸跡、土坑、中世から近世にかけての柱列、掘立柱建物跡、近世の土坑のほか、溝跡、柱穴、ピットである。

③　出土した遺物には、ロクロ土師器坏、椀、甕、須恵器坏、蓋、長頸壷、甕、赤焼土器高台付坏、坏、小皿、土師質土器小皿、中世陶器甕、重弁蓮華文軒丸瓦、細弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦、石臼、磨石、板碑のほか陶磁器片、鉄製品、鉄滓、石製品がある。

④　土師器坏、須恵器坏の中には「講院」ヵ、「佛」、「東」、「西」などの墨書がなされているものが含まれている。これらについては、本来隣接する国分寺で使用されていたものが運ばれてきたものと考えられる。

⑤　今回の発掘調査により陸奥国分寺跡の東側において、同寺院の機能していた時期及びそれ以降の時期の遺構・遺物が検出されたことから国分寺跡周辺に於ける集落の存在といった諸様相を知る手掛かりを得ることができた。

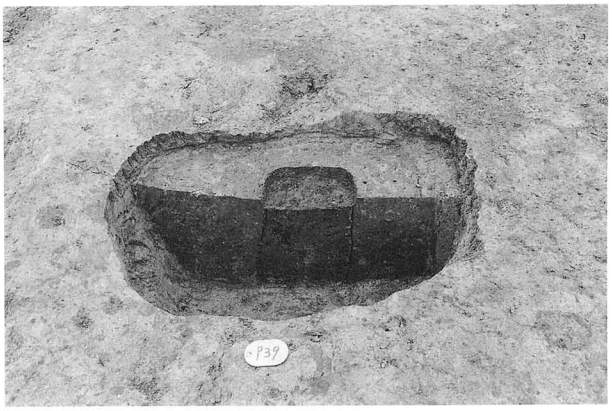
引用・参考文献

氏家和典（1957）：「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会
岡田茂弘・桑原滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』
菊地逸夫（1996）：「一本杉窯跡群」宮城県文化財調査報告書第172集
木村浩二（1996）：「陸奥国分寺・尼寺と周辺条里」『論集しのぶ考古－目黒吉明先生頌寿記念－』論集しのぶ考古刊行会
工藤信一郎（2000）：「陸奥国分尼寺跡（第９次調査）」『五本松窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第247集
工藤哲司（1981）：「史跡陸奥国分寺跡　昭和55年度環境整備予備調査概報　東門跡」仙台市文化財調査報告書第27集
斎野裕彦（1994）：「南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第192集
佐藤洋（1990）：「南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第140集
佐藤洋（1997）：「養種園遺跡発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－」仙台市文化財調査報告書第214集
主浜光朗（1999）：「陸奥国分尼寺跡（第８次調査）」『陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第238集
白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』
長島榮一・豊村幸宏（1996）：「燕沢遺跡－第９次調査－」『仙台平野の遺跡群ＸＶ』仙台市文化財調査報告書第211集
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所（1980）：「多賀城跡－政庁跡　図版編」
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所（1982）：「多賀城跡－政庁跡　本文編」
陸奥国分寺跡発掘調査委員会（1961）：「陸奥国分寺跡」
結城慎一・佐藤洋（1985）：「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第76集

図版１　国分寺東遺跡周辺の航空写真（1961年）

1　調査区遠景（北東より）

2　Ⅰ区遺構検出状況（西より）

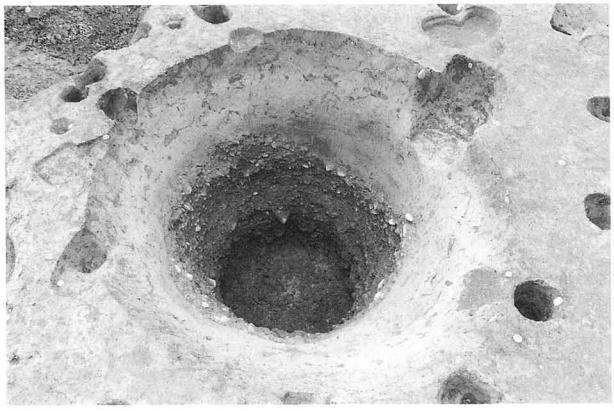


3　Ⅰ区SA１柱列P39断面（南より）

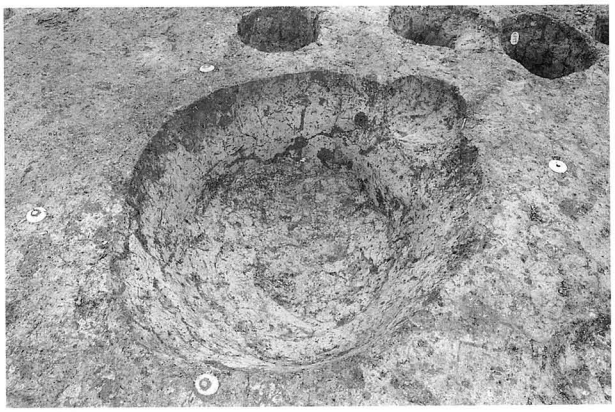
4　Ⅰ区SA１柱列P43断面（南より）

5　Ⅰ区SE１井戸跡断面（南より）

6　Ⅰ区SE１井戸跡（下部）断面（南より）



7　Ⅰ区SE１井戸跡全景（南より）

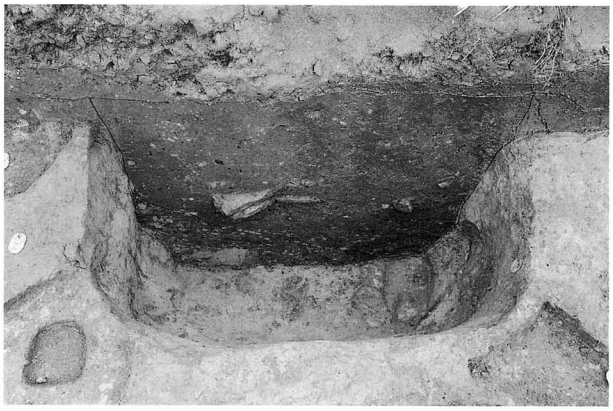


8　Ⅰ区SK２土坑完掘全景（南より）

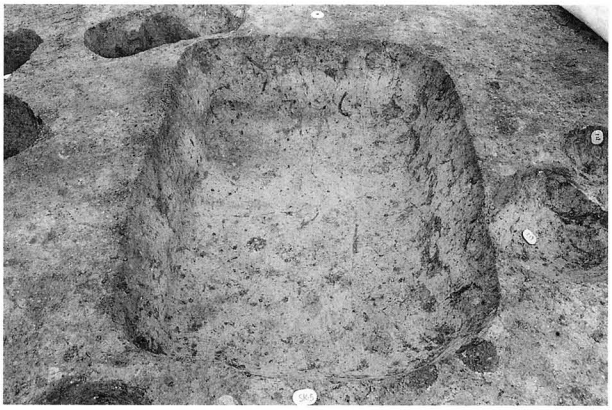
図版２　Ⅰ区調査状況・柱列・井戸跡・土坑

1　Ⅰ区SK３土坑完掘全景（東より）

2　Ⅰ区SK４土坑中世陶器出土状況（西より）



3　Ⅰ区SK４土坑完掘全景（西より）

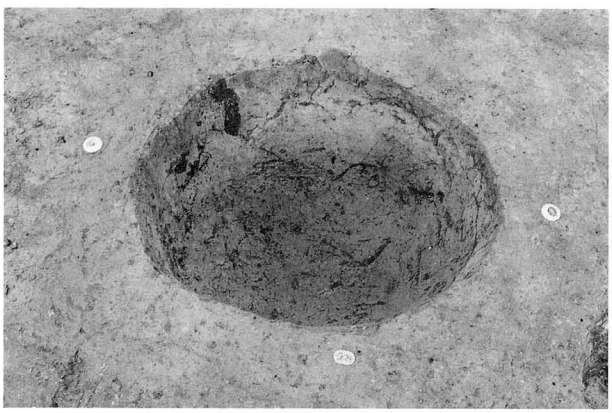


4　Ⅰ区SK５土坑完掘全景（南より）

5　Ⅰ区SK９土坑完掘全景（南西より）

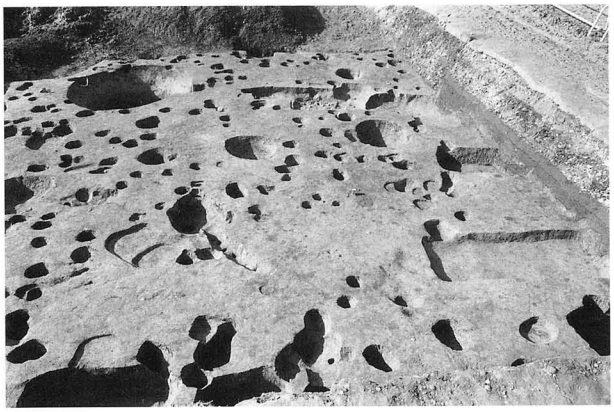
6　Ⅰ区SK15・16・17土坑完掘全景（南より）

7　Ⅰ区SK20土坑完掘全景（南より）



8　Ⅰ区SK23土坑完掘全景（南より）

図版３　Ⅰ区調査状況・土坑

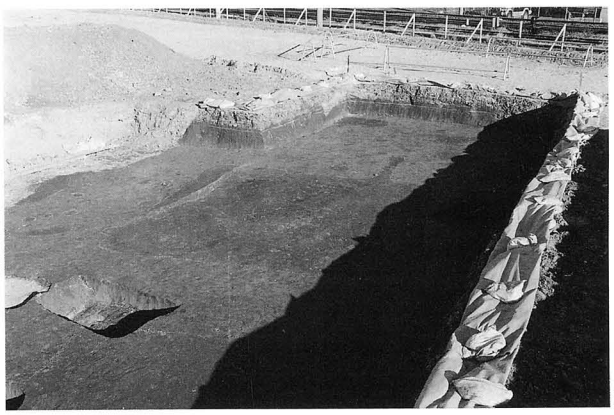


1　Ⅰ区完掘全景（東より）

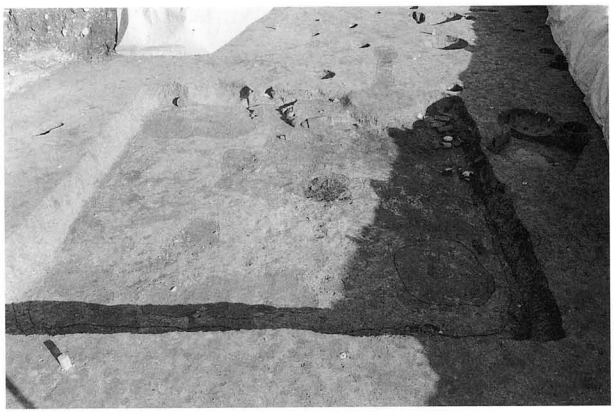
2　Ⅰ区完掘全景（西より）

3　Ⅰ区調査風景（南西より）

4　Ⅰ区北壁断面（南より）



5　Ⅱ区遺構検出状況（南西より）

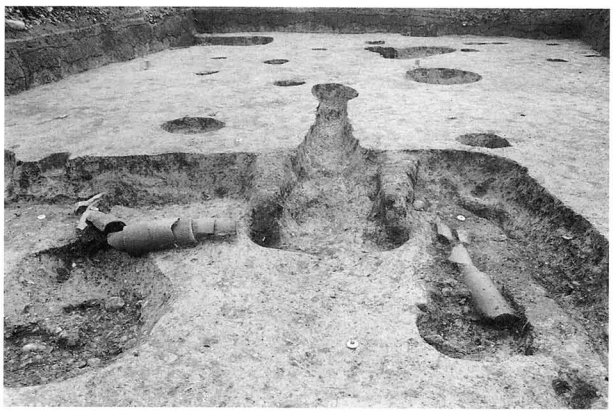


6　Ⅱ区SI１竪穴住居跡床面検出状況（西より）

7　Ⅱ区SI１竪穴住居跡床面遺物出土状況（北より）

8　Ⅱ区SI１竪穴住居跡カマド左袖遺物出土状況（西より）

図版４　Ⅰ区調査状況・Ⅱ区調査状況・竪穴住居跡

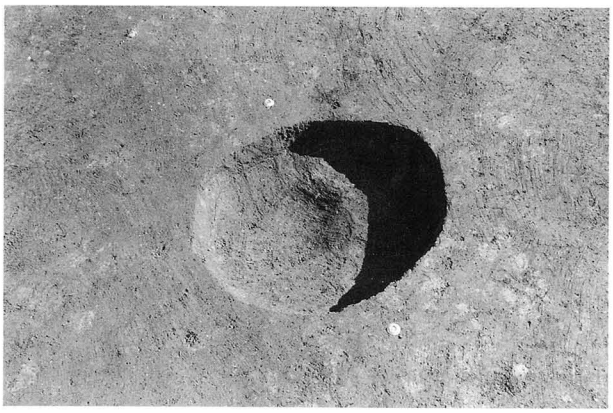


1　Ⅱ区SI１竪穴住居跡カマド全景（西より）

2　Ⅱ区SI１竪穴住居跡完掘全景（西より）

3　Ⅱ区SI２竪穴住居跡完掘全景（西より）

4　Ⅱ区SI１、SI２竪穴住居跡完掘全景（西より）



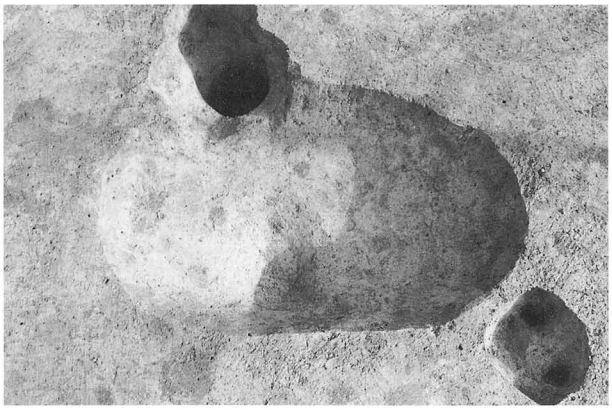
5　Ⅱ区SK１土坑完掘全景（西より）

6　Ⅱ区SK２土坑完掘全景（西より）

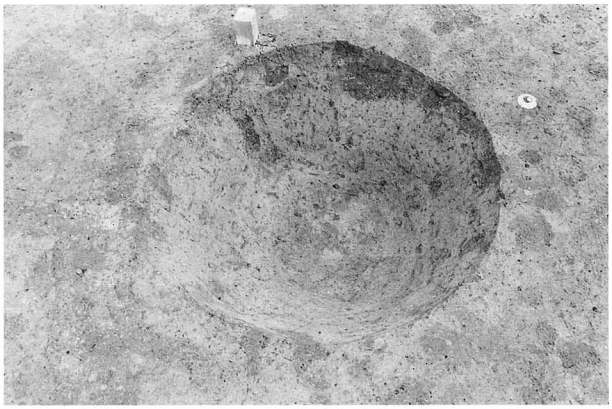
7　Ⅱ区SK４土坑完掘全景（西より）

8　Ⅱ区SK５土坑完掘全景（東より）

図版５　Ⅱ区調査状況・竪穴住居跡・土坑



1　Ⅱ区SK６土坑完掘全景（南西より）



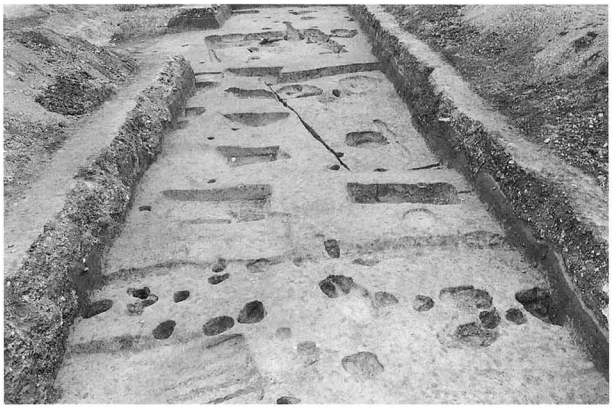
2　Ⅱ区SK７土坑完掘全景（西より）

3　Ⅱ区SK９土坑完掘全景（北より）

4　Ⅱ区SK10・11土坑完掘全景（北より）

5　Ⅱ区SK12土坑完掘全景（北より）

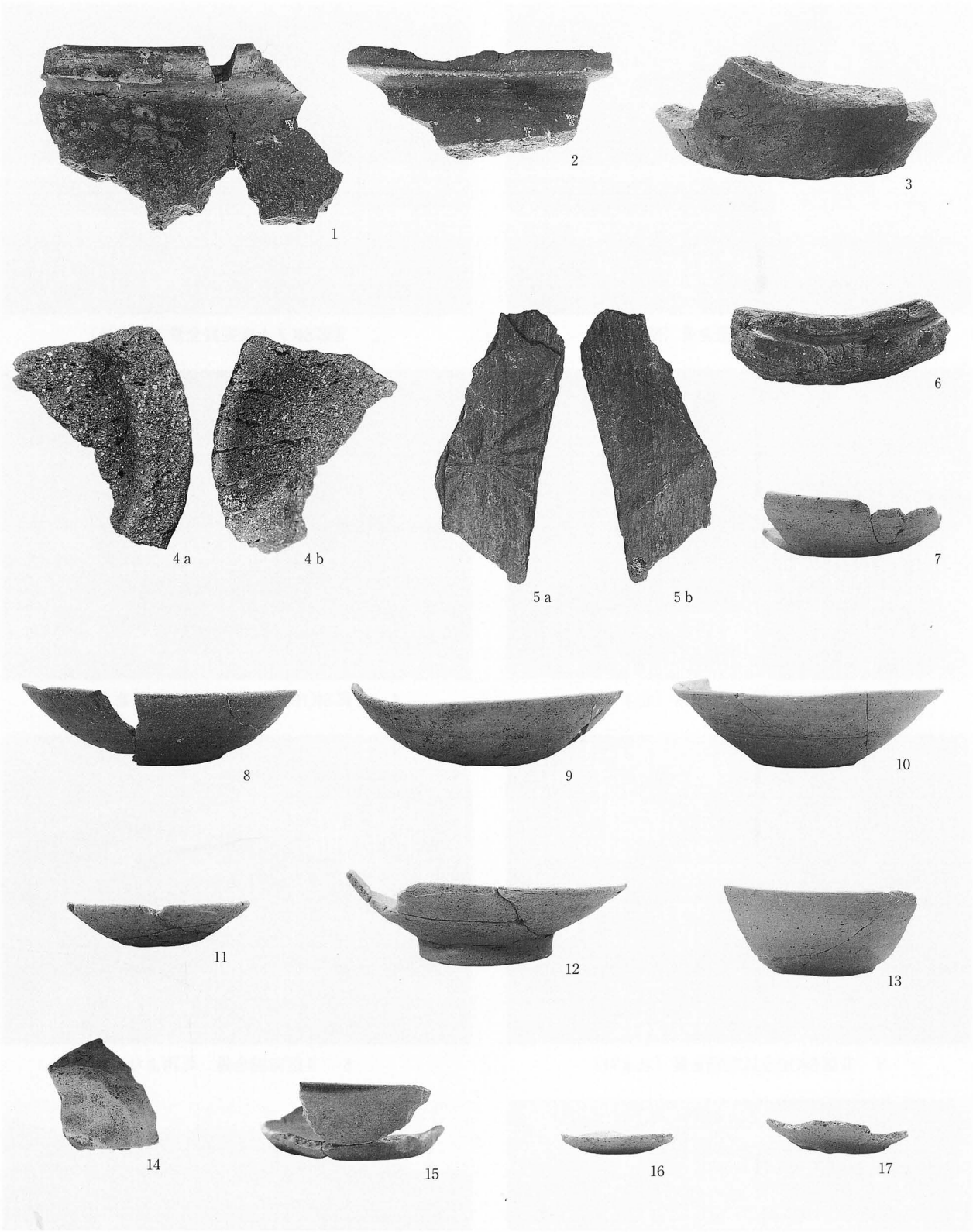
6　Ⅱ区完掘全景（北西より）



7　Ⅱ区完掘全景（西より）

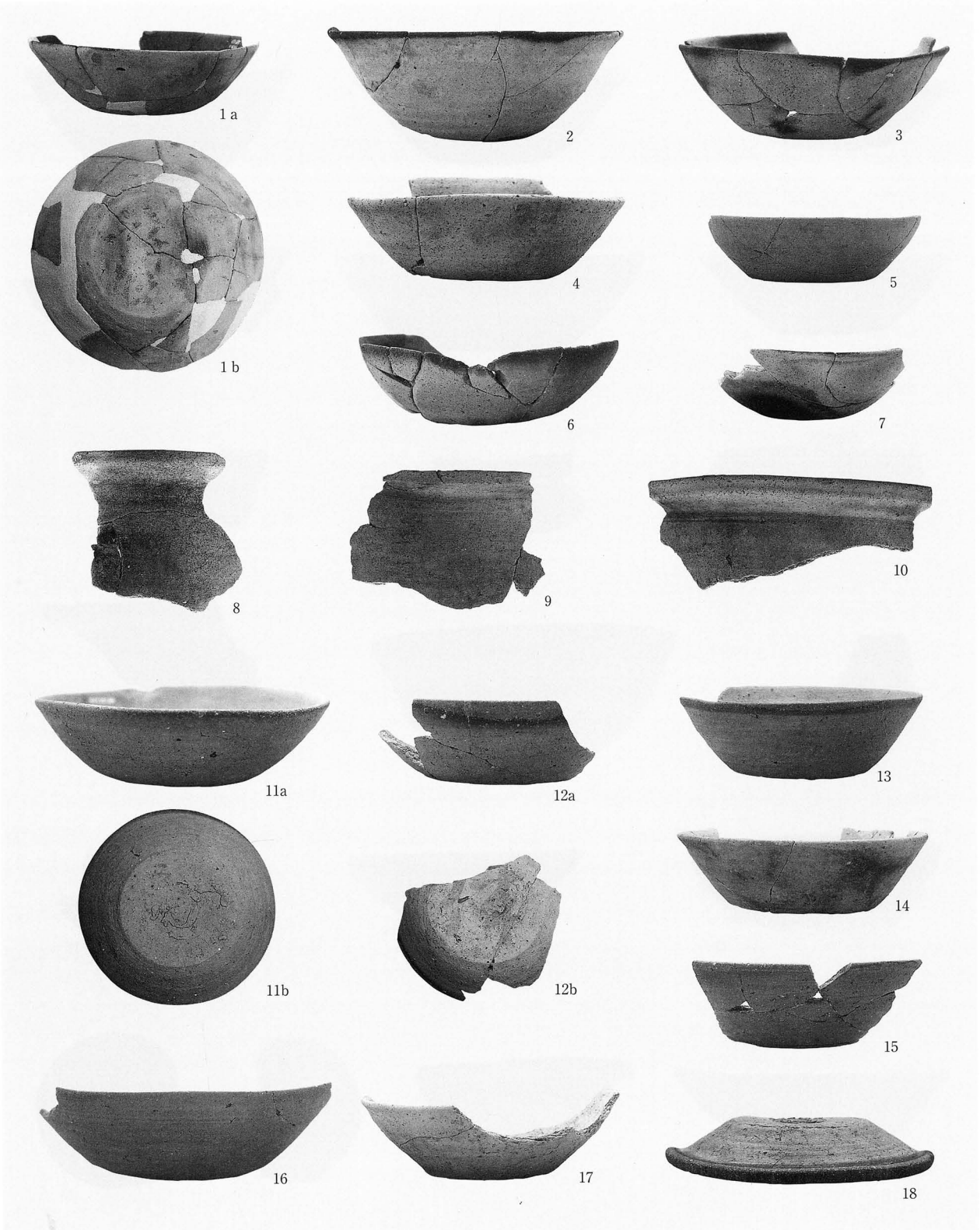
8　Ⅱ区南壁断面（北より）

図版６　Ⅱ区調査状況・土坑



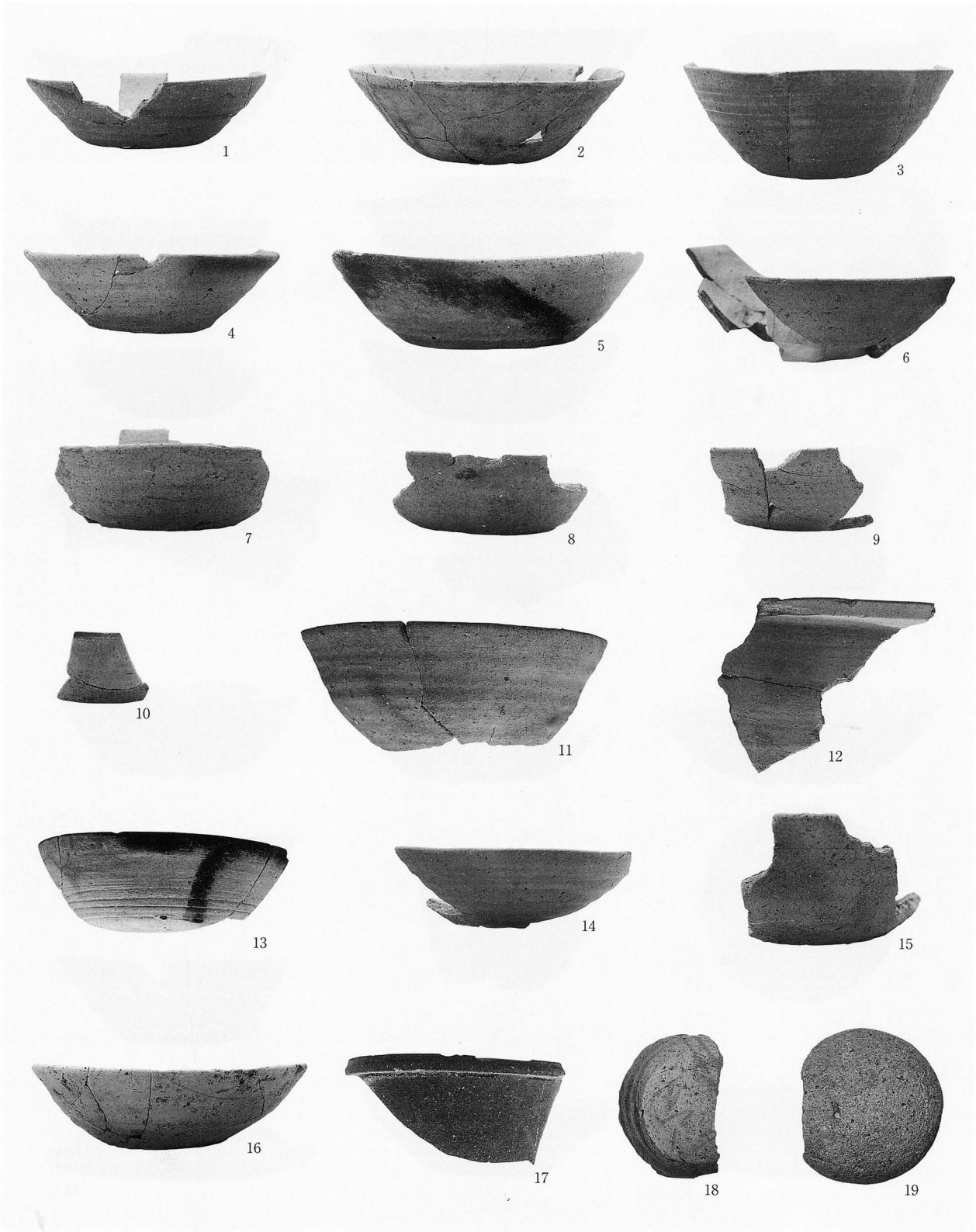
1	中世陶器甕	Ⅰ－1（SE１第11図１）	2	中世陶器甕	Ⅰ－2（SE１第11図２）	3	中世陶器甕	Ⅰ－3（SK４第14図１）
4	石臼	K－2（SE１第11図４）	5	板碑	K－3（SE１第11図３）	6	重弧文軒平瓦	G－6（SK４第14図２）
7	赤焼土器坏	D－18（Ⅰ区Ⅱ層第29図５）	8	須恵器坏	E－25（Ⅰ区P245第14図３）	9	赤焼土器坏	D－16（Ⅰ区Ⅱ層第29図６）
10	赤焼土器坏	D－17（Ⅰ区Ⅱ層第29図４）	11	赤焼土器小皿	D－13（Ⅱ区Ⅱ層第29図７）	12	赤焼土器高台付坏	D－12（Ⅱ区Ⅱ層第29図３）
13	須恵器坏	E－24（Ⅰ区Ⅰ層第29図10）	14	ロクロ土師器坏	D－19（試掘２トレンチ第29図１）	15	ロクロ土師器坏	D－24（試掘２トレンチ第29図２）
16	赤焼土器小皿	D－25（試掘３トレンチ第29図８）	17	赤焼土器小皿	D－26（試掘３トレンチ第29図９）			

図版７　出土遺物１



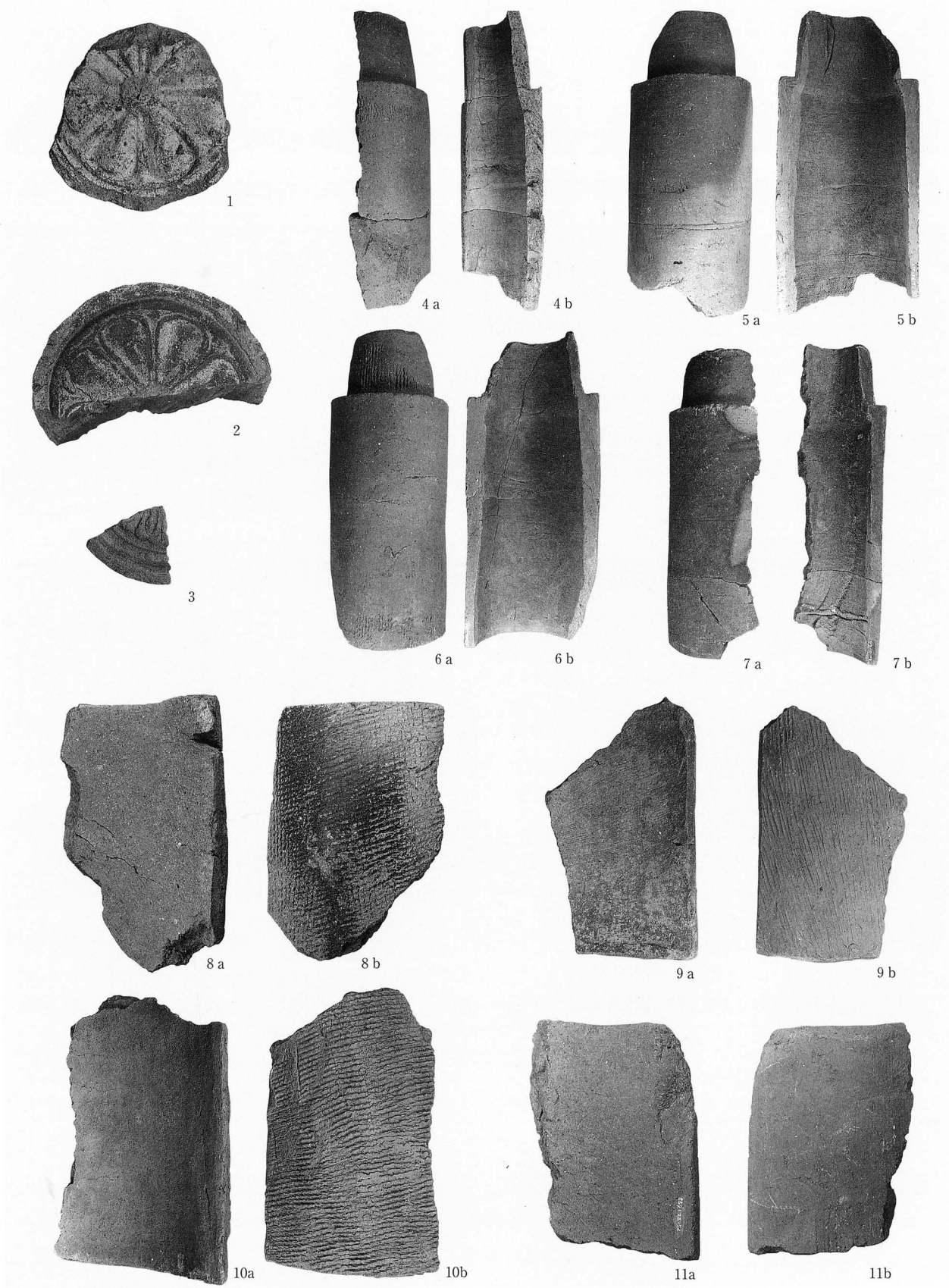
1	ロクロ土師器坏	D－1（SI1第19図1）	2	ロクロ土師器坏	D－2（SI1第19図3）	3	ロクロ土師器坏	D－3（SI1第19図4）
4	ロクロ土師器坏	D－5（SI1第19図5）	5	ロクロ土師器坏	D－4（SI1第19図2）	6	ロクロ土師器坏	D－8（SI1第19図6）
7	ロクロ土師器坏	D－6（SI1第19図8）	8	ロクロ土師器甕	D－15（SI1第19図13）	9	ロクロ土師器甕	D－10（SI1第19図10）
10	ロクロ土師器甕	D－11（SI1第19図12）	11	須恵器坏	E－1（SI1第20図2）	12	須恵器坏	E－3（SI1第20図3）
13	須恵器坏	E－4（SI1第20図1）	14	須恵器坏	E－6（SI1第20図5）	15	須恵器坏	E－18（SI1第20図9）
16	須恵器坏	E－11（SI1第20図7）	17	須恵器坏	E－5（SI1第20図4）	18	須恵器蓋	E－13（SI1第20図12）

図版8　出土遺物2



1	須恵器坏	E－8（SI 1 第20図 6）	2	須恵器坏	E－12（SI 1 第20図 8）	3	須恵器坏	E－15（SI 2 第24図 6）
4	須恵器坏	E－10（SI 2 第24図 5）	5	須恵器坏	E－27（SI 2 第24図 7）	6	須恵器坏	E－ 9（SI 2 第24図 8）
7	須恵器坏	E－ 7（SI 2 第24図 3）	8	須恵器坏	E－14（SI 2 第24図 4）	9	須恵器坏	E－21（SI 2 第24図 2）
10	ロクロ土師器坏	D－20（SI 2 第24図 1）	11	須恵器坏	E－22（SI 2 第24図 9）	12	須恵器甕	E－23（SI 2 第24図10）
13	ロクロ土師器坏	D－22（Ⅱ区SK16第28図 1）	14	須恵器坏	E－20（Ⅱ区SK16第28図 5）	15	須恵器坏	E－28（Ⅱ区SK16第28図 6）
16	須恵器坏	E－19（Ⅱ区SK16第28図 4）	17	須恵器長頸壷	E－16（Ⅱ区SK16第28図 3）	18	須恵器坏	E－ 2（Ⅱ区P59第28図 2）
19	磨石	K－ 1（Ⅱ区SK13第28図 7）						

図版 9　出土遺物 3



1　重弁蓮華文軒丸瓦　F－1（SI 1 第21図 1）
2　重弁蓮華文軒丸瓦　F－2（SI 1 第21図 3）
3　細弁蓮華文軒丸瓦　F－3（SI 1 第21図 2）
4　丸瓦　F－4（SI 1 第21図 5）
5　丸瓦　F－6（SI 1 第21図 4）
6　丸瓦　F－7（SI 1 第21図 6）
7　丸瓦　F－8（SI 1 第21図 7）
8　平瓦　G－1（SI 1 第22図 1）
9　平瓦　G－2（SI 1 第22図 2）
10　平瓦　G－3（SI 1 第22図 4）
11　平瓦　G－5（SI 1 第22図 3）

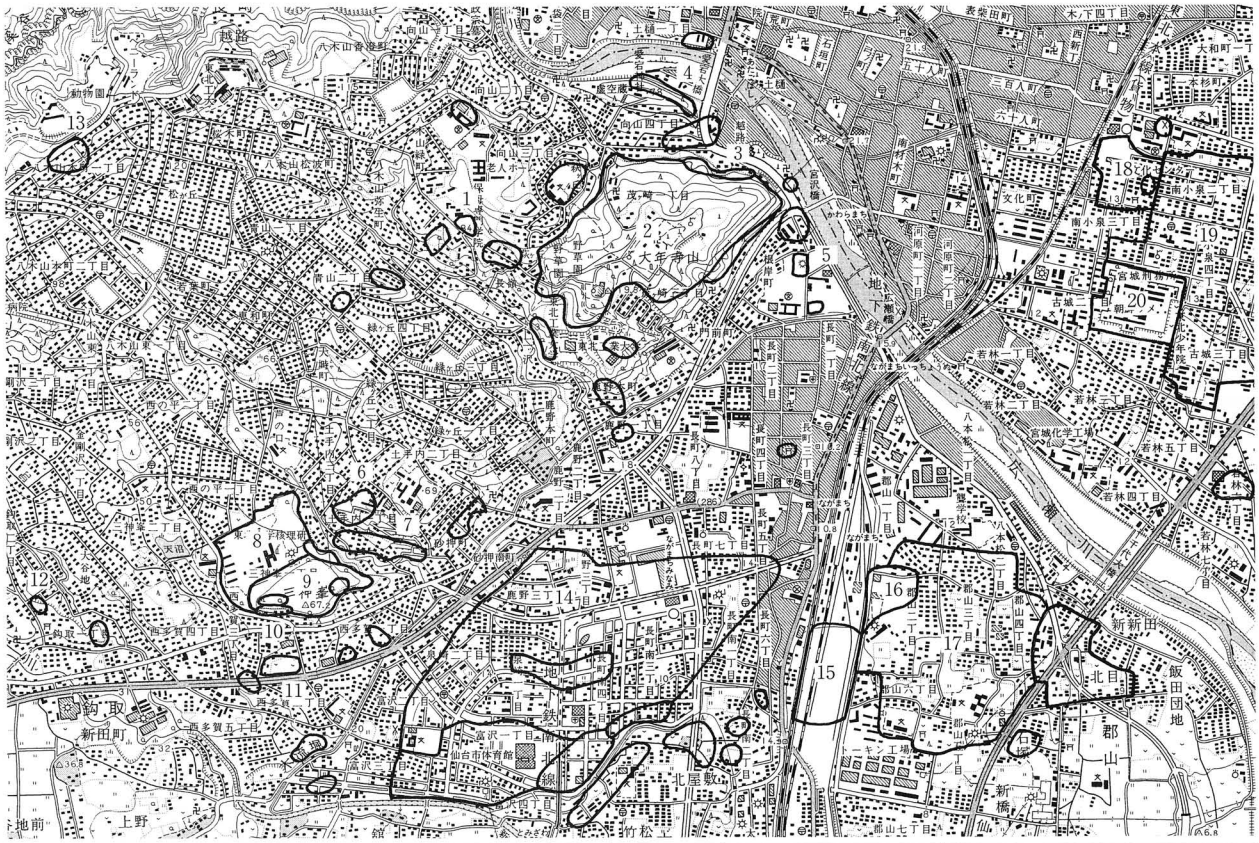
図版10　出土遺物 4

Ⅱ　八木山緑町遺跡（第３次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　八木山緑町遺跡（宮城県遺跡番号01317）
調　査　地　　仙台市太白区八木山緑町21－３
調査理由　　老人福祉施設建設
原　因　者　　学校法人仙台こひつじ学園　向山幼稚園　　理事長　木村　徹
調査主体　　仙台市教育委員会
調査担当　　仙台市教育委員会（文化財課）
担当職員　　主事　佐藤　淳　　文化財教諭　宮内　周
調査面積　　350㎡（調査対象面積：2,300㎡）
調査期間　　平成14年４月10日～５月13日

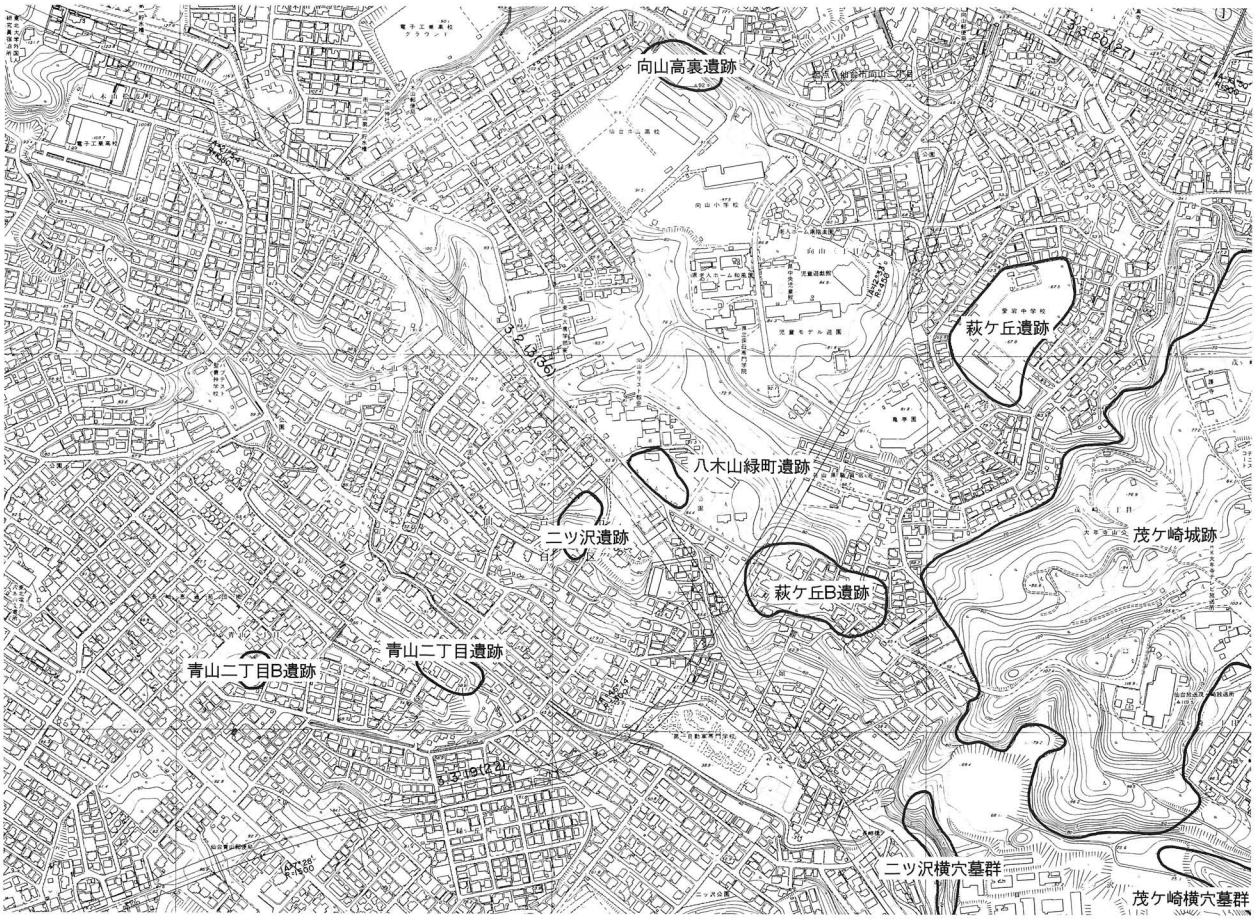
2　遺跡の位置と環境



No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	八木山緑町遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古代
2	茂ヶ崎城跡	城跡	丘陵	中世
3	大年寺山横穴墓群	横穴墓	丘陵	古墳
4	愛宕山横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵	古墳
5	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
6	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古墳・古代
7	土手内横穴墓群B地点	横穴墓	丘陵	古墳
8	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古代
9	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文・古代
10	富沢窯跡	窯跡	丘陵	古墳・古代

No.	遺跡名	種別	立地	年代
11	原遺跡	集落跡・古墳	丘陵	弥生・古墳・古代
12	八幡遺跡	集落跡	丘陵	古墳・古代
13	松ヶ丘遺跡	散布地	丘陵	縄文
14	富沢遺跡	水田跡	自然堤防・後背湿地	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
15	長町駅東遺跡	包含地・集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
16	西台畑遺跡	包含地・集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
17	郡山遺跡	官衙跡・水田跡地	自然堤防・後背湿地	縄文・弥生・古墳・古代
18	養種園遺跡	居館・集落跡	沖積地	弥生・古墳・中世・近世
19	南小泉遺跡	集落跡他	沖積地	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
20	若林城跡	古墳・城館	自然堤防	古墳・古代・中世・近世

第30図　周辺の遺跡（1/35,000）



第31図　遺跡の位置（1/10,000）

八木山緑町遺跡はJR仙台駅の南西3.2kmの仙台市太白区八木山緑町に所在する。遺跡は広瀬川と名取川に挟まれた市南部にある八木山丘陵の東部、南側は二ツ沢へと下る細尾根上に位置する。遺跡周辺の標高は85mである。

周辺の著名な遺跡としては、同丘陵上の西部に位置する縄文時代の集落跡である山田上ノ台遺跡、三神峯遺跡があり、南部の沖積地では大野田遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡群が数多く所在するほか、弥生時代以降、現代までの水田遺構が発見された富沢遺跡が立地している。また古墳時代には丘陵裾部から低地部にかけて多くの群集墳や横穴墓群が造られ、さらに古代では東部低地部にかつての陸奥国府と考えられる郡山遺跡が営まれている。

近隣の遺跡では同尾根上に縄文時代の遺跡である二ツ沢遺跡や萩ケ丘Ｂ遺跡が所在するほか、南東部丘陵裾部には二ツ沢・茂ケ崎の両横穴墓群、南西側別尾根上に青山二丁目・二丁目Ｂの縄文遺跡が所在しているが、このうち茂ケ崎横穴墓群以外については調査例に乏しく、したがって本地区の歴史を紐解くにあたっては本遺跡の調査が重要となっている。

3　調査に至る経緯と調査方法

本遺跡はかつて平成７年と平成11年に２度の調査を実施している。平成７年の第１次調査は宅地造成のための事前調査として約700㎡にわたり調査を実施したところ、縄文前期末葉から中期初頭の竪穴住居跡５軒、弥生後期の竪穴住居跡２軒のほか、土坑120基や多くのピットが発見され、市内でも数少ない時期の縄文住居跡や弥生住居跡が複数発見されるという大きな成果を上げた。第２次調査は第１次調査時に計画された開発地の変更関連部分約150㎡を対象に調査し、第１次調査地を挟む２地区から弥生時代の土坑墓とみられるものを数基確認している。

今回の調査（第３次調査）は先の第１・２次調査で提示された宅地及び共同住宅建設計画の全面撤回の末、新た

に計画された老人福祉施設建設計画内容を受けた事前調査である。計画では建物の大部分が遺跡北東側の削平部分にあたり、遺跡範囲内においてはその約半分程度の面積が先の調査区と重複することから、調査は建物範囲内での未調査部分に限定して実施することとなった。

調査では北辺と西辺を建物ラインに合わせ、南辺を第２次調査西区との境界、東辺を削平地の落ち際と定めた。次に現況で畑地や荒地である表土を重機により除去した後、遺構の検出・掘り込み作業を行った。また遺構調査終了後には調査区中央に旧石器時代遺物の発見を目的とした下層調査区を設定し、掘り込みを行った。

測量の基準は調査区西辺外の２か所にＡとＢの任意の座標杭を設け、北側の杭ＡをＸ＝０、Ｙ＝０の原点とし、それぞれ南及び東に向かい数値が増す平面座標を設定した。平面測図、遺物取上げはこの座標を基に設定した５ｍ方眼ごとに行った。またＡとＢには仙台市設置の３級基準点から求めた平面直角座標第Ⅹ系による座標数値を与えると同時に、調査地内に水準測量により新規の水準点を設置した。各々の数値は下記の通りである。

新規基準点座標数値　Ａ（Ｘ＝０、Ｙ＝０）：Ｘ＝－195.643.028　Ｙ＝3.144.003

Ｂ（Ｘ＝30、Ｙ＝０）：Ｘ＝－195.622.035　Ｙ＝3.167.208

新規水準点水準値　Ｈ＝85.400m

第32図　調査区の位置　1/800

4　基本層序

調査地での基本層位は遺構検出層上層のⅣ層までに大別５層、細別６層を確認し、下層調査においてはⅤ層からⅩ層まで大別６層、細別７層を確認した。自然堆積層とみられるⅤ層以下層については全層とも北東側の沢部に向かい緩やかに傾斜している。

Ⅰ層：Ⅰａ層は現在の畑耕作土で、Ⅰｂ層は以前の畑耕作土である。

Ⅱ層：Ⅰ層の畑を造成するための近年の盛土層とみられる。

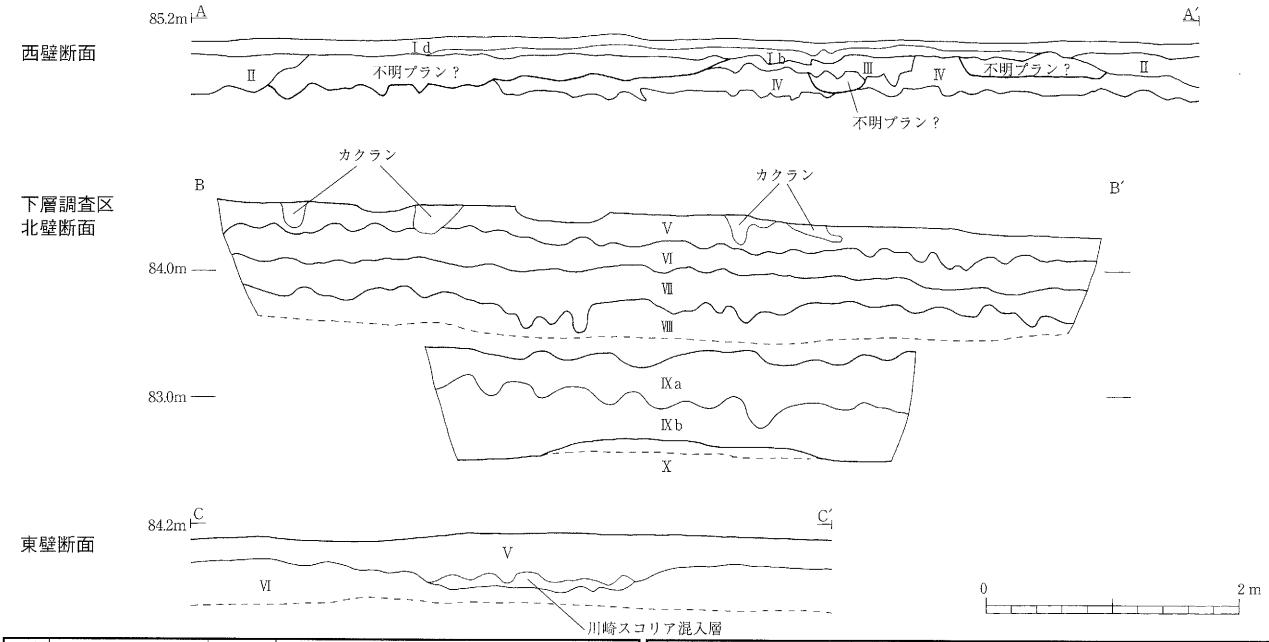
Ⅲ層：黒褐色シルト質土で、下面の乱れが著しく、層厚は５～25cmである。極一部のみの確認である。

Ⅳ層：にぶい黄褐色シルト質土で、径１cm内の小礫を含み、Ⅲ層同様に下面の乱れが著しい。層厚は厚いところ

で30cmある。漸移的にⅤ層へと変化し、層理面は不明瞭である。

Ⅴ層：褐色粘土質シルト土で、粘性が強く、径１cm内の小礫を含んでいる。遺構検出面である。層厚は20～30cmで、Ⅵ層との層理面近くのくぼみ部分に川崎スコリア層が断続的にブロックで混入している。

Ⅵ～Ⅹ層：（第33図表参照）



層位	土　色	土　性	備　考
Ⅰa	10YR3/3　暗褐色	シルト	（現畑耕作土）
Ⅰb	10YR3/3　暗褐色	シルト	（旧畑耕作土）
Ⅱ	10YR3/2　黒褐色	シルト	（盛土層）
Ⅲ	10YR2/2　黒褐色	シルト	部分的な残存　径１cm以内の礫を少量含み、下面の乱れ著しい
Ⅳ	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径１cm内の礫を少量含み、下面の乱れ著しい
Ⅴ	7.5YR4/4　褐色	粘土質シルト	下面近くに部分的に火山灰ブロックを含む

層位	土　色	土　性	備　考
Ⅵ	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	径１cm内の礫を微量含む
Ⅶ	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	砂質が強く、層下半中心に径１cm内の礫を少量含む
Ⅷ	10YR5/6　黄褐色	シルト	径２cm内の礫を多量含み、層下半がやや砂質強い
Ⅸa	10YR4/6　褐色	砂質シルト	径２cm内の礫を多量含む
Ⅸb	10YR4/6　褐色	砂質シルト	径２cm内の礫を多量含む　部分的に橙色シルト質礫を多量混入する
Ⅹ	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	層上面に厚さ２cm程度のマンガンの集積層あり

第33図　基本層序

5　発見遺構と出土遺物

第１・２次の２度の調査では尾根頂部に近いこともあってか、複数の住居跡を含め、遺構密度の高さが際立ったが、今回の調査地は現況が沢部へと緩やかに下る畑地で、加えて後世の削平により遺構の残存状況が悪いことが予想された。今回発見した遺構としては竪穴住居跡１軒の他、土坑７基、ピット数も72と散在する状況であり、隣接する先の調査の状況とは著しく異なる結果となった。また出土遺物のほとんどは、現耕作土及び遺構検出層より上層からのものが多く、遺構自体の残存や遺構数も少ない為か、遺構内出土遺物は僅かであった。

１）竪穴住居跡

SI１　竪穴住居跡

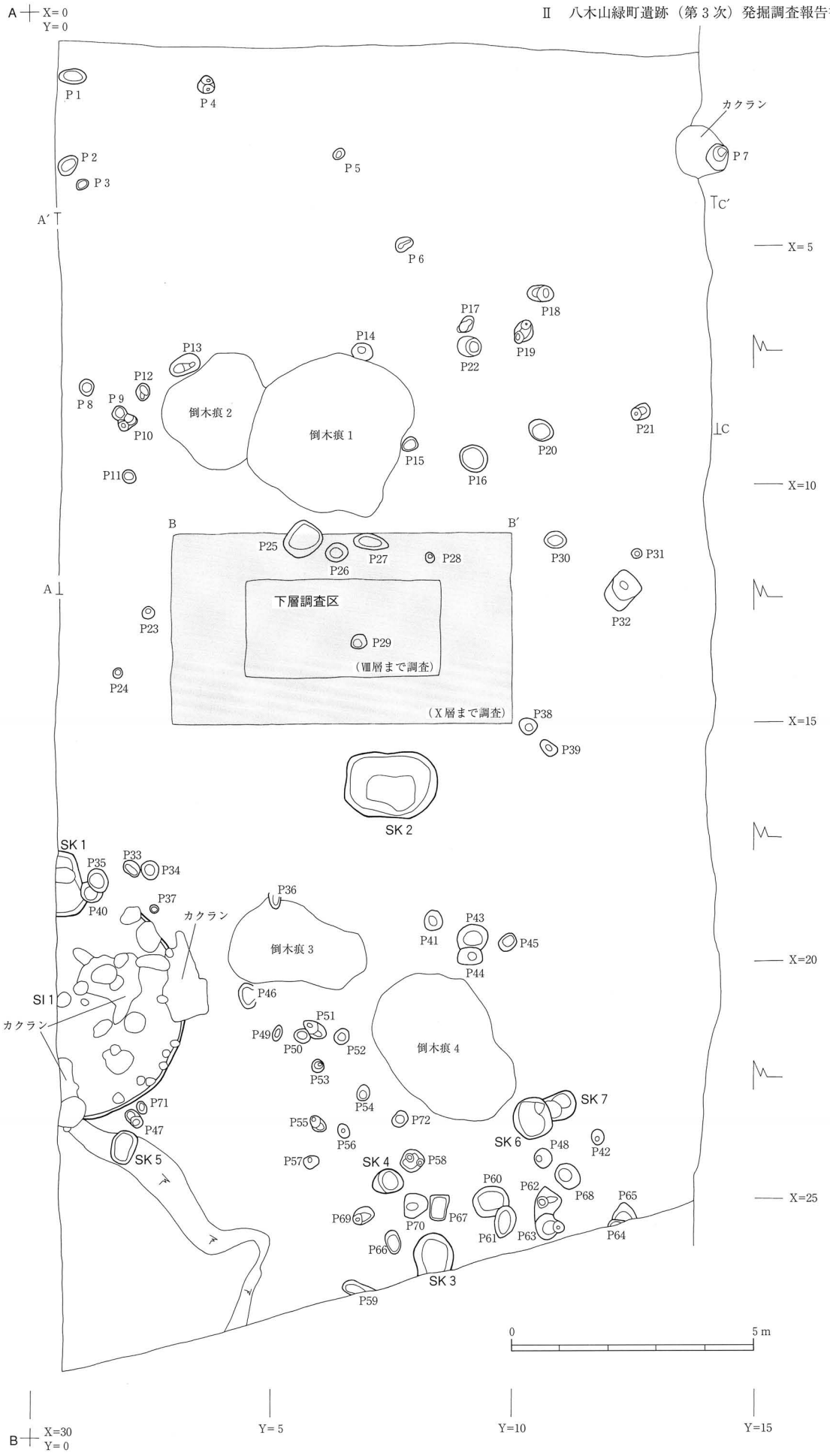
【位置・重複】中央部の西壁に半分かかる形で検出した。北壁側をSK１に切られている。

【形態・規模】東半部のみの検出で、残存が極めて悪い状況であるが、形態は円形で、径は５ｍ程度とみられる。

【堆積土】中央の東西ベルト及び西壁断面により３層確認した。１層は住居内全体にみられる暗褐色シルト土で、炭化物粒、焼土粒を少量含んでいる。２層は主に周辺部にみられる褐色粘土質シルト土である。また３層は住居中央のみに確認した暗褐色シルト土で、焼土ブロックやⅤ層をブロック状に少量含んでいる。１・２層については自然流入土と考えられる。

【床　面】床面は基本層Ⅴ層で、Ⅱ層や木根の影響もあってか、概ね平坦であるが小起伏が著しい。

【壁　面】北部を除き壁面を確認したが、２～３cm程の極僅かな立ち上がりで、詳細は不明である。


A X=0 Y=0
B X=30 Y=0
A′
C′
X=5
X=10
X=15
X=20
X=25
Y=5
Y=10
Y=15
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
カクラン
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
倒木痕2
倒木痕1
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
B
B′
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
下層調査区
（Ⅷ層まで調査）
（X層まで調査）
P38
P39
SK 2
SK 1
P33
P34
P35
P36
P37
P40
カクラン
倒木痕3
P41
P43
P44
P45
P46
SI 1
カクラン
P47
P49
P50
P51
P52
P53
倒木痕4
P54
P55
P56
P57
P58
P71
P72
SK 5
SK 4
SK 6
SK 7
P48
P42
P60
P62
P68
P65
P69
P70
P67
P61
P63
P64
P66
SK 3
P59
0
5 m

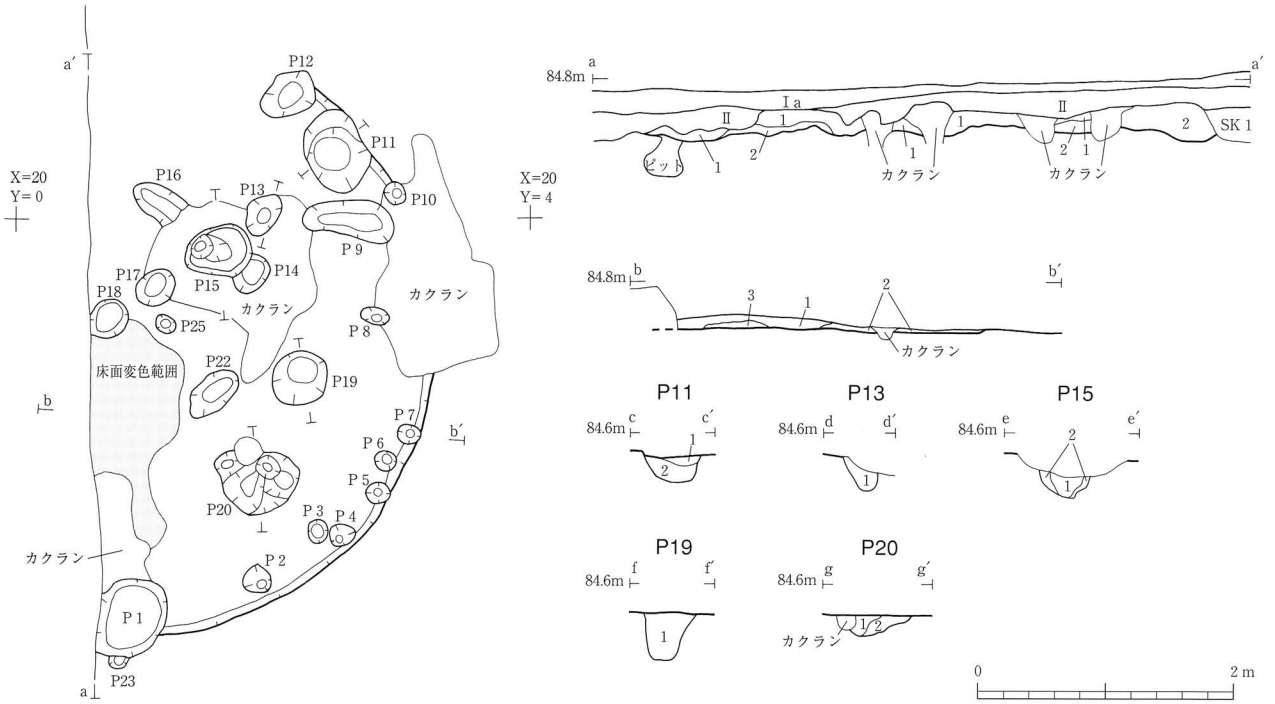
第34図　遺構の配置

【炉　跡】住居跡中央やや南寄りのＶ層床面がやや赤褐色気味に変色し、少量ではあるが炭化物粒や焼土粒を確認したことから、この西側調査区外に炉跡が存在するものと考えられる。

【床面施設】床面及び壁面中に大小25基のピットを確認した。これらの中にはＰ１のようにやや大きく住居外に張り出すものや、住居跡との重複関係が不明瞭なものもあり、全てが住居跡に伴うものとはいえない。P15・20は不整形で、P20については深さも15cmと浅いが、両者はその位置的なことから住居跡東側の主柱穴の可能性が強い。また南東側壁面際を中心に径が15～20cm、深さ５～20cmの小ピットが幾つか確認されたが、これらは第１次調査の円形住居跡でもみられた壁柱穴の可能性もある。床面上にはピット以外に土坑や周溝などの施設は確認できなかった。

【出土遺物】床面、ピット、堆積土から縄文土器、剥片石器、礫石器、石製品が出土した。剥片石器では石鏃１点、不定形石器２点、石核１点、二次加工のある剥片１点、微細剥離痕のある剥片３点、剥片17点があり、礫石器では磨凹石２点、磨石１点、石製品は石剣か石刀から転用の可能性があるもの１点がある。

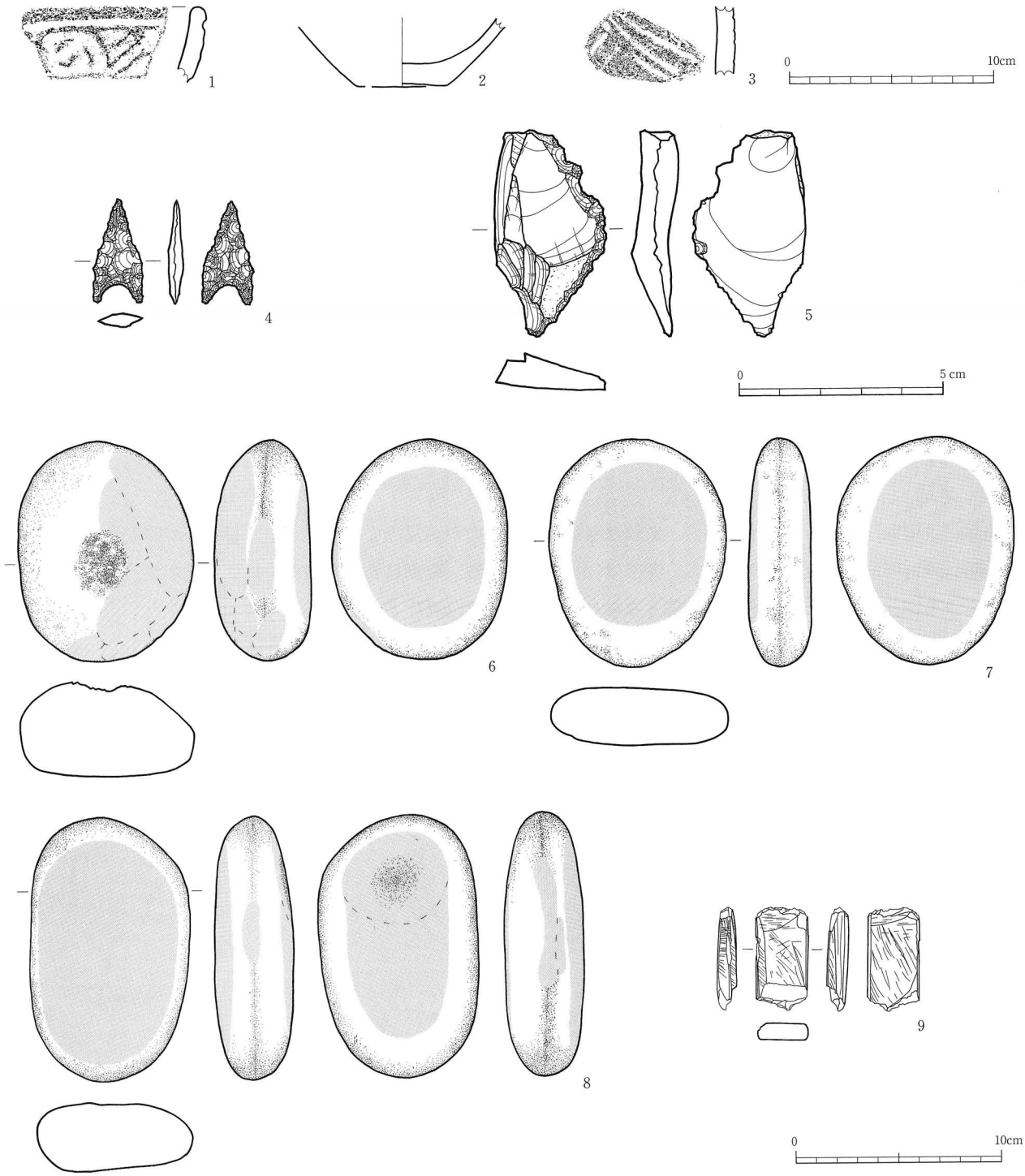
Ａ１（36図１）は口縁部で口縁直下に太い沈線がみられる。Ka11（36図４）は無茎の石鏃で、基部側から先端部にかけて急に細くなっている。Ka16（36図５）は不定形石器で、右側上半が背面からの鋸歯状の刃部、下半が急角度の刃部となっている。Kc２・１（36図６・８）は磨凹石でいずれも両面に磨面と片面に１箇所のくぼみがある。Kc３（36図７）は磨石である。Kd１（36図９）は両面の一部と側面を面取りした粘板岩製の板状の石製品で、石剣或いは石刀の切先部を何かしらに転用したものと考えられる。



層　位	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒、Ｖ層ブロックを少量含む
2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	暗褐色シルト土ブロックを少量含む
3	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物粒・Ｖ層ブロックを微量、焼土ブロックを含む
Ｐ１	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物粒を微量、径１cm内の焼土ブロックを少量含む
Ｐ２	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	焼土粒を微量含む
Ｐ３	10YR3/3　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを多量含む
Ｐ４	10YR3/3　暗褐色	シルト	上半に黒褐色シルト、下半にＶ層ブロックを多量含む
Ｐ５	10YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物粒を少量含む
Ｐ６	10YR3/3　暗褐色	シルト	
Ｐ７	10YR3/4　暗褐色	シルト	Ｖ層ブロック、炭化物粒を微量含む
Ｐ８	10YR3/3　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを少量含む
Ｐ９	7.5YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒を微量含む
P10	10YR3/3　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを少量含む
P11　1	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物粒を微量含む
2	10YR4/4　褐色	シルト	径２cm内のＶ層ブロックを含む
P12	10YR3/4　暗褐色	シルト	焼土粒を微量含む

層　位	土　　色	土　性	備　　考
P13	10YR4/4　褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒・Ｖ層ブロックを微量含む
P14	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物粒・Ｖ層ブロックを少量含む
P15　1	10YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒を微量含む
2	10YR4/4　褐色	シルト	炭化物粒・Ｖ層ブロックを微量含む
P16	10YR3/4　暗褐色	シルト	焼土ブロックを少量含む
P17	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	
P18	10YR4/6　褐色	シルト	
P19	10YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物粒・径１cm内の焼土ブロックを少量含む
P20　1	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物粒を微量含む
2	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	
P21	10YR3/3　暗褐色	シルト	
P22	10YR3/4　暗褐色	シルト	径１cm内の焼土ブロックを少量含む
P23	10YR3/2　黒褐色	シルト	炭化物粒を少量含む
P24	10YR2/3　黒褐色	シルト	炭化物・焼土粒を微量含む
P25	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	

第35図　１号竪穴住居跡



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種　別	器　種	部　位	外面調整・文様	内面調整	備　考	写真図版番号
36－1	A 1	SI 1	1	縄文土器	深鉢	口縁部	沈線			14－8
36－2	A 2	SI 1	1	縄文土器	深鉢	底部	ミガキ	ミガキ		15－6
36－3	A 3	SI 1　P4		縄文土器		体部	多条沈線	ナデ		15－3

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種　別	器　種	長さ×幅×厚さ（mm）	重量（g）	石　材	備　考	写真図版番号
36－4	Ka 11	SI 1	床面	剝片石器	石鏃	25.5×　12.5×　3.8	0.9	珪質頁岩	基部に比べ先端部が細い	15－13
36－5	Ka 16	SI 1	床面	剝片石器	不定形石器	50.5×　28.0×　8.9	11.9	珪質頁岩	右側上半は鋸歯状の刃部	16－4
36－6	Kc 2	SI 1	床面	礫石器	磨凹石	109　×　86　×　47	585	安山岩	磨：両面・右側面　凹：表面（1）	17－2
36－7	Kc 3	SI 1　P20	埋土	礫石器	磨石	112　×　87　×　31	380	安山岩	磨：両面・上左側面	17－7
36－8	Kc 1	SI 1	1	礫石器	磨凹石	130　×　79　×　39	665	安山岩	磨：両面・両側面　凹：裏面（1）	17－1
36－9	Kd 1	SI 1	1	石製品	不明	(50)　×　25　×　9	(20.2)	粘板岩	石剣か石刀からの転用品の可能性あり	17－16

第36図　１号竪穴住居跡出土遺物

2）土　坑

土坑は7基確認した。中にはピットと比較し小型のものも含まれるが、ピットとの違いは規模、形状のみならず、堆積土の相違を考慮し認定した。

SK 1　土坑

南部の西壁にかかる形で検出した。1号住居跡を切り、またP40に切られる。東半部のみの確認であることから、形状は不明で、西壁部での長さは155cm、深さは25cmである。壁面はやや緩やかに立ち上がり、底面は一部にくぼみがみられるもののほぼ平坦である。堆積土は2層で、いずれも自然堆積の暗褐色シルト土である。出土遺物は縄文土器、磨石1点がある。

SK 2　土坑

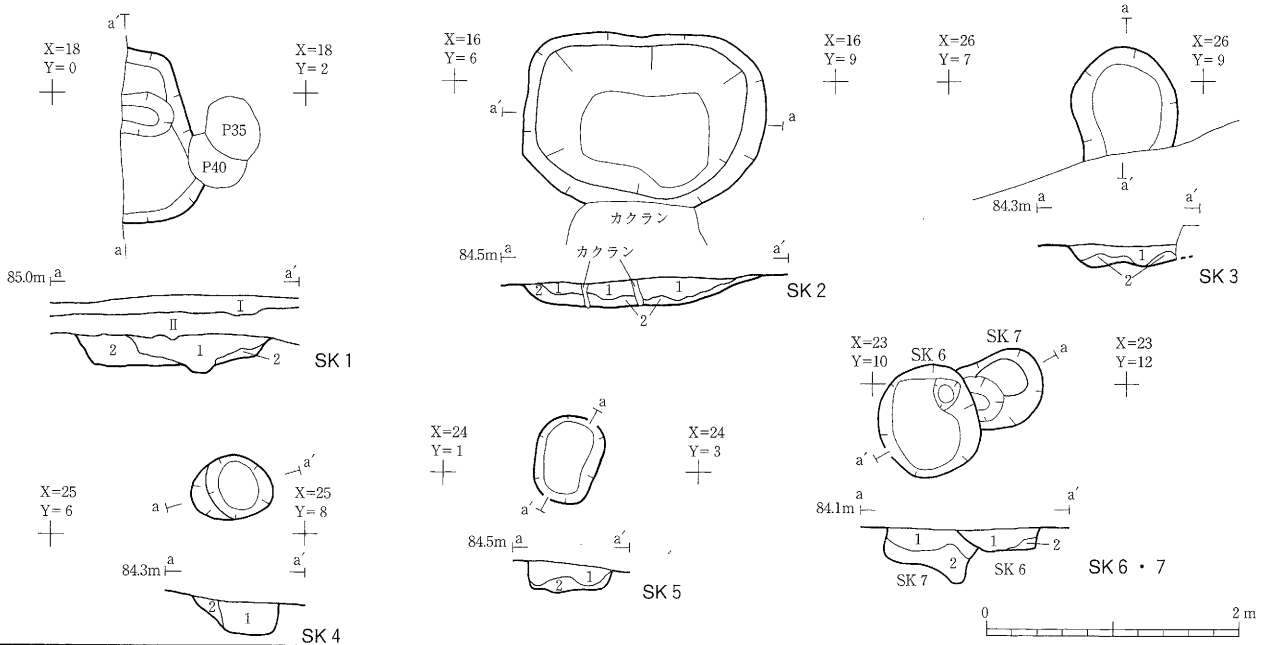
中央部で検出し、重複は無い。形態は東西の長軸190cm、南北の短軸140cm程度で、深さは最も深い箇所で22cmである。壁面は特に東側でかなり緩やかに立ち上がり、底面は中央部がやや平坦である。堆積土は2層で、いずれも自然堆積とみられ、1層下面の起伏が著しい。他の土坑と比較すると形状の整った土坑といえる。出土遺物は縄文土器がある。

SK 3　土坑

南端部の南壁にかかる形で検出した。重複は無い。北半部のみの検出であることから形状は不明であるが、幅は70～85cmの楕円形状の土坑とみられる。深さは12～18cmである。壁面はわりと緩やかに立ち上がり、底面はさほど平坦ではない。堆積土は2層で自然堆積とみられる。出土遺物は剥片1点がある。

SK 4　土坑

南部中央で確認した。重複は無い。形態は西側にやや張り出す円形で、長軸65cm、短軸42cmと小型で、深さは25cmである。壁面は東側で直立気味である反面、西側はやや緩やかとなる。堆積土は2層で、いずれもV層ブロックを少量含むが自然堆積層とみられる。出土遺物は縄文土器、二次加工のある剥片1点、剥片4点がある。



遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
SK 1	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	径1cm内の焼土ブロック、炭化物粒を微量含む
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト	V層土をブロック状に含む
SK 2	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	焼土粒を微量含む。下面に乱れあり
	2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	
SK 3	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	焼土粒を微量含む
	2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	V層土を小ブロック状に含む
SK 4	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒を微量、下半にV層土を小ブロック状に少量含む

遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
SK 4	2	10YR4/6　褐色	シルト	V層土を小ブロック状に含む
SK 5	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物・焼土粒を微量含む
	2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	V層土を小ブロック状に含む
SK 6	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物粒を少量含む
	2	10YR4/4　褐色	シルト	V層土を小ブロック状に含む
SK 7	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物・焼土粒を少量含む
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト	径3cm内のV層土をブロック状に多量含む

第37図　土坑

SK５　土坑

南部の住居跡南側で確認した。重複は無い。形態は楕円形で、南北の長軸70cm、東西の短軸53cmで、深さは22cmである。壁面は全周して直立気味に立ち上がり、底面は狭いが平坦である。堆積土は２層で、いずれも自然堆積土とみられる。出土遺物は縄文土器がある。

SK６　土坑

南部のやや東寄りで確認した。SK７を切っている。形態は楕円形とみられ、東西の長軸65cm、南北の短軸60cm、深さは17cmである。壁面は東側が直立気味なのに対し、西側は緩やかとなる。底面には若干の段差があり平坦ではない。堆積土は自然堆積とみられる２層で、大部分を占めるのは暗褐色シルトの１層である。出土遺物は無い。

SK７　土坑

南部のやや東寄りで確認した。SK６に切られている。形態は円形に近い楕円形で、南北の長軸85cm、東西の短軸80cm、深さは北側で30cm程度であるものが南側では部分的に40cm以上と深くなっている。壁面は全体に直立し、一部オーバーハングする箇所もある。堆積土は２層で、２層は径３cmものＶ層をブロック状に多量含むもので、人為的に埋められた可能性もある。出土遺物は二次加工のある剥片２点がある。

３）ピット

調査区全域にわたり計72基のピットを確認した。ピットは北・中部では散在するのに対し、南部ではわりと密度が高い分布状況といえる。調査では明らかに後世の攪乱や木根によるものと判断したもの以外で、形状が整い、一定の深さを有するものをピットして取り上げ、何かしら人為的な遺構に関係する可能性のあるものとしたが、これ

ピットNo.	層位	土色	土性	備考
1	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	
	2	7.5YR4/4　褐色	シルト	褐色土層をはさむ
2	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	Ｖ層ブロックを含む
3	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	径２cm内のＶ層ブロックを含む
4	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
5	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを含む
6	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	上半に10YR2/3黒褐色土を含む
7	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径２cm内の褐色土ブロックを少量含む
	2	7.5YR4/4　褐色	シルト	径２cm内の褐色土ブロックを少量含む
	3	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	
8	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
9	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
10	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	
11	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	Ｖ層ブロックを含む
12	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを含む
13	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	下半に径２cm内のＶ層ブロックを含む
14	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
15	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを含む
16	1	7.5YR4/4　褐色	シルト	
17	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを微量含む
18	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下半に径２cm内のＶ層ブロックを含む
19	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
20	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
21	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
22	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	部分的にＶ層小ブロックを微量含む
23	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
24	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
25	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	Ｖ層ブロックを微量含む
26	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	部分的にＶ層ブロックを含む
27	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	Ｖ層ブロックを含む。
28	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	径２cm内のＶ層ブロック、炭化物・焼土粒を微量含む
29	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	
30	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	底面に焼土を微量含む
31	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下部に炭化物を微量含む
32	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下部に炭化物・焼土を微量含む
33	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	下半に径２cm内のＶ層ブロックを少量含む
34	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	下半に径２cm内のＶ層ブロックを含む　下面に乱れあり
35	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	焼土粒を微量含む
36	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	均質
37	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
	2	10YR4/4　褐色	シルト	
38	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	焼土粒を少量含む
39	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒・Ｖ層ブロックを少量含む
40	1	10YR4/4　褐色	シルト	径１cm内のＶ層ブロックを微量含む
41	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径２～３cm内のＶ層ブロックを含む
42	1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを微量含む
43	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを含む
44	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	径１cm程のＶ層ブロックを含む
45	1	7.5YR3/3　黒褐色	シルト	焼土を微量含む
	2	7.5YR4/4　褐色	シルト	炭化物を微量含む
46	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	Ｖ層ブロックを含む
47	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	焼土・炭化物を微量含む
48	1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	下半に炭化物ブロックがみられる
49	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	Ｖ層ブロックを含む
50	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物を微量含む
51	1	7.5YR3/2　黒褐色	シルト	焼土・炭化物を微量含む
52	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	Ｖ層ブロックを含む　底面に小礫がみられる
53	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを微量含む
54	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	中位に径２cm程のＶ層ブロックを微量含む
55	1	7.5YR3/2　黒褐色	シルト	径２cm程のＶ層ブロックを含む
56	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	中位に炭化物を微量含む
57	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下半にＶ層ブロックを微量含む
58	1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物を多量、焼土粒を微量含む　底面に礫がみられる
59	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	底面近くにＶ層ブロックを微量含む
60	1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	焼土粒・炭化物粒を少量含む
	2	7.5YR4/4　褐色	シルト	
61	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径２～３cmの褐色土ブロックを含む
	2	7.5YR4/4　褐色	シルト	
62	1	7.5YR4/4　褐色	シルト	炭化物を微量含む
	2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	径２cm程のＶ層ブロック、焼土を微量含む
63	1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	径５mm内の焼土粒を少量、炭化物を微量含む
64	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	下半に10YR2/3黒褐色土ブロックを含む
65	1			(注記なし)
66	1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物粒を多く含む
	2	7.5YR4/4　褐色	シルト	焼土粒・炭化物粒を微量含む
67	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	
	2	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	
68	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物粒・焼土粒を多く含む
69	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物粒を微量含む
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト	上層をブロック状に含む
70	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	炭化物・焼土粒を少量含む
71	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	径２cm内のＶ層ブロックを多量含む
72	1	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	10YR3/4暗褐色土ブロックを微量含む
	2	10YR3/4　暗褐色	シルト	

ピット土層注記表

らの中でもなお自然のものか否かを判別するのは難しい。今回の調査においてはピットの組み合わせ等により建物などを復元するには至らなかった。各ピットの堆積土の注記は表の通りである。

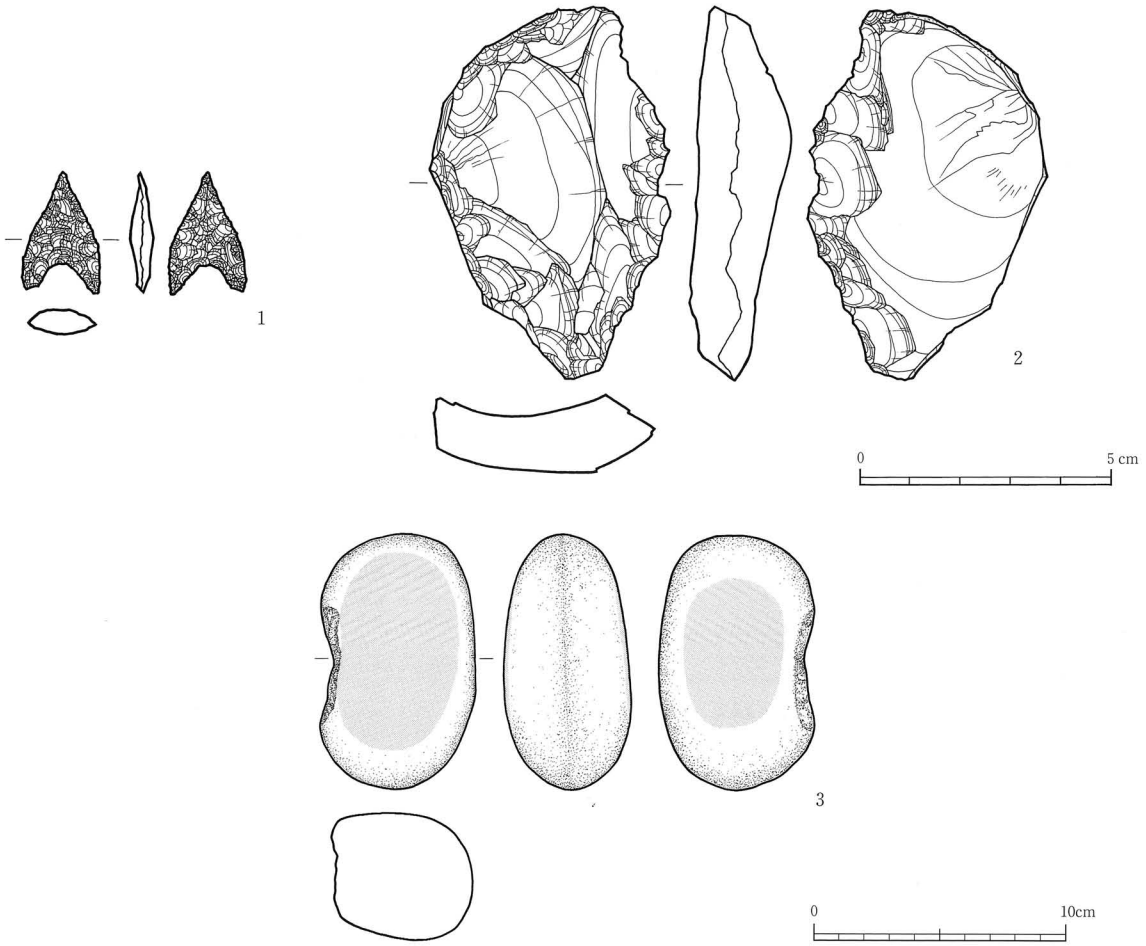
出土遺物は堆積土中より縄文土器が少量、石鏃１点、不定形石器１点、二次加工のある剥片２点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片１点、磨凹石１点、磨石１点、敲石の可能性のあるもの１点がある。

Ka42（38図１）は無茎の石鏃で、基部の抉りがU字形で、先端部がかなり細くなっている。Ka38（38図２）は右側全体に両面からの交互剥離による鋸歯状の刃部となる不定形石器である。Kc８（38図３）は両面に磨面のある磨石である。

４）基本層ほかの出土遺物

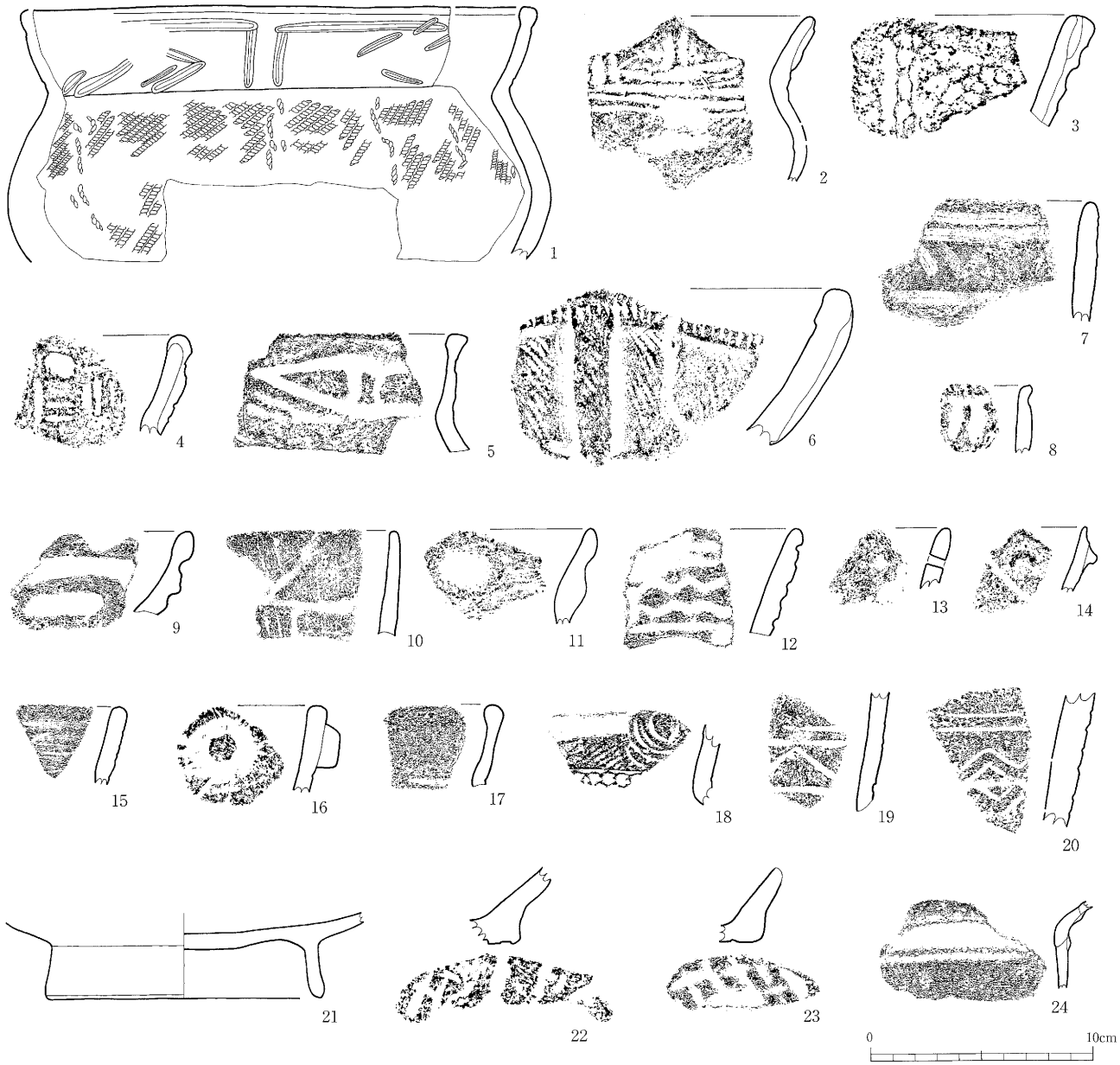
遺構外での出土遺物は、基本層ならびに倒木痕、撹乱等からのもので、縄文土器、弥生土器、剥片石器、礫石器、石製品、土製品がある。出土数としては土器のほとんどが縄文土器である他、弥生土器が僅かに１点、石匙５点、尖頭器２点、不定形石器23点、石核２点、二次加工のある剥片27点、微細剥離痕のある剥片14点、剥片47点、磨凹石６点、磨石７点、凹石１点、石皿１点、板状皿１点、磨製石斧１点、円盤状土製品１点である。

第39図１～24は縄文土器である。ほとんどが小破片で、全体を復元することは出来ないが、その多くは深鉢とみられる。口縁部形状は突起の取り付くものや、一部がやや高まる波状口縁のほか平口縁がある。また突起直下には縦位の幅のある隆帯のあるもの、円形の貼付のあるもの、穿孔のあるもの、指頭圧痕のあるものなどがある。



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種　別	器　種	長さ×幅×厚さ（mm）	重量（g）	石　材	備　　考	写真図版番号
38－１	Ka 42	P 72	埋土	剥片石器	石鏃	20.4×　15.5×　4.8	0.9	碧玉		15－14
38－２	Ka 38	P 58	埋土	剥片石器	不定形石器	74.0×　43.0×　14.5	57.9	流紋岩	右側全体が大きな交互剥離による刃部	16－９
38－３	Kc ８	P 71	埋土	礫石器	磨石	102　×　62　×　51	510	安山岩	磨：両面	17－８

第38図　ピット出土遺物



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種　別	器　種	部　位	外面調整・文様	内面調整	備　考	写真図版番号
39－1	A 23	倒木痕１		縄文土器	深鉢	口縁部～体部	沈線　結節RL縄文	ミガキ		14－1
39－2	A 9	I	I	縄文土器	深鉢	口縁部～体部	隆線　平行・山形沈線	ナデ	口縁部小突起	14－2
39－3	A 21		ⅢかⅣ	縄文土器	深鉢	口縁部	口縁折返し状隆帯　隆帯上に指頭圧痕	ミガキ	口縁部盛り上がり	14－3
39－4	A 18		I	縄文土器	深鉢	口縁部	隆帯上に刻み　短沈線		口縁部小突起	14－4
39－5	A 6		I	縄文土器	深鉢	口縁部	沈線			14－6
39－6	A 11		I	縄文土器	深鉢	口縁部	口縁部刻み　小突起下に隆帯　LR縄文	ミガキ	口縁部小突起	14－5
39－7	A 4		I	縄文土器	深鉢	口縁部	浅い平行沈線・短沈線	ミガキ		14－7
39－8	A 17		I	縄文土器	深鉢	口縁部	沈線・短沈線	ナデ		14－9
39－9	A 5		I	縄文土器		口縁部	沈線		口縁部小突起	14－10
39－10	A 15		I	縄文土器		口縁部	平行沈線			14－11
39－11	A 12		I	縄文土器	深鉢	口縁部	突起部に指頭圧痕	ナデ	口縁部小突起	14－12
39－12	A 19		I	縄文土器	深鉢	口縁部	平行沈線、平行波形沈線	ナデ		14－13
39－13	A 8		I	縄文土器	深鉢	口縁部	突起部に穿孔		口縁部小突起	14－14
39－14	A 14		I	縄文土器	深鉢	口縁部	小突起下に半月形貼付		口縁部小突起	14－15
39－15	A 28	倒木痕２		縄文土器		口縁部	多条細沈線			14－16
39－16	A 13		I	縄文土器	深鉢	口縁部	小突起下にボタン状貼付		口縁部小突起	14－17
39－17	A 26	倒木痕２		縄文土器		口縁部		ナデ		14－18
39－18	A 7		I	縄文土器	深鉢	頸部	同心円状沈線　刺突　LR縄文	ナデ		15－1
39－19	A 10		I	縄文土器	深鉢	体部	沈線	ナデ		15－2
39－20	A 16		I	縄文土器	深鉢	体部	平行沈線、平行波形沈線			15－4
39－21	A 27	倒木痕２		縄文土器	台付浅鉢	底部				15－7
39－22	A 20		ⅢかⅣ	縄文土器	深鉢	底部			底部網代痕	15－8
39－23	A 22		ⅢかⅣ	縄文土器	深鉢	底部		ナデ	底部網代痕	15－9
39－24	A 25	倒木痕１		縄文土器	深鉢	頸部～体部	平行隆線	ナデ		15－5

第39図　基本層ほかの出土遺物（１）

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	部位	外面調整・文様	内面調整	備考	写真図版番号
40－1	B 1		I	弥生土器		体部	平行沈線　ミガキ	ミガキ		15－11
40－2	B 2	倒木痕1		弥生土器	蓋	天井部~体部			焼けはじけ	15－10

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×器さ（mm）	重量（g）	備考	写真図版番号
40－3	P 1		IIIかIV	土製品	円盤状土製品	46×45×8.5	18.0	LR縄文	15－12

第40図　基本層ほかの出土遺物（2）

A23（1）は最も大きい破片資料で、平口縁の深鉢である。頸部は「く」の字形に屈曲し、体部は上方に最大径をもち球胴状に膨らむ。下半部は残存しないが、円筒状になるものとみられる。口縁部は肥厚している。口縁直下に横位の沈線と、頸部との間には縦位の2本の平行沈線や横向きのの山形沈線が連続している。体部は球胴全体に縦位の結節縄文が施される。A9（2）は先の尖った突起下に縦位の隆線のほか、突起部以外に2本一対の細い隆線があり、頸部には平行沈線や山形の沈線がみられる。A21（3）はわずかに高い波状口縁の頂部下に指頭圧痕を連続した縦位の隆帯があり、口縁部全体が外側に折り返すような形状で厚くなっている。A18（4）は幅のある縦位の隆帯上に横位の刻目があり、頸部の横位隆帯と接続している。A11（6）は突起下に長めで幅のある隆帯を配し、口縁部から頸部にかけて縄文が施され口縁部外側に連続する刻目がある。また内面の口縁下には段がみられる。A13（16）は突起直下に厚みのあるボタン状の貼付があり、その周囲に撚り糸圧痕がみられる。A14（14）は突起部に小さな半円形の貼付がみられ、器厚はかなり薄いものである。A12（11）は肥厚した波状口縁部に指頭圧痕状のくぼみがみられる。A8（13）は突起部に小さな穿孔が見られる。A5（9）は口縁部の小突起が3個一対となる可能性があるもので、口縁直下に横位の太い沈線がみられる。

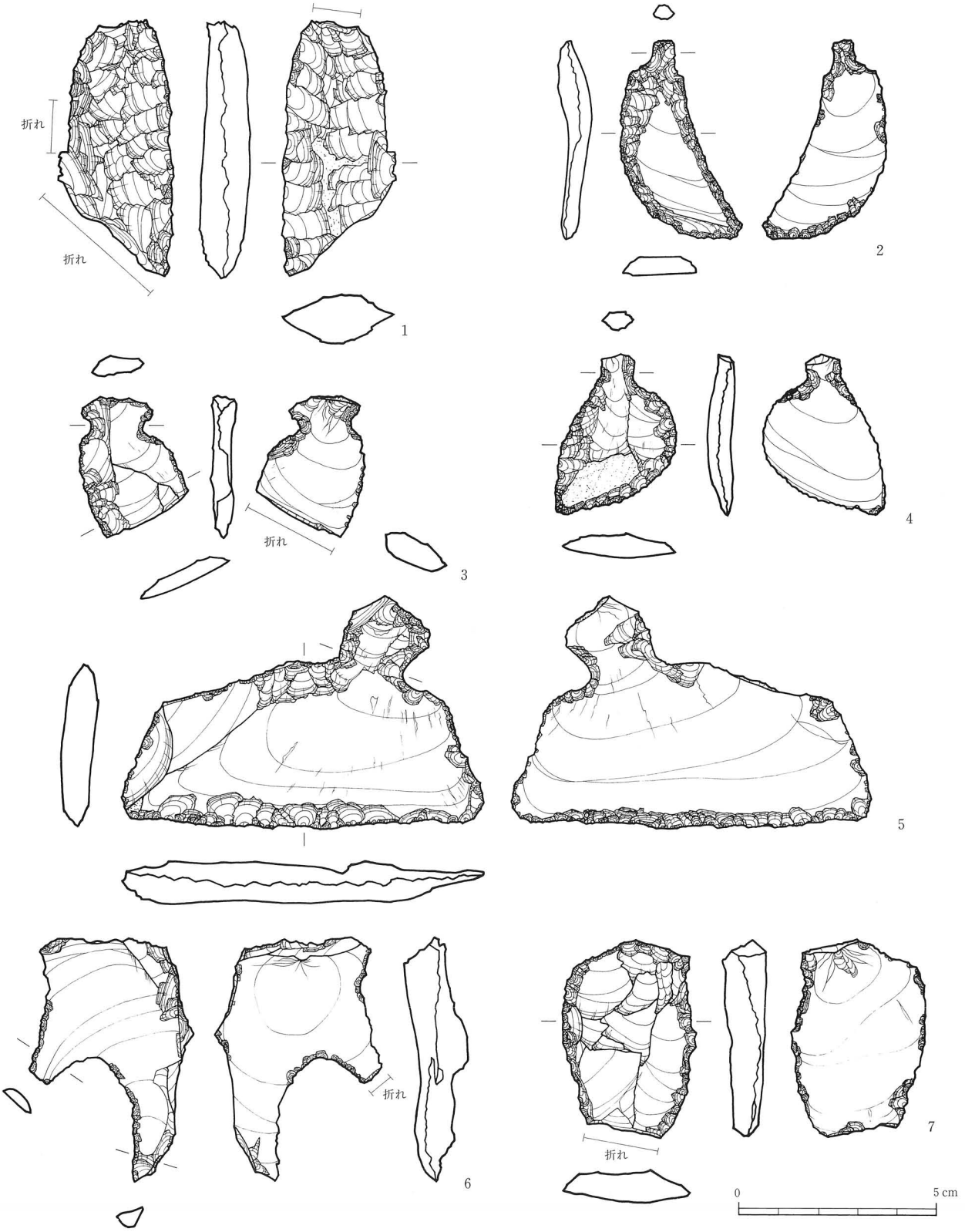
また上記以外には平口縁とみられる破片が幾つかある。A6（5）は口縁端部が平坦で、頸部に太い沈線がみられる。A4（7）は太く浅い横位の平行沈線と斜位の短沈線が連続している。A17（8）は小破片であるが薄手の口縁部直下に横位の沈線のほか、爪形状の縦位の短沈線が並んでいる。A15（10）は直立気味の薄手の頸部に細い平行沈線がみられる。A19（12）は口縁部直下の平行沈線と頸部上の横位の沈線間にやはり横位の2本の平行波形沈線がみられる。A28・26（15・17）はいずれも口縁部が肥厚するもので、A28（15）は外面に横位の細い多条沈線がみられる。

体部破片としては、A7（18）は口縁部から頸部にかけて同心円状の沈線がみられるほか、頸部には棒状の円形刺突具による連続刺突文が施される。またA10（19）は平行沈線間に山形沈線、A16（20）は半裁竹管による横位の沈線、波形沈線がみられる。A25（24）は薄手の小型深鉢とみられ、頸部を挟み横位2本の隆線がみられるが、形状、文様とも他の土器とは異なった感を受けるものである。

A27・20・22（39図21・22・23）は底部資料である。A20・22の底部には網代痕がみられる。A27は台付浅鉢とみられ、薄く高めの台が取り付き、底部は球状でかなり薄いものである。

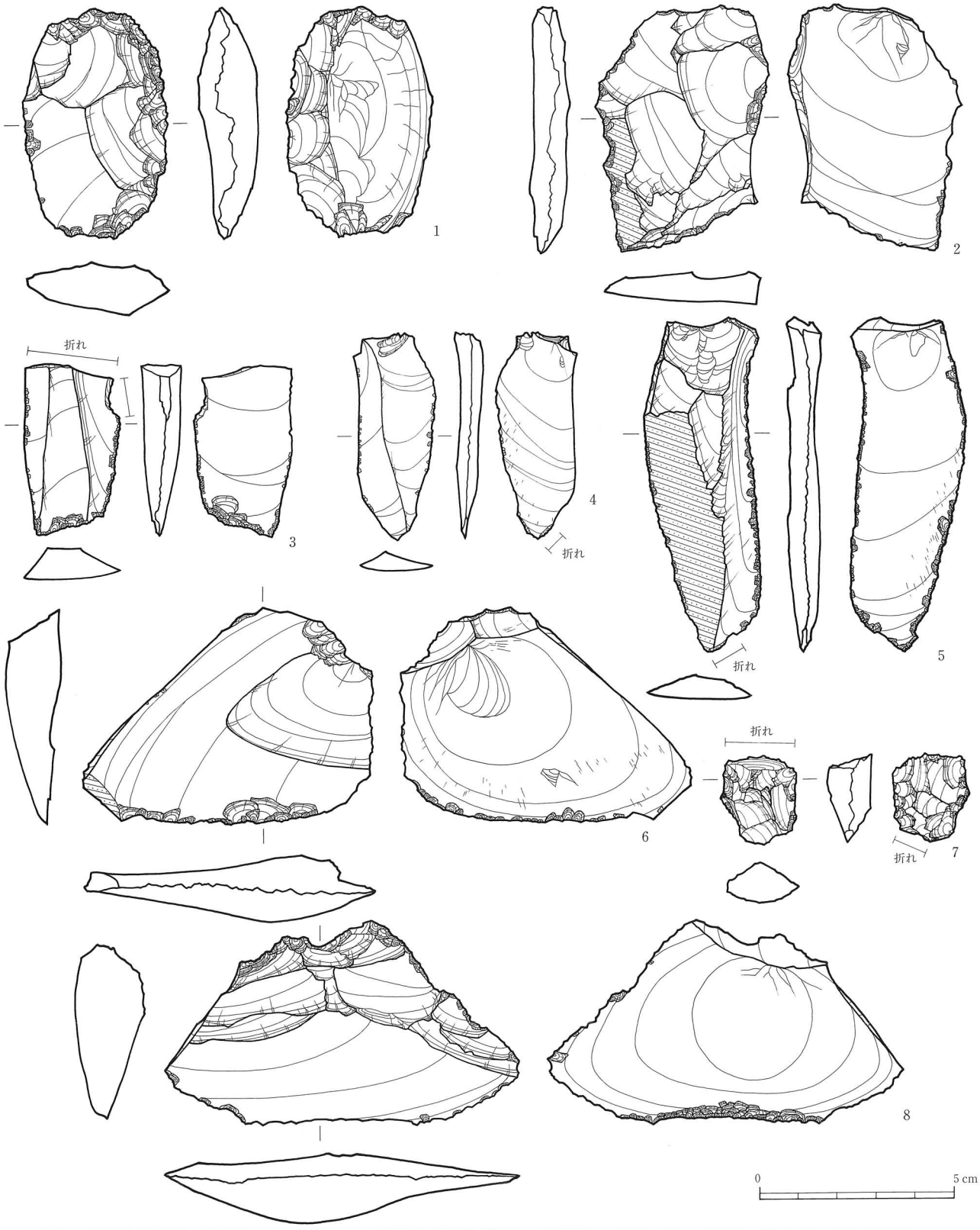
B1・2（11図1・2）は弥生土器で、B1は器種は不明であるが3条の平行沈線と内外面にミガキが施された薄手の破片である。B2は口縁部が欠損した小型の蓋で、上面につまみはもたず裾部が急に広がっている。また全体が著しく被熱し焼けはじけている。

第12・13図は剥片石器である。Ka128（41図1）は先端部、基部側が欠損した尖頭器で、全面に平坦剥離、階段状剥離が施され、また全体に被熱している。Ka66（41図2）は三日月形の縦型石匙で、背面に全周して急角度の刃部がみられる。Ka111（41図3）は下部が欠損した縦型の石匙で、全体に薄手で平坦剥離や小剥離による刃部がみられる。Ka67（41図4）はつまみ部が斜めに取り付く縦横中間型で、刃部は背面加工のみで一部で急角度とな



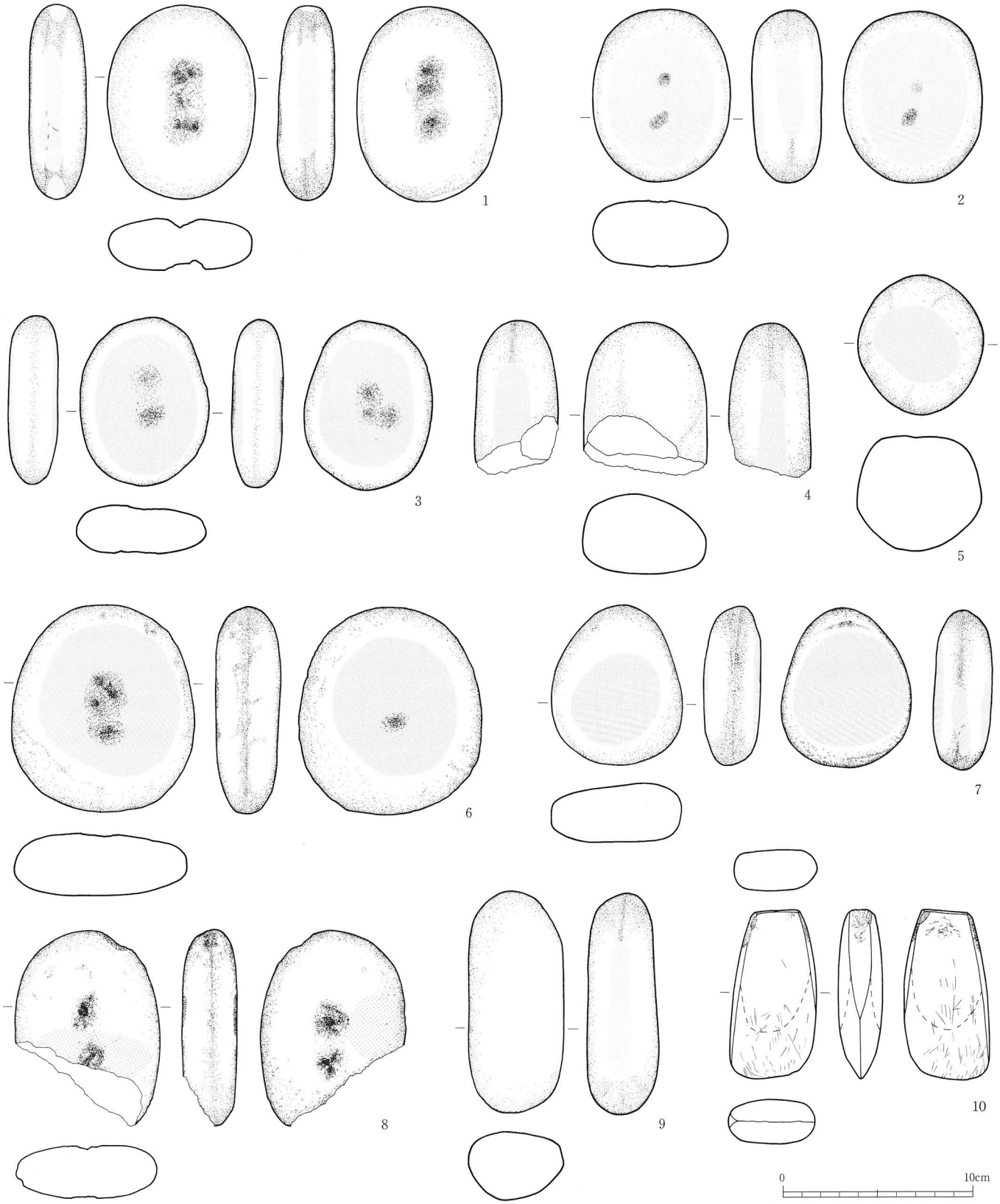
図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種　別	器　種	長さ×幅×暑さ（mm）	重量（g）	石　材	備　　考	写真図版番号
41－1	Ka 128		Ⅲ or Ⅳ	剥片石器	尖頭器	(66.0)×　29.0×　12.5	(19.0)	珪化凝灰岩	先端・基部欠損　全面に平坦な剥離	15－15
41－2	Ka 66		Ⅰ	剥片石器	石匙	51.0×　31.0×　6.2	7.1	珪質頁岩	三日月型　主に背面の全周加工　刃部は全体に急角度	15－16
41－3	Ka 111		Ⅰ	剥片石器	石匙	(36.0)×　27.5×　5.5	(5.5)	珪質頁岩	下部欠損　背面左側に一部平坦な剥離あり	15－18
41－4	Ka 67		Ⅰ	剥片石器	石匙	41.5×　31.0×　6.2	7.6	珪質頁岩	縦型と横型の中間型　刃部は主に背面加工により一部で急角度	15－17
41－5	Ka 57		Ⅰ	剥片石器	石匙	60.0×　92.5×　10.5	49.2	珪質頁岩	横型　上部左側欠損　刃部は全周　下側刃部は交互剥離による	16－1
41－6	Ka 83		Ⅰ	剥片石器	不定形石器	63.0×　42.0×　13.5	21.9	珪質頁岩	二つの突出部周囲に二次加工あり	16－6
41－7	Ka 88		Ⅰ	剥片石器	不定形石器	51.0×　34.5×　9.5	19.4	流紋岩	下部欠損　左側背面は急角度の刃部	16－3

第41図　基本層ほかの出土遺物（３）



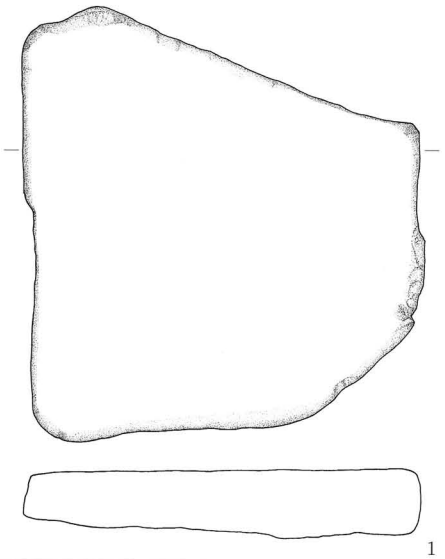
図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種　別	器　種	長さ×幅×器さ（mm）	重量（g）	石　材	備　　考	写真図版番号
42－1	Ka 106		I	剥片石器	不定形石器	60.5 × 37.5 × 14.5	32.9	流紋岩	上・下・右側に両面からの交互剥離による刃部あり	16－2
42－2	Ka 95		I	剥片石器	不定形石器	64.0 × 45.0 × 8.5	30.1	珪質頁岩	右側欠損　部分的に小剥離による二次加工あり	16－5
42－3	Ka 49		I	剥片石器	不定形石器	45.0 × 25.0 × 9.7	10.7	珪質頁岩	主に右側背面と下部両面に二次加工あり　上部欠損	16－8
42－4	Ka 48		I	剥片石器	微細剥離痕のある剥片	54.0 × 21.0 × 6.4	5.5	珪質頁岩	両側に部分的な微細剥離痕あり	16－13
42－5	Ka 115		ⅢかⅣ	剥片石器	不定形石器	87.0 × 30.0 × 7.0	19.4	珪質頁岩	両側・両面に小剥離による刃部が連続している	16－7
42－6	Ka 98		I	剥片石器	不定形石器	65.0 × 70.0 × 15.0	49.2	珪化凝灰岩	主に下部に両面からの二次加工あり	16－11
42－7	Ka 93		I	剥片石器	不定形石器	(23.0) × 19.5 × 11.0	(4.7)	珪質頁岩	上部欠損　腹面にやや平坦剥離あり	16－10
42－8	Ka 101		I	剥片石器	不定形石器	91.0 × 54.0 × 18.3	63.0	珪化凝灰岩	下部腹面中央に急角度の刃部あり	16－12

第42図　基本層ほかの出土遺物（4）



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種　別	器　種	長さ×幅×厚さ（mm）	重量（g）	石　材	備　　考	写真図版番号
43－1	Kc 13		Ⅰ	礫石器	磨凹石	105 × 78 × 29	365	安山岩	磨：全側面　凹：両面（３＋３）	17－4
43－2	Kc 12		Ⅰ	礫石器	磨凹石	93 × 74 × 37	375	安山岩	磨：両面・両側面　凹：両面（２＋２）	17－3
43－3	Kc 15		ⅢかⅣ	礫石器	磨凹石	91 × 69 × 27	252	安山岩	磨：両面　凹：両面（２＋３）	17－5
43－4	Kc 16		ⅢかⅣ	礫石器	磨石	(83) × 66 × 43	(362)	安山岩	磨：両側面　欠損	17－10
43－5	Kc 11		Ⅰ	礫石器	磨石	75 × 66 × 63	430	安山岩	磨：上面　全体被熱で一部剥落	17－9
43－6	Kc 22	倒木痕４		礫石器	磨凹石	112 × 97 × 34	500	安山岩	磨：両面　凹：両面（２＋１）	17－6
43－7	Kc 24	撹乱		礫石器	磨石	86 × 69 × 31	300	安山岩	磨：両面・左側面	17－11
43－8	Kc 25	撹乱		礫石器	凹石	(105) × 78 × 29	(309)	安山岩	凹：両面（２＋２）　一部被熱　欠損	17－13
43－9	Kc 9		Ⅰ	礫石器	磨石	120 × 51 × 38	395	安山岩	磨：右側面	17－12
43－10	Kd 2		Ⅰ	石製品	磨製石斧	91 × 45 × 23	166	緑泥石片岩	基部に敲打痕残存	17－15

第43図　基本層ほかの出土遺物（５）



1

図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種　別	器　種	長さ×幅×暑さ（mm）	重量（g）	石　材	備　　考	写真図版番号
44－1	Kc 26		I	礫石器	板状皿	290×263×65	5,920	安山岩	磨：表面　側面の一部に敲打痕あり	17－14

第44図　基本層ほかの出土遺物（６）

る。Ka57（41図５）は大型の横型石匙で、ほぼ全周して刃部が形成されるが、下部については全体が両面交互剥離による大きめな刃部加工がみられる。Ka83（41図６）は右側が欠損している不定形石器で、２つの突出部縁辺に小剥離による刃部がつくられている。Ka88（41図７）は一部欠損している不定形石器で、全周して刃部を施していたものとみられる。Ka106（42図１）は楕円形状の不定形石器で、主に右側に両面からの大きな交互剥離によるジグザグな刃部がつくられている。Ka95（42図２）は部分的に背面小剥離による刃部がみられる不定形石器である。Ka49（42図３）は上部が欠損した縦長剥片素材の不定形石器で、右側背面と下部両面に二次加工が施されている。Ka48（42図４）は縦長の剥片で、二次加工痕はみられないが両側に微細な剥離痕のみが部分的にみられる。Ka115（42図５）は縦長の剥片を用いた不定形石器で、両側両面にかなり小さな剥離による刃部が施されている。Ka98（42図６）は主に下部に両面からの小さな交互剥離を施したジグザグな刃部をもつ不定形石器である。Ka93（42図７）は上部欠損している不定形石器で、腹面の一部に平坦剥離による刃部がみられる。Ka101（42図８）は下部腹面に急角度な刃部をもつ不定形石器である。

第43図は礫石器である。Kc13・12・15（２・１・３）は磨凹石で、くぼみが両面に複数みられるものである。Kc11（５）は上面のみに磨面のある磨石で、全体に被熱している。Kc25（８）は凹石で、一部被熱している。Kc26（44図１）は素材が安山岩質の板状の石皿で、片面のみに平滑な磨面があり、側面の一部に整形のためとみられる敲打痕がみられる。

Kd２（43図10）は全面研磨の磨製石斧で、柄装着部には敲打痕が残存する。稜線は不明瞭で、破損後の研ぎ直しによるとみられる片べりの刃部である。

Ｐ１（40図３）は縄文土器片を利用した円盤状土製品で、方向の異なる縄文がみられる。側面に研磨痕はみられない。

５）下層調査

遺構関係の調査終了後、旧石器時代の痕跡の有無を確認するため、Ⅴ層以下の層を掘り下げる下層調査区を設定し、調査を行った。調査はほぼ中央部で遺構や倒木痕を避けた地点に東西７ｍ、南北４ｍの調査区を設定し、人力により掘り下げていった。調査は深さ約１ｍのⅧ層中まで下げた後、範囲を４×２ｍに縮小し、最終的にはさらに１ｍ程度下のＸ層上面まで掘り下げた。しかしながら先の調査同様、Ⅴ層以下での遺物の出土は無かった。

６　まとめ

遺　構

①　今回の３次調査では先の２度の調査隣接地を調査した結果、竪穴住居跡１軒、土坑７基のほか、多くのピットを発見した。調査地が尾根頂部から沢部への移行する傾斜地に位置することもあり、遺構密度は少ないものであった。遺構は西側の尾根頂部付近に集中するものと考えられる。

②　竪穴住居跡は残存状況が極めて悪く、また出土遺物も縄文土器や礫石器が少量出土したにすぎなかった。その時期については出土遺物からみて縄文時代の可能性も否定できないが、１次調査においては縄文時代の住居形状は方形基調、弥生時代は円形基調であった点を考慮すると、この住居跡の時期は弥生時代の可能性がある。

③　土坑やピットについては小規模のものが多く、出土遺物もほとんど無いことから、時期及び性格については不明な点が多い。

遺　物

①　出土遺物のほとんどは縄文土器、剥片石器、礫石器など縄文時代のものである。遺物は竪穴住居跡、４基の土坑、14のピットの堆積土中ほか、基本層中からのものであり、その中でもⅠ層中出土のものが多い。

②　出土遺物の多くを占める縄文土器については、球胴形と円筒形の体部形状の深鉢や、口縁部を分割する突起や隆線、貼付文とそれらによる区画内の沈線文がみられる点、また体部に縦方向の結節縄文が施されるなどの点において、本遺跡２次調査や北前遺跡土坑群、長根貝塚出土資料や山田上ノ台遺跡第Ⅶ群土器に類似することから、その時期は大木６式および大木７a式期の前期末葉から中期初頭のものと考えられ、これ以外の時期のものは含まれないものとみられる。

③　石器は剥片類を含み161点の出土があった。内訳は石鏃２点、石匙５点、尖頭器２点、不定形石器26点、石核３点、二次加工のある剥片35点、微細剥離痕のある剥片18点、剥片70点で、不定形石器と石器の可能性のある二次加工のある剥片の占める割合が高い。これらはいずれも土器同様の時期のものとみられ、種別ごとの出土割合がこの時期の出土傾向を示しているかは出土数が少ないことから判断しかねる。

礫石器は23点出土しており、内訳は磨凹石９点、磨石10点、凹石１点、敲石１点、石皿２点である。

④　弥生土器の出土は２点のみで、時期については中期或いは後期と考えられる。

参考文献

宮城県教育委員会（1969）：『長根貝塚　埋蔵文化財緊急発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第19集

仙台市教育委員会（1982）：『北前遺跡』仙台市文化財調査報告書第36集

宮城県教育委員会（1986）：「小梁川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第117集

仙台市教育委員会（1987）：『山田上ノ台遺跡』仙台市文化財調査報告書第100集

仙台市教育委員会（2001）：「八木山緑町遺跡１・２次」『八木山緑町遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第253集

1　調査地

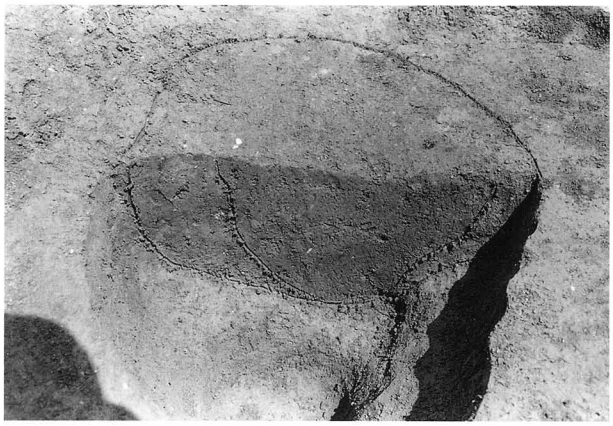
2　調査前状況

3　調査区全景（南より）

4　1号住居跡完掘全景
（東より）

図版11　調査区・1号住居跡

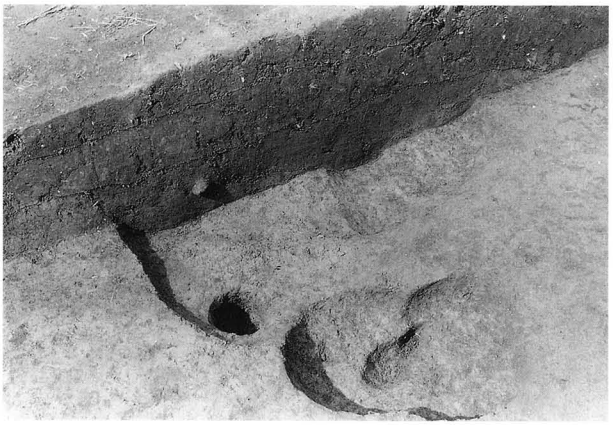
1　１号住居跡床面検出状況（南より）



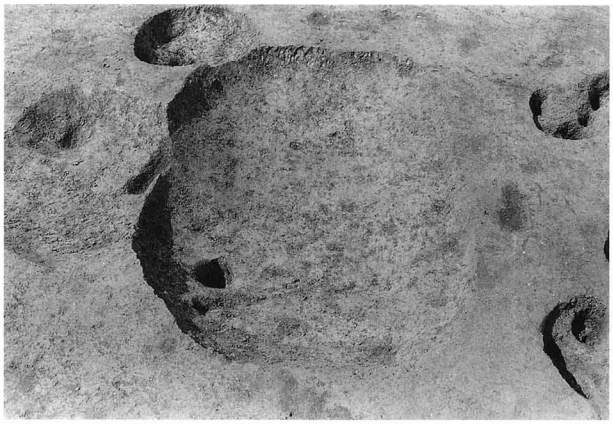
2　１号住居跡P15断面状況（西より）

3　１号住居跡P３～７断面状況（南西より）

4　１号住居跡断面状況（東より）

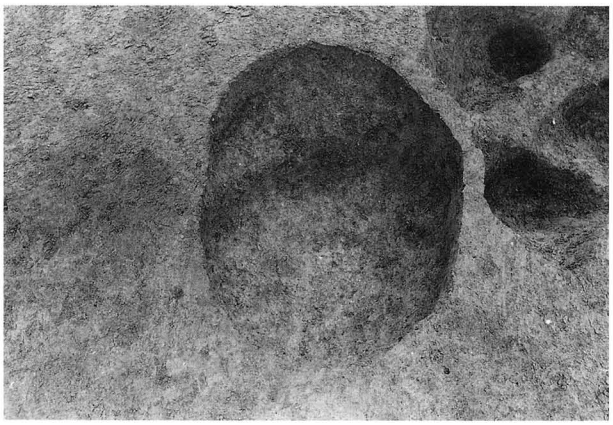


5　１号土坑掘込み状況（南東より）



6　２号土坑完掘状況（東より）

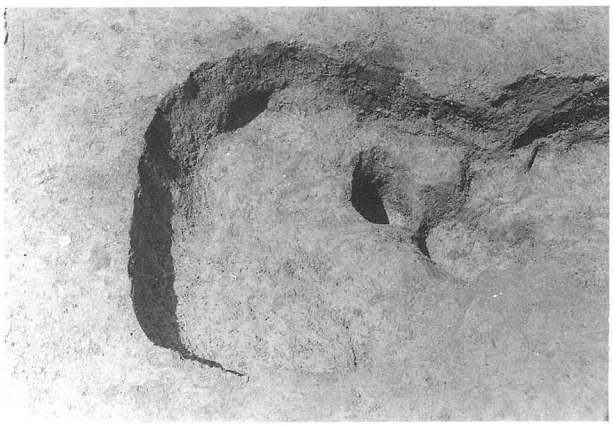
7　３号土坑完掘状況（東より）



8　４号土坑完掘状況（東より）

図版12　１号住居跡・土坑

1　5号土坑完掘状況（南より）



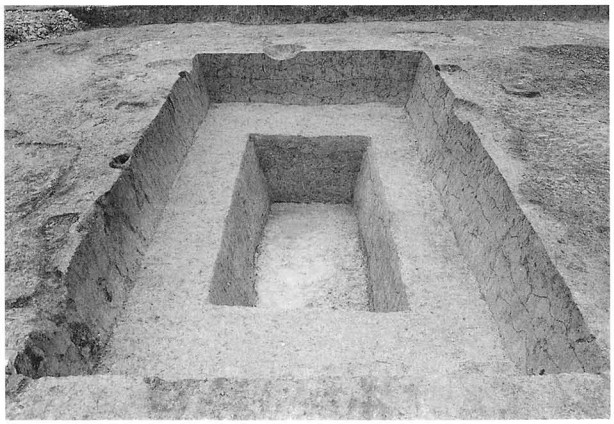
2　6号土坑完掘状況（南東より）

3　7号土坑完掘状況（南東より）

4　調査風景（遺構掘込み）

5　調査区西壁断面状況（南東より）

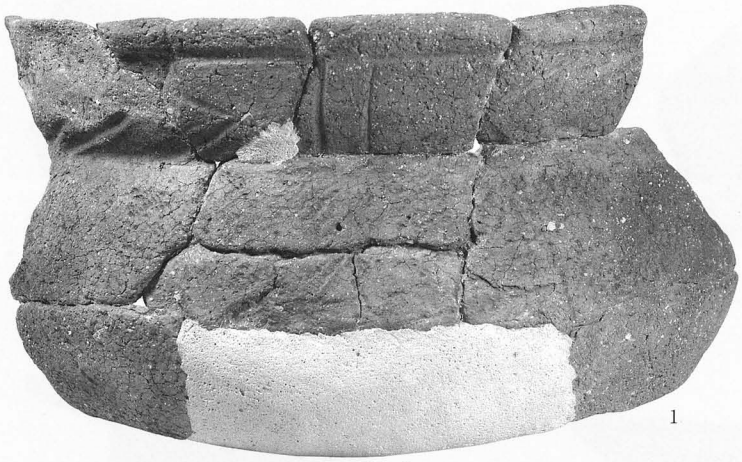
6　東側下層断面状況（南東より）



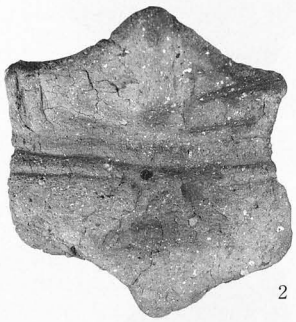
7　下層調査区全景（東より）

8　調査説明会

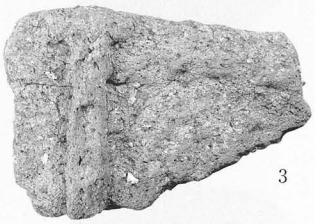
図版13　土坑・下層調査


1

A23　倒木痕１
（第39図１）


2

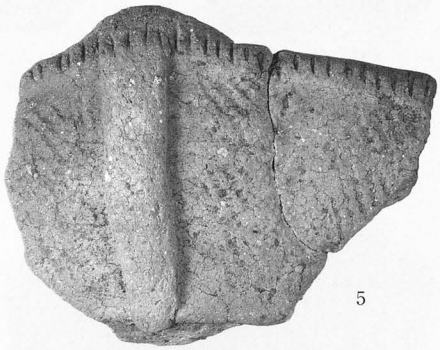
A９　Ⅰ層
（第39図２）


3

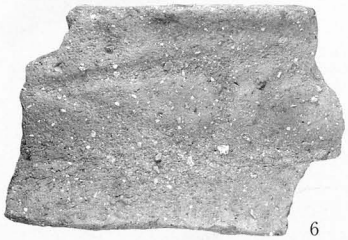
A21　ⅢかⅣ層
（第39図３）

4

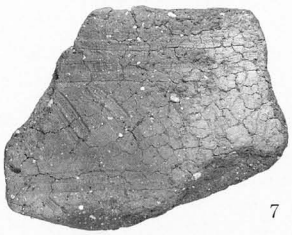
A18　Ⅰ層
（第39図４）


5

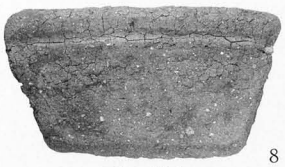
A11　Ⅰ層
（第39図６）


6

A６　Ⅰ層
（第39図５）


7

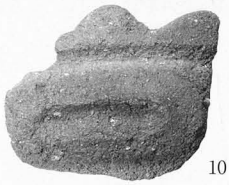
A４　Ⅰ層
（第39図７）


8

A１　SI１
（第36図１）

9

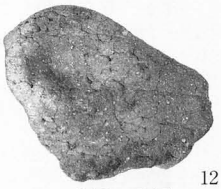
A17　Ⅰ層
（第39図８）


10

A５　Ⅰ層
（第39図９）

11

A15　Ⅰ層
（第39図10）


12

A12　Ⅰ層
（第39図11）

13

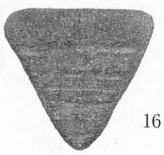
A19　Ⅰ層
（第39図12）

14

A８　Ⅰ層
（第39図13）

15

A14　Ⅰ層
（第39図14）


16

A28　倒木痕２
（第39図15）

17

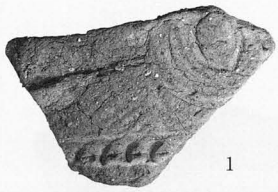
A13　Ⅰ層
（第39図16）

18

A26　倒木痕２
（第39図17）

１～18：縄文土器

図版14　縄文土器　　S＝約1/2



1
A７　Ⅰ層
（第39図18）

2
A10　Ⅰ層
（第39図19）

3
A３　SI１
（第36図３）

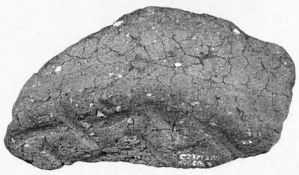
4
A16　Ⅰ層
（第39図20）

5
A25　倒木痕１
（第39図24）

6
A２　SI１
（第36図２）

7
A27　倒木痕２
（第39図21）

8
A20　ⅢかⅣ層
（第39図22）



9
A22　ⅢかⅣ層
（第39図23）

10
B２　倒木痕１
（第40図２）

11
B１　Ⅰ層
（第40図１）

12
P１　ⅢかⅣ層
（第40図３）

13
Ka11　SI１
（第36図４）

14
Ka42　P72
（第38図１）

15
Ka128　ⅢかⅣ層
（第41図１）

16
Ka66　Ⅰ層
（第41図２）

17
Ka67　Ⅰ層
（第41図４）

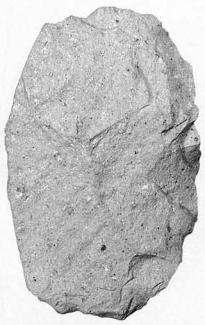
18
Ka11　Ⅰ層
（第41図３）

1～9：縄文土器　10・11：弥生土器　12：円盤状土製品　13・14：石鏃　15～18：石匙

図版15　縄文土器・弥生土器・土製品・剥片石器

S＝約1/2（土器・土製品）、約2/3（石器）

1
Ka57　Ⅰ層
（第41図５）


2
Ka106　Ⅰ層
（第42図１）

3
Ka88　Ⅰ層
（第41図７）

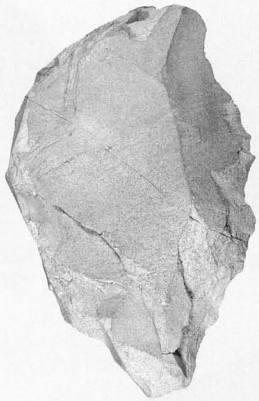
4
Ka16　SI１
（第36図５）

5
Ka95　Ⅰ層
（第42図２）

6
Ka83　Ⅰ層
（第41図６）

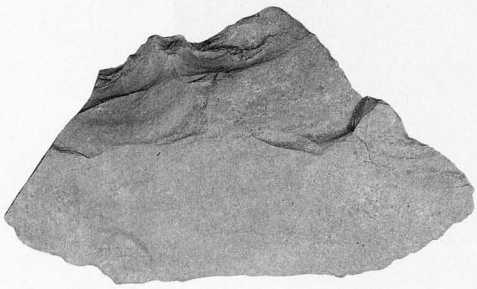
7
Ka115　ⅢかⅣ層
（第42図５）

8
Ka49　Ⅰ層
（第42図３）


9
Ka38　P58
（第38図２）

10
Ka93　Ⅰ層
（第42図７）

11
Ka98　Ⅰ層
（第42図６）


12
Ka101　Ⅰ層
（第42図８）

13
Ka48　Ⅰ層
（第42図４）

１：石匙　　２～12：不定形石器　　13：微紙剥離痕のある剥片

図版16　剥片石器

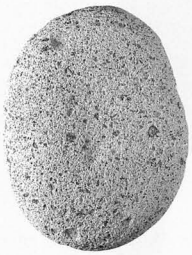
S＝約2/3

1
Kc 1　SI 1
（第36図 8 ）

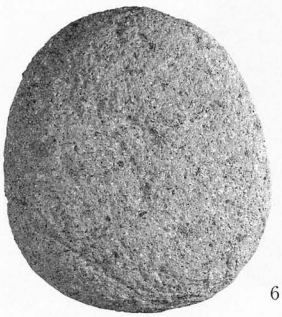
2
Kc 2　SI 1
（第36図 6 ）

3
Kc12　Ⅰ層
（第43図 2 ）

4
Kc13　Ⅰ層
（第43図 1 ）



5
Kc15　ⅢかⅣ層
（第43図 3 ）



6
Kc22　倒木痕 4
（第43図 6 ）

7
Kc 3　SI 1
（第36図 7 ）

8
Kc 8　P71
（第38図 3 ）

9
Kc11　Ⅰ層
（第43図 5 ）

10
Kc16　ⅢかⅣ層
（第43図 4 ）

11
Kc24　撹乱
（第43図 7 ）

12
Kc 9　Ⅰ層
（第43図 9 ）

13
Kc25　撹乱
（第43図 8 ）

14
Kc26　Ⅰ層
（第44図 1 ）

15
Kd 2　Ⅰ層
（第43図10）

16
Kd 1　SI 1
（第36図 9 ）

1～6：磨凹石　7～12：磨石　13：凹石　14：石皿　15：磨製石斧　16：石製品

図版17　礫石器・石製品

S＝約1/3（礫石器）、約1/4（石皿）、約1/2（石製品）

Ⅲ　庚申前窯跡発掘調査報告書

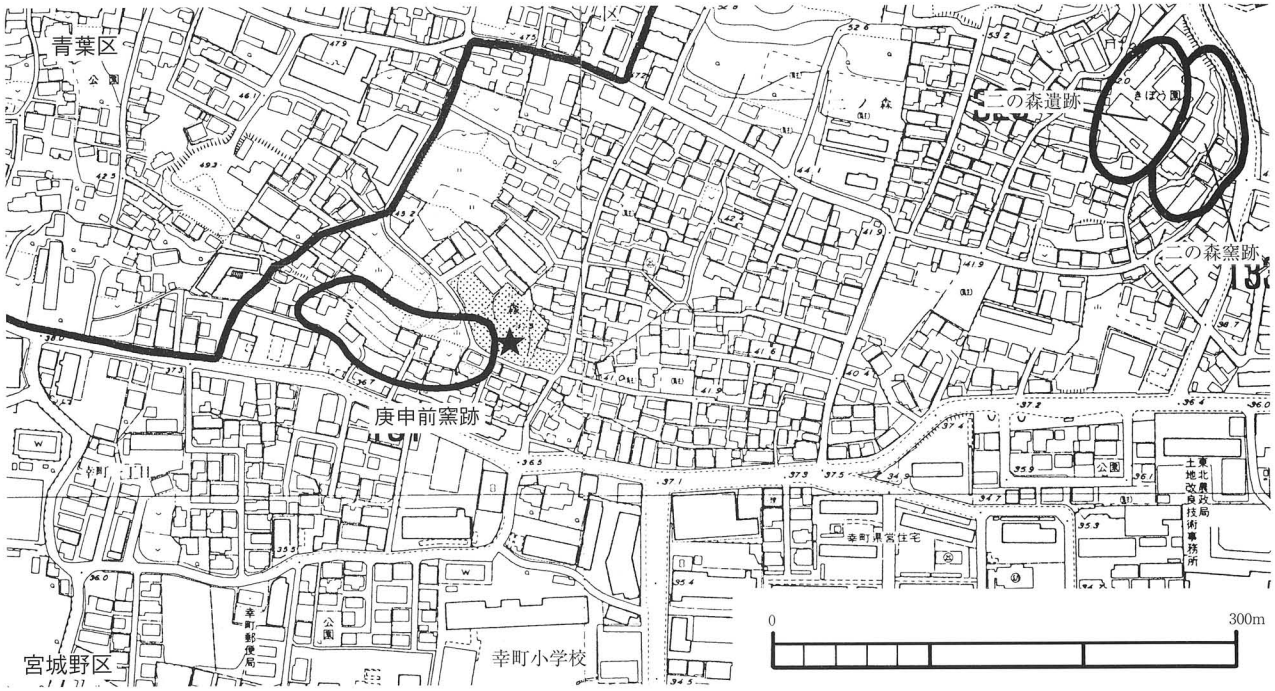
1　調査要項

遺　跡　名　庚申前窯跡（宮城県遺跡番号01131）
調 査 地 点　仙台市宮城野区二の森131他
調 査 期 間　平成14年５月８日～５月９日
調査対象面積　2,712㎡
調 査 面 積　87㎡
調 査 原 因　宅地造成工事
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育委員会（文化財課）
担 当 職 員　主任　渡部　紀　　文化財教諭　加藤徳明　　臨時職員　福寿規人

2　遺跡の位置と環境

庚申前窯跡は、仙台市北東部の標高100～50ｍの「台原・小田原丘陵」に所在する。台原・小田原丘陵は東北地方の南北に背梁をなす奥羽山脈から、太平洋側に派生した七北田丘陵の東端部に位置している。台原・小田原丘陵一帯では、現在湮滅したものを含め約30ヵ所の窯跡群が発見され、これらの窯跡群は総称として「台原・小田原窯跡群」と呼ばれている。台原・小田原窯跡群は５世紀段階に大蓮寺窯跡で須恵器生産が行われ、その後６・７世紀代の生産は不明であるが、７世紀末頃からは、郡山遺跡・多賀城跡・陸奥国分二寺・燕沢遺跡等の官衙・寺院遺跡と関連した須恵器・瓦生産遺跡として操業と廃絶が繰り返されている。

同窯跡は、台原・小田原窯跡群の中央の丘陵南側斜面に位置する。標高は40ｍ前後である。付近には与兵衛沼窯跡・二の森窯跡・枡江遺跡・神明社窯跡などがあり、宅地化された地域にも多くの窯跡が存在した可能性がある。



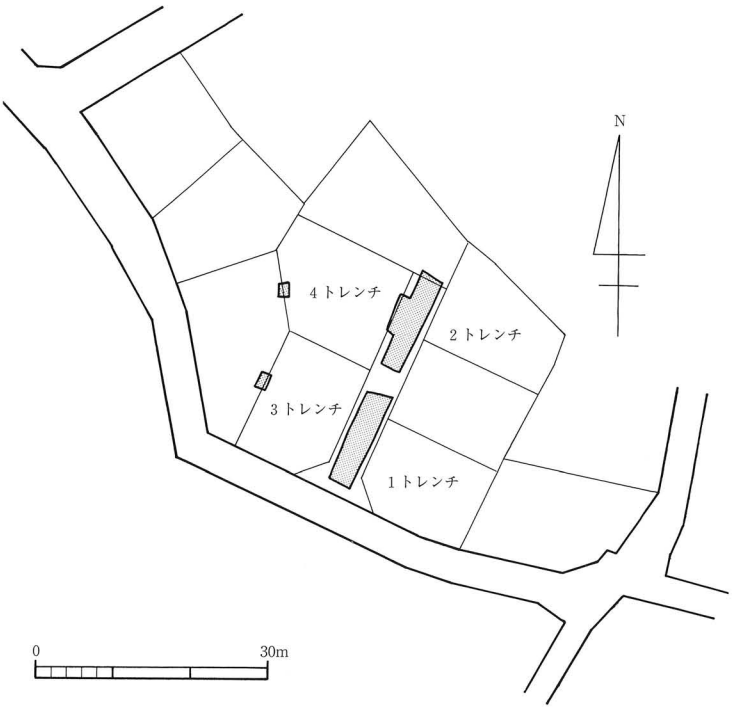
第45図　庚申前窯跡と周辺の遺跡

庚申前窯跡の調査は、昭和44年に宅地造成工事の掘削斜面で窯跡が発見された際に、東北学院大学等によって行われている。５基の窯跡が検出され、５基のうち４基は地下式無階無段の登窯である。主に須恵器が生産されており、坏における製作技法の特徴などから８世紀前半から中葉頃の窯跡群と位置付けられている。

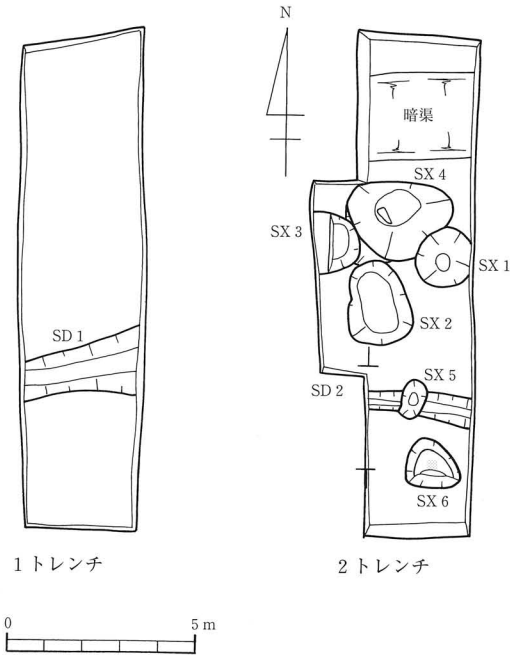
3　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成14年１月31日付けで、渡辺幸子氏より宅地造成計画の協議書が提出されたことにより実施した。開発区域は、遺跡登録範囲の北東部とその隣接地にあたる。記録保存の対象となる掘削は、現道から宅地分譲地への私道敷設工事と、分譲地の区画のための擁壁工事が実施されるため、道路部分に２本のトレンチ（１・２トレンチ）と、擁壁工事部分に２ヵ所のトレンチ（３・４トレンチ）を設定して調査を実施した。

測量は、任意の基準点で行った後、この基準点から周辺地区の地形を測量して調査区の位置を求めた。



第46図　開発区域と調査区配置



第47図　遺構配置図

4　基本層序

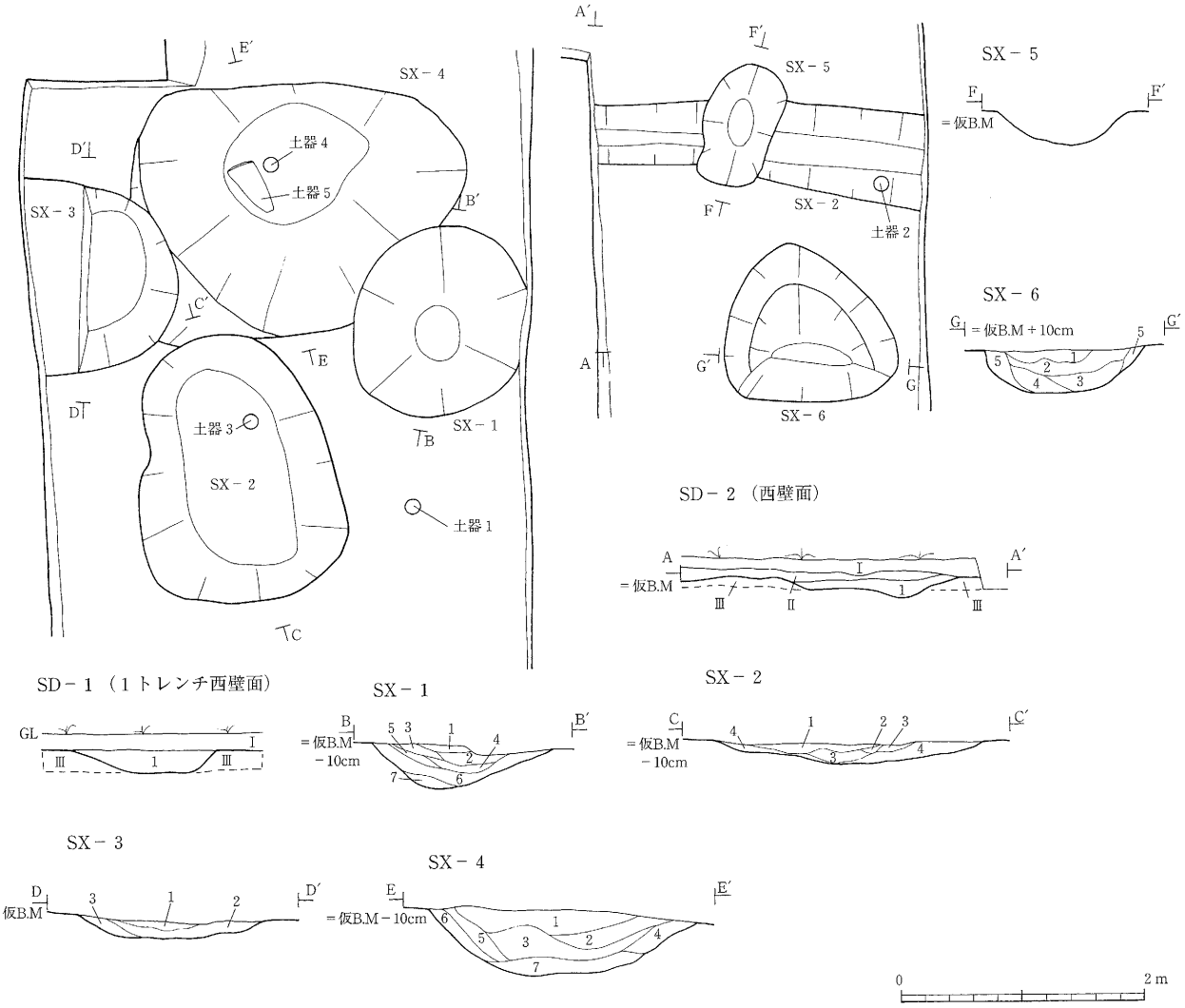
調査地点は、現況は比較的平坦な畑地となっている。基本層序は、Ⅰ層（表土）が黒褐色シルトの畑耕作土層、Ⅱ層がにぶい黄褐色のシルト層で、直径１㎝以下の礫が多量に含まれている。旧表土層と観察される。Ⅲ層は明黄褐色の粘土質シルト層で直径５㎜程度の礫を多量に含む。地山を形成し、Ⅲ層上面で遺構が検出されている。

5　検出遺構と出土遺物

１）１トレンチ

溝跡が１条検出されている。

SD－１溝跡　東西方向にのびる溝で、上面幅は1.1～1.8mである。断面形は浅い逆台形を基調とするが不整形で、底面には細かな起伏がある。堆積土は褐灰色のシルト１層である。出土遺物はない。



SD－1

土層No.	土　色	土　質	備　考
Ⅰ	10YR5/3　灰黄褐色	シルト	現在の畑耕作土。
SD-1　1	10YR4/1　褐灰色	シルト	径5cm以下の礫及び基本層Ⅲ層のブロックを含む。
Ⅲ	10YR7/6　明黄褐色	粘土質シルト	径5mm程度の礫を含む。

SD－2

土層No.	土　色	土　質	備　考
Ⅰ	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	
Ⅱ	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以下の礫を含む。旧耕作土。
SD-2　1	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	径1cm以下の礫を多く含む。基本層Ⅱ層の小ブロックを含む。

SX－1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm前後の黒褐色シルトのブロックを含む。
2	灰白色		「灰白色火山灰」基本層Ⅲ層のブロックを含む。
3	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	
4	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	
5	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	3層よりやや暗い。
6	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	
7	10YR4/4　褐色	シルト	

SX－2

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/1　黒褐色	シルト	基本層Ⅲ層のブロックを少量含む。
2	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	「灰白色火山灰」のブロックを含む。
3	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	シマリあり
4	10YR6/4　にぶい黄褐色	シルト	土器No.2出土

SX－3

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	灰白色	シルト	「灰白色火山灰」
2	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅲ層のブロックを少量含む。
3	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	基本層Ⅲ層のブロックを少量含む。

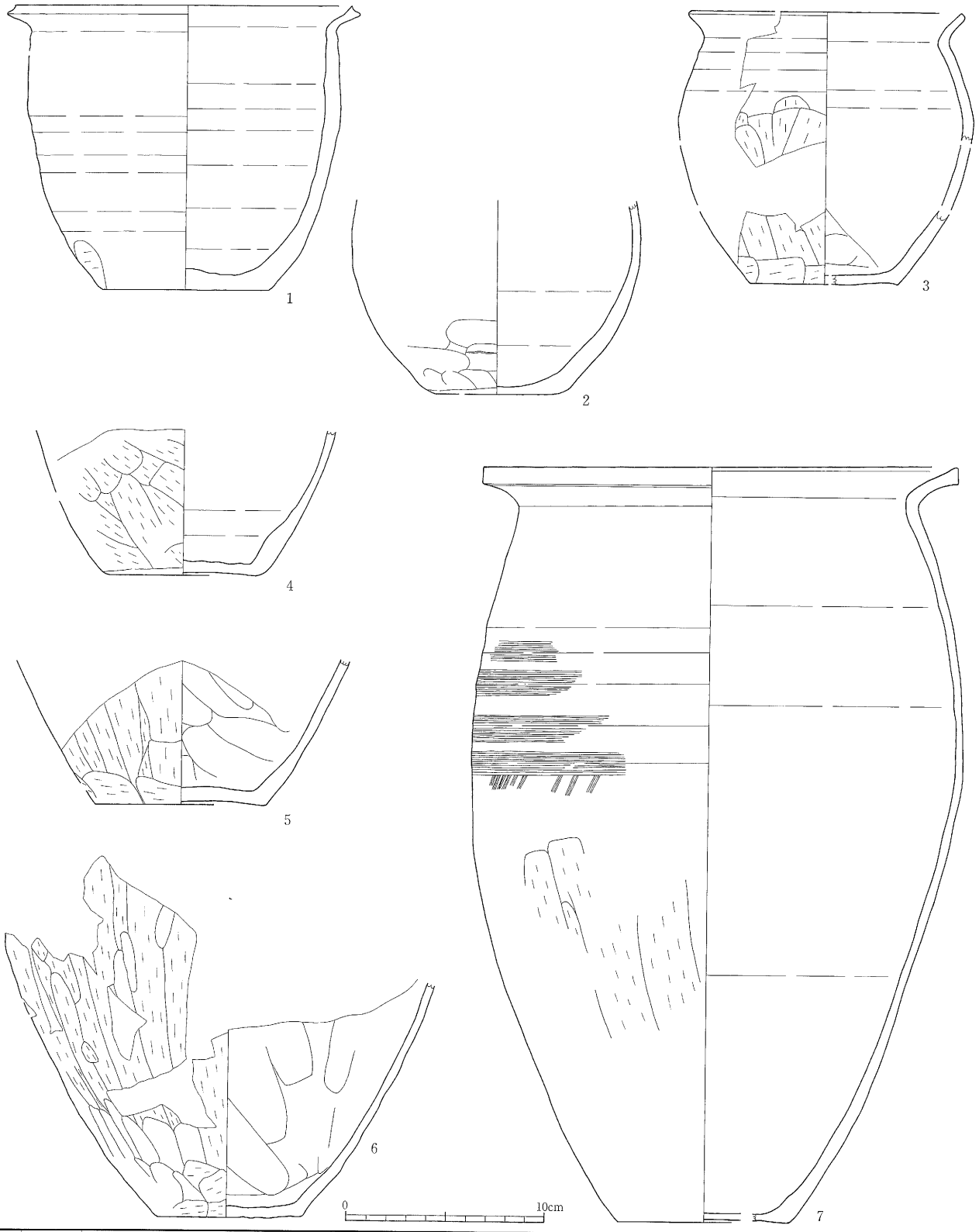
SX－4

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅲ層のブロックを主体とする。
2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅲ層のブロック（φ5cm以下）を多く含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅲ層のブロックを含む。
4	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	炭化物片を含む。
5	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	シマリあり。
6	10YR6/4　にぶい黄褐色	シルト	シマリあり。
7	10YR7/8　黄橙色	粘土	灰白色の粘土を含む。

SX－6

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR7/2　にぶい黄褐色	砂質シルト	シマリは弱い。
2	10YR4/1　褐灰色	シルト	にぶい黄橙色シルトのブロックを少量含む。
3	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト	シマリあり。
4	10YR6/4　にぶい黄橙色	シルト	基本層Ⅲ層のブロックを含む、シマリあり。
5	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	シマリあり。

第48図　遺構実測図



図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	(調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期)	
1	D－7	2トレンチ	Ⅲ層上	SD 2	埋土	No. 2	ロクロ土師器	甕	14.6	17.8	8.5	内外面ロクロ調整　外面体部下端ヘラケズリ	20－1
2	D－1	2トレンチ		SX 1	埋上		ロクロ土師器	甕	(9.9)		6.4	内面ロクロ　外面体部下半ナデ	
3	D－2	2トレンチ		SX 2			ロクロ土師器	甕	14.0		7.6	内面ロクロ・ナデ　外面ロクロ・ヘラケズリ	
4	D－3	2トレンチ		SX 2	底面	No. 3	ロクロ土師器	甕	(7.5)		7.5	内面ロクロ　外面ヘラケズリ	
5	D－5	2トレンチ		SX 4		No. 5	ロクロ土師器	甕	(7.5)		8.7	内面ナデ　外面ヘラケズリ	
6	D－4	2トレンチ		SX 4		No. 4	ロクロ土師器	甕	(18.1)		7.3	内面ナデ　外面ヘラケズリ	20－2
7	D－6	2トレンチ		SX 4		No. 5	ロクロ土師器	甕	39.0	24.1	8.7	内面ロクロ　外面上半ロクロ下半ヘラケズリ	20－3

第49図　出土遺物実測図

2）2トレンチ

溝跡1条と土坑状の遺構6基が検出されている。トレンチ北側には、暗渠排水のための溝状の掘り込みがある。

SD－2溝跡　東西方向にのびる溝跡で、上面幅は50～80cmである。断面形は不整形で北側がわずかに低くなっている。堆積土はにぶい黄褐色のシルト1層である。溝の南側壁面からは、Ⅲ層に入り込む状態で土師器の甕が出土している。（D－7：第49図1）SD－2溝跡に伴う遺物か他遺構の遺物か判然としない。

SX－1遺構　直径150cm前後の円形の落ち込みである。検出面からの深さは36cmで、断面形は舟底状を呈する。堆積土は7層に分けられ、このうち2層には「灰白色火山灰」が塊状に堆積している。堆積土中から体部上半を欠損するロクロを使用したと観察される土師器の甕が出土している。（D－1：第49図2）

SX－2遺構　長軸224cm・短軸167cmの略楕円形を呈する。深さは17cmで断面形は浅い舟底状を呈する。堆積土は4層に分けられるが、いずれも自然堆積と観察される。ロクロ使用の土師器の甕が2点出土している。（D－2・3：第49図3・4）

SX－3遺構　平面形は楕円形を呈すると推定される遺構で、西側は調査区外にのびる。検出部の東西長軸116cm・南北短軸160cmを測る。深さは14cmで断面形は浅い舟底状を呈する。堆積土は3層に分けられ、1層中には多量の「灰白色火山灰」が含まれる。出土遺物はない。いずれも自然堆積と観察される。

SX－4遺構　平面形は隅丸の逆三角形を呈し、東西軸長273cm・南北軸長210cmを測る。SX－1遺構に切られる。深さは56cmで、断面形は舟底状を呈する。堆積土は7層に分けられ、このうち1～4層については、人為的に埋められた可能性がある。堆積土中から体部上半を欠損するロクロ土師器の甕2点（D－4・5：第49図5・6）が出土したほか、底面中央付近からはほぼ完形のロクロ土師器の甕が1点潰れた状態で出土している。（D－6：第49図7）

SX－5遺構　平面形は楕円形を呈する。SD－2溝跡と重複関係にあり、溝跡調査後に検出されたが、新旧は明らかでない。南北長軸104cm・東西短軸60cmを測る。深さは約25cmで断面形は浅い舟底状を呈する。遺物は土師器片が2点出土している。

SX－6遺構　平面形は隅丸の三角形を呈する。東西軸長144cm・南北軸長131cmを測る。深さは35cmで断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は5層に分けられ、1層中には「灰白色火山灰」が堆積する。遺物は土師器片が2点出土している。

3）3・4トレンチ

遺構・遺物は発見されなかった。

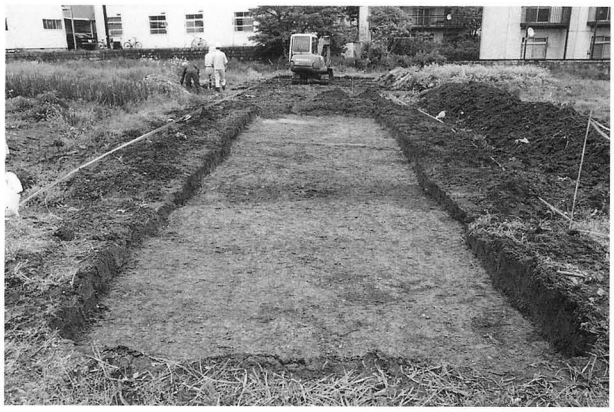
6　まとめ

① 今回の調査地点では、窯跡は発見されなかった。窯跡は調査地点より南側の丘陵斜面に分布すると推定される。
② 道路部分の調査で、溝跡2条と土坑状の遺構6基が発見された。
③ 溝跡についてはいずれも時期は不明である。
④ 土師器の出土したSX－1・2・4遺構については、ロクロを使用した土師器であることから、平安時代の遺構の可能性が考えられる。
⑤ 堆積層に灰白色火山灰が検出されたSX－2・3・6遺構については、10世紀前半以降に埋ったと考えられる。

参考文献

渡辺泰伸他（1973）：「窯跡調査報告書　2庚申前窯跡概報」『陸奥国官窯跡群』古窯跡研究会
渡辺泰伸他（1976）：「第二章仙台台の原・小田原窯跡群の研究」『陸奥国官窯跡群Ⅱ』古窯跡研究会

1　調査前景（西から）



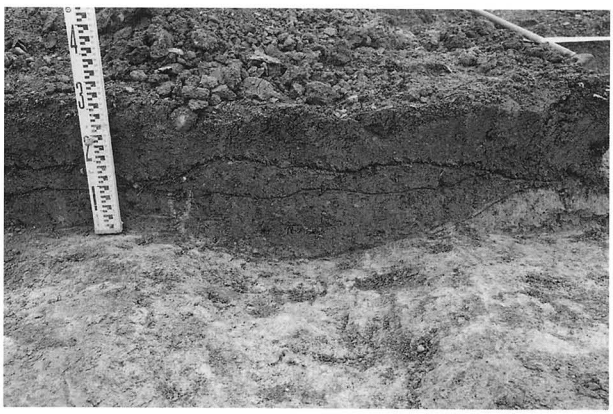
2　1トレンチ遺構検出状況

3　SD1溝跡断面（東から）

4　1トレンチ完掘状況（南より）

5　2トレンチ遺構検出状況（南から）

6　2トレンチ完掘状況（南から）

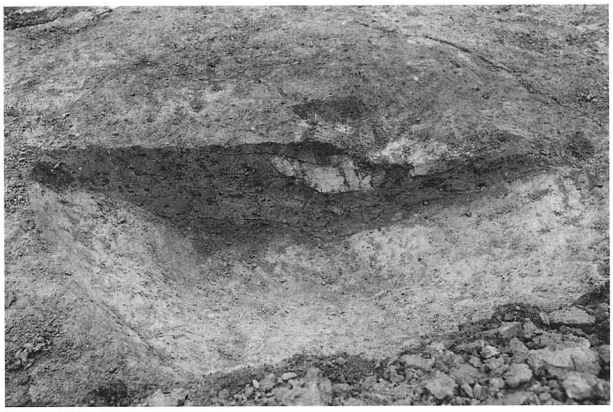


7　SD2溝跡断面（東より）

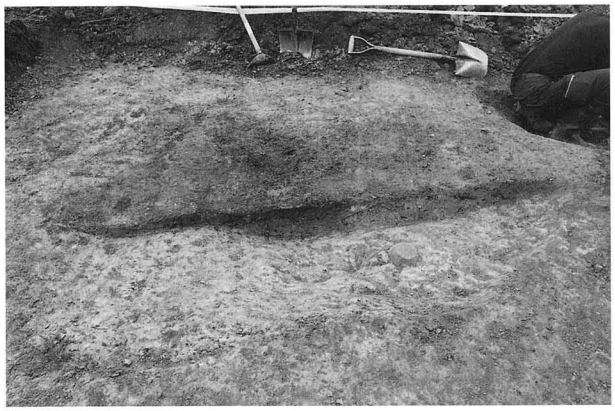
8　SD2溝跡全景（西より）

図版18　1・2トレンチの状況と溝跡

1　SD２溝跡壁面出土土器No.２（北より）



2　SX１遺構（東より）

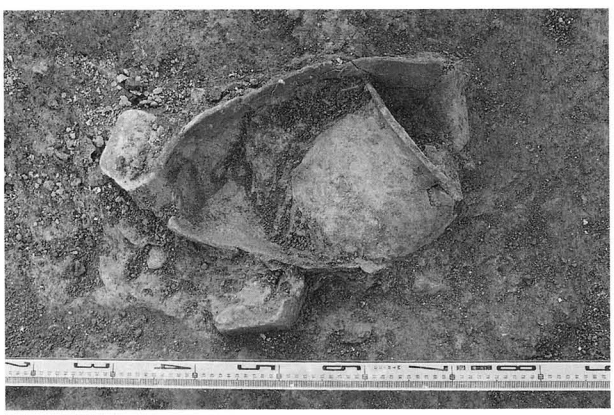


3　SX２遺構（東より）

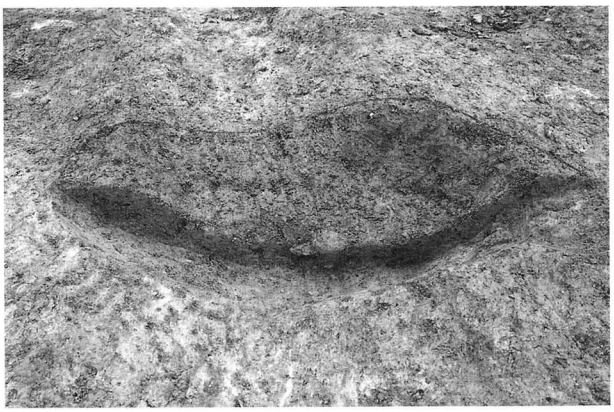
4　SX３遺構（東より）

5　SX４遺構断面（東より）

6　SX４遺構全景（東より）



7　SX４遺構出土土器No.５



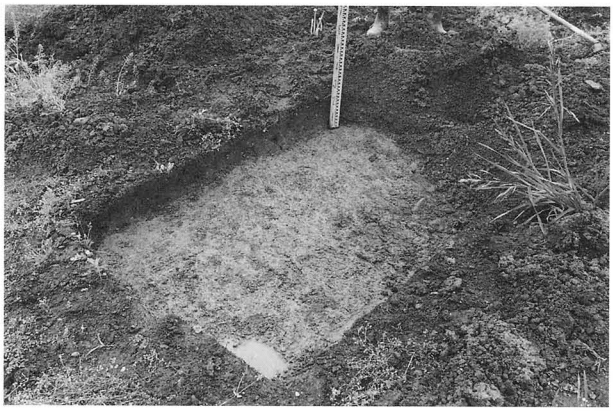
8　SX５遺構（東より）

図版19　２トレンチの遺構

1　SX６遺構断面（北より）

2　SX６遺構全景（東より）

3　３トレンチ全景（北西より）



4　４トレンチ全景（北西より）

1　土師器　甕　D－７（SD－２第49図１）
2　土師器　甕　D－４（SX－４第49図６）
3　土師器　甕　D－６（SX－４第49図７）

5　出土遺物

図版20　２・３・４トレンチと出土遺物

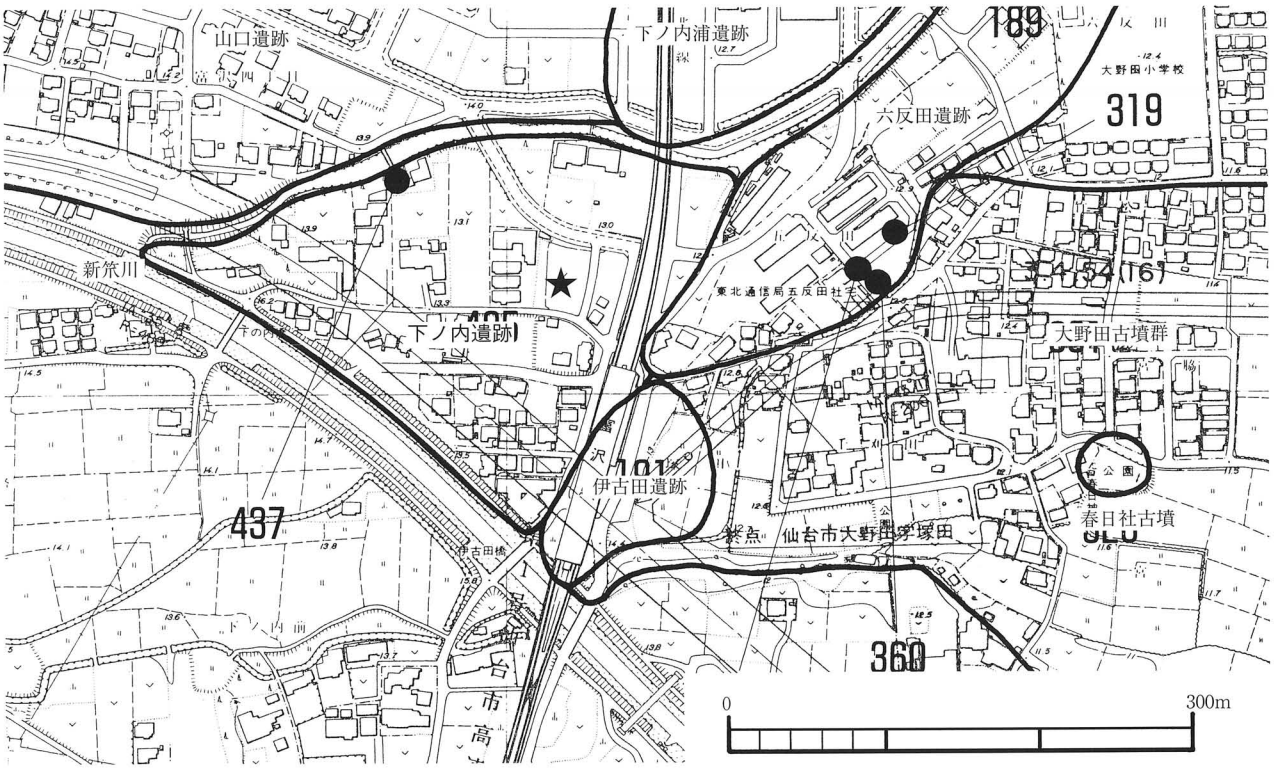
Ⅳ　下ノ内遺跡発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　下ノ内遺跡（宮城県遺跡番号01425）
調 査 地 点　　仙台市太白区富沢四丁目12－２、12－５、18－２、19－１、21－１の各一部　他
調 査 期 間　　平成14年８月19日～平成14年10月４日
調査対象面積　　812㎡
調 査 面 積　　300㎡
調 査 原 因　　店舗・駐車場付共同住宅建設
調 査 主 体　　仙台市教育委員会（文化財課）
担 当 職 員　　文化財教諭　加藤徳明　　臨時職員　福寿規人

2　遺跡の位置と環境

下ノ内遺跡は仙台市の南部・仙台市太白区富沢４丁目に所在し、高速鉄道南北線の富沢駅付近に位置している。名取川及び笊川によって形成された自然堤防上に立地し、笊川の南岸にあたる。標高は約12mである。下ノ内遺跡を含めた富沢周辺の地域は、かつて畑地や水田が広がる平坦な田園地帯であったが、近年の急速な宅地化に伴い、著しい変貌をとげている。また、この地域は仙台市でも遺跡の分布する密度が高い地域で、旧石器時代から中世・近世までの各時代の遺構が層位的に検出される重層構造の遺跡群として知られている。

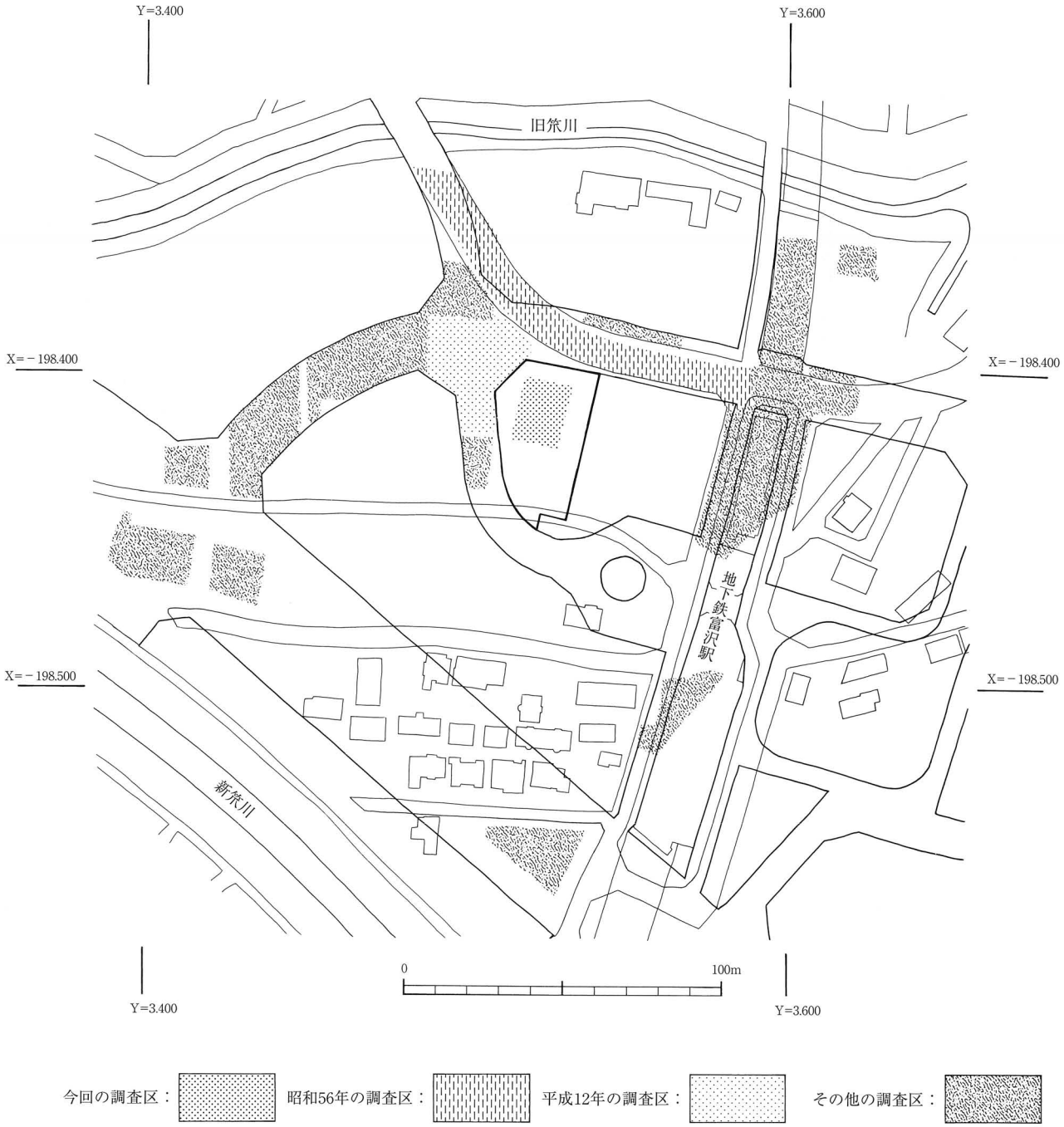


第50図　調査地点の位置と周辺の遺跡

下ノ内遺跡の発掘調査は昭和56年から富沢長町土地区画整理事業と高速鉄道建設に伴って開始され、これまでに縄文時代から近世までの遺構・遺物が数多く発見されている。今回の調査地点は、昭和56年と平成12年に実施された調査区の南側、東側に隣接している。

3　調査に至る経過と調査方法

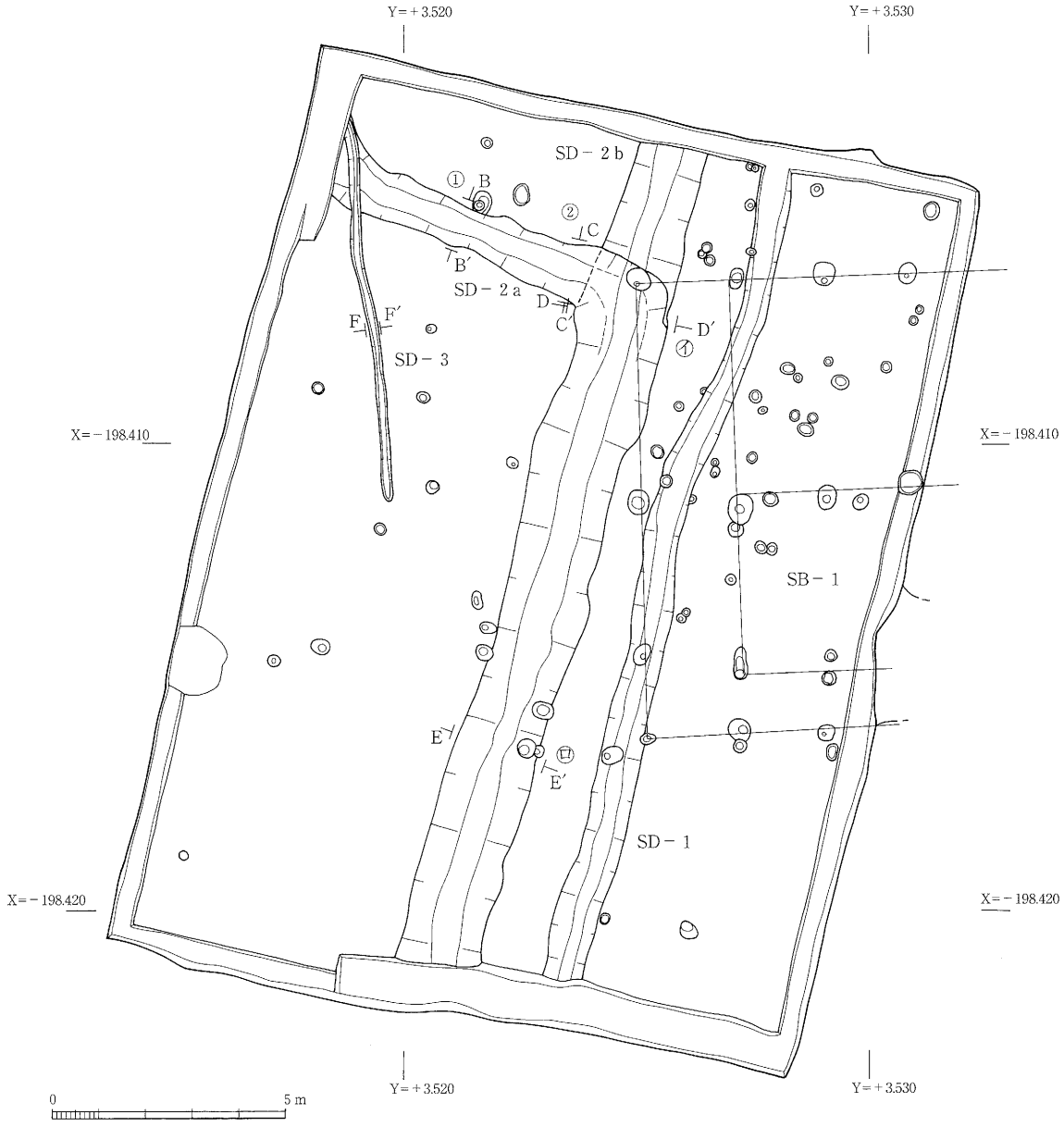
本件に関る下ノ内遺跡の発掘届が平成14年８月１日付で、仙台市太白区富沢四丁目７－１庄子末吉氏より提出された。



第51図　調査区配置図

今回の調査対象面積は812㎡である。そのうち300㎡（東西15m・南北20m）を調査した。これまでの調査の成果から、３・５ａ・５ｂ・６・12層で遺構の広がりが想定された。今回は重機により現地表下70cmまで掘り下げ、５ａ層より人力により遺構検出作業を行った。また、５ａ・５ｂ・６層の調査後、調査区北部で縄文時代の遺構の広がりを確認するため、東西10m・南北８mの範囲（80㎡）を重機で掘り下げ、下層調査を行った。

遺構の測量は、平面座標系Ｘを基準とした。



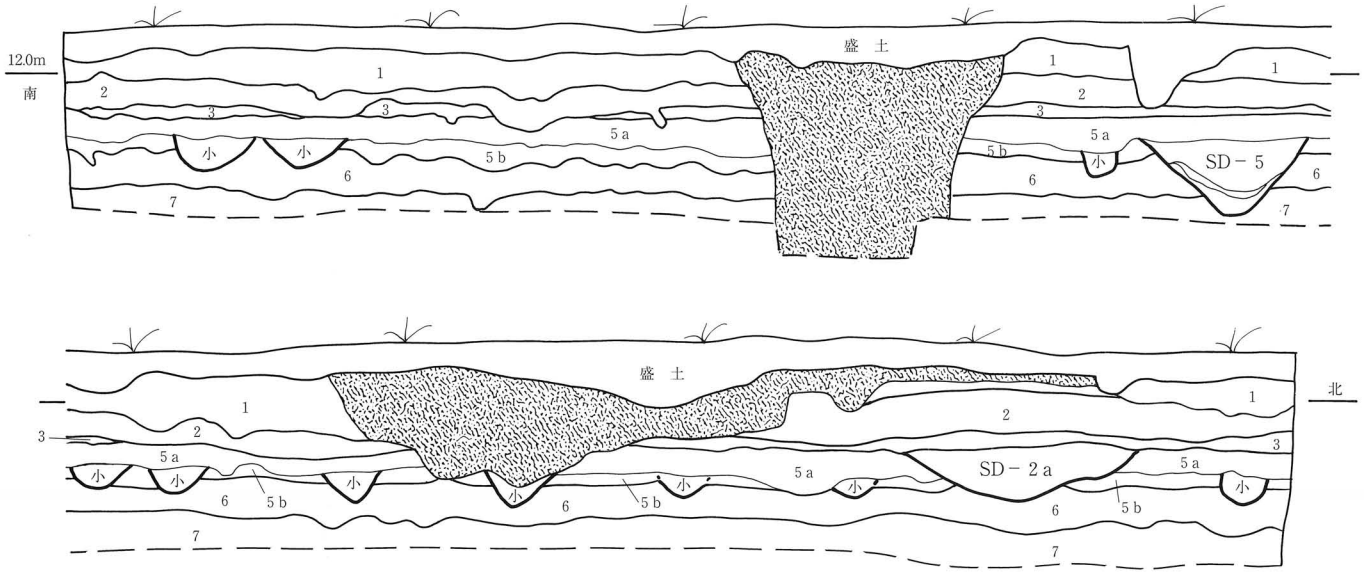
第52図　５ａ層検出遺構

4　基本層位

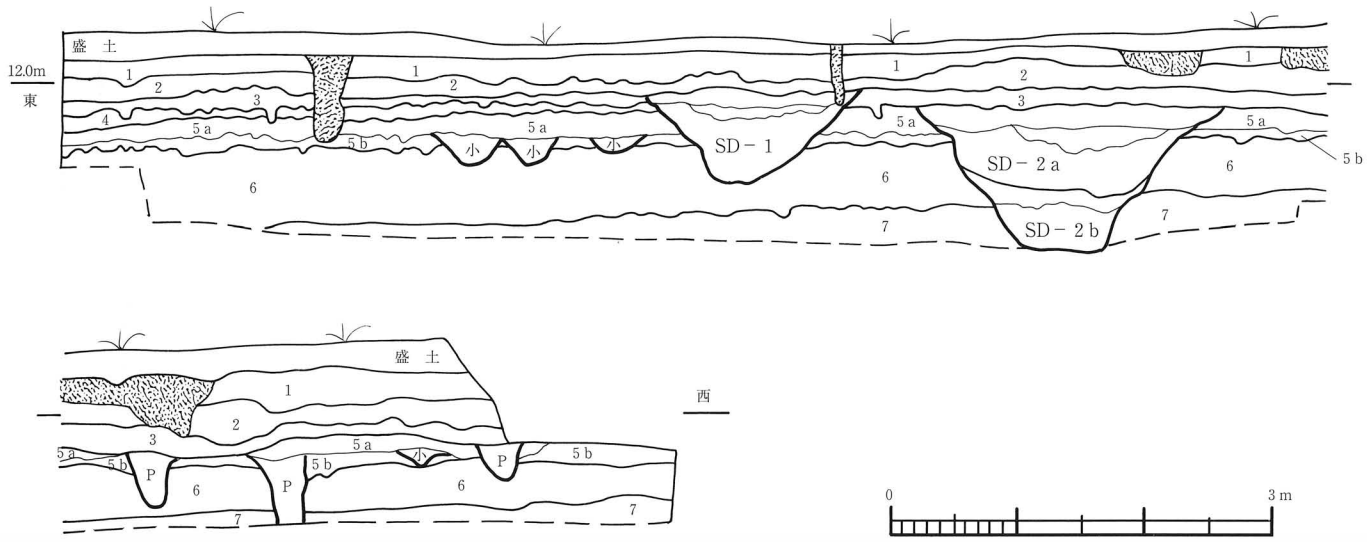
基本層位は大別12層、細別14層に分けられる。

１　層：灰黄褐色の砂質シルトで、旧耕作土である。層厚は10～50cmである。調査区北西部ではグライ化している。

＜西壁＞



＜南壁＞



土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径１mm程のマンガン粒と白色粒をごくわずかに含む。
2	10YR4/4　暗褐色	砂質シルト	径１～３mm程のマンガンを粒状に含む。
3	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	鉄分をまばらに含む。
4	10YR3/4　暗褐色	シルト	径１mm程のマンガン粒をごくわずかに含む（トレンチ東部に分布）
5a	10YR3/3　暗褐色	シルト	径１mm程のマンガン粒をごくわずかに含む。４層に比べて若干黒色化する。
5b	10YR2/3　黒黄色	シルト質粘土	５b層全体に６層の土がブロック状に入っている。
6	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径１～５mm程のマンガン粒をごくわずかに含む。
7	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	トレンチ全体に均一に堆積している層。

第53図　調査区土層断面図

2　層：暗褐色の砂質シルトである。層厚は12～25cmで、東部では薄くなっている。調査区北西部ではグライ化している。

3　層：黄褐色の砂質シルトで、鉄分をまばらに含む。層厚は５～20cmで、分布していないところもある。調査区北西部ではグライ化している。これまでの調査では、上面で中世と考えられる掘立柱建物跡、溝跡、土坑が確認されている。

4　層：暗褐色のシルトである。層厚10cm程度で調査区東部に部分的に堆積している。５ａ層が下がっていた部分に堆積していたと考えられる。

5ａ層：暗褐色のシルト、４層に比べて若干黒色化する。層厚は10～20cmである。調査区西部ではグライ化している。これまでの調査では平安時代の小溝状遺構や土坑が確認され、古墳時代から平安時代の遺物が出土している。

5ｂ層：黒褐色のシルト質粘土である。層厚10～20cm。これまでの調査では古墳～平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡等の遺構が確認されている。

6　層：褐色の砂質シルトである。層厚約30cmで、東部では約50cmと厚くなっている。これまでの調査では弥生時代（天王山式期）の土坑等が確認され、層中より縄文時代晩期の土器が出土している。

7　層：暗褐色のシルト質粘土である。層厚は約40cm程である。

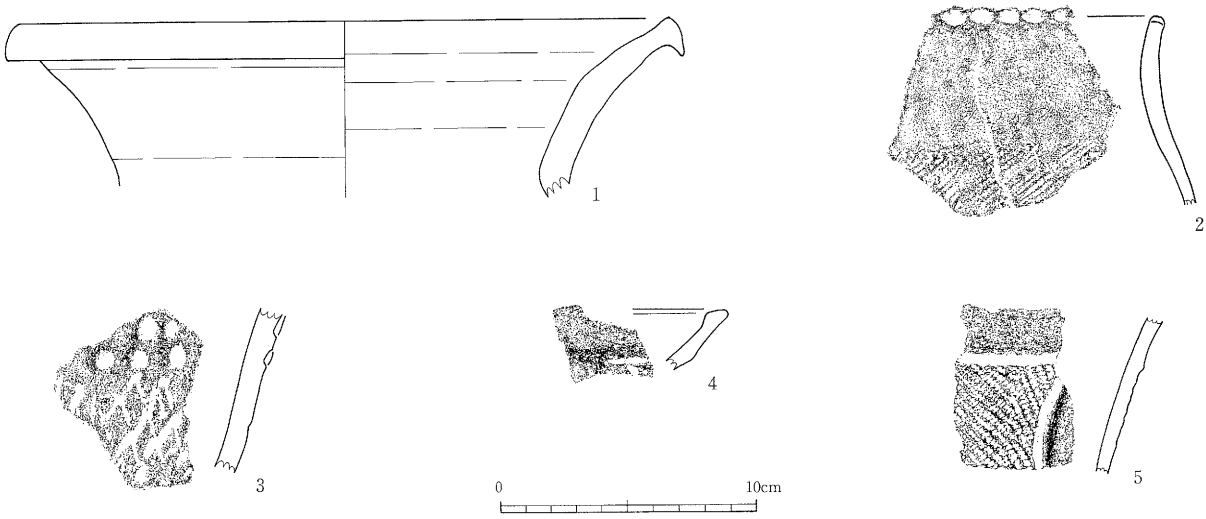
8　層：にぶい黄褐色の砂質シルトで、直径１～５㎜の灰色土をブロック状に含む。層厚20～35cmである。

9　層：褐色のシルトである。層厚は35～45cmである。

10　層：暗褐色のシルトで、層厚約10cm程で、西側の一部にのみ堆積している。これまでの調査で、上面で縄文時代中期末葉～後期前葉の住居跡が確認され、縄文土器や石器が出土している。

11　層：２層に細分される。11ａ層は黒褐色のシルト質粘土、層厚20～30cmである。11ｂ層はにぶい黄褐色のシルト、層厚15～25cmである。これまでの調査で、縄文時代中期末葉～後期前葉の多量の縄文土器や石器が出土している。

12　層：にぶい黄褐色のシルトである。根や茎の腐植土と考えられる土が混入している。検出した層厚は20～45cmである。これまでの調査で、上面で縄文時代中期末葉の大木10式期の竪穴住居跡３棟を確認し、そのうちの２棟は、敷石住居であった。



図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	E－6		5a				須恵器	甕	(6.1)	25.3		内外面ロクロ	30－13
2	A－1		5b				縄文土器	深鉢				縄文（RL）　口唇刺突	30－1
3	A－2		11b				縄文土器	深鉢				刺突・網目状撚紋	30－3
4	A－3		11b				縄文土器	浅鉢					30－4
5	A－4		12				縄文土器	深鉢				縄文（LR）沈線	30－2

第54図　基本層出土遺物

5　5ａ層発見遺構と出土遺物

5ａ層上面では、掘立柱建物跡１棟、溝跡４条、ピット76個が検出された。

１）掘立柱建物跡

SB－１掘立柱建物跡　【位置・重複】調査区北東端で検出した。調査区の東側へ伸びると考えられ、全体の規模が明らかではない。SD－１溝跡、SD－２ａ・２ｂ溝跡を切っている。３層掘りこみのSD－１を切っていることから、検出は５ａ層であったが３層上面より上層から掘りこまれたの建物である。

【規模・配置・方向】検出部の建物の規模は、東西が北辺で３間5.7m、南辺で２間3.8m、南北が西辺で３間9.8mを測るが、東側に伸びている可能性がある。柱間寸法は、北辺東西列が西から2.0m・1.9m・1.8mで、南辺東西列が西から2.1m・1.7mである。南北は西辺が北から4.7m・3.3m・1.7mである。西側と南側に柱間寸法約２m・と約1.3mの庇・縁を持つ。南北列の方向は西辺でN－２°－Wである。

【柱穴・柱痕跡】検出された14個の柱穴のうち10個から柱痕跡が確認された。柱穴の掘り方の直径は32～70cmの円形ないし、楕円形である。柱痕跡は直径13～27cmの円形である。Ｐ６とＰ８の底面からは直径約20cm程の根石が出土した。

【出土遺物】遺物は、P39から土師器片が１点出土している。

２）溝跡

SD－１溝跡　【位置・重複】中央部で調査区を南北に縦断して検出された。検出は５ａ層であるが、３層より掘りこまれている。SB－１掘立柱建物跡に切られる。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は19.5mで、方向はN－15°－Eである。幅は上面で90cm・底面で55cmである。

【深さ・断面形】深さは42cmで、断面形はU字形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は４層に分けられる。１層はにぶい黄褐色の砂質シルト、２層は灰黄褐色のシルト、３層は褐色の粘土質シルト、４層は褐色のシルト質粘土である。遺物は、土師器片、坏E－５（第57図８）を含む須恵器片、石鏃（K－１：図版30－15）が出土した。

SD－２ａ溝跡　【位置・重複】中央部を南壁から北に15.5m程伸び、北部でほぼ直角に西へ折れて西壁の外に伸びている。南北部分では、SD－２ｂ溝跡の上部を切っており、SD－２ｂ層が埋まった後にSD－２ｂを踏襲して掘られている。SB－１掘立柱建物跡・SD－３溝跡に切られる。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は、南北15.5m、東西8.5mである。方向は南北がN－16°－Eである。

南北部分の幅は上面140～180cm・底面約90cmで、東西部分の幅は上面80～120cm・底面30～40cmである。

【深さ・断面形】深さは東西部分が25～40cm、南北部分が約45cmである。断面形は舟底型から西部ではU字形に変化する。

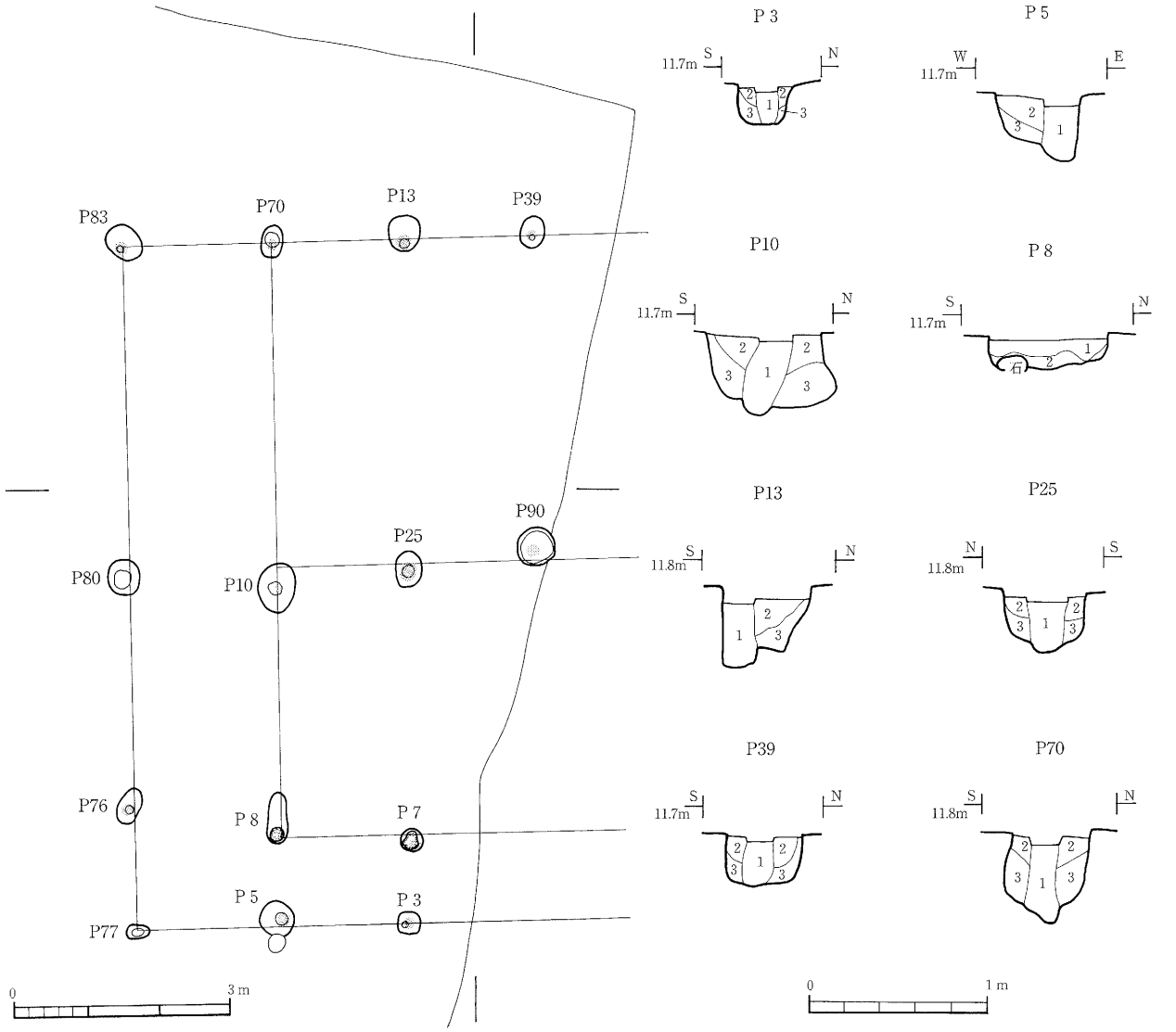
【堆積土・出土遺物】堆積土は３層に分けられ、西部では１層になる。遺物は弥生土器片（B－１・２・３・４：第57図１・２・３・４）、内黒の非ロクロ土師器の坏（C－１：第57図５）を含む土師器片、須恵器片（E－１・２・３・４：第57図12・９・７・10）、石鏃（K－２：図版30－16）が出土した。

SD－２ｂ溝跡【位置・重複】調査区中央を南北に縦断する。SB－１掘立柱建物跡に切られる。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は19mである。方向はN－16°－Eである。幅は上面150～170cm、底面35～70cmである

【深さ・断面形】深さは75～80cmである。断面形は逆台形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は２層に分けられる。遺物は、土師器片、須恵器片のほか、鎌の一部と考えられる鉄製品（N－１：第57図13）、羽口片（P－１：第57図14）が出土した。



P 3

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	褐色の砂質シルト土をわずかに含む。径１～３mmのマンガンをわずかに含む。
2	10YR2/3　黒褐色	シルト	暗褐色土シルトと径１～３mmの酸化鉄と径１～３mmのマンガンをまばらに含む。
3	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土を少量含む。

P 5

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄・マンガンをまばらに含む。上層に径２cm程の黒褐色の粘土層あり。下ににぶい黄褐色の粘土質シルトあり。下３層に褐色の砂質シルトあり。酸化鉄多量に含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径１～３mmのマンガンをまばらに含む。酸化鉄をわずかに含む。
3	10YR4/4　褐色	シルト	径３～５mmの酸化鉄を少量含む。

P 8

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径１～２mm程の鉄分を含む。
2	10YR3/3　暗褐色	シルト	径１～５mmの鉄分をまばらに含む。

P10

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	径１～３cmにぶい黄褐色土のブロック状をまばらに含む。径１～５mm酸化鉄をまばらに含む。径１～２mmのマンガンをわずかに含む。
2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	径１～３mmの酸化鉄とマンガンをわずかに含む。
3	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	褐色砂質シルトが径５mm～１cmのブロック状で多量含む。径１～５mmの酸化鉄をまばらに含む。

P13

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径３～５mm炭化物粒をわずかに含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	
3	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	下層に暗褐色の土をわずかに含む。

P25

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	上層に径２～３cmのにぶい黄褐色の砂質シルトの層。径１～３mmのマンガンと径１～２mmの酸化鉄をわずかに含む。
2	10YR4/6　褐色	砂質シルト	径５mm～１cmの黄褐色の砂質シルトがブロック状にわずかに含む。径１～２mmの酸化鉄をわずかに含む。
3	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	

P39

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	鉄分をまばらに含む。
2	10YR3/3　暗褐色	シルト	灰色の土をブロック状に含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径１～２mm程の鉄分を含む。

P70

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	にぶい黄褐色砂質シルトが径１～３cmのブロック状で少量含む。酸化鉄粒径１～５mmをまばらに含む。
2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	酸化鉄粒径１～２mmをまばらに含む。径１～３mmのにぶい黄褐色の砂質シルトを少量含む。
3	10YR3/4　暗褐色	シルト	褐色シルトが径３～５mmのブロック状で少量含む。径１～３mmの酸化鉄粒をまばらに含む。

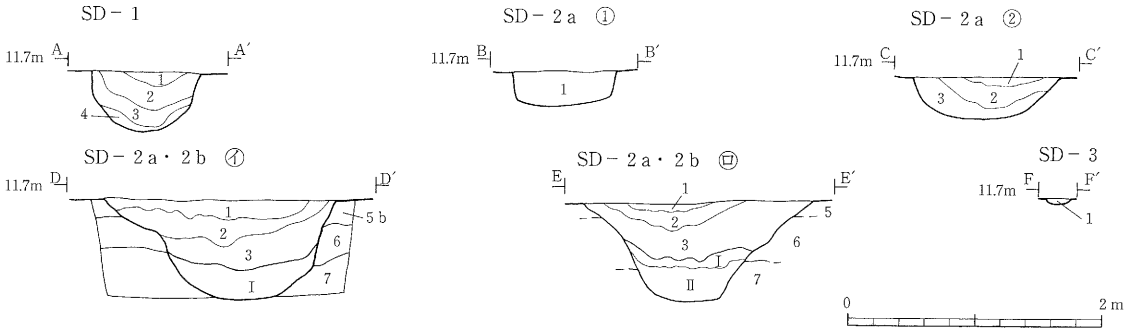
第55図　５ａ層検出SB－１掘立柱建物跡

SD－３溝跡　【位置・重複】北部で検出された。西壁から南東に8.3mほど検出されており、北側は調査区外に続いている。SD－２ａ溝跡を切っている。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は8.3mで、方向はＮ－５°－Ｗである。幅は上面25cm・底面15cmである。

【深さ・断面形】深さは4cmで、断面形は舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土はグライ化しており、オリーブ褐色のシルト１層である。遺物は土師器片が１点出土している。



SD－１

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径１～３mm酸化鉄とマンガンをまばらに含む。
2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径１～５mmの酸化鉄と径１～３mmのマンガンを少量を含む。
3	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	西側の上面に暗褐色シルト土が多い。径１～３mmのマンガンと酸化鉄を少量含む。
4	10YR4/4　褐色	シルト質粘土	径１～３mmのマンガンと酸化鉄を少量含む。

SD－２ａ　①

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	

SD－２ａ　②

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/2　にぶい黄褐色	砂質シルト	にぶい黄橙色土をブロック状に含む。
2	10YR4/3　にぶい黄橙色	砂質シルト	径１～２mm程のマンガン・鉄分をまばらに含む。
3	10YR3/4　暗褐色	シルト	にぶい黄橙色土をブロック状に含む。

SD－２ａ・２ｂ　㋑

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径１～３cmのにぶい黄橙砂質シルトをブロック状に多く含む。 径１～３mmの酸化鉄と径１～３mmのマンガンをまばらに含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径１～３mmのマンガンと径１～３mmの酸化鉄をまばらに含む。両脇上層部に５b層が流れ込んでいる。
3	10YR3/4　暗褐色	シルト	径１～３cmにぶい黄褐色砂質シルトをブロック状にわずかに含む。 径１～３mmの酸化鉄と径１～３mmのマンガンをわずかに含む。
I	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	径１～３cmの６層をブロック状に少量含む。 径１～３mmの炭化物をわずかに含む。

SD－２ａ・２ｂ　㋺

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	黄色土をブロック状に多量に含む。
2	10YR3/4　暗褐色	シルト	灰色土をまばらに含む、径１mm程の鉄分をわずかに含む。
3	10YR3/4　暗褐色	シルト	灰色土をブロック状に含む、径１～３mm程の鉄分を若干含む。
I	10YR3/4　暗褐色	シルト	黄色土をブロック状に含む。
II	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	灰色土をブロック状にわずかに含む、径１～２mm程の鉄分をまばらに含む。

SD－３

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	2.5Y4/4　オリーブ褐色	シルト	グライ化部分多く鉄分少量含む。暗褐色の土をブロック状に多く含む。

第56図　５ａ層検出溝跡断面図

３）ピット

ピットを76個検出した。そのうち14個で柱痕跡を確認できた。Ｐ－６・８の底面からは根石が出土している。Ｐ－55からは須恵器の蓋Ｅ－７（第57図６）が出土した。

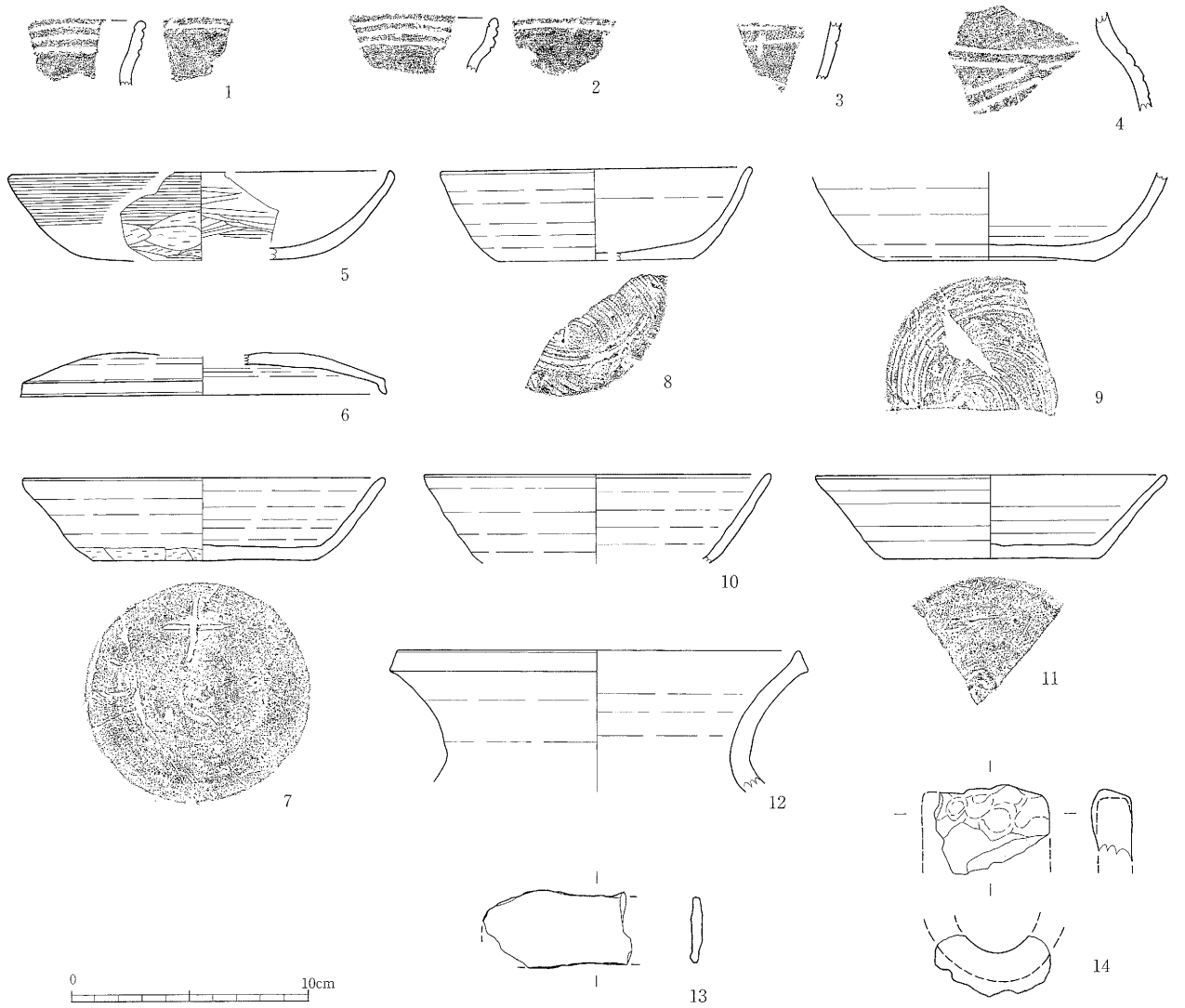
６　５ｂ層発見遺構と出土遺物

５ｂ層では、掘立柱建物跡２棟、溝跡4条、土坑６基、小溝状遺構70条、ピット123個を検出した。

１）掘立柱建物跡

SB－２掘立柱建物跡　【位置・重複】北東部で検出された。他の遺構との重複関係は認められない。

【規模・配置・方向】検出部の建物の規模は南北が２間で3.6mを測る。建物は調査区の東側へ伸びていると推定される。方向はＮ－16°－Ｅである。

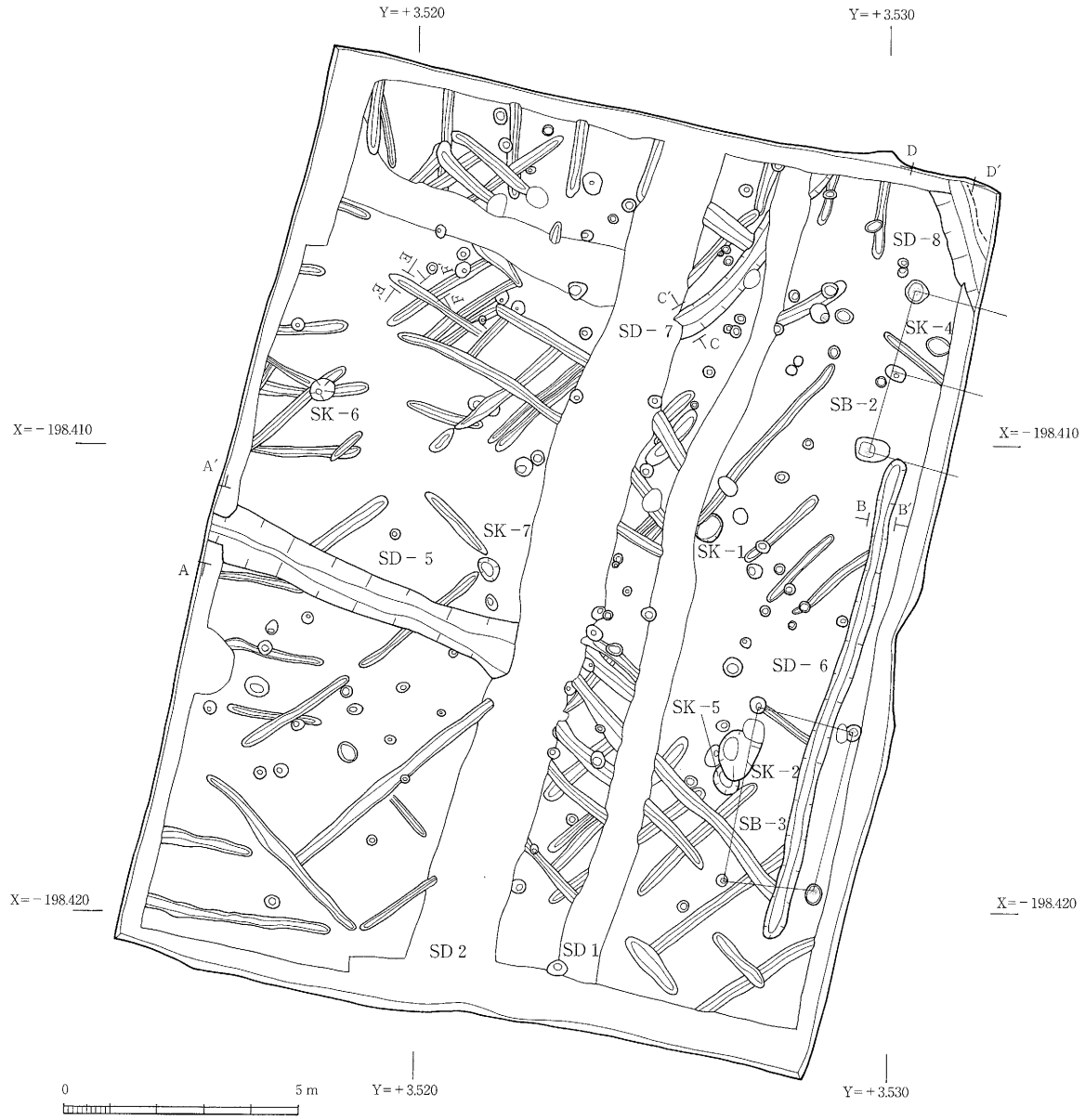


図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	(調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期)	
1	B－1			SD－2a	2層		弥生土器	甕				外面3条平行沈線　内面1条沈線	30－6
2	B－2			SD－2a	2層		弥生土器	甕				外面3条平行沈線　内面1条沈線	30－5
3	B－3			SD－2a	2層		弥生土器	鉢				外面沈線文	30－7
4	B－4			SD－2a	2層		弥生土器	壺				外面平行沈線山形文	30－8
5	C－1			SD－2a	3層		土師器	坏	3.9	15.5		外面ヨコナデ・ヘラケズリ　内面ヘラミガキ	30－9
6	E－7			P55	埋土		須恵器	蓋	(2.0)	15.1		内外面ロクロ	30－12
7	E－3			SD－2a	3層		須恵器	坏	3.8	15.1	9.6	外面下端手持ちヘラケズリ　底部回転ヘラケズリ	30－10
8	E－5			SD－1	埋土		須恵器	坏	4.0	13.5	8.2	内外面ロクロ　底部回転糸切り	30－11
9	E－2			SD－2a	3層		須恵器	坏	(3.3)		8.9	内外面ロクロ　底部回転糸切り	
10	E－4			SD－2a	4層		須恵器	坏	(3.9)	14.8		内外面ロクロ	
11	E－8			小溝A－8	埋土		須恵器	坏	3.8	14.8	9.1	内外面ロクロ	
12	E－1			SD－2a	3層		須恵器	甕	(5.4)	16.0		ロクロ	
13	N－1			SD－2b	2層		鉄製品	鎌？	(5.6)	3.1	0.2		30－14
14	P－1			SD－2b	2層		土製品	羽口					30－17

第57図　遺構出土遺物

【柱穴・柱痕跡】検出された3個の柱穴すべてから柱痕跡が確認された。柱穴の掘り方の直径は40～60cmの円形ないし、楕円形である。柱痕跡は直径約15cmの円形である。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。



第58図　５ｂ層検出遺構

SB−３掘立柱建物跡　【位置・重複】南東部で検出された。小溝状遺構Ａ群を切っている。

【規模・配置・方向】検出部の建物の規模は東西が１間で2.0m、南北が１間で西辺3.5m・東辺3.8mを測る。南北列の方向は西辺でＮ−11°−Ｅである。

【柱穴・柱痕跡】検出された４個の柱穴のうち２個から柱痕跡が確認された。柱穴の掘り方の直径は25〜40cmの円形ないし、楕円形である。柱痕跡は直径約15cmの円形である。

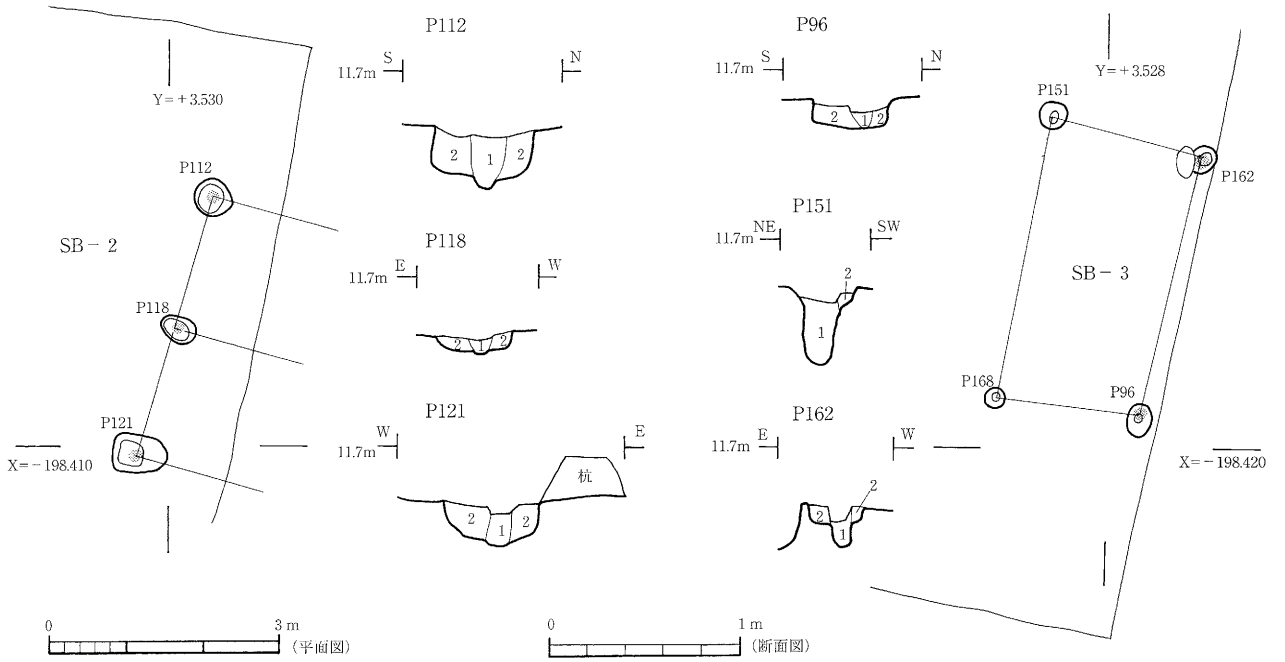
【出土遺物】遺物は、Ｐ−162から土師器片１点が出土している。

２）溝跡

SD−５溝跡　【位置・重複】西部中央でSD−２ａ・２ｂ溝跡の西側だけで検出され、東側には延びない。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は6.9mで、方向はＮ−67°−Ｗである。幅は上面130cm・底面70cmである。

【深さ・断面形】深さは57cmで、断面形は逆台形を呈する。



P112

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	灰色土をまばらに含む。マンガンと黄褐色土をわずかに含む。径3～5mm炭化物をごくわずかに含む。
2	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	マンガンと黄褐色土をわずかに含む。径3～5mmの炭化物をごくわずかに含む。

P118

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	
2	10YR4/6　褐色	シルト	暗褐色土をまばらに含む。

P121

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	灰色土をわずかに含む。径1～2mmのマンガンをわずかに含む。
2	10YR3/4　暗褐色	シルト	褐色土と灰色土をわずかに含む。径1～3mmの炭化物をごくわずかに含む。

P96

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/3　暗褐色	シルト	鉄分をまだら状に含む。
2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	灰色土をブロック状に含む。

P151

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	灰色土と黄褐色土をブロック状に含む。酸化鉄をわずかに含む。
2	10YR4/4　褐色	砂質シルト	灰色土をブロック状に含む酸化鉄をわずかに含む。

P162

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	マンガンをわずかに含む。
2	10YR4/4　褐色	シルト	灰色土と暗褐色土をブロック状に含む。

第59図　５ｂ層検出SB－２・３掘立柱建物跡

【堆積土・出土遺物】堆積土は３層に分かれる。１層は暗褐色の砂質シルト、２層は黒褐色のシルト、３層は暗褐色のシルトである。遺物は出土しなかった。

SD－６溝跡　【位置・重複】東部で東壁に沿って検出された小溝状遺構を切っている。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は10.5ｍで、方向はＮ－15°－Ｗである。幅は上面45cm・底面20cmである。

【深さ・断面形】深さは25cmで、断面形はＵ字形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト１層である。遺物は土師器片が８点出土した。

SD－７溝跡　【位置・重複】中央北部でSD－２ａ・２ｂ溝跡の東側だけで検出され、北壁にかかる。SD－２ａ・２ｂ溝跡より西側には延びない。SD－１・２溝跡に切られる。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は4.7ｍで、方向はＮ－41°－Ｅである。幅は上面60cm・底面24cmである。

【深さ・断面形】深さは22cmで、断面形は舟底形を呈する。

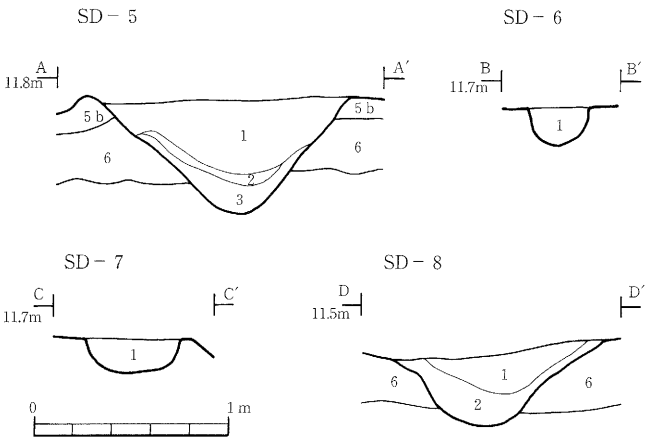
【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト１層である。遺物は土師器片が３点出土した。

SD－８溝跡　【位置・重複】北東角で検出され、壁にかかる。他の遺構との重複関係は認められない。

【方向・幅】検出された溝跡の全長は3.3ｍで、方向はＮ－15°－Ｅである。幅は上面60cm・底面32cmである。

【深さ・断面形】深さは54cmで、断面形は不整形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルトで２層に分けられる。遺物は縄文土器片が３点出土した。



SD－5

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径1～2mm程の白色のマンガン粒を少量含む。基本層5a層に黄色土の土がブロック状に含む。
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	全体に鉄分をまばらに含む。
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	全体に6層の土をブロック状に含む（人為的？）

SD－6

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	黒色土と灰色土の土をブロック状に含む。鉄分をまばらに含む。

SD－7

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄色土をブロック状に含む。

SD－8

土層No.	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	6層の黄色土（砂）がブロック状に混入している。
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	灰色土をブロック状に含む。

第60図　5b層検出溝跡断面図

3）土坑

SK－1土坑　【位置・重複】中央部で検出された。SD－1溝跡、小溝状遺構B群に切られる。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸60cm、東西軸45cmの楕円形を呈する。

【深さ・断面形】深さは9cmで、断面形は舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は出土しなかった。

SK－2土坑　【位置・重複】東部中央で検出された。SK－5土坑、P－166を切る。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸108cm、東西軸82cmの不整形を呈する。

【深さ・断面形】深さは25cmで、舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は2層に分けられる。1層は褐色の砂質シルト、2層は暗褐色のシルト質粘土である。遺物は、非ロクロの土師器片4点、須恵器片1点が出土した。

SK－4土坑　【位置・重複】北東部で検出された。側溝により一部削平されている。

【平面形・大きさ】残存部の平面形は楕円形を呈し、東西検出長50cmで、南北短軸41cmを測る。

【深さ・断面形】深さは13cmで、断面形は舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は出土しなかった。

SK－5土坑　【位置・重複】東部中央で検出された。SK－2土坑に切られる。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸64cm、東西軸52cmの楕円形を呈する。

【深さ・断面形】深さは15cmで、断面形は舟底形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は褐色のシルト1層である。遺物は出土しなかった。

SK－6土坑　【位置・重複】西部中央で検出された。小溝状遺構B群を切る。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸50cm、東西軸55cmの円形を呈する。

【深さ・断面形】深さは4cmで、断面形は舟底形を呈する。

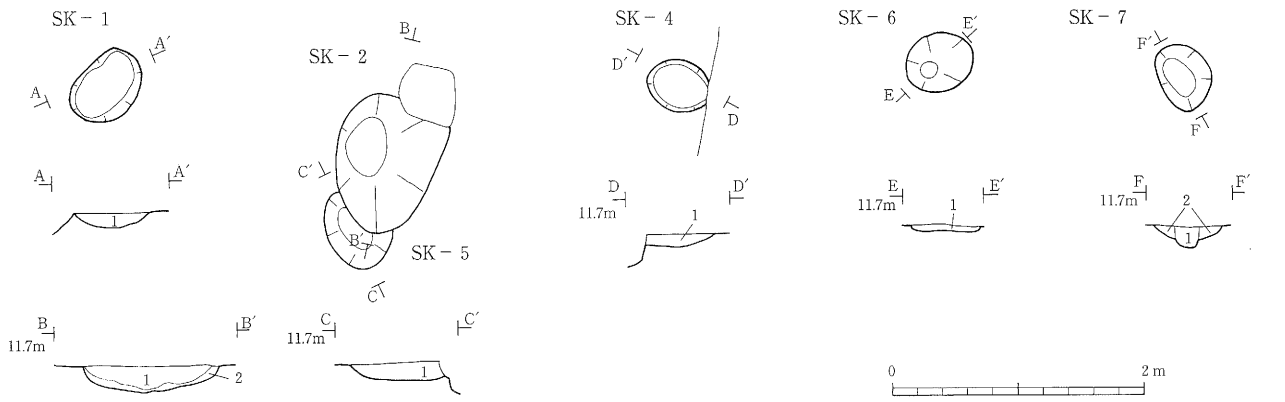
【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト1層である。遺物は出土しなかった。

SK－7土坑　【位置・重複】中央部で検出された。他の遺構との重複関係は認められない。

【平面形・大きさ】平面形は南北軸52cm、東西軸40cmの楕円形を呈する。

【深さ・断面形】深さは23cmで、断面形は不整な逆台形を呈する。

【堆積土・出土遺物】堆積土は2層に分けられる。1層は褐色のシルト、2層は暗褐色のシルトである。遺物は出土しなかった。



SK－1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	黒褐色土と灰色土をまばらに含む。径3～5mmの炭化物をまばらに含む。

SK－2

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	灰色土をブロック状に含む。マンガンをまばらに含む。
2	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	上面に炭化物を多量に含む。

SK－4

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	炭化物と酸化鉄をわずかに含む。褐色土と灰色土をブロック状に含む。

SK－5

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	シルト	暗褐色土と灰色土をブロック状に含む。

SK－6

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	灰色土と黒褐色土の土をブロック状に含む。

SK－7

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	シルト	灰色土をブロック状に含む。
2	10YR3/3　暗褐色	シルト	黒褐色と灰色土の土をブロック状に含む。マンガンをわずかに含む。

第61図　５ｂ層検出土坑実測図

４）小溝状遺構群

小溝状遺構はこれまでの調査でも５ｂ層上面で検出されており、畑地の耕作痕跡と考えられているものである。今回の調査では70条検出された。小溝状遺構群は、方向と重複関係によってＡ～Ｄの４群に分けられる。古いほうからＣ群・Ｄ群→Ｂ群→Ａ群の順に変化するが、Ｃ群とＤ群の新旧関係は不明である。この他にどの群にも属さないものが４条ある。

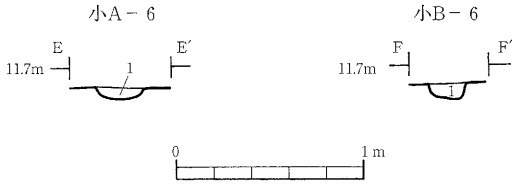
小溝状遺構Ａ群　【方向・位置・重複】北西から南東方向に伸びる溝で、方向はＮ－43～62°－Ｗである。調査区北西部から南東部に分布している。小溝状遺構Ｂ群を切っており、Ｂ群に対してほぼ直交している。ＳＤ－１・２ａ・２ｂ・５・６・７溝跡に切られる。

【幅・深さ】19条検出された。最も長いものは6.2ｍである。幅は上面10～42cm・底面５～22cmである。深さは４～25cmで、断面形は舟底形である。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト１層である。遺物は、小溝状遺構Ａ群－８から非ロクロ土師器片１点、須恵器の坏Ｅ－８（第57図11）が出土した。

小溝状遺構Ｂ群　【方向・位置・重複】北東から南西方向に伸びる溝で、方向はＮ－40～60°－Ｅである。調査区全体に分布している。小溝状遺構Ａ群に切られ、ほぼ直交している。ＳＤ－１・２ａ・２ｂ・５・６溝跡に切られる。

【幅・深さ】30条検出された。最も長いものは7.5ｍである。幅は上面15～34cm、底面４～20cmである。深さは５～16cmで、断面形は舟底形である。



小溝　A群－6

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	径１cmのブロックの黄褐色シルトをわずかに含む。径１～２mmの酸化鉄をわずかに含む。

小溝　B群－6

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/4　暗褐色	シルト	黒褐色土とにぶい黄褐色土をわずかに含む。

第62図　５ｂ層検出小溝状遺構断面図

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色のシルト１層である。遺物は非ロクロ土師器片が３点出土した。

小溝状遺構Ｃ群　【方向・位置・重複】５ｂ層を約15cm掘り下げ、６層直上で検出した。南北方向の溝で、方向はほぼ真南北であり、調査区北壁の外に伸びる。小溝状遺構Ａ・Ｂ群、SD－２ａ・２ｂ・７溝跡に切られる。

【幅・深さ】８条検出された。最も長いものは2.2mである。幅は上面15～30cm、底面５～12cm、深さは５～16cmである。溝の間隔は約120cmでほぼ等間隔で検出された。

【堆積土・出土遺物】堆積土は小溝状遺構Ａ群より若干黒色化する。遺物は出土しなかった。

小溝状遺構Ｄ群　【方向・位置・重複】５ｂ層を約15cm掘り下げ６層直上で検出した。東西方向の溝で、方向はＮ－65～95°－Ｗであり、調査区西壁の外に伸びる。SD－５溝跡、SK－６土坑、小溝状遺構Ａ群に切られる。

【幅・深さ】10条検出された。最も長いものは3.9mである。幅は上面15～34cm、底面５～17cm、深さは５～16cm。溝の間隔は約120cmでほぼ等間隔で検出された。

【堆積土・出土遺物】堆積土は小溝状遺構Ａ群より若干黒色化する。遺物は出土しなかった。

不明小溝状遺構Ｘ１　【方向・位置・重複】調査区北西角で検出した。方向はＮ－４°－Ｅである。SD－２ａ溝跡、小溝状遺構Ｃ群を切っている。

【幅・深さ】検出した長さは1.6mである。幅は上面22～28cm・底面約10cmである。深さは約12cm。

第63図　小溝状遺構群方向別分布図

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色シルト。遺物は出土しなかった。

不明小溝状遺構X２　【方向・位置・重複】西壁中央で検出した。方向はＮ－68°－Ｗである。小溝状遺構Ｂ群を切り、SK－６土坑に切られる。調査区の西壁付近ではこの溝のみの検出であり、小溝状遺構Ａ群の１つかどうかは不明である。

【幅・深さ】検出した長さは1.1ｍである。幅は上面10～20cm・底面約５cmである。深さは６cm。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色シルト。遺物は出土しなかった。

不明小溝状遺構X３　【方向・位置・重複】５ｂ層を約15cm掘り下げたところ、調査区西部中央で検出した。方向はＮ－71°－Ｗで、小溝状遺構Ｂ群に切られる。

【幅・深さ】総長1.7ｍで、小溝状遺構Ａ群と類似性はあるが小溝状遺構Ｂ群より古い。幅は上面約20cm・底面約10cmである。深さは約５cm。

【堆積土・出土遺物】堆積土は小溝状遺構Ａ群より若干黒色化する。遺物は出土しなかった。

不明小溝状遺構X４　【方向・位置・重複】中央部で検出した。方向はＮ－50°－Ｗである。小溝状遺構Ｂ群を切っているため、小溝状遺構Ａ群と類似性があるが、小溝状遺構Ａ群に切られる。

【幅・深さ】検出した長さは1.3ｍである。幅は上面約35cm・底面約10cmで、深さは約10cmである。

【堆積土・出土遺物】堆積土は暗褐色シルト。遺物は出土しなかった。

５）ピット

ピットは123個検出した。そのうち柱痕跡は11個で検出された。遺物は土師器片10点、須恵器片１点が出土しているが、遺構との関係は不明である。

7　深掘区

これまでの下ノ内遺跡の調査で、縄文時代の遺構が検出されていることから、本調査区においても縄文時代の遺構を確認するために下層調査を行った。調査区北部に東西10ｍ・南北８ｍの調査区を設定し、６層以下約1.8ｍ、標高約10.0ｍの12層直上まで重機により掘り下げ、遺構検出作業を行ったが、遺構は発見されなかった。

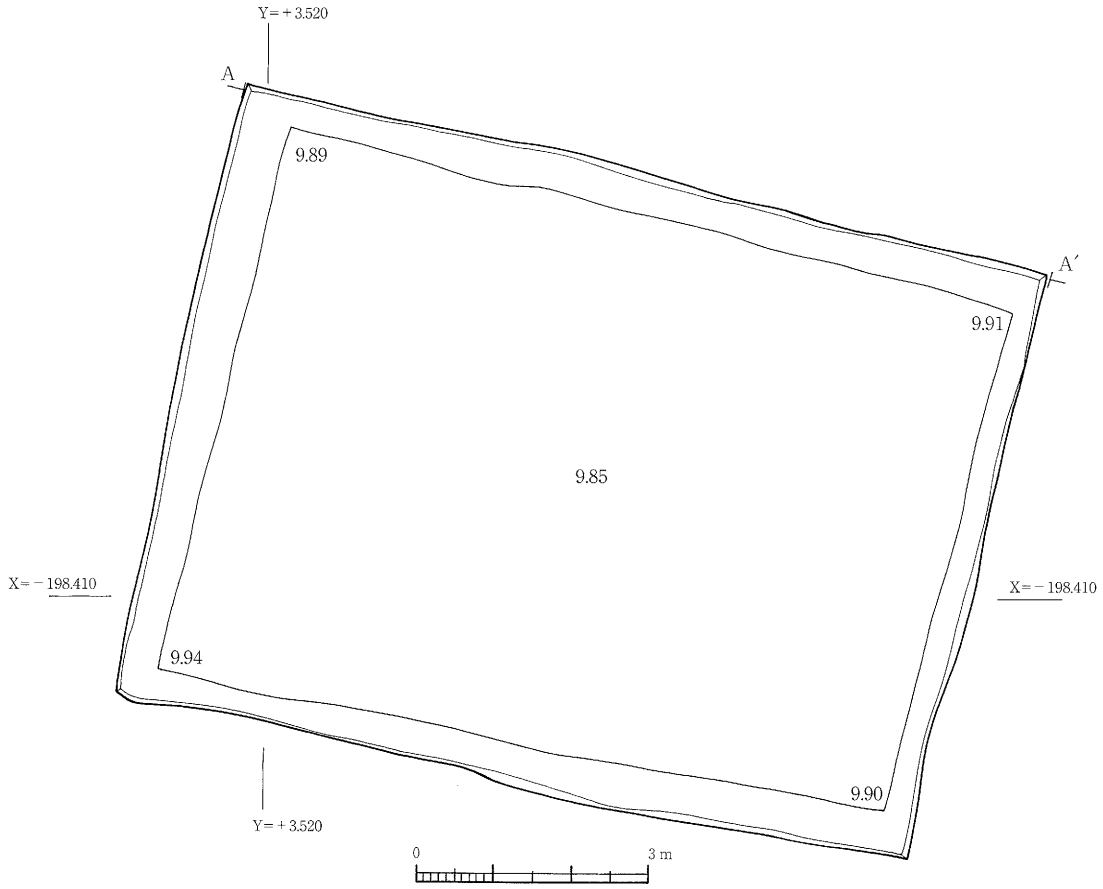
8　基本層中の出土遺物

出土した遺物は、５ａ層では、土師器片、甕E－６（第54図１）を含む須恵器片、鉄滓が少量出土した。土師器のほとんどはロクロ使用以前のものであるが、ロクロを使用したものも混在している。５ｂ層では、縄文時代晩期末頃の甕の口縁部（Ａ－１：第54図２）、弥生土器片、非ロクロ土師器片、須恵器片が出土した。６層では、土師器片１点、縄文土器片３点が出土した。７・９・11ａ層では縄文土器がそれぞれ５点・３点・１点出土した。11ｂ層では縄文時代後期初頭頃の深鉢（Ａ－２：第54図３）の土器片と縄文時代中期末頃の鉢（Ａ－３：第54図４）の土器片、12層では縄文時代中期末頃の深鉢（Ａ－４：第54図５）の土器片が出土した他、この２層からは縄文土器片が少量出土した。

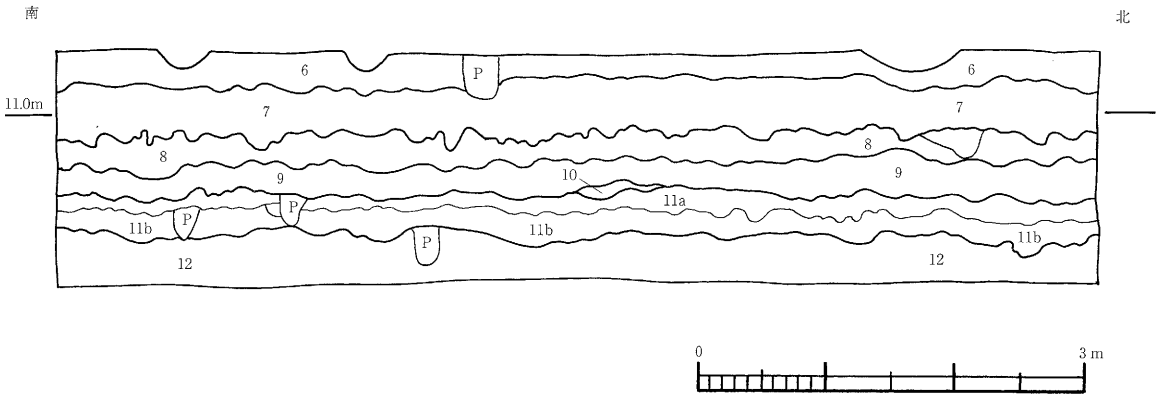
9　まとめ

① 今回の調査によって、３層またはそれより新しい層から掘りこまれた掘立柱建物跡１棟、３層から掘りこまれた溝跡１条、５ａ層からは溝跡３条、ピット76個、５ｂ層では掘立柱建物跡２棟、溝跡４条、土坑６基、小溝状遺構70条、ピット123個を検出した。

② 今回の調査では、５ａ・５ｂ層で遺構を検出した。検出した遺構の年代については、出土資料から明らかにで



第64図　深掘区平面図



土層No.	土　色	土　質	備　考
8	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径1～5mm程の灰色土をブロック状に含む。
9	10YR4/2　褐色	シルト	灰色の土をまだらに含む。
10	10YR3/4　暗褐色	シルト	褐色の土をブロック状に含む。
11a	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	遺物包含層、灰色土をまだらに含む。
11b	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	11a層と12層の漸移層。
12	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	根や葉の腐食土と考えられる土が混入している。

第65図　深掘区西壁土層断面図

きるものはないが、これまでの調査成果により、5a層は平安時代以降、5b層は古墳時代～平安時代の時間幅が考えられる。

③　SD－1溝跡は、検出層と方向から昭和56年調査のSD－６溝跡につながると考えられる。SD－６溝跡は中世に位置付けられていることから、本調査のSD－１溝跡は中世の溝と考えられる。

④　３棟発見した掘立柱建物跡（SB－１・２・３）の所属時期は、SB－１が中世の溝を切ることから中世以降、SB－２・３は５ｂ層上面で検出されていることから平安時代以降と考えられる。

⑤　小溝状遺構群は、大別４時期に分けられた。Ａ群・Ｂ群は、５ｂ層上面で検出され、５ａ層の耕作痕跡と考えられることから平安時代以降に位置付けられるもので、Ｃ群・Ｄ群はそれより古いと考えられる。

⑥　縄文時代の遺構は、昭和56年と平成12年の調査において住居跡や土坑が見つかっており、今回の調査で遺構が検出されると想定されが、12層では発見されなかった。縄文時代の集落は今回の調査区あたりまで広がらず、集落の中心は本調査区の北西方向であると考えられる。遺物の出土も11ｂ層・12層からは少ない。

（注記）

平成12年度調査については、仙台市文化財報告書第254集「年報22」（2001）によるものである。

参考文献

小川淳一・高橋綾子（2000）：「仙台市王ノ壇遺跡」仙台市文化財調査報告書第249集　仙台市教育委員会

金森安孝・長島榮一（1992）：「郡山遺跡第65次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第249集　仙台市教育委員会

篠原信彦・吉岡恭平（1990）：「下ノ内遺跡　仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第135集　仙台市教育委員会

渡部　紀他（1995）：「伊古田遺跡　仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ」仙台市文化財調査報告書第193集　仙台市教育委員会

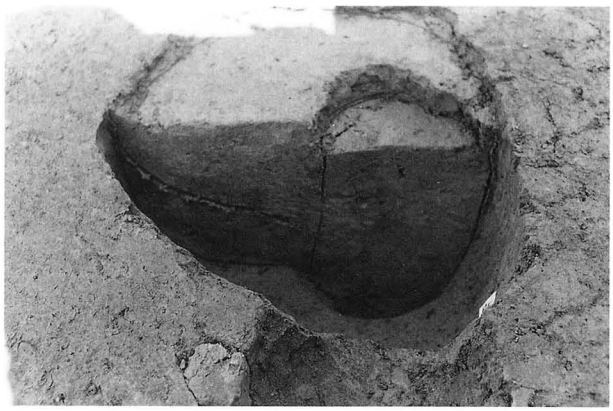
渡部　紀他（1990）：「六反田遺跡　仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅳ」仙台市文化財調査報告書第199集　仙台市教育委員会

1　5 a 層上面遺構検出状況（南より）

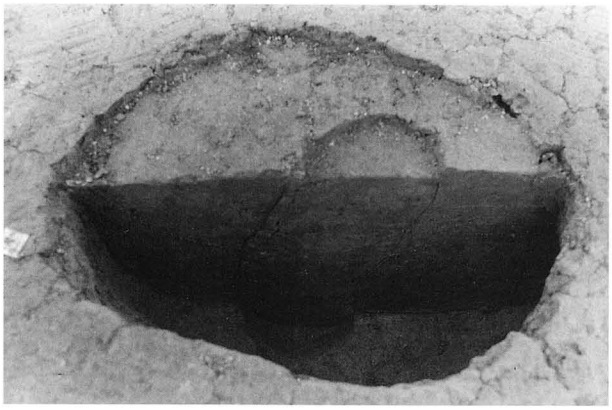
2　5 a 層上面完掘状況（南より）

図版21　5 a 層全景

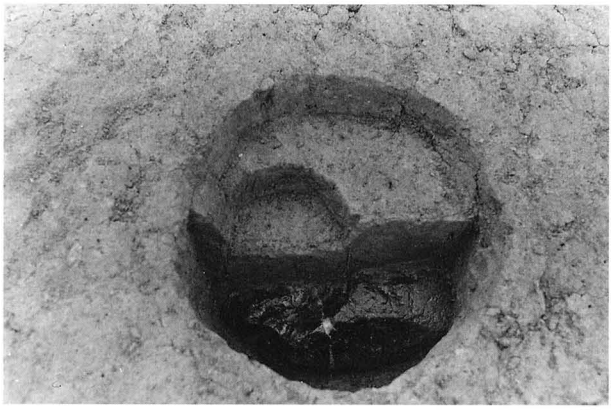
1　SB－１掘立柱建物跡（北東より）



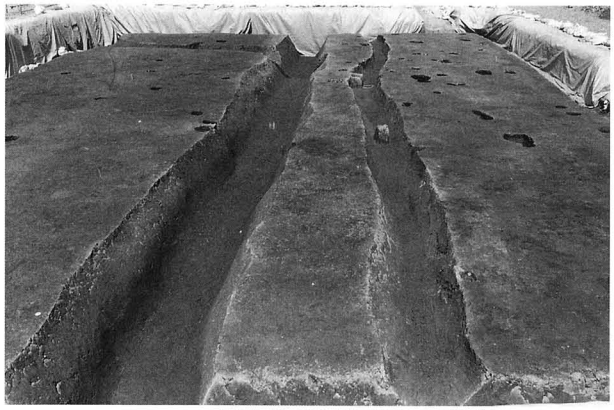
2　SB－１の柱穴P５（南より）



3　SB－１の柱穴P10（東より）



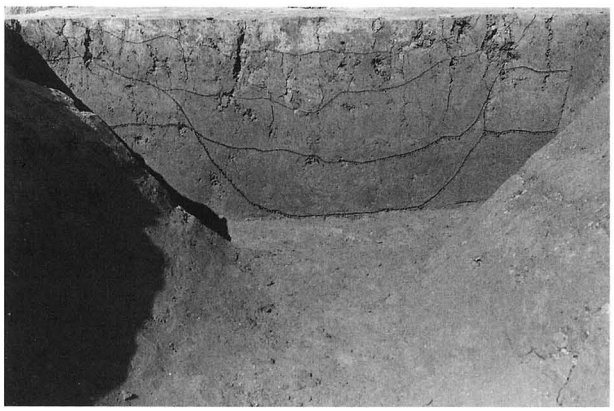
4　SB－１の柱穴P６（東より）



5　SD－１・２溝跡（南より）

6　SD－１溝跡断面（南より）

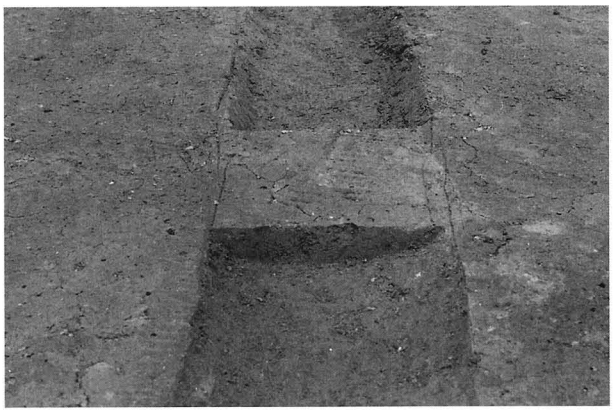
7　SD－２ａ溝跡北部（西より）



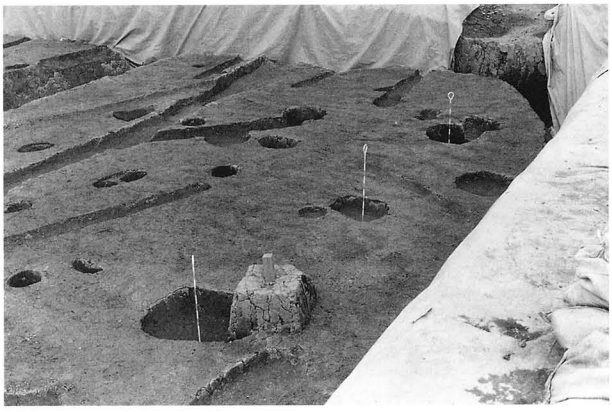
8　SD－２ａ・ｂ溝跡断面㋑（南より）

図版22　５ａ層検出遺構

1　SD－３溝跡（北より）



2　SD－３溝跡断面（南より）

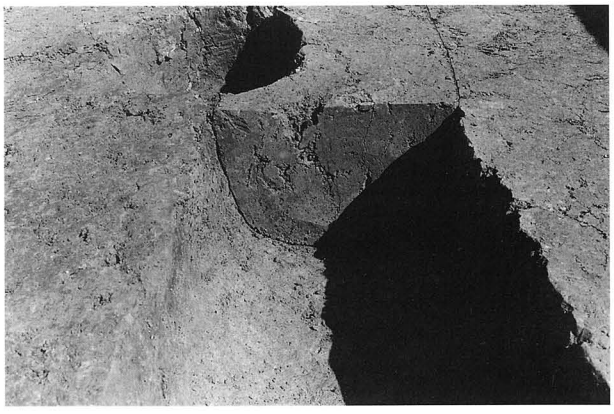


3　SB－２掘立柱建物跡（南東より）

4　SD－５溝跡（東より）

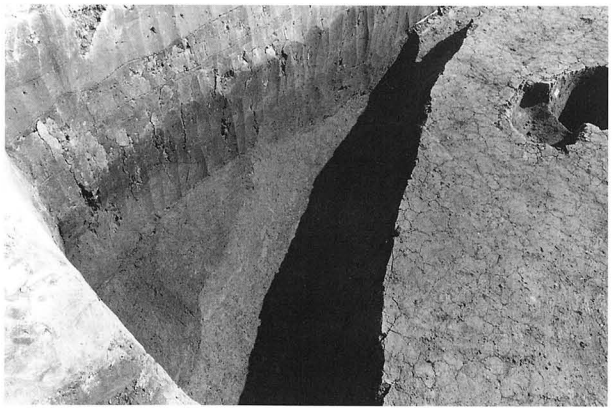
5　SD－５溝跡断面

6　SD－６溝跡（南より）

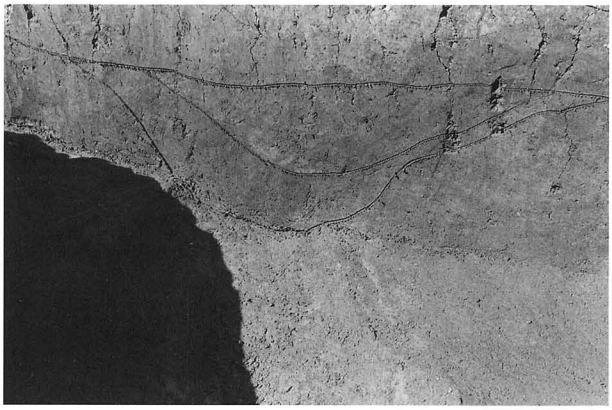


7　SD－６溝跡断面

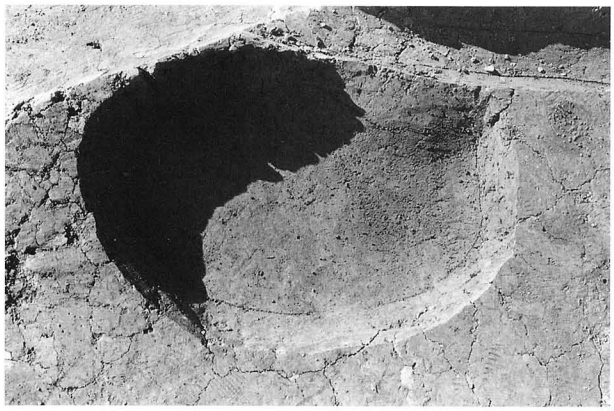
図版23　５ａ層SD－３と５ｂ層検出遺構



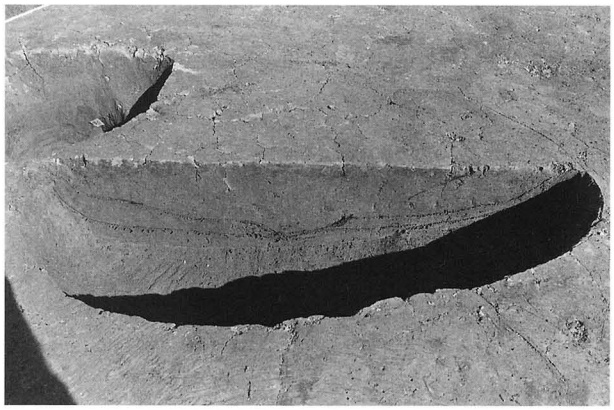
1　SD－８溝跡（北より）



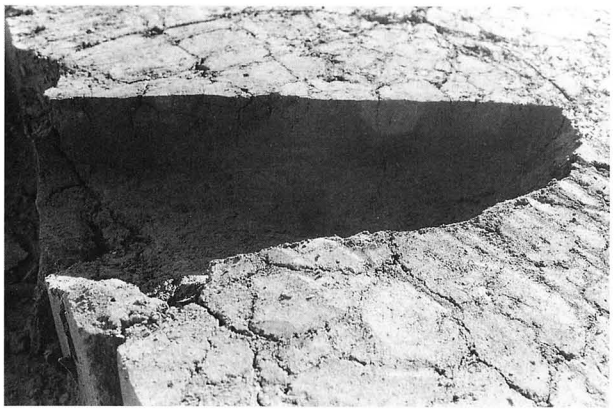
2　SD－８溝跡断面（南より）



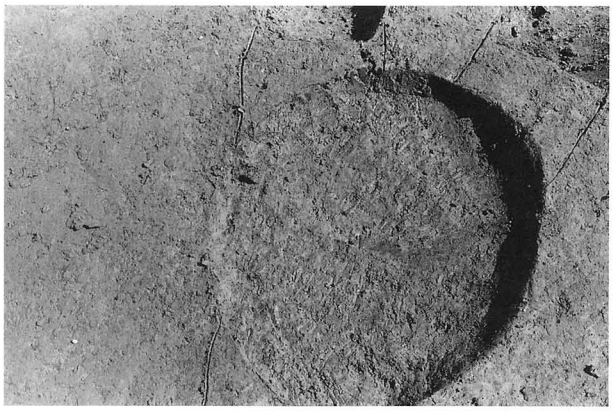
3　SK－１土坑（南より）



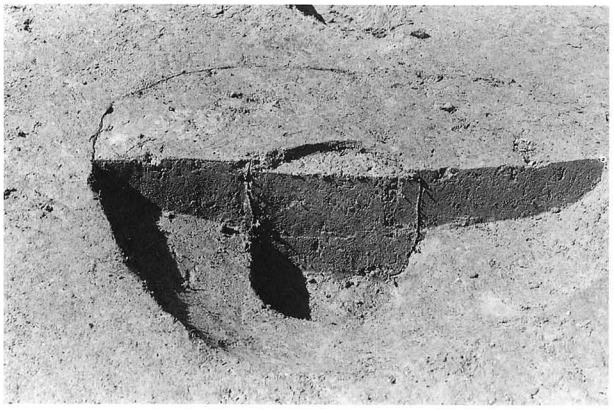
4　SK－２土坑（西より）



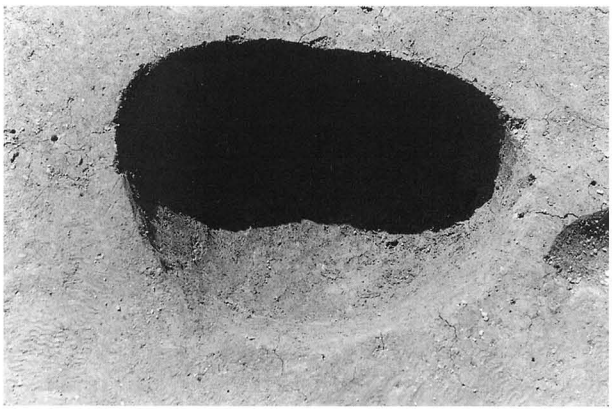
5　SK－４土坑（北より）



6　SK－６土坑（南より）



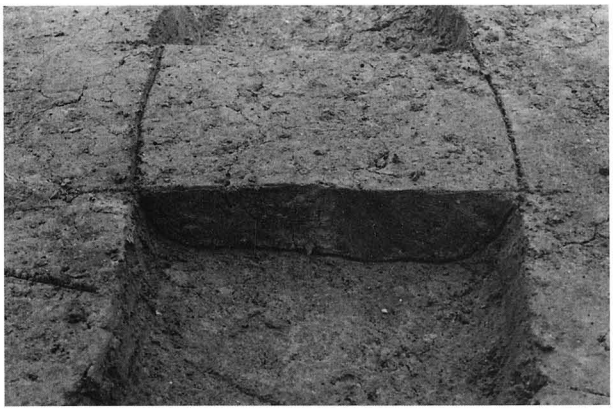
7　SK－７土坑（北より）



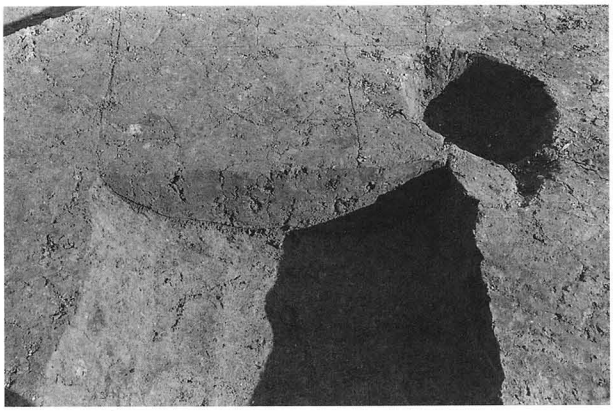
8　SK－７土坑（東より）

図版24　５ｂ層検出遺構と土坑

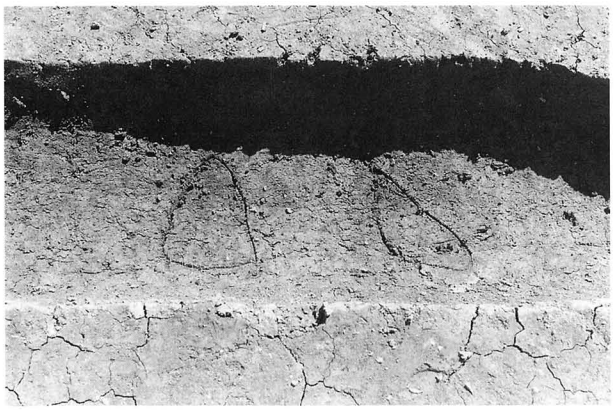
1　小溝状遺構群検出状況（南より）



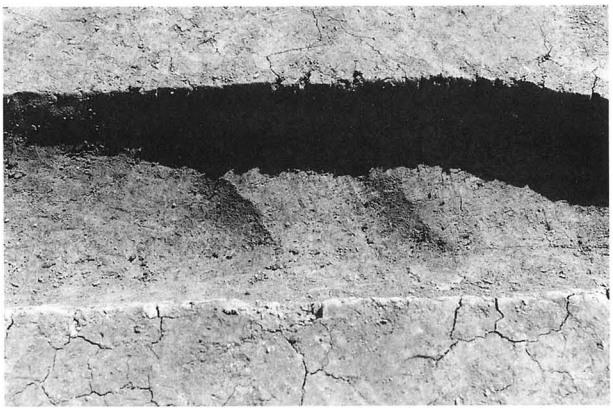
2　小溝（A6）断面（西より）



3　小溝（B6）断面（北西より）



4　小溝底面掘削具痕跡検出状況（北より）



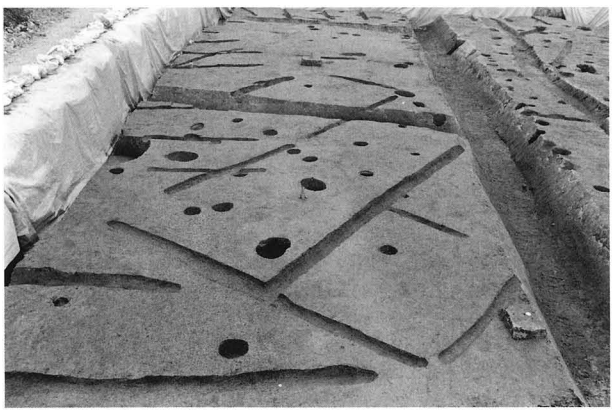
5　小溝底面掘削具跡（北より）

図版25　小溝状遺構群の検出と調査状況

1　５ｂ層上面完掘状況（南より）

2　小溝状遺構群北西部１（西より）

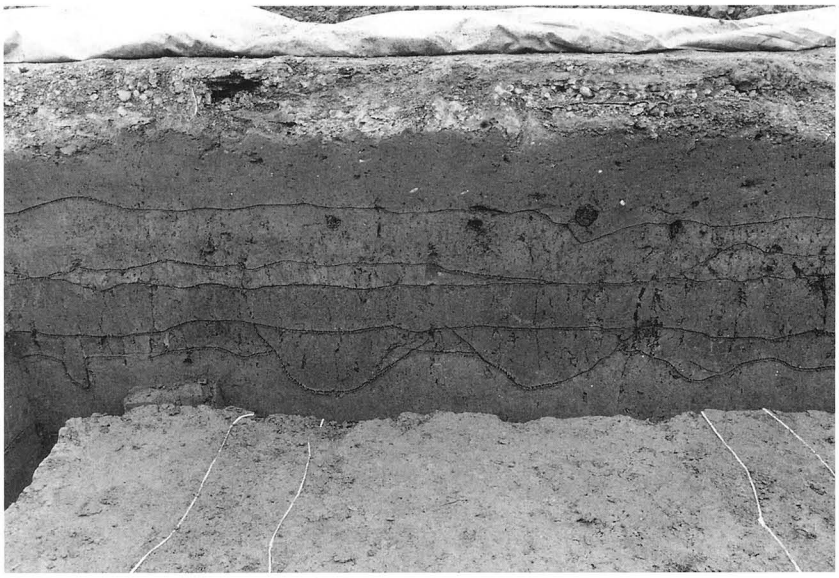
3　小溝状遺構群北西部２（西より）



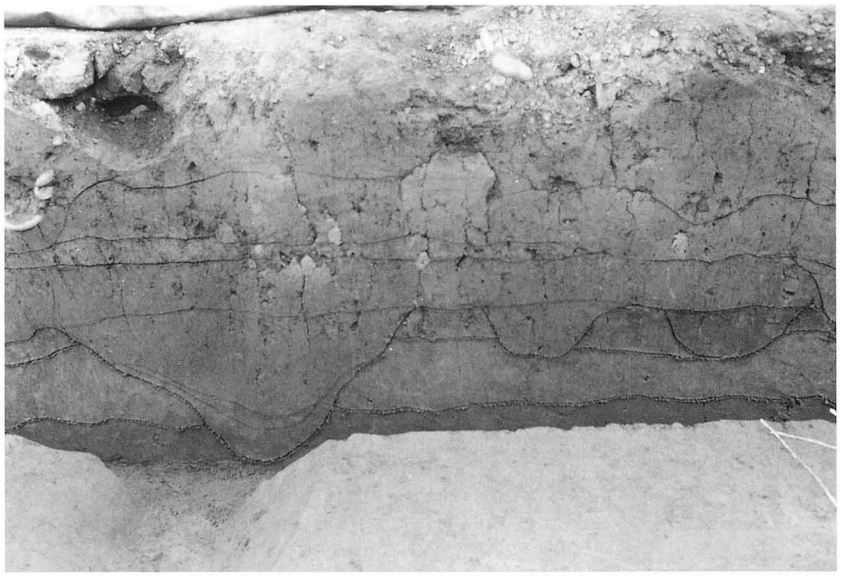
4　小溝状遺構群南西部（南より）

5　小溝状遺構群南東部（南東より）

図版26　小溝状遺構群の状況



1　西壁土層断面（南部）

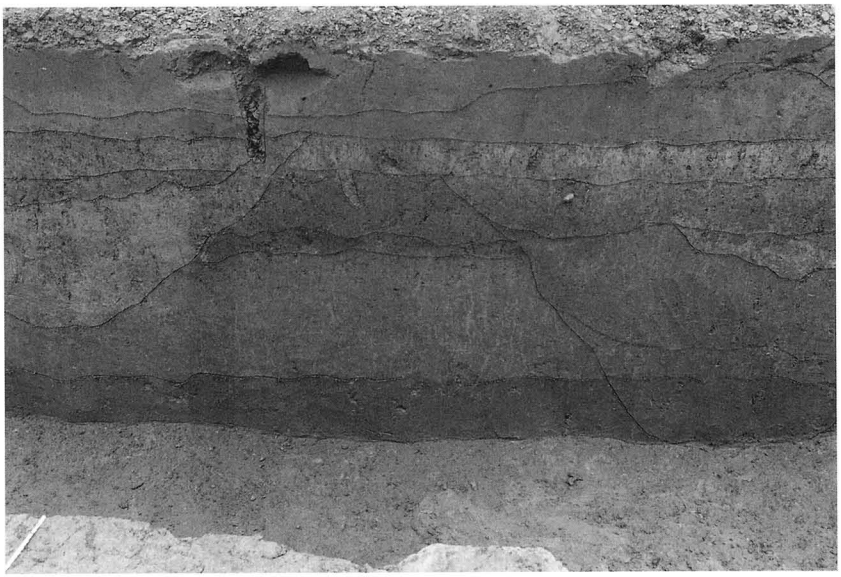


2　西壁土層断面（中央部）

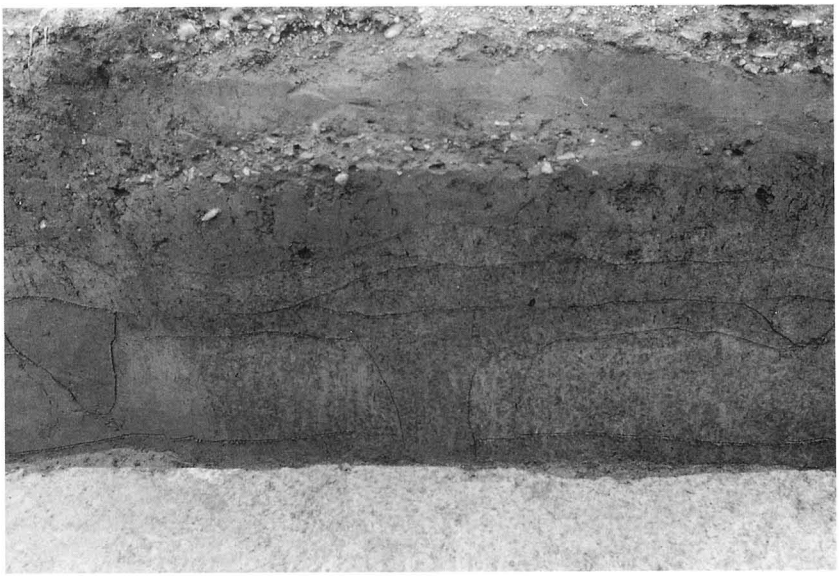
3　西壁土層断面（北部）

図版27　調査区の土層断面１

1　南壁土層断面（東部）



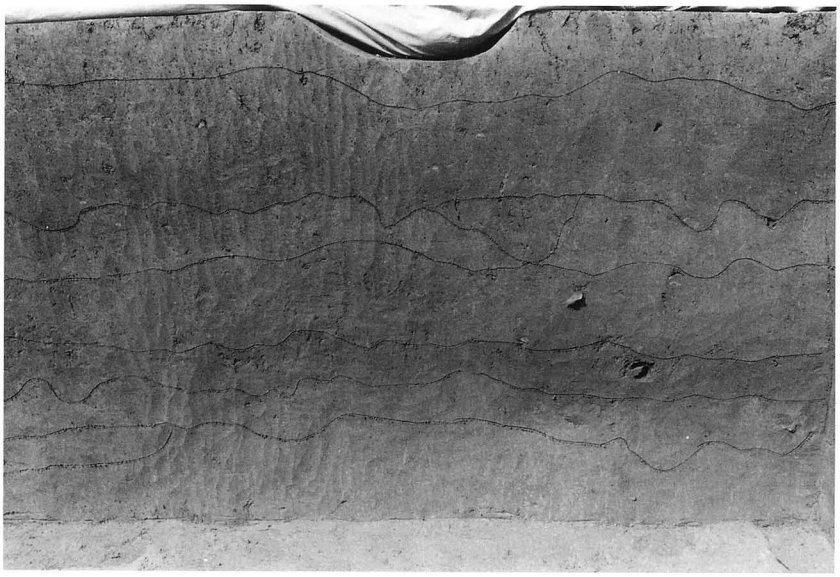
2　南壁土層断面（中央部）



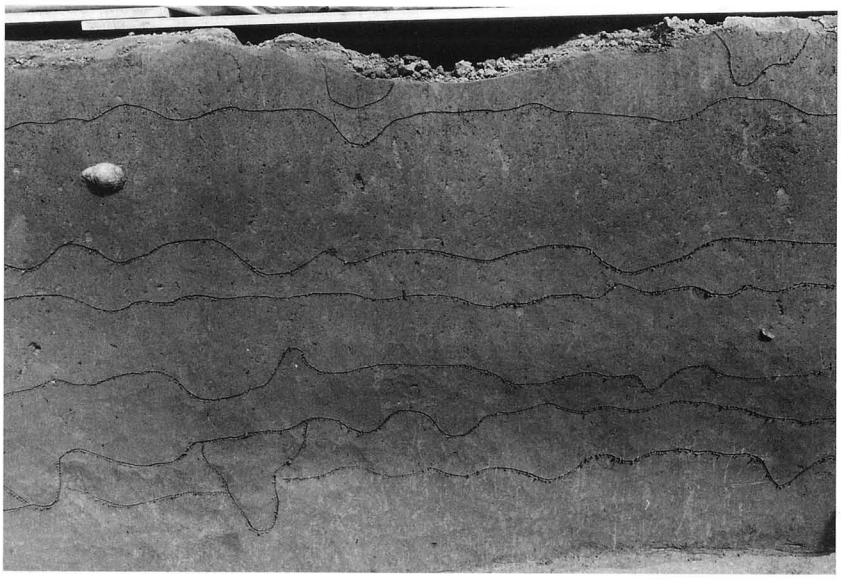
3　南壁土層断面（西部）

図版28　調査区の土層断面２

1　深堀り区全景（南東より）

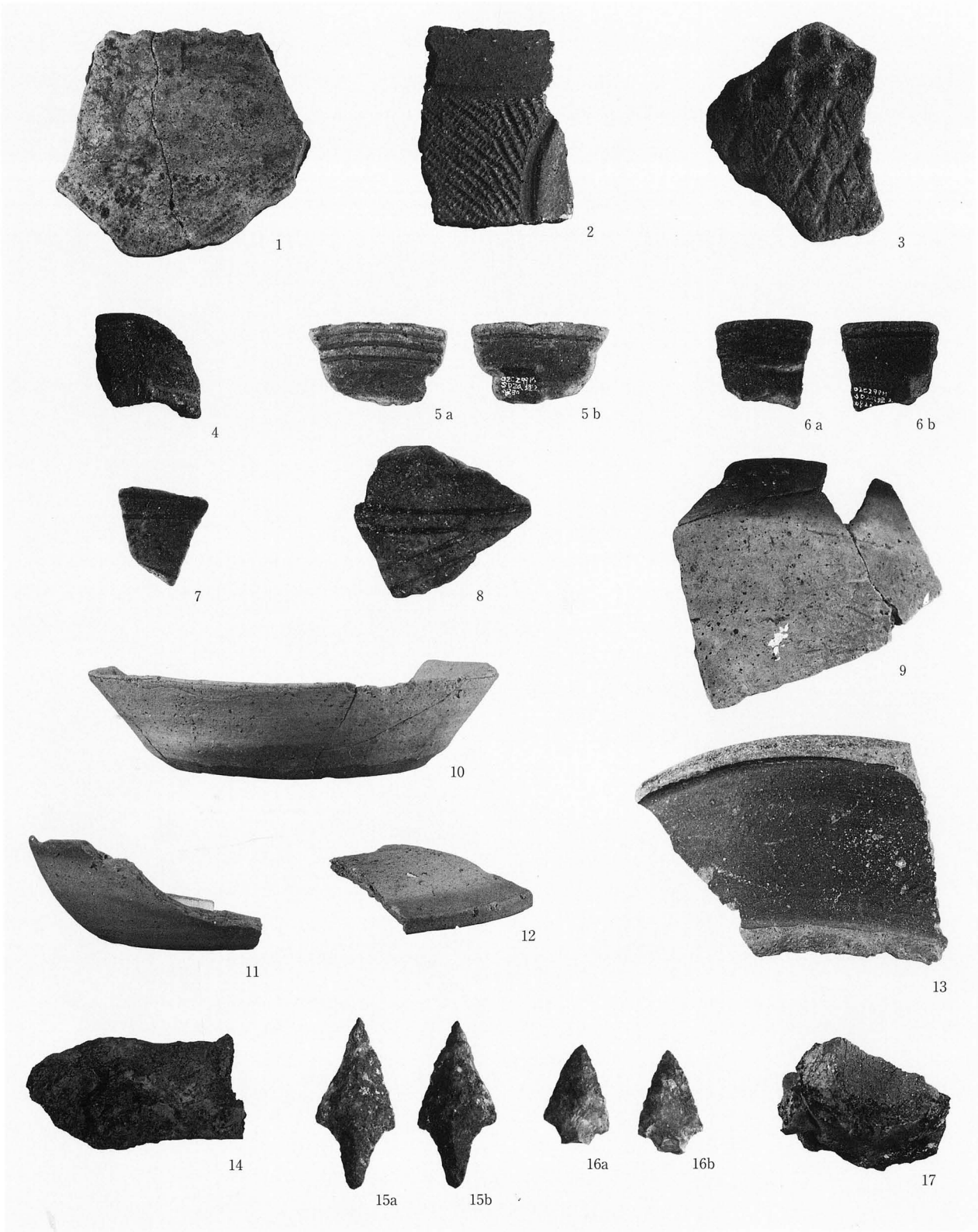


2　深堀り区土層断面（西壁）



3　深堀り区土層断面（北壁）

図版29　深掘り調査区の状況



1	縄文土器	深鉢	A－1	（5 b層	第54図2）
2	縄文土器	深鉢	A－4	（12層	第54図5）
3	縄文土器	深鉢	A－2	（11 b層	第54図3）
4	縄文土器	浅鉢	A－3	（11 b層	第54図4）
5	弥生土器	甕	B－2	（SD－2 a	第57図2）
6	弥生土器	甕	B－1	（SD－2 a	第57図1）
7	弥生土器	鉢	B－3	（SD－2 a	第57図3）
8	弥生土器	壷	B－4	（SD－2 a	第57図4）
9	土師器	坏	C－1	（SD－2 a	第57図5）
10	須恵器	坏	E－3	（SD－2 a	第57図7）
11	須恵器	坏	E－5	（SD－1	第57図8）
12	須恵器	蓋	E－7	（ピット55	第57図1）
13	須恵器	甕	E－6	（5 a層	第54図1）
14	鉄製品	鎌？	N－1	（SD－2 a	第57図13）
15	石器	鏃	K－1	（SD－1）	
16	石器	鏃	K－2	（SD－2 a）	
17	土製品	羽口	P－1	（SD－2 b	第57図14）

図版30　出土遺物

Ⅴ　山田条里遺跡（第７次）発掘調査報告書

１．調査要項

遺　跡　名　　山田条里遺跡（宮城県遺跡番号01367）
調 査 地 点　　仙台市太白区山田字田中前181～187・190～196地内
調 査 原 因　　店舗建設工事
調査対象面積　　7700㎡
調 査 面 積　　155㎡
調 査 期 間　　平成14年５月13日～６月４日
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育委員会（文化財課）
担 当 職 員　　主査　工藤哲司　　文化財教諭　大倉秀之　　臨時職員　福壽規人

２　遺跡の位置と環境

山田条里遺跡は仙台市の南西部、JR長町駅の西方約４㎞の地点、太白区山田・鈎取地区に所在する。遺跡の北側には青葉山丘陵が東西に延び、南側には名取川を挟んで高館丘陵が位置している。本遺跡はこれらの丘陵間を流れる名取川により形成された河岸段丘の東端部に位置し、青葉山丘陵より名取川に流入する小河川の影響を受けた扇状地形となっている。遺跡の範囲は東西・南北共に約900ｍに及び、遺跡内の標高差は約８ｍである。現在、遺跡の現況はそのほとんどが平成元年から行われた農業基盤総合整備事業により新しく区画された水田となっているが、今回の計画のように大型店舗の進出など商業用地となってきている。

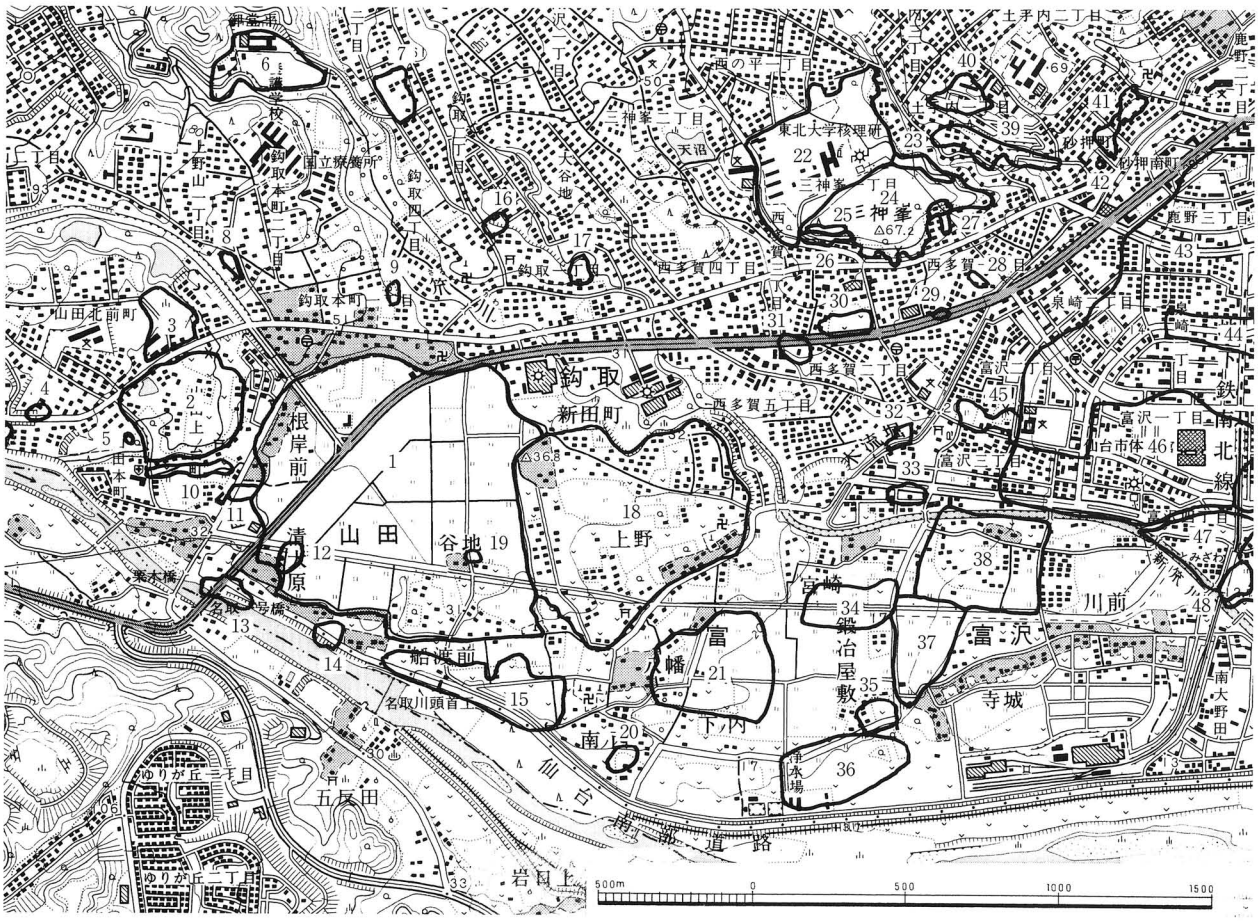
周辺の遺跡には、北西側の丘陵上に縄文時代中期の大規模な集落跡である山田上ノ台遺跡や早期の竪穴住居跡が発見された北前遺跡などがある。また、東側の小高い段丘上には縄文時代中期の土器が多量に出土した上野遺跡、南側には弥生時代中期の土器が出土し、近世の建物跡や水路跡なども発見されている船渡前遺跡などがある。その他、古墳、奈良平安の各時代から中・近世にかけての遺跡が数多く存在しており、仙台市内でも遺跡の密度が高い地域である。

本遺跡の調査は平成元年より行われている。１次調査終了後の農業基盤総合整備事業により、「条里型」の土地割は失われ景観的に見ることは出来なくなってしまったが、これまでの調査により近世～近代と平安時代の二時期の水田跡が数地点で検出されている。これらは本遺跡の「条里型」の土地割がいつの時代まで遡り、形態などを検討する上での貴重な発見となっている。この他、近世から近代にかけての屋敷跡や縄文時代の落とし穴などが発見されている。

３　調査に至る経過と調査方法

平成14年４月26日付けで、株式会社ヨークベニマル代表取締役　大高善興氏より仙台市太白区山田字田中前に店舗建設工事に伴う発掘届が提出された。仙台市教育委員会では、申請者と協議の上、２棟の店舗建設部分に調査区を設定し、東側の建設部分を１区、西側の建設部分を２区として調査を行った。

調査地には１区、２区とも盛土が厚さ２ｍもあることから、まず１区については13ｍ×21ｍ、２区については13ｍ×26ｍの範囲で重機により盛土部分を除去した後に１区については４×15ｍ、２区については4.5ｍ×20ｍの調査区を設定し、これ以後は人力による掘り下げ、遺構検出作業を行った。なお、１区は調査区北端で２ｍ×２ｍの

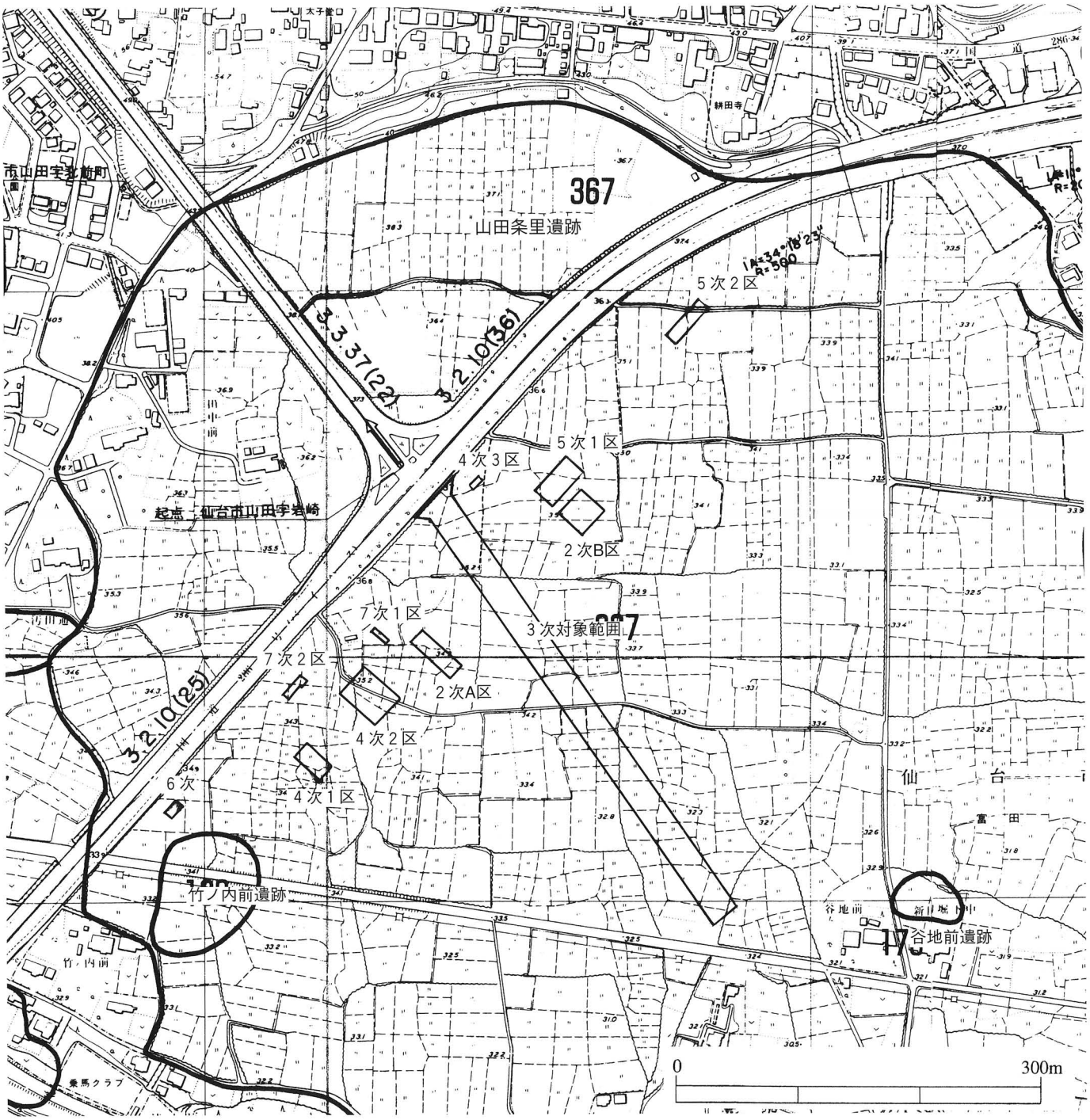


No.	遺跡名	種別	年代
1	山田条里遺跡	散布地、水田跡、屋敷跡	縄文、古代、近世
2	山田上ノ台遺跡	包含地、集落跡	旧石器、縄文、古代、近世
3	北前遺跡	包含地、集落跡	旧石器、縄文、古代、近世
4	羽黒堂前B遺跡	散布地	縄文、古墳、古代
5	山田上ノ台塚	塚	
6	御堂平遺跡	集落跡	縄文、古代、中世
7	紙漉山遺跡	散布地	縄文
8	上野山遺跡	散布地	縄文
9	町遺跡	散布地	縄文、古墳、古代
10	汚田通A遺跡	散布地	縄文、古代
11	汚田通B遺跡	散布地	古代
12	竹ノ内前遺跡	散布地	古代
13	清太原西遺跡	散布地	縄文、古代
14	清太原東遺跡	散布地	縄文、古代
15	船渡前遺跡	集落跡	縄文、弥生、古代
16	後田遺跡	散布地	古代
17	八幡遺跡	散布地	古墳、古代
18	上野遺跡	集落跡	縄文、古代
19	谷地前遺跡	散布地	古代
20	富田南西遺跡	散布地	古代
21	南ノ東遺跡	散布地	弥生、古代
22	芦ノ口遺跡	集落跡	縄文、弥生、古代
23	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	古墳
24	三神峯遺跡	集落跡	縄文、古代

No.	遺跡名	種別	年代
25	三神峯古墳群	円墳	古墳
26	富沢窯跡	窯跡	古墳、古代
27	金山窯跡	窯跡	古墳
28	裏町東遺跡	散布地	古代
29	原東遺跡	散布地	古墳、古代
30	原遺跡	散布地	弥生、古墳、古代
31	西台窯跡	窯跡	古代
32	富沢上ノ台遺跡	散布地	縄文、古代
33	堀ノ内遺跡	散布地	古墳、古代
34	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	縄文、古代
35	鍛冶屋敷B遺跡	散布地	縄文、古代
36	六本松遺跡	集落跡	古代
37	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	縄文、古代
38	富沢館跡	城館跡	中世
39	土手内窯跡 土手内横穴墓群B地点	窯跡 横穴墓	古墳、古代 古墳
40	土手内遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳、古代
41	砂押屋敷遺跡	散布地	古代
42	砂押古墳	円墳	古墳
43	富沢遺跡	包含地、水田跡	旧石器、縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世
44	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡、墓跡	縄文、弥生、古墳、古代、近世
45	富沢清水遺跡	散布地	古代
46	山口遺跡	集落跡、水田跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
47	下ノ内遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
48	伊古田遺跡	集落跡	縄文、古墳、古代

第66図　山田条里遺跡の位置と周辺の遺跡

範囲で下層調査を行った。２区は水田跡の一区画状況確認のため調査区南側に１ｍ×５ｍの範囲で拡張区を設定して追加の調査を行った。



第67図　調査区位置図

4　基本層位

調査区が２ヶ所に離れているため、土性、土色等に違いは見られるが、１区では大別12層、細別14層、２区では大別12層、細別16層を確認した。本文中の記述における層名は各区ごとのものであり、共通の層名ではない。

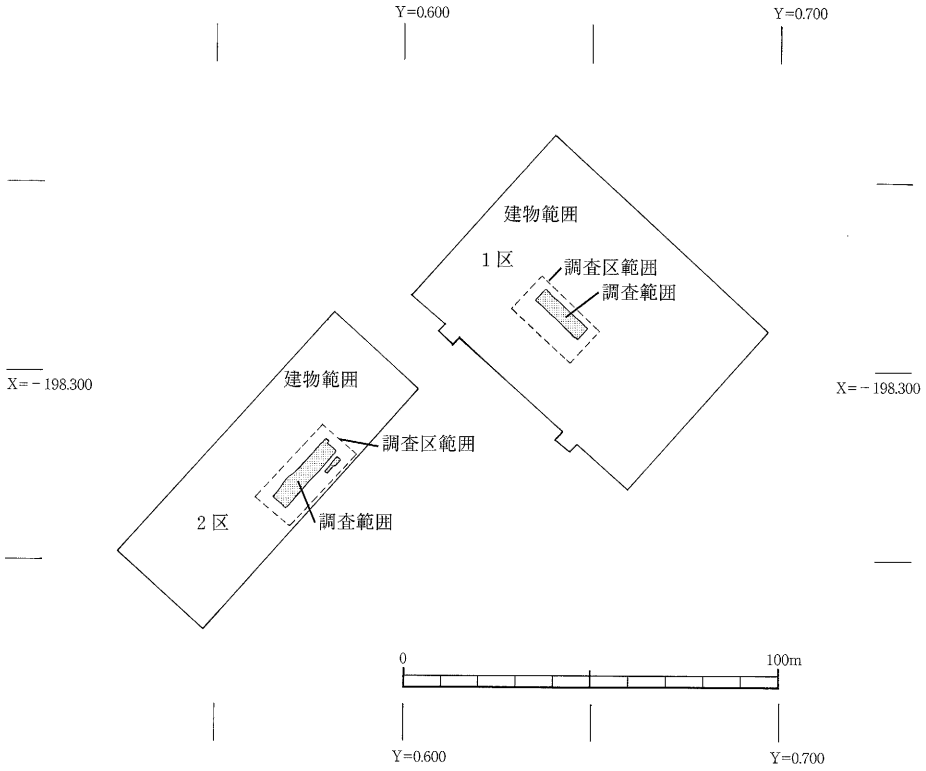
１）１区の基本層序

１　層：7.5GY3/1暗緑灰色粘土質シルト。現代の水田耕作土で厚さは10～16cmである。

２ａ層：10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト。調査区の南端部にのみ分布し、厚さは２ａ層が４～６cmである。水田耕作土と考えられる

2 b層：7.5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルト。調査区の南端部にのみ分布し、厚さは4～12cmである。水田耕作土と考えられる。

3　層：5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト。調査区の北側、南側は1層、2層の攪拌を受けていると見られ遺存していない。遺存部の厚さは2cm～12cmで水田耕作土と考えられる。



第68図　調査区配置図

4 a層：5GY4/1暗オリーブ色砂質シルト。耕作により、よく攪拌されている。調査区の北側においては1層の攪拌を受けており遺存していないが、遺存部で厚さは4～14cmである。層下部に灰白色火山灰を霜降状に含む。

4 b層：5GY4/1暗オリーブ色砂質シルト。起耕の際に掘り起こされた層で調査区のほぼ全域に遺存しており、ブロック状の灰白色火山灰を含む。厚さは4～18cmである。灰白色火山灰のブロックは上層の攪拌の影響が強い北側にいくほど細かくなっている。

5　層：5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土。調査区のほぼ全域に遺存する。自然堆積層と考えられ、厚さは6～20cmである。

6　層：7.5Y4/2灰オリーブ色シルト質粘土。調査区のほぼ全域に遺存する。自然堆積層と考えられ、厚さは2～14cmである。

7　層：10YR4/2灰黄褐色シルト質砂。調査区のほぼ全域に遺存する。自然堆積層と考えられ、南半部は赤褐色土で礫を全体に含む。厚さは40cm程である。

8層以下の土層の特徴は断面図の土層注記表のとおりである。

2）2区の基本層序

1　層：10YR4/4褐色砂質シルト。現代の水田耕作土で厚さは8～16cmである。

2　層：5YR4/6赤褐色砂質シルト。調査区のほぼ全域に遺存するが、1層の攪拌を受けており、厚さは2～10cm程である。

3　層：10YR4/2灰黄褐色砂質シルト。調査区の全域に遺存する。厚さは4～14cmで水田耕作土と考えられる。

4　層：10YR3/3暗褐色シルト。調査区の全域に遺存する。厚さは4～12cmで水田耕作土と考えられる。

５　層：10YR3/3暗褐色砂質シルト。自然堆積層と考えられ、４層の攪拌を受けており調査区西側では遺存していない。厚さは２～８cmである。

６ａ層：10YR4/2灰黄褐色砂質シルト。調査区のほぼ全域に遺存し、厚さは４～14cmである。６層水田耕作土の上部。

６ｂ層：10YR3/1黒褐色シルト質粘土。調査区の西側のみに遺存し、直下の７ａ－２層を巻き込んでいる。厚さは４～12cmである。６層水田耕作土の下部。

７ａ－１層：2.5Y4/2暗灰黄色シルト。水田耕作土で耕作によって、よく攪拌されている。調査区の東側のみに遺存し、厚さは４～12cmである。

７ａ－２層：2.5Y5/2暗灰黄色シルト。よく攪拌されている。調査区のほぼ全域に遺存し厚さは６～18cmである。

７ｂ層：2.5Y8/1灰白色シルト。水田耕作土で、７ａ層水田の起耕の際に耕作土の下部に形成されたブロック状の層である。調査区のほぼ全域に遺存する。厚さは２～12cmである。

８層以下の土層の特徴は断面図の土層注記表のとおりである。いずれも自然堆積層と考えられる。

なお、第２表は４次調査２区と７次調査１区、２区を併せた基本層序対応表である。

第２表　４次調査２区・７次調査１区・２区　基本層序対応表

４次調査	性　格
２　区	
Ⅰ	現代の水田耕作土
Ⅱａ	畑か水田の耕作土
Ⅱｂ	畑か水田の耕作土
Ⅲ	平安時代後半以降の水田耕作土
灰白色火山灰	10世紀前半
Ⅳａ	平安時代前半の水田耕作土
Ⅷ	平安時代前半の水田耕作土
Ⅸ	
Ⅹ	
Ⅺ	
Ⅻ	縄文時代
ⅩⅢ	

７　次　調　査		性　格
１　区	２　区	
1	1	水田耕作土
2a	2	
2b	3	水田耕作土
	4	水田耕作土
	5	自然堆積層
3	6a	水田耕作土
	6b	水田耕作土
4a	7a－1	平安期の水田耕作土
	7a－2	
4b	7b	
灰白色火山灰は１区４層、２区７層より削平される		
5a	8	自然堆積層
5b		
6		
7		
8	9	
9	10a	
	10b	
10	11	
11	12	
12		

※７次１区５層、２区８層と４次Ⅳａ層以下の土層との対応関係は不明。

５　１区の発見遺構と出土遺物

１）３層の調査

１、２層を重機により除去し、３層上面を検出したが遺構は検出されなかった。３層も水田耕作土と考えられる。３層を除去し４層上面を検出したが、３層水田に伴う畦畔の痕跡は検出されなかった。

２）４層水田跡

４ａ層上面では畦畔を検出できなかったが、４ｂ層中で４層水田跡に伴う擬似畦畔Ｂを確認した。

〔耕作土〕

耕作土は耕作により、よく攪拌された４ａ層と起耕の際に掘り起こされた４ｂ層である。４ａ層は暗オリーブ色

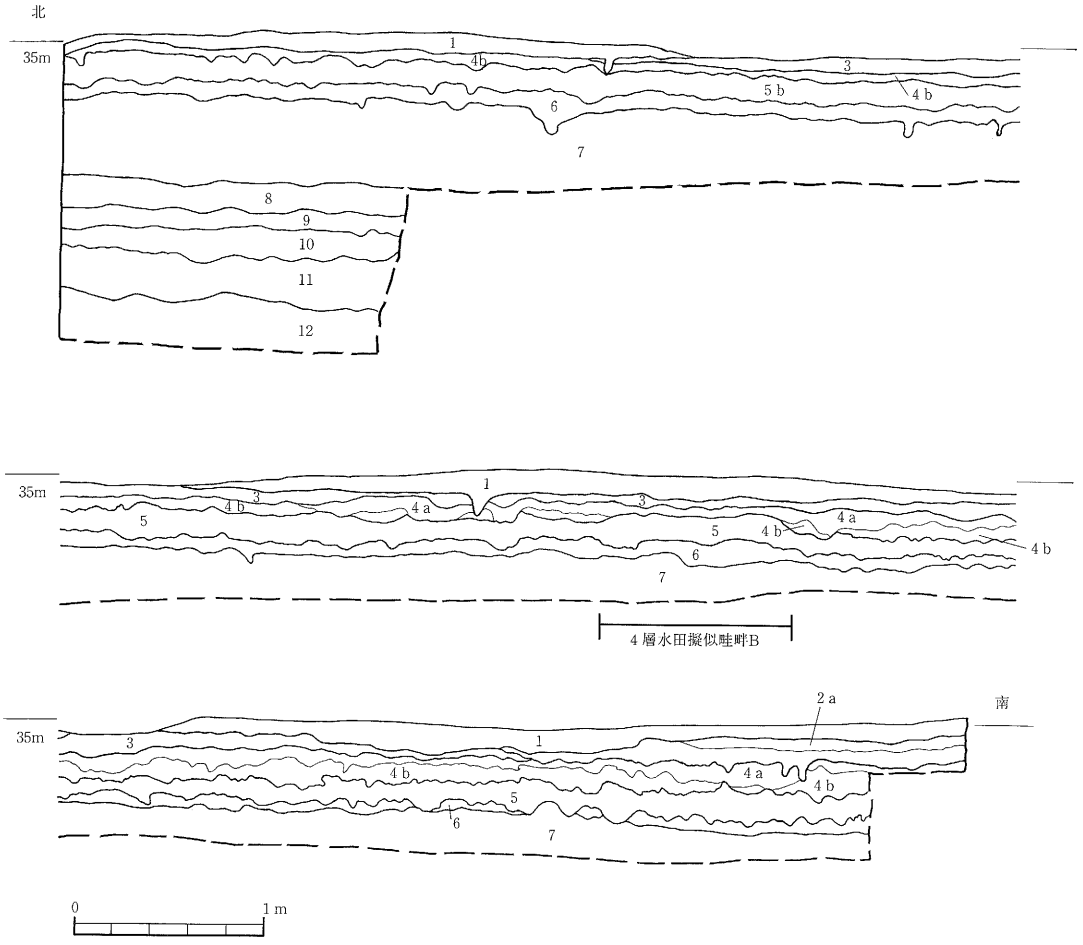
の砂質シルト土である。また、灰白色火山灰層・５層をも巻き上げて耕作している。４ａ層はほとんどが調査区のほぼ中央を東西に走る擬似畦畔Ｂの南側にのみ遺存している。これは上層の１層、３層（ともに水田耕作土と推定）によって畦畔の北側については攪拌・削平された結果と考えられる。遺存部の４ａ層の厚さは４cm～14cm程で、下面に凹凸が見られる。４ｂ層は調査区全域に遺存し、厚さは４cm～18cm程である。

〔畦畔〕

４ｂ層除去中に、下層の５層が南北方向とそれに直交する東西方向に帯状に延びる２条が確認された。方向はほぼ真北方向とそれに直交している。５層は自然堆積層であることからこれは４層の耕作に伴う擬似畦畔Ｂと判断した。それぞれの擬似畦畔跡は検出部で南北方向の畦２が長さ3.5m、幅75cm、高さ3.5cm～７cm、東西方向の畦１が長さ４m、幅75cm、高さは７cmである。

〔水田区画〕

水田区画は３区画確認された。区画①は検出部で東西長3.7mを計る。区画②は畦１、畦２が直交するので方形区画と推定される。検出部で東西長は3.5m、南北長は３mを計る。区画③は畦１と畦②が直交し調査区北側断面



土層No.	土　色	土　質	備　考
1	7.5GY3/1　暗緑灰色	粘土質シルト	現代の水田耕作土。
2a	10Y3/1　オリーブ黒色	粘土質シルト	層上部に酸化鉄を含む。水田耕作土
2b	7.5GY3/2 オリーブ黒色	粘土質シルト	マンガン粒をまばらに含む。酸化鉄を含む。水田耕作土。
3	5Y4/2　灰オリーブ色	砂質シルト	水田耕作土。
4a	5GY4/1 暗オリーブ色	砂質シルト	層下部に灰白色火山灰を霜降状に含む。水田耕作土。
4b	5GY4/1 暗オリーブ色	砂質シルト	灰白色火山灰をブロック状に含む。水田耕作土。
5	5Y3/2　オリーブ黒色	シルト質粘土	酸化鉄を全体に含む。

土層No.	土　色	土　質	備　考
6	7.5Y4/2 灰オリーブ色	シルト質粘土	
7	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質砂	南半分は赤褐色。礫を含む。
8	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	マンガン粒、酸化鉄斑を少量含む。
9	10YR3/1　オリーブ色	シルト質粘土	マンガン粒を全体に含む。酸化鉄斑わずかに含む。
10	10Y2/1　黒色	粘土質シルト	酸化鉄斑をわずかに含む。
11	10Y4/1　灰色	粘土質シルト	直径２cmほどの黒色ブロックをまばらに含む。
12	10G3/1　暗緑灰色	シルト	濃い緑色のブロックを縦筋状に含む。

第69図　１区東壁土層断面図

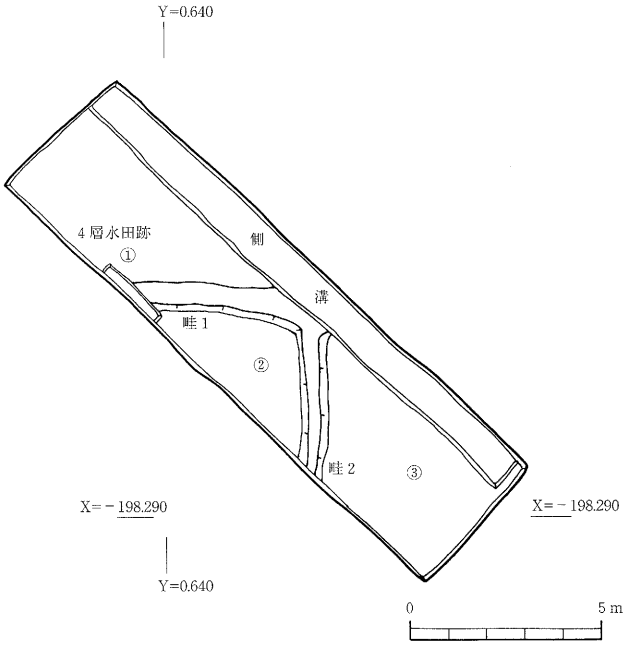
に痕跡が確認されるので方形区画と考えられる。検出部で南北長3.7ｍを計る。いずれの区画も部分的な検出で全体の形状の判るものはない。

〔水田面の標高と傾斜〕

４ａ層が調査区の南側にしか遺存しないため水田面の傾斜は部分的にしか判らないが、上層の様子から水田面は北西から南東方向に傾斜していると見られる。標高は区画②が34.76ｍ、区画③は34.71ｍである。勾配は５㎝／10ｍである。区画内の比高差は検出部ではあるが区画②、③ともほぼ平坦である。

〔出土遺物〕

耕作土中からはロクロ土師器片３点が出土したのみである。図化できたのは土師器片１点（第77図１）である。

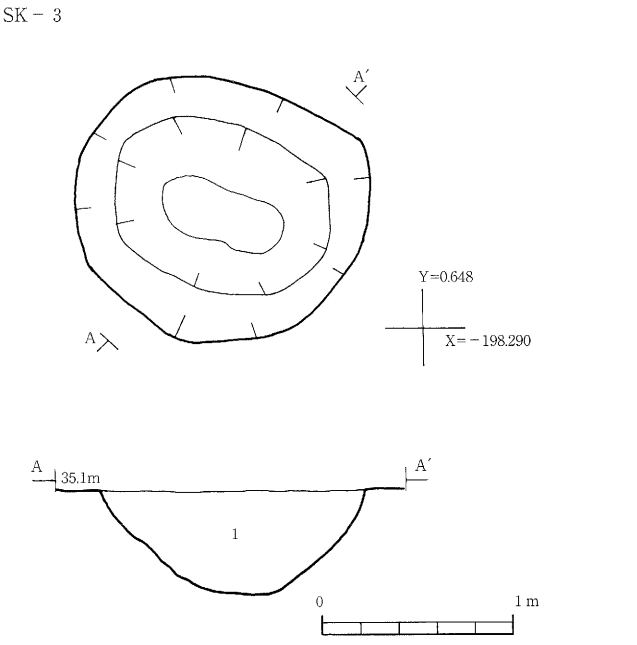


第70図　１区４層水田跡

３）土坑

３号土坑－SK３

４ａ層上面で土坑１基（SK３）を検出した。調査区南端部に位置する。大きさは直径150㎝の円形で深さは約57㎝である。堆積土は全体に灰白色火山灰をブロック状に含み、一度に埋め戻されていると考えられる。遺物は出土せず、年代や性格も不明である。



土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR3/2　オリーブ黒色	粘土質シルト	全体にφ２㎝程の灰白色火山灰のブロックを含む。酸化鉄のブロックを全体に含む。下半にマンガンが点在する。

第71図　１区SK－３土坑実測図

6　２区の発見遺構と出土遺物

１）３～５層の調査

１～２層を重機で除去し、３層上面から調査を行った。３層、４層とも水田耕作土と観察されたが、３層上面及び４層上面では遺構は検出されなかった。また、５層上面でも畦畔及び畦畔痕跡は検出されなかった。

２）６・７層水田跡

①６層水田跡

自然堆積層である５層中において６層水田跡の畦畔を１条確認した。

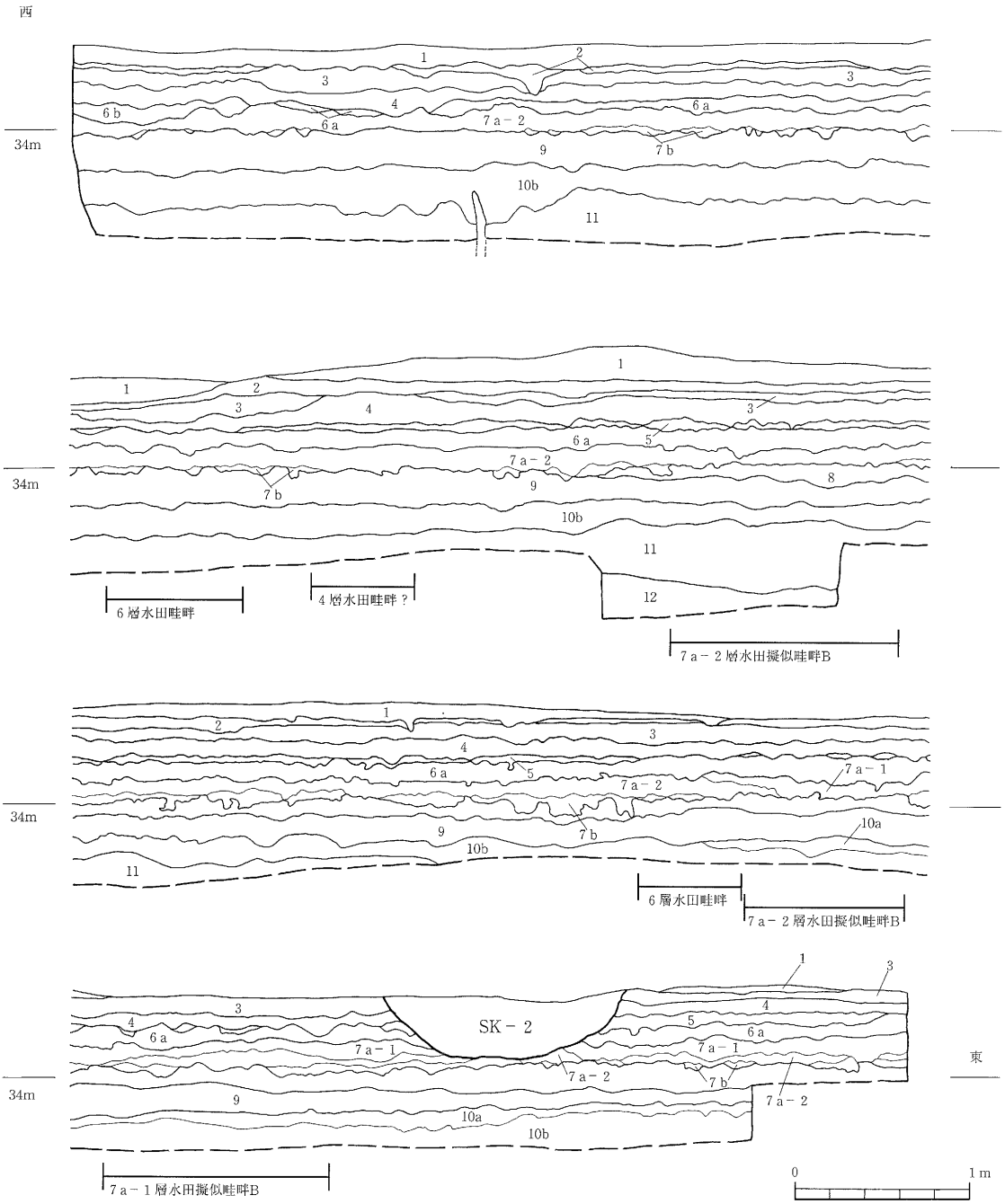
〔耕作土〕

耕作土は６ａ層とブロック状の６ｂ層である。６ａ層は灰黄褐色の砂質シルト土で、西側は水田耕作土と考えられる４層による攪拌を受けているが、調査区のほぼ全域に遺存する。厚さは６㎝～14㎝で下面に凹凸が見られる。

また、６ｂ層は調査区の西側のみに遺存し、直下の７ａ－２層を巻き込んでいる。

〔畦畔〕

畦畔は調査区のほぼ中央で５層を削り込んでいく過程で１条を確認した。方向はほぼ真北方向である。検出部の



土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/4　褐色	砂質シルト	青灰色のブロックを含む。現代の水田耕作土。
2	5YR4/6　赤褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	鉄分をまばらに含む。下面に緩やかな起伏が見られる。水田耕作土。
4	10YR3/3　暗褐色	シルト	3層に比べ鉄分が少ない。下面に緩やかな起伏が見られる。水田耕作土。
5	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	オリーブ灰色の砂が混入。中央部から東部にかけては均一に砂を含むが、中央部から西部にかけてはブロック状に含む。
6ａ	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	φ１～２mm程の鉄分を斑状に含む。下面に凹凸が見られる。水田耕作土。
6ｂ	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	φ１～２mm程のマンガンを含むφ１mm程の鉄分を若干含む。下部に黄色土をブロック状に含む。水田耕作土。
7ａ　1	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト	φ１～２mm程の鉄分を含む。φ１mm程のマンガンを含む。水田耕作土。

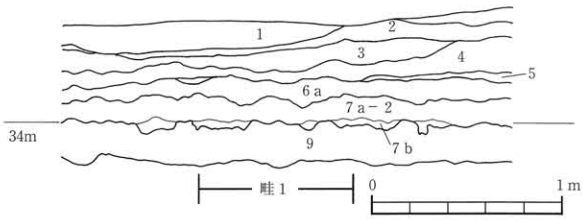
土層No.	土　色	土　質	備　考
7ａ－２	2.5Y5/2　暗灰黄色	シルト	φ１～２mm程の鉄分を斑状に含む。φ１mm程の火山灰粒子をごくわずかに含む。水田耕作土
7ｂ	2.5Y8/1　灰白色	シルト	7a層の中に火山灰をブロック状に含む。下面に凹凸が見られる。水田耕作土。
8	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄をまばらに含む。φ１mm程のマンガンをわずかに含む。下面に緩やかな起伏が見られる。部分的に火山灰をわずかに含む。
9	2.5Y3/2　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄をまばらに含む。φ１mm程のマンガンをわずかに含む。
10a	10YR3/3　暗褐色	シルト	φ２～３mm程の炭化物を含む。鉄分をまばらに含む。
10b	2.5Y3/2　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄をまばらに含む。φ１mm程のマンガンを含む。砂粒が混入する。
11	10YR2/3　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄をまばらに含む。φ１～２mm程のマンガンを含む。
12	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	酸化鉄をまばらに含む。φ１～２mm程の砂粒を多く含む。

第72図　２区北壁土層断面図

規模は長さ3.5m、幅150cm、高さ２cmである。畦畔の位置は下層の７ａ－２層水田跡の畦４と１mほどずれる程度で７ａ－２層水田跡を踏襲している可能性も考えられる。

〔水田区画〕

水田区画は２区画確認された。検出部で区画①は東西長３mを計り、区画②は東西長４mを計る。全体の形状が判らないので詳細は不明である。



第73図　６層水田跡畦畔断面図

〔水田面の標高と傾斜〕

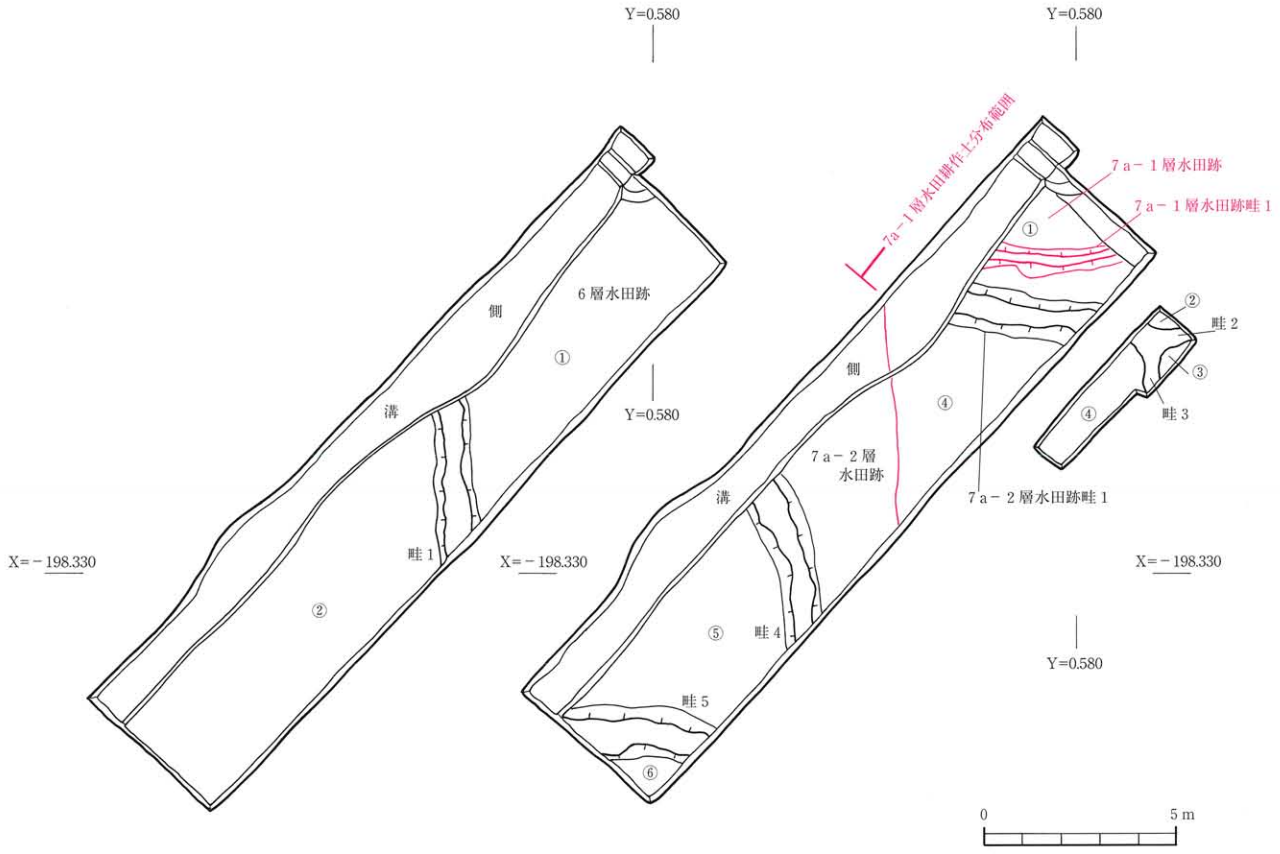
水田面の標高は区画①が34.30m、区画②が34.16mで北東から南西方向に傾斜している。勾配は５cm／10mである。区画内の比高差は検出部ではあるが区画①で５cm、区画②で７cmである。

〔出土遺物〕

６層中からは土師器片が１点出土している。

②７層水田跡

７層は耕作によって、よく攪拌された耕作土上部の７ａ層と起耕の際に耕作土の下部に形成されたブロック状の土壌である７ｂ層に分けられる。７ａ層はさらに上下２面の水田耕作土層に分けられた。７ａ－１層は調査区のほぼ中央より東側に分布する。この７ａ－１層上面で擬似畦畔Ｂを確認した。



第74図　２区６層・７層水田跡

７ａ－１層水田跡

〔耕作土〕

耕作土は７ａ－１層で暗灰黄色のシルト質土である。厚さは４cm～12cmである。

〔畦畔〕

畦畔は東西方向で検出部の規模は長さ３m、幅50cm、高さ２cmである。

〔水田区画〕

６層水田の攪乱を受けている部分が多く７ａ－１層の水田跡としての区画は不明である。

〔水田面の標高と傾斜〕

７ａ－１層の遺存部の標高は擬似畦畔の両側とも34.21mでほぼ平坦である。

〔出土遺物〕

７ａ－１層中から出土した遺物は、図化したロクロ土師器片１点（第77図２）のみである。

７ａ－２層水田跡

７ａ－２層上面では７ａ－１層水田及び６層水田による耕作の影響を受けているため、畦畔は確認できなかったが７ｂ層中において擬似畦畔跡を３条確認した。また、この水田跡の畦畔の延びを確認するため、調査区の東側に拡張区を設定し追加の調査を行った。

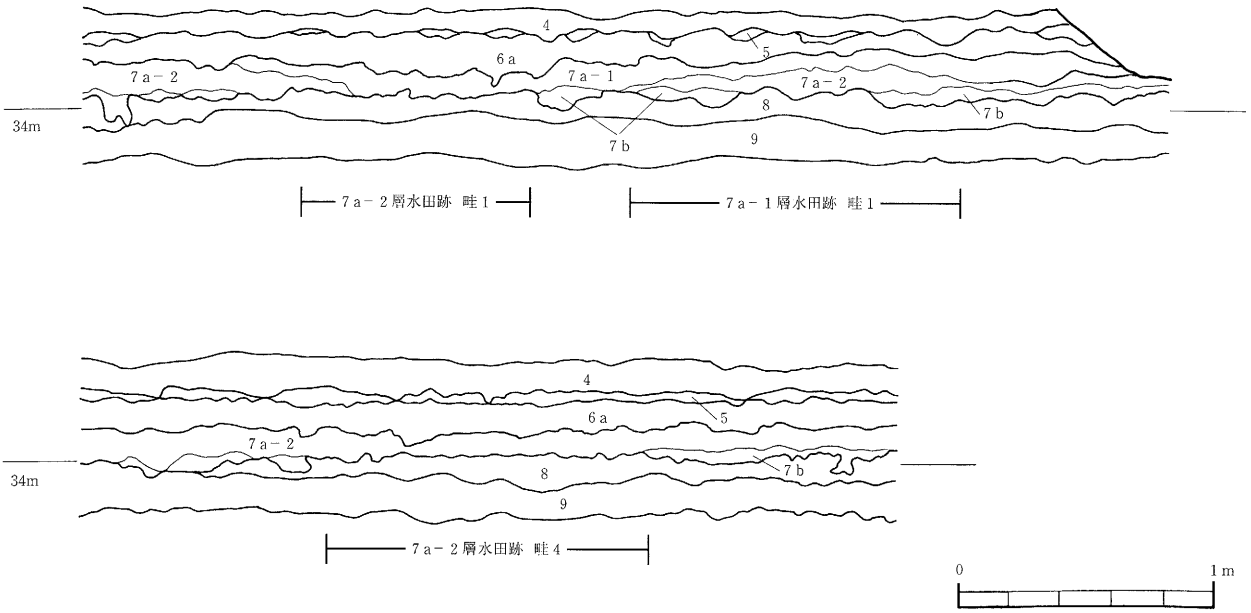
〔耕作土〕

耕作土は調査区全体に分布する。暗灰黄色のシルト質土で厚さは６cm～18cmである。灰白色火山灰を巻き上げ８層上面まで耕作が及んでいる。

〔畦畔〕

７ｂ層中で調査区の東側、中央、西側に下層の８層が帯状に延びるのが確認された。８層は自然堆積層であることからこれらは７ａ－２層の耕作に伴う擬似畦畔Ｂと判断した。畦１は東西方向で検出部の規模は長さ３m、幅1.0m、高さは４～７cmである。畦４は南北方向で検出部の規模は長さ４m、幅100cm、高さは３～５cmである。畦５は東西方向で検出部の規模は長さ3.5m、幅1.3m、高さは２～３cmである。

拡張区においては７ｂ層上面で畦１に続くものと考えられる畦畔が確認された。東西方向とそれに直交する畦畔



第75図　７層水田跡畦畔断面図

跡を確認した。それぞれの規模は畦２が東西方向で長さ1.5m、幅50cm、畦３が南北方向で長さ1.0m、幅30～50cmである。

〔水田区画〕

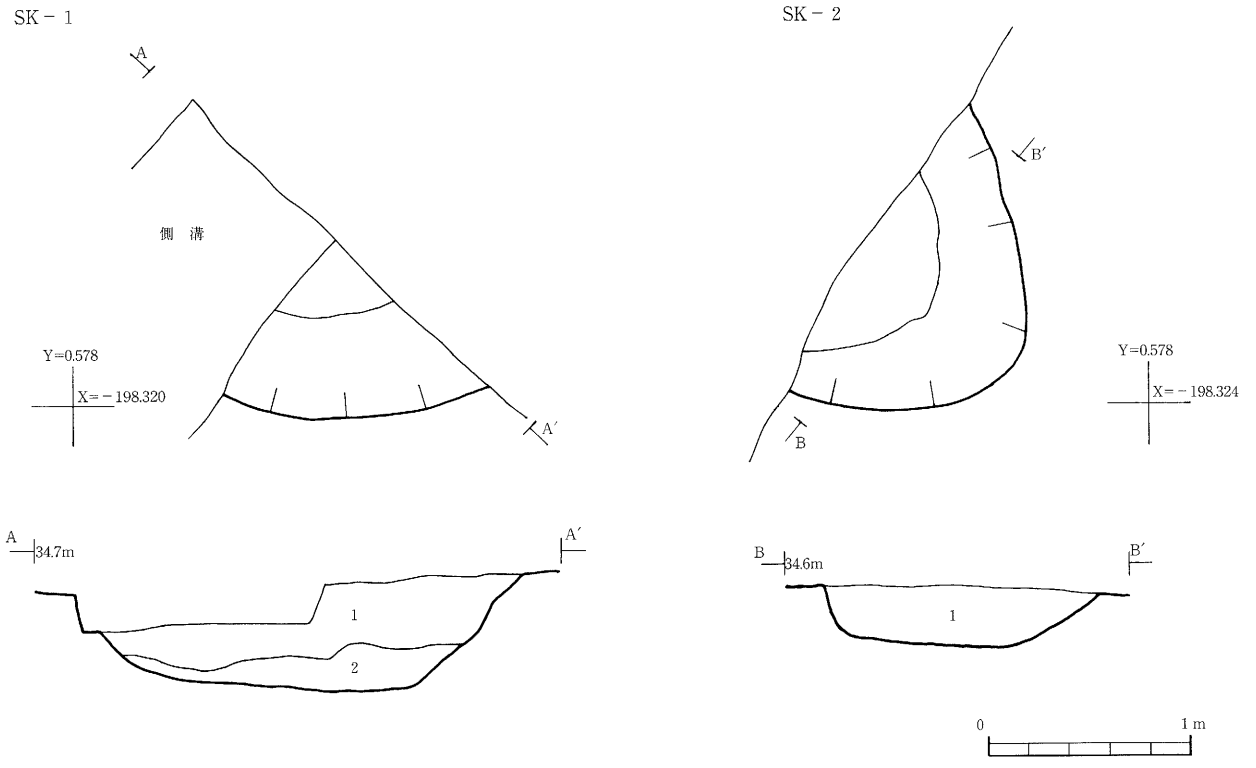
区画①は調査区内の検出部では東西長3.5mを計るが、拡張区の区画②まで続くとすると東西長は６mを越えるものと推定される。また、調査区と拡張区の間で南北方向の畦が存在する可能性も考えられる。区画③は畦の直交部分の検出のみなので区画の詳細は不明である。区画④は拡張区において検出された畦畔跡が直交することにより、方形区画と推定できる。また、規模は畦１と畦４が西側で直交し、畦４と畦５が東側で直交しさらに延びるとすれば南北長約12m、東西長約10mを計る区画と推定できる。区画⑤においても畦４と畦５が直交すると考えると方形区画と推定される。区画⑥については東西長1.8mを計るが、詳細は不明である。

〔水田面の標高と傾斜〕

標高は34.08m～33.9mで、北東から南西方向、あるいは北から南方向に傾斜している。区画④と区画⑤の勾配は５cm／９mである。区画内の比高差は検出部ではあるが区画④で３cm前後、区画⑤で５～６cmである。

〔出土遺物〕

７ａ－２層、７ｂ層中からは土師器片３点、須恵器片１点が出土したのみで、図化できたものは無い。



SK－1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト質砂	酸化鉄をブロック状に含む。
2	2.5Y4/2　暗灰黄色	シルト質砂	1層に比べて酸化鉄を多く含む。黄色の土をブロック状に含む。

SK－2

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	2.5YR5/2　暗灰黄色	砂質	酸化鉄をブロック状に含む。

第76図　SK－１・２土坑実測図

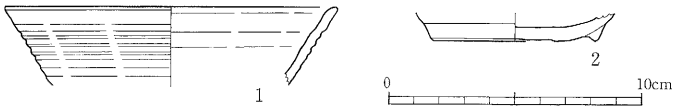
3）土坑

1号土坑ーSK1

2層上面で検出した。調査区の東壁にかかり、全体の形状は判らないが楕円形もしくは円形と推定され、規模は検出部分で長径200cm、短径100cm、深さ55cmである。堆積土は暗灰黄色のシルト質砂で、一度に埋め戻されていると考えられる。出土遺物は無く、年代や性格は不明である。

2号土坑ーSK2

2層上面で検出した。調査区の中央から東よりに位置する。側溝にかかる部分は、崩落のため無くなってしまった。全体の形状は判らないが、楕円形と推定される。規模は検出部分で長径170cm、短径100cm、深さ30cmである。堆積土はSK－1同様暗灰黄色のシルト質砂で、一度に埋め戻されていると考えられる。出土遺物は無く、年代や性格は不明である。



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外面）特徴（内面）		写真図版
1	D－1	1	4b				赤焼土器	坏	(3.1)	13.0		ロクロ	ロクロ	38－3－2
2	D－2	2	7a－1				土師器	高台付坏	(1.1)		6.5	ロクロ底部回転糸切り	ヘラミガキ　非黒色処理	38－3－1

第77図　出土遺物実測図

7　まとめ

① 今回の調査区は遺跡中央からやや西よりで、1区は2次調査A区、4次調査2区の北側、2区は4次調査2区の西側の地点にあたる。標高は1区で36.8m前後、2区で36.5m前後である。

② 水田跡は1区では2層、3層、4層、2区では3層・4層・6層・7層が水田土壌と判断された。

③ 確認できた畦畔は1区では4層水田跡に伴う擬似畦畔Bが1条、2区では6層水田に伴う畦畔が1条、7a－1層水田跡に伴う擬似畦畔Bが1条、7a－2層水田跡に伴う擬似畦畔Bが5条である。各畦畔はほぼ真北方向を基準としている。

④ 水田区画は1区画が完全に検出できたものは無かったが、2区7a－2層水田跡では、調査区内から続くと見られる畦畔跡が拡張区でも検出され、1区画の規模を南北長12m、東西長10mの方形区画と推定できた。

⑤ 水田の時期は1区4層水田跡と2区7層水田跡については灰白色火山灰を巻き上げて耕作していることから、915年以降と考えられる。4a層、7a－1層からそれぞれ土師器、須恵器が出土し、それ以降の遺物が出土していないことから平安時代の中に位置付けられるものと考えられる。また、平安時代後半以降と位置付けられている4次調査2区のⅢ層水田跡と対応すると考えられるが、今回の調査では出土遺物が少なく詳細な時期までは特定できなかった。それ以外の水田層については出土遺物が無く時期は不明である。

⑥ 1区4層水田と対応する2区7層水田についてみてみると、水田面の標高差は約50cm～70cmで今回の2つの調査地点において平安期における地形は北東から南東方向に傾斜していたと考えられる。

⑦ 4次調査区1区、2区で検出された灰白色火山灰直下層の水田跡は検出されなかった。

⑧ 2次調査A区、4次調査2区よりも北西地域でも平安期の水田域が広がることが確認できた。

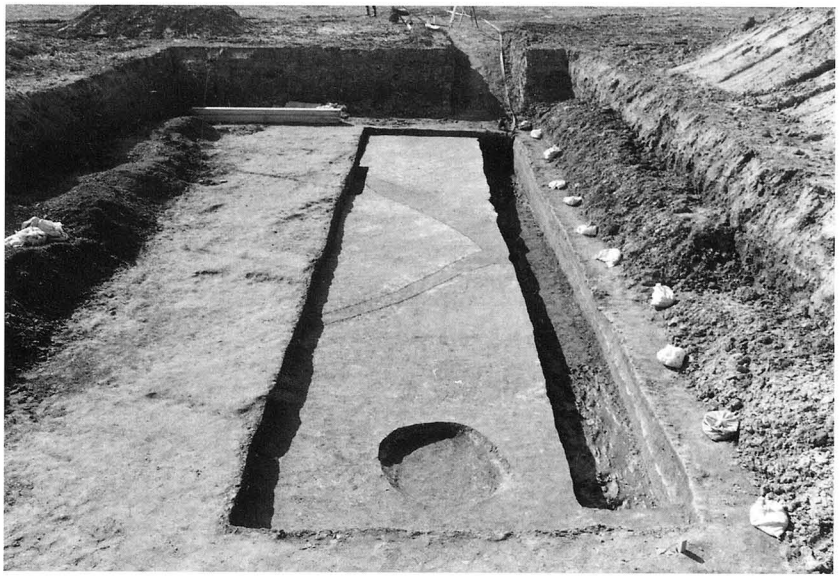
参考文献

渡部弘美（1993）：「山田条里遺構」『仙台平野の遺跡群ⅩⅡ　平成４年度発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第170集

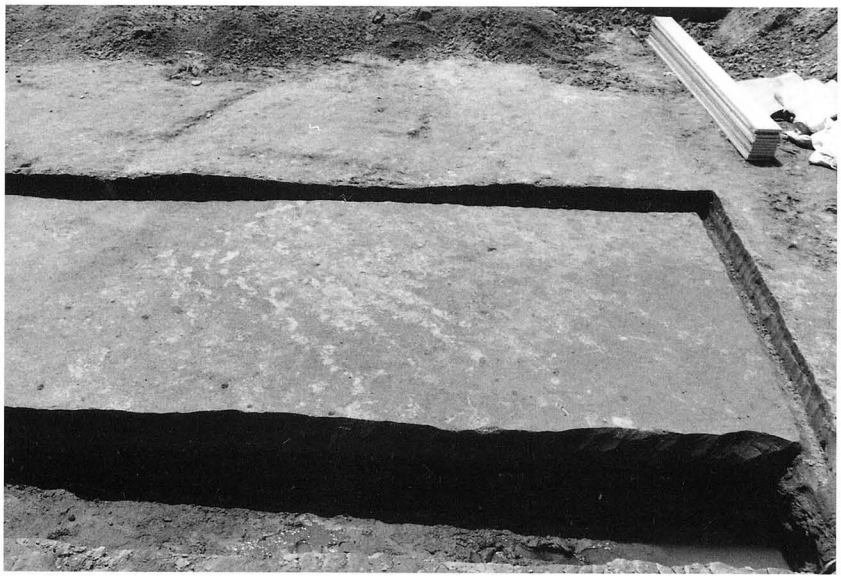
主浜光朗（1999）：「山田条里遺跡－第２次・第３次調査」『陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第238集

平間亮輔（2000）：「山田条里遺跡－第４次・第５次調査」『五本松窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第247集

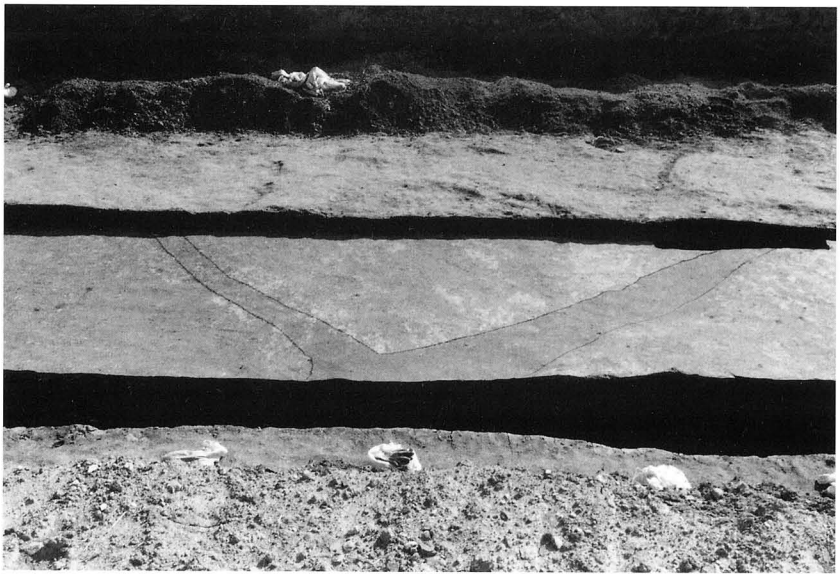
佐藤　淳（2001）：「山田条里遺跡－第６次調査」『八木山緑町遺跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第253集



1　検出状況（南より）
　畦畔は疑似畦畔Ｂとしての５層

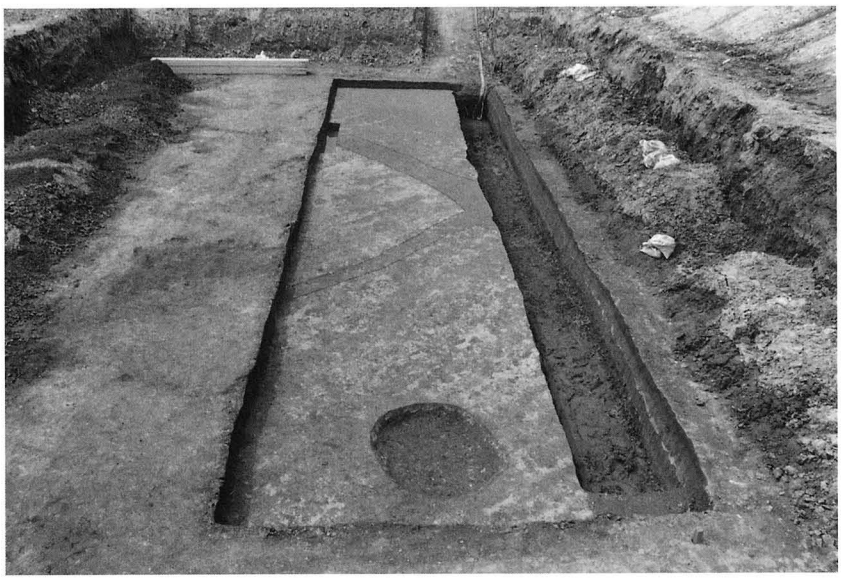


2　北半部検出状況（東より）
　白色の帯は灰白色火山灰

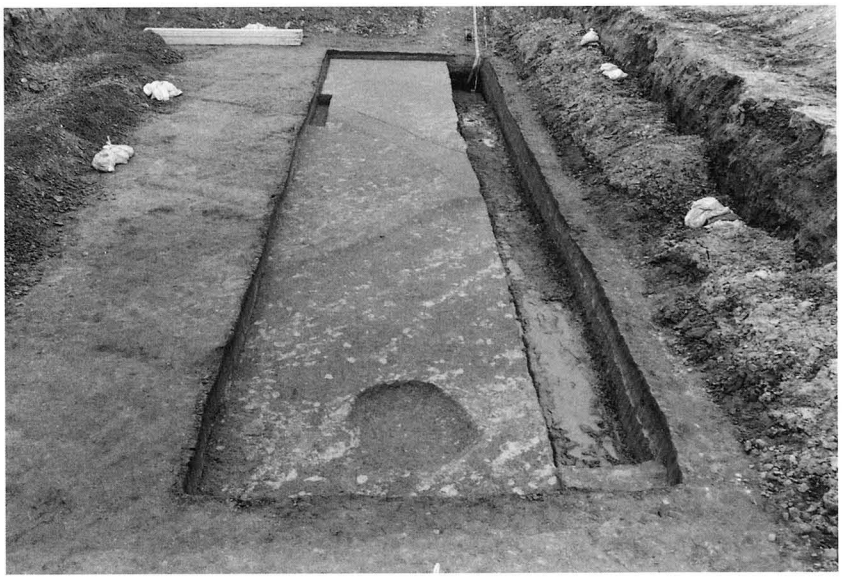


3　中央部検出状況（東より）

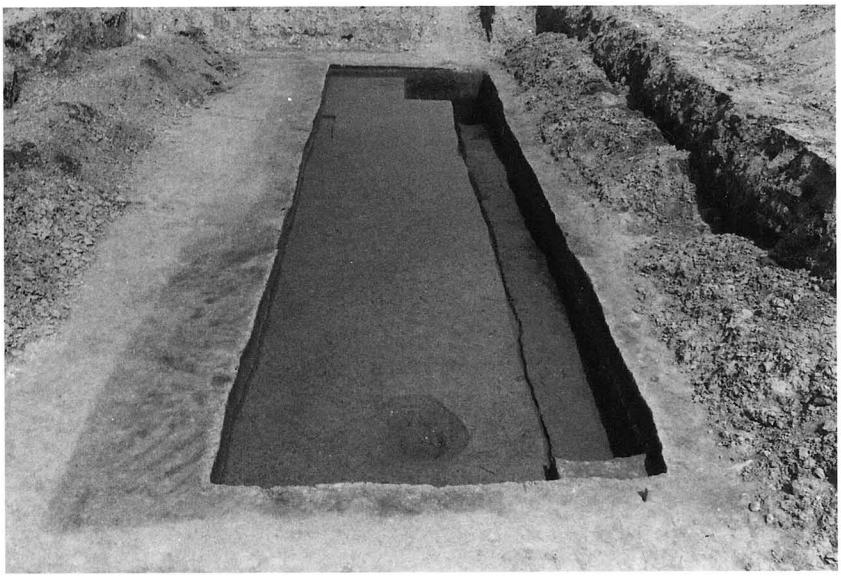
図版31　１区４層水田跡



1　４層下部の状況（南より）

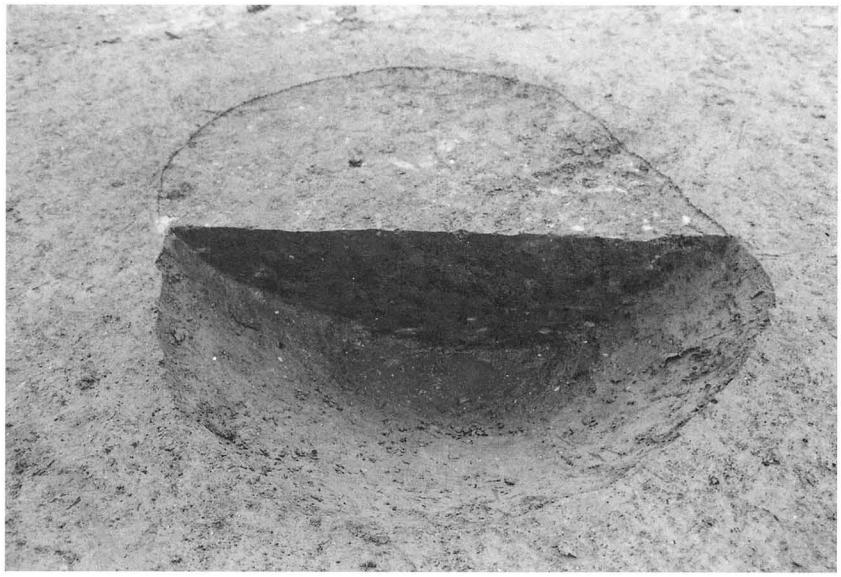


2　５層上面検出状況（南より）
耕作の痕が点々と残る

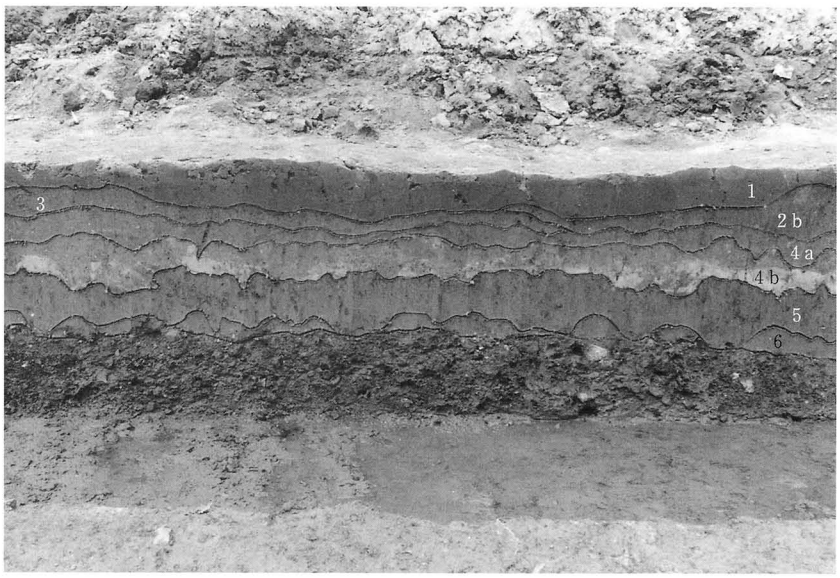


3　調査終了時　６層上面（南より）

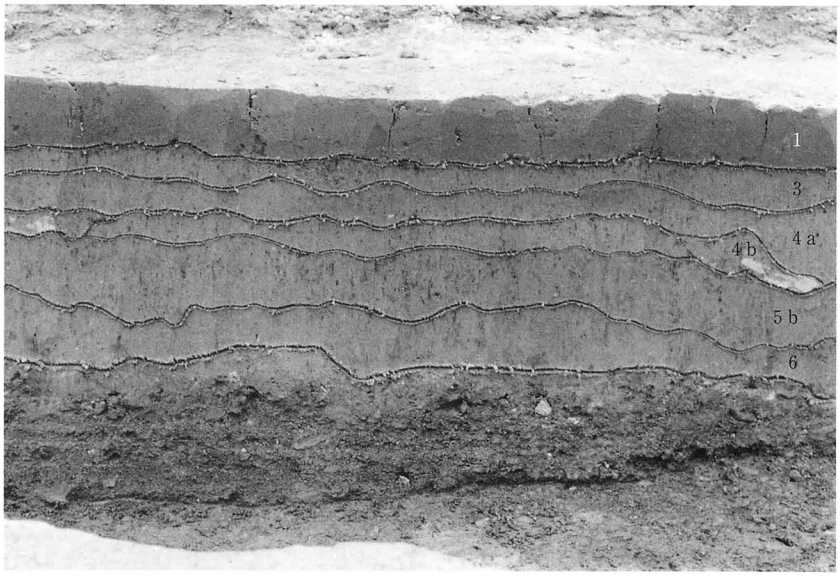
図版32　１区調査状況



1　SK３断面（南より）



2　東壁土層断面

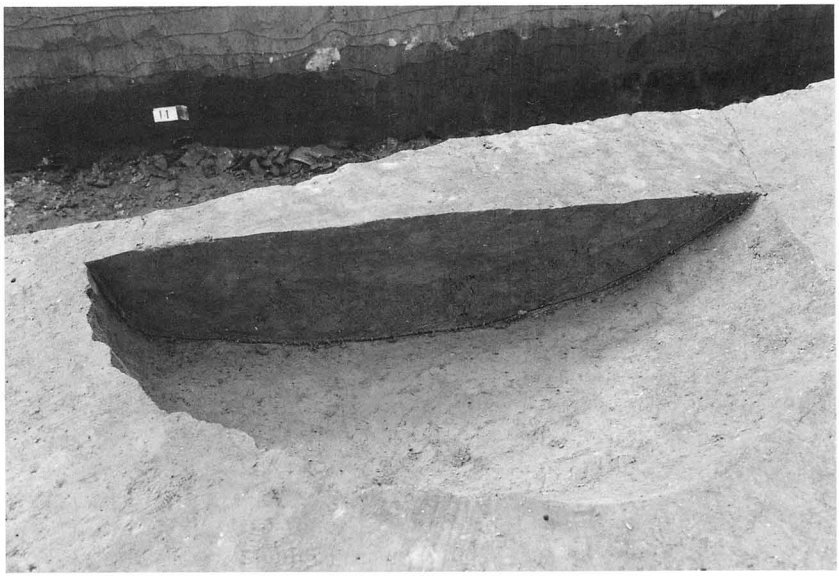


3　４層水田跡疑似畦畔Ｂ断面

図版33　１区土坑断面・土層断面

1　表土除去状況（西より）

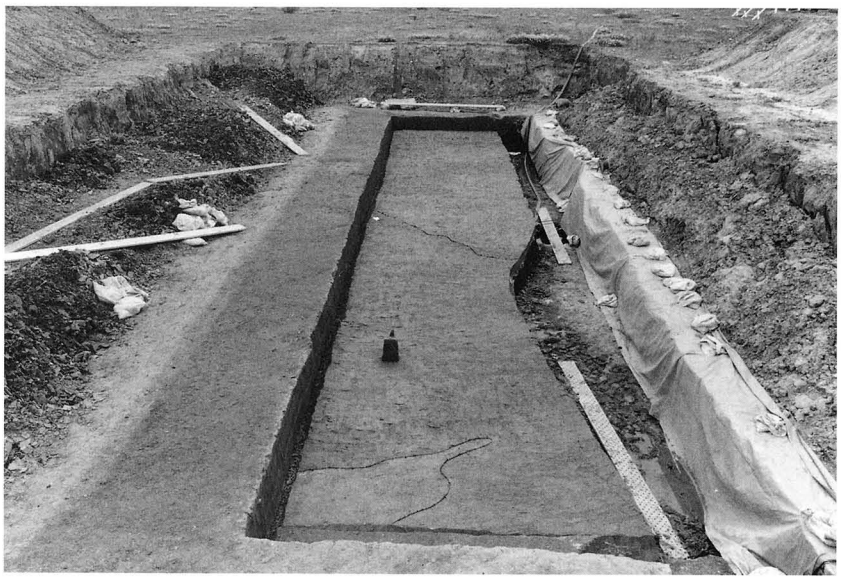
2　SK１断面（西より）



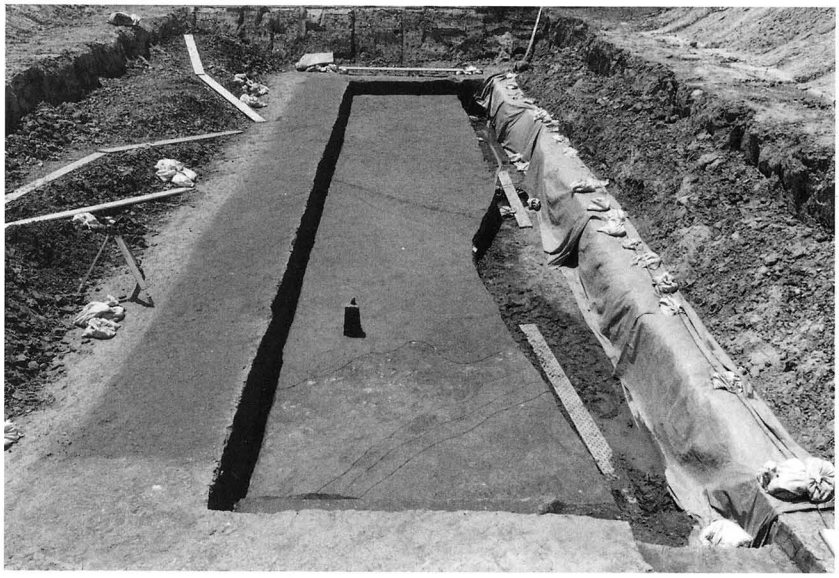
3　SK２断面（南より）

図版34　２区の状況と土坑断面

1　6層水田跡畦畔検出状況
（北より）



2　7a－1層・7a－2層
検出状況（東より）



3　7a－2層検出状況（東より）

図版35　2区6層・7a層調査状況

1　７ｂ層上面検出状況（西より）

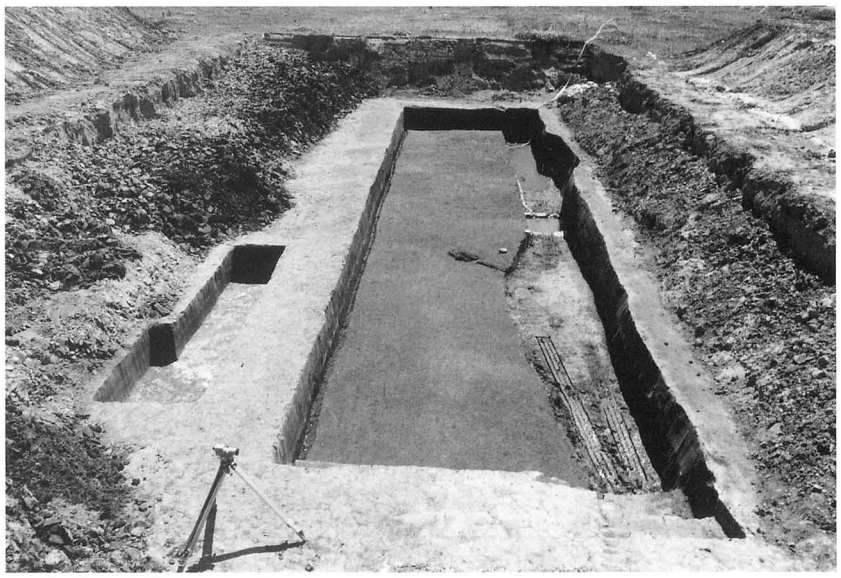
2　７ｂ層下部検出状況（東より）
黒い帯状が７ａ－２層水田跡
疑似畦畔Ｂ

3　７ｂ層下部検出状況　近景
（南西より）

図版36　２区７ｂ層調査状況

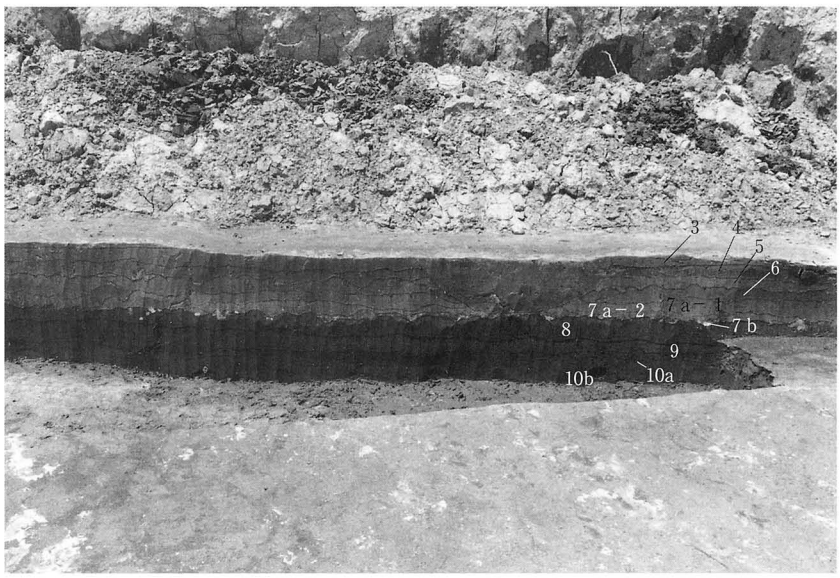
1　拡張区７ｂ層検出状況（東より）
畦畔は７ａ－２層水田跡疑似畦畔Ｂ

2　８層上面検出状況（東より）

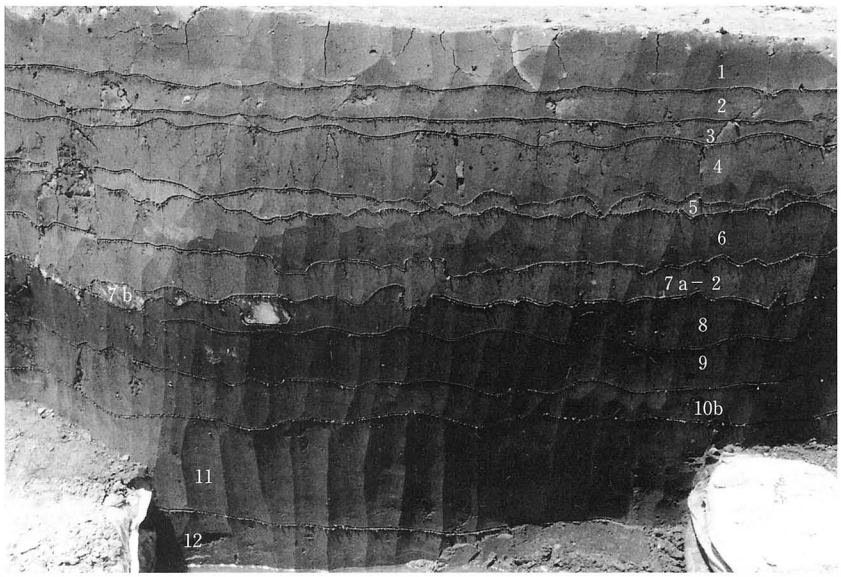


3　調査終了時　９層下部（東より）

図版37　２区７b層～９層調査状況



1　北壁土層断面



2　北壁土層断面

3　出土遺物
1　土師器杯（２区７a－１層第77図２）
2　赤焼土器杯（１区４b層第77図１）

図版38　２区　土層断面、出土遺物

Ⅵ　富沢遺跡（第122次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）第122次調査
調 査 地 点　仙台市太白区長町南三丁目10－１
調 査 期 間　平成14年４月15日～４月25日
調査対象面積　203㎡
調 査 面 積　45㎡
調 査 原 因　共同住宅建築
調 査 主 体　仙台市教育委員会（文化財課）
担 当 職 員　主査　工藤哲司　　文化財教諭　加藤徳明

2　遺跡の位置と環境

富沢遺跡は、仙台市の東南部の沖積地に位置している。このあたりは、北西部から西部にかけては奥羽山脈から派生した青葉山丘陵に、北東部から東部にかけては広瀬川の形成した自然堤防に、南側は名取川の形成した自然堤防に囲まれ、「郡山低地」と呼ばれている。富沢遺跡は郡山低地の西半部に広がっており、登録面積は約90haに及んでいる。遺跡の標高は16～９ｍで、北西から南東方向に緩やかに下がっている。これまでに100次を超す発掘調査が行われ、弥生時代から近世・近代に至る水田跡が重層して発見されており、当地方の水田の変遷を知ることができる。また、水田跡の下層からは縄文時代や旧石器時代の遺構・遺物も発見されている。周辺の丘陵部や自然堤防上には、縄文時代から中・近世に至るまでの集落跡や古墳などの多くの遺跡が存在しており、仙台市内でも特に遺跡が濃密に分布する地区にあたる。

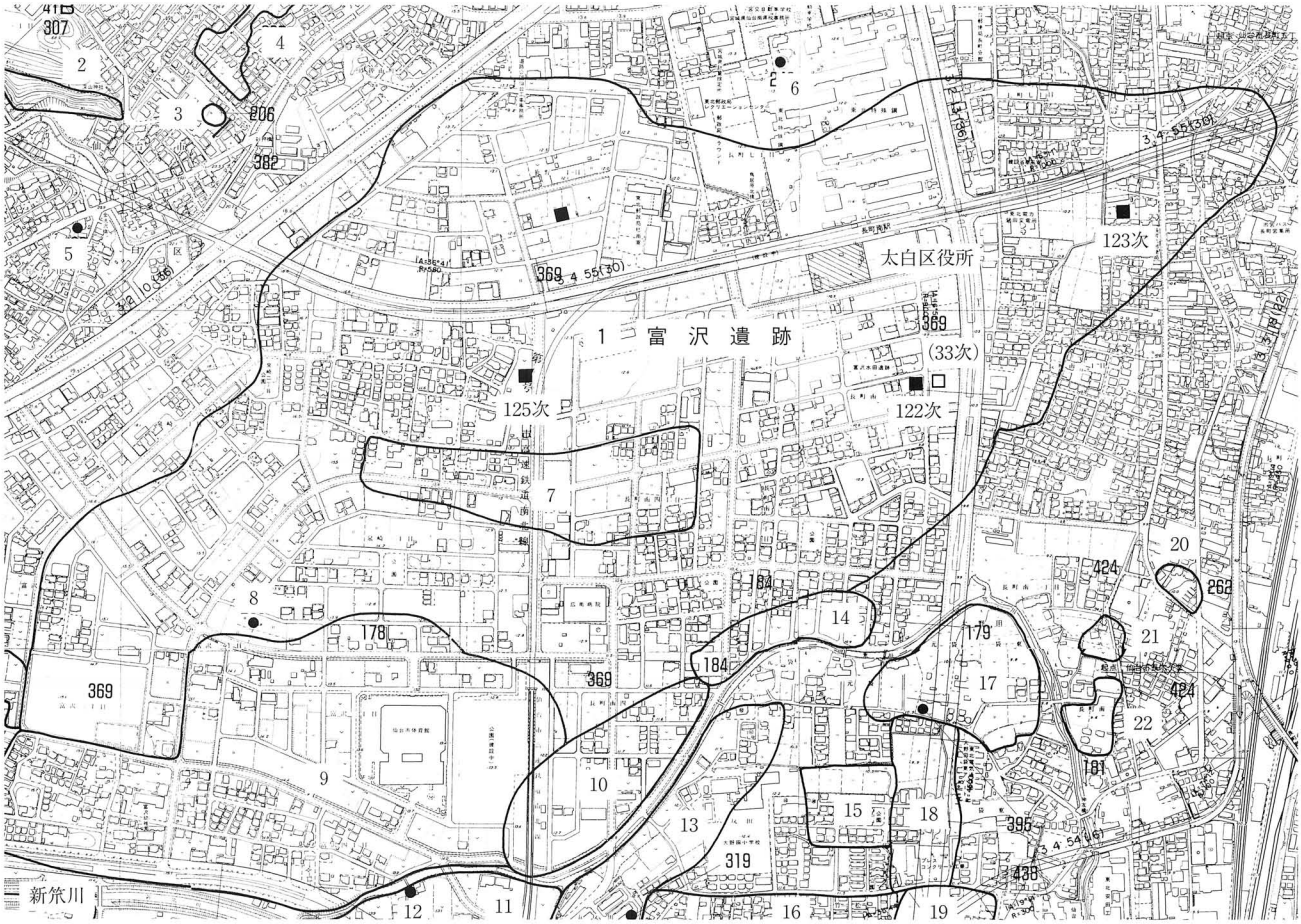
3　調査に至る経過と調査方法

本調査は、平成13年12月27日付けで、嶋田忠悦氏より発掘届が提出されたことにより実施した。建築予定地は、アスファルト舗装され駐車場となっていたため、建築範囲についてアスファルトをカットしたのち、重機により盛土層と近年の水田耕作土層（１・２層）を排除した。盛土及び表土層は地権者の協力により場外に搬出した。地表面の掘削範囲は南北13m・東西８ｍであるが、盛土層が1.2～1.3mと厚いため、盛土層と１・２層除去範囲は南北９ｍ・東西５ｍである。実際の調査は南北７ｍ・東西３ｍの範囲で実施した。調査は１・２層の残りと３層の除去から開始し、東側に隣接する第33次調査における調査成果をもとに水田跡の検出を層毎に実施した。第33次調査において水田跡が検出された層と対応する地層より下層についても一部を深堀して土層の観察を行った。

測量は、任意の基準点で行った後、この基準点から調査区の近くに設置した国家座標Ｘ系の基準杭２点を計測して座標位置を求めた。

4　基本層序

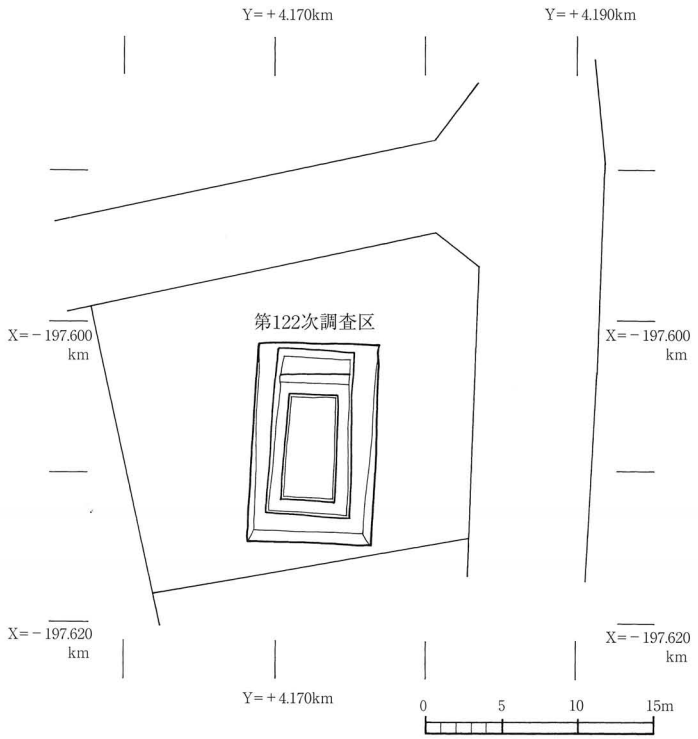
今回の調査地点は、掘削深度の範囲（現地表から４ｍ・旧表土から2.8m）で21層に分層した。１層は土地区画整理が実施される前の水田耕作土層で、２層は１層水田耕作土層の下に形成された酸化鉄集積層である。３層も良くこなれた土層で、水田耕作土層と観察される。４層から13層にかけては、水田耕作土と考えられるブロック状の



第78図　富沢遺跡の調査地点と周辺の遺跡

富沢遺跡周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	種別	年代
1	富沢遺跡	後背湿地	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代～近世
2	土手内横穴墓群 土手内窯積群	丘陵斜面	古墳・奈良
3	砂押古墳	丘陵麓	古墳（円墳）
4	砂押屋敷遺跡	丘陵麓	奈良・平安
5	金洗沢古墳	丘陵麓	古墳（円墳）
6	金岡八幡古墳	自然堤防	古墳（円墳）
7	泉崎浦遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・近世
8	教塚古墳	自然堤防	古墳（円墳）
9	山口遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
10	下ノ内浦遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
11	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
12	富沢四丁目古碑群	自然堤防	中世
13	六反田遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・近世
14	袋東遺跡	自然堤防	古墳・平安
15	袋前遺跡	自然堤防	縄文・奈良・平安
16	大野田古墳群	自然堤防	古墳（前方方円墳・円墳）
17	元袋遺跡	自然堤防	弥生・奈良・平安・中世・近世
18	大野田遺跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安
19	王ノ壇遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
20	長町六丁目遺跡	自然堤防	奈良・平安
21	長町南遺跡	自然堤防	奈良・平安
22	新田遺跡	自然堤防	奈良・平安



第79図　第122次調査区配置図

土壌を含む地層と自然堆積層と観察される互層上の土層が交互に存在する。13層以下は、未分解の植物遺体が自然堆積した層を主体とする地層が連続する。（第81図）

5　発見遺構と出土遺物

今回の調査地点の基本層序と、第33次調査の基本層序は下表のように対応するものと判断した。

第３表　第122次と第33次調査の土層対応表　　（アミかけの地層は第33次調査の水田跡または水田土壌検出層）

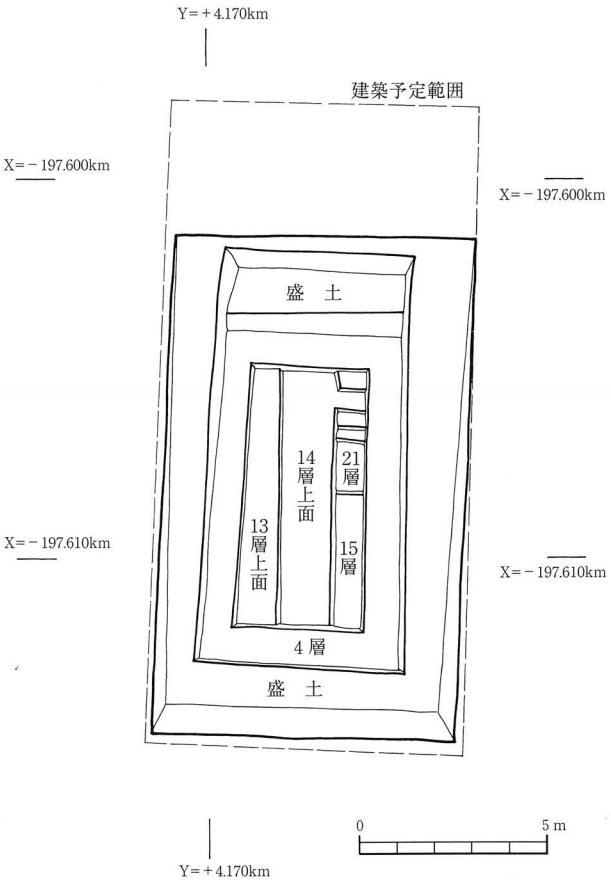
第122次	第33次	第122次	第33次	第122次	第33次
１層	２層？	６層	10層（平安）	11層	18層
２層	？	７層	12b・13・14層	12層	19層（弥生：枡形囲式）
３層	３	８層	15a・15b（弥生：十三塚式）	13層	20層上部
４層	５b層（平安）	９層	16層	14層	20層下部
５層	８層（平安）	10層	17層（弥生：十三塚式）	15層	21層

４層は「灰白色火山灰」（注１）や黒色粘土のブロックを含む事から水田耕作土層と判断され、後記のようにプラント・オパール分析の結果でも水田耕土の可能性が指摘されているが、畦畔等の遺構及びその擬似畦畔Ｂ等の痕跡についても検出されなかった。なお、４層は「灰白色火山灰」降下後に耕作土が形成されていることから10世紀前葉以降の年代が考えられる。

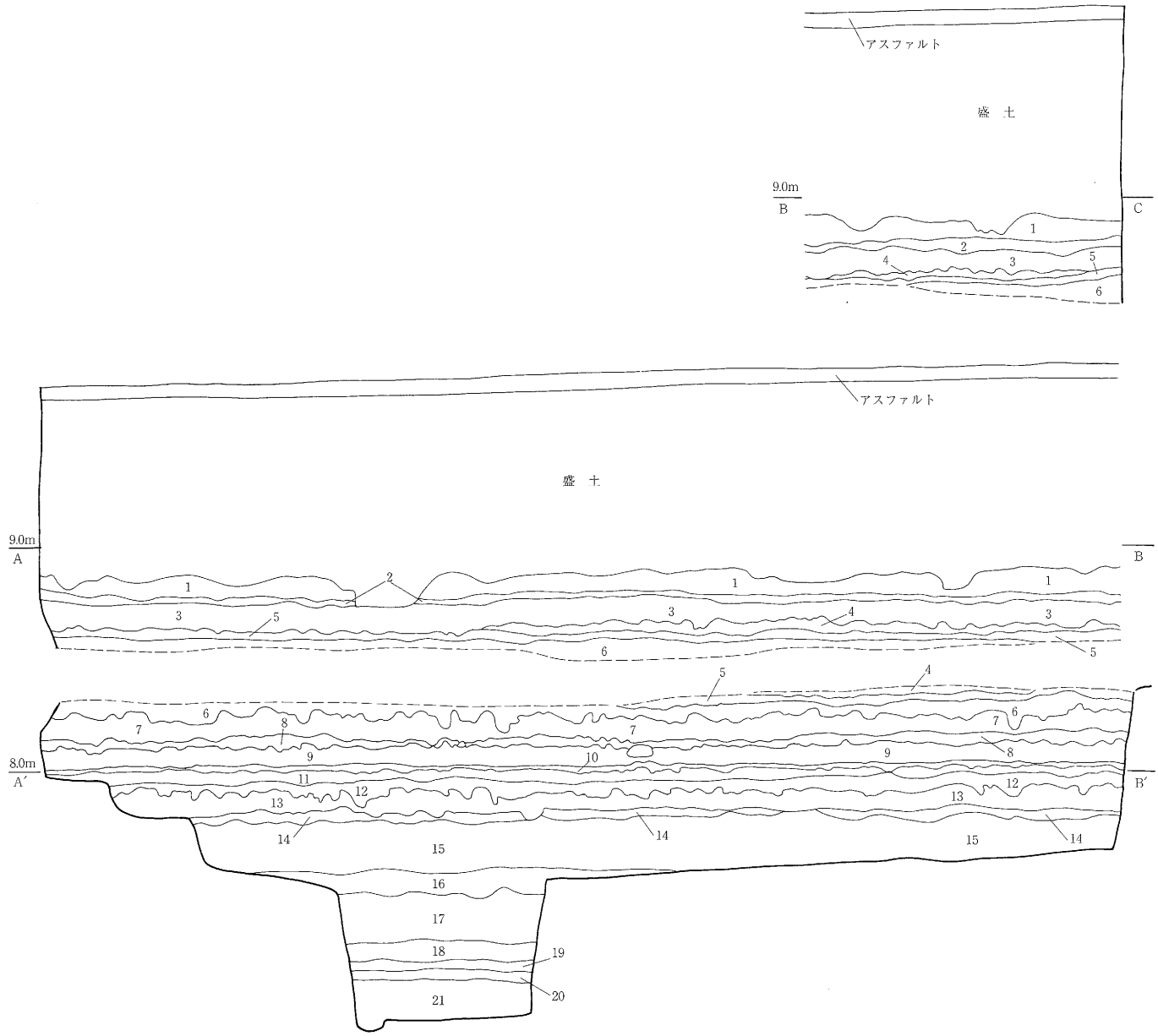
５層についても、層中に「灰白色火山灰」をわずかに含んでいるが、独立した耕作土層であるのか、４層水田耕作土の下部を構成する酸化鉄集積層であるのか、明確な判断はできなかったが、観察結果では後者の可能性が高い。

６層も黒色粘土・オリーブ黒色粘土等を含み攪拌された状況を呈する土壌であり、プラント・オパール分析でも水田耕土壌の可能性があるが、水田遺構は検出されなかった。

８層・10層・12層についても第33次調査の成果から水田関係の遺構が検出される可能性があったので、その前後の地層を含めて慎重に調査を行ったが、第33次調査で検出されたような畦畔や溝跡など水田跡の存在を示す遺構は検出できなかった。このことは、プラント・オパール分析において。８層ではイネのプラント・オパールが検出されず、10層・12層ではプラント・オパールが検出されているもののその量が少なく稲作が行われた可能性が低いとされた結果と一致している。ただし、８層・10層・12層については、その前後の互層状の土層とは異なり、攪拌を受けてこなれた状態の土壌で、層の底面に凹凸も観察され、水田土壌の可能性があることや、富沢遺跡ではなんらかの事情



第80図　第122次調査区実測図



第81図　第122次調査区東壁断面図

により、プラント・オパール分析の結果で水田土壌と認定する基準値（今回の分析を行った古環境研究所の基準では3,000個/ｇ）以下や、プラント・オパールが未検出でも畦畔が検出される場合があったので、直ちにこれらの３層が水田跡であったか否かは判断できない。水田跡であった場合、畦畔等これに伴う遺構が検出できなかった理由は明らかでないが、近隣地区でのこれまでの調査と今後の調査の成果によって、当該土層の評価をする必要がある。

出土遺物は、３層中から摩滅したロクロ土師器坏の破片が１点あるだけである。

6　まとめ

① 本調査地点は旧水田から約2.8mの深さまでの地層を21層に分けることができた。

② 東側に隣接第33次調査地点と地層の関係が明らかになり、４層・６層が平安時代の水田層に、８層が弥生時代

第122次調査区土層注記

層　位	土　　色	土　質	備　　考
1	5Y3/1　オリーブ黒色	シルト質粘土	酸化鉄を網目状にわずかに含む。
2	2.5Y3/1　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含むが、グライ化している。
3	5Y2/1　黒色	粘土	酸化鉄を少量含む。
4	10YR4/1　褐灰色	粘土	酸化鉄を下部に霜降状に含む「灰白色火山灰」をまばらに含む、黒色粘土のブロックをまばらに含む。
5	5Y3/2　オリーブ黒色	粘土	酸化鉄を多量に含む、「灰白色火山灰」わずかに含む。
6	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	黒色粘土・オリーブ黒色シルト質粘土及び酸化鉄をわずかに含む。
7	10Y5/2　オリーブ灰色 10YR1.7/1　黒色 10Y6/2　オリーブ灰色 5Y3/1　オリーブ黒色	粘土 粘土 粘土 粘土	0.5～２cmの厚さで互層状に堆積（自然堆積）
8	5Y5/2　灰オリーブ色	粘土	黒色粘土とオリーブ灰色粘土をブロック状にわずかに含む。
9	10YR2/3　黒褐色 10YR4/3　にぶい黄褐色 10YR2/1　黒色	粘土 粘土 粘土	１～２cmの厚さで互層状に堆積、未分解の植物遺体を多く含む（自然堆積）
10	5Y2/2　オリーブ黒色	粘土	未分解の植物遺体を含む。
11	5Y4/3　暗オリーブ色 10YR1.7/1　黒色 10YR3/3　暗褐色 2.5Y4/2　暗灰黄色	粘土 粘土 粘土 粘土	0.5～１cmの厚さで互層状に堆積、未分解の植物遺体を含む（自然堆積）
12	2.5Y3/2　黒褐色	粘土	黒褐色粘土及び未分解の植物遺体を含む。
13	2.5Y3/1　黒褐色 2.5Y4/3　黒褐色 10YR1.7/1　黒色 5Y2/2　オリーブ黒色	粘土 粘土 粘土 粘土	0.5～２cmの厚さで互層状に堆積、未分解の植物遺体を含む（自然堆積）
14	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色	粘土	未分解の植物遺体を含む（自然堆積）
15	10YR1.7/1　黒色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む（自然堆積）
16	10YR3/1　黒褐色 10YR1.7/1　黒色 10YR2/3　黒褐色	粘土 粘土 粘土	２～５cmの厚さで互層状に堆積、未分解の植物遺体を含む（自然堆積）
17	10YR1.7/1　黒色 10YR4/3　にぶい黄褐色 10YR3/4　暗褐色	粘土 粘土 粘土	１～５cmの厚さで互層状に堆積、未分解の植物遺体を多く含む（自然堆積）
18	10YR2/1　黒色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む（自然堆積）
19	5Y2/1　黒色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む（自然堆積）
20	2.5Y2/1　黒色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む（自然堆積）
21	5Y4/2　灰オリーブ色 2.5Y2/1　黒色	粘土 粘土	２～５cmの厚さで互層状に堆積（自然堆積）

中期後半の十三塚式期に、10層が弥生時代中期十三塚式から桝形囲式期に、12層が中期中葉桝形囲式期に対応させることができた。

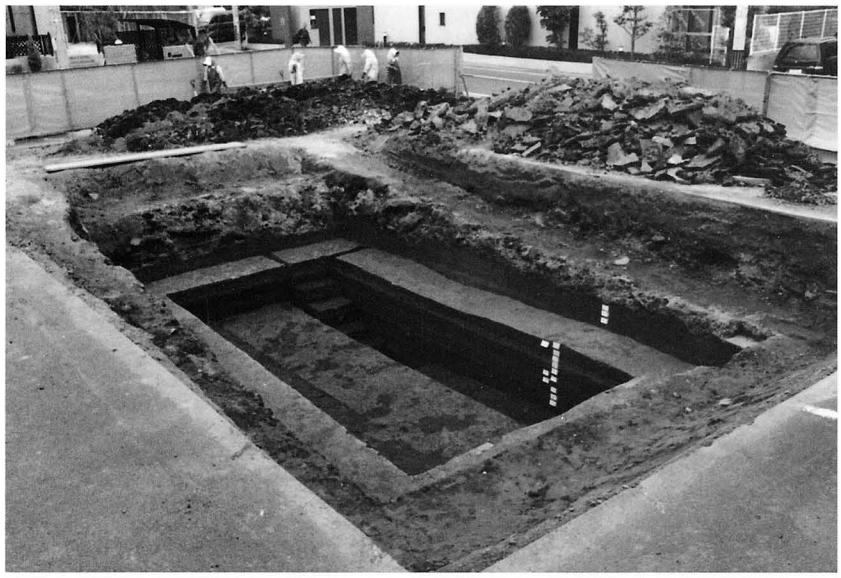
③　４層・６層については、水田に関係する遺構は検出されなかったが、土壌の観察とプラント・オパール分析の結果、当該地にも水田が存在したことが明らかになった。

④　８層・10層・12層は、土壌の観察では水田耕作土層の可能性が考えられたが、畦畔等は検出されず、またプラント・オパール分析の結果でもイネのプラント・オパールが検出されないまたは検出数値が低かった。これらの土層については、水田が形成されていたが、なんらかの事情でのイネのプラント・オパールが検出されなかったのか、非耕作域のような地区であったのかは今後の検討課題である。

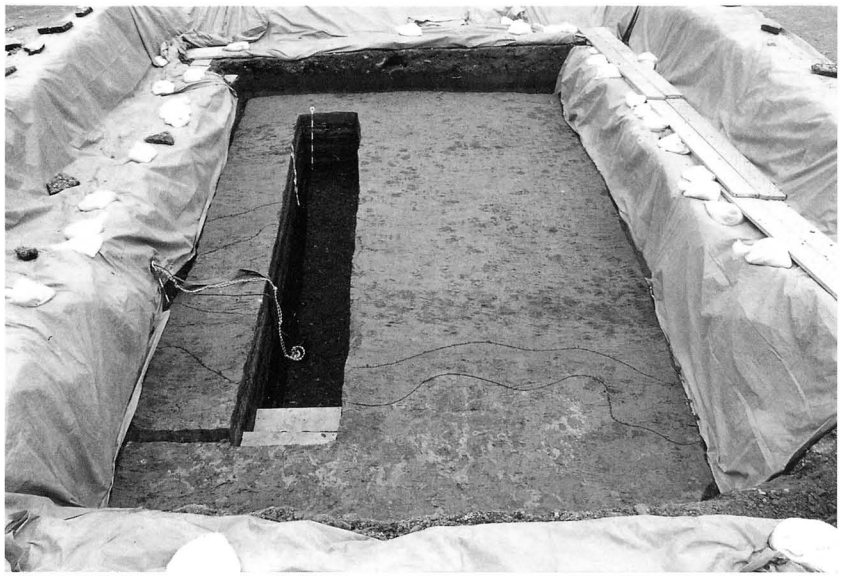
（注１）「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、現在、十和田ａ火山灰（Ｔｏ－ａ）と同定されており、降下年代は西暦915年初夏とされている（町田：1981・1996）。

参考文献

主浜光朗（1988）：「富沢遺跡第33次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第117集



1　調査区全景（南西より）



2　4層上面検出状況（北より）

3　6層上面検出状況（南より）

図版39　調査区全景と4～6層調査状況

1　6層下部から7層上面検出状況（南より）

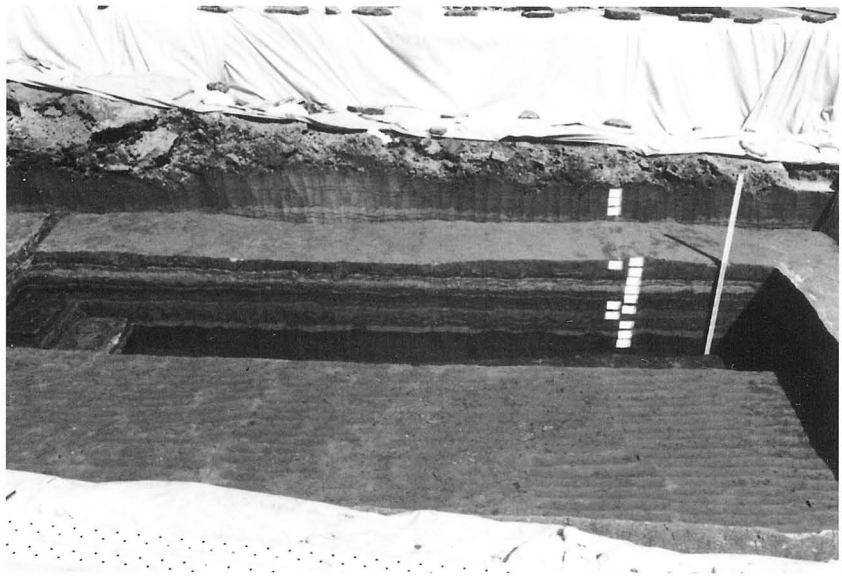
2　8層上面検出状況（南より）

3　8層下部から9層上面検出状況（南より）

図版40　6～9層調査状況

1　10層上面検出状況（南より）

2　11層上面検出状況（南より）



3　12層上面及び東壁断面（西より）

図版41　10～12層調査状況

7　富沢遺第122次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

1）はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

富沢遺跡第122次調査は、第33次調査の南西側に位置する。第33次調査では、平安時代から弥生時代にかけての水田跡が検出されたことから、当該調査区においても同時期の水田跡の包蔵が推定された。そこで、プラント・オパール分析を行い稲作（水田）跡の可能性について検討することになった。

2）試料

分析試料は、東壁の4層（褐灰色粘土）、6層（黒褐色粘土）、8層（灰オリーブ色粘土）、10層（オリーブ黒色粘土、12層（黒褐色泥炭質粘土）の5点である。分析結果の模式柱状図に試料採取箇所を示す。

3）分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに次の手順で行った。

① 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
② 試料約1gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
③ 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
④ 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
⑤ 沈底法による20μm以下の微粒子除去
⑥ 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
⑦ 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75およびミヤコザサ節は0.30である。

4）結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。

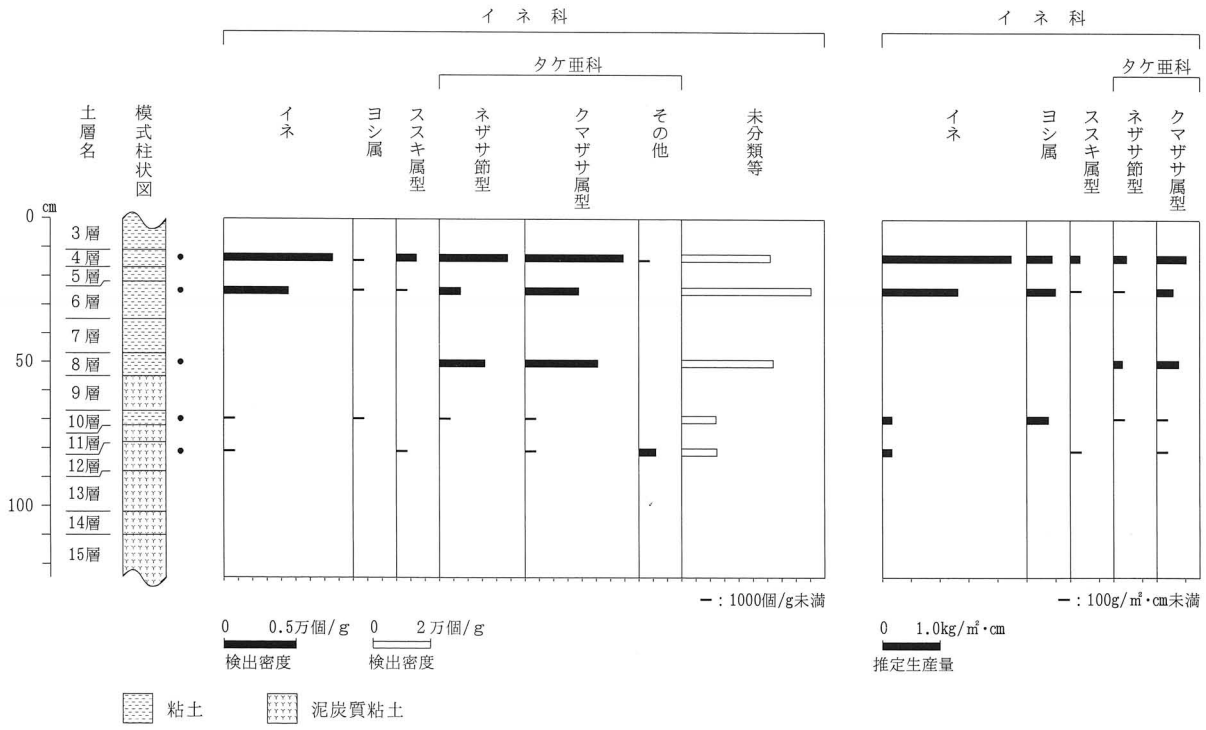
表－１　第122次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼土層	地点名	東壁				
		4	6	8	10	12
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	76	45		6	6
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	7	8		6	
ススキ属型	*Miscanthus* type	14	8			6
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	48	15	32	6	
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	69	38	51	6	6
その他	Others	7				12
未分類等	Unknown	124	181	128	48	49
プラント・オパール総数		345	294	211	72	79

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	2.23	1.33		0.18	0.18
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.44	0.48		0.38	
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.17	0.09			0.08
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	0.23	0.07	0.15	0.03	
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	0.52	0.28	0.38	0.05	0.05



図－１　第122次調査のプラントオパール分析結果

主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に各分類群の検出状況を記す。

イネは４層、６層、10層および12層で検出されている。４層と６層では高い密度である。ヨシ属は４層、６層、10層で検出されているがいずれも低い密度である。ススキ属型は４層、６層、12層で検出されているが、これも低い密度である。ネザサ節型は４層、６層、８層および10層で、クマザサ属型はすべての試料から検出されているが、両分類群は各層とも低い密度である。

５）富沢遺跡第122次調査における稲作跡

仙台平野において稲作跡の検証や探査を行うにあたっては、これまでの調査からイネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ3,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。当該調査では、４層と６層でそれぞれイネのプラント・オパールが7,600個/ｇ、4,500個/ｇと高い密度で検出されている。このことから、両層については稲作跡である可能性が高いと考えられる。なお、10層と12層でもイネのプラント・オパールが検出されているものの、いずれもプラント・オパール密度は600個/ｇと低い値である。したがって、これらについては稲作跡である可能性を否定することはできないものの、上層あるいは他所からイネのプラント・オパールが混入した危険性が高い。仮にこれらで稲作が行われていたならば、プラント・オパール密度が低いことの原因としては、１）稲作の行われていた期間が短かった、２）稲藁の多くが耕作地の外に持ち出されていた、３）イネの生産性が低かった、４）土層の堆積速度が非常に速かった、などが考えられる。

イネ以外の分類群の検出状況では、目立った特徴は認められないが、４層、６層および10層でヨシ属がわずかながら検出されている。よって、これらの層の堆積時には調査地の周辺にヨシの生育するような湿地が存在したと推定される。

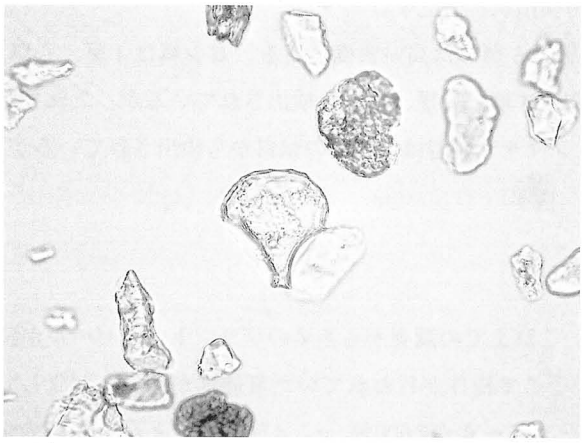
文献

杉山真二（1987）：「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告第31号』p.70－83

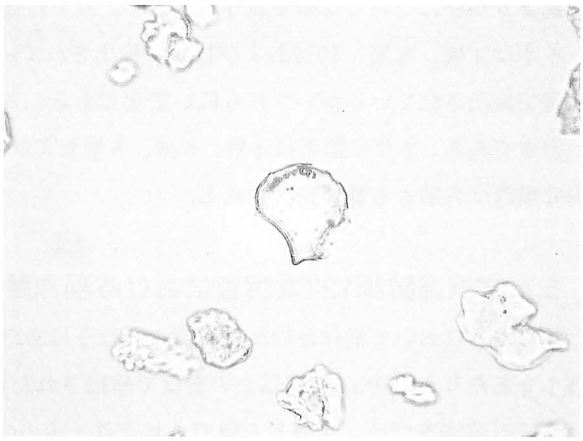
杉山真二（2000）：「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学．同成社，p.189－213

藤原宏志（1976）：「プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学９』p.15－29

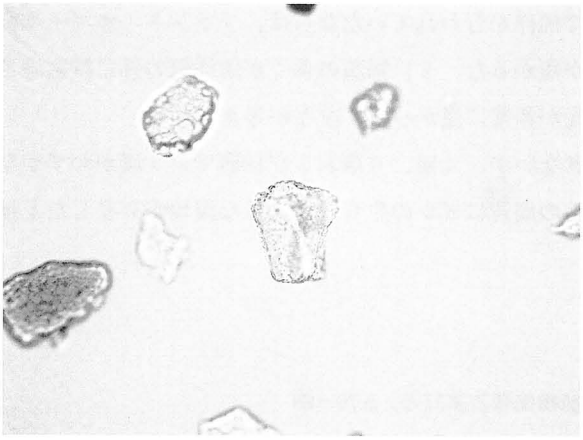
藤原宏志・杉山真二（1984）：「プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学17』p.73－85



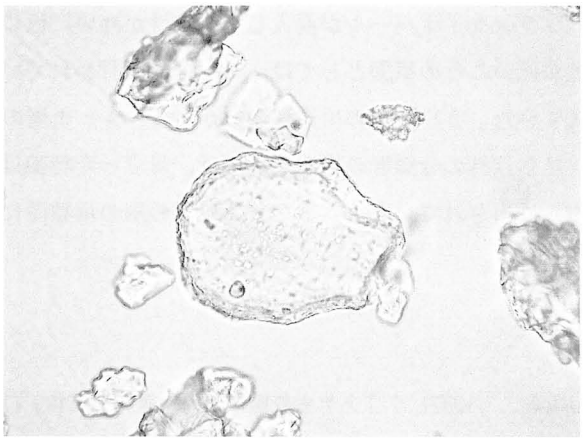
イネ



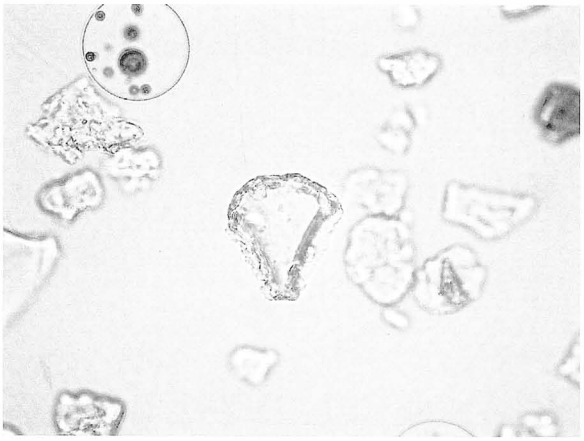
イネ



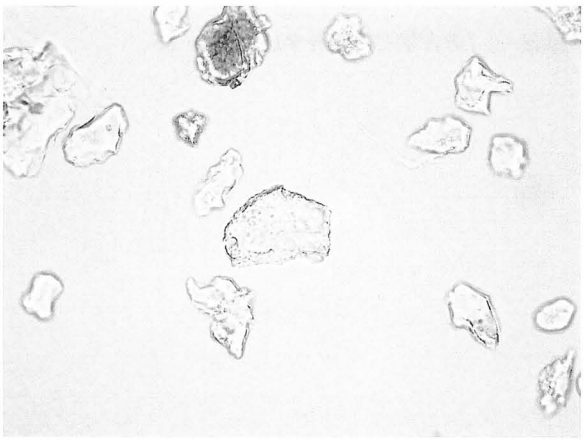
ススキ属型



ヨシ属



ネザサ節型



クマザサ属型

プラントオパールの顕微鏡写真　―――――― 50μm

Ⅶ　富沢遺跡（第123次）発掘調査報告書

1　調査要項

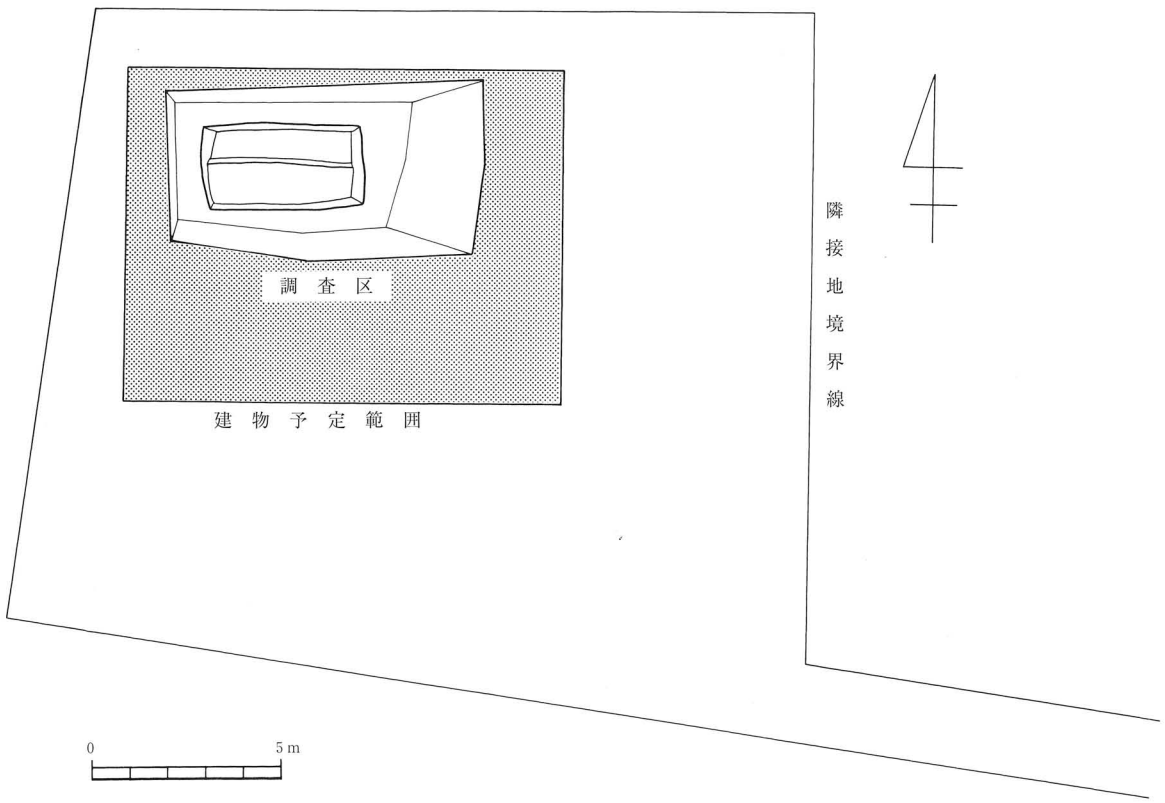
遺 跡 名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）	調査面積	28㎡
調査地点	太白区長町南一丁目 108－4、108－6の一部	調査原因	個人住宅建設
		調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査期間	平成14年9月24日～9月25日	担当職員	教諭　豊村幸宏
調査対象面積	102㎡		

2　遺跡の位置と環境

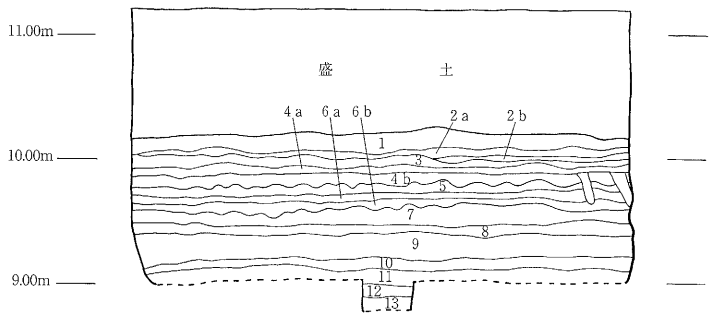
遺跡の環境については、第122次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、平成3年から平成4年に実施された77次調査区の南側に隣接し、遺跡東部の住宅地に当たり、標高は約11mである。

3　調査に至る経過と調査方法

平成14年8月30日付けで佐藤幸人氏より仙台市太白区長町南一丁目108－4、108－6の一部に於ける柱状地盤改良工事を伴う木造2階建個人住宅建築工事に係わる発掘届が提出された（教生文第4－133号で回答）。これを受けて平成14年9月24日に、建物予定地内に東西7m、南北4mの調査区を設定して調査を実施した。調査地内は1.1mの盛土に覆われていたことから、盛土下で東西4m、南北2mに調査区を縮小した。北側では13層まで断面調査を実施し、南側では5層上面まで遺構検出作業を行った。安全面に配慮して現地表下から2.2m掘り下げたところで調査を終了した。



第82図　調査区配置図（1/200）



土層No.	土　色	土　性	備　考
1	5Y3/1　オリーブ黒色	シルト質粘土	酸化鉄筆管状、マンガン斑、木炭粒、砂粒を含む。旧水田耕作土。
2a	7.5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	酸化鉄筆管状、マンガン斑、木炭粒、砂粒を含む。水田土壌。
2b	7.5Y4/1　灰色	粘土	酸化鉄筆管状、マンガン斑、木炭粒、砂粒を含む。水田土壌。
3	5Y3/1　オリーブ黒色	シルト質粘土	酸化鉄粒、マンガン粒、灰白色火山灰ブロック少量含む。水田土壌。
4a	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒、木炭粒、灰白色火山灰ブロックを含む。水田土壌。
4b	10YR3/2　黒褐色	粘土	5層ブロック、酸化鉄粒、木炭粒、灰白色火山灰ブロックを含む。水田土壌。
5	10YR5/3　にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む。
6a	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒を含む。

土層No.	土　色	土　性	備　考
6b	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒、7層ブロックを含む。水田土壌。
7	10YR6/3　にぶい黄橙色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒、木炭粒を含む。
8	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒、マンガン粒、木炭粒を含む。水田土壌。
9	2.5Y6/3　にぶい黄色	粘土	酸化鉄斑・粒、マンガン粒、木炭粒を含む。
10	2.5Y5/3　黄褐色	粘土	酸化鉄斑、マンガン粒を含む。
11	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	2.5Y5/2黄灰色粘土、10YR7/1黒色泥炭質粘土を縞状に含む。
12	7.5Y5/1　灰色	粘土	酸化鉄斑、木炭粒を含む。
13	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	木炭粒を含む。

第83図　調査区北壁断面図

4　基本層序

区画整理の際の盛土が1.1mあり、その下に旧表土の水田耕作土（1層）がある。調査区で確認した基本層は、盛土下から標高8.8mまで大別13層、細別16層である。

1　層：オリーブ黒色シルト質粘土。層厚は7～17cmである。下面は緩やかに起伏している。

2a層：オリーブ黒色粘土。層厚は3～10cmである。下面は緩やかに起伏している。

2b層：灰色粘土。層厚は2～6cmである。調査地点の東側で3層に食い込むようにして検出された。

3　層：オリーブ黒シルト質粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は2～10cmである。下面は緩やかに起伏している。

4a層：灰黄褐色シルト質粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は2～8cmである。下面は平坦である。層上面に厚さ1～2cmの酸化鉄集積層がある。

4b層：黒褐色粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は6～12cmである。下面は凹凸が著しく、5層土を巻き上げている。

5　層：にぶい黄褐色粘土。層厚は3～10cmである。上面は4b層の攪拌によって凹凸が著しい。下面は平坦である。

6a層：灰黄褐色粘土。層厚は4～10cmである。下面は平坦である。

6b層：灰黄褐色粘土。層厚は3～12cmである。下面は凹凸が著しく、7層土を巻き上げている。

7　層：にぶい黄橙色粘土。層厚は7～20cmである。上面は6b層の攪拌によって凹凸が著しい。下面は一部に凹凸がある。

8　層：灰黄褐色粘土。層厚は4～12cmである。下面は緩やかに起伏している。

9　層：にぶい黄色粘土。層厚は16～28cmである。下面は起伏がないが西側で落ち込んでいる。

10　層：黄褐色粘土。層厚は5～10cmである。下面は緩やかに起伏しており、西側で落ち込んでいる。

11　層：黄灰色粘土。暗灰黄色粘土と黒色泥炭質粘土を縞状に含む。層厚は12cmである。下面は平坦である。

12　層：灰色粘土。層厚は８～12cmである。下面は平坦である。

13　層：オリーブ黒色粘土。層厚は10cm以上である。

5　まとめ

１）水田耕作土

調査の結果、畦畔状の高まりなどの水田にかかわる遺構は確認されなかった。なお、北側に隣接する第77次調査区では、中世の竪穴遺構、掘立柱建物跡、溝跡などの遺構が多数検出され木簡や烏帽子などの遺物が出土しているが、今回の調査では当該期の遺構は発見されなかった。断面観察から、下面の凹凸と直下層を起源とするブロックの混在により、現代の水田耕作土の１層を除いた２ａ層、２ｂ層、３層、４ａ層、４ｂ層、６ｂ層、８層が水田層と考えられる。年代的には10世紀前半に降下したと言われている灰白色火山灰をブロック状に層中に含む４ｂ層が、降灰直後の水田層と考えられることから、２ａ～４ａ層は10世紀前半以降近・現代以前の時間幅に収まるものと捉えられる。このうち、２ａ・２ｂ層については、層中に灰白色火山灰を含まず、火山灰降下直後に復旧された水田耕作土ではないこと、第77次調査の２ｂ層・３ａ層との対応が考えられることから近世～現代に、３層・４ａ層についてはいずれも火山灰小ブロックを含み、火山灰降下以降連続して耕作が続けられていたことが想定されることから平安時代中葉～中世頃の年代が考えられる。６ｂ層と８層については、それぞれ第77次調査の８ｂ層と10層に対応するものと考えられ、概ね、古墳時代から奈良時代までの年代に位置付けられる。

２）まとめ

①　今回の調査は、富沢遺跡の東部、第77次調査区の南側に隣接する地点で実施した。

②　調査を実施した深さ約２mの地層は大別13層、細別16層に分けられた。

③　現代の水田耕作土層である１層を除き、２ａ、２ｂ、３、４ａ、４ｂ、６ｂ、８層が水田耕作土層と考えられる。

④　水田の年代は、２ａ・２ｂ層が近世～現代、３・４ａ層が平安時代中葉～中世、４ｂ層が10世紀前半頃、６ｂ・８層が古墳時代～奈良時代に所属するものと考えられる。

引用・参考文献

阿子島功（1991）：「東北地方　10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』

五十嵐康洋（1991）：「富沢遺跡第77次調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（４）』仙台市文化財調査報告書第163集

太田昭夫（1991）：「富沢遺跡第30次調査報告書第Ⅰ分冊（縄文～近世）」仙台市文化財調査報告書第149集

斎野裕彦（1987）：「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集

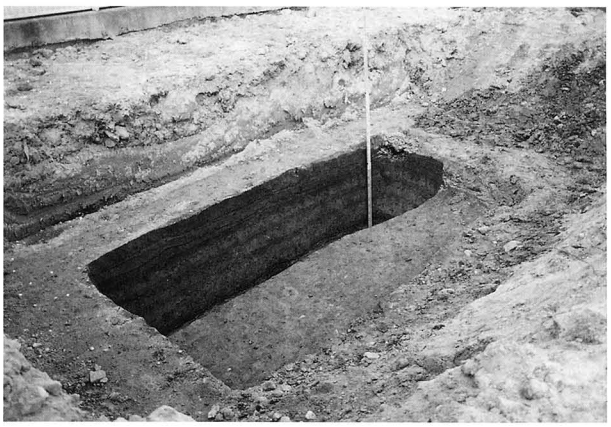
庄子貞雄・山田一郎（1980）：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』

東日本の水田跡を考える会（1990）：「水田跡の基本的理解－水田跡の検出と認定」『第３回東日本の水田跡を考える会－資料集』

平間亮輔（1989）：「富沢遺跡35次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第150集

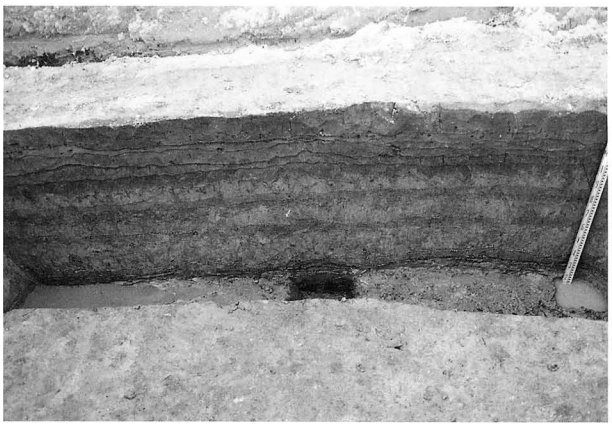
1　調査前風景（南東より）

2　4ａ層上面検出状況（南より）

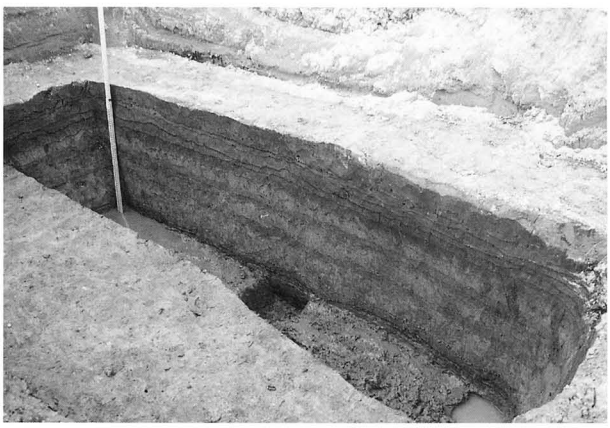


3　4ｂ層上面検出状況（南西より）

4　5層上面検出状況（西より）

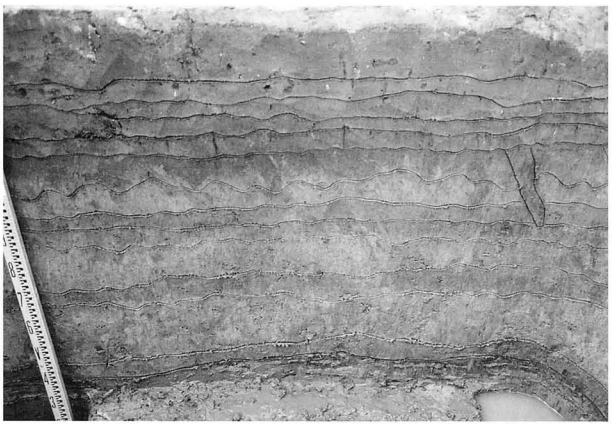


5　北壁断面（南より）



6　北壁断面（南東より）

7　北壁断面西半部（南より）



8　北壁断面東半部（南より）

図版42　調査状況・土層断面

Ⅷ　富沢遺跡（第124次）発掘調査報告書

1　調査要項

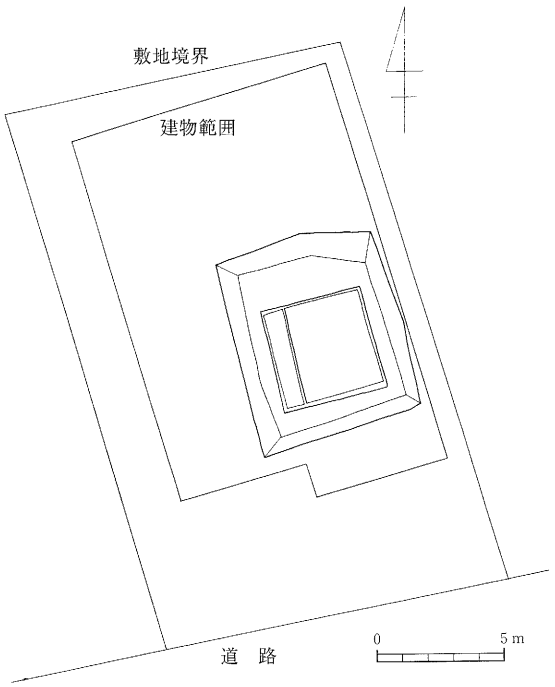
遺跡名	富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）	調査原因	共同住宅建築
調査地	仙台市太白区鹿野三丁目223－13	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査期間	平成14年10月22日～10月24日	担当職員	主　任　　渡部　紀
調査対象面積	156㎡		文化財教諭　加藤徳明
調査面積	42㎡		

2　遺跡の位置と環境

遺跡の環境については、本報告書所収の富沢遺跡第122次調査報告及び既刊の富沢遺跡報告書を参照されたい。今回の調査地点は平成２年にそれぞれ調査を実施した第60次調査区の西側、第61次調査区の北側に隣接し、標高は約12mである。

3　調査に至る経過と調査方法

平成14年９月３日付で菅井幸子氏より仙台市太白区鹿野三丁目223－13における共同住宅建築工事に係わる発掘届が提出された。これを受けて平成14年10月22日に、建物予定地内に東西６m、南北７mの調査区を設定した。７層まで平面的に調査し、それ以下は断面観察にとどめた。安全面に配慮して現地表下から約２m掘り下げたところで調査を終了した。



第84図　調査区配置図

4　基本層序

区画整理の際の盛土が約１mあり、その下に旧表土の水田耕作土（１層）がある。調査区で確認した基本層は盛土下から標高約10mまで11層である。

１層：褐灰色の粘土質シルト。層厚は５～13cmである。旧水田耕作土。

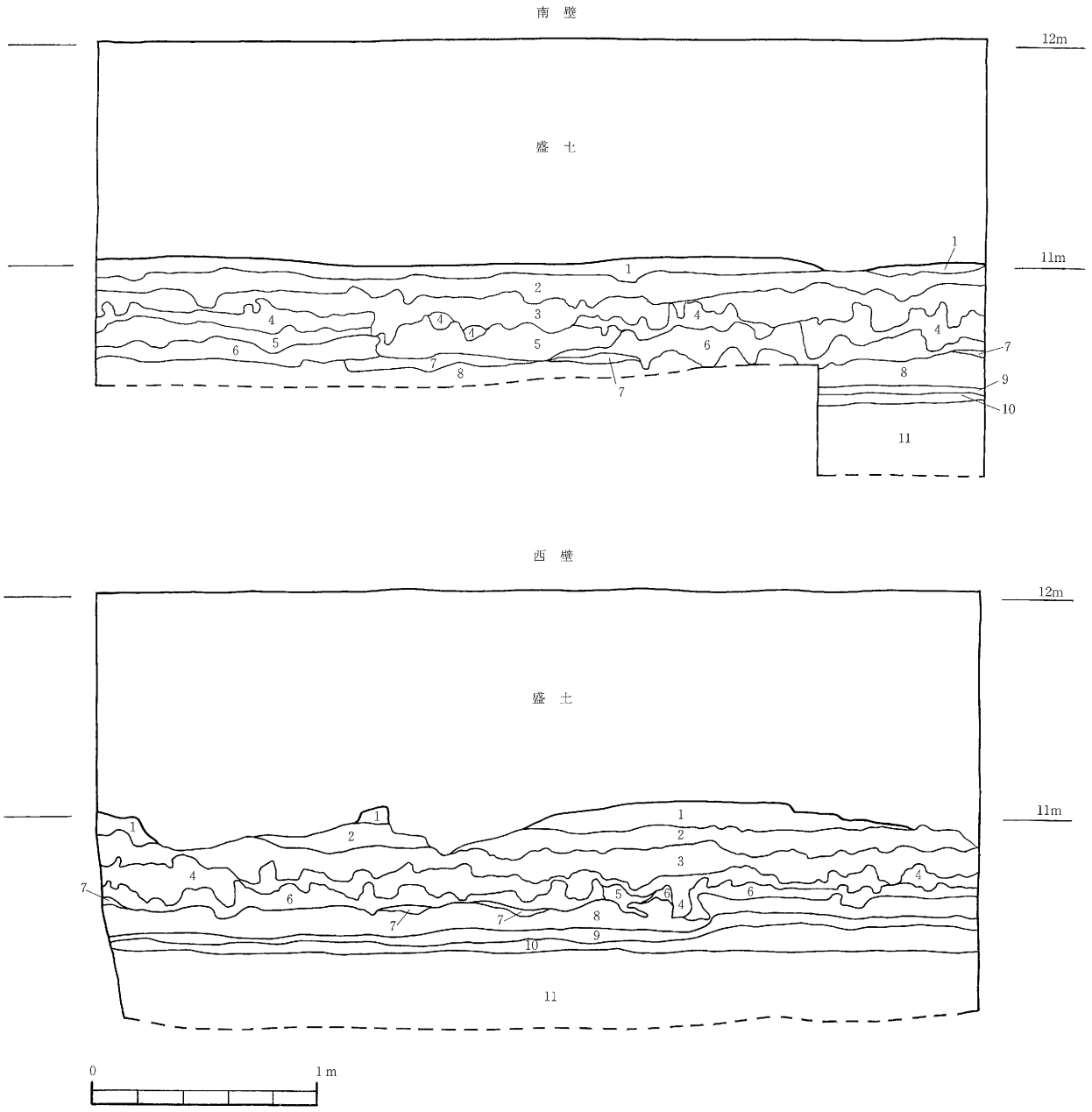
２層：褐灰色の粘土。層厚は４～16cm。下面はやや起伏がある。水田耕作土。

３層：褐灰色の粘土。灰白色火山灰ブロックを少量含む。層厚は４～25cm。下面は著しい起伏がある。水田耕作土。

４層：褐灰色の粘土。灰白色火山灰ブロックを少量含む。層厚は２～19cm。下面は著しい起伏がある。水田耕作土。

５層：暗灰黄色の泥炭質粘土。下面はやや起伏がある。層厚は６～17cm。水田耕作土の可能性がある。

６層：にぶい黄褐色の泥炭質粘土。層厚は２～16cmやや起伏がある。自然堆積層の可能性がある。



土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR7/1　褐灰色	粘土質シルト	砂粒少量　下面に酸化鉄集積　旧水田耕作土
2	10YR6/1　褐灰色	粘土	細砂少量　下面にやや起伏　水田耕作土
3	10YR4/1　褐灰色	粘土	灰白色火山灰ブロック少量　下面に著しい起伏　水田耕作土
4	10YR7/1　褐灰色	粘土	灰白色火山灰ブロック少量　下面に著しい起伏　水田耕作土
5	2.5Y5/2　暗灰黄色	泥炭質粘土	下面にやや起伏　水田耕作土？
6	10YR4/3　にぶい黄褐色	泥炭質粘土	やや起伏　自然堆積層？
7	10YR6/4　にぶい黄橙色	泥炭	植物遺体　8層のブロックわずか　自然堆積層
8	10YR2/1　黒色	泥炭	植物遺体　自然堆積層
9	10YR4/1　褐灰色	泥炭質粘土	水田耕作土？
10	10YR3/1　黒褐色	泥炭質粘土	自然堆積層？
11	10YR4/2　灰黄褐色	泥炭	植物遺体　粘土分少量　自然堆積層

第85図　調査区南壁・西壁断面図

7層：にぶい黄橙色の泥炭。植物遺体、8層のブロックをわずかに含む。層厚は2～6cm。部分的に堆積している。自然堆積層。

8層：黒色の泥炭。植物遺体を含む。層厚は5～15cm。自然堆積層。

9層：褐灰色の泥炭質粘土。層厚は3～8cm。水田耕作土の可能性がある。

10層：黒褐色の泥炭質粘土。層厚は4～13cm。自然堆積層の可能性がある。

11層：灰黄褐色の泥炭。植物遺体を含み、粘土分は少量である。層厚は32cm以上である。自然堆積層。

5　まとめ

1．断面観察の結果、現代の水田耕作土である1層を除き、2、3、4、5、9層が水田耕作土と考えられる。これまでの富沢遺跡の調査で検出されている、平安時代の条里型水田の大畦畔が今回の調査区で検出されると推定し、2から6層まで平面的に精査したが、畦畔状の高まり等は確認されなかった。6層を掘り下げていく過程で南西隅部で5層が帯状に下がる状況がみられた。また、9層では断面観察のみであるが、高さ6cm程の段差がみられた。

2．今回の調査区での土層と第60次・第61次調査の成果と対応させたのが以下の表である。

第4表　富沢遺跡第124次・60次・61次調査区層位対応表

第124次		第60次		第61次		所属年代
層　位	検出遺構	層　位	検出遺構	層　位	検出遺構	
2	水田耕作土	3	水田耕作土	3	水田耕作土	近世
3	水田耕作土	4	畦畔	4	水田耕作土	中世
4	水田耕作土	5	水田耕作土	5	畦畔	平安時代（灰白色火山灰降下以後）
5	水田耕作土	6	畦畔	6	畦畔	平安時代（灰白色火山灰降下以前）
9	水田耕作土	12	水田耕作土	12	水田耕作土	

参考文献

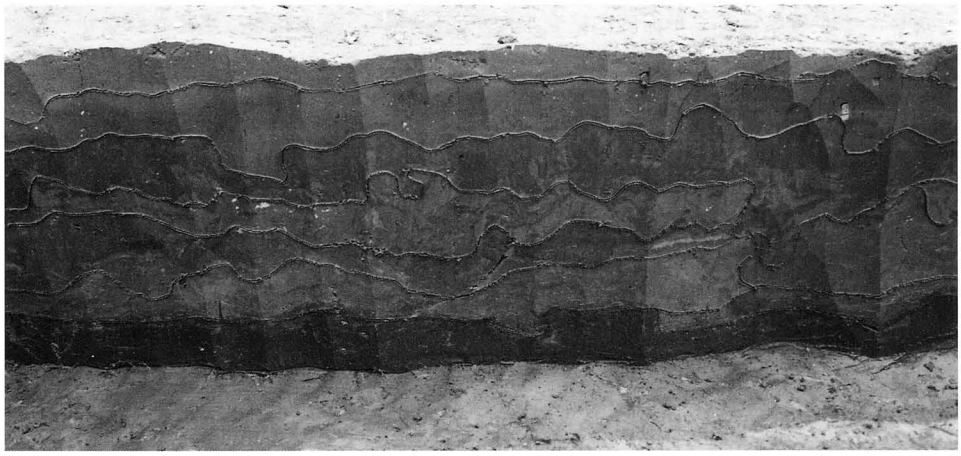
太田昭夫他（1991）：「富沢遺跡第30次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第149集

佐藤甲二（1991）：「富沢遺跡第61次発掘調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告書第152集

平間亮輔（1991）：「富沢遺跡第35次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第150集

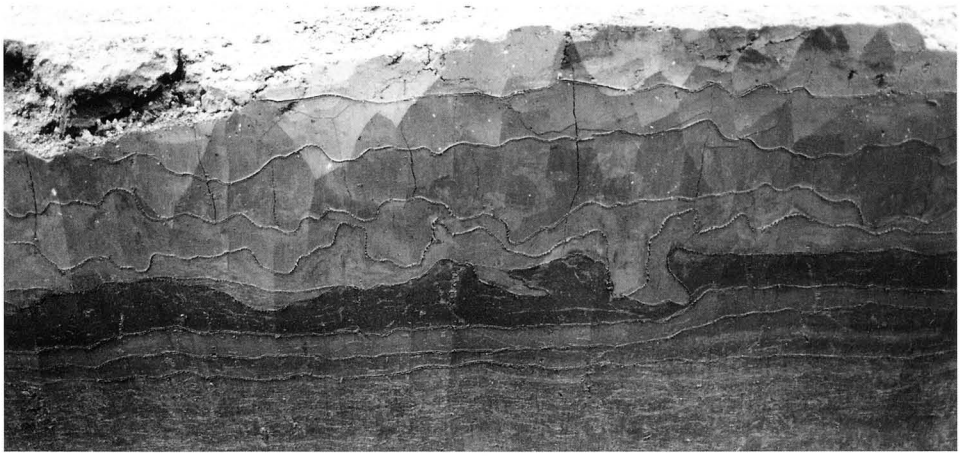
平間亮輔（1991）：「富沢遺跡第60次発掘調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告書第152集

1　調査区７層上面検出状況（西より）



2　調査区南壁断面東部
（北より）

3　調査区南壁断面西部
（北より）



4　調査区西壁断面
（東より）

図版43　調査区７層調査状況と南壁・西壁断面

Ⅸ　富沢遺跡（第125次）発掘調査報告書

1　調査要項

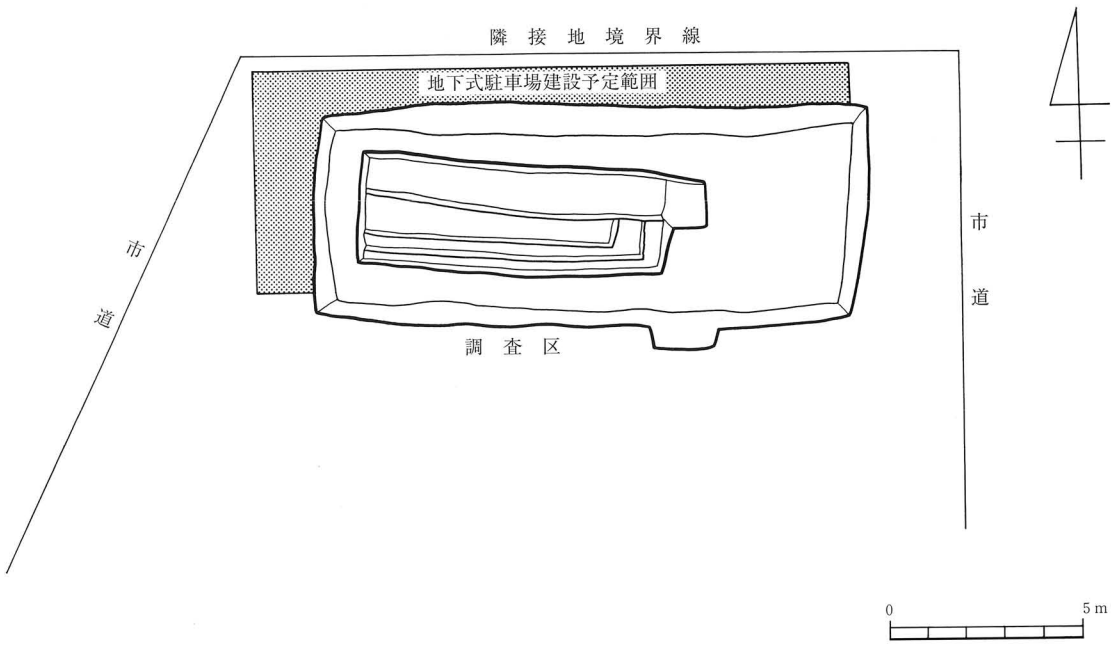
遺 跡 名　富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調査地点　太白区泉崎一丁目
　　2番2、2番9、2番11
調査期間　平成14年12月10日～12月17日
調査対象面積　350㎡
調査面積　22㎡
調査原因　共同住宅・地下式駐車場建設
調査主体　仙台市教育委員会（文化財課）
担当職員　主　任　　渡部　紀

2　遺跡の位置と環境

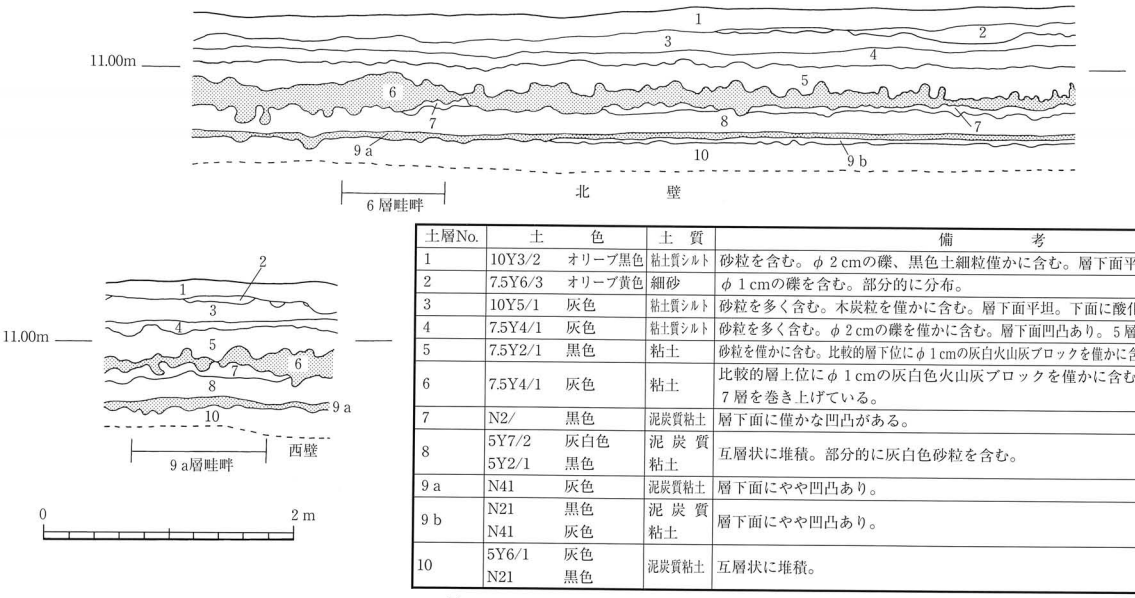
富沢遺跡の環境については、第122次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、昭和60年に実施した第19次調査区の北側に隣接している。富沢遺跡保存館からは西側150mの地点にあたり、遺跡のほぼ中央部に位置する。標高は約12.5mである。

3　調査に至る経過と調査方法

平成14年11月26日付けで住友不動産株式会社より仙台市太白区泉崎一丁目2番2他に於ける発掘届が提出された。申請地内では昭和60年に第19次調査を実施しており、人足跡、牛足跡を伴った水田跡や弥生土器、石鏃等の遺物が発見されている。このため申請者と協議し、既存の建物を除いた地下式駐車場の建設箇所で事前調査を実施することとした。建設予定地内に東西15m、南北5mの調査区を設定して調査を実施した。調査地点は、厚さ1.1～1.2mの盛土がされていたため、盛土を除去した後、調査区を東西8m、南北2.5mに縮小し、遺構検出作業と断面調査を行った。安全面に配慮して現地表下から2.2～2.3m掘り下げた10層中で調査を終了した。



第86図　調査区配置図（1/200）



土層No.	土　色		土　質	備　考
1	10Y3/2	オリーブ黒色	粘土質シルト	砂粒を含む。φ2cmの礫、黒色土細粒僅かに含む。層下面平坦。
2	7.5Y6/3	オリーブ黄色	細砂	φ1cmの礫を含む。部分的に分布。
3	10Y5/1	灰色	粘土質シルト	砂粒を多く含む。木炭粒を僅かに含む。層下面平坦。下面に酸化鉄の集積層あり。
4	7.5Y4/1	灰色	粘土質シルト	砂粒を多く含む。φ2cmの礫を僅かに含む。層下面凹凸あり。5層を巻き上げている。
5	7.5Y2/1	黒色	粘土	砂粒を僅かに含む。比較的層下位にφ1cmの灰白火山灰ブロックを僅かに含む。層下面凹凸あり。
6	7.5Y4/1	灰色	粘土	比較的層上位にφ1cmの灰白色火山灰ブロックを僅かに含む。層下面凹凸あり。7層を巻き上げている。
7	N2/	黒色	泥炭質粘土	層下面に僅かな凹凸がある。
8	5Y7/2 5Y2/1	灰白色 黒色	泥炭質 粘土	互層状に堆積。部分的に灰白色砂粒を含む。
9 a	N41	灰色	泥炭質粘土	層下面にやや凹凸あり。
9 b	N21 N41	黒色 灰色	泥炭質 粘土	層下面にやや凹凸あり。
10	5Y6/1 N21	灰色 黒色	泥炭質粘土	互層状に堆積。

第87図　調査区北壁・西壁断面図

4　基本層序

区画整理の際の盛土が1.1～1.2mあり、その下に旧表土の水田耕作土（1層）がある。調査区で確認した基本層は、盛土下から標高10.2mまで大別10層、細別11層である。

1　層：オリーブ黒色粘土質シルト。層厚は13～21cmである。下面は平坦である。盛土以前の水田耕作土である。（19次1a～1b層）

2　層：オリーブ黄色細砂。層厚は2～10cmである。部分的に分布している。（19次2a～2c層）

3　層：灰色粘土質シルト。層厚は8～15cmである。層下面に厚さ3cm程の酸化鉄集積層を含む。（19次3a層）

4　層：灰色粘土質シルト。層厚は4～15cmである。層下面に起伏があり5層を巻き上げている。（19次3b層）

5　層：黒色粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は20～30cmである。下面に起伏がある。（19次4～5a層）

6　層：灰色粘土。灰白色火山灰小ブロックを含む。層厚は6～26cmである。下面は凹凸が著しく、7層を巻き上げている。（19次5b層）

7　層：黒色泥炭質粘土。層厚は3～12cmである。下面に僅かな起伏がある。（19次6層）

8　層：灰色泥炭質粘土と黒色泥炭質粘土の互層。層厚は2～3cmである。（19次7a層）

9a層：灰色泥炭質粘土。層厚は3～8cmである。下面にやや凹凸がある。（19次7b層）

9b層：上部黒色泥炭質粘土、下部灰色泥炭質粘土。層厚は2～7cmである。9a層の母材層と思われる。（19次8a、9a層）

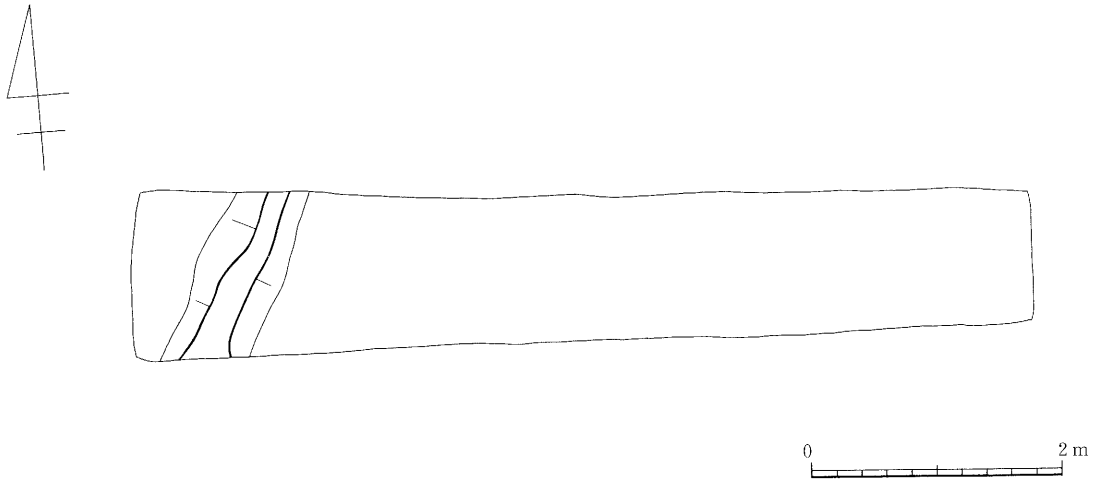
10　層：灰色泥炭質粘土と黒色泥炭質粘土の互層。層厚は24cm以上である。（19次9d～9e層）

5　発見遺構と出土遺物

水田跡

6層水田跡

5層を掘り込んだ段階で6層の盛り上がりを調査区の西端で帯状に検出し、6層に伴う畦畔と認定した。標高は、10.8～10.9m前後で調査区の東側にいくほど低い。畦畔の方向はN－29°－Eで、上端幅16～34cm、下端幅54～70

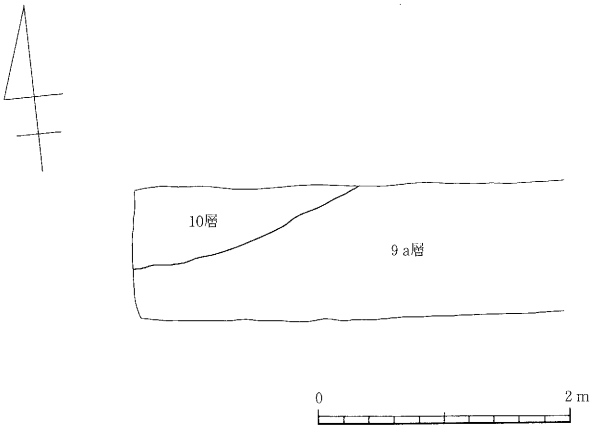


第88図　6層水田跡

cmを測る。畦畔は6層を盛り上げて作られており、断面形は台形状を呈する。作土との比高差は10～15cmである。畦畔の上面には灰白色火山灰ブロックが見られる。作土は6層を母材とする灰色粘土からなり、層厚は6～26cmで上面に灰白色火山灰ブロックを含む。層下面は耕作により攪拌されており7層を巻き上げている。

9a層水田跡

9a層を掘り込む過程で、調査区の北西コーナー部に10層が確認された。このことから本来この部分に9a層に伴う畦畔が存在し、その直下で擬似畦畔Bを検出したものと想定された。畦畔は、E－15°－Nのほぼ東西方向に延びるものと考えられる。作土は自然堆積層の9b、10層を母材とする灰色泥炭質粘土で下面にはやや起伏がある。9a層上面から同一石材からなる二次加工のある剥片1点（K－1）と剥片2点（K－2、K－3）が出土した。材質は硅質凝灰岩である。

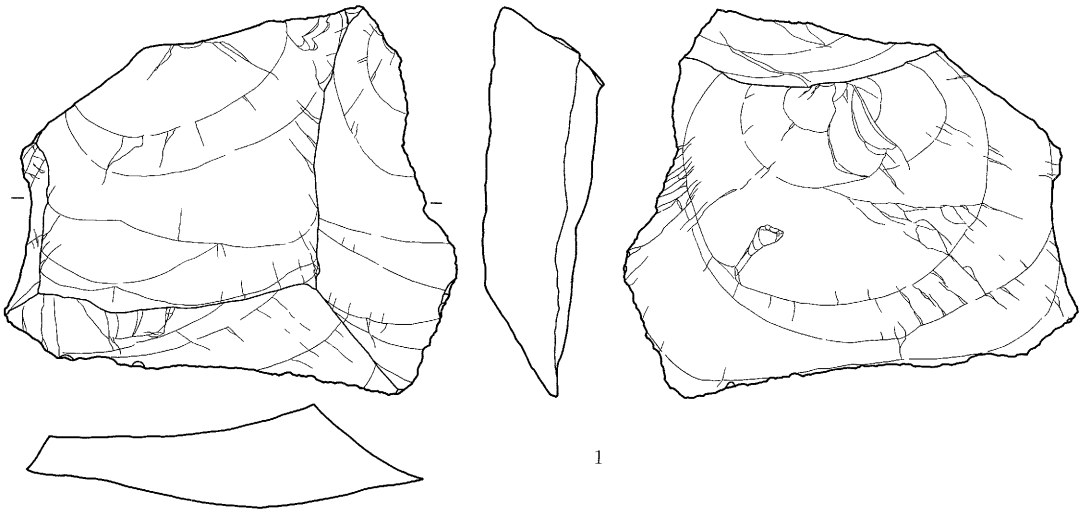


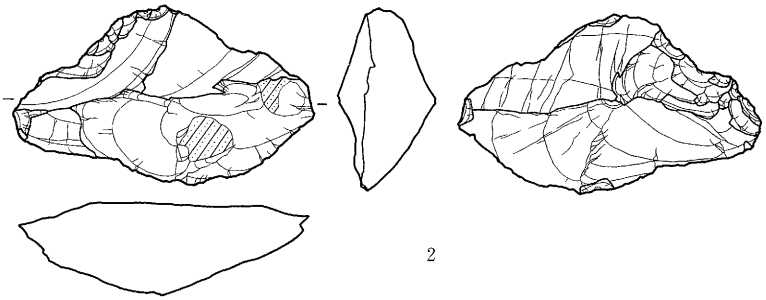
第89図　9a層擬似畦畔

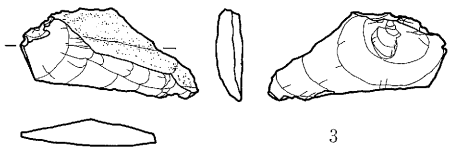
6　まとめ

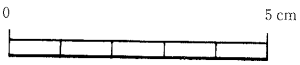
1）水田耕作土

調査の結果、6層において畦畔1条を、9a層で擬似畦畔Bを検出した。これ以外の層で水田土壌の可能性のある層としては、断面観察、下面の凹凸並びに直下層を起源とするブロックの混在、酸化鉄の集積等から、現代の水田耕作土の1層を除いた3層、4層、5層が該当するものと考えられる。年代的には10世紀前半に降下したと言われている灰白色火山灰をブロック状に含む6層が、降灰直後の水田層と捉えられることから、3～5層は10世紀後半から近世の時間幅に収まるものと思われる。このうち3、4層については層中に灰白色火山灰を含まず、火山灰降灰直後に復旧された水田耕作土ではないこと、第19次調査の3a、3b層との対応が考えられることから中世～近世に、5、6層についてはいずれも層中に灰白色火山灰ブロックを含み、火山灰降灰以降連続して耕作が続いていた可能性が高いことから平安時代中葉～中世頃の年代が考えられる。9a層については第19次調査の7b層との対応関係を想定し得る。7b層からは桝形囲式期の弥生土器が出土しており弥生時代中期の年代が与えられている。









図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	K－2	石器　剥片		9a層		2	7.7	8.8	2.3	111.4		45－5－1
2	K－1	石器　剥片		9a層		1	3.6	5.9	1.9	24.2	2次加工あり	45－5－2
3	K－3	石器　剥片		9a層			1.8	3.5	0.6	2.2		45－5－3

第90図　9a層出土遺物

よって9a層も当該時期の水田層と推定される。

2）まとめ

① 今回の調査は、富沢遺跡の中央部、第19次調査区の北側に隣接する地点で実施した。

② 調査を実施した深さ約2mの地層は大別10層、細別11層に分けられた。

③ 現代の水田耕作土層である1層を除き、3、4、5、6、9a層が水田耕作土層と考えられる。

④ 水田の年代は、3、4層が中世～近世、5、6層が平安時代中葉～中世、9a層が弥生時代中期頃に所属するものと考えられる。

引用・参考文献

阿小島功（1991）：「東北地方　10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』

太田昭夫（1989）：「富沢遺跡第48次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第128集

太田昭夫（1991）：「富沢遺跡第30次調査報告書第Ⅰ分冊（縄文～近世）」仙台市文化財調査報告書第149集

斎野裕彦（1987）：「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集

鈴木恵治（1982）：「文献資料からみた古代奥羽での天災」『考古風土記』第7号

庄子貞雄・山田一郎（1980）：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』

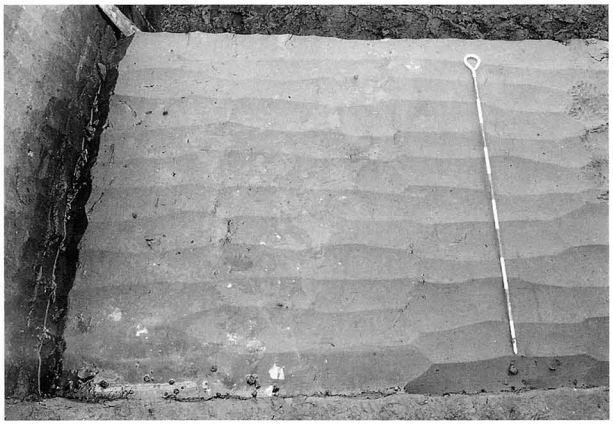
東日本の水田跡を考える会（1990）：「水田跡の基本的理解－水田跡の検出と認定」『第3回東日本の水田跡を考える会－資料集』

平間亮輔（1989）：「富沢遺跡35次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第150集

吉岡恭平（1989）：「富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第126集

1　調査区全景

2　4層上面検出状況

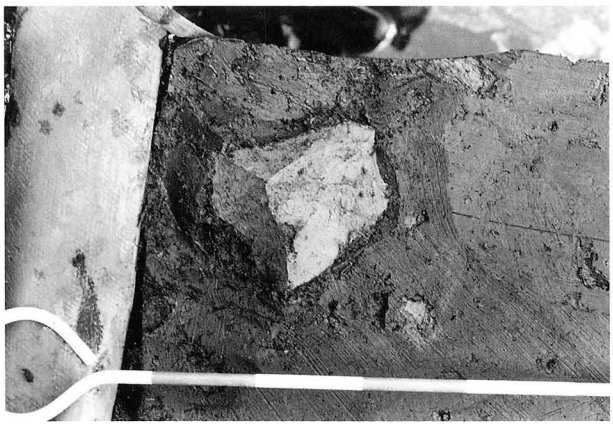


3　6層畦畔検出状況

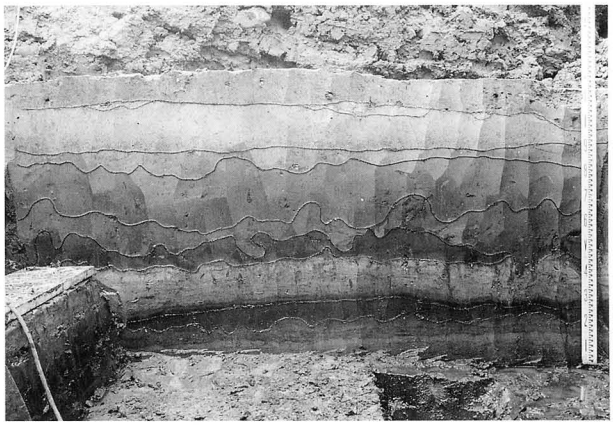
4　6層畦畔

5　9a層上面検出状況

6　9a層擬似畦畔

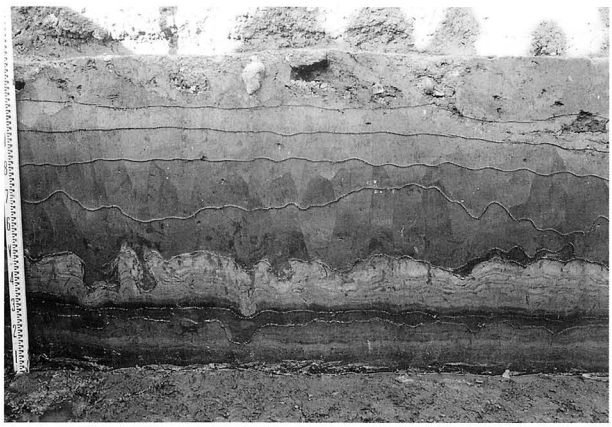


7　9a層上面剥片（K－2）出土状況



8　調査区西壁土層断面

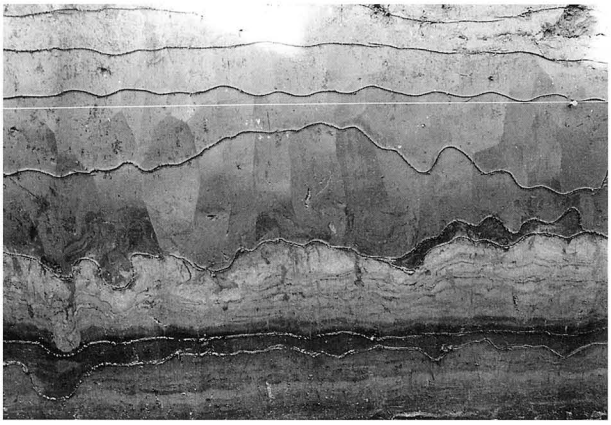
図版44　調査状況・土層断面



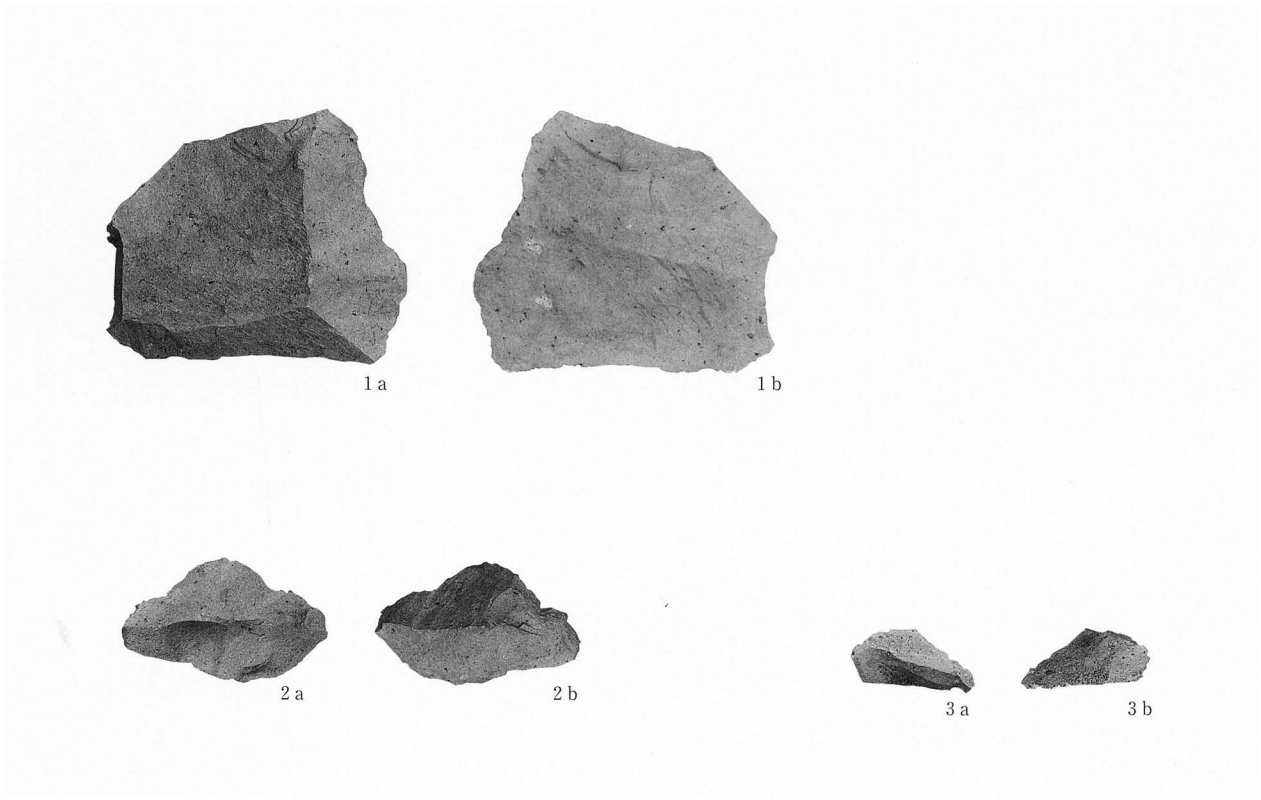
1　調査区北壁土層断面（西半部）

2　調査区北壁土層断面（中央部）

3　調査区北壁土層断面（東半部）



4　調査区北壁６層畦畔



1　剥片　K－2（9a層第90図1）
2　2次加工剥片　K－1（9a層第90図2）
3　剥片　K－3（9a層第90図3）

5　9a層出土石器

図版45　土層断面・出土遺物

X　南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号012021）
調 査 地 点　　仙台市若林区一本杉町26－１、26－２
調 査 原 因　　貸店舗及び共同住宅建設
調査対象面積　　約410㎡
調 査 面 積　　約180㎡
調 査 期 間　　確認調査：平成14年３月14・15日
　　本 調 査：平成14年４月15日～５月２日
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育委員会（文化財課）
担 当 職 員　　確認調査：主査　吉岡恭平
　　本 調 査：主査　渡部弘美
　　文化財教諭　三塚博之
申　請　者　　渡邉龍彦

第91図　調査地点と調査区配置

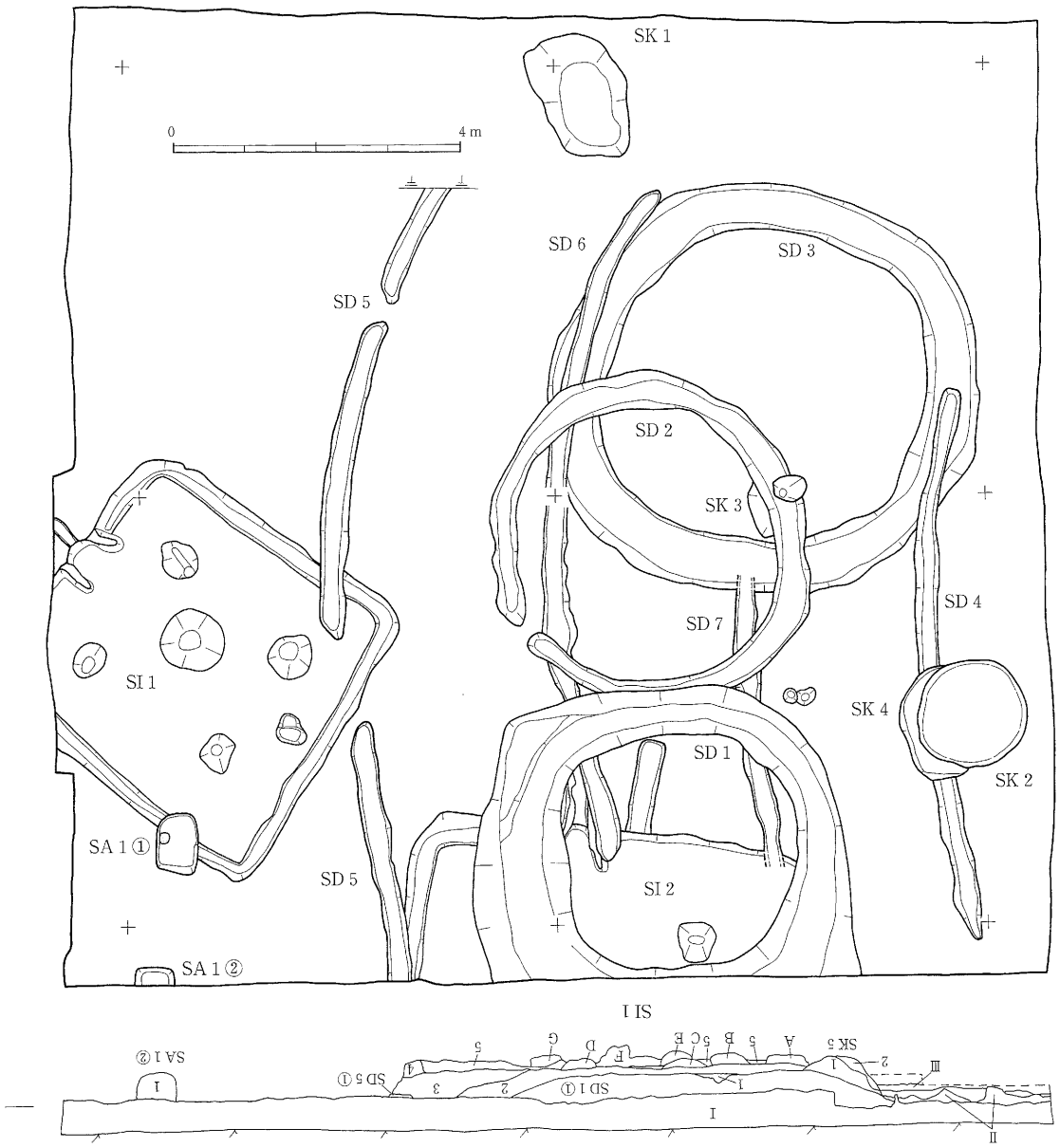
2　遺跡の位置と環境

南小泉遺跡は市域東部の若林区南小泉・遠見塚地区に位置し、東流する広瀬川北岸の自然堤防上に立地する。昭和10年代には遺跡の存在が周知されていたが、本格的な調査が開始されたのは昭和50年代に入ってからのことで今回で37回目を数える。各次調査で縄文時代から近世にわたる遺構・遺物が確認されているが、発見された主たる遺構をみると大きく各地域で時代的な違いがみられる。これは中心となる地域が時間的な経緯とともに変遷していることに起因しているものと考えられる。

今回の調査区は遺跡北西側に位置し、第28次調査区東端の北側となる。第28次調査では奈良時代の住居跡群・土坑・溝跡・旧七郷堀が検出されている。

3　調査方法

当調査地点の南側では都市計画街路建設に係わる南小泉遺跡第28次調査が行われており、古代を中心とする集落跡が発見されていた。隣接地でもあり遺構群の広がりも想定されたことから、確認調査を実施することとし、建物範囲内に２×20mのトレンチを東西方向に２本設定している。結果、住居跡や溝跡が確認されされたため申請者と協議を行い記録保存としての本調査を実施することとなった。調査は遺構分布や排土を考慮し、建物範囲西側を中心とした14×14mの調査区を設定した。実質12日間の調査であった。



南壁部	層位	土色	土性	備考
基本層	Ⅰ	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	耕作土。
	Ⅱ	10YR3/4 暗褐色	シルト	耕作土？
	Ⅲ	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	今回調査地山面。
SD 1	①	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を多く含む。
SK 5	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	黄褐色土をスジ状に含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	
SA 1 ①	1	10YR3/4 褐色	粘土質シルト	
SI 2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物を少量含む。

南壁部	層位	土色	土性	備考
SD 2	4	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	周溝部。
	5	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	掘り方埋土、上部に炭化物・焼土を含む。
	A	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む。
	B	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む。
	C	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む、底面に炭化物を含む。
	D	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	焼土の小ブロックを含む。
	E	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む。
	F	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物をブロック状に含む。
	G	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを含む。
SD 5	①	10YR4/6 褐色	シルト	

第92図　検出遺構全体図

4　発見遺構と出土遺物

検出遺構として土坑５基、溝跡４条、円形周溝遺構３基、竪穴住居跡２軒、柱穴２基、ピット４基がある。出土遺物は整理箱５箱程で、多くの遺物は住居跡出土のものである。基本層は３層確認している。Ⅰ層は畑の耕作土で40～50cmの厚さをもつ。Ⅱ層は南壁東側のみでの確認で暗褐色土のシルトである。層下部が凹凸となっており耕作土の可能性もある。SD１・SK５の確認面となりうる。Ⅲ層は暗褐色および褐色のシルト・粘土質シルトで今回調査の地山面となる。すべての遺構はⅢ層面での確認である。

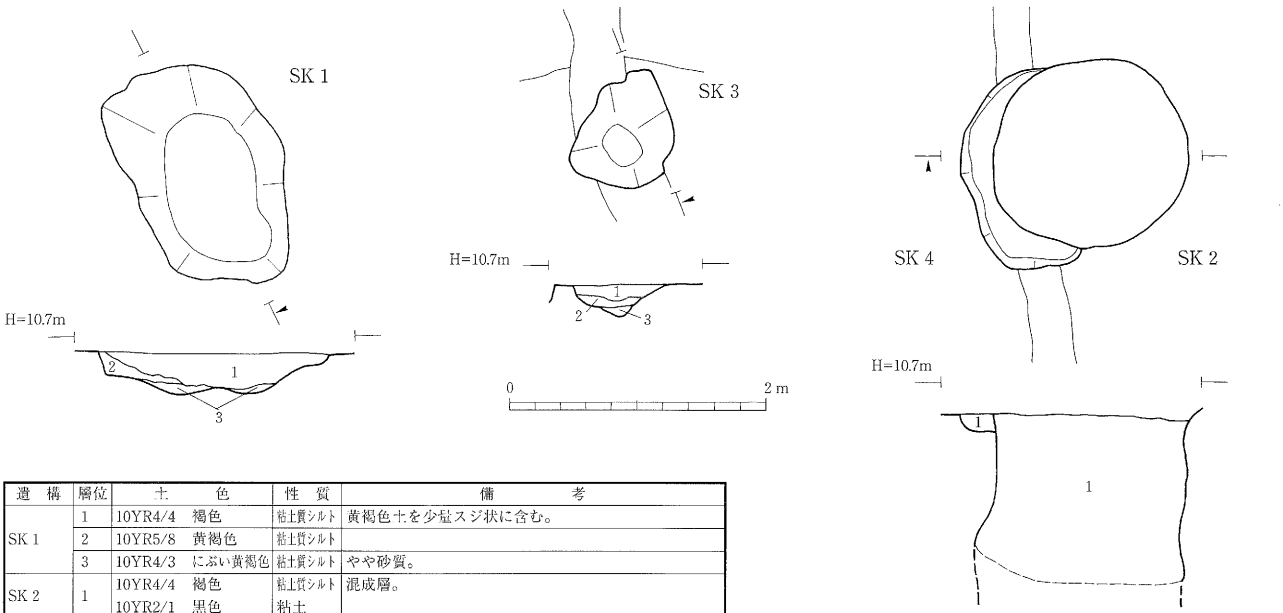
１）土坑

SK１土坑　平面形はやや不整な長円形である。大きさは長軸190cm、短軸120cm、深さ最深で38cmを測る。断面形はきつく立ち上がる箇所もみられるが大きくみて皿形である。底面は全体的に凹凸面で平坦面はみられない。堆積土は３層確認している。褐色系の粘土質シルトである。レンズ状の堆積状況がみられ自然堆積と判断される。遺物として土師器片が十数点出土している。

SK２土坑　平面形は円形である。大きさは径150～157cmを測る。深さは153cmまで確認した。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、下部はオーバーハング状となっていた。堆積土は上部の１層のみの確認に止めており、褐色及び黒色の混成層で粘土質土壌である。形状等から井戸跡と判断される。SK４を切っている。遺物は１層上部で志野のⅢ及び土師器片が出土している。

SK３土坑　P１及びSD３に切られており平面形は不整な円形状である。大きさは長軸96cm、短軸78cm、深さ最深で25cmを測る。断面形はやや口の開いたＶ字形である。堆積土は３層確認している。褐色系のシルトである。自然堆積と考えられる。遺物は土師器片が数点出土したのみである。

SK４土坑　SK２に切られ平面形は不明であるが、残存部からみて長円形を呈すると判断される。大きさは南北軸で156cm、深さ最深で17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は１層確認し暗褐色の粘土質シルトである。遺物はない。



遺　構	層位	土　　色	性　質	備　　考
SK 1	1	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	黄褐色土を少量スジ状に含む。
	2	10YR5/8　黄褐色	粘土質シルト	
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	やや砂質。
SK 2	1	10YR4/4　褐色 10YR2/1　黒色	粘土質シルト 粘土	混成層。
SK 3	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	
	2	10YR4/4　褐色	シルト	明黄褐色土を粒状に含む。
	3	10YR4/4　褐色	シルト	やや粘土質、炭化物粒・黄褐色土粒を含む。
SK 4	1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	

第93図　土坑

SK５土坑　調査区南壁面での確認である。詳細は不明であるが土坑と判断した。SD１に切られSI２を切っている。壁面観察ではあるが断面形はゆるい逆台形を呈する。深さは最深で55cmを測る。堆積土は３層確認している。褐色系の粘土質シルトである。自然堆積と考えられる。遺物はない。

No.	層　位	種　別	器　種	特　　徴	口　径	高台径	器　高	残　存	登録
1	1	陶器	皿	志野　トチン１ヶ所確認、口縁部外傾気味	(11.9)	6	2.2	1/5	Ⅰ－１

第94図　SK２土坑出土遺物

２）溝跡

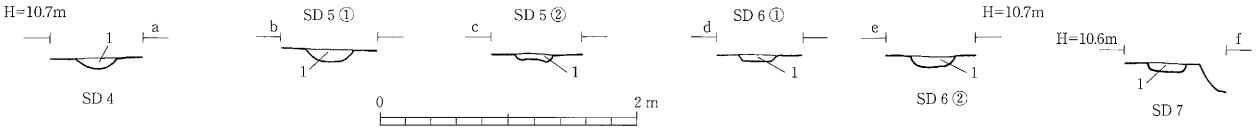
４条確認しているが、各溝跡とも南北方向にゆるい湾曲をもちほぼ並行して延びている。上端幅など規模が同じであることからも一群のものと判断される。

ＳＤ４溝跡　上端幅20～38cm、下端幅10～23cm、深さ４～８cmを測る。確認長は7.8mである。断面形は皿形ないし緩い逆台形である。堆積土は１層で黄褐色のシルトである。SK２・SK４に切られSD３を切っている。西側に位置するSD７とは芯々で2.53m程の間隔をもつ。遺物は土師器片が２点出土したのみである。

ＳＤ５溝跡　上端幅29～38cm、下端幅16～23cm、深さ４～10cmを測る。SI１付近で一端途切れるが一連のものと判断した。確認長は11.4mである。断面形は緩い逆台形である。堆積土は１層で褐色系のシルトである。SI１・SI２を切っている。東側に位置するSD６とは芯々で2.6～3.15m程の間隔をもつ。南側に向かい間隔が広がっている。遺物は土師器片が二十数点出土している。

ＳＤ６溝跡　上端幅25～35cm、下端幅17～23cm、深さ３～７cmを測る。確認長は9.8mである。断面形は逆台形である。堆積土は１層で褐色のシルトである。SD３・SI２を切り、SD１・SD２に切られている。東側に位置するSD７とは芯々で2.25～2.65m程の間隔をもつ。遺物は土師器片が十数点出土している。

ＳＤ７溝跡　両端部が途切れているが、周辺状況等から判断して本来SD３及びSI２を切り南北方向に延びる溝跡と思われる。上端幅20～35cm、下端幅14～22cm、深さ４～７cmを測る。確認長は3.7mである。断面形は緩い逆台形である。堆積土はにぶい黄褐色の粘土質シルトである。SD１・SD２に切られている。遺物は土師器片が４点出土したのみである。



遺　構	層位	土　　色	土　質	備　　考
SD４	1	10YR5/6　黄褐色	シルト	
SD５①	1	10YR4/6　褐色	シルト	
SD５②	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	やや粘土質

遺　構	層位	土　　色	土　質	備　　考
SD６①	1	10YR4/4　褐色	シルト	
SD６②	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	やや粘土質、炭化物・焼土粒を含む。
SD７	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	

第95図　溝跡断面

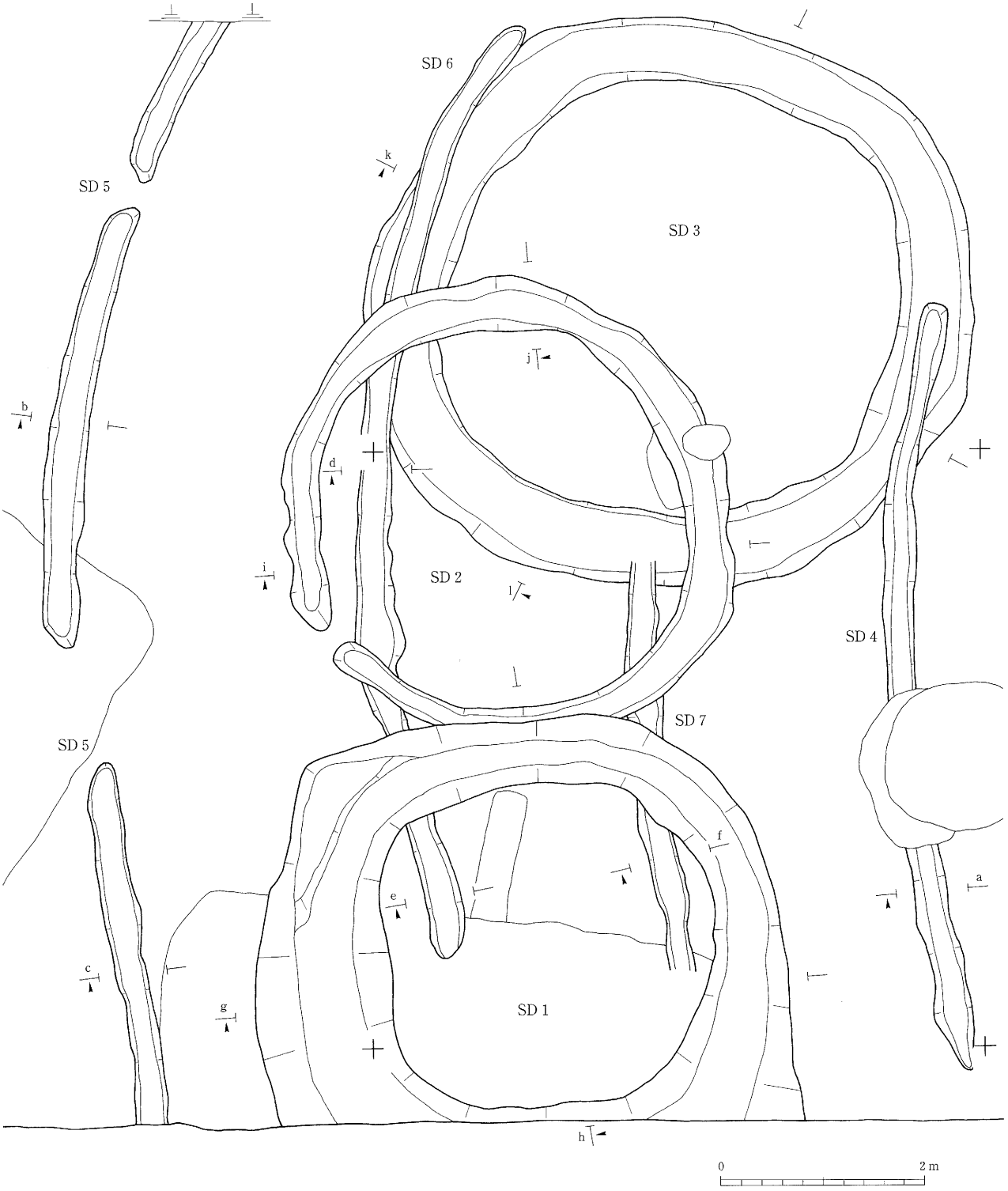
３）円形周溝遺構

SD１円形周溝遺構　大きさは東西軸5.18mを測り、南北軸は４mまで確認した。周溝部は北から南へ向かい幅広気味である。上端幅は63～128cm、下端幅25～55cm、深さ19～34cmを測る。断面形は基本的に逆台形である。堆積土は大別で２層確認している。黄褐色系の粘土質シルトである。自然堆積と判断される。SK５・SD２・SD６・SD７・SI２・P２を切る。遺物は土師器片が数多く出土しているが、本来SI２に帰属するものが大半を占めると思われ分離は不能であった。

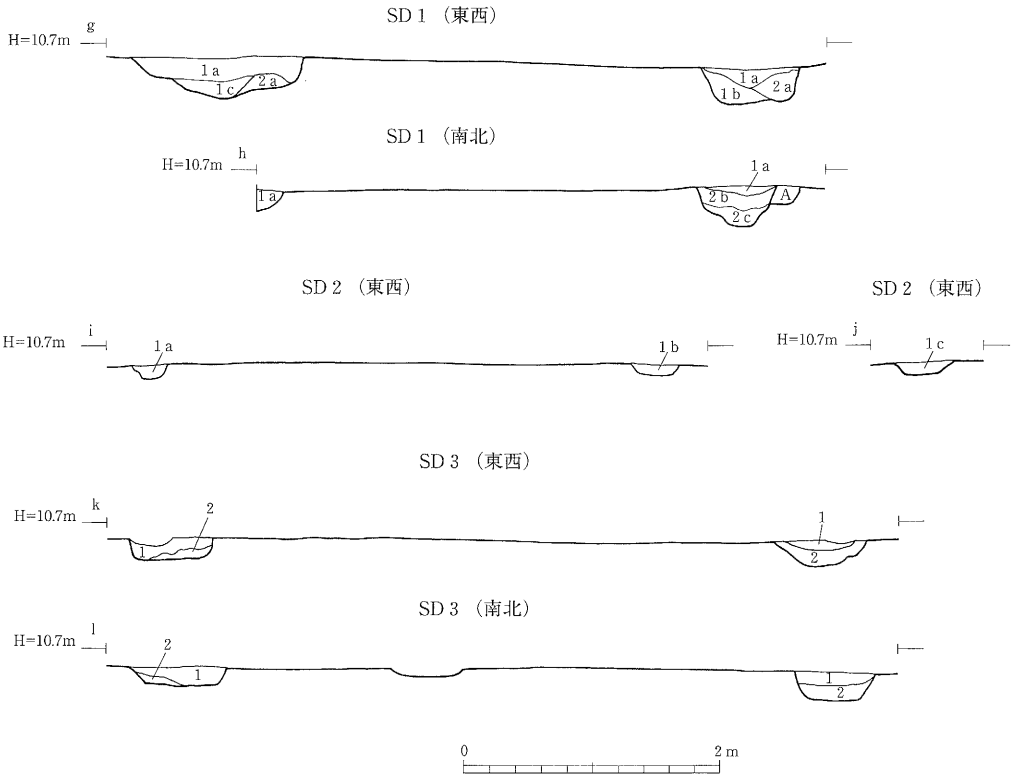
SD２円形周溝遺構　大きさは東西軸4.35m、南北軸4.6mを測る。周溝は西南部で25cm程途切れるが削平と深度の関係と判断される。ほぼ円形である。上端幅30～53cm、下端幅20～25cm、深さ５～11cmを測る。断面形は逆台形である。堆積土は大きく１層確認した。褐色系の砂質シルトである。周溝内側に関連遺構は確認されない。SK

3・SD6・SD7を切り、P1に切られる。遺物は土師器片が数十点、鉄製品が1点出土している。

SD3円形周溝遺構　大きさは東西軸5.95m、南北軸5.7mを測る。周溝は全周しておりほぼ円形である。上端幅60～87cm、下端幅45～63cm、深さ15～24cmを測る。断面形は基本的に逆台形であるが部分的に皿形もみられる。堆積土は2層確認した。褐色系のシルトである。周溝内側に関連遺構は確認されない。SD2・SD4・SD6・SD7に切られる。遺物は土師器片のみが二十数点出土している。



第96図　溝跡・円形周溝遺構平面図



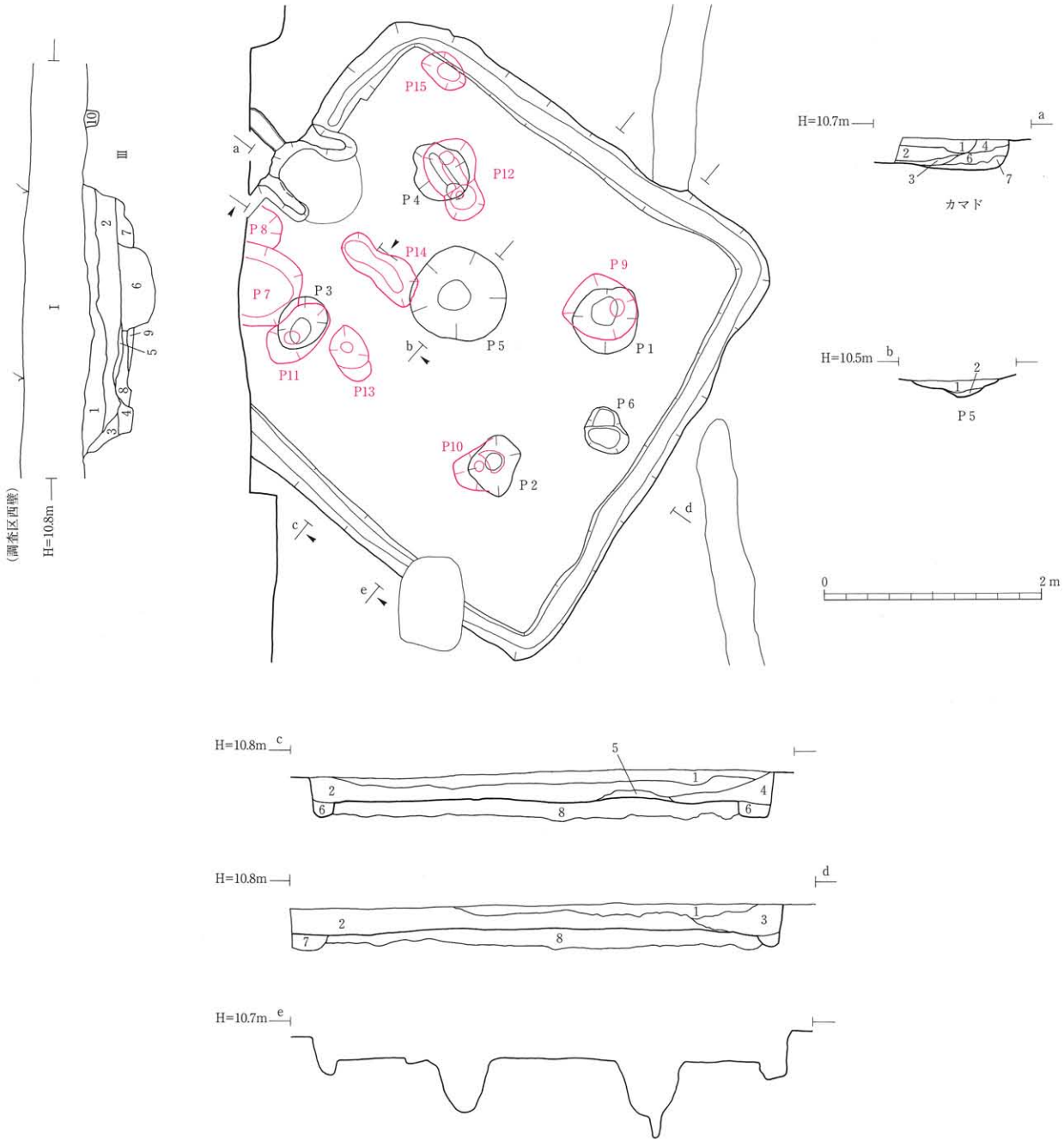
遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SD 1	1 a	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	炭化物粒・明黄褐色土を斑に含む。
	1 b	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒を少量含む。
	1 c	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒をやや多く含む。
	2 a	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒を含む。
	2 b	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土を含む。
	A	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	SD 2 の堆積土、黄褐色土を斑に含む。
SD 2	1 a	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	
	1 b	10YR5/8　黄褐色	砂質シルト	上部に褐灰色がみられる。
	1 c	10YR5/6　黄褐色	シルト	褐灰色土を斑に含む。
SD 3	1	10YR4/4　褐色	シルト	やや粘土質。
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	焼土粒を少量含む。

第97図　円形周溝遺構断面図

4 ）竪穴住居跡

SI 1 住居跡　SD 5 ・柱穴 1 と重複し切られている。平面形は隅丸方形で、大きさは東西軸4.56m、南北軸4.26mを測る。東辺は真北に対し39度程東に偏る。堆積土は床面上で 6 層・カマド部で 4 層確認している。自然堆積と判断される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さ最大で28cmを測る。周溝は全周しており、上端幅は25～30cm程で深さ15cm程を測る。床面は大部分が掘り方埋土上面となるが部分的に貼床が確認される地点もある。床面で 8 基のピットを検出したが位置・規模からＰ 1 ～ 4 を柱穴と判断した。柱痕跡は 4 基とも確認し得なかったが、柱穴は径50～60cmの円形ないし不整方形で、深さ45～55cmを測る。断面形は逆台形状である。Ｐ 5 は径90cm程の円形で、深さ15cm程の断面が皿状の浅いものである。床中央に位置し堆積土に焼土粒が含まれていたが、火熱による硬化面もみられないため廃棄穴と判断した。北壁部にも炭化物・焼土が詰まった状態で検出されたＰ 7 ・ 8 がある。Ｐ 5 同様に廃棄穴と判断される。カマドは北壁ほぼ中央部に付設され、燃焼部と煙道部を確認している。燃焼部は残存高20cm程の両袖のみの確認である。底面幅45cm・奥行き50cm程を測る。底面はほぼ平坦で奥壁で段となり煙道へ続く。焼土は確認されるが硬化面は認められなかった。煙道は幅15cm程で長さ45cmまで確認した。底面はほぼ平坦である。なお、掘り方埋土下部のⅢ層（地山）面で 7 基のピットを検出している。Ｐ 9 ～12は柱穴としたＰ 1 ～ 4 とほぼ同位置にあり配置等から旧段階の柱穴と判断した。遺物には土師器（高坏・坏・甕）、須恵器（蓋・甕）、

石製品（砥石・不明石製品・剥片）があり、土師器はすべてロクロ不使用である。

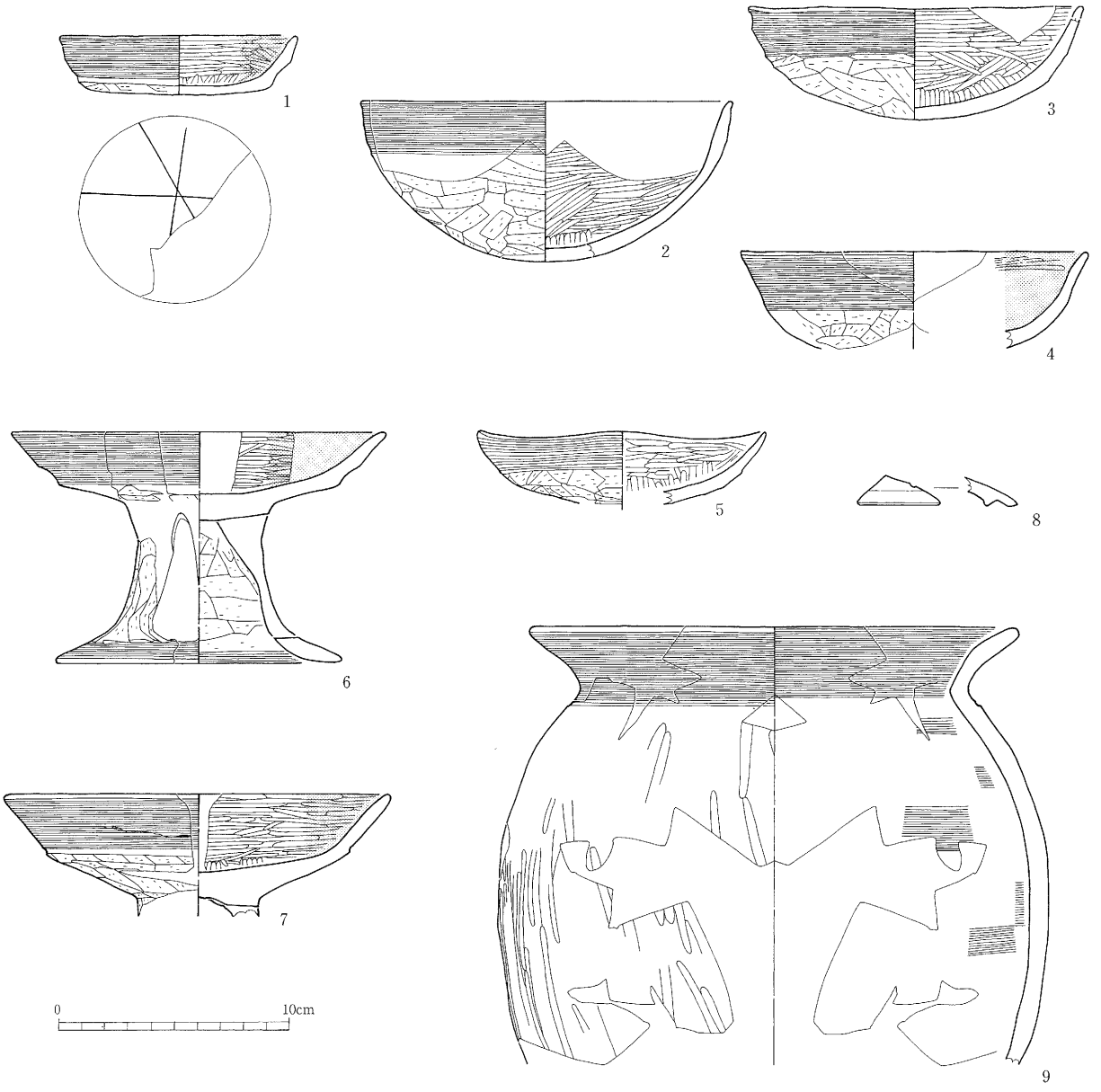


SI 1	層位	土　色	土　性	備　考
	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	粘土質・焼土粒をまばらに含む。
	2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物粒をまばらに含む、褐灰色土をスジ状に含む。
	3	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	炭化物を含む。
	4	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色土を斑に含む。
	5	10YR6/8　明黄褐色 10YR4/6　褐色	粘土質シルト 粘土質シルト	斑の層。
	6	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	周溝、炭化物粒・焼土粒を少量含む。
	7	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	P 8　焼土・炭化物を含む。
	8	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	掘り方埋土、暗褐色土をスジ状に含む。
カマド	1	10YR4/4　褐色	シルト	やや粘土質、炭化物少量含む。
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒をまばらに含む。
	3	10YR3/4　暗褐色	粘土	
	4	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む。
	5	5YR4/6　赤褐色	粘土質シルト	焼土層　焼土及び焼土ブロック。
	6	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒のブロック。
P 5	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	焼土粒を含む。
	2	10YR6/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	

第98図　SI 1 住居跡

調査区西壁

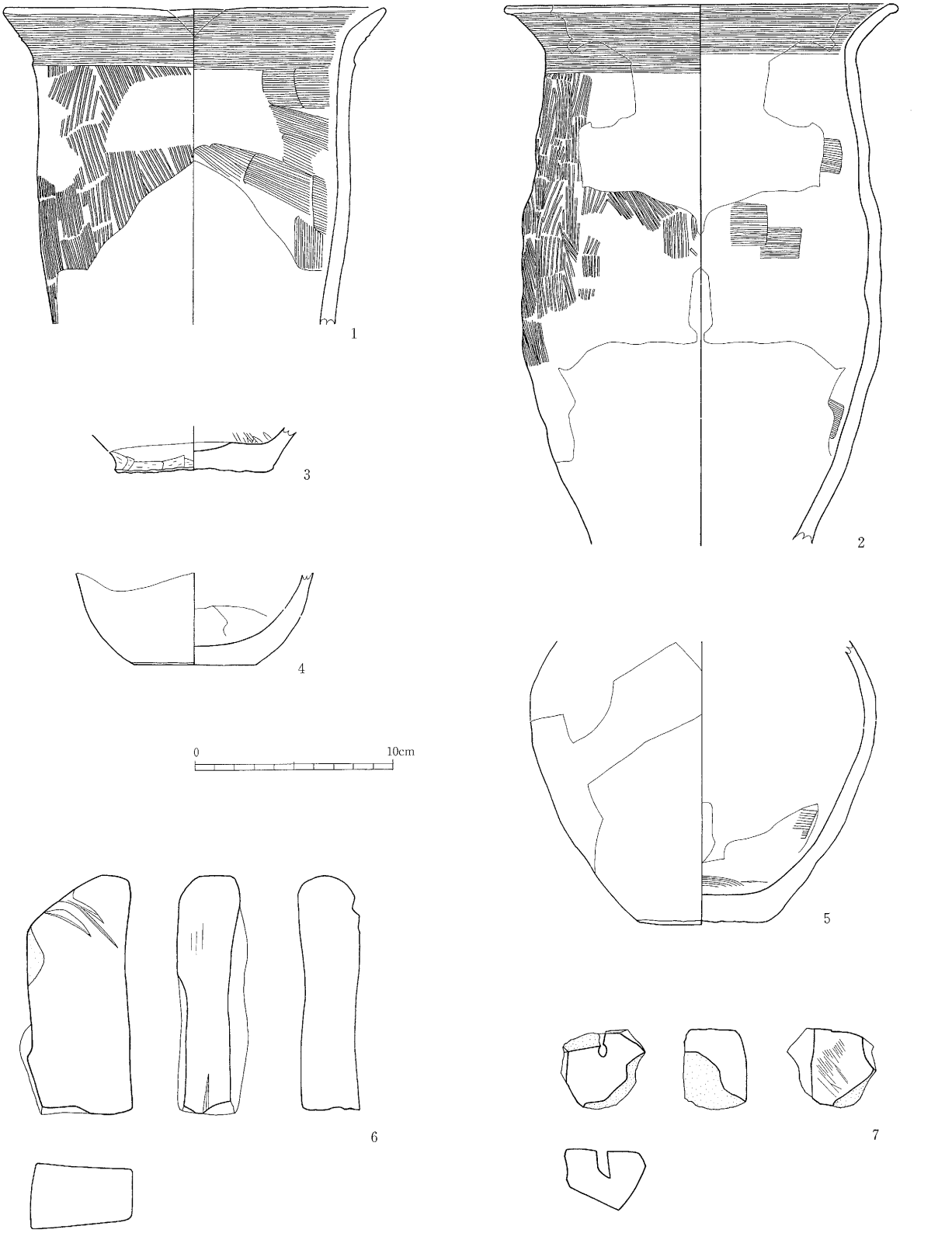
西壁部	層位	色　調	性　質	備　考
基本層	Ⅰ	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	耕作土。
	Ⅲ	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	部分的に砂質となる。
SI 1	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	やや粘土質、焼土粒少量含む。
	2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	やや粘土質。
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	壁崩壊土？
	4	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	周溝部。
	5	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	貼床土。
	6	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	P7　焼土・炭化物粒を斑に含む。
	7	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	P8　焼土ブロックを含む。
	8	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	掘り方埋土。明黄褐色土を小ブロックで含む。
	9	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	掘り方埋土。
	10	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	煙道部　焼土・炭化物を含む。



No.	地点・層位	種別	器種	外面調整	内面調整	特徴	口径	底径	器高	残存	登録
1	床面	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、体部～底部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ・黒色処理？	平底風丸底、口縁部下に段、底部に線刻あり	10.2	8.6	2.6	1/2	C－8
2	2層	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、体部～底部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ	丸底、口縁部下で浅い沈線上の凹み	(16.2)	－	(7.1)	1/5	C－10
3	2層	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、底部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ	丸底、口唇部でゆるく外反	14.5	－	5.0	2/3	C－6
4	埋土	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、底部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ・黒色処理	丸底？、再酸化、口縁部ゆるく外反	(15.1)	－	－	1/7	C－9
5	埋土	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、底部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ	丸底、口縁部下にゆるい段、口唇部にタール？付着	12.6	－	(3.2)	1/3	C－1
6	P16	土師器	高坏	口縁部：ヨコナデ、体部～脚部：ヘラケズリ、裾部：ヨコナデ	口縁部～底面：ヘラミガキ・黒色処理 脚部：ヘラケズリ、裾部：ヨコナデ	口縁部下に段、脚部に三角形状の透かし三ヶあり 脚部はやや太めの作りで直立状に立つ	(16.3)	裾径 12.5	(10.2)	1/8	C－26
7	埋土	土師器	高坏	口縁部：ヨコナデ、体部～脚部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ・黒色処理	口縁部下に段、脚部に三ヶの透かしあり	(16.8)	－	－	－	C－25
8	1層	須恵器	蓋	ロクロ調整	ロクロ調整	断面三角形のカエリあり	－	－	－	－	E－1
9	カマド	土師器	甕	口縁部：ヨコナデ、底部：ヘラミガキ	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	最大幅は体部	(21.3)	－	－	1/4	C－18

第99図　SI 1 住居跡出土遺物 1

（　）推定　単位cm

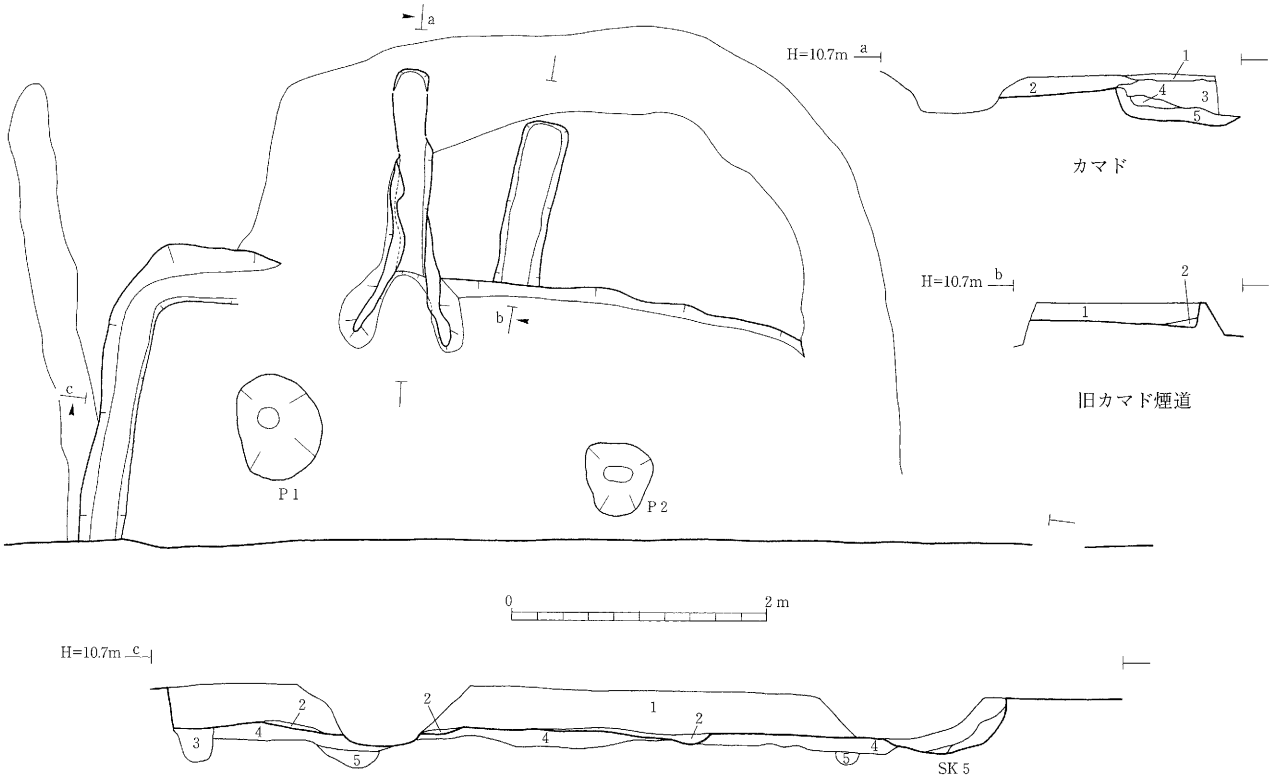


No.	地点・層位	種別	器種	外面調整	内面調整	特徴	口径	底径	器高	残存	登録
1	埋土	土師器	甕	口縁部：ヨコナデ、体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	長胴形、最大幅は口縁部、一部再酸化	(19.3)	－	－	1/5	C－17
2	掘り方	土師器	甕	口縁部：ヨコナデ、体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラナデ	長胴形、最大幅は口縁部	(20.0)	－	(29.0)	1/4	C－16
3	P8	土師器	甕	体部下端：ヘラケズリ	底面：ミガキ状のナデ	底部に×の線刻あり、再酸化	－	8.0	－	－	C－23
4	カマド	土師器	甕	不明	不明	底部に木葉痕あり、再酸化	－	6.3	－	－	C－22
5	カマド	土師器	甕	不明	体部下部：ヘラナデ及びナデ	最大幅は体部中央、再酸化	－	6.6	－	－	C－20
6	2層	石製品	砥石	特徴：上下部欠損、断面は四角形、側面4面が砥面、残存長124mm、最大幅56mm、最大厚36mm、砂岩							K－2
7	P3	石製品	砥石	特徴：下部欠損、断面形は不整な台形、上部に径5mm程の通し穴1ヶあり、面すべて砥面、最大幅44mm、最大厚31mm、残存長42mm、凝灰岩							K－1

（　）推定　単位cm

第100図　SI1住居跡出土遺物2

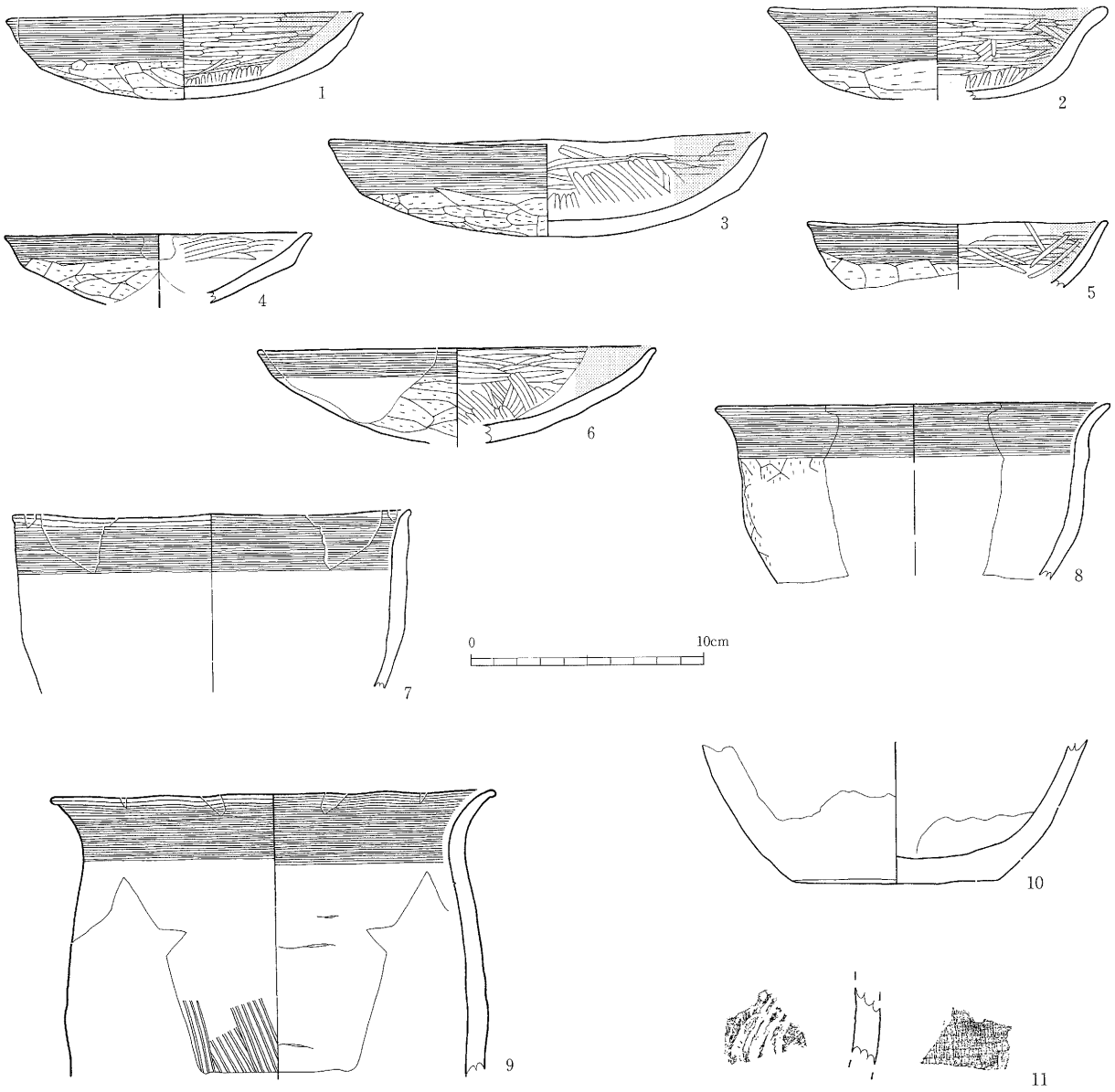
SI２住居跡　南壁部に位置し大半が調査区外である。SK５、SD１・５・６・７、P２に切られ、全体的に遺存状況が不良である。壁面は北辺と西辺のみの確認で、北辺5.4m・西辺2.4mまで確認した。西辺は真北に対し16度程東に偏る。堆積土は床面上で３層・カマド部で５層確認している。１層部は厚さ30cm程を測り分層が考えられたが不明であった。自然堆積と判断される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面からの高さ最大で32cmを測る。周溝は西側のみで確認している。上端幅30～35cm程で深さ25cm程を測る。床面は後世の遺構等で明確に検出できなかったが、４層の掘り方埋土上面が床面となる。床面精査時に２基（P１・P２）のピットを検出し、位置・規模から柱穴と判断した。柱痕跡は確認できなかったが、柱穴は大きさ60～85cm程の不整円形で、深さ50～55cmを測る。断面形は逆台形状である。これらの柱穴と壁との位置関係から判断して本来5.5m四方の規模をもつ住居跡と考えられる。カマドは北壁中央部に付設されている。カマド本体東側（60cm程東）にも煙道のみが一本確認されており、新旧２時期の存在が伺われた。新のカマドは燃焼部と煙道部を確認している。燃焼部は残存高20cm程の両袖のみの確認である。底面幅50cm・奥行き50cm程を測り、やや三角形状を呈している。底面は床面から一段低くなり、そこからゆるやかに立ち上がり奥壁で段となり煙道へ続く。焼面・焼土は確認されるがしっかりとした硬化面はみられない。煙道は幅30cm程で長さは160cmを測る。底面は北側へ向かい低くなっている。旧カマド煙道は幅35cm程で長さ130cmを測る。底面はほぼ平坦であるがやや北側へ向かい低くなっている。なお、床面（４層）及びⅢ層上面で焼



SI２	層位	土　色	土　性	備　考
	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	やや粘土質。炭化物粒・焼土粒をまばらに含む。
	2	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	焼土・炭化物をうすく含む。
	3	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	周溝部
	4	10YR4/3　にぶい黄橙色	粘土質シルト	掘り方埋土。焼土粒を少量まばらに含む。
	5	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	床下の小ピット。炭化物を少量斑に含む。
カマド	1	10YR4/6　褐色	シルト	焼土粒少量含む。
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	煙道部。やや粘土質、焼土ブロックを多量に含む。
	3	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	燃焼部。焼土・炭化物を細かく多く含む。
	4	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	燃焼部。焼土を含む。
	5	5YR3/4　暗赤褐色	粘土質シルト	燃焼部。焼土・炭化物の層。
旧カマド煙道	1	10YR5/6　黄褐色 10YR2/1　黒色	粘土質シルト シルト	互層状。焼土ブロック含む。
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒色土をうすく層状に含む。

第101図　SI２住居跡

土・炭化物を含む不整形な落ち込みを多数検出しているが、これらは廃棄穴と考えられる。Ⅲ層で検出したものは旧の時期のものと判断される。遺物には土師器（坏・甕）、須恵器（甕）、石製品がある。土師器はすべてロクロ不使用である。

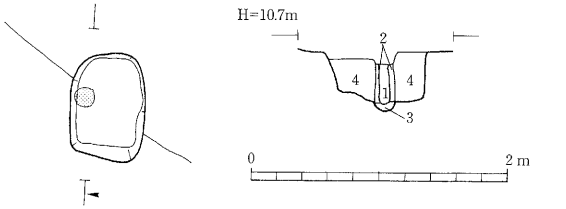


No.	地点・層位	種別	器種	外面調整	内面調整	特徴	口径	底径	器高	残存	登録
1	床面	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、体部～底部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ・黒色処理	丸底、口唇部ゆるく外反	(15.1)	－	3.5	1/4	C－2
2	床面	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、体部～底部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ・黒色処理	半底風の丸底、口縁部外反、やや粗雑な作り	(14.6)	－	4.0	2/5	C－11
3	床面	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、体部～底部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ・黒色処理	丸底	18.8	－	4.3	4/5	C－12
4	カマド	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ	再酸化？	(13.2)	－	－	1/5	C－5
5	埋土	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ	口縁部～体部：ヘラミガキ・黒色処理		(12.8)	－	－	－	C－4
6	埋土	土師器	坏	口縁部：ヨコナデ、体部～底部：ヘラケズリ	口縁部～底面：ヘラミガキ・黒色処理	丸底、口唇部端外反	17.5	－	(4.2)	2/5	C－7
7	埋土	土師器	鉢	口縁部：ヨコナデ、体部：磨滅で不明	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ？	口唇部端短く外側へ突出	(17.2)	－	－	－	C－15
8	埋土	土師器	鉢	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ？	口縁部ゆるく外反	(16.9)	－	－	－	C－13
9	埋土	土師器	甕	口縁部：ヨコナデ、体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ？	最大幅は体部中央	(19.2)	－	－	－	C－19
10	埋土	土師器	甕	不明	不明	再酸化	－	18.0	－	－	C－21
11	埋土	須恵器	甕	体部：格子叩き	体部：同心円文のオサエ		－	－	－	－	E－2

第102図　SI 2 住居跡出土遺物

5）柱穴・ピット

柱穴を２基、ピットを４基検出している。柱穴１は平面形が隅丸の長方形で南北軸85cm・東西軸60cm・深さ40cmを測る。柱痕跡が確認され径15cm程の円形である。SI１を切っている。なお、２m程離れた南壁に東西軸55cm・深さ30cmを測る柱穴２がある。２基のみの確認ではあるが柱列ないし掘立柱建物跡の一部と思われる。遺物は柱穴１から土師器片が十数点出土している。



層位	土　色	土　質	備　考
1	10YR6/1　褐灰色	粘土	柱痕跡　グライ化
2	10YR4/4　褐色	粘土	柱痕跡　焼土粒を少量含む。
3	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土	柱痕跡　最下部に酸化鉄集積
4	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	掘り方埋土　黄褐色土粒を斑に含む。

第103図　SA１①掘立柱

6）出土遺物について

図示可能な資料は殆どが住居跡出土のものであり、ここでは住居跡出土の土器類について特徴を記す。

土師器　器種として坏・高坏・甕・鉢がある。坏は口径15cm前後のものと10cm程の２種があり、底の形態も丸底と平底風丸底の２種がある。口縁部と体部の境は明確な段と判断されるものは少なく、屈曲ないし稜となっている。口縁部は直立気味のもの、内弯気味に外傾するもの、外反するものがある。調整は外面がヨコナデとヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。その内、ヘラミガキは施されるが黒色処理は行われていないと観察されるものがあり、胎土にも違いがみられる。このように坏は全体的にみて内弯気味に立ち上がるものが多く、口径に較べて器高の割合が小さく、外面の段も不明瞭となり、段・稜の位置も低くなる特徴がみられる。高坏は口径16cm程で高さ10cm程のものである。口縁部と体部の境に明瞭な段が巡る。脚部は太く円筒状で三角形状の透かしがみられる。調整は坏部が上述の坏と同様で、脚部は縦横のヘラケズリ、裾部はヨコナデである。甕は長胴のものと体部がやや丸みをもつ２種がある。口縁部と体部の境には突起状の稜が巡るものがみられるが本来の段とは異なる。最大幅は前者が口縁部にあり後者は体部に位置している。前者の調整は外面がヨコナデとハケメ、後者はヨコナデとヘラミガキである。内面は両者ともヨコナデとヘラナデである。鉢は口縁部が直立するものと外反する２種がある。調整は両者とも口縁部内外面がヨコナデ、体部は後者がヘラケズリとナデ？である。

須恵器　器種には蓋・甕がある。破片資料で全体が知られるものはない。蓋は内面にカエリをもつもので、断面三角形状でやや短めである。甕は体部外面に格子叩き目、内面に同心円文のオサエがみられる。

このような特徴をもつ土師器類は土器編年の国分寺下層式に位置づけられるものである。上記の特徴や組み合わせ等から判断して８世紀前半を中心とする年代が考えられる。

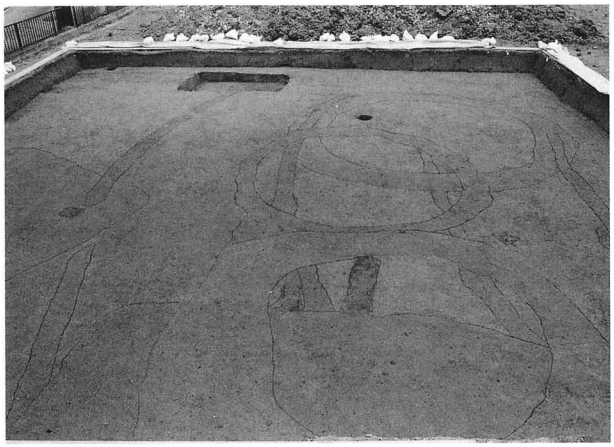
5　まとめ

①住居跡は２軒とも奈良時代、８世紀前半頃を中心とする年代が考えられた。大きさは一辺4.5m・5.5mの方形で周辺調査でも同時期・同規模の住居跡群が多数検出されており、一群のものと判断される。集落構成等今後の報告に期するところが大きい。

②溝跡群は４条の溝が弧状に並行して延び、上幅等規模もほぼ同じものである。これらから畑跡に関係する遺構群と判断した。SK２との重複からみて溝跡群は近世初頭以前の年代がおさえられる。

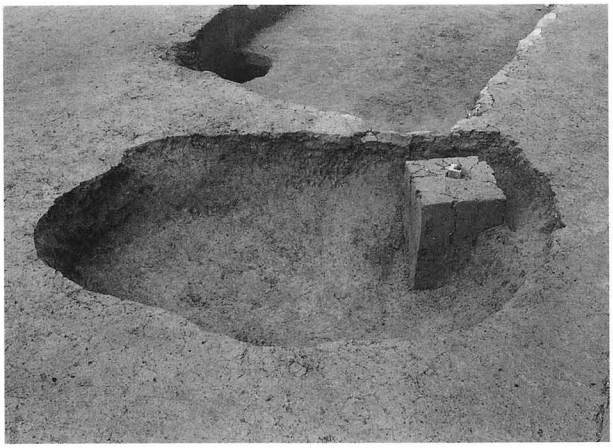
③円形周溝遺構は径4.5～６mの規模をもつ真円に近い形状をもつ。溝跡及び遺構どおしの重複がみられ時間幅が認められる。農耕に関わる遺構ではと思われるが時期も含め明らかではない。

④土坑の多くは年代・性格が不明であるが、SK２は井戸跡と判断される。埋め戻し土ではあるが美濃の志野皿が出土しており17世紀前半頃の年代が想定される。当時期この地域は若林城下町の範囲であり、城下町期の遺構と判断したい。

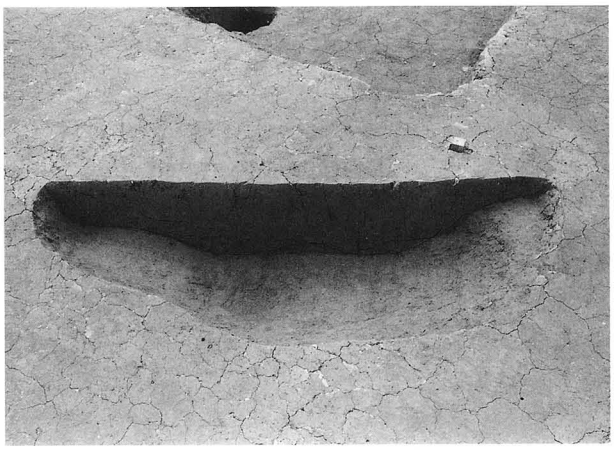


1　遺構確認状況（南より）

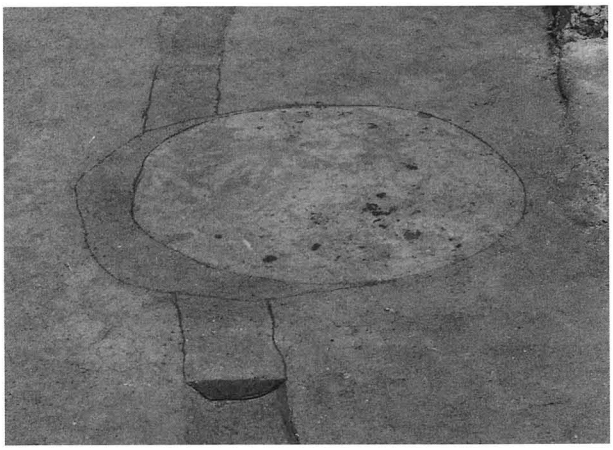
2　検出遺構全景（南東より）



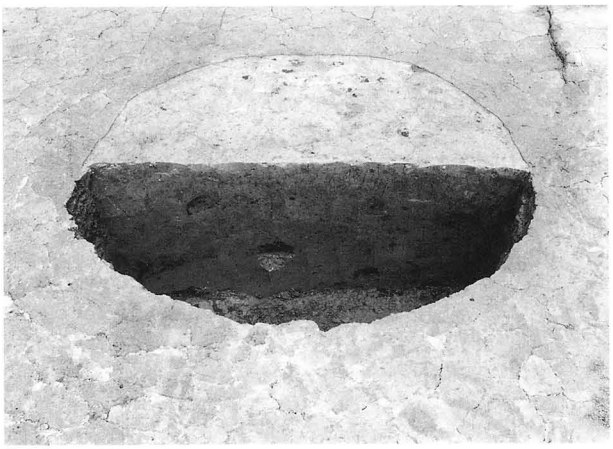
3　SK 1 土坑全景（東より）



4　SK 1 土坑土層断面（東より）

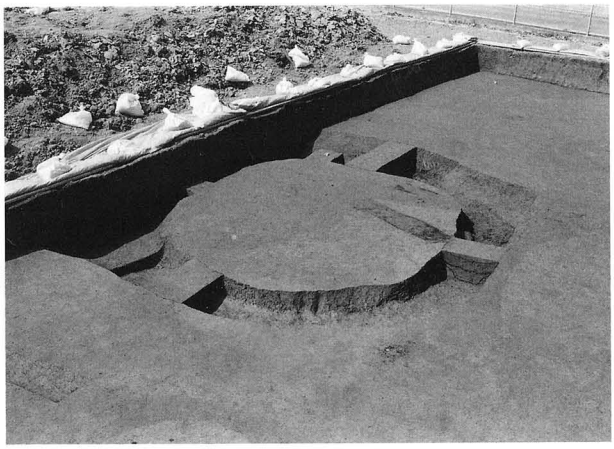


5　SK 2 ・SK 4 ・SD 4 重複状況（南より）



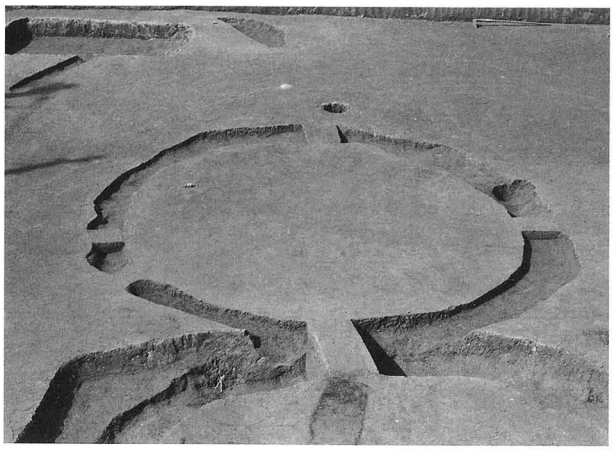
6　SK 2 土坑土層断面（南より）

7　溝跡・円形周溝遺構全景（南より）

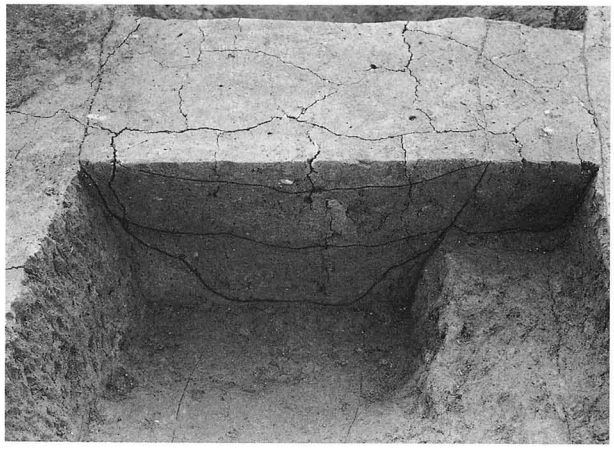


8　SD 1 円形周溝遺構全景（北東より）

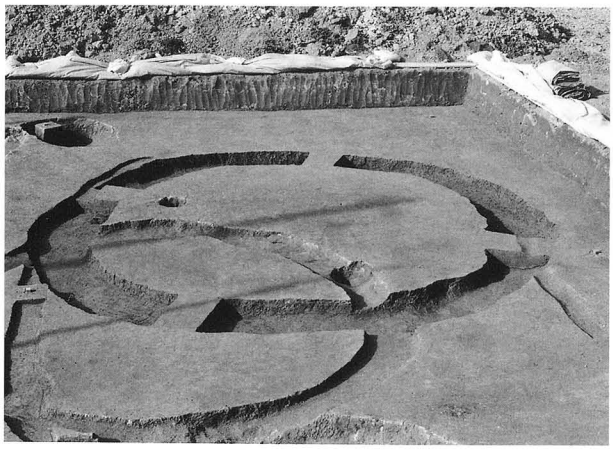
図版46　検出遺構 1



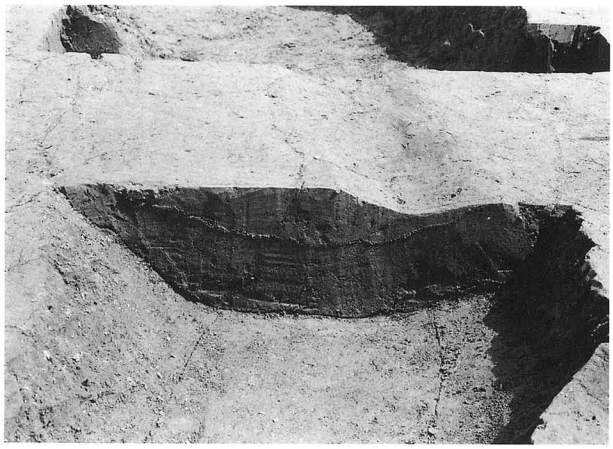
1　SD 2 円形周溝遺構全景（南より）



2　SD 1 ・SD 2 重複状況（東より）



3　SD 3 円形周溝遺構全景（南より）



4　SD 3 土層断面＜東側＞（南より）

5　SI 1 住居跡全景（南東より）

6　SI 1 住居跡カマド全景（南東より）

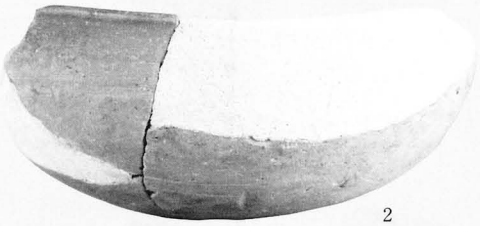
7　SI 2 住居跡全景（南東より）

8　SI 2 住居跡カマド全景（南より）

図版47　検出遺構 2

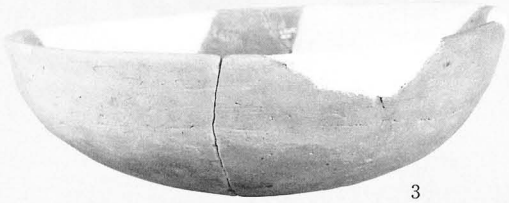
1

7



2

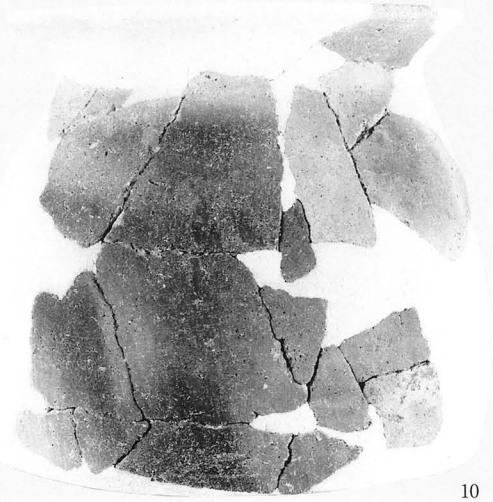
8



3

9

4



10

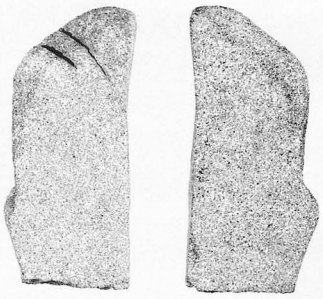
5

6

1	第99図 1	6	第102図 2
2	第99図 2	7	第102図 3
3	第99図 3	8	第102図 6
4	第99図 5	9	第99図 6
5	第102図 1	10	第99図 9

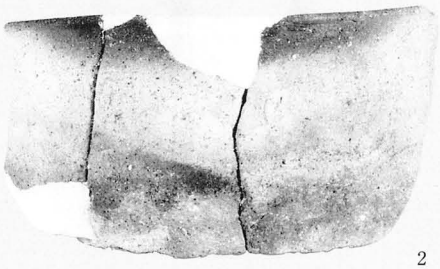
図版48　出土遺物 1

1

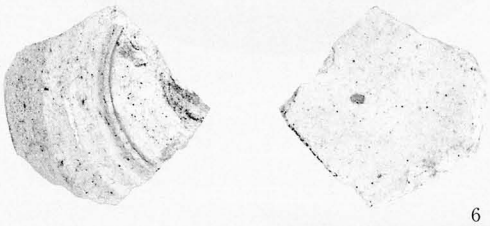


4

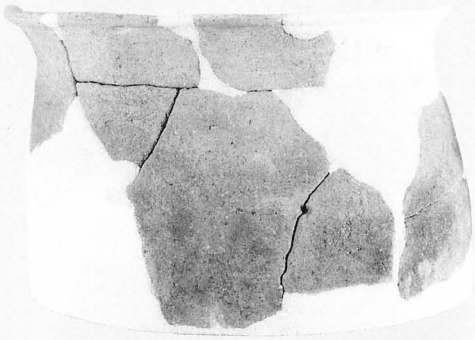
5



2



6



3

1　第100図 2
2　第102図 7
3　第102図 9
4　第100図 6
5　第100図 7
6　第94図 1

図版49　出土遺物 2

Ⅺ　南小泉遺跡（第38次）発掘調査報告書

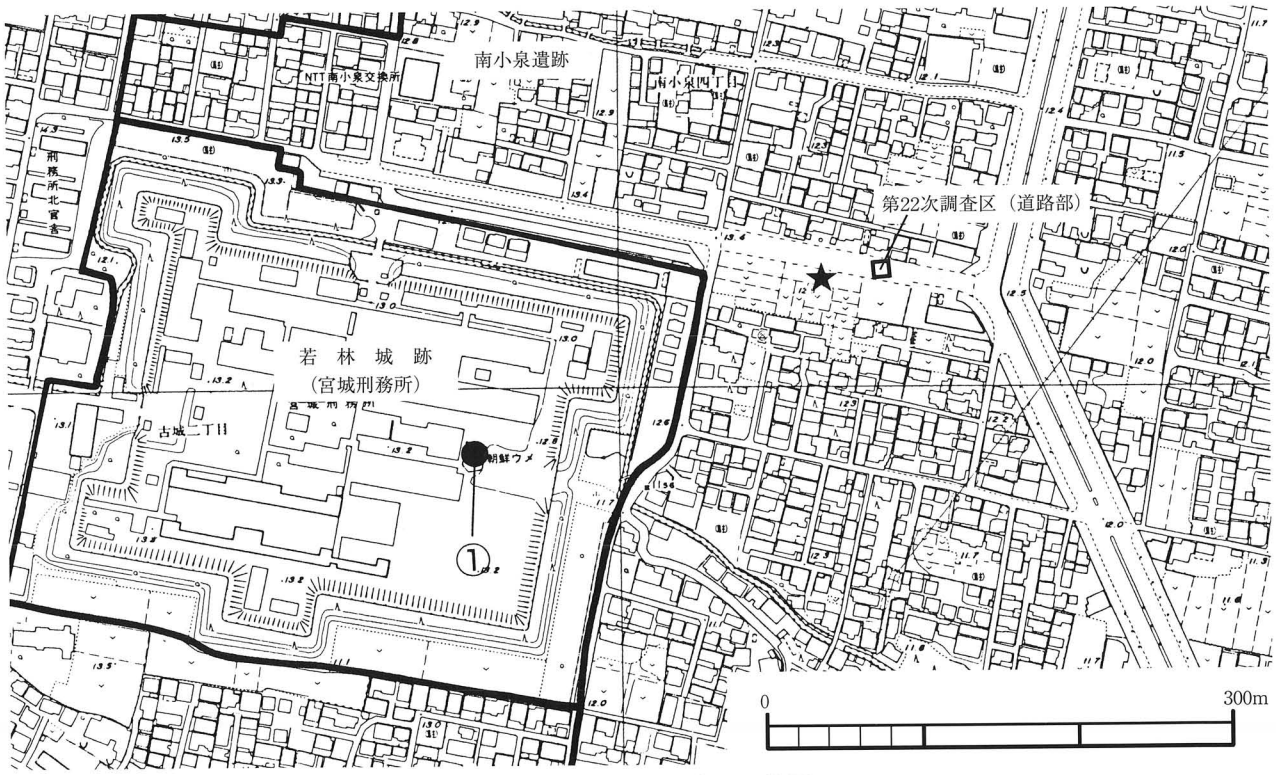
1　調査要項

遺　跡　名　南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点　仙台市若林区南小泉四丁目71－１、73－４
調 査 期 間　平成14年９月30日～10月11日
調査対象面積　390㎡
調 査 面 積　127㎡
調 査 原 因　共同住宅建築工事
調 査 主 体　仙台市教育委員会（文化財課）
担 当 職 員　主任　渡部　紀（文化財教諭　大倉　秀之：確認調査）

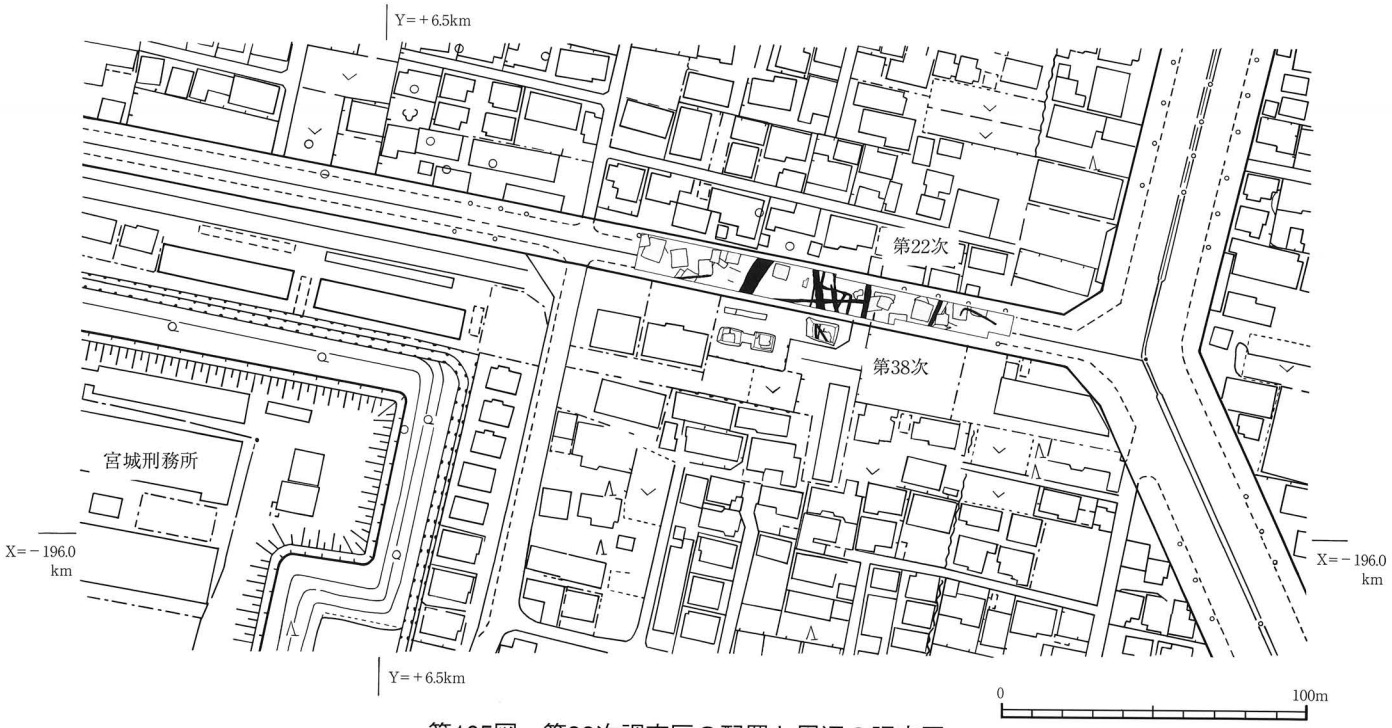
2　遺跡の位置と環境

仙台市の地形は、市の西部と東部で大きく分かれている。西部は奥羽山脈から派生する七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵と、名取川及びその支流の広瀬川が中流域に形成した段丘地形からなる。これに対して東半部は、幅10kmにわたり「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がっている。この平野は、七北田川・名取－広瀬川・阿武隈川からの堆積物等によって形成され、流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道など沖積地特有の微地形を作り出している。また、仙台湾と呼ばれる海岸部には、３列の浜堤や潟湖性低地が認められる。

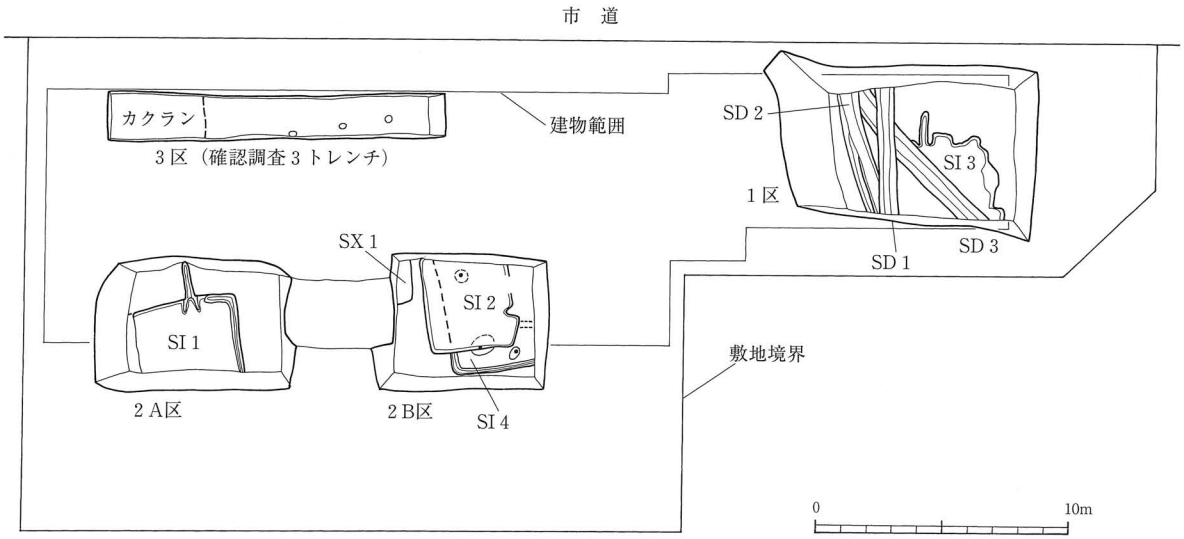
南小泉遺跡は、宮城野海岸平野の中央付近に位置し、広瀬川の北東側に形成された発達した自然堤防を中心に広



第104図　第38次調査区の位置



第105図　第38次調査区の配置と周辺の調査区



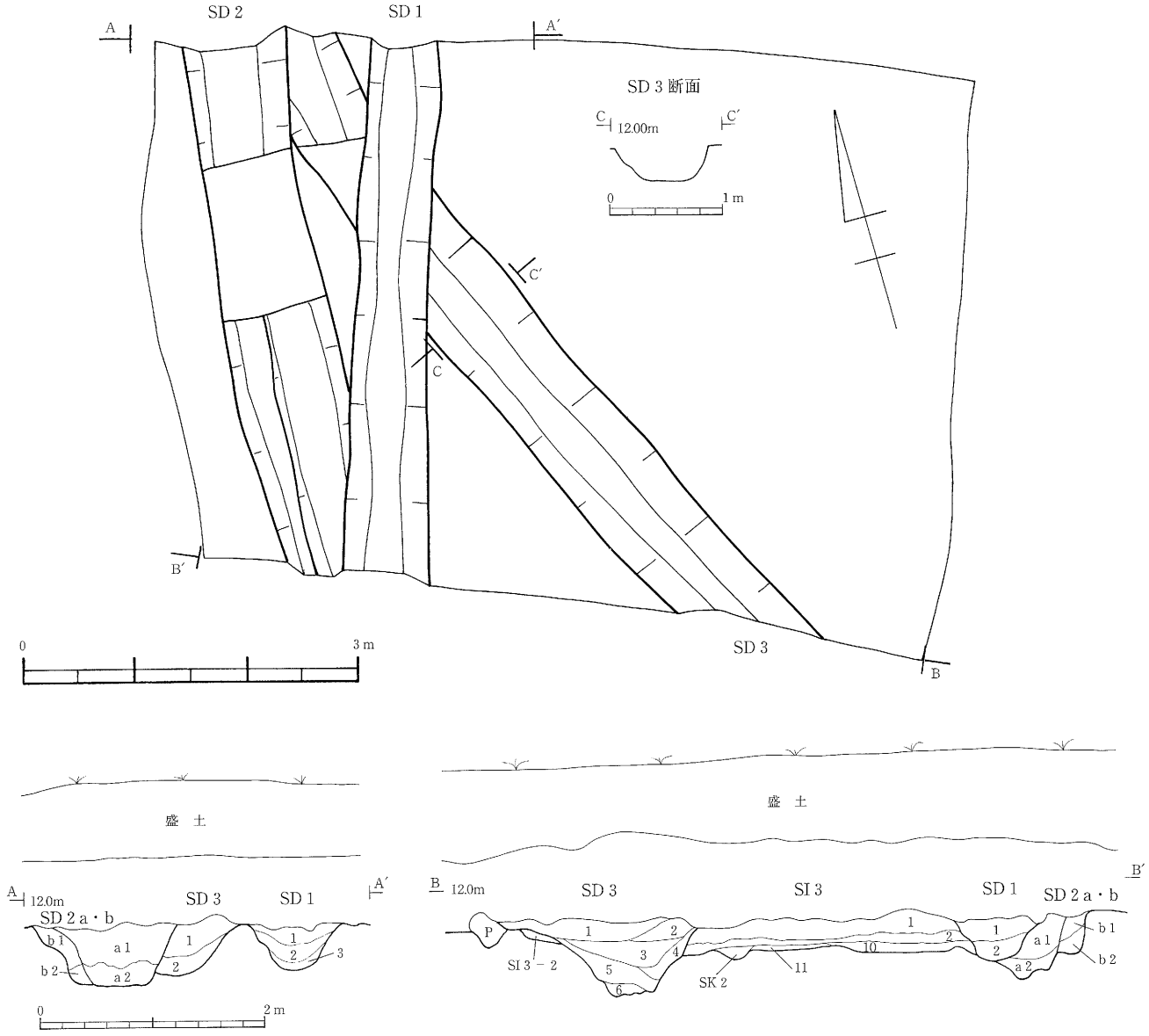
第106図　遺構配置図

がっている。これまでの調査では、弥生時代前期には遺跡が形成されていたことが確認され、その後弥生時代中・後期、古墳時代全期、奈良・平安時代、中世、近世にわたる多数の遺構が検出されている。遺跡内には全長110mの前方後円墳である遠見塚古墳があり、北東1kmには陸奥国分二寺が造営され、西隣には伊達政宗の隠居城である若林城が築かれていることから、この地域は、弥生・古墳時代以来、古代から近世にかけて、陸奥国の中心として栄えていたことが伺われるところである。

3　調査に至る経過と調査方法

本件は、平成14年8月20日付けで有限会社ヤマニ代表取締役菅原修一より発掘届けが提出されたので、9月12日

に３ヵ所にトレンチを設定して確認調査を実施し、住居跡・溝跡等が発見されたので、上記期間に本調査を実施した。本調査では、確認調査の際に、遺構が検出された部分を中心として発掘区を設定して調査を実施した。測量は、任意の基準点で行った後、この基準点から敷地境界杭を測量して調査区の位置を求めた。



SD 1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR6/1　褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒を含む。
2	10YR5/1　褐灰色	シルト	黒色土及び基本層Ⅱ層のブロックを含む。
3	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	径３cm前後の基本層Ⅱ層のブロックを含む。

SD 2

土層No.	土　色	土　質	備　考
a 1	10YR6/2　褐灰色	シルト	マンガン粒を多く含む。
a 2	10YR6/1　褐灰色	シルト	酸化鉄を多く含む、特に下面に集積している。
b 1	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。
b 2	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多量に含む。

SD 3

土層No.	土　色	土　質	備　考
北壁　1	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	黒色褐色及び基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。
2	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。
南壁　1	10YR3/1　黒褐色	シルト	褐灰色土を多く含む。基本層Ⅱ層・炭片を含む。
2	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	黒褐色土のブロックを少量含む。
3	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	径１～３cmの基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。
4	10YR4/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅱ層の細かなブロックを含む。炭片を含む。
5	10YR4/1　褐灰色	シルト	黒褐色土のブロックを含む、「灰白色火山灰」？を含む。
6	10YR8/6　黄橙色	シルト	基本層Ⅱ層がブロック状に変化したもの、黒褐色土を含む。

第107図　溝跡実測図

4　基本層序

調査地点は、全体に15～80cmの盛土がなされている。その下は、Ⅰ層（表土）が暗褐色シルトの旧畑耕作土層

(天地返しを含む)、Ⅱ層が黄橙色のシルト層で、上面で遺構が検出されている。Ⅰ層は60cm前後で、現地表からⅡ層上面までの深さは1.3～1.6mである。

5　発見遺構と出土遺物

1）各区の概要

1区　溝跡3条とこの溝に切られる竪穴住居跡1棟が検出されている。

2区　竪穴住居跡3棟と竪穴住居跡の可能性のある遺構が1基検出されている。

3区　ピット3個検出され、直線的に並んでいるが、相互の関係は不明である。西側1/3は撹乱を受けている。本調査は実施していない。

2）溝跡

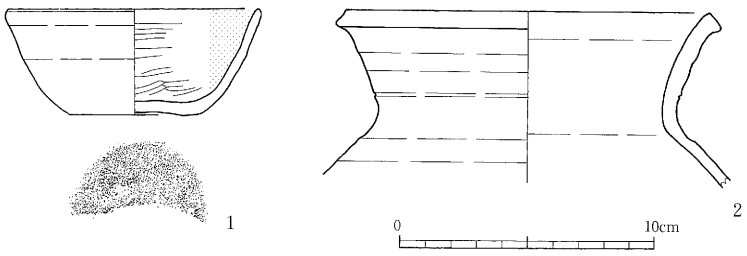
溝跡が3条検出されている。

SD－1溝跡　1区の西寄りを直線的に南北に縦断する。SD－2・3溝跡を切る。上面幅は60～74cmで、深さは40cm前後である。断面形は舟底状で、堆積土は2層に分けられ、下層には基本層Ⅱ層のブロックを含んでいる。

遺物は、第108図1の土師器坏破片の他、土師器片42点・須恵器片8点が出土している。

SD－2溝跡　1区の西側で検出された。SD－1溝跡に切られ、SD－3溝跡を切る。新旧2時期あり、新しいほうで上面幅は110cm前後で、深さは55cm前後である。新期の方がやや深い。断面形は逆台形で、堆積土は新旧それぞれ2層に分けられ、古期（b期）の堆積土層中には基本層2層のブロックを多く含んでいる。遺物は、新期から土師器片43点・須恵器片8点、古期から土師器片3点が出土している。新期の土師器の坏片には、体部と口縁部の境の外面に段がついて口縁部が直立し、内面がヨコナデ調整され、器面には樹脂状のものが塗られた形跡があるものがあり、いわゆる関東系の土師器呼ばれるものと同じ樹特徴を有するものも出土している。

SD－3溝跡　1区の北西から南東方向にのびて検出された。SD－1・2溝跡に切られる。上面幅は90cm前後で、深さは65cm前後である。断面形は逆台形で、堆積土は6層に分けられ、5層中には「灰白色火山灰」と観察される土壌を含んでいる。SI－3竪穴住居跡と重複部分が多いためか、多数の土師器・須恵器の破片及び古瓦の破片が出土している。多くの土器・瓦に混じって常滑産の陶器の体部破片が1点出土している（図版56－9）。外表面は薄く透明な緑色の釉がかかった状態で、内表面は暗褐色を呈している。



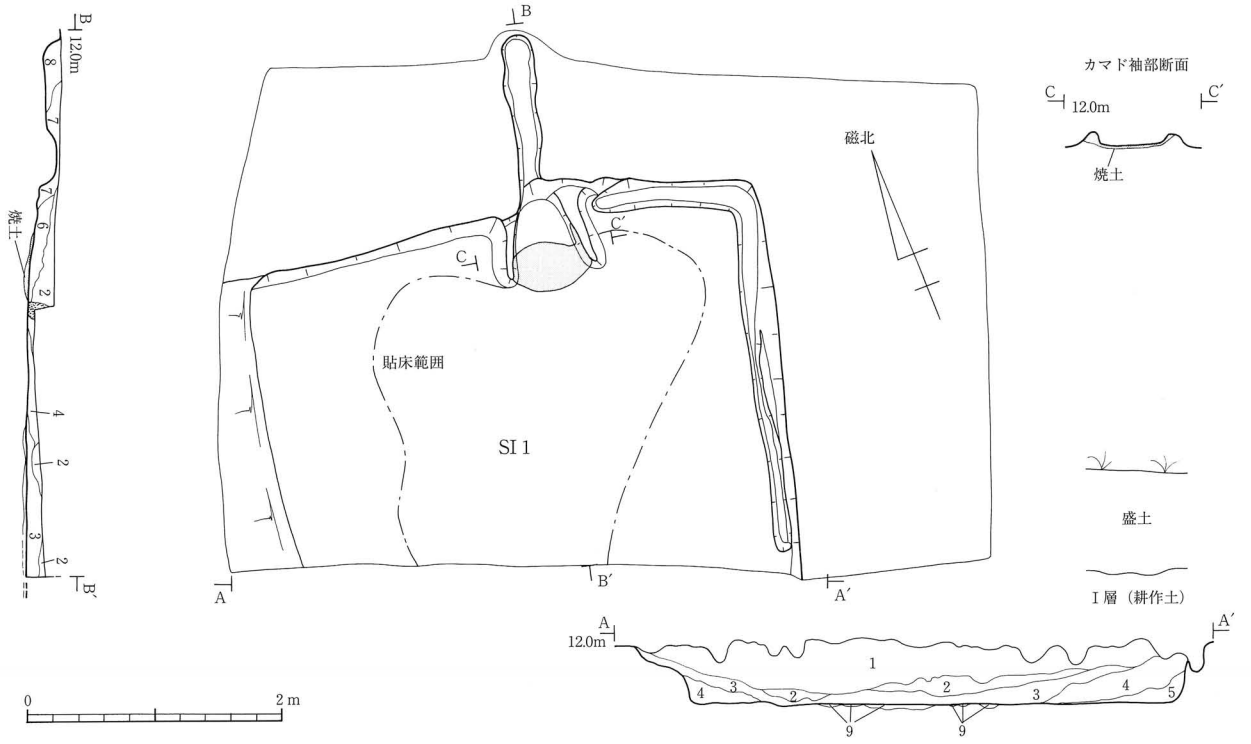
図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	D－1	1区		SD－1			土師器	坏	4.2	(9.8)	(5.0)	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部切り離しのちヘラケズリ	55－1
2	E－1	1区		SD－3	2層		須恵器	甕	(7.0)	(14.4)	－	内外面ロクロ　口縁端部摩滅	56－8

第108図　溝跡出土遺物

3）竪穴住居跡

竪穴住居跡が4軒検出されている。

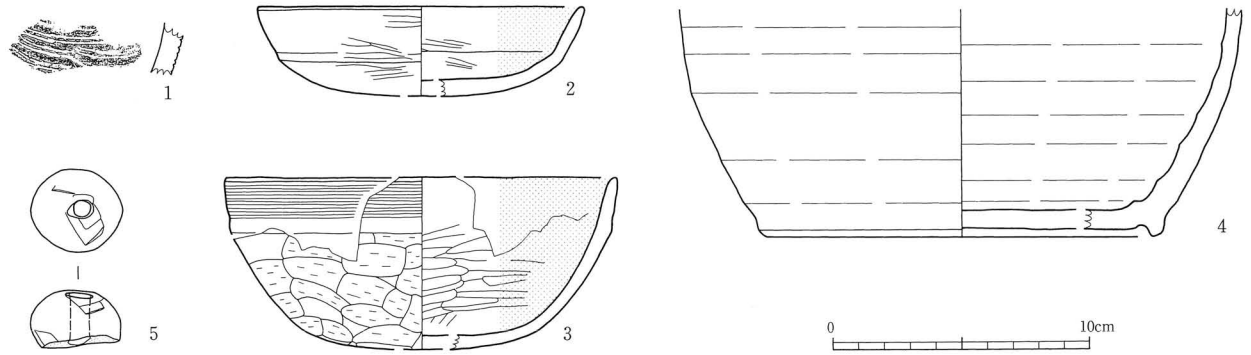
SI－1竪穴住居跡　【平面形・規模】2A区で検出された。南辺は調査区の外にのびている。西辺は削平されて



土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層の小ブロックを少量含む。
2	10YR7/4　にぶい黄橙色	シルト	にぶい黄褐色土のブロックを少量含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	南西部では炭を含む。
4	10YR6/3　浅黄橙色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを少量含む。
5	10YR6/3　浅黄橙色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。

土層No.	土　色	土　質	備　考
6			焼土と灰の混合層
7			基本層Ⅱ層に焼土のブロックを少量含む。
8			基本層Ⅱ層に焼土のブロックを多量に含む。
9	10YR7/2　にぶい黄橙色	シルト	貼床層　堅くしまっている。

第109図　SI－１竪穴住居跡実測図



図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	B－１	2A区		SI－１	1層		弥生土	壺	(2.0)	－	－	外面２条１画の連続波状文	54－１
2	C－１	2A区		SI－１	床面	7	土師器	坏	(3.5)	(12.7)	－	内外面ヘラミガキ、黒色処理	54－２
3	C－２	2A区		SI－１	床面	1・2	土師器	坏	(6.8)	(15.2)	－	外面口縁ヨコナデ　体部ヘラケズリ　内面ヘラミガキ、黒色処理	54－３
4	E－２	2A区		SI－１	埋土		須恵器	壺	(9.0)	－	(15.0)	内外面ロクロ	
5	P－１	2A区		SI－１	1層		土製品	土玉	全長(2.3)	径 3.6			56－10

第110図　SI－１竪穴住居跡出土遺物

いるが調査区南壁面の観察記録では削平部の近くで竪穴住居跡の壁面の立ち上がりが確認されている。平面形は方形を呈するものと推察され、調査区南壁面での住居の東西軸長は約3.9mである。南北軸長は検出部分で3.2mある。

【堆積土と床面】検出面から床面までの深さは20cm前後であるが、調査区南壁面では50cm前後の堆積土が確認でき

る。住居廃絶後の堆積土は８層に分けられるが、いずれも自然堆積層と観察される。カマド前部から反対の壁面にかけての住居中央部分には広い範囲に、にぶい黄橙色の砂質粘土による貼床があり、堅く締まっている。

【柱穴と周溝】住居の床面では柱穴は検出されていない。周溝は北壁のカマドの東側から東壁の南壁付近までＬ字状に検出されている。周溝の幅は10～20cmで、床面からの深さは３～４cmである。

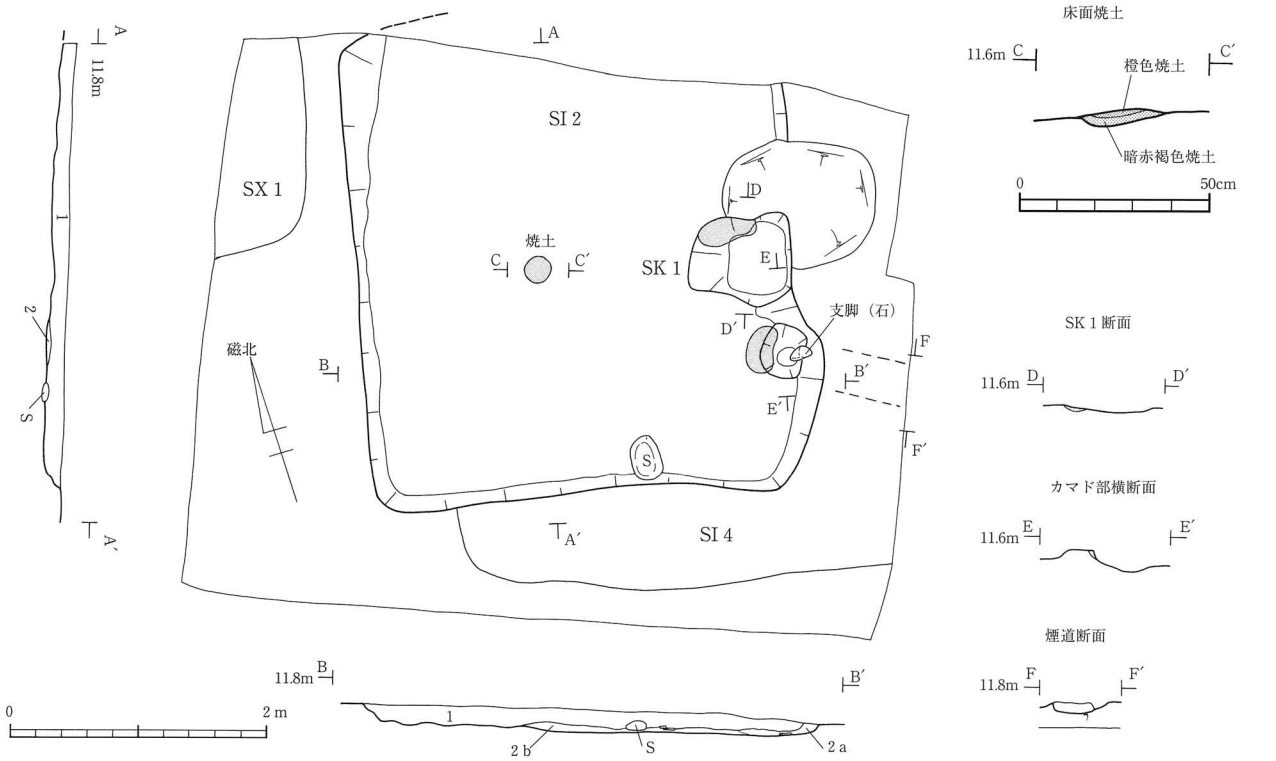
【カマド】カマドは北壁に作られている。中央よりやや東によって位置し、約120cm・幅16～26cmの煙道が住居の外にのびている。カマド本体は、両袖の下端部分が約10cm残っており、北壁面からカマド袖部の先端まで約65cm、両袖の外側で90cm・内側で50cmを測る。袖部の幅は、基底部で左右とも20cm前後である。カマド内部は、中央から袖部の先端にかけて強く焼けている。

【住居掘り方】SI－１竪穴住居跡では、掘り方の埋め土と認定できる土層は確認されなかった。

【出土遺物】出土遺物は多くない。図化できる床面出土の遺物としては、土師器の坏が２点ある（第110図）。C－１は、丸底の坏で、体部と口縁部の中間に内外面とも段がつき、口縁部は比較的短く内湾気味に直立する。器面は荒れているが、内外面とも最終調整としてヘラミガキが施されている。C－２は、比較的深い坏である。丸底で、半球形の器形となる。器高の2/3くらいのところの外面に段がつき、直立気味の口縁となる。堆積土中からは、弥生土器の壷の肩部破片（B－１）や、須恵器の壷体部下半の破片（E－２）、土玉（P－１）などが出土している。

【住居の年代】SI－１竪穴住居跡の所属時期については、床面から出土した２点の土師器坏が、いずれも国分寺下層式に相当すると判断されるので、奈良時代に位置付けられるものと考えられる。

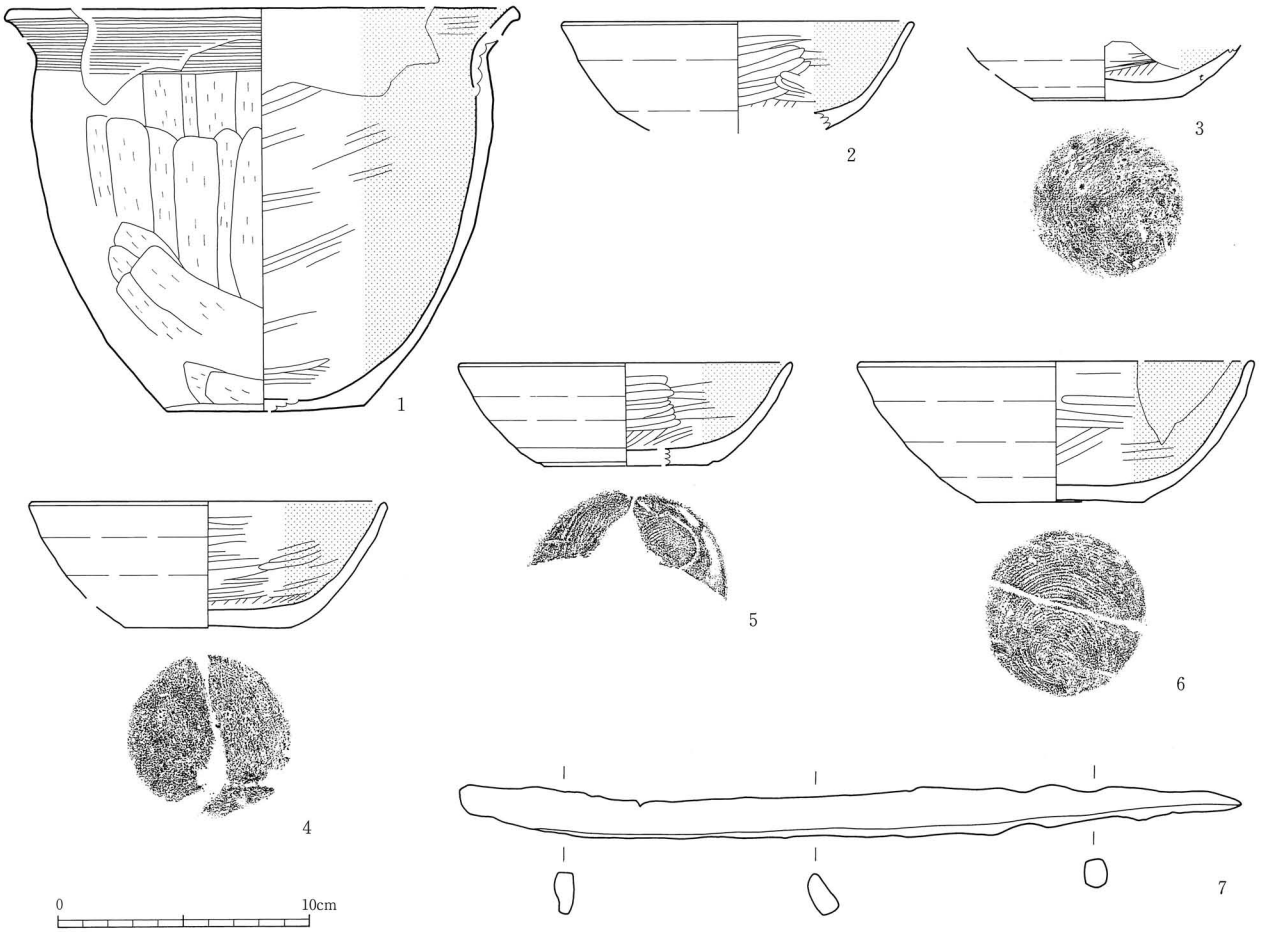
SI－２竪穴住居跡　【平面形・規模】２Ａ区で検出された。SI－４竪穴住居跡を切っている。北辺は調査区の外にのびているが、北西角付近が確認されているので住居跡の大きさは推定可能である。平面形は南北方向にやや長



土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	炭・焼土を少量含む。
2a			焼土と灰の混合層。

土層No.	土　色	土　質	備　考
2b	10YR4/1　褐灰色	シルト	東半部に炭片を含む。
煙道			焼土・灰・炭を混合する土層。

第111図　SI－２竪穴住居跡実測図



図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	C－3	2B区		SI－2	床面	3	土師器	甕	16.0	(20.1)	(8.0)	外面ヘラケズリ　内面ヘラミガキ、黒色処理	54－4
2	D－5	2B区		SI－2	カマド		土師器	坏	(4.3)	(13.8)	－	内面ヘラミガキ、黒色処理	
3	D－6	2B区		SI－2	床面	5	土師器	坏	(2.4)	－	6.0	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部ヘラケズリ	
4	D－3	2B区		SI－2	SK－1		土師器	坏	5.0	(13.9)	6.5	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部不明	55－3
5	D－4	2B区		SI－2			土師器	坏	(4.1)	(13.2)	(6.6)	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転糸切り	55－4
6	D－2	2B区		SI－2			土師器	坏	5.6	15.6	6.6	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転糸切り	55－2
7	N－1	2B区		SI－2	1層		鉄製品		30.8	1.8	0.9	棒状	57－6

第112図　SI－2竪穴住居跡出土遺物

い長方形を呈する。東西軸長は約3.6mである。南北軸長は3.8mである。

【堆積土と床面】検出面から床面までの深さは20cm前後である。カマドの前方部分を除くと堆積土は炭や焼土を含むにぶい黄褐色のシルト層1層である。SI－4竪穴住居跡の堆積土を床面としている。床面は僅かな起伏がある。貼床はない。

【柱穴と周溝】住居の床面では柱穴は検出されていない。周溝も検出されてない。

【カマド】カマドは東壁に作られている。中央よりやや南によって位置している。カマド本体は残っていないが、東壁に接して長軸42cm・短軸32cmの略楕円形の窪みがあり、壁際には石製の支脚が立ったまま出土し、支脚の反対側の床面は東西20cm・南北35cmの範囲で焼けていることからこの部分にカマドが存在したことがわかる。また、この焼土面と支脚を結んだ延長上の調査区東壁面に煙道の痕跡と考えられる焼け面と堆積土が観察される。

【その他の施設】東壁の中央付近には、SK－1土坑とした東西80cm・南北70cmの不整形な浅い窪みがある。この窪みは、東壁のほぼ中央に位置し、北側の壁面が焼けていることから、古いカマドのあった場所の可能性がある。住

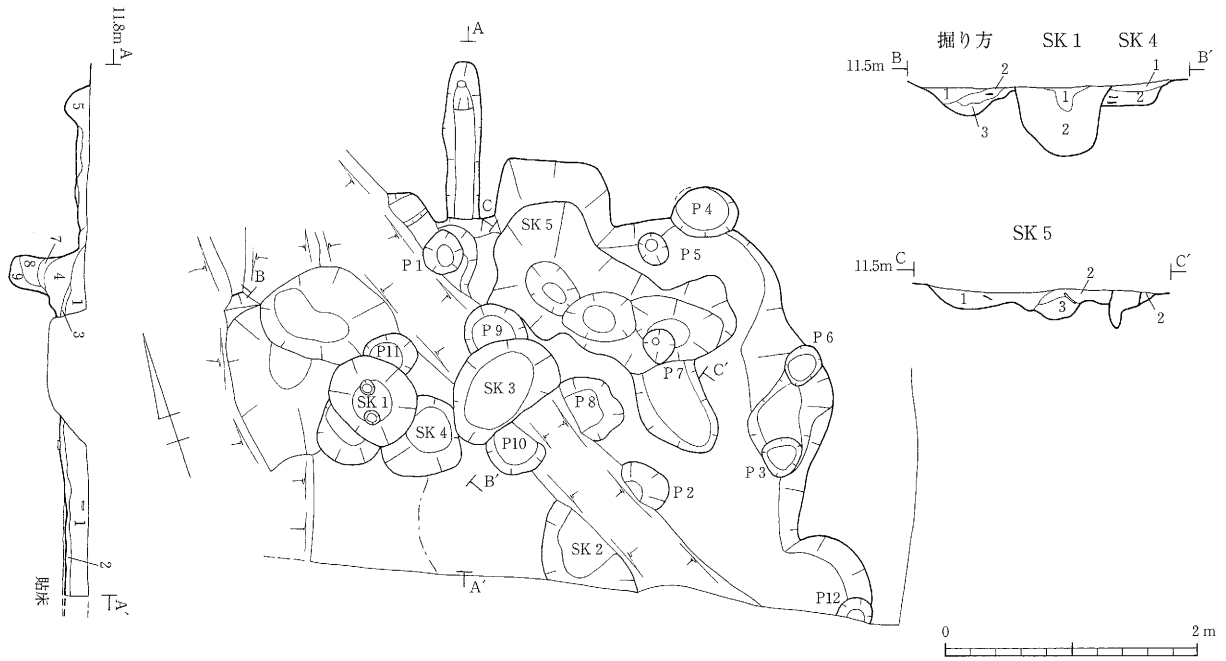
居の中央には直径約20cmの円形の焼土面がある。強く焼け締まっており、炉跡と考えられる。

【住居掘り方】SI－２竪穴住居跡も、掘り方の埋め土と認定できる土層は確認されなかった。

【出土遺物】図化した出土の遺物としては、土師器の坏が５点と甕が１点、及び鉄製品が１点ある（第112図）。土師器坏D－２は、やや大ぶりの坏で、口径の割に底径は小さく底部は回転糸切り無調整である。D－３は、SK－１土坑から出土した坏で、再酸化を受けて一部黒色処理がぬけている。底部は回転糸切り無調整である。D－４は、前２個体と比べるとやや浅い坏である。底部は回転糸切り無調整である。D－５は、坏体部の破片で、口縁端部が強く外反している。D－６は、坏の底部の破片で、底部外面は切り離し後手持ちヘラケズリ調整されている。C－３は、ロクロを使用していない甕で、外面は体部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデ調整されている。内面はヘラミガキ調整された後に黒色処理されている。その他土器の破片も多数出土しているが、床面付近から出土した須恵器の破片は３点に過ぎない。

鉄製品のN－１は現存長31.0cm・最大幅1.7cm・厚さ0.9cmの棒状の製品で、片方の端部は針状に尖っており反対側はやや扁平となっている。残存する端部は徐々に薄くなっている。

【住居の年代】SI－２竪穴住居跡の所属時期については、出土した５点の土師器坏ロクロが使用されたもので、底部は回転糸切り無調整のものが主体となっている。また、底部が切り離し後手持ちヘラケズリ調整されているものについても、底径が小さいものである。いずれも表杉ノ入式期のものであり、平安時代に位置付けられる。



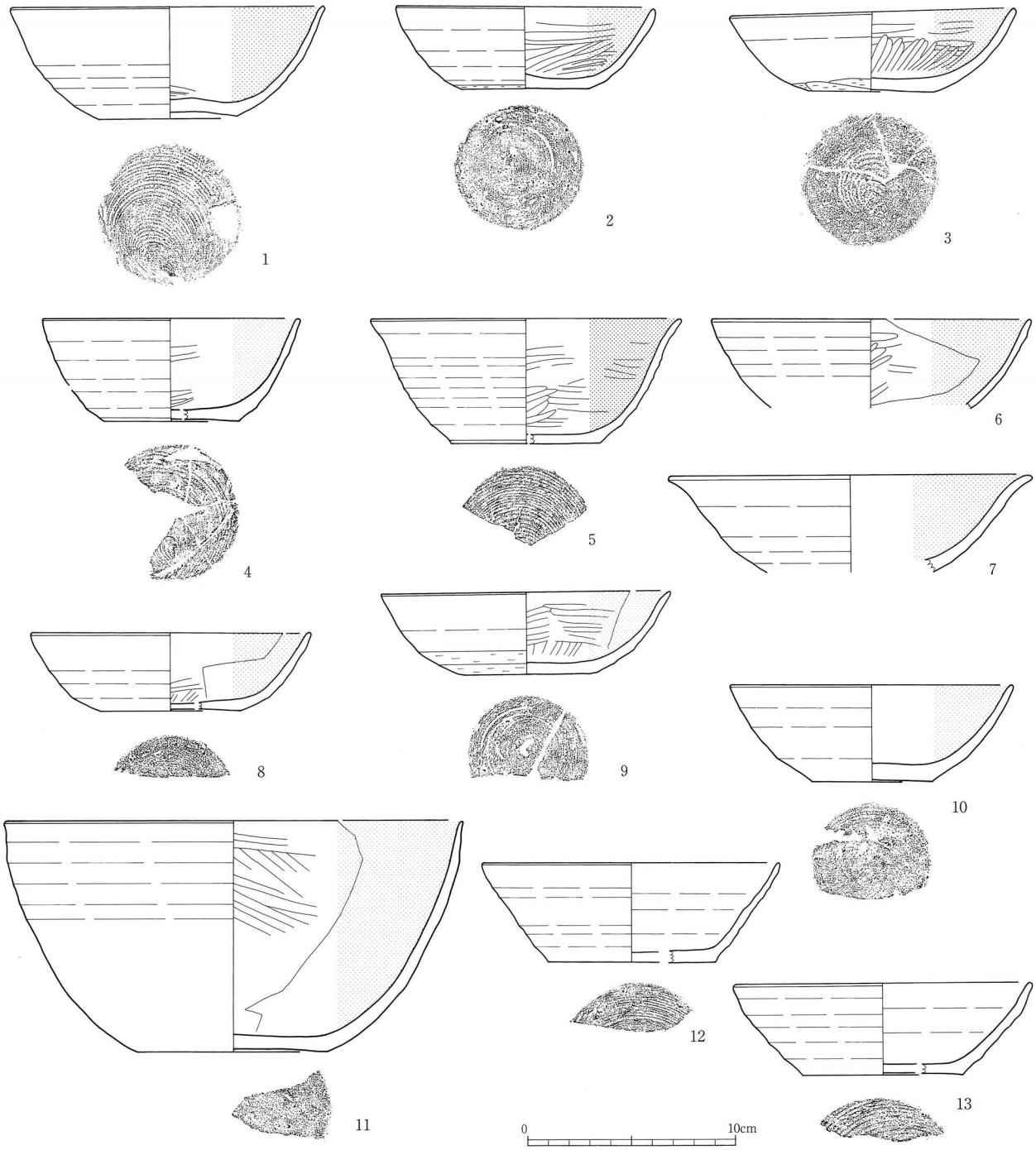
SI－３

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	焼土・炭を少量含む。
2	10YR5/1　褐灰色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層の小ブロックを少量含む。
3			灰層
4	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層の径５cm前後のブロック及び焼土片を含む。
5			炭・焼土混合層、基本層Ⅱ層のブロックを含む。
6			基本層Ⅱ層に焼土のブロックが混合。
7			基本層Ⅱ層のブロック状の堆積層。
8	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロック及び炭を含む。
9			基本層Ⅱ層に灰黄褐色土のブロックを含む。
10	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径３cm前後の基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。焼土含む。
11	10YR7/4　にぶい黄褐色	シルト	灰白色土と暗灰色土の５～10mmの薄層を縞状に含む。
SK－２	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径１cm前後の基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。

SK１・４・５　P７

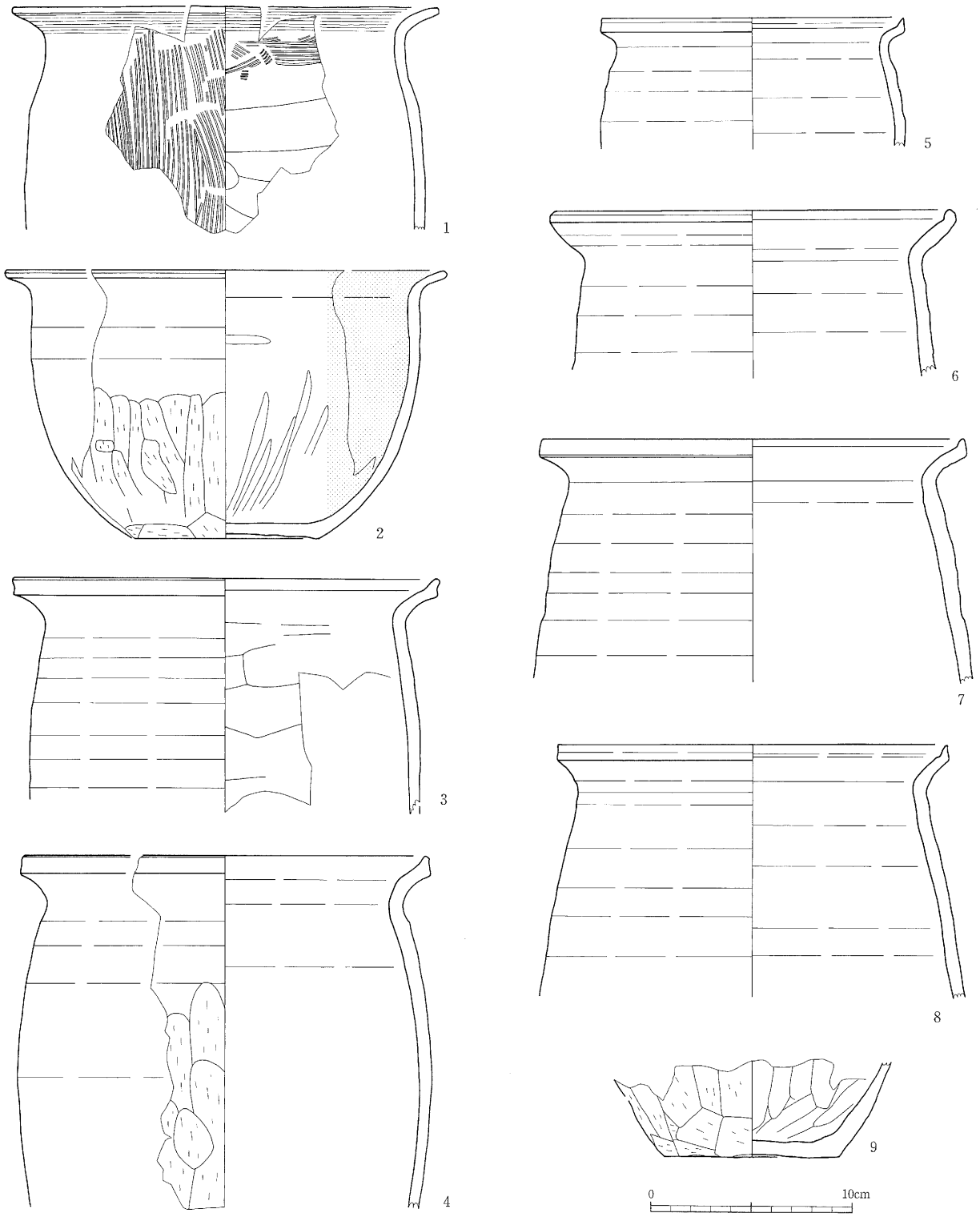
土層No.	土　色	土　質	備　考
掘り方１	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロック及び炭を含む。
2			灰を主体とし焼土粒やにぶい黄褐色土を含む。
3			基本層Ⅱ層に焼土のブロックを少量含む。
SK１　１	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	炭片を少量含む。
2	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。
SK４　１	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。
2	10YR4/1　褐灰色	シルト	焼土ブロック・炭片を多く含む。
SK５　１	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多く含む、焼土・炭を含む。
2	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロック及び炭片を少量含む。
3	10YR6/1　褐灰色	シルト	炭片を含む。
P７	10YR4/1　褐灰色	シルト	炭片を多く含む。焼土粉を含む。

第113図　SI－３竪穴住居跡実測図



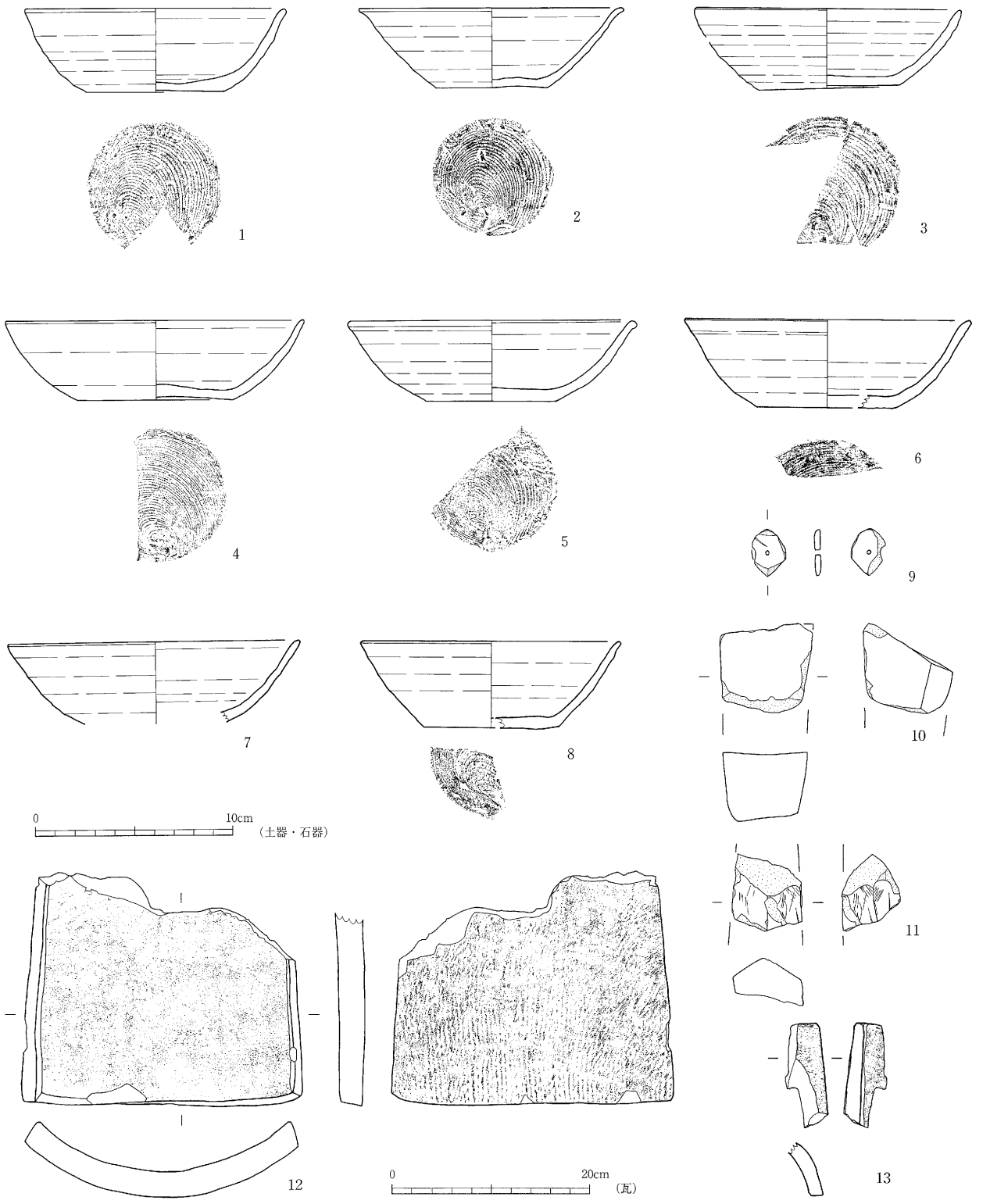
図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	D－7	1区		SI－3	北東1層		土師器	坏	5.4	15.0	6.6	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転糸切り	55－5
2	D－8	1区		SI－3	北東2層		土師器	坏	4.1	12.5	6.1	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転ヘラケズリ	55－6
3	D－9	1区		SI－3	煙道入口		土師器	坏	3.8	13.8	6.0	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転糸切りのち回転ヘラケズリ	55－7
4	D－10	1区		SI－3	SK－1・Pit 4		土師器	坏	4.9	12.2	(6.4)	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転糸切り	55－8
5	D－11	1区		SI－3	Pit 11		土師器	坏	6.0	(14.6)	(7.2)	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転糸切り	55－9
6	D－12	1区		SI－3		(40)	土師器	坏	(4.3)	(15.3)	－	内面ヘラミガキ、黒色処理	
7	D－14	1区		SI－3	SK－1		土師器	坏	(4.7)	(17.0)	－	内面ヘラミガキ、黒色処理（再酸化）	
8	D－13	1区		SI－3			土師器	坏	(6.6)	(13.4)	3.8	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転ヘラケズリ	
9	D－15	1区		SI－3			土師器	坏	3.9	(13.8)	(6.0)	外面ヘラケズリ　内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転ヘラケズリ	
10	D－16	1区		SI－3		(54)	土師器	坏	4.7	(13.5)	(5.7)	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部回転糸切り	
11	D－17	1区		SI－3		(46)	土師器	鉢	11.1	(20.0)	(9.1)	内面ヘラミガキ、黒色処理　底部ナデ？	
12	D－18	1区		SI－3	SK－5		赤焼土器	坏	4.8	(14.2)	(8.0)	内外面ロクロ　底部回転糸切り	55－10
13	D－19	1区		SI－3	Pit 10		赤焼土器	坏	4.4	(14.4)	(7.7)	内外面ロクロ　底部回転糸切り	

第114図　SI－3竪穴住居跡出土遺物1



図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	C－4	1区		SI－3		(46)	土師器	甕	(11.0)	(21.0)	－	外面ハケメ　内面ヘラナデ	54－7
2	D－27	1区		SI－3			土師器	甕	13.3	(21.7)	(9.3)	外面ヘラケズリ　内面ヘラミガキ、黒色処理	56－1
3	D－22	1区		SI－3	SK－3		土師器	甕	(11.5)	(21.1)	－	内面ナデ	
4	D－20	1区		SI－3		(46)	土師器	甕	(17.4)	(19.8)	－	外面ケズリ　内面ナデ（単位不明）	
5	D－26	1区		SI－3	SK－5		土師器	甕	(6.4)	(14.4)	－	内外面ロクロ	
6	D－24	1区		SI－3			土師器	甕	(8.2)	(19.5)	－	内外面ロクロ	
7	D－21	1区		SI－3			土師器	甕	(12.0)	(20.8)	－	内外面ロクロ	56－2
8	D－23	1区		SI－3	SK－1		土師器	甕	(12.5)	(19.2)	－	内外面ロクロ	
9	D－25	1区		SI－3	SK－5		土師器	甕	(4.8)	－	8.7	外面ヘラケズリ　内面ナデ	

第115図　SI－3竪穴住居跡出土遺物2



図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	E－3	1区		SI－3	SK－5		須恵器	坏	4.3	13.0	7.0	内外面ロクロ　底部回転糸切り	56－3
2	E－4	1区		SI－3	Pit 5		須恵器	坏	4.1	(13.4)	5.6	内外面ロクロ　底部回転糸切り　体部、底部に墨書あり	56－4
3	E－5	1区		SI－3			須恵器	坏	4.2	(13.3)	7.1	内外面ロクロ　底部回転糸切り	56－5
4	E－6	1区		SI－3		(40·41)	須恵器	坏	4.1	(15.1)	7.9	内外面ロクロ　底部回転糸切り	
5	E－7	1区		SI－3	堀り方		須恵器	坏	4.1	(14.2)	6.6	内外面ロクロ　底部回転糸切り	56－7
6	E－8	1区		SI－3		(54)	須恵器	坏	4.5	(14.3)	(7.1)	内外面ロクロ　底部回転糸切り	56－6

第116図　SI－3竪穴住居跡出土遺物3

図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	(調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期)	
7	E－9	1区		SI－3		(40)	須恵器	坏	(4.2)	(14.7)	－	内外面ロクロ	
8	E－10	1区		SI－3		(54)	須恵器	坏	4.4	(12.8)	(6.8)	内外面ロクロ　底部回転糸切り	
9	K－2	1区		SI－3			石製品	石製模造品	2.4	(1.7)	0.3	円盤、単孔（孔径0.2）	57－3
10	K－1	1区		SI－3		(53)	石製品	砥石	(4.6)	4.7	3.5		57－4
11	K－3	1区		SI－3	SK－3		石製品	砥石					57－5
12	G－1	1区		SI－3	1層		瓦	平瓦	(23.3)	(28.6)	2.6	凹面布目のちナデ　凸面縄タタキ	57－1
13	F－1	1区		SI－3	SK－3		瓦	丸瓦	(10.7)	(3.6)	(1.5)	凹面布目　凸面縄タタキのちナデ	57－2

SI－3竪穴住居跡　【平面形・規模】2B区で検出された。遺構の西部をSD－1・2・3溝跡に切られているため西辺は不明である。南辺は調査区の外にのびている。検出された北辺・東辺の壁面とも凹凸が著しく、一定していない。検出範囲は、東西軸長約4.8m・南北軸長は3.3mである。

【堆積土と床面】検出面から床面までの深さは20cm前後である。炭や焼土を含むにぶい灰黄褐色のシルト層が堆積土の上部を占め、下部は褐灰色ないしにぶい黄褐色土及びにぶい黄橙色のシルト層が床面を覆っている。床面では土坑5基とピット12個が検出されている。土坑とピットは特に北壁よりに集中的に存在している。煙道前方の調査区南壁近くの床面は、貼床されて堅く締まっている。

【柱穴と周溝】柱穴は明らかでない。周溝も検出されてない。

【カマド】カマド本体は残存していないが、北壁中央付近と考えられる位置に煙道が残っている。現存する煙道の規模は、長さ125cm・幅25cm・深さ8～20cmで、先端部分がピット状に下がっている。

【その他の施設】SK－1土坑は、SK－4土坑・ピット11を切る。東西67cm・南北71cmの円形を呈し、断面形がU字形で深さは54cmある。底面では直径12～13cmのピットが2個検出されている。SK－2土坑は、北東部をSD－3溝跡に切られ、南部が調査区外にのびる。検出部分で東西77cm・南北64cmを測る。深さは11cmある。SK－3土坑は、ピット9・10を切る。東西97cm・南北60cmの楕円形を呈し、深さは32cmを測る。SK－4土坑は、SK－1・3土坑に切られる。東西68cm・南北46cmで、深さは約20cmある。SK－5土坑は、南北242cm・東西107cmを測る不整形の土坑である。底面には長軸に沿って緩やかな凹凸があり、深さは8～24cmである。

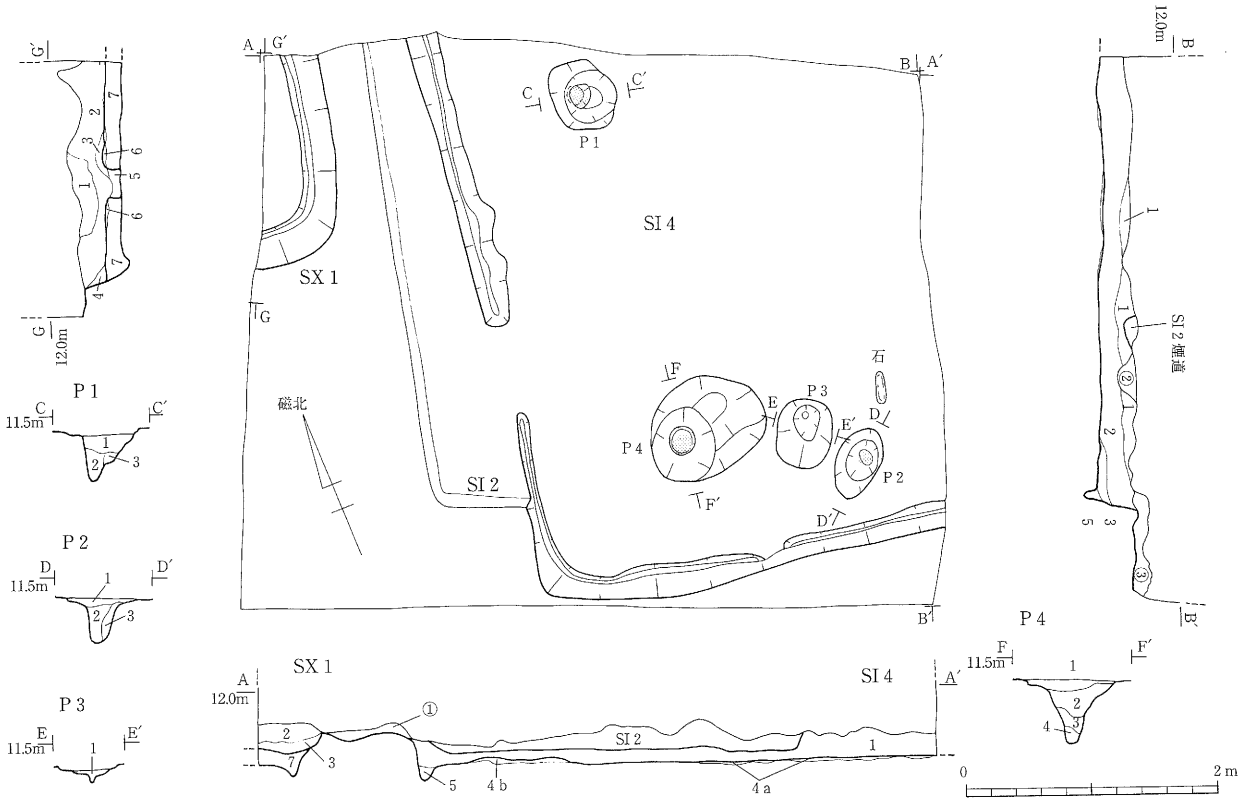
【住居掘り方】SK－1土坑の北側で検出された落ち込みについては、住居の掘り方と考えたが、炭・灰・焼土等を含んでいることや、他の部分で掘り方埋土に相当する土層が確認できなかったので、土坑の可能性も考えられる。

【出土遺物】堆積土・床面及び床面検出遺構から多量遺物が出土している。図化した出土の遺物としては、非ロクロ土師器甕が2点、ロクロを使用した土師器坏10点・鉢1点・甕8及び赤焼け土器坏2点、須恵器坏8点、古代瓦2点、石製品2点ある（第114～116図）。非ロクロ土師器甕C－4は、体部上半から口縁部にかけての破片で、口縁部は強く外側に折れ、口唇部は平坦になっている。口縁部はヨコナデ調整され、体部は外面がハケメ調整・内面がヨコナデ調整されている。C－5（図版54－5）は甕ノ胴部の破片で、外面がハケメ調整・内面がヨコナデ調整されている。2点ともロクロ土師器に伴ってみられる器形の非ロクロ土師器の甕である。ロクロ土師器の坏は、底部が回転糸切り無調整のものと、切り離し後手持ちヘラケズリ調整・切り離し後回転ヘラケズリ調整のものがある。底部の調整技法と出土層位との相関関係は明らかでない。ロクロ土師器の鉢は、比較的広い底部から内湾する体部に強く外傾する口縁が付き、ロクロ調整の後体部下半が縦方向にヘラケズリ調整されている。ロクロ土師器甕は、やや内湾する筒状の体部に受け口状の口縁部が付くもので、体部下半はヘラケズリ調整されている。赤焼け土器の坏は、ロクロ土師器坏と器形・法量的に大差のないものである。

須恵器坏は、器高に比して底径の小さいもので、底部はいずれも回転糸切り無調整である。平瓦G－1は、凸面縄叩き無調整、凹面布目後ナデ調整されるもので、宮城県多賀城跡調査研究所の平瓦の分類ではⅡB類のaタイプのものである。石製品は砥石2点（K－1・3）と、古墳時代中期の石製模造品の破片と考えられるものが1点

（K－２）ある。

【住居の年代】SI－３竪穴住居跡の所属時期については、出土した土師器坏がロクロを使用したものであることから、表杉ノ入式期に位置付けられ、平安時代と考えられる。



SI 4

土層No.	土　色	土　質	備　考
①	10YR3/1　黒褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを含む。
②	10YR6/1　褐灰色	シルト	しまりなし。
③	10YR3/1　黒褐色	シルト	基本層Ⅱ層の小ブロックを少量含む。しまりなし。
1	10YR6/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロック及び焼土を含む。
2	10YR6/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを含む、炭片を含む。
3	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	住居の東南部にのみ分布。
4 a	10YR8/1　灰白色	シルト	貼床。
4 b	10YR5/1　褐灰色	シルト	貼床。
5	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多く含む、周溝埋土。

SX 1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅱ層のブロックを多量に含む。
2	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層の細かなブロックをわずかに含む。
3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	焼土粒を多量に含む。
4	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層の細かなブロックを多く含む。
5			焼土粒がまとまって堆積、褐灰色シルトを含む。
6	10YR8/1　灰白色	シルト	上面にしまりあり、床面？
7	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層の大きなブロックを多く含む。掘り方埋土？

SI 4 ピット

土層No.		土　色	土　質	備　考
P 1	1	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	炭片を少量含む。
	2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	しまり弱く炭片を含む。
	3	10YR8/6　黄橙色	シルト	基本層Ⅱ層に褐灰色土の細かなブロックを少量含む。
P 2	1	10YR5/2　灰黄褐色	シルト	
	2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	炭片を少量含む。しまり弱い。
	3	10YR8/6　黄橙色	シルト	基本層Ⅱ層に黒褐色土の小ブロックを含む。
P 3	1	10YR4/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅱ層のブロック及び炭・焼土を含む。
P 4	1	2.5Y8/2　灰白色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層のブロックを含む。
	2	2.5Y6/1　黄灰色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層のブロックを含む。
	3	2.5Y7/2　灰黄色	粘土質シルト	
	4	2.5Y5/1　黄灰色	粘土質シルト	粘性はあるが、しまり弱い。

第117図　SI－４竪穴住居跡・SX－１遺構実測図

SI－４竪穴住居跡　【平面形・規模】２Ｂ区で検出された。北辺と東辺は調査区の外にのびている。検出部分の北西部の堆積土上部もSI－２竪穴住居跡によって削平されている。検出部で東西軸長は約3.8m・南北軸長4.7mを測るが、平面形が方形の住居であれば、柱痕跡の位置から１辺の長さは5.2～5.4mと推察される。

【堆積土と床面】検出面から床面までの深さはSI－２竪穴住居跡による削平を受けていない部分で25cm前後である。住居廃絶後の堆積土は３層に分けられるが、いずれも自然堆積層と観察される。床面はほぼ平坦で、部分的に灰白

色ないし褐灰色のシルトによる貼床がある。ピット３の周辺は良く締まっている。

【柱穴と周溝】住居の対角線上に位置するピット４及びこれと対応関係にあるピット１は主柱穴と考えられる。ピット１は長軸55cm・短軸50cmの不整形の掘り方で、床面からの深さは42cmを測る。柱痕跡は直径約15cmの円形である。ピット４は長軸97cm・短軸75cmの楕円形の掘り方で、床面からの深さは50cmである。柱痕跡は直径約16cmの円形である。ピット２も柱痕跡が確認されているがどのような役割の柱穴であるか明らかでない。

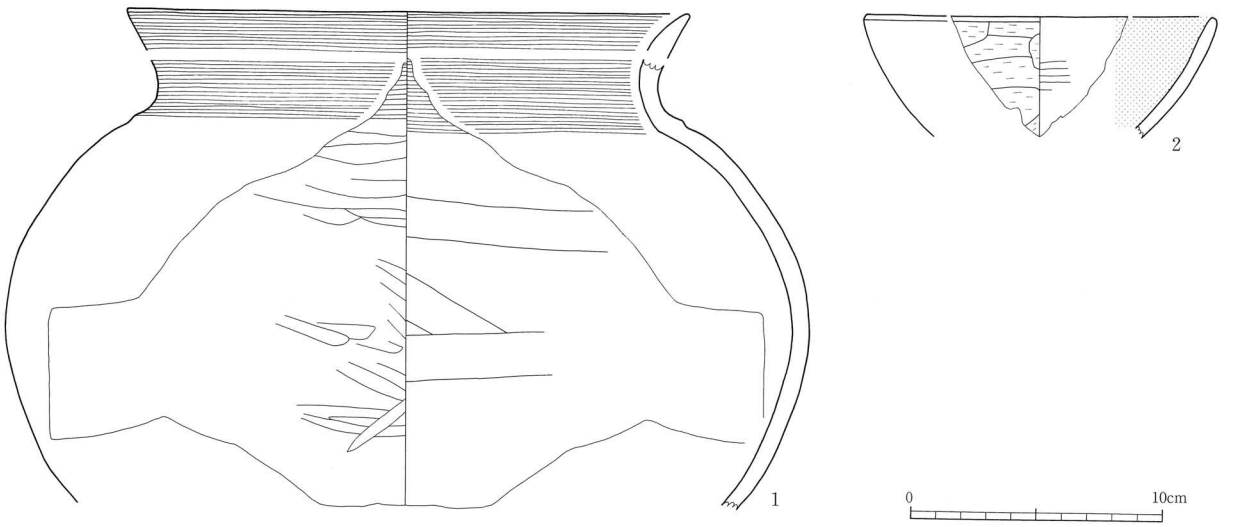
周溝は調査部の壁面に沿って検出されている。幅は20cm前後で、床面からの深さは４～８cmである。

【カマド】カマドの位置は不明である。検出部の南壁及び西壁に存在していないことから判断すると、北壁ないし東壁に位置していると推定される。

【住居掘り方】SI－４竪穴住居跡では、掘り方の埋め土と認定できる土層は確認されなかった。

【出土遺物】出土遺物は多くない。図化できる遺物としては非ロクロ土師器の甕が１点あるだけである（第118図）。C－６は、体部が扁平な球形の甕で、体部と口縁部の境に軽く段がつく。口縁部は比較的強く外反する。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、体部が外面ヘラケズリ調整、内面がヨコナデ調整されている。

【住居の年代】SI－４竪穴住居跡の所属時期については、出土遺物が少ないために明瞭ではないが、図示した土器の頚部に段が形成されていることや、出土土器片の中に内面黒色処理された非ロクロ土師器坏片が３点ほど見られることから、栗囲式期または国分寺下層式の土師器と想定され、古墳時代後期～奈良時代頃の年代が考えられる。



図中番号	登録番号	出土地点					分類		法量			特徴・備考	写真図版
		出土区	基本層	遺構名	遺構層	取上No.	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・厚	（調整・重量・素材・樹種・木取・産地・時期）	
1	C－６	２B区		SI－４	埋土		土師器	甕	(19.5)	(22.2)	－	外面ヘラケズリのちヘラミガキ　内面ナデ	54－６
2	C－７	２B区		SX－１			土師器	坏	(4.8)	(13.6)	－	外面ヘラケズリ　内面ヘラミガキ、黒色処理	

第118図　SI－４竪穴住居跡・SX－１遺構出土遺物

４）その他の遺構

SX－１遺構　２B区の北西角で方形の遺構の東南部が検出された。検出部分で東西58cm・南北170cmである。底面が２面あり、上面のまでの深さ約20cm、下面までの深さ約30cmを測る。各面とも平坦になっている。下面の壁際は、５cm前後の深さで周溝状に下がっている。遺物は土師器片７点と須恵器片１点があるだけである。土師器片はいずれも非ロクロのもので、内１点は体部から口縁部まで内湾しながら立ちあがる坏である（第118図）。外面はヘラケズリ調整、内面はヘラミガキの後黒色処理されている。この土師器については国分寺下層式に位置付けられるものと考えられるが、遺構の時期については、資料が少ないので確定できない。

6　まとめ

① 4軒の竪穴住居跡と3条の溝跡及びその他の遺構が1基検出された。

② 竪穴住居跡には、古墳時代後期～奈良時代の可能性のあるもの1軒・奈良時代のもの1軒・平安時代のもの2軒がある。

③ 竪穴住居跡は、各時期ともほぼ南北方向に軸を持ち、カマドは北壁または東壁に配されている。

④ 奈良・平安時代の竪穴住居跡は1辺が4m前後と比較的規模が小さく、床面では柱穴が確認できなかった。

⑤ 古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡は、1辺が5mを超え、床面で柱穴が検出された。

⑥ 3条の溝跡は古い方からSD－3→SD－2→SD－1と変遷し、SD－2はさらに新旧2時期ある。

⑦ SD－3溝跡の堆積土下部に灰白色火山灰が認められ、また、堆積層中から常滑産の中世陶器が出土していることから、SD－3溝跡は10世紀初頭には存在し中世にかけて埋没したと考えられる。

⑧ SD－3溝跡より新しいSD－1・2溝跡については、中世遺構に掘削された遺構と考えられる。

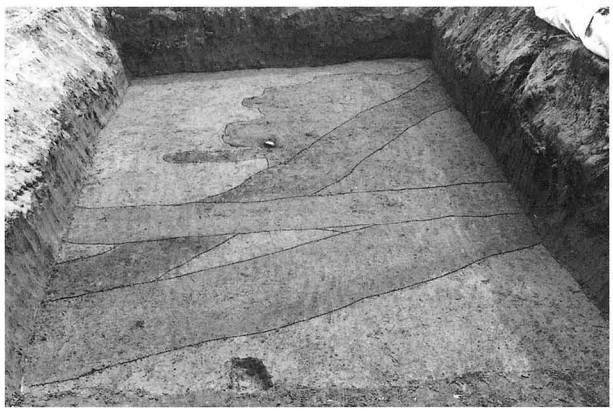
参考文献

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』

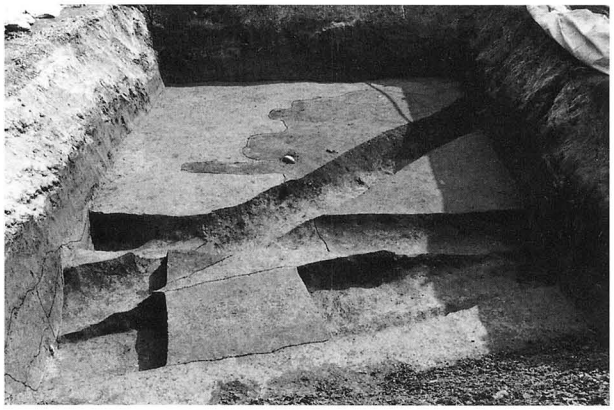
氏家和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史』柏倉亮吉教授還暦記念会刊

進藤秋輝・高野芳宏・白鳥良一他（1982）：「多賀城跡　政庁跡　本文編」宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会

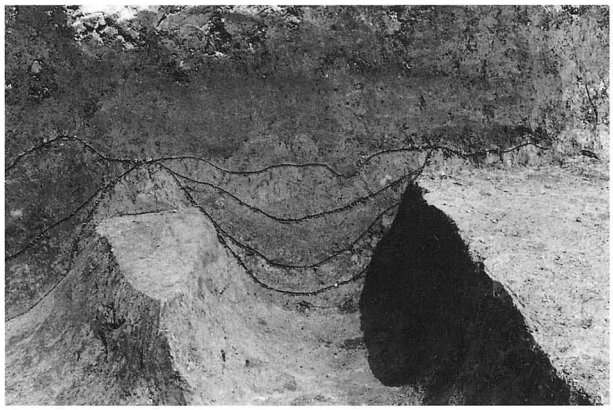
1　2区調査風景



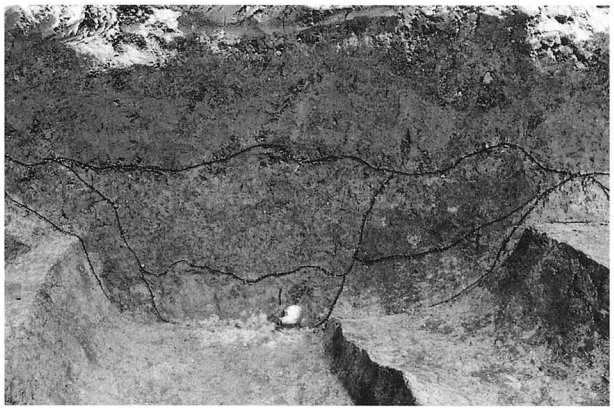
2　SD－1・2・3溝跡検出状況（西より）



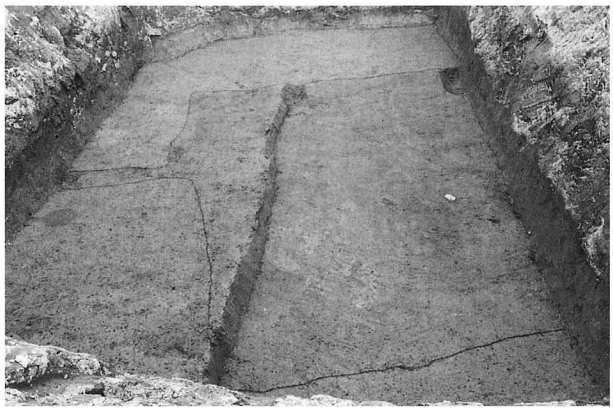
3　SD－1・2・3溝跡全景



4　SD－1溝跡断面（南より）

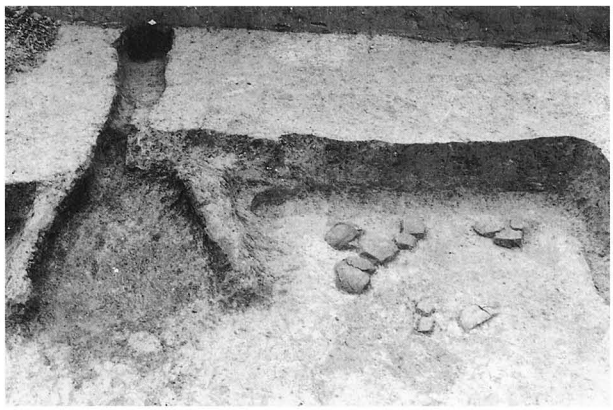


5　SD－2・3溝跡断面（南より）



6　SI1竪穴住居跡検出状況（西より）

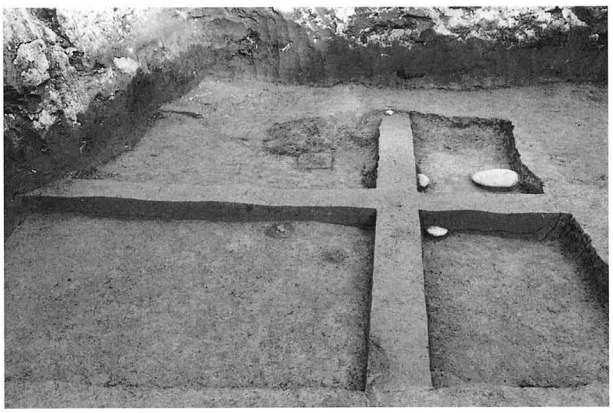
7　SI1竪穴住居跡全景（南より）



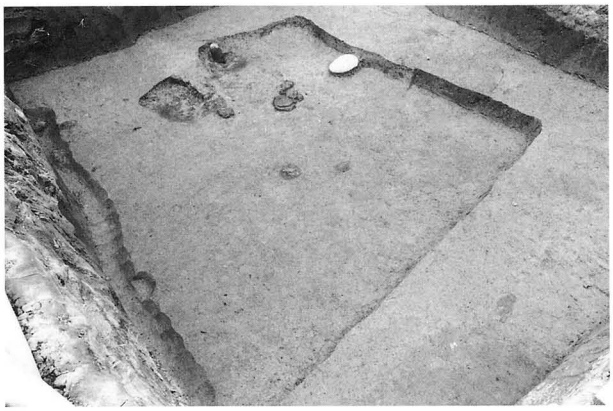
8　SI1カマド周辺（南より）

図版50　2区遠景・SI1竪穴住居跡

1　SI２竪穴住居跡検出状況（南より）



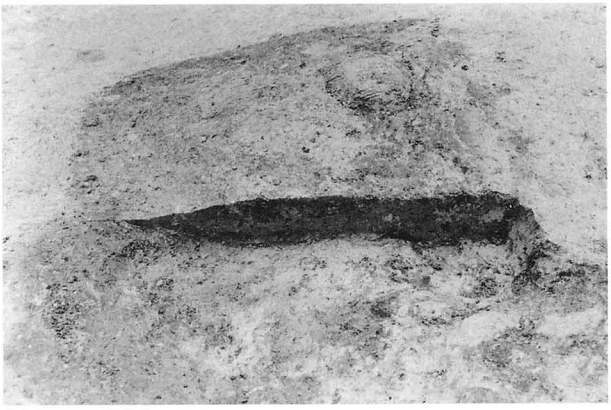
2　SI２断面（西より）



3　SI２竪穴住居跡全景（北西より）

4　SI２カマド部周辺（南より）

5　SI２カマド支脚（南より）

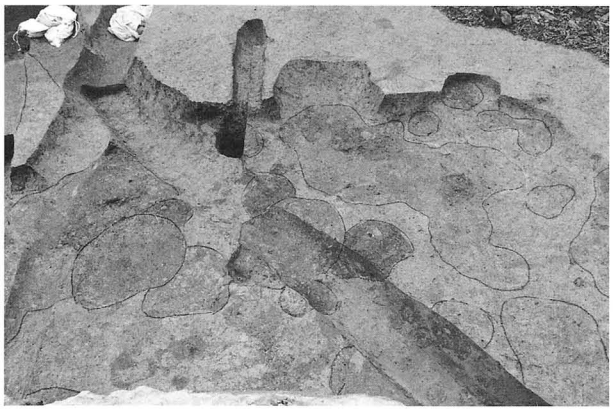


6　SI２内SK－１断面（西より）

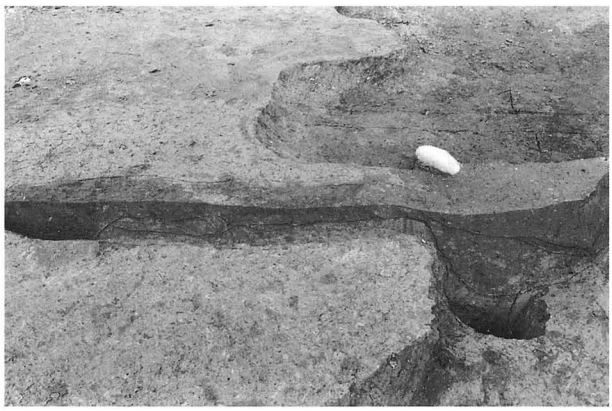
7　SI２内SK－１全景（西より）

8　SI２床面検出炉跡（南より）

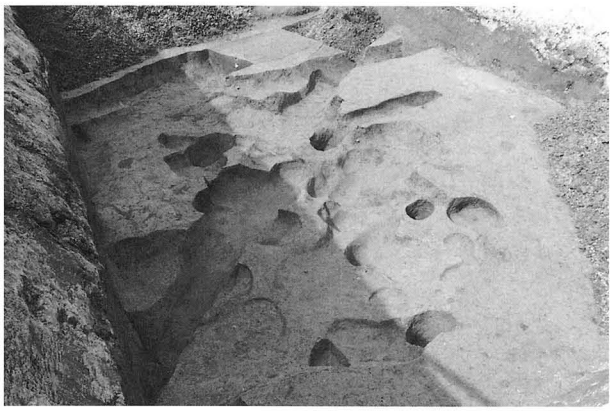
図版51　SI２竪穴住居跡



1　SI 3 竪穴住居跡床面検出状況（南より）



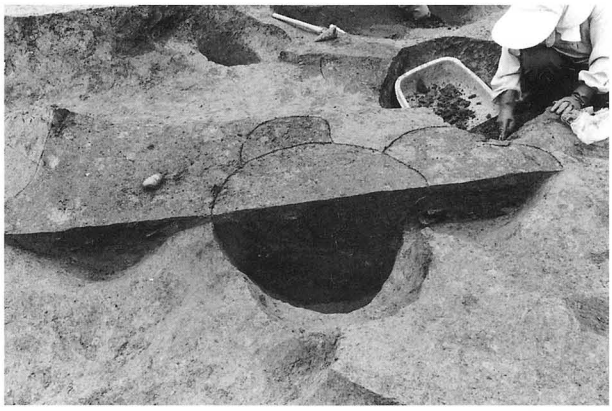
2　SI 3 煙道・ピット 1 断面（西より）



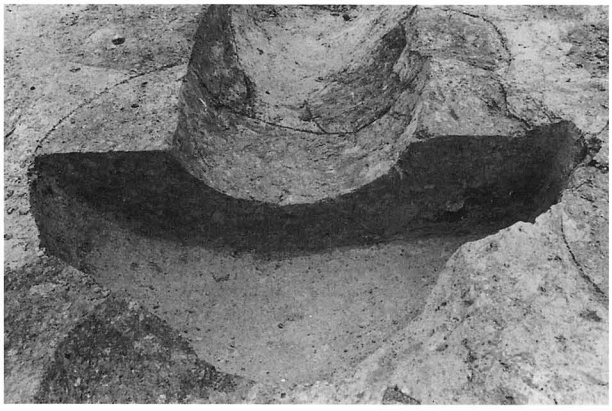
3　SI 3 竪穴住居跡全景（南東より）

4　SI 3 竪穴住居跡全景（北より）

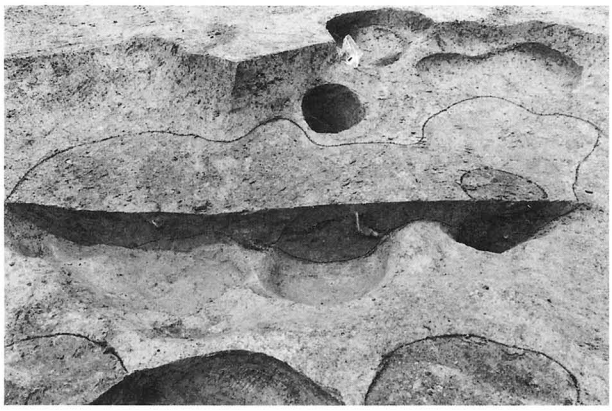
5　SI 3 内SK－ 1 （西より）



6　SI 3 内SK－ 2 ・ 4 （南西より）

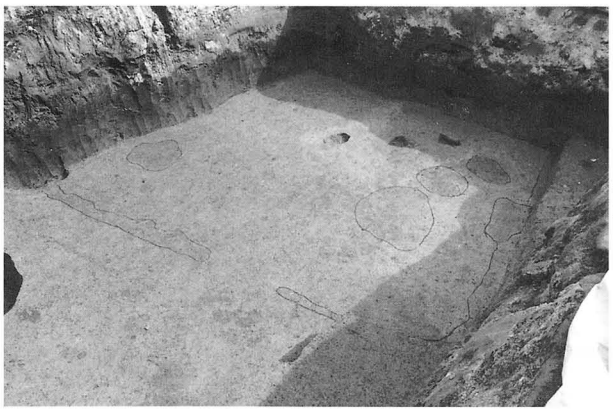


7　SI 3 内SK－ 3 （北より）

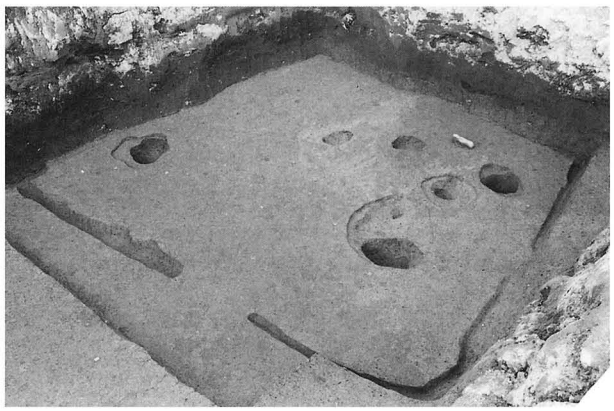


8　SI 3 内SK－ 5 （南西より）

図版52　SI 3 竪穴住居跡

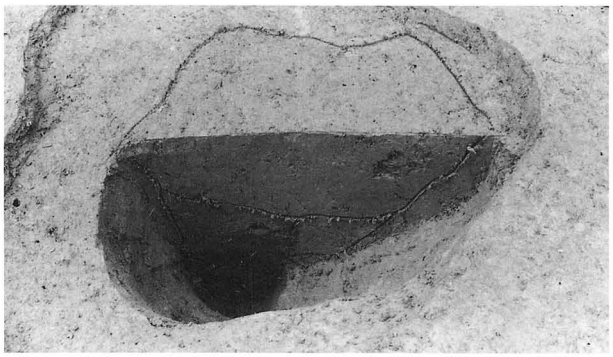


1　SI 4 竪穴住居跡床面検出状況（南西より）

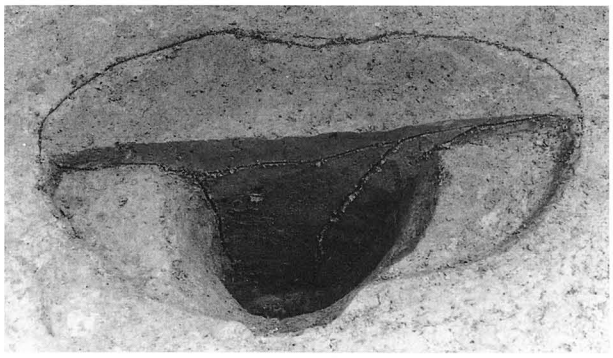


2　SI 4 竪穴住居跡全景（南西より）

3　SI 4 竪穴住居跡断面（南より）



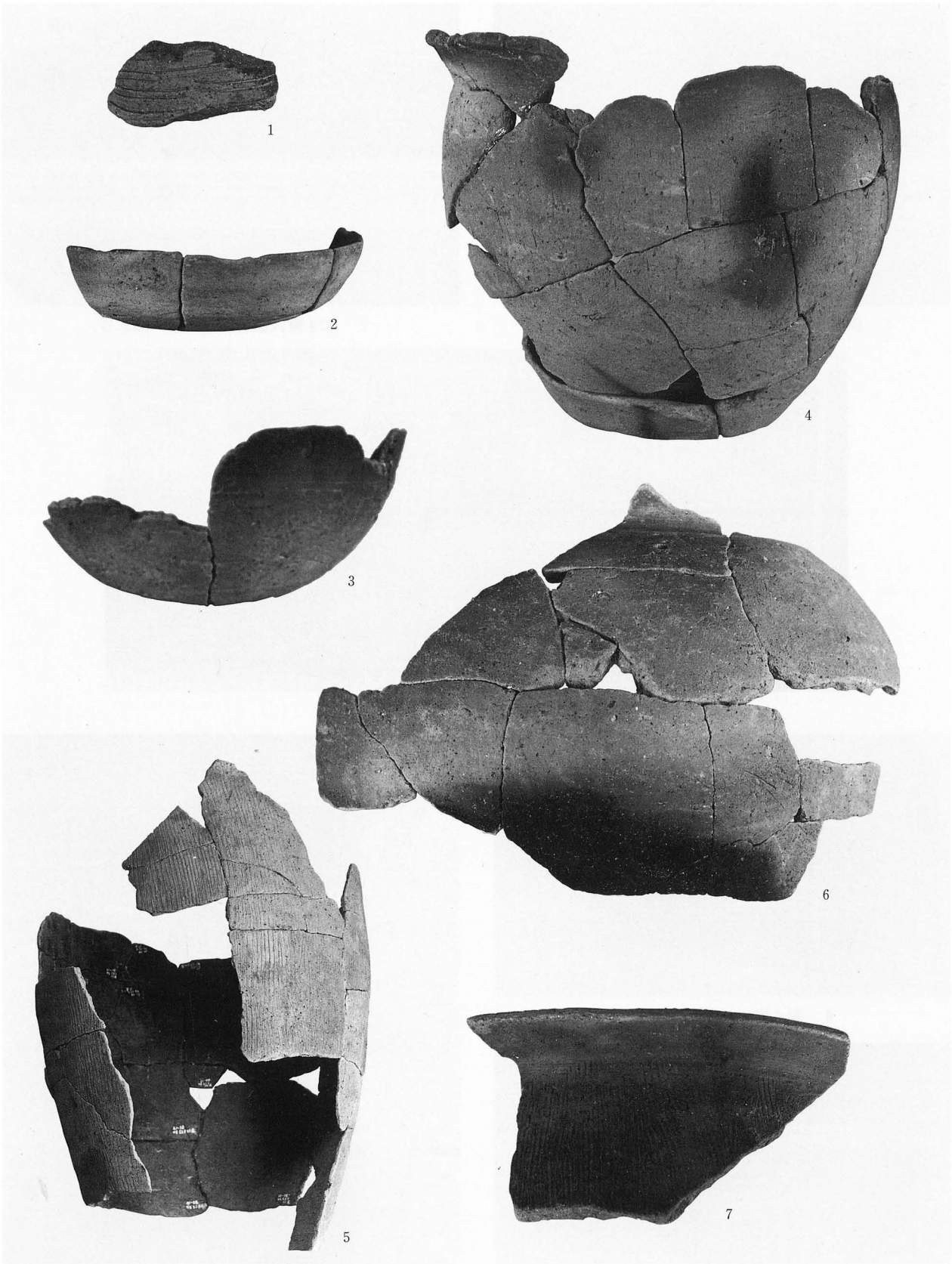
4　SI 4 内ピット 1（南より）



5　SI 4 内ピット 2（北より）

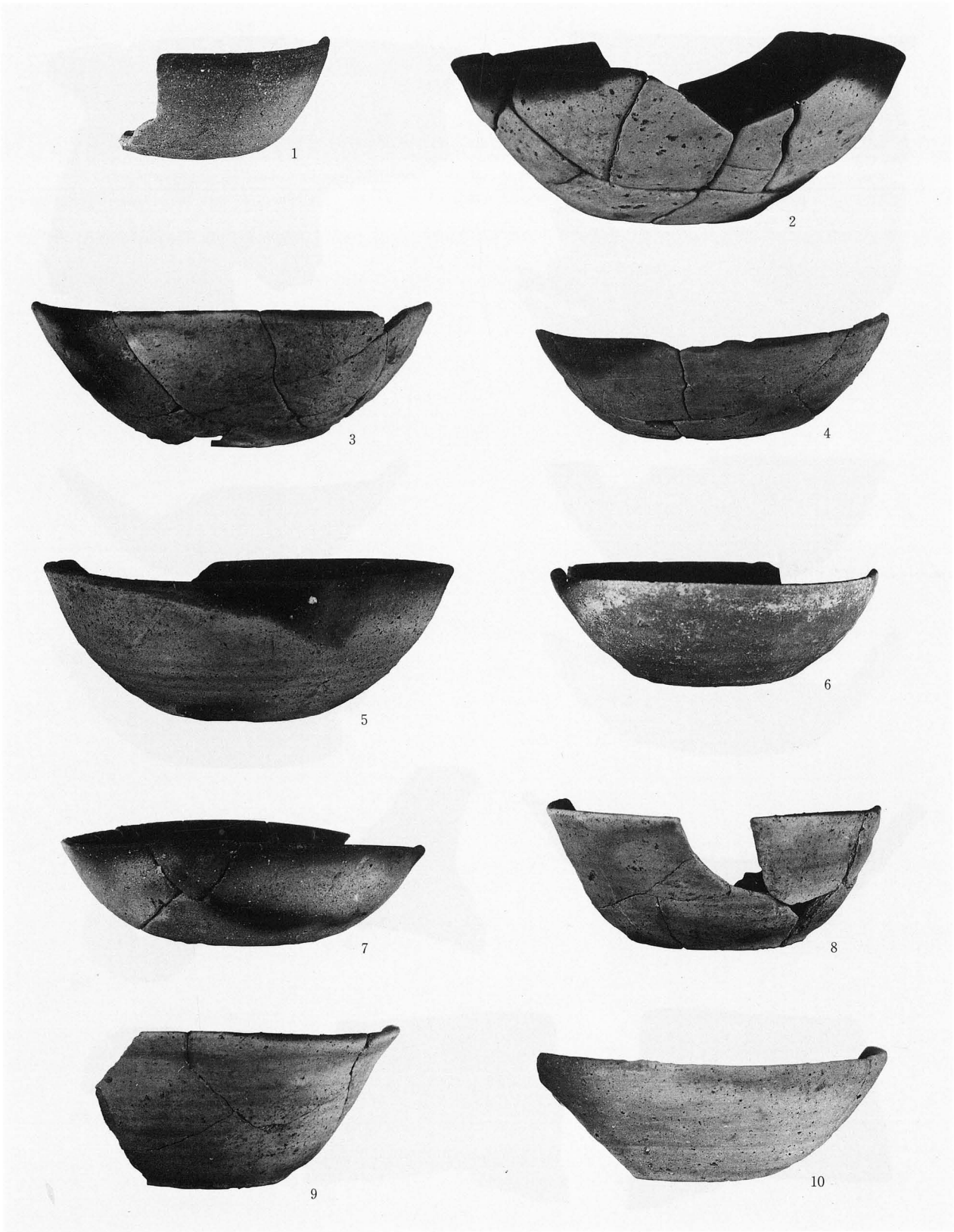
6　SX－1 遺構全景（南より）

図版53　SI 4 竪穴住居跡・SX 1 遺構



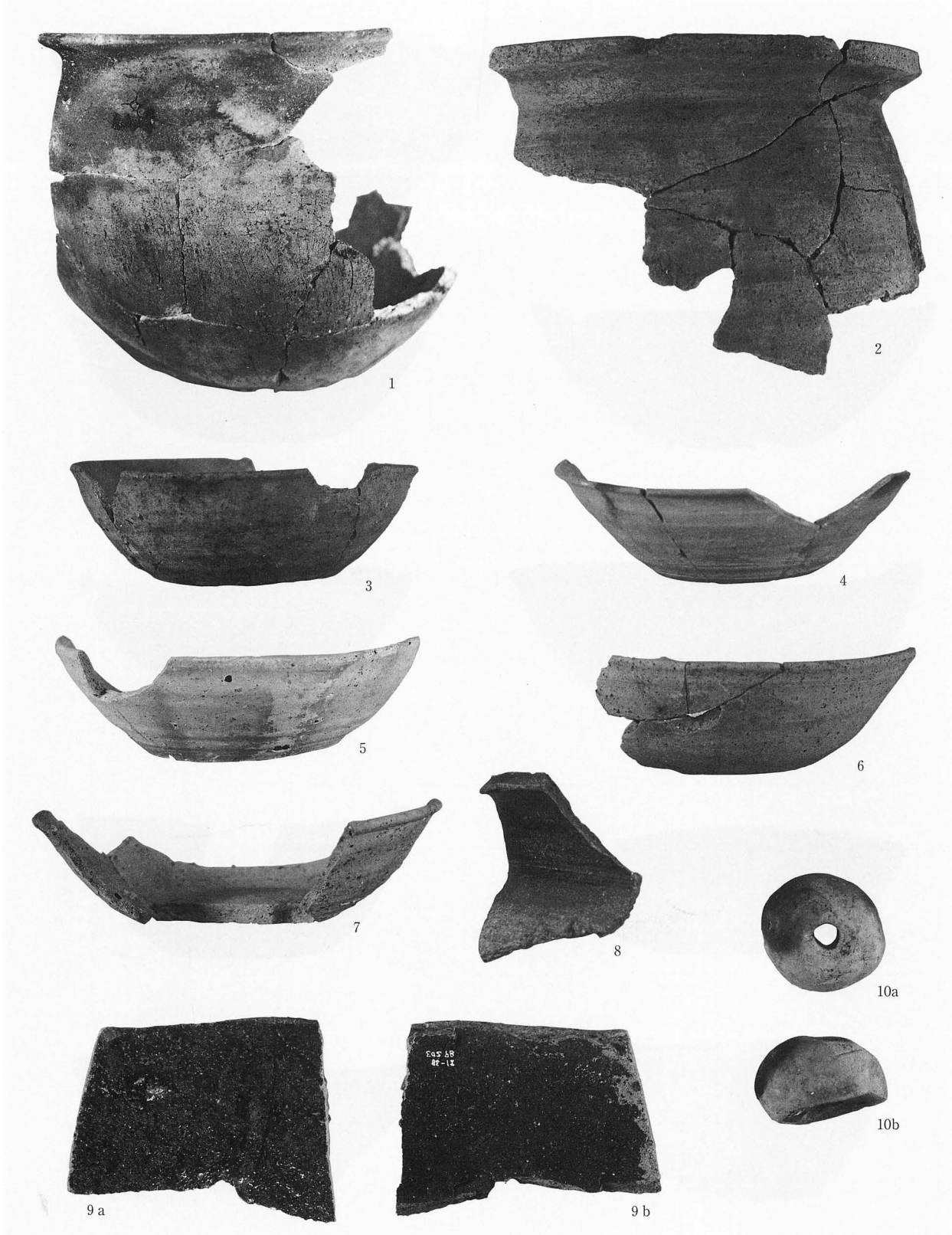
1　弥生土器　壷　B－1（SI－1　第110図1）
2　土師器　坏　C－1（SI－1　第110図2）
3　土師器　坏　C－2（SI－1　第110図3）
4　土師器　甕　C－3（SI－2　第112図1）
5　土師器　甕　C－5（SI－3）
6　土師器　甕　C－6（SI－4　第118図1）
7　土師器　甕　C－4（SI－3　第115図1）

図版54　出土遺物1



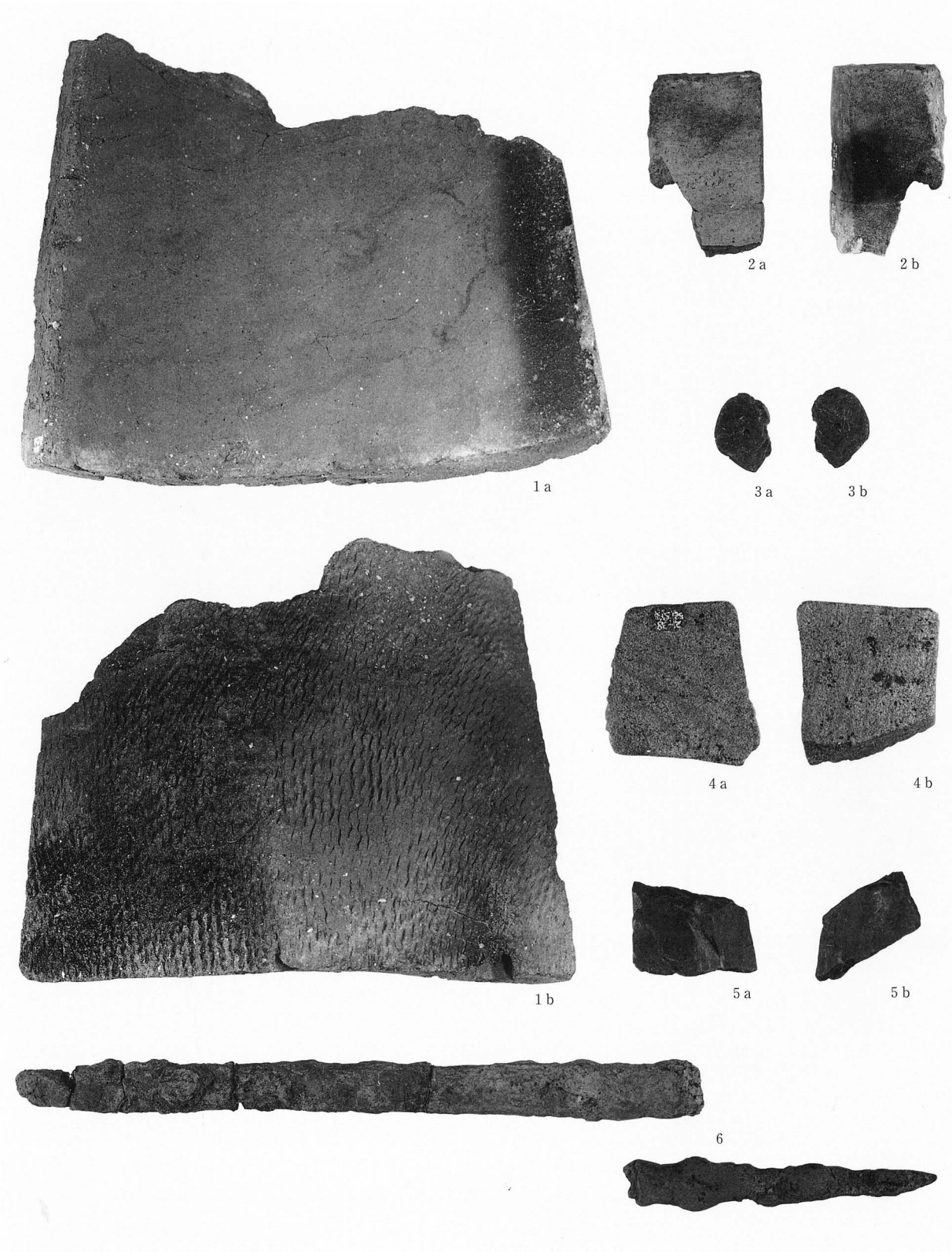
1　土師器　坏　D－1（SD－1　第108図1）
2　土師器　坏　D－2（SI－2　第112図6）
3　土師器　坏　D－3（SI－2　第112図4）
4　土師器　坏　D－4（SI－2　第112図5）
5　土師器　坏　D－7（SI－3　第114図1）
6　土師器　坏　D－8（SI－3　第114図2）
7　土師器　坏　D－9（SI－3　第114図3）
8　土師器　坏　D－10（SI－3　第114図4）
9　土師器　坏　D－11（SI－3　第114図5）
10　赤焼土器　坏　D－18（SI－3　第114図12）

図版55　出土遺物2



1　土師器　甕　D－27（SI－3　第115図2）
2　土師器　甕　D－21（SI－3　第115図7）
3　須恵器　坏　E－3（SI－3　第116図1）
4　須恵器　坏　E－4（SI－3　第116図2）
5　須恵器　坏　E－5（SI－3　第116図3）
6　須恵器　坏　E－8（SI－3　第116図6）
7　須恵器　坏　E－7（SI－3　第116図5）
8　須恵器　甕　E－1（SD－3　第108図2）
9　陶器　甕　I－1（SD－3）
10　土製品　土玉　P－1（SI－1　第110図5）

図版56　出土遺物3



1　瓦　平瓦　　G－1（SI－3　第116図12）
2　瓦　丸瓦　　F－1（SI－3　第116図13）
3　石製模造品　K－2（SI－3　第116図9）
4　砥石　　K－1（SI－3　第116図10）
5　砥石　　K－3（SI－3　第116図11）
6　棒状鉄製品　N－1（SI－2　第112図7）

図版57　出土遺物4

Ⅻ　南小泉遺跡（第39次）発掘調査報告書

1．調査要項

遺 跡 名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）	調査面積	28㎡
調査地点	若林区遠見塚一丁目26番18	調査原因	個人住宅建設
調査期間	平成14年10月15日～10月17日	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査対象面積	68㎡	担当職員	教諭　豊村幸宏

2　遺跡の位置と環境

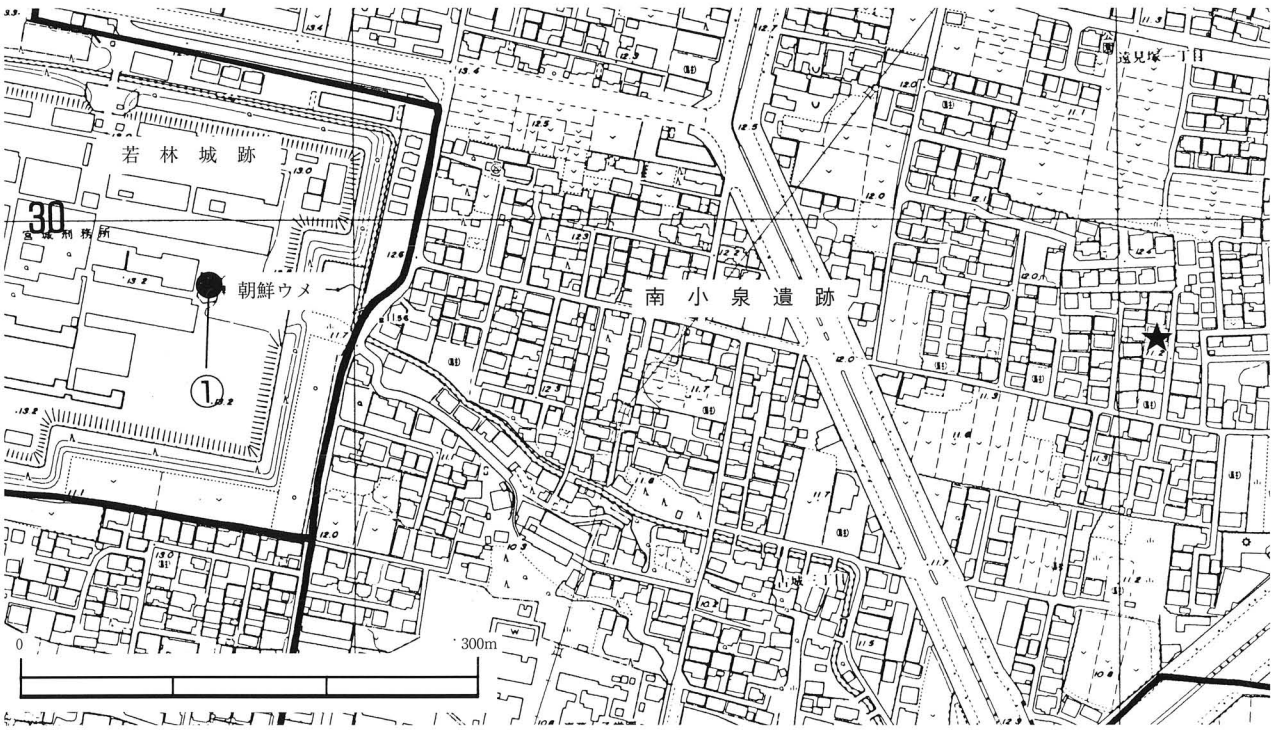
遺跡の環境については第37・38次発掘調査報告書を参照されたい。今回の調査地点は、遺跡の南部に当り標高は11.5mである。

3　調査に至る経過と調査方法

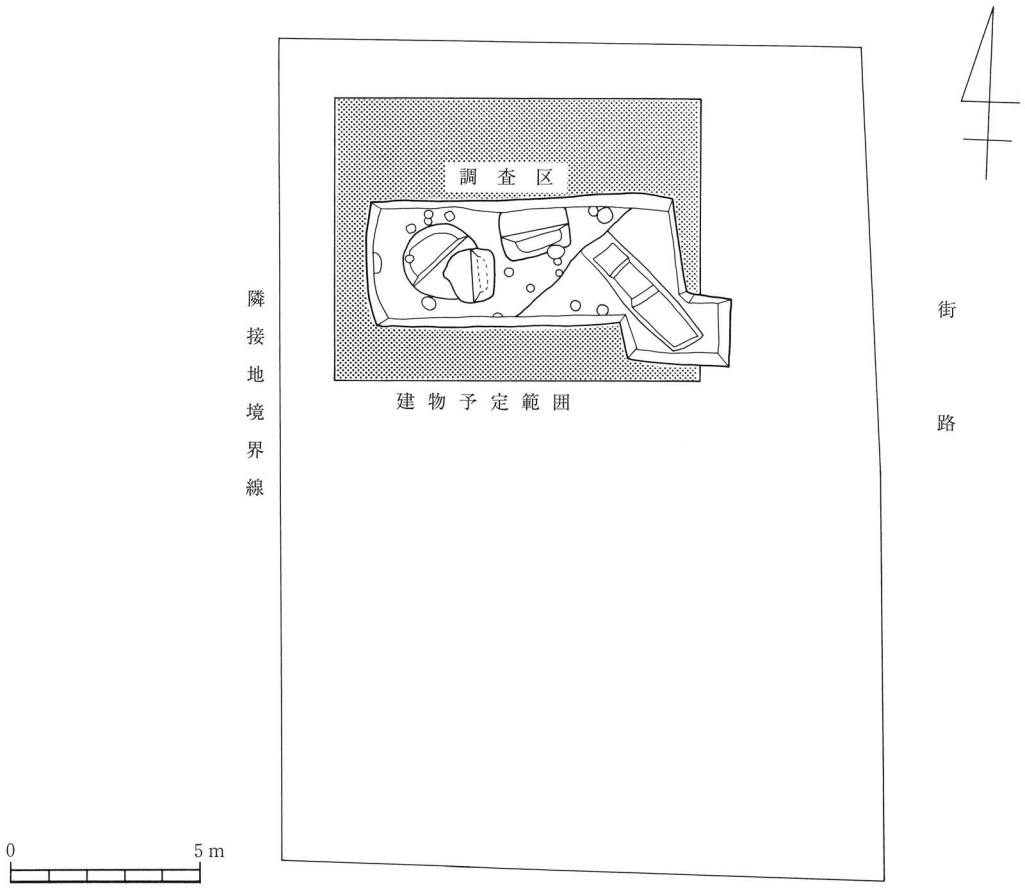
平成14年９月18日付けで千葉孝雄、千葉二三子氏より仙台市若林区遠見塚一丁目26番18に於ける柱状地盤改良工事を伴う鉄骨造２階建個人住宅建築工事に係わる発掘届が提出された（教生文第４－149号で回答）。これを受けて平成14年10月15日に、建物予定地内に東西８m、南北３mの調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、溝跡１条、井戸跡１基、土坑２基、ピット多数が検出されたため引き続き本調査へと移行した。調査は、重機によりⅠ、Ⅱ層を排除し、Ⅲ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。

4　基本層序

調査区で確認した基本層は、Ⅰ層からⅢ層まで大別３層である。Ⅰ層は木炭粒、焼土粒、径１～３cmの礫を含む黒褐色シルト層で旧畑耕作土である。Ⅱ層は木炭粒、焼土粒を含む暗褐色シルト層である。Ⅲ層は酸化鉄斑を含む



第119図　調査地点と周辺の地形



第120図　調査区配置図（1/200）

黄褐色粘土質シルト層でこの地域一帯の基盤となる自然堆積層である。今回検出した遺構は、全てこの層の上面が掘り込み面となっている。

5　発見遺構と出土遺物

検出された遺構は、溝跡１条、井戸跡１基、土坑２基、ピット18基である。

１）溝跡

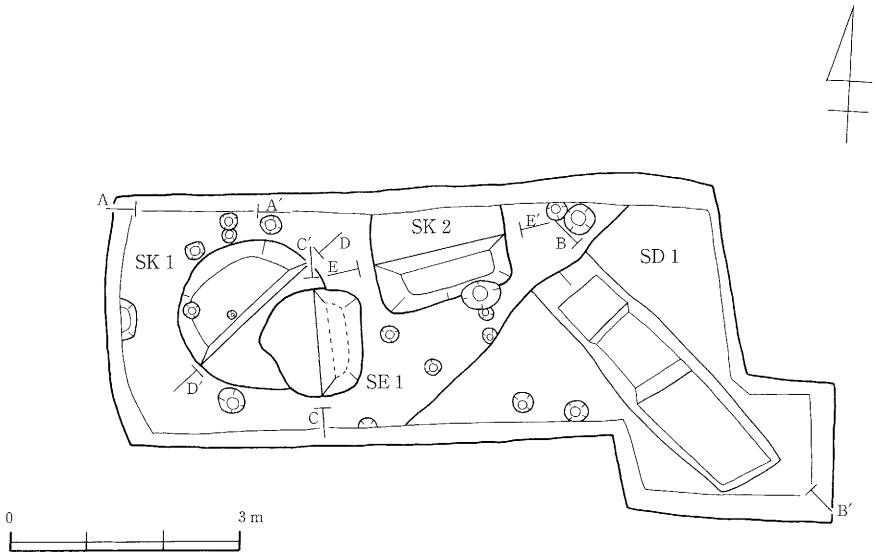
SD１　溝跡

調査区の東半部で検出した。上幅4.4m以上、深さ1.2m以上で底面は未検出である。ピットと重複しこれよりも古い。壁は急に立ち上がる。北東方向から南西方向に延びるものと思われる。遺構の南側が調査区外へ延びているため、断面形状は不明である。堆積土は６層に分かれ、１～４層は人為堆積で５～６層は水性堆積である。出土遺物は、堆積土中から非ロクロ土師器甕（C－1）、坏、ロクロ土師器甕、剥片が出土している。このうち土師器甕（C－１）は外面をハケメ、内面をヘラナデによって調整されている。

２）井戸跡

SE１　井戸跡

調査区の西半部で検出した。SK１と重複しこれよりも新しい。平面形は長径1.45m、短径1.3mの不整な長円形



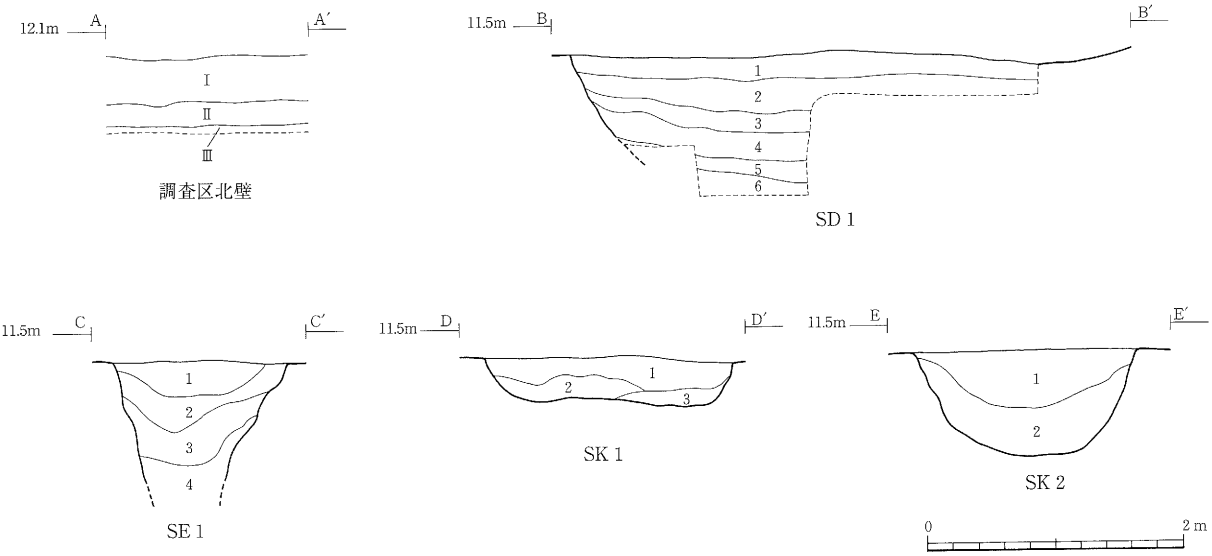
第121図　遺構配置図

を呈する。深さは1.1m以上で底面は未検出である。壁は上半部がやや開き気味に、下半部では直立して立ち上がり、壁の途中に段差を持つ。堆積土は4層以上に分かれ、何れも人為堆積である。堆積土中から、非ロクロ土師器片が出土した。

3）土坑

SK1　土坑

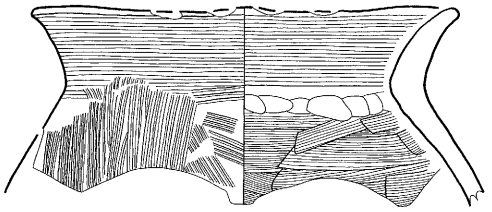
調査区の西半部で検出した。SE1よりも古い。直径1.95mの円形を呈する。深さは40cmで、底面径は1.4mであ



遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
基本層	I	10YR3/2　黒褐色	シルト	焼土粒、木炭粒、φ1～3cmの礫を含む。
	II	10YR3/3　暗褐色	シルト	焼土粒、木炭粒を含む。
	III	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄斑を含む。
SD 1	1	10YR3/4　暗褐色	シルト	木炭粒を含む。
	2	10YR5/6　黄褐色	シルト	マンガン粒、木炭粒を含む。
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	植物遺体を含む。
	4	10YR5/6　黄褐色	砂質粘土	植物遺体を含む。
	5	10YR5/4　にぶい黄褐色	細砂	植物遺体を含む。
	6	10YR6/4　にぶい黄褐色	砂	植物遺体を含む。

遺　構	層位	土　色	土　性	備　考
SE 1	1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	焼土粒、木炭粒を含む。
	2	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	木炭粒、10YR5/6シルトブロックを含む。
	3	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	木炭粒、10YR5/6シルトブロックを含む。
	4	10YR2/2　黒褐色	粘土	10YR5/6粘土ブロックを含む。
SK 1	1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/6粘土質シルトブロック、10YR2/2粘土ブロックを含む。
	2	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	10YR3/2粘土質シルトブロックを含む。
	3	10YR5/6　黄褐色	粘土	焼土粒を含む。
SK 2	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/6粘土質シルトブロックを多量に含む。
	2	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	10YR4/2粘土ブロック、10YR3/2シルトブロックを含む。

第122図　調査区北壁・遺構断面図



1

0 10cm

図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	C－1	非ロクロ土師器　甕			SD1　3層		(8.0)	17.0			外面ヨコナデ・ハケメ　内面ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ	59－3

第123図　出土遺物

る。断面形は扁平な逆台形を呈し、壁は底面から丸みを帯びてやや垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分れ、何れも人為堆積である。堆積土中から、非ロクロ土師器片が出土した。

SK2　土坑

調査区の中央部北壁沿いで検出した。ピットと重複しこれよりも古い。遺構の北半部が調査区外へ延びているため正確な規模は不明であるが、東西1.7m、南北1.2m以上、深さ85cmの方形もしくは長方形を呈するものと思われる。断面形は椀形を呈し、壁は底面から丸みを帯びてやや急に立ち上がる。底面は擂鉢状である。堆積土は2層に分かれ、何れも人為堆積である。堆積土中から、非ロクロ土師器片が出土した。

6　まとめ

① 今回の調査では、溝跡1条、井戸跡1基、土坑2基、ピット18基が検出された。

② SD1溝跡については、大規模な溝跡と捉えられる。周辺の16次調査で確認された溝跡群と関連付けて中近世段階の屋敷の区画溝等の可能性が想定される。

③ 井戸跡、土坑については、出土遺物から古墳時代以降のものと考えられる。ピットの中には柱痕跡を持つものも含まれており周辺に建物跡の存在した可能性がある。

引用・参考文献

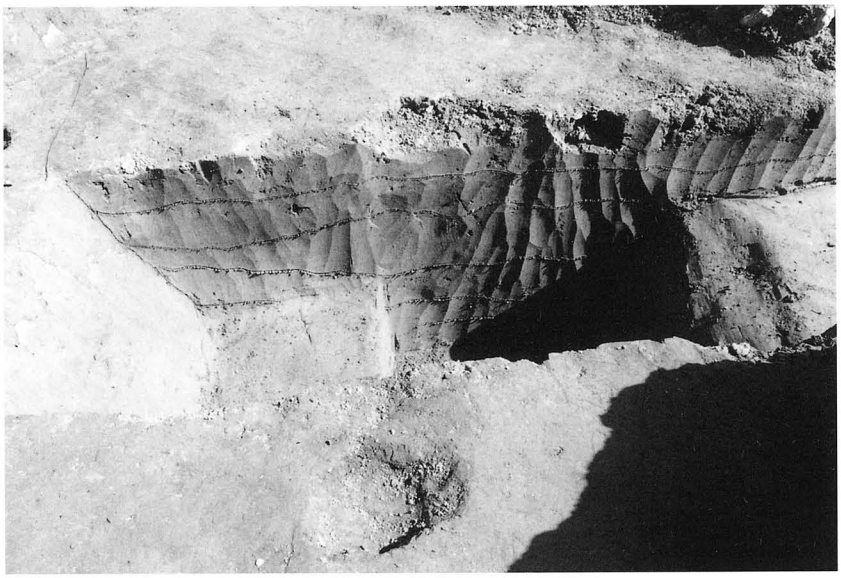
五十嵐康洋（1998）：「南小泉遺跡第26次調査報告書」仙台市文化財報告書第225集

工藤信一郎他（1998）：「南小泉遺跡第30・31次発掘調査報告書」仙台市文化財報告書第226集

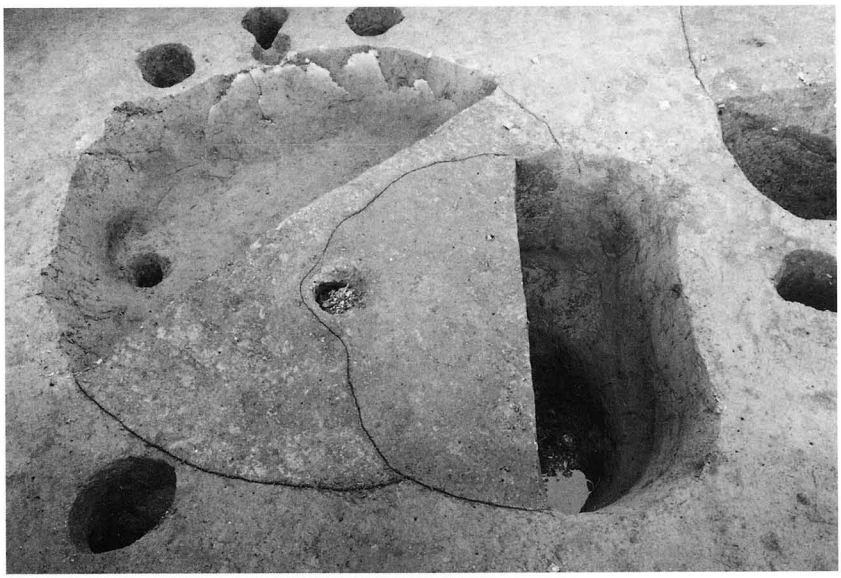
斎野裕彦（1994）：「南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書」仙台市文化財報告書第192集

佐藤洋（1990）：「南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書」仙台市文化財報告書第140集

1　調査区全景（西より）



2　SD１溝跡土層断面（南西より）

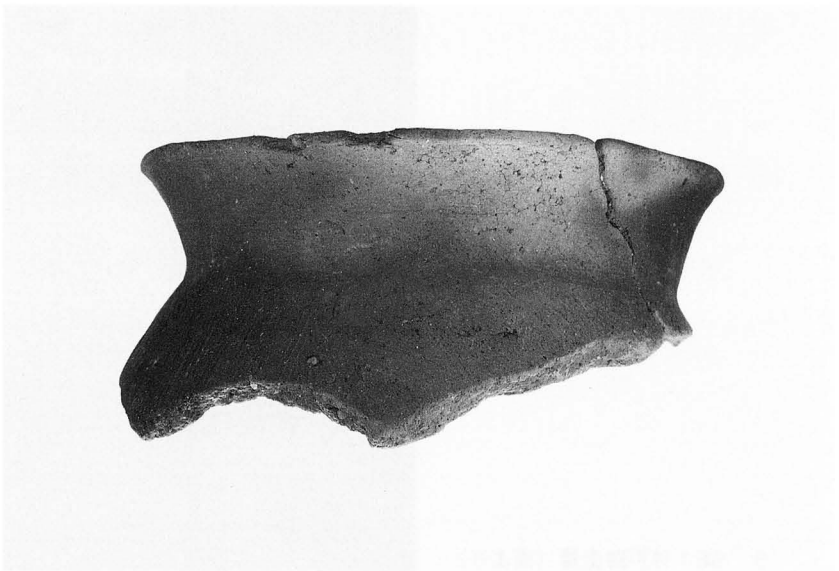


3　SE１井戸跡全景（南より）

図版58　調査状況・溝跡・井戸跡

1　SK１土坑全景（南西より）

2　SK２土坑全景（北より）



非ロクロ土師器甕C－１（SD１第123図１）

3　SD１溝跡出土土器

図版59　土坑・出土遺物

XIII　大野田古墳群発掘調査報告書

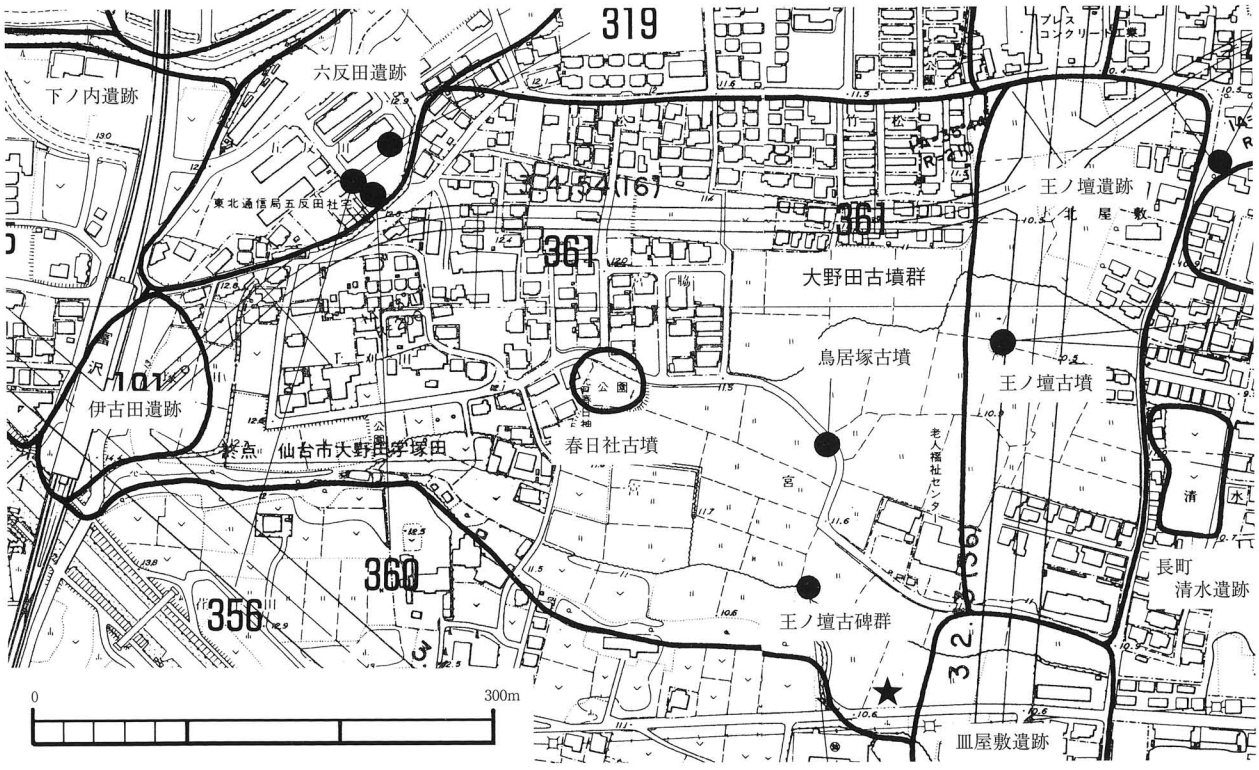
1　調査要項

遺　跡　名	大野田古墳群（宮城県遺跡番号01361）
調 査 地 点	太白区大野田字王ノ壇47－１の一部、44の一部
調 査 期 間	平成14年９月２日～９月４日
調査対象面積	108㎡
調 査 面 積	54㎡
調 査 原 因	個人住宅建築（鋼管杭打ち基礎工事）
調 査 主 体	仙台市教育委員会（文化財課）
担 当 職 員	主任　渡部　紀

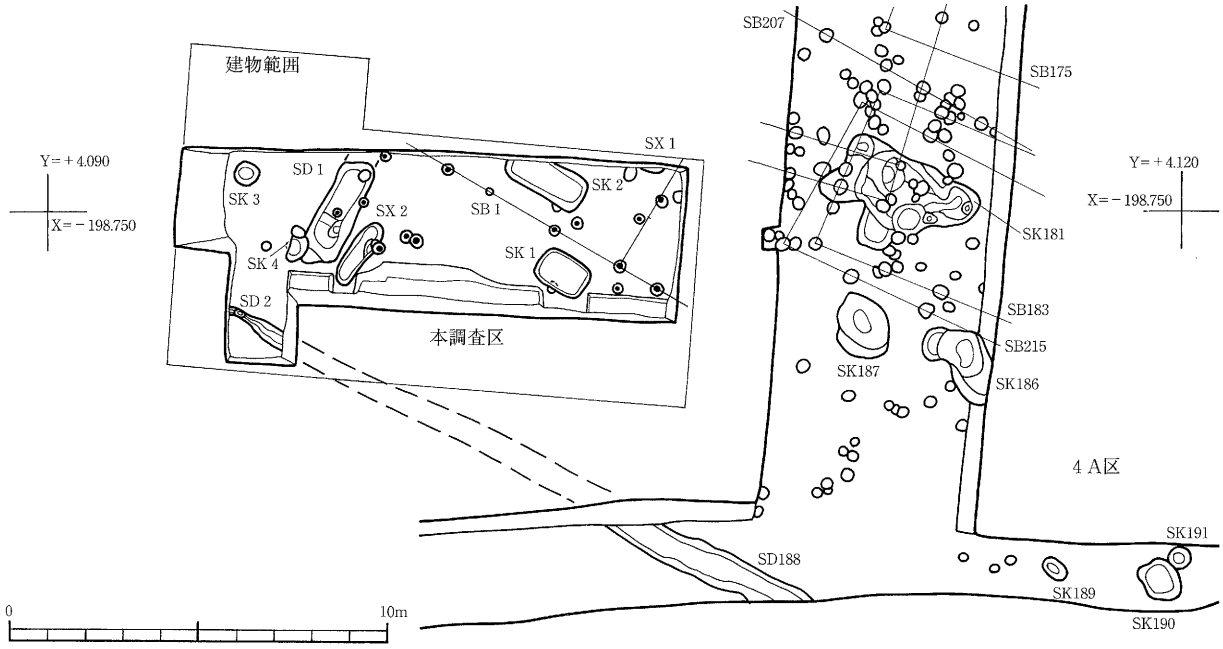
2　遺跡の位置と環境

大野田古墳群は、仙台市の南部、地下鉄富沢駅の東側一帯に広がる遺跡である。遺跡は、北西側を奥羽山脈から派生する青葉山丘陵に、北東側を広瀬川に、南側を名取川に囲まれた「郡山低地」と呼ばれる沖積地に立地している。付近一帯は名取川の支流の一つである太白山に源を発する笊川等が形成した自然堤防や旧河道・後背湿地などの沖積地特有の微地形が複雑に発達している。大野田古墳群は標高10m前後の後背湿地ないし自然堤防に渡って広がっている。

郡山低地は、遺跡の形成が早く、富沢遺跡では約二万年前の後期旧石器時代の遺構が発見されている。その後縄

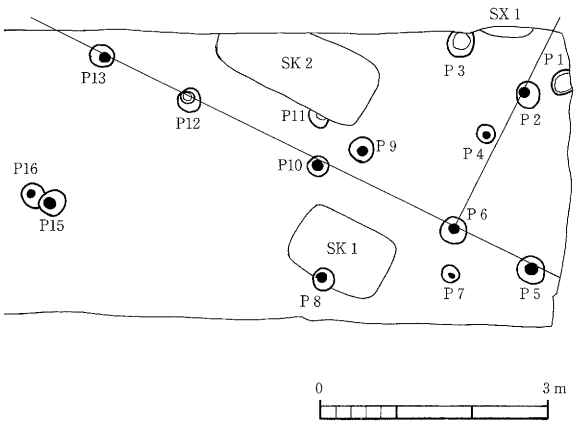


第124図　大野田古墳群と周辺の遺跡



第125図　遺構配置図

文時代から中世・近世に至るまでの多くの遺跡が形成されており、特に笊川が丘陵端部から出て名取川と合流地点にかけての約2.5kmの河川北岸には、富沢遺跡・山口遺跡・六反田遺跡・下ノ内遺跡・下ノ内浦遺跡・伊古田遺跡・王ノ壇遺跡・更屋敷遺跡などの遺跡が連続して分布している。



第126図　掘立柱建物跡実測図

大野田古墳群は、過去多くの調査が行われており、平成６年以来仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う調査が継続的に行われている。遺跡内及び近隣には春日社古墳・鳥居塚古墳・王ノ壇古墳などの顕在的な古墳があるほか、調査によって周溝だけが残る古墳が新たに28基発見されている。古墳以外の遺構としては、古墳時代前期の竪穴住居跡、古墳時代の木棺墓、古墳時代中期以降から奈良時代以前の畑耕作に係わる小溝状遺構群、平安時代の小溝状遺構群、中世の道路跡・掘立柱建物跡・塀跡・溝跡など、古墳時代以降の各時期の遺構が発見されている。

3　基本層序

大野田古墳群の基本層序は、仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う調査において、Ⅰ層（現水田耕作土層）からＸⅠ層（基盤礫層）まで下記のように分層されている（渡邊・竹田：2000）。本調査ではこれに対応させて土層を区分し、断面観察を含めて５層までの調査を行なった。本地点の調査土層（Ⅰ～Ⅴ層）及び、前記の調査成果による基本層序は下記の通りである。

（盛土）　土地区画整理事業による整地層

Ⅰ　層：灰黄褐色シルト層　　水田耕作土層

Ⅱ　層：黒褐色シルト層等	前回の調査で中世の道路跡検出。（今回の調査地点には分布しない。）
Ⅲ　層：にぶい黄橙色シルト層	前回の調査で中世の各種遺構検出。今回も溝跡・土坑・柱穴検出。
Ⅳ　層：灰黄褐色砂質シルト	前回の調査で河川跡等を検出。古墳を覆う。
Ⅴ　層：にぶい黄橙色砂質シルト層	前回の調査で古墳時代前・中期の遺構、小溝状遺構等を検出。
Ⅵ　層：にぶい黄褐色粘土質シルト層	縄文時代後期中葉の遺物出土
Ⅶ　層：にぶい黄褐色粘土質シルト層等	縄文時代後期中葉の遺物出土
Ⅷ　層：にぶい黄褐色粘土質シルト層	縄文時代後期中葉の遺物包含層
Ⅸ　層：オリーブ褐色砂層等	縄文時代後期中葉の遺物出土
Ⅹ　層：オリーブ褐色砂礫層等	無遺物層
ⅩⅠ層：径10～30cmの礫層	基盤層

4　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成14年８月12日付けで、横山泰治氏から発掘届が提出されたことにより実施した。調査地点は、仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査の４Ａ区での成果から、Ⅲ層における中世の遺構とⅤ層における小溝状遺構群が検出される可能性が推定された。調査区は、建物の中央付近に東西約13m・南北４ｍの長方形に設定し、４Ａ区検出のSD－188溝跡の延長を確認するために調査区西端を建物範囲内で南側に拡張した。住宅建築範囲の限られた調査であることから、遺構の平面的な検出作業はⅢ層のみで行ない、Ⅴ層については断面観察によって小溝状遺構群の有無の確認を行なった。

測量は任意の基準点を設置して行なった。全体位置は、基準点から周辺区画を測量し、仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業の発掘調査遺構配置図の中に位置付けた。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面で掘立柱建物跡（SB－１）として組む可能性のあるものを含むピット23個・溝跡２条・土坑４基・その他の遺構２基が発見された。

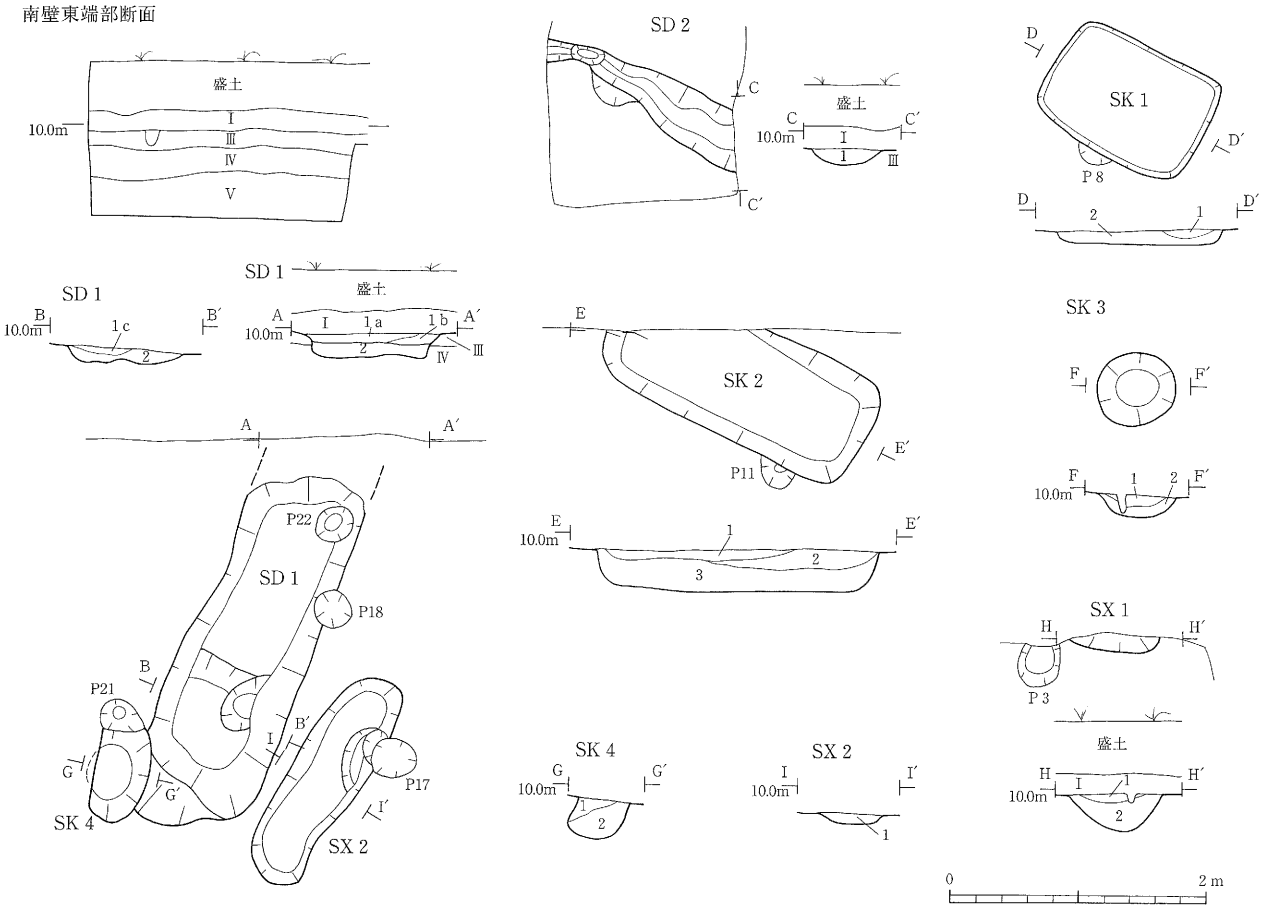
１）掘立柱建物跡

SB－１掘立柱建物跡　Ｐ－５：Ｐ－６：Ｐ－10：Ｐ－12：Ｐ－13は、それぞれ115cm：198cm：198cm：120cmの間隔で直線上に並び、Ｐ－６：Ｐ－２は202cmの間隔でこれに直角に交わることから、掘立柱建物跡一部と考えられる。柱穴は直径28～36cmほどの円形である。柱痕跡は直径13～15cmの円形である。柱穴の残存部の深さは15～28cmである。

２）溝跡

SD－１溝跡　調査区の西寄りで検出された。検出部分は長さ約３ｍ・幅１ｍ前後の長方形を呈するが、調査区北壁断面でも遺構ののびが観察されたことから溝跡と判断した。方向はSB－１掘立柱建物跡とした柱穴列やSD－２溝跡と直交するように北東から南西方向にのびる。検出部の深さは断面位置で12cmと浅く、断面形は不整形である。堆積土は４層に分けられる。堆積土上部は、Ⅲ層のブロックを含み人為的に埋められた可能性がある。

SD－２溝跡　調査区西部の拡張部分で検出された。仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査４Ａ区検出のSD－188溝跡の方向に一致し、SB－１掘立柱建物跡と11ｍの間隔をおいてほぼ並行し、北西から南西方向にのびる。幅は東側で45cm・西側で20cmと狭くなる。断面形は舟底形で深さは14cmである。堆積土は褐灰色シルト



基本層（南壁東端）

土層No.	土　色	土　質	備　考
I	10YR6/2　灰黄褐色	シルト	旧水田耕作土。酸化鉄を斑状に含む。
(Ⅱ)	10YR3/1　黒褐色	シルト	今回の調査区内には分布していない。
Ⅲ	10YR6/4　にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒を多く含む。
Ⅳ	10YR5/2　灰黄褐色	砂質シルト	
V	10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質シルト	

SD 1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1a	10YR5/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅱ層の小ブロックを含む。マンガン粒を含む。
1b	10YR4/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅱ層が径5cm程度のブロックとして含まれる。
1c	10YR3/1　黒褐色	シルト	基本層Ⅲ層の小ブロックを少量含む。
2	10YR5/2　灰黄褐色	砂質シルト	褐灰色土の小ブロックを含む。

SD 2

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/1　褐灰色	シルト	灰白色砂をブロック状に含む。底面に酸化鉄集積。

SK 1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/1　褐灰色	シルト	灰黄色土・黒褐色土・基本層Ⅱ層のブロックを多く含む。
2	10YR5/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅲ層の小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を含む。

SK 2

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅲ層の小ブロックを少量含む。
2	10YR5/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅲ・Ⅳ層及び黒褐色土の小ブロックを含む。
2	10YR4/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅲ・Ⅳ層及び黒褐色土の小ブロックを多く含む。

SK 3

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅲ層の細粒を含む。
2	10YR4/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅲ・Ⅳ層の小ブロックを多く含む。炭片を含む。

SK 4

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/1　褐灰色	シルト	基本層Ⅲ層の小ブロックを含む。マンガン斑を含む。
2	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	マンガン・酸化鉄を斑状に含む。炭片を含む。

SX 1

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR5/1　褐灰色	シルト	酸化鉄を斑状に含む。
2	10YR4/1　褐灰色	シルト	にぶい黄褐色土及び基本層Ⅲ・Ⅳ層の小ブロックを含む。

SX 2

土層No.	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	基本層Ⅳ層の小ブロックを含む。

第127図　基本層断面及び遺構実測図

1層である。

3）土坑

SK－1土坑　調査区南東部で検出された。平面形は長方形を呈し、長軸131cm・短軸93cmを測る。断面形は浅い逆台形で、深さは13cmである。堆積土は2層に分けられる。2層中から常滑産と見られる中世陶器の甕の体部破片

が１点出土している。（図版62－７－１）

SK－２土坑　調査区北東部で検出された。平面形は長方形を呈し、一部は調査区外にのびる。検出部分の長軸220cm・短軸95cmを測る。断面形は浅いＵ字形で、深さは34cmである。堆積土は３層に分けられる。ブロック状の堆積土で、人為的に埋められた可能性がある。北西端近くの３層中から人頭大の河原石が１個出土している。

SK－３土坑　調査区北西部で検出された。平面径は円形を呈し、東西軸長62cm・南北軸長58cmを測る。断面形は舟底形で、深さは18cmである。堆積土は２層に分けられる。

SK－４土坑　調査区西部で検出された。SD－１溝跡を切り、P－21に切られる。不整な楕円形を呈し、残存長軸73cm・短軸43cmを測る。断面形は不整なＵ字形で、西壁はオーバーハングしている。深さは31cmである。堆積土は２層に分けられる。２層中から土師器の破片が１点出土している。

４）その他の遺構

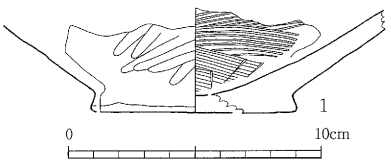
SX－１遺構　調査区北東部の調査区北壁際で検出され、本体は調査区外にのびる。検出部分の平面形は半月状を呈し、検出部の東西軸長71cm・南北軸長14cmを測る。底面は検出されていないが、調査区北壁での断面形は舟底状で、深さは30cmである。堆積土は２層に分けられる。

SX－２遺構　調査区中央で検出された。P－17に切られる。平面形は、北東から南西方向にのびる楕円形を呈し、長軸182ccm・短軸58cmを測る。深さは８cmで、堆積土は１層である。底面中央北寄りの東壁付近がわずかに低くなっている。土師器の破片が１点出土している。

５）下層遺構の状況

仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査４A区において、V層上面で小溝状遺構群が検出されていることから、断面観察のため、調査区南側の壁面に沿って幅60cm前後のサブトレンチを設定した。Ⅲ層上面から70cm前後掘り下げ、V層の断面の観察を行なったが小溝の跡は確認できなかった。

下層調査の際に、Ⅲ層中から古墳時代のものと推定される土師器の壷底部付近の破片が出土している。



番号	登録番号	出土区	基本層	出土遺構	遺構層	取上番号	種別	器種	器高	口径	底径	（外　面）特	徴（内　面）	写真図版
1	C－1		Ⅲ				土師器	壺？	(4.1)		8.0	ナデのちヘラミガキ	ハケメ	62－7－2

第128図　Ⅲ層出土遺物

6　まとめ

① Ⅲ層上面で掘立柱建物跡１棟・溝跡２条・土坑４基・その他の遺構２基・ピット等が発見された。

② SB－１掘立柱建物跡は、仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査４A区で検出された掘立柱建物跡群の方向と概ね一致している。

③ SD－２溝跡は、その方向から、仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査４A区のSD－188溝跡の延長にあたるものと推定される。

④ SD－２溝跡は、SB－１掘立柱建物跡は並行して同じ方向性を示し、関係の存在を示唆している。

⑤ SD－２～SD－188溝跡のラインから南東側は、遺構の密度が希薄になるので、この溝がなんらかの区画に関係する可能性が考えられる。

⑥ SD－１溝跡、SK－１・２、SX－２遺構についても、SD－２溝跡やSB－１掘立柱建物跡と共通する方向性が

看取できるので、相互に関係のある可能性が考えられる。

⑦　Ⅲ層上面検出の遺構については、中世に位置付けられている仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査４A区で検出された遺構群と共通する方向性を有することから、中世の遺構の可能性が高いものと推定される。

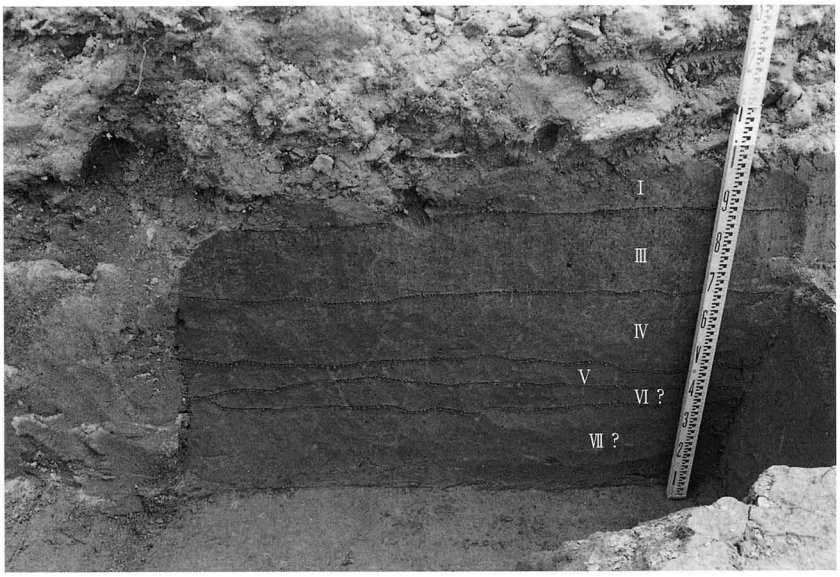
⑧　Ⅴ層では、小溝状遺構群の広がりを確認することができなかった。

参考文献

渡邊・竹田（2000）：「大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡－仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－」仙台市文化財調査報告書第243集

1　調査前景（西より）

2　調査区全景（西より）

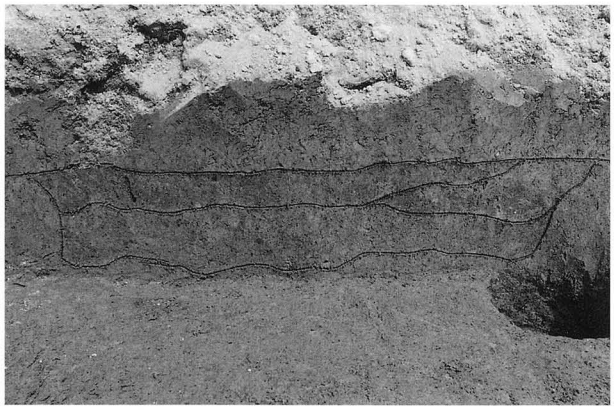


3　南壁土層断面

図版60　大野田古墳群の状況と土層断面

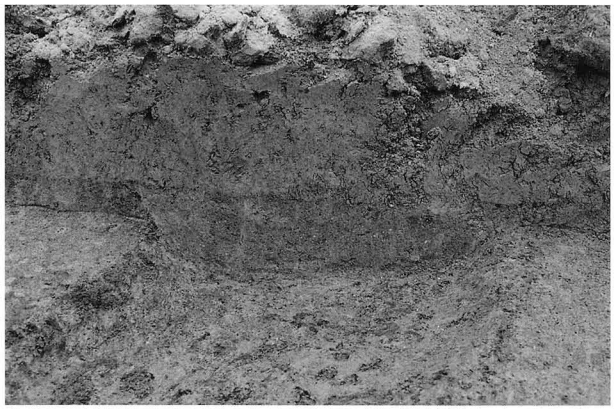
1　遺構検出状況（南西より）

2　SB２掘立柱建物跡（南東より）

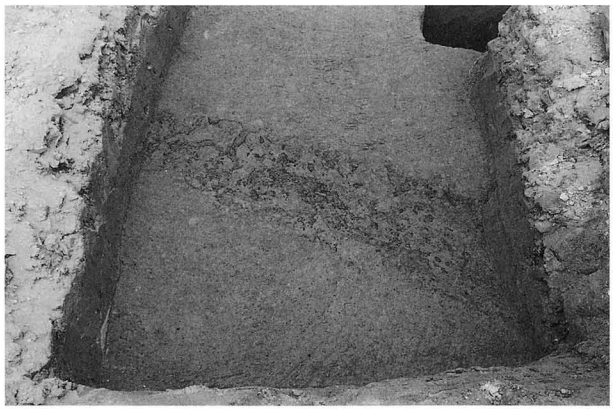


3　SD１断面（南より）

4　SD１全景（南より）

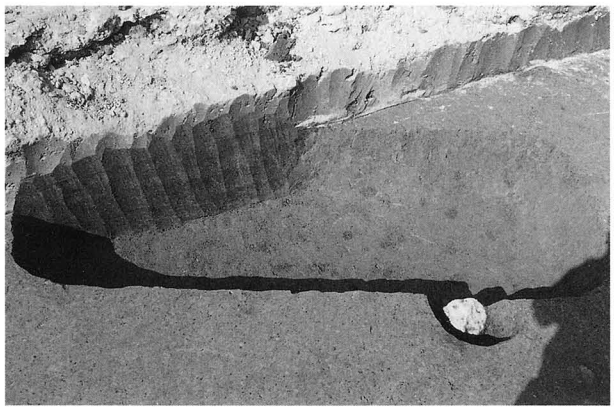


5　SD２断面（西より）



6　SD２全景（南より）

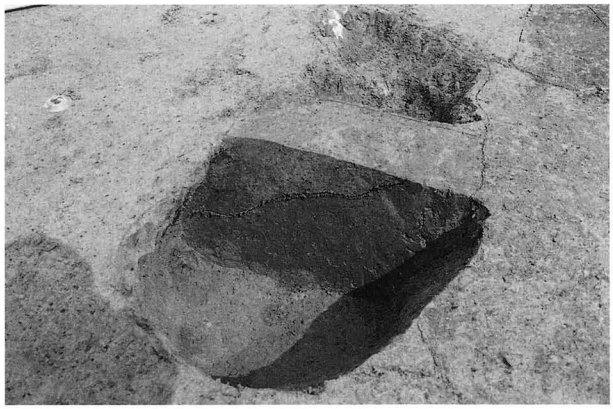
7　SK１全景（北西より）



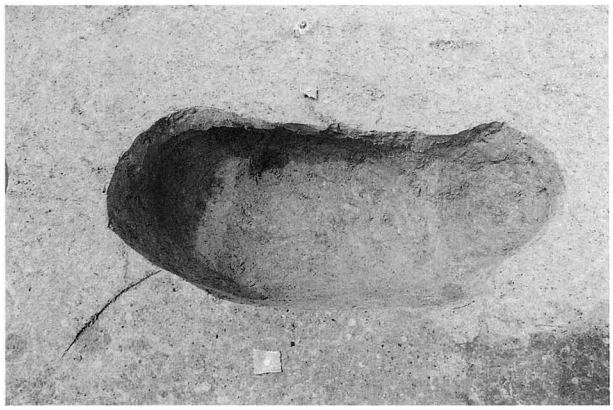
8　SK２全景（南より）

図版61　掘立柱建物跡・溝跡・土坑

1　SK３全景（南より）

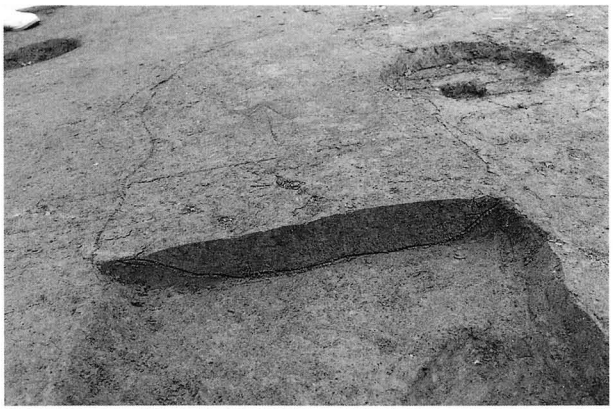


2　SK４断面（南より）

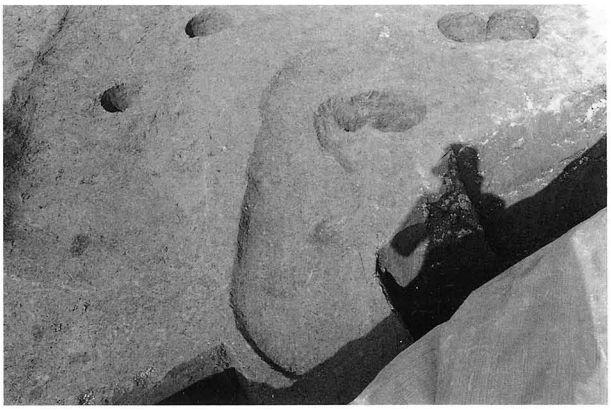


3　SK４全景（南より）

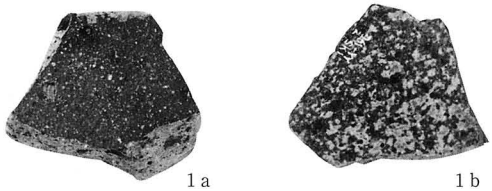
4　SX１（南より）



5　SX２断面（南より）



6　SX２全景（南より）



1　陶器　甕　I－１（SK－１）

2　土師器　壺　C－１（Ⅲ層）

7　出土遺物

図版62　土坑・その他の遺構と出土遺物

XIV　高田A遺跡（第4次）発掘調査報告書

1　調査要項

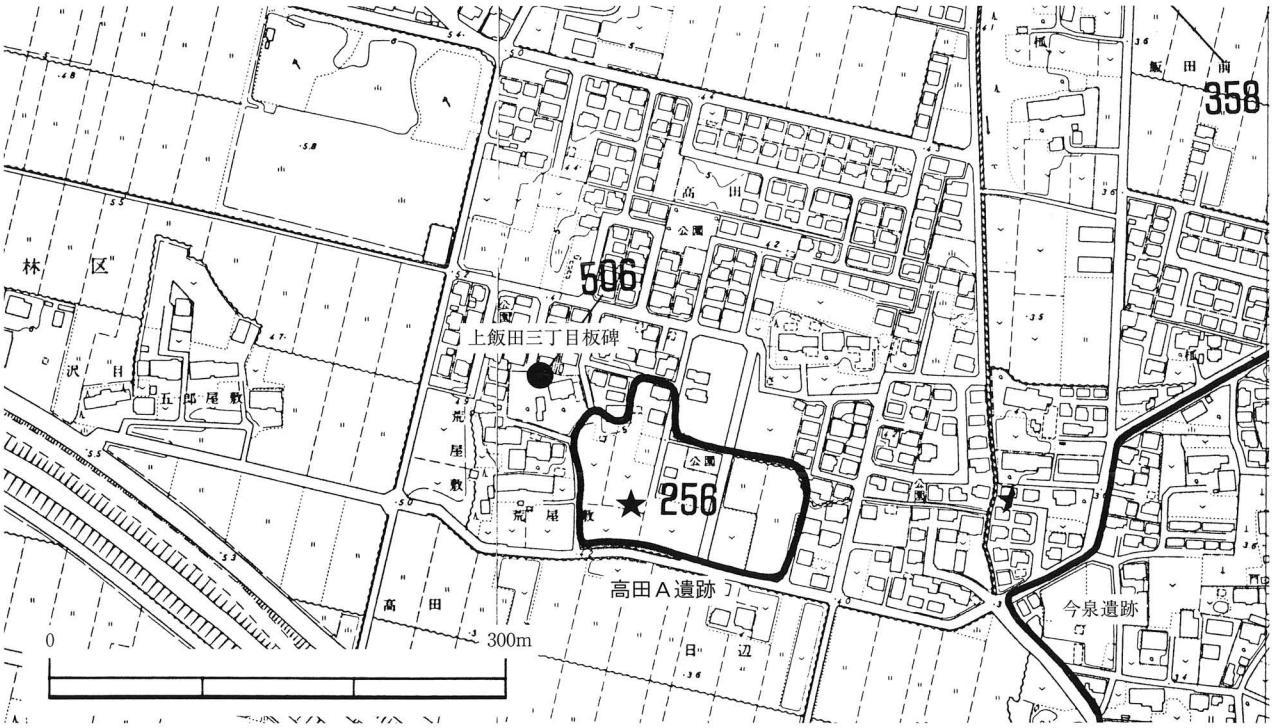
遺 跡 名	高田A遺跡（宮城県遺跡番号01256）	調査原因	個人住宅建設
調査地点	仙台市若林区上飯田三丁目448－2	調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査期間	平成14年4月15日～4月16日	担当職員	主　任　渡部　紀
調査対象面積	66㎡		文化財教諭　大倉秀之
調査面積	32㎡		

2　遺跡の位置と環境

高田A遺跡は、JR仙台駅の南東6km付近の若林区上飯田三丁目に所在する。調査地点は、仙台南部道路今泉インターチェンジより北西に900mのところに位置しており標高は5mである。仙台市街地南部の地形を見ると、東側にはいわゆる「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野がみられる。名取川と広瀬川は遺跡の西方約1.4km地点で合流し、遺跡の周囲には両河川によって形成された自然堤防と後背湿地が広がっていて、旧河道も観察される。遺跡は、その中の自然堤防上に立地している。本遺跡では、平成5年に1次調査を、平成13年に2次・3次調査を行っている。その結果、弥生時代から平安時代頃の河川跡、溝跡、土坑、ピットなどが検出され、弥生土器、土師器、赤焼土器、須恵器、瓦、石製品などが出土している。

3　調査に至る経過と調査方法

平成14年4月11日付けで菅原義正氏より発掘届が提出された。これを受けて平成14年4月15日、建物予定地内に東西8m、南北4mの調査区を設定して確認調査を実施した。確認調査の結果、溝跡、土坑、ピット等の遺構が検出されたため引き続き本調査を実施した。調査は、重機により宅地造成時の盛土及びⅠ、Ⅱa、Ⅱb層を排除し、

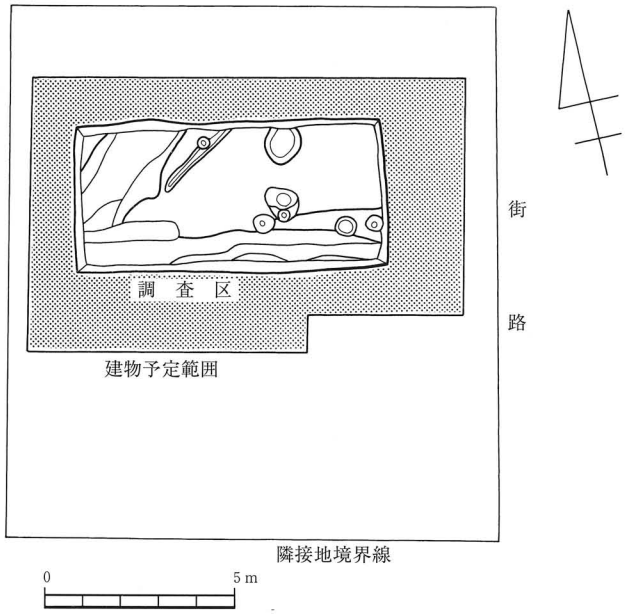


第129図　調査地点と周辺の地形

Ⅲ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。

4　基本層序

基本層序は、Ⅰ層から遺構検出面であるⅢ層の大別３層、細別４層である。Ⅰ層はにぶい黄褐色シルト層で盛土以前の畑耕作土である。Ⅱａ層は白色砂粒を多量に含む黒褐色シルト層である。Ⅱｂ層はⅢ層土ブロックを含む黒褐色シルト層である。下面には凹凸が見られる。一部の遺構は、この層の上面が掘り込み面となっている。Ⅲ層は酸化鉄粒を含むにぶい黄褐色粘土質シルト層である。河川の氾濫によって形成された自然堆積層と考えられ、周辺一帯の基盤となる層である。



第130図　調査区配置図（1/200）

5　発見遺構と出土遺物

発見遺構には、溝跡３条、土坑１基、ピット６基がある。これらの遺構は、Ⅲ層上面で検出されているが、SD１溝跡については、Ⅱｂ層上面が掘り込み面となっている。

１）溝跡

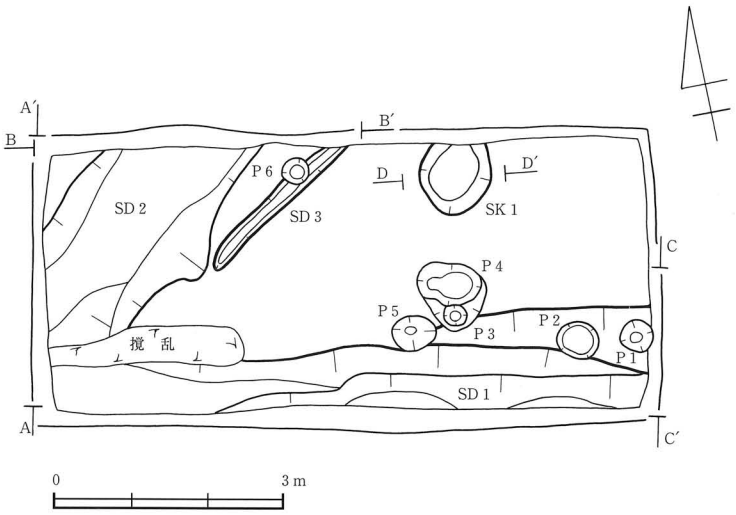
SD１　溝跡

調査区南半部に位置する東西方向の溝跡である。平成13年に実施した２次調査の際検出されたSD１溝跡の延長部分と考えられる。SD２より新しく、P１～５よりも古い。検出総長８m、検出部分での上幅は170cm、深さ67cmである。壁は急に立上がる。底面から70cmのところで幅90cm、深さ10～20cmのテラス状の段差が見られる。検出中央部より西側では浅く平坦な面になり、南向きに方向が変わる。堆積土は３層で、人為堆積である。堆積土より非ロクロ土師器、ロクロ土師器、須恵器が出土している。

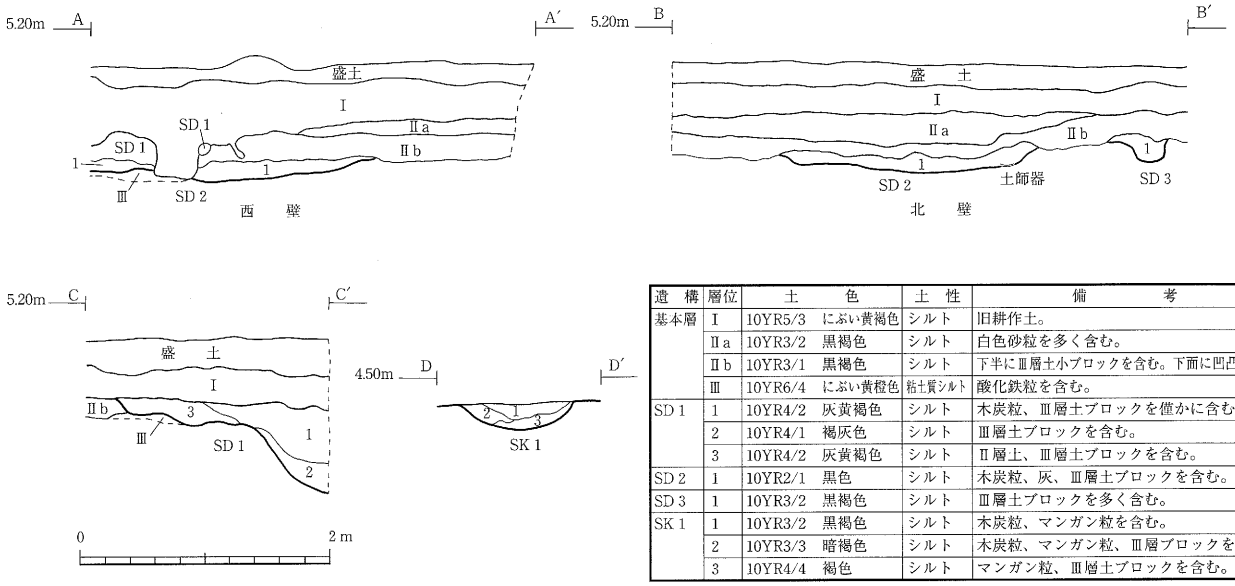
SD２　溝跡

調査区西半部に位置する北東方向の溝跡である。SD１より古い。検出総長4.1m、上幅155～205cm、下幅100～120cm、深さ15cmである。断面形は舟底形を呈し、底面は平坦である。堆積土は１層である。堆積土及び底面直上より非ロクロ土師器甕（C－1）、壷、高坏、弥生土器が出土している。このうちC－１は、中形で球胴形を呈し、口縁部の内外面をヨコナデ、体部外面をハケメ、ヘラミガキ、下半をヘラケズリ、内面をヘラナデにより調整されている。塩釜式期のものと考えられる。

SD３　溝跡

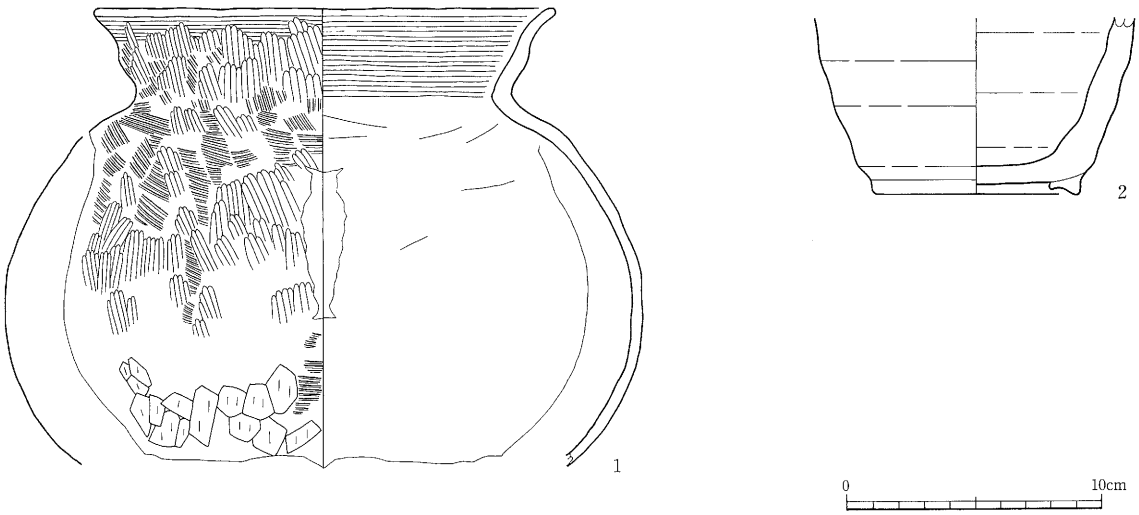


第131図　遺構配置図



遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
基本層	I	10YR5/3　にぶい黄褐色	シルト	旧耕作土。
	IIa	10YR3/2　黒褐色	シルト	白色砂粒を多く含む。
	IIb	10YR3/1　黒褐色	シルト	下半にIII層土小ブロックを含む。下面に凹凸あり。
	III	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土質シルト	酸化鉄粒を含む。
SD 1	1	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	木炭粒、III層土ブロックを僅かに含む。
	2	10YR4/1　褐灰色	シルト	III層土ブロックを含む。
	3	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	II層土、III層土ブロックを含む。
SD 2	1	10YR2/1　黒色	シルト	木炭粒、灰、III層土ブロックを含む。
SD 3	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	III層土ブロックを多く含む。
SK 1	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	木炭粒、マンガン粒を含む。
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト	木炭粒、マンガン粒、III層ブロックを含む。
	3	10YR4/4　褐色	シルト	マンガン粒、III層土ブロックを含む。

第132図　調査区西壁・北壁・遺構断面図



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	C－1	非ロクロ土師器　甕			SD 2　底面		(17.8)	18.0			外面ヨコナデ→ハケメ→ヘラミガキ・ヘラケズリ　内面ヨコナデ・ナデ	64－3
2	E－1	須恵器　壺		II層			(7.0)		8.0		内外面ロクロナデ　底部回転ヘラケズリ	64－3

第133図　出土遺物

調査区の中央部から西半部に位置するSD 2とほぼ平行に北東方向に延びる小規模な溝跡である。P 6より古い。検出総長2.4m、上幅50cm、下幅20cm、深さ20cmである。断面形は方形を呈し、底面は平坦である。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

2）土坑

SK 1　土坑

調査区中央部北壁際に位置する。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、長軸96cm、短軸88cm、深さ20cmである。底面は丸みをおびている。堆積土は3層である。遺物は出土しなかった。

3）ピット

6基のピットが検出されている。平面形は円形を基調とし、規模は30～80cm、深さ10～63cmである。堆積土は黒褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、褐灰色シルトである。柱痕跡が確認されたのはP3のみである。これ以外に柱穴の可能性があるものはP4である。P3より赤彩された非ロクロ土師器坏片が、P4、P5より非ロクロ土師器片が出土している。

4）その他の出土遺物

遺構以外から出土した遺物の中で図示したものに、Ⅱ層出土の須恵器壷（E－1）がある。長頸壷の体部下半から底部にかけての破片である。底面は回転ヘラケズリによって調整されており、断面が三角形の低い高台が付く。形態的特徴から平安時代のものと思われる。

6　まとめ

① 高田A遺跡は、名取川、広瀬川によって形成された標高5mの自然堤防上に立地する弥生時代から平安時代の複合遺跡である。

② 今回の調査では、溝跡3条、土坑1基、ピット6基が検出された。出土遺物には弥生土器、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、須恵器、礫石器がある。

③ SD1は、平成13年に実施した2次調査の際に検出された溝跡の延長部分である。出土遺物から平安時代の溝跡と思われる。

④ SD2は、底面直上から、塩釜式の土師器が出土していることより古墳時代前期の溝跡と考えられる。SD3とSK1からは遺物が出土していないため所属年代は不明である。P1～3、P5は、SD1を切っていることから平安時代以降のものと思われる

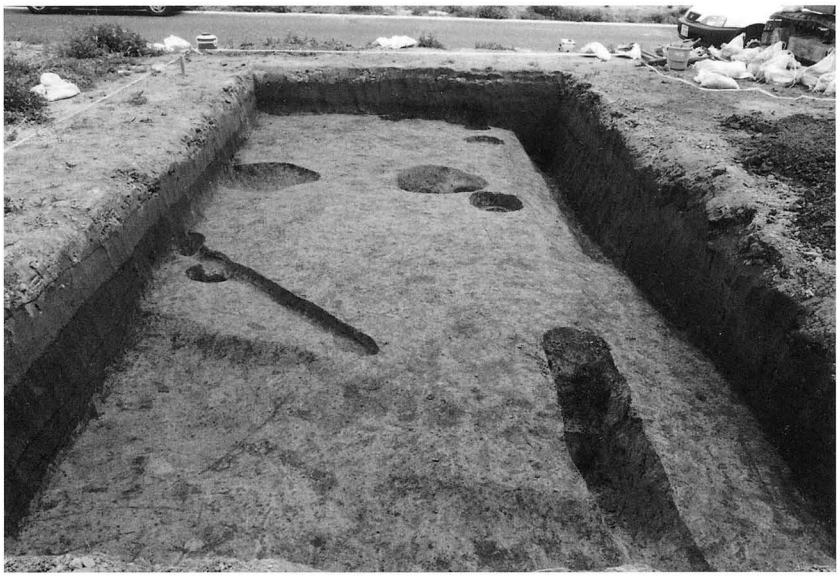
引用・参考文献

吾妻俊典他（1992）：「野田山遺跡」宮城県文化財調査報告書第145集

小村田達也他（1993）：「北原遺跡」宮城県文化財調査報告書第159集

丹羽茂（1983）：「朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集

渡部弘美他（1994）：「高田A遺跡」『年報15』仙台市文化財調査報告書第189集

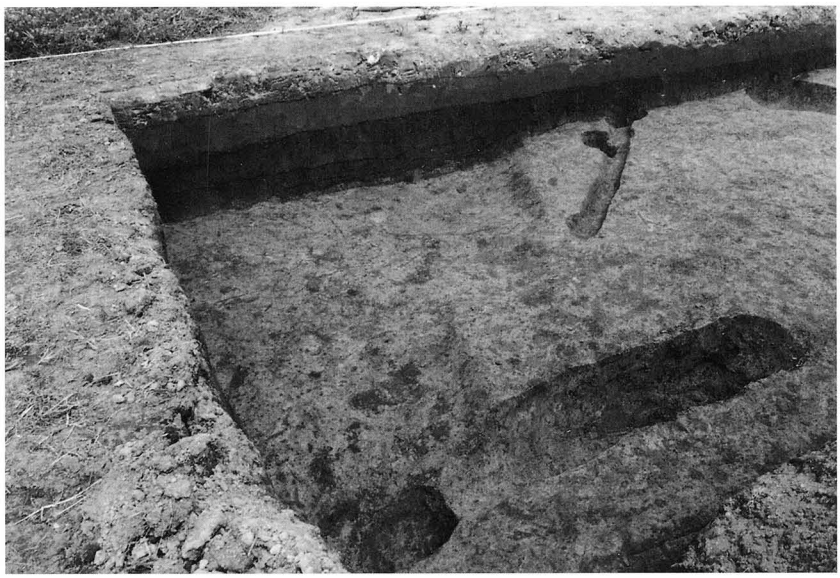


1　調査区全景（西より）

2　SD1溝跡全景（東より）

3　SD1溝跡断面（西より）

図版63　調査状況・溝跡



1　SD２溝跡（南より）

2　SD２溝跡断面（南より）

1　非ロクロ土師器　甕　C－１（SD２　第133図１）　　2　須恵器　壷　E－１（Ⅱ層　第133図２）

3　出土遺物

図版64　溝跡・出土遺物

XV　養種園遺跡（第３次）発掘調査報告書

1　調査要項

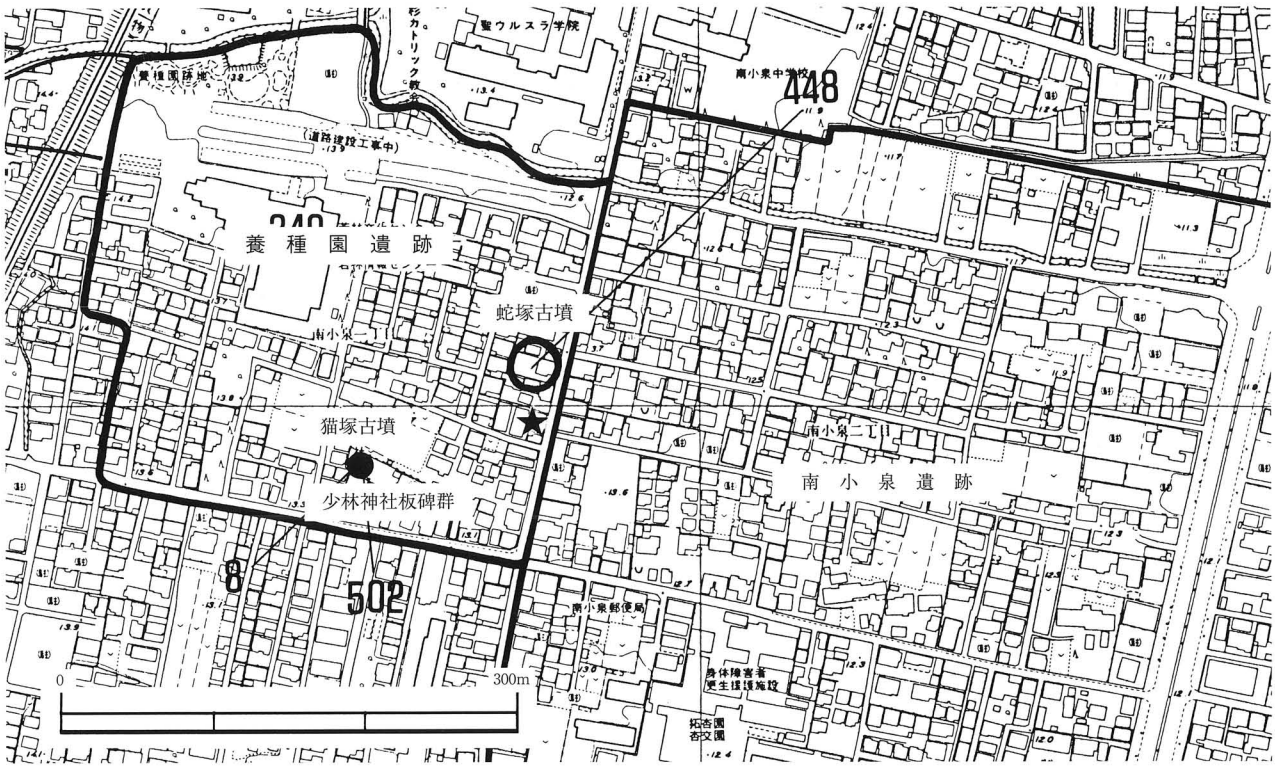
遺 跡 名	養種園遺跡（宮城県遺跡番号01349）	調査面積	24㎡
調査地点	若林区南小泉一丁目 23番９、14番46	調査原因	個人住宅建設
		調査主体	仙台市教育委員会（文化財課）
調査期間	平成14年４月９日～４月11日	担当職員	教　　諭　豊村幸宏
調査対象面積	98㎡		文化財教諭　大倉秀之　加藤徳明

2　遺跡の位置と環境

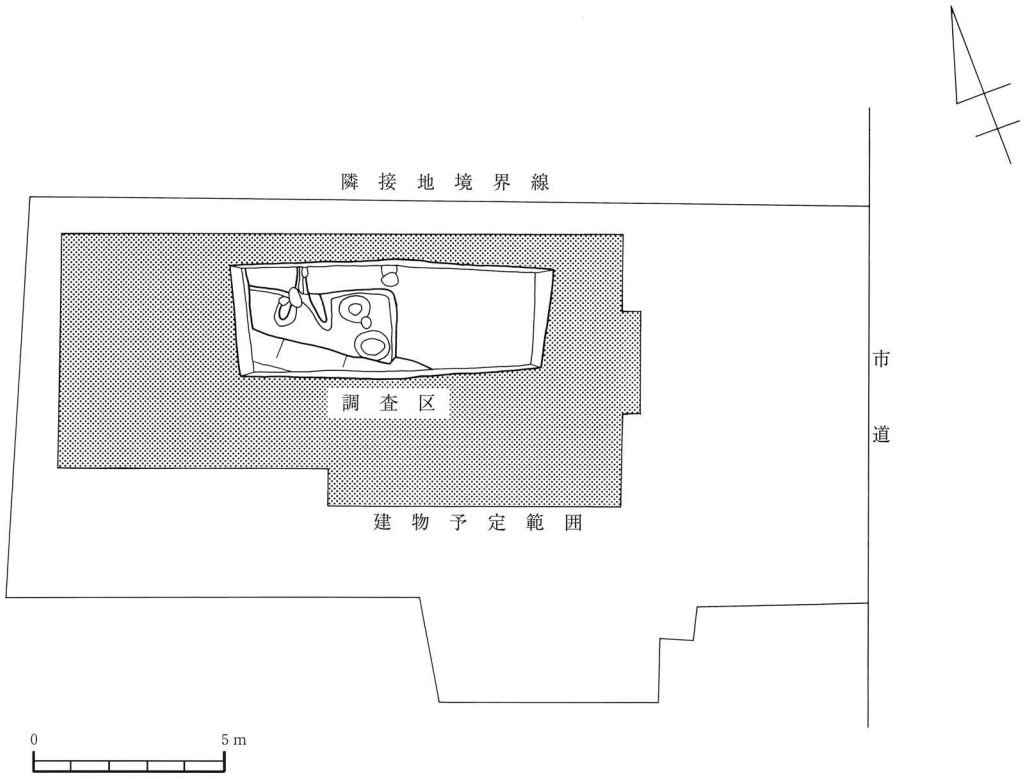
養種園遺跡は、JR仙台駅の南東約2.5km付近の仙台市若林区南小泉一丁目に所在する面積約９haの遺跡である。仙台市街地の東側、広瀬川の北側に位置し、宮城野海岸平野と呼ばれる沖積地の標高12～14mの自然堤防、後背湿地上に立地している。周辺には東側に隣接して南小泉遺跡が広がっておりその中心には遠見塚古墳が存在する。遺跡内には、猫塚古墳、蛇塚古墳が点在している。今回の調査地点は、遺跡南東部の住宅地に当たり標高は約12mである。本遺跡ではこれまでに２回の調査が行われており、今回の調査は３次目となる。

3　調査に至る経過と調査方法

平成14年３月４日付で菊地勝良、菊池章泰氏より個人住宅建築工事に係わる発掘届が提出された（教生文第13－275号で回答）。これを受けて平成14年４月９日に、建物予定地内に東西８m、南北３mの調査区を設定して確認調査を実施した。その結果、竪穴住居跡１軒、溝跡１条、ピットが検出されたため引き続き本調査へと移行した。調査は、重機により盛土とⅠ、Ⅱ層を排除し、Ⅲ層上面で人力による遺構検出作業と遺構の掘り込みを行った。



第134図　調査地点と周辺の地形



第135図　調査区配置図（1/200）

4　基本層序

調査区内は、全体に厚さ10～20cmの盛土で覆われている。調査区で確認した基本層は、盛土層下のⅠ層からⅢ層まで大別３層である。Ⅰ層は木炭粒、マンガン粒を含む黒褐色シルト層で、近現代の陶磁器類、燻瓦を包含している。Ⅱ層は木炭粒、微砂粒を含む黒褐色シルト層である。Ⅲ層はにぶい黄褐色シルト層で基盤となる自然堆積層である。この層の上面で遺構検出作業を行った。

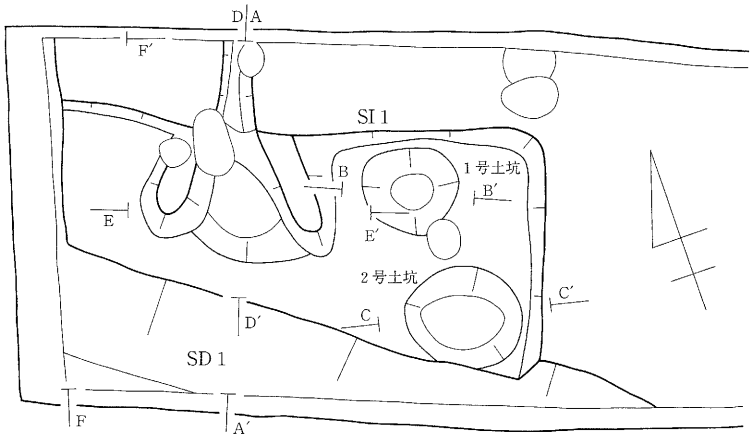
5　発見遺構と出土遺物

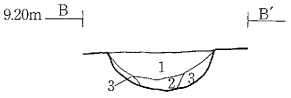
調査区は、東半部が攪乱を受けており遺構は検出されなかった。攪乱の及ばない西半部で竪穴住居跡１軒、溝跡１条、ピット６基が検出された。

１）竪穴住居跡

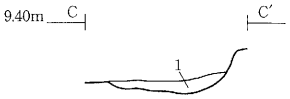
SI１　竪穴住居跡

調査区の西半部で住居跡の北東部分及びカマドと煙道の一部を検出した。SD１、ピットと重複しこれらよりも古い。規模は、検出した長さが北辺3.8m、東辺1.8mである。平面形は方形もしくは長方形と思われる。方向は東辺を基準としてN－14°－Eである。堆積土は１層で人為堆積層と考えられる。検出面から床面までの高さは14～22cmである。床は、貼床を用いず住居跡の掘り方底面を床面としており、ほぼ平坦である。床面施設としてカマド右袖際と住居の東辺際で土坑を２基検出しているが、柱穴、周溝は発見されなかった。１号土坑は、径80cm、深さ30cmの円形を呈し、２号土坑は、径90cm、深さ20cmの長円形を呈している。カマドは北辺部にⅢ層土を積み上げて構築されている。カマドおよび煙道部の堆積土は４層で、いずれも木炭粒、焼土を多量に含んでいる。規模は右袖

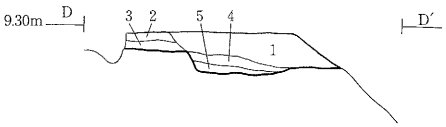




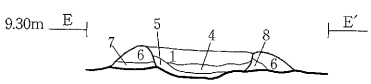
1号土坑



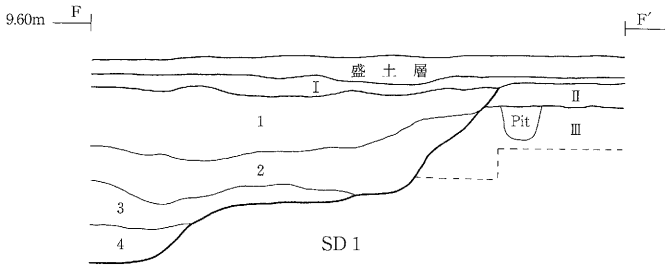
2号土坑

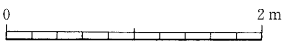


煙道　　カマド



カマド

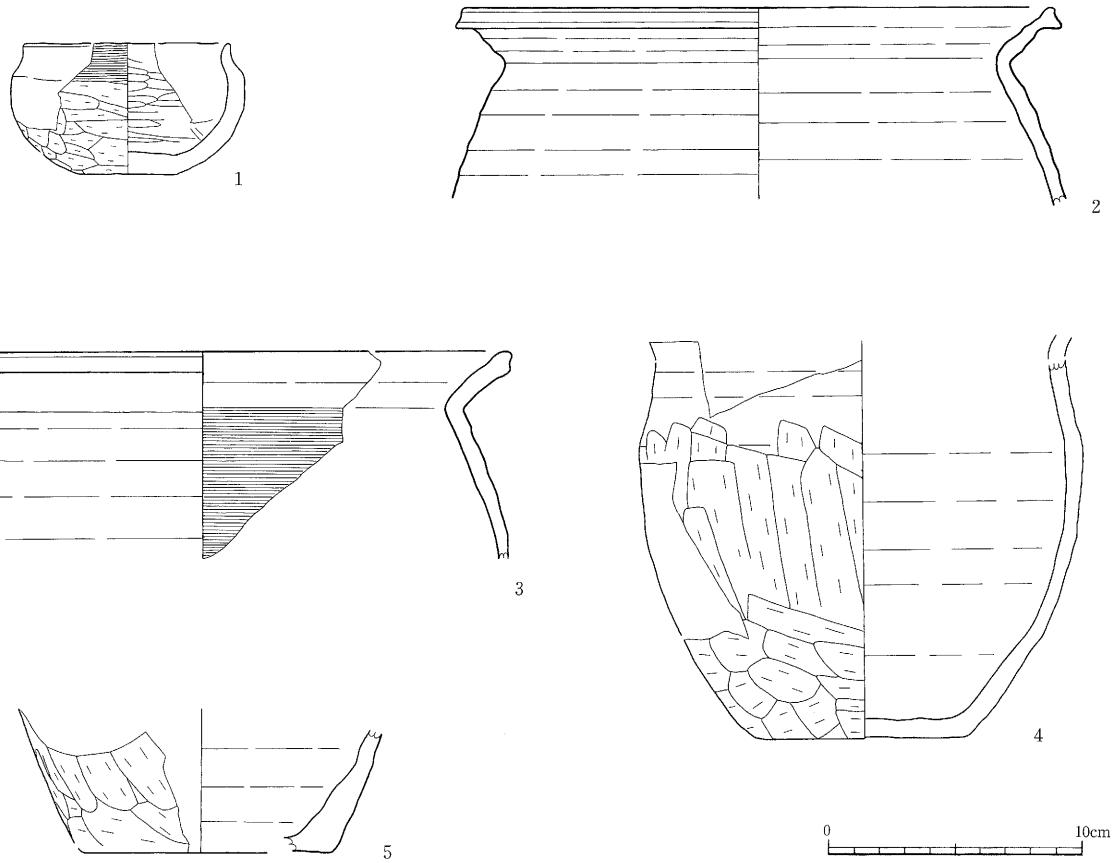




遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
基本層	Ⅰ	10YR3/2　黒褐色	シルト	マンガン粒、木炭粒を含む。
	Ⅱ	10YR2/3　黒褐色	シルト	木炭粒、微砂粒を含む。
	Ⅲ	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄斑、焼土粒、木炭粒を含む。
SI 1	1	10YR3/3　暗褐色	シルト	10YR4/4粘土質シルトブロック、焼土粒、木炭粒を含む。
	2	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	焼土粒、木炭粒を含む。（煙道堆積土）
	3	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	焼土ブロックを多量に含む。木炭粒を含む。（煙道堆積土）
	4	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	焼土ブロック、木炭粒、灰を多量に含む。（カマド堆積土）
	5	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	焼土粒、木炭粒、灰、10YR4/3シルト粒を含む。（カマド堆積土）
	6	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト	10YR6/3粘土ブロックを含む。（カマド構築土）
	7	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	（カマド構築土）

遺　構	層位	土　　色	土　性	備　　考
SI 1	8	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	マンガン粒を含む（カマド構築土）
SI 1 1号土坑	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	木炭粒、10YR4/6シルトブロックを含む。
	2	10YR3/4　暗褐色	粘土	木炭粒、10YR4/6シルトブロック、10YR5/4粘土ブロックを含む。
	3	10YR4/6　褐色	粘土	
SI 1 2号土坑	1	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	焼土粒、木炭粒、10YR4/3シルトブロックを含む。
SD 1	1	10YR2/2　黒褐色	シルト	木炭粒、礫、10YR4/3シルトブロックを含む。
	2	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	木炭塊、礫を含む。
	3	10YR4/4　褐色	砂質シルト	木炭粒、10YR3/2粘土質シルトブロックを含む。
	4	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄斑、木炭粒を含む。
Pit	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	焼土粒、木炭粒を含む。

第136図　SI 1 竪穴住居跡・SD 1 溝跡実測図



図中番号	登録番号	種別・器種	出土地区	基本層位	出土遺構・層	取上番号	器高・長	口径・幅	底径・厚	重　量	特　　徴	写真図版
1	C－1	非ロクロ土師器・坏		検出面		2	5.2	8.2	3.9		外面口縁ヨコナデ　体部・底部ヘラケズリ　内面ヘラミガキ、黒色処理	66－2－5
2	D－3	ロクロ土師器・甕			SI1　カマド		(7.6)	(23.0)			外面ロクロナデ　内面ロクロナデ	66－2－1
3	D－4	ロクロ土師器・甕			SI1　床面直上		(8.2)	(24.1)			外面ロクロナデ　内面ロクロナデ、回転ヘラナデ	66－2－2
4	D－2	ロクロ土師器・甕			SI1　カマド		(16.0)		8.4		外面ロクロナデ後ヘラケズリ　内面ロクロナデ	66－2－3
5	D－1	ロクロ土師器・甕			SI1　床面直上		(5.7)		(9.6)		外面ロクロナデ後ヘラケズリ　内面ロクロナデ	66－2－4

第137図　出土遺物

の長さ１ｍ、幅60cm、高さ15cm、左袖の長さ80cm、幅50cm、高さ17cmである。煙道は一部調査区外へ延びており、検出長70cm、幅25cm、深さ14cmである。遺物は、住居の検出面から非ロクロ土師器坏（C－１）、堆積土からロクロ土師器、赤焼土器、須恵器、弥生土器、石製品が、カマドからロクロ土師器甕（D－１、D－２、D－３、D－４）須恵器壷が、床面からロクロ土師器坏、甕、須恵器甕、鉄製品が出土している。住居跡の年代は、カマド、床面から出土した土師器が表杉ノ入式の範疇に含まれることから平安時代に属するものと考えられる。

２）溝跡

SD１　溝跡

調査区の西半部で検出した。SI１より新しい。検出長4.8m、上幅2.1m、深さ1.4mで、壁は底面から急に立ち上がる。東西方向に延びるが、調査区の南西コーナーでＬ字に屈曲するものと思われる。堆積土は４層に分かれ、１～３層は人為堆積で４層は水性堆積である。出土遺物は、近世末頃から明治初年にかけての陶磁器類、燻瓦、土師器、須恵器、石製品である。

6　まとめ

① 養種園遺跡は、若林区南小泉一丁目に所在する縄文時代から江戸時代の複合遺跡である。

② 今回の調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡１軒、溝跡１条、ピット６基である。出土遺物には、弥生土器、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、赤焼土器、須恵器、陶磁器、石製品、鉄製品がある。

③ 竪穴住居跡の年代については、床面やカマドの遺物から平安時代に所属するものと考えられる。

④ 溝跡については、遺構の一部を検出したに留まっているため開削年代や機能については不明である。出土遺物の年代から19世紀の末頃には埋め戻されたものと思われる。

引用・参考文献

伊東真文（2002）：「若林城跡－第３次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第256集

佐藤　洋（1997）：「養種園遺跡発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－」仙台市文化財調査報告書第214集

仙台市教育委員会（2001）：「若林城跡と養種園遺跡」仙台市文化財パンフレット第48集

1　SI 1 竪穴住居跡検出状況

2　SI 1 竪穴住居跡全景

3　SI 1 竪穴住居跡カマド

図版65　調査状況・竪穴住居跡

1　SD１溝跡断面

1　ロクロ土師器　甕　D－３（SI１　第137図２）
2　ロクロ土師器　甕　D－４（SI１　第137図３）
3　ロクロ土師器　甕　D－２（SI１　第137図４）
4　ロクロ土師器　甕　D－１（SI１　第137図５）
5　非ロクロ土師器　坏　C－１（検出面　第137図１）

2　出土遺物

図版66　溝跡・出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こくぶんじひがしいせきほか
書名	国分寺東遺跡他
副書名	発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第266集
編著者名	渡部弘美・工藤哲司・佐藤　淳・豊村幸宏・大倉秀之・加藤徳明
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町３丁目７－１　　電話022－214－8894
発行年月日	平成15年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
国分寺東遺跡	せんだいしわかばやしくきのした 仙台市若林区木ノ下 ３丁目２－15他	04100	01557	38° 14′ 53″	140° 54′ 29″	2001・12・03 2002・01・18	359㎡	学校校舎 建築
八木山緑町遺跡	せんだいしたいはくくやまぎやま みどりちょう 仙台市太白区八木山 緑町21－３	04100	01317	30° 14′ 13″	140° 52′ 10″	2002・04・10 2002・05・13	350㎡	老人福祉 施設建築
庚申前窯跡	せんだいしみやぎのく にのもり 仙台市宮城野区 二森131他	04100	01131	38° 16′ 32″	140° 54′ 06″	2002・05・08 2002・05・09	87㎡	宅地造成
下ノ内遺跡	せんだいしたいはくくとみざわ 仙台市太白区富沢 ４丁目12－２他	04100	01425	38° 12′ 45″	140° 52′ 36″	2002・08・19 2002・10・04	300㎡	店舗付共 同住宅
山田条里遺跡	せんだいしたいはくくやまだ あざたなかまえ 仙台市太白区山田 字田中前181～187他	04100	01367	38° 12′ 49″	140° 50′ 25″	2002・05・13 2002・06・04	155㎡	店舗建築
富沢遺跡 （第１２２次）	せんだいしたいはくくながまちみなみ 仙台市太白区長町南 ３丁目10－１	04100	01369	38° 13′ 10″	140° 52′ 51″	2002・04・15 2002・04・25	45㎡	共同住宅 建築
富沢遺跡 （第１２３次）	せんだいしたいはくくながまちみなみ 仙台市太白区長町南 １丁目108－４・108－６	04100	01369	38° 13′ 16″	140° 53′ 03″	2002・09・24 2002・09・25	28㎡	個人住宅 建築
富沢遺跡 （第１２４次）	せんだいしたいはくくかの 仙台市太白区鹿野 223－13	04100	01369	38° 13′ 18″	140° 52′ 30″	2002・10・22 2002・10・24	42㎡	共同住宅 建築
富沢遺跡 （第１２５次）	せんだいしたいはくくいずみざき 仙台市太白区泉崎 １丁目２－２・２－９他	04100	01369	38° 13′ 12″	140° 52′ 28″	2002・12・10 2002・12・17	22㎡	地下式駐 車場建築
南小泉遺跡 （第３７次）	せんだいしわかばやしくいっぽんすぎ まち 仙台市若林区一本杉 町26－１・26－２	04100	01021	38° 14′ 23″	140° 54′ 40″	2002・04・15 2002・05・02	180㎡	店舗付共 同住宅
南小泉遺跡 （第３８次）	せんだいしわかばやしくみなみこいずみ 仙台市若林区南小泉 ４丁目71－１・73－４	04100	01021	38° 14′ 04″	140° 54′ 38″	2002・09・30 2002・10・11	127㎡	共同住宅 建築
南小泉遺跡 （第３９次）	せんだいしわかばやしくとおみづか 仙台市若林区遠見塚 １丁目26－18	04100	01021	38° 13′ 59″	140° 54′ 47″	2002・10・15 2002・10・17	28㎡	個人住宅 建築
大野田古墳群	せんだいしたいはくくおおのだ あざおうのだん 仙台市太白区大野田 字王ノ壇47－１他	04100	01361	38° 12′ 34″	140° 52′ 48″	2002・09・02 2002・09・04	54㎡	個人住宅 建築
高田Ａ遺跡	せんだいしわかばやしくかみいいだ 仙台市若林区上飯田 ３丁目448－２	04100	01256	38° 12′ 34″	140° 55′ 32″	2002・04・15 2002・04・16	32㎡	個人住宅 建築
養種園遺跡	せんだいしわかばやしくみなみこいずみ 仙台市若林区南小泉 １丁目23－９・14－46	04100	01349	38° 14′ 19″	140° 54′ 24″	2002・04・09 2002・04・11	24㎡	個人住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
国分寺東遺跡	集落跡	平安～中・近世	竪穴住居跡・土坑	土師器・須恵器・瓦	墨書土器
八木山緑町遺跡	集落跡	縄文・弥生	竪穴住居跡・土坑	縄文土器・弥生土器・石器	
庚申前窯跡	窯跡	奈良時代	溝跡・土坑	土師器・須恵器	
下ノ内遺跡	集落跡	縄文～中世	掘立柱建物跡・畑跡	縄文土器・土師器・須恵器	
山田条里遺跡 第７次	水田跡	平安～中・近世	畦畔	土師器・須恵器	
富沢遺跡 第122次	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	なし	土師器	
富沢遺跡 第123次	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	なし	なし	
富沢遺跡 第124次	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	なし	なし	
富沢遺跡 第125次	水田跡・集落跡	旧石器～中・近世	畦畔	石器	
南小泉遺跡 第37次	集落跡	弥生～中・近世	竪穴住居跡・溝跡	土師器	
南小泉遺跡 第38次	集落跡	弥生～中・近世	竪穴住居跡・溝跡	土師器・須恵器・砥石	
南小泉遺跡 第39次	集落跡	弥生～中・近世	溝跡・井戸跡・土坑	土師器	
大野田古墳群	古墳・集落	古墳～中世	土坑	土師器・須恵器・中世陶器	
高田Ａ遺跡	集落跡	古墳～平安	溝跡・土坑	土師器・須恵器	
養種園遺跡	集落跡	平安～近世	竪穴住居跡・溝跡	土師器	

仙台市文化財調査報告書第266集

国分寺東遺跡他

発掘調査報告書

2003年３月

発　行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目７－１

文化財課　022(214)8894

印　刷　株式会社　東北プリント

仙台市青葉区立町24－24

TEL 022(263)1166